

【完結】「不死身(物理)  
なら尾形を愛せるので  
は」という仮説とその  
検証について

捕まえようとした蝶

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

現代日本からTS転生した無限リスポーン能力持ちの異常者が、尾形のSAN値をこりこり削りながら尾形が欠けた人間にふさわしい道を歩まないように頑張ったり頑張らなかつたりする話

2023/01/03 完結

# 目次

過去

17	3話	開演	35
	4話	共犯者／同伴者	48
	5話	郷愁が足りない	70
	6話	深淵より愛を込めて	87
109	7話	うちのヒヤク知りませんか？	128
	8話	さよならだけが人生か	128
211	13話	きらめけ！ 辺見ちゃん	197
	12話	元気よく死ぬ	178
	11話	良い音は聞けない	156
	10話	怖い女	142
	9話	戯画的ニアミス	296
311	18話	偽となるか真となるか	278
	17話	空前絶後の？ 超絶孤高の？	257
	16話	見る女たち	235
	15話	我ら不死トモ	
	14話	人魚の夢	
	クシー上等兵		

19話	作麼生・説破	332
20話	人の生という芸術よ	352
21話	胎内怠慢対談	373
22話	きょうだい	396
23話	情動反応ですの	414
24話	ズーフィリアってかネイ	433
チャーフイリア		433
25話	ツルカメキナポ	456
26話	小屋とラッコ鍋と私	480
27話	ギシンアンキってカタカナだ	498
となんかエロい		498
28話	鳥の眼、猫の眼	516
29話	嫌な予感?	540

30話	愛を手放さないでね	563
31話	メコオヤシ	585
32話	スチエンカ!!	604
33話	バーニヤツ!!	626
34話	感情の清算をお願い	645
35話	Q・E・D.	669
36話	渡る世間は嘘ばかり	688
37話	恋は悪徳	708
38話	誰かを愛するということは、	
誰かを愛さないということである		
725		
39話	その残光を見よ	748
40話	feel guilty.	

4 1 話	ブレス・ユー!	790
4 2 話	ぼくら宙ぶらり	814
4 3 話	野良猫に首輪	846
4 4 話	鴨鍋と干し柿	863
4 5 話	狙撃手の凱旋	879
4 6 話	揚羽蝶の羽ばたき	894
4 7 話	世界線の収束 (feat.)	
宇佐美時重)		
4 8 話	佐藤理玖	944
4 9 話	きみは宇宙	967
5 0 話	愛は暗闇の中にある	989
5 1 話	函館五稜郭籠城戦線	1012

5 2 話	地獄行き列車に乗れ	1041
5 3 話	血迷い事	1056
5 4 話	検証結果:	1076
5 5 話	猫に九生。山猫に、	1119
5 6 話	よすが (あるいはエビフラ	1143
イ、		



# 過去

## 1話 鴨鍋とあんこう鍋

——読者から人気を得ながらも悲劇的な結末を迎えたアニメや漫画のキャラクター、と聞いて、誰を思い浮かべるだろうか。

それらが『物語』という枠組みから逃れられない以上、彼らの『死』は物語から要求された役割となり、組み込まれた歯車のひとつとなる。経緯は色々あるだろう。初めから決まっていたことかもしれないし、あるいは大人の事情というやつなのかもしれない。

けれど、いかにせよ彼らを愛した読者はこう思うはずだ——死んでほしくはなかった、と。

そして、次にこう思う。

どうしたらこの死は避けられたのだろう。彼らはどうすべきだったのだろう。

例えば、彼らの死が物語上必要不可欠なものだったとしても、そう思わずにはいられない。解決策を模索せずにはおれない。

その気持ち自体はわかる。

わかる、のだが――

「……………」

季節は晩秋。ほとんど雪の降らない茨城の冬季は、ひたすらに木枯らしが冷たい。読むともなしに広げていた分厚い書物から顔を上げて、火鉢に寄り添う人影を見やる。

――形の良い坊主頭、ピラミッドの壁画を思わせる特徴な目元、どろりと濁つて底の見えない虹彩。

猫のように丸まって暖を取る着物姿の子ども。名前を尾形百之助、という。

「……………うむ……………」

尾形百之助。

ゴールデンカムイと名づけられた青年漫画において、あらゆる陣営をさんざ引つ掻き回し、挙げ句毒で錯乱して自殺、という中々な最期を迎えたキャラクターである。

公式の投票において主人公と僅差で2位に食い込んでいるあたり、相当な人気の持ち主なのだろう。俺にはそこら辺の魅力はよくわからないが。

いや、話を戻そう。

今、俺の目の前にいる尾形は母であるトメも存命、彼の言葉を借りれば未だ清い体の



まま。しかしまあ、それも時間の問題なのだろうけれど。で、どうして『こんなこと』になつていいのかと言え。はつきり言つて、俺にもよくわからない。

気づいたら明治時代で、気づいたら孤児として尾形家に拾われていて、気づいたらまだ子どもの尾形百之助が同じ屋根の下にいて、気づいたら女だった。

そう。女だった。今はまだ女兒か。確か尾形より2歳くらい年上だったはず。

おかしいな、俺は現代日本で成人男性として社畜をやつていたはずなのだけ。

なぜ明治時代、茨城の農村で尾形百之助と暮らしているのだろう。しかも俺、原作に存在しないポジションですよ。

中身が成人男性だったせい、俺には赤ん坊の尾形を連れたトメがこの家にやつてきた記憶（当時2、3歳だったはずだけど）が朧げながらある。つまり俺と尾形の血縁関係はほぼ確実でない。そして俺は、既に育ての親たる尾形の祖父母から「お前は門の前に捨てられていた赤ん坊だ」と告げられている。まあ、おばあちやまが産んだ子と考えるよりはだいぶ現実的である。

幸い、彼らにはなぜか実孫である彼よりも可愛がられているような気がするけれど、このままでは尾形のキル数＋1として回想でちらつと出てくるだけのほぼモブになってしまう。

彼の選択ミスには巻き込まれたくない。

なぜなら、俺は既に全てを知ってしまったているから。その上でただ無意味に殺されて終わるなんて、何を踏まえても御免被る。推しに殺されるなら……という奇特なオタクはいるかもしれないが、俺は普通に嫌だ。

それと同時に思うのは。

——尾形百之助は、何をどうしたらあの結末を回避できたのだろうか？

母を殺し、弟を殺し、父を殺し。

もはや尊属殺人フルコンプ説のある彼の道程は、始まる前から全てが終わっていた。

そこにネームドキャラクターが関わってくる余地はほぼ無かった、と俺は見ている。

あの鶴見中尉ですら彼を思う通りにコントロールすることは不可能だった。

でも、尾形百之助は人を殺すことに罪悪感を覚えられる人間だったのだ。

欠けた人間ではないのに、それに相応しい道をわざわざ歩んできただけだ、という自

覚があった。宇佐美のようなナチュラルボーンキラーとはまた別の人種だった訳だ。

それを、花沢勇作の“愛”と、彼と重なるアシタの“光”によつて気づいた。気づ

かされてしまった。今際の際に。

駄目だ、それでは全てが間違っていたことになる。

悲痛な叫びだ。でも、確かに何もかもが間違っていて、そして手遅れだった。

最初の設問に立ち返ろう。

——尾形百之助は、どの時点で、何をどうすればあの悲劇的な死を回避できるのか？

「……百之助」

机に頬杖をついたまま、全てが始まる前の尾形百之助に呼びかけてみる。

「……………」

はい、当然のようにガン無視。

頭のネジが既に取りかけているトメはともかく、こいつもなぜか当然のように俺をいない子扱いしてくる。何だこのクソガキ。

まあ、そもそもはトメが俺を我が子どころか同居人としてさえ存在を認識していないらしいせいなのか？

彼女から無視される俺は、彼女が世界の全てである尾形の中でもないものということになってる？

さて、導き出される解の話をしよう。

トメが正気で、尾形を我が子として愛すことができればそれが最適解だった。けれど、それは不可能だ。

少なくとも今の俺に何とかできるようなことじゃない。

花沢勇作の愛に応えられたとしたら、少なくともベターな選択ではあった。

でも、それも不可能。俺が手を出す余地がないから。女である俺は尾形にくつついて

第七師団に入ることとはできない。

ならば、第三の選択だ。

「俺」が、尾形を愛せばいい。

我ながら傲慢な言い草だとは思うが、今の俺に出来ることはそれくらいしかない。

尾形を愛し、トメの死を回避し、ついでに高確率で訪れる自身の死も回避する。無茶

苦茶なアイデアだが、挑戦する意義はある。

というか、そうしなければおそらく明日がない。このままだと多分俺はこいつに殺さ

れて、原作開始前に死ぬので。

それに、清い尾形が愛を知ることが、件の結末の回避にも何らかの益をもたらすはず

だ。そうなった彼の行く末が気にならない、と言えば嘘になる。俺は自身が祝福されて

いると知った尾形の選択が見てみたい。

はい。仮説おしまい。

で、だ。

「……いや、それはそうなんだが？」

残念ながら現状、全てが机上の空論である。

いないもの扱いされているようでは好感度とかそういうステージでさええない。何と

かして、ヤツの意識をこちらに向けさせることから始めないと。

それにはきつかけが必要だ。

「……鳴……」

口の中だけで呟いてみる。

彼が獲つてきた鳥——おそらく尾形が好きな人間の大半が一度は考えることだろう。あの鴨から全てが狂い始めたのだ。ついで鍋になることはなかった母への贈り物。

彼に取り入るとしたら、おそらくそこが唯一の鍵になる。

——まあ……今の尾形は、銃の扱いすら覚えていない段階だけれど。

今は忍耐の時だ。

余計なことはせず、機が熟すのを待とう。現状、俺にできるのはそのくらいだ。

「タマ」

背後から祖母に呼びかけられて、我に返る。

尾形タマ。言うまでもなく今世での我が名である。いやタマて。猫かよ。

振り返つた先、柔らかく微笑む祖母と目が合った。尾形には向けられない笑顔だ。

「おいはんにすつぺ」

夕飯にしよう、とな。こちとら生まれも育ちも埼玉県民ですが、こてこての茨城弁にもさすがに慣れてきましたね。

タアン、と。

どこかで鋭い破裂音——否、銃声が聞こえた気がした。

「……………」

火鉢の傍らに横たえていた体を起こす。

ここ最近、やたらこの音を耳にする。ようやく尾形が銃の練習を始めたのだ。

身内の小銃を勝手に持ち出して鳥撃ちを始めるキッズ、色々事情を踏まえてもかなりの特異点だと思うが、それを気にする人間は尾形の周囲にはいなかったようだ。まあ、祖父はその才能を見込んでか、彼に銃を教えたようだけど。

いや、まず祖父から尾形に働きかけたのか？ その辺りの前後は一緒に暮らしているもよくわからない。何せ俺はヤツに全く懐かれていないもので。

「……………機が熟した」

それと同時に、Xdayが近づいてきている事実には漠然とした不安感を覚える。

このままだ放っておけば、尾形はあんこう鍋に殺鼠剤を仕込んで巣立ちの儀式を成し遂げてしまう。この初めての殺人が防げるか防げないかで、おそらく俺と尾形の今後は大きく変わってくるのだ。

「……………」

この妨害工作もとい『祝福作戦』を尾形に気取られてはマズい。そんな感覚が何となくあつた。

常に冷静沈着に見えて、カツとなると何をしでかすかわからん激情ハードコア男子だからな。

天井のシミを眺めながらぼんやり考えていたら、今度は引き戸が開く音が聞こえてきた。鳥を仕留めた尾形が帰ってきたらしい。

足音が素通りする。この部屋に入ってくる気はないようだ。ならば、向かうのは。

「……………」

立ち上がって、微かに開けた襖から外の様子を窺う。——ナイスタイミング。廊下の奥に尾形の背中が見えた。片手に銃、片手に鳥の死骸を持った物騒な立ち姿。

忍び足でそれを追いかける。尾形は脇目も振らず板張りの床を進んでいく。目的地には、既に見当がついていた。

「……………」

案の定、台所で足を止める小さな狩人。黄昏時の近いこの時間、我が家の炊事場は既にトメが占拠している。

素足の張りつく足音にも、トメは一切の反応を見せなかった。普段の乱れた小紋姿で

はなく、きつちり髪を上げ、襷を掛けた姿であるのが逆に恐怖を煽ってくる。もはや彼女にはこのあんこう鍋しか残っていないのだ。

「おっ母」

蚊の鳴くような声で、めげない尾形が母を呼ぶ。

声変わりの済んでいない、か細く高い少年のそれだ。これがあと10年もすると喉から津田健次郎を出すようになるのだから、人体の神秘を感じる。

「見て」

そこまではつきり呼びかけて、ようやく彼女が手を止めたのが見えた。

「あら、百之助……」

色が白く、彫りの深い端正な顔が尾形に微笑みかける。陸軍のエリート候補が手を出さだけあって、トメは美しい女だった。

作者には個性的な美形認識されているらしい尾形は、顔面の出来については両親からの取捨選択が上手くいつている感じがする。何たって幸次郎の力才はうん……まあ……いや逆にトメはアレのどこが良かったのだ？

母がこちらを見たことで、尾形は一瞬表情を緩めたが。

「おっ母、」もうすぐ出来るからね。あつちで良い子に待っていらっしやい」

その笑みの前駆体は、トメの優しい呼びかけによって一瞬で消え去った。



普通、幼い我が子が小銃と死んだ鳥を持って突っ立っていたら、色々聞きたいこともあるだろう。——普通は、だ。

「おつ母。はじめて当たった」

「ええ、ええ……あの方も、お父つつあまもすぐにいらつしやるから……」

「おつ母、」

明らかに会話が成り立っていない。

前に向き直り、危なっかしい手つきであんこうを捌き続けるトメ、その背後でひたすら彼女を呼びながら鴨を掲げ続ける尾形。

「……………」

出来の悪いホラー映画でも見せられているような気分だった。

「おつ母、……………」

埒の明かない不気味な問答に、先に音を上げたのは尾形のほうだった。

鴨の首を引つ掴む右腕が、おもむろに垂れ下がり。無言で彼女に背を向ける。土間を出て行く。

何の感情も窺えない無表情。でも、傷ついていた。

——なんて声をかけるのが正解なんだろうな。

再び外に出ていくその背中をこっそり追いつつ。すぐには正解が思い浮かばなかつ

た。

尾形の悲しさは、俺には共感できない類のものだ。愛のない両親から生まれた子ども。俺の前世は客観的に見て、そのカテゴリーには当てはまらない。

俺が尾形に感じる悲しみは、ごく客観的な感情だ。寄り添えている訳ではない。大丈夫だろうか。今さら漠然とした不安を覚えつつ、彼を追いかけて家の外まで出てきてしまったことに気づいて、我に返る。

尾形百之助は、今まさに肥溜めへ用済みの鴨を放り込もうとしているところだった。やっべ。

「わ、わあゝ、死んだ鴨初めて見たなあゝ！」

慌てて物陰から飛び出し、何気なくを装って声を上げる。いや、これ装えてるか？

「……………」

思ったよりデカイ声が出てしまったためか、びくつと尾形の肩が震えた。

「……………」

「……………」

当然というべきか——その場で静止し、無言で俺を観察してくる。彼が完全に“見”に回ってしまったため、こちらもGO！皆川のポーズで固まらざるを得ない。

マズい、初手からミスったかな。

「……それ、捨てるのか？」

その沈黙を破ったのは、当然というべきか俺だった。尾形は未だに人間と出会った野良猫のごとく微動だにしていない。反応はないが、とりあえず勝手に話を進めてみる。

「捨てるならくれよ」

彼に向かって手を差し出す。そこで、尾形が初めて顔を動かした。俺の手と、握ったままの鴨を見比べる。

「……何に使うの？」

「食べるんだが？」

初めて会話が成立した——いやどういいう意図の質問だよ。

動物の死骸を生贄として怪しい儀式でも始めるやつとも思われているのだろうか。

「せっかく立派な鴨なのに、もったいない」

適当な美辞麗句を述べつつ、獲物の状態を観察してみる。

地味な体色。メスのマガモだろうか。それとも、飛来してきたばかりのオスでまだ繁殖羽になっていないだけか。

「初めてのお前の獲物だろ」

しかし、やはり尾形は生まれつき銃の才能に恵まれていたのだろうか。何としてでも母親の関心を引ききたいというのつぴきならぬ事情があったとはいえ、上達が早すぎ

る。

家で銃声をただ聞いていただけの素人でさえそう思うのだから、プロであるヴァシリがその腕に執着するのもさもありなん。

「お前には稀な狙撃の才能があるよ、百之助。なかなか出来ることじゃない」

尾形がなかなか獲物を渡してくれないので、少し歩み寄って距離を詰めて、空っぽのままの手のひらでその頭を包んでみる。初めての接触にしては馴れ馴れしいかもと思ったが、尾形は嫌がらなかった。

気が済むまで撫でて離れたところで、目を伏せた尾形少年がぼつりと呟いた。

「……………おつ母は要らないって」

「そうか。でも俺は要る」

トメがその鴨を受け取らなかつたことと、俺がその鴨を欲しがることには別に何の相互関係も無いと思うのだが。どんなものも欲しがる人間はいるし、言うまでもないことだが要らないと拒否する人間もいるだろう。

よくわからんな、と空を仰ぎかかったところで。視界にフェードインしてくる羽毛の塊。

「……………」

尾形が、無言で鴨をこちらに差し出していた。

「……ありがとう——う重」

まだ10歳かそこらなキッツの片手にはちよつと堪える質量だった。鳥つて動物の中では見かけのわりに軽いはずなんだけどね。

で。無事、渡してもらえたのは良いのだが。

「さて……どうするか」

前世も今世もぬくぬく温室暮らしのバルチヨーナクに、鴨の捌き方などわかるはずもない。ネットのない時代、知識を得る方法は『周りの人間に聞く』しかない訳だが、何だかそういう気にもなれなかった。

「とりあえず血抜き……いや羽根むしればいいのか……？」

他ならぬゴールデンカムイで見た。

手頃な石に座つて、むしむしと羽毛を……羽毛……いやこれ難しいぞおい？

尾形はしばらく脇で突つ立って俺を眺めていたが、やがて隣に腰掛けてきた。光のない瞳がじつと不慣れな手つきを観察してくる。

その視線が、鴨から俺の横顔に移つたのを何となく気配で感じた。瞳だけを動かして彼の様子を窺う。案の定、目が合った。

「……なに？」

何となく、聞いてみる。尾形はそれには答えず、俺を見つめたままゆつくりと瞬き。

それから、子どもらしくまろい頬にフ……と微かな笑みを浮かべて。

「下手」

「あ？ このクソガキ……」

台所から勝手に鍋と包丁を持ち出し。見よう見まねで初めて作った鴨鍋はひたすら血と臓物の味がしたが、尾形は全て平らげていた。

## 2話 初めての、喪失の、穢れの、

「俺のお父つつあまはどんな人だったんだろう」

——あれから、少しだけ時間が経って。

尾形百之助は、以前よりは俺と会話するようになっていた。というか、それまでは話しかけようがうつかり足を踏もうがガン無視だった訳で、振り切れていたマイナスがようやくゼロになっただけでも言える。

で、案の定というべきかあれ以降毎日畑で鴨を撃ってくるので（粘着気質は母親譲りか?）、エンドレス鴨鍋記念日な訳だが。その味がいいねと言われた訳でもないのに。

とにかく尾形が俺に話しかけてくるのは、概ね処理の最中だった。今もそうだ。手伝えよ。

若干の憤りを覚えつつ、ナタでズドンと鴨の首を落とす。この瞬間だけはちよつと楽しい。

……で、何の話だった?

「……、花沢幸次郎のことか?」

言ってから、ものすごく他人事みたいな呼び方だったかとも思った。まあ、血筋的に

は他人事なんだけれど。

「立派な将校さんだつて」

「立派、ねえ……」

雰囲気でやっている解体にもさすがに手慣れてきた。落としたばかりの生首をいじくりつつ、花沢幸次郎について思いを馳せる。

別に、明治の価値観でもやり捨てポイは褒められたものではないのではないか。妾としてきちんと囲うなりするならまだしも。少なくとも、尾形は子として彼の所業を恨んでいたようだったし。

「……………」

現状。尾形トメは、まだ生きている。

今も台所であんこう鍋を作っているのであろう彼女を思う。食事時は俺がそばを離れないせいかもしれないが。原作では、祖父母の留守中を狙ったというようなことを言っていた気もするし。

母が自分を見てくれない。殺鼠剤は、その不満の行きついた先でもあつたのだろう。でも、今は俺がいるからある程度のガス抜きができていますか？

ひとまず安心だが、今後はどうなるか。

「……………タマは、」



自分の名前が出てきて、意識が引き戻される。……これは、初めてかもしれない。

顔を上げる。尾形はいつのまにか鴨ではなく、俺をじつと見つめていた。小さな唇が再び開く。

「俺が将校さんになったらうれしい？」

が、あまりに予想外の質問に、思考が一瞬明後日のほうへ飛びかけて――

「え、いや別に」

「……………」

「……………」

——つい『素』の感情が出てしまい、尾形を無言にさせてしまった。

いやだって、なってほしいとか言う理由が今のところ見つからないんですけど。当時の価値観なら普通なのか？

「…………おつ母は、お父つつあまみたいになりなさいって」

ならば、お前が俺に願うことは何？

尾形の語尾はそう俺に問いかけていた。

アシ<sup>×</sup>パ<sup>×</sup>さんには山でチタタ<sup>×</sup>?してヒンナヒンナしてほしいんだ。網走監獄での杉元の願いが頭をよぎる。

母を殺さないでほしい。勇作を殺さないでほしい。欠けた道を歩まないでほしい。

思い浮かぶことはいくつかあったが、どれも口に出せるようなものではなかったし。尾形にわざわざ伝えたいとも思えなかった。

——俺が、尾形百之助の人生に求めるものとは？

「……後悔するな」

悔やむな。振り返るな。そうせざるを得ない選択肢ならば最初から選ぶな。

お前には罪悪感があるのだから。

汚れていない左手を伸ばして。まだ傷も髭もないなめらかな頬を、指の腹で撫でる。

「お前はとて真面目で優しい子だよ。それを忘れないで」

それからしばらく、ぬるま湯のような日々が続いた。

当たり前だが、一日一日を終える度に、だんだんと春が近づいてきて。

俺は勝手に、この冬を越せばひと山越えたというような気になっていたけれど——その直前で、思いもよらぬことが起こった。

トメが、唐突に姿を消したのだ。

——大した騒ぎにはならなかった。

いや、それでは語弊がある。更なる醜聞を恐れた祖父母は、彼女の失踪を徹底的に秘匿した。

尾形百之助はその日以来、銃を持って畑に行くことは無くなった。

「尾形のヤツ……今日はどこ行つたんだか……う、」

早々に傾きかけた太陽を見上げて恨めしい気持ちになりつつ。びゅう、と鼻先を掠める木枯らしに縮こまる。

子どもは風の子元気の子——とはよく言つたものだが。風がもつとも冷たい早春のこの時期、外をうろちよろするの子どもでもきついものがある。

でも、俺には外に出たい理由があるのだ。……それは「俺の理由」のほうとしてもそうなのだろうが、未来ある児童と行方不明の狂人を同列に並べられても困る。

こんなことを実際尾形に言つたら、ぶつ殺されそうだけれど。

「尾形百之助え……」

そう。

お察しの通り、と言つてやるべきか、尾形は毎日トメを探してあちこち歩き回るようになってしまったのだ。雨の日も風の日も雪の日も、母想いで健気と言えは聞こえはい

いが、俺（と祖父母）は気が気ではなかった。

原作では躊躇なく殺した母親をなぜ命懸けで探しているんだよ、とか色々言いたいことはあったが、問題は、とにかくこれが原作通りの展開ではないこと。その途中で尾形に何が起こり得るのかを俺は知らないのだ。

「はあ……」

——トメの失踪は、ある意味予想通りの展開だったとも言える。

男に捨てられ、そいつが好きだと言っただけの地元料理を執拗に作り続ける女の精神が、どこかで持ち直すとは残念ながら思えなかった。尾形がトメを殺さなくても、そもそも状況が好転する見込みはなかったのだ。

——尾形はただ、結論を急いだけ。

他人事な悲しさだけがそこにあった。

まあ、終わった後なら何とでも言える、ということなのかもしれないけれど。

そんなことを頭の隅で考えながら歩いていたら、視界の端に覚えのある坊主頭を見た気がした。あちらも俺に気づいたらしく、近づいてくるのがわかる。やっぱり、

「百之助！ うわ」

それは良いのだが、接近してようやくその惨状に気付く。今しがた土から掘り起こされました、みたいな有様についてドン引きの声が出てしまったが。当の尾形は平然とした

顔だ。

「またひとりで山のほうに？」

答えない。無言で俯いている。

いや山つつーか……掘りたてのタケノコみたいな汚れ方してるけどな。綺麗にしてやりたいがどこからどう手をつけたものか。

「危ないぞ……」

とりあえず葉っぱを落として、家から持つてきた手拭いで泥混じりの涙を拭つてやる。ぱつと見はやんちや小僧なのに、全く微笑ましい気分にならない。尾形はされるがままで。その顔からは何の感情も窺えない。

とりあえず、手を差し出してみる。

「……うちに帰ろう。もう日が暮れる」

尾形はそこでようやく俺と、差し出した手とを見比べて。おずおずといったふうで、かじかんだ小さな指を乗せてきた。

真つ赤に染まつて、氷のように冷たい手。温めてやりたくて、優しく握り込む。

ああ。

「百之助」

——今日は、彼に言わなければならぬことがある。

最初に教えてきたのは祖父母だった。だから、家に帰れば2人が言うだろうし、あるいは時が来ればどちらにせよわかることだ。でも、彼らは「これ」が俺から百之助に伝わることを期待しているのだろう。

俺が思い詰めて、何かを言おうとしているのだけは伝わったのか、百之助が足を止める。気遣いなのか、反射的なものか。今はとにかく、好都合ではあった。

真つ直ぐ前だけを見つめて、口を開く。斜陽の名残が眼を刺す。

「あの人の……葬式の日取りが決まった」

重ねた手に、微かに力がこもったような気がした。

……その場では、いつも通り落ち着いているように見えた尾形だったが。

家に帰った途端、祖父母に食ってかかったのには少し驚いた。別に激昂していた様子はなかったが、そもそも尾形が彼らに反発するようなどころは見ることがなかったから。俺に言わなかったのは、こいつにああだこうだ言っても無駄、というのが幼心にもわかっていただろうか。

どうして葬式をするんだ、やめてほしい、というようなことを淡々と言い募る尾形に、祖父母は困惑したようだった。それでも、トメが帰ってくる見込みは薄い、このままで

は皆つらいだけだ、と懇切丁寧にそう決めるに至った経緯を説明してみせたが。——尾形は、首を縦には振らなかつた。

何がそんなに嫌なんだ？

焦れた祖父の問いに、彼は一瞬口籠もつてから、ぽつりと。

「おつ母が帰つてきた時に困るから」

それを聞いた瞬間——俺は、実に尾形百之助らしい答えだ、と思つた。

自らを突き動かす衝動に、後から理屈という骨組みを与える。それに加えて、その主客転倒には都合良く目を瞑り、己は最初から理論立てて物事を進めているのだと思ひ込む。

けれど、本心ではその矛盾と脆弱性に気づいているから、後から苦しむのだ。

——母親が居なくなつてさみしい、の一言がなぜ言えない？

生死不明の状態だというのに、こちらの都合だけで葬式を執り行つてしまつたら、もしトメが帰つてきた際に彼女の居場所が無くなつてしまう。そういう理屈だ。

季節は冬。いくら雪の降らない茨城としても、か弱い女が着の身着のまま数ヶ月も生きながらえられる訳がない。

もし近所の誰かが保護していたとしても、それをこちらに伝えてこないのはおかしい。尾形家の狂つた出戻り山猫の噂は、この山間の村の中ではあまりに有名だつた。

道筋だけは通った、けれど有り得ないことをさも当然のように口にする。はつきり言つて狂気の沙汰だが、奇妙な納得もあつた。

母親が見てくれなくてさみしい。

母親がいなくなつてさみしい。

——死ぬ間際でさえ、その一言が口に出せなかつたお前だから。

ああ、嫌だなあ。

「とにかく、もう決まつたことだから」

最終的に。

祖父母は、これでは埒が明かないと判断づけてしまつたらしく。その一言を最後に問答を打ち切つてしまつた。

それはそうだ。そもそもが確定事項で、2人はそれを尾形にただ受け入れさせたかっただけなのだから。決定権のない尾形がうんと言わずとも葬式はできる。

「……………」

席を立つた祖父母を、尾形は追いかけてなかつた。俯いて、正座の膝に乗つた自分の拳だけを見つめていた。

準備があるためか、これから色々忙しくなるらしい。夕飯は2人で食べると言い残



して、彼らはそのまま家を出て行った。

「百之助、」……日にちが延びることはあるの」

日にち。何のことだろう、と考えたが、答えはすぐに尾形の口から紡がれた。

「おっ母の……葬式の」

葬式の日にち。何でまた。

……後に延びれば、そのぶん少しでも「猶予」が増えるから？

「……………」

その瞬間。何か、違和感を覚えた。言語化できない不快感が背筋を撫でていく。

気のせいかな？ わからない。

「……………」この辺りに葬式屋はあの小さな一軒しかないから……別の、ちゃんと死体がある葬式があれば延びるかもしれない」

別に死人がでなければいいけど。

祖父母がぼやいていたことを、特に思考回路を通さずそのまま繰り返す。彼らはさつさとトメの葬式を済ませたいのだ。

「まあ……冬場だからな……」

体感として、冬はよく人が死ぬ。熱中症より肺炎のほうが恐れられた時代だった。

出るかもねー、とも出ないかもねー、とも言い難く。黙っているうちに、視界の端で

尾形が立ち上がったのが見えた。

「鴨を獲つてくる」

部屋を出ていく後ろ姿を、黙って見送る。

いやまた鴨かよ……とは、こちらもまた言えないんだなあ。でも、よく考えればこれも久しぶりのことだった。

「……迎えに行こうかと思った」

——で。鴨を獲りにいくなと言った尾形は結局、家を出て、ずいぶん時間が経ってから帰ってきた。

外はもう真つ暗だ。心配で戸口のそばでうろうろしていたら、暗闇にいきなり白いものが浮かび上がってきて心臓が止まるかと思った。何のことはない、色白な尾形の顔だった、というだけなのだけれど。

既に暗くなりかけだったから、というのもあるだろうし、もうそろそろ鴨自体が北へ渡る時期なのだろう。あんここの獲れる時期と、鴨の獲れる時期は似ている。

「……鴨の季節は、もう終わりだから……」

尾形もその程度の知識はあったらしく、そう言いながら鴨を片手に部屋へ上がってく

る。

「また来年だな」

何となく言ったが、こんな日々がいつまで続くかはわからない。どちらにせよ尾形は、17歳頃には自ら陸軍に入隊するのだろうし。

「……………」

尾形の振る舞い自体は、至っていつも通り。つらくて夕飯なんか喉を通らない、と言いつつ出さないあたりも「らしい」な、と思った。

珍しくも鴨の処理をやり出した彼を横目に、鍋の支度を始める。こうやって堂々と台所を使うのも初めてのことだった。今まではトメや祖母に遠慮していたから。いや結局は身長が足りなくてやりづらいな、

「処理終わった？ ……俺より上手いな」

突き出される、羽根と臓物を抜かれて、翼と頭を落とされた鴨。それなりにやってきたからわかる、俺より早くて丁寧だ。今まで隣で見てただけのはずなのに。

ちよつぴりチエツ、みたいな気持ちになりつつ、ぶつ切りにした鴨肉を既に野菜の煮えた鍋にぶち込んでいく。尾形はそれをじつと傍で見ていた。

「……………いただきます」

広い部屋で2人、鍋を囲んで手を合わせる。箸で口に運んだ鴨肉の味は——普通。

あれから何十回と作る機会があったせいかな、さすがにそこそこ食べられる味になってきた。こんな小さい子だけで火なんか使わせて大丈夫かよと今さら思うが、安全の感覚が時代的に違うのと、そもそも銃の使用が黙認されているので何か言われたことはない。

「美味くも不味くもない。……そのうち上手に作れるようになるのかな」

言つて、すぐに無いだろうな、と思つた。

日々鴨鍋を作り続ける上で、P D C Aサイクルとか特に考えてないからな。既にルーティン化しているし、ダメかもしれない。

「……………」

尾形からのコメントは今日もなし（初日だけ「不味かつた」と言われた）。最後までみんなの前でチタタ~~タ~~?もヒンナも言えなかつた男なので、こちらも別に期待はしていない。

無言の食卓。……トメについて何か言つたほうが良いだろうか？

でも、尾形も俺が彼女に彼女の思い入れもないということくらいは悟つてはいるはずだ。だつて最後の最後まで存在ごと無視されていたし。

……ああ、そういうしているうちに食べ終わつてしまひそう。まあ、いいか。

尾形はまだ食べている。先んじて、ごちそうさまでした、と口に出そうとしてあれ。

「……………」

何かがおかしい。

思わず口元を指先で押さえる。

何だ、この違和感。体が熱い。腹の底から湧き上がってくるような不快感。

「う、」

なにか、きもちわる、

「——げ、……………ええッ」

次の瞬間。

畳へ、盛大に胃の中身をぶち撒けていた。それを理解したのは、焼けつくような喉の痛みと、足元に広がる吐瀉物の海を認識してからだった。

「ッ、……………ア……………」

吐いて、しまった。

こんなの何年ぶりだろう。この体になってからは初めてのことだった。

何故。どうして。

ああでも、それなのにまだ吐き気がする。手足が上手く動かせない。目眩が、する。

おかしい。何かが、おかしい、

「うんぶ、」

押さえた手の隙間から、またゆるく吐きこぼす。白菜、鴨肉、消化するとかそういう段階ですらない食物の残滓が床に散らばる。

気持ち悪い、気持ち悪い！

毒……食中毒か？ 何だこれは。

あたるようなものは入れていないはずだ。肉だつて細心の注意を払つて煮ている。

悪心、嘔吐、胃痛、麻痺。ニンニク臭。……典型的な黄リン中毒症状？

いや、そんな付け焼き刃の知識がなくなつたつて、わかる。だろう。祖父母の留守。鍋。

これは。

——殺鼠剤。

その結論に辿り着いた瞬間、全身が総毛だつた。まさか、まさかまさか——最後の力を振り絞つて顔を上げる。

当初と変わらぬ位置から無感動に俺を見下ろす尾形百之助と、目が合った。

ああ。凍りつく。

この、クソガキ。

やりやがつた。

トメが姿を消したからといって油断した。尾形百之助という子どもを甘く見ていた。もつと警戒すべきだった——いやでも、こんな結末、誰が予想できただろう？  
そう言ってくれ！

「あ、ぐ……」

汚れた畳に爪を立てる。血が滲む。

毒でぐちゃぐちゃな頭の中でも、否、それだからこそ、俺は冷静に事の顛末を理解していた。どうしてこんなことになったのか。尾形は何を考えてこの凶行に及んだのか。

母の葬式の日を延ばしたい。

新しい葬式の予定を立てたい。

それには、新しい死体が必要だ。

倫理の「リ」の字もない三段論法だが、追い詰められた尾形少年にはこの上ない名案だったのだろう。——先んじて俺を殺して、トメの葬式の日取りを変えてしまえばいい。

有り得ない理論の組み方だ。だが実際に今この時、俺の身に降りかかっている！

フアツキユー！

「……くそ、が……」

目の前が霞む。

痛みと吐き気が、どこか遠い。

明治時代に黄リン中毒を治せる医者は早々いない。そもそも、黄リン自体が猛毒だ。死ぬんだな、と思つた。

どれだけ時間が経つたのか。のたうち回る気力も失われてきた。畳に這いつくばつてひゆうひゆう虫の息を繰り返す俺に、尾形がようやく席を立てて近づいてくる。

「おが、た……」

気負いない足取りで歩み寄つてきた尾形は、すぐそばに膝を折り。投げ出した手を取つて、優しく指を絡め、握りしめてくる。

最期に見えたその顔は、やっぱり何を考へているのかわからない無表情だった。

ああ、もう。

お前はとんだ大馬鹿野郎だよ。



## 3話 開演

——ひゅっ、と。

どこかで風切り音を聞いた気がした。少し経ってから、どういふ訳だか自分の喉が鳴った音だ、と思った。……自分の喉？

ああ、ええと、そもそも俺は、

「タマー！」

瞬間。鼓膜を震わす覚えのある声に、びくつと四肢が跳ねたのがわかった。微睡んでいた意識が急激に覚醒する。

薄ぼやけていた視界が急に明るく、鮮明になる。瞼が開いたのだ、とワンテンポ遅れて気づいた。

「あ……」

う。喉が掠れて上手く声が出ない。

見慣れた木目の天井。そこにフェードインしてくる、心配そうな祖母の表情。

何か柔らかいものに全身包まれていて、とつさに身動きが取れなかった。布団に寝かされている？

「…………え、と…………？」

ううむ、記憶が混乱している。

俺は今まで何をしていたのだけ。それでどうして、育ての親はこんな泣きそうな顔をして俺を覗き込んでいるのだ。

ふと、視線を横にずらして。目に入ったものに、覚醒したばかりの意識が奪われる。

「…………鍋」

畳に転がる空いた鉄鍋、欠けた茶碗。

それを見た瞬間。全て思い出した。

——尾形。

尾形百之助が鴨鍋に殺鼠剤を入れて、俺を毒殺したのだ。死体を増やすために。母の葬式を延期させるために。

「……………」

クソガキ。苦々しい気持ちになりつつ、努めて私なんにもわかりません、みたいな雰囲気を出して頭上の祖母に向き直る。

「…………わたし…………どうしたの？」

そこから彼女が言うには、えーと、こてこての茨城弁なのでぎっくり解説すると。

帰ってきたら俺が倒れていて、部屋はゲロまみれで、尾形曰くなんかよくわかんない

けどたぶん鴨鍋にあたったんじゃないかと。あいつ、どのツラ下げてそんなこと言いやがったんだ？

同時に、思うことは。

——間違いなく、あの時死んだ。

何がどうなっている？

一命を取り留めた。……考えにくい。尾形はもともとあれでトメを殺す予定だった。同じ量を俺の鍋に仕込んだと考えていい。つまり、幼子は確実に死ぬ量だったはずだ。

まさかこれが夢とも思えないが。ゆっくり体を起こす。嫌な怠さはない。そこで、何となく自らの両手に目が行って。

呼吸が、止まった。

「——」  
傷ひとつない綺麗な指——綺麗な指？

有り得ない。確かにあの時、剥がれかけたはずの爪が5枚、きちんと指の先端に収まっている。

出血も、痛みもない。

——どうなってる？

時間が巻き戻った。いや、尾形が俺に毒を盛ったという事象は起こったままだ。ち

らつと目をやった畳には血痕が残っている。

ということとは。

ここから導き出されるものは。

……あまりに非科学的な事象だが、認めざるを得ない。

俺が、生き返ったのだ。

「……タマ？ だいたい？」

祖母の気遣わしげな呼びかけで、我に返る。爪の生え揃った指先で、荒れていない唇を撫でる。何か言ったほうがいいか。

「……鴨の煮込みが甘かったかも」

鴨だけに（激ウマガヤグ）。

目だけで室内の様子を探る。祖父と尾形の姿は見えない。そこで祖母がああ、と声を上げて、ばたばたと部屋を出て行った。

彼らに伝えに行つたのか、俺が意識を取り戻したことを。

「……………」

胸に手を当てる。薄い生地の下に、確かな鼓動を感じる。熱を感じる。まだ、生きて  
いる。

それを実感してもなお、俺の胸に湧き上がってきたのは生の喜びではなかった。

尾形への憎しみでもない。

これは、

「……作戦変更だ」

俺が目指す道筋における、重大な不安要素が、ひとつ消えたということだ。ヒグマでも、第七師団でも、不死身の杉元でもなく。

他ならぬ尾形百之助に殺されるかもしれない、という心配。

「ふ……」

弧を描く唇を、繰り返しなぞる。

ぞくぞくと背筋に走るこの震えは歓喜か、悪寒か、あるいはそれ以外か？

殺された。けれど蘇った。

俺にはそういう力がある。

そう仮定しよう。しておこう。

それならば話は早い。尾形の気が済むまで、俺を殺させておけばいいのだ。人間の命はひとつしかない。尾形百之助は去った過ちを取り返す術を持たない。——けれど、殺した相手が何度でも生き返るならば？

その場合、俺はただ、尾形をどこまでも追いかけて愛し続ければいいだけだ。

だいぶわかりやすくなった。

これでいい。

——命拾いした。良かった。

——もうこれ以上、尾形百之助には関わりたくない。逃げよう。

そう、思うこともひとつの手だったのかもしれない。こんな危険で、くだらない検証からは手を引くという道。

けれど、できなかつた。

見てみたい。彼の選択を。行く先を。

多くの人に渴望されたであろう i f を。

漠然とした計画が急に現実味を帯びて、脳を侵食してくる。

今の俺にはその術がある！

理屈のない衝動に突き動かされている。そうせざるを得ないと全身の細胞が叫んでいる。母に焦がれ、俺の鍋に殺鼠剤を入れた尾形の気持ちだが、今この瞬間だけ、ほんの少し、わかるような気もした。

がらつ、と襖の開く音。

そちらに顔を向けると、見慣れた顔が隙間から覗いているのが見えた。——尾形。さすがに一瞬どきりとしたが、あちらの驚愕は俺の比ではないようだった。

「……………タマ……………」

変わらない無表情ながら、呼ぶ声が微かに震えている。

ああ。確かに殺したはずだろう。そのつもりだったはずだ。でも、俺は生きている。

「百之助」

何を考えているのか。

無言で立ち尽くす彼に、手を伸ばす。

すると尾形はふらふらと、糸で手繰り寄せられるようにこちらへ近づいてきて。小刻みに震える彼のそれが、ゆっくりと重なった。

握りしめて——強く引き寄せる。

「っ、」

バランスを崩した尾形が布団に膝をつき、俺めがけて倒れ込んでくる。抱きとめて、背中に手を回す。

どくどくと激しく脈打ち、熱を持つ体。生きている。それを感じながら、形の良い耳にそつと吹き込んだ。

「……………葬式の準備を続けないと」

俺ではなく、尾形トメの。

そうして確かめよう。

花沢幸次郎の『愛』を。

二週間経った。

尾形トメの葬式は、予定通り滞りなく執り行われた。

なんだかまだ、目を閉じると坊主の下手な読経が聞こえてくるような気がする。

「……………」

弔問客が続々と帰っていくのを、物陰にしゃがみ込んで見るともなく見送る。何となく鼻をうずめた着物の袖には、既に線香の匂いが染みついてしまっていた。

——辛気臭い。

湿っぽいのは嫌いだ……と、思ったところで、俺が今まで見てきた中で最も一番湿っぽい人間であろう彼が脳裏に浮かんだ。だからあまり好きじゃないのか。葬式も、線香の匂いも——あの男も。

「……………まだ？」

俺今何待ち？ 尾形待ち。



つまり俺は弔問客というか、尾形が出てこないかを見ているのである。

ここで言ってもどうしようもないし、かと言って中にいる本人に催促しても無意味なのだった。

尾形が何をしているのか。

……言うまでもない。弔問客の中から花沢幸次郎を探しているのである。まだ。

愛を確かめよう、とは言ったが。

その実、俺は花沢幸次郎が尾形トメの葬式に来ないことは「知っていた」。

トメがそうであったように、尾形百之助の願いが報われる日は永遠に来ない。幸次郎は2人を愛してなどいない。

「……おかえり、」

……そんなことを考えていたら、当の本人がやっと戻ってきた。

式自体はとうに終わっているのに。夕飯は済んでいるので腹は満たされているが、退屈なのと時間とで眠たくなってきたあたりだった。

浮かんだあくびを噛み殺して、着物の裾を払って立ち上がる。月明かりに照らされた百之助の顔ははつきりと眉が下がり、珍しく落胆しているように見えた。

「お父つつあまはおつ母の葬式に来なかつた」

死ぬまで彼の胸に巨大な棘を残し続けたその結果を、それでも淡々と伝えてくる。

「お父つつあまはおつ母を愛してなかったってこと？」

うん、もうこの時点からちよつとわからないけど。

まあその理屈関係なく愛してはいなかっただろ、と思うが、そんなことを馬鹿正直に尾形に言つてもしょうがない。

いや、この時点だともう逆に幸次郎の悪徳さを肯定してほしいのだろうか。でもそうすると普通に幸次郎殺害に繋がつちゃうんだよな。巡り巡つて尾形も死にかねないし。どういう連鎖だよ。

少し考えて、

「今は愛していない」

でも。

「愛した瞬間があつた、ということでは？」

未来の彼が今際の際に弾き出した結論を、慎重に現在の彼へと突きつける。

人間の感情とは複雑で、移りゆくものだ。そこに生まれる愛も憎もメンコの裏表のよくな単純なものではない。

「百之助。——百を助く。良い名前だ。軍を率いる将校さんにはぴつたりだ」

思つていたことを、それ以上の意味を含むであろう文脈で伝えてみる。

花沢幸次郎は、妾の子に最初から何も期待していなかつた訳ではないのだろう、とい

うのが俺の考えだった。

……これは飽くまで勝手な想像の域を出ないが、初め本妻であるヒロは不妊を疑われていたのではないか。幸次郎は焦り、この際、男児ならば非嫡出子でもいいと考えたのかもしれない。トメの懐妊は彼の不始末の結果などではなく、意図的なものだった？

いやまあ……だからなんだ、みたいな話なのだが。彼には重要なことなのだろう。

「……………」

尾形はやつぱり黙ったままだ。

というかまず、こいつの俺への接し方が大して変わらなかったことが一番の驚きだがな。今さらだが。

何事もなかったかのように隣に座り、同じ飯を食おうとしてくる。俺が物理法則その他を無視して蘇ったことには、その時点ではさすがに驚いていたようだが、それだけだった。

あの時のことは尾形の中でどういう処理がなされ、どこに落ち着いたのか。まあ、こつちもそのほうが接しやすいけども。

「変わらないものなどありはしない」

気を取り直して、話を続ける。

鶴見劇場ならぬ尾形タマ劇場だ。本家に比べたら格落ちなんてもんじやないが、こう

いうのはまず自分に酔うのが大事。そうだろう？

「愛した瞬間があつた。憎んだ瞬間があつた。でも、どんなに強い気持ちでもそれが永遠になる訳じゃない。……だから生きるのはつらいんだ」

愛し続けていられれば。

憎み続けていられれば。

それならそれで良かったのに。

だからトメは現実から目を逸らさざるを得なかつた……いや、やつぱりこれ花沢幸次郎がただカスつてことで話が落ち着かないか？

尾形の感性に共感できない俺では思考が堂々巡りのままなので、強制的にメに入る。棒立ちのままの尾形をそつと抱きしめて、

「でも……そうだな。もし、百之助が葬式をやるようなことがあれば……俺はいつでもどこにいても駆けつけてあげる」

愛だの恋だの、今の尾形にぶつけても理解できないだろう。だから、わかりやすく嘯み砕いて伝えてあげる。

……尾形の“愛情”の原風景、葬式の弔問客というのがよく考えると恐ろしいよな。

別に愛してなくても葬式には行くだろ。まあ、生が終わった後の、最終的かつ絶対的な感情の精算所という認識なのだろうけど。悲喜こもごもという概念を彼は理解でき

ず、そこで出てきたレシートに書いてある文言だけが全てを決定づけるのだ。

腕の中、俺を見上げる尾形の瞳が微かに輝いて、揺れているように見える。

「……何があつても？」

現状伝えられる渾身のアイラブユーを受け止めた彼は、ほんの少し嬉しそうに見えた。

「ああ。何があつても」

言いながら、夜空を仰ぐ。……失踪した母のためだけに自分を殺したクソガキの葬式に行く約束をするなんて、どんなシニールギャグだろう。

そんな現実からは目を逸らして、電灯の普及してない時代の星空はとっても綺麗だなあ、と俺は感嘆したのでした。

## 4話 共犯者／同伴者

あつという間に春が過ぎ、初夏が訪れた。

トメの葬式を境に尾形の徘徊も落ち着き、またも仮初めの平和が俺の周囲を満たして  
いた。

体が大きくなってきたので農作業も手伝うようにはなってきたが、それでも明治の田舎暮らしは暇。暇なものは暇。

ということ、最近尾形を連れて山で釣りなどしてみている。釣竿一式は祖父が貸してくれた。養女に甘い。

雨上がりで濡れた山道を慎重に進みながら、少し後ろを歩く尾形に呼びかける。

「食える魚が釣れるといいな」

「……………」

……しかし、釣りって言ってんのになぜこいつは銃持ってるの？ 話聞いてた？

鹿でも撃つつもりなのかな。俺はアシ×パではないので、大型哺乳類なんか解体できませんけれども。いや真面目に、

「……鳥がいても撃つなよ？」

魚の塩焼きだか煮付けだかの予定が、また鳥肉になってしまふ。美味しいけどね。

しかし、こつちのほうまで来たのは初めてかもしれない。もともと山で駆けずり回る趣味などなかった訳だが。

「よこしよ、よこしよ、」

昼下がり、田舎の裏山に人の気配はない。

ていうかここ、もしかしたらうちの私有地なのかもしれない。釣りをしたい、と言ったら祖父母からこの山を勧められた訳で、その可能性はじゅうぶん有り得る。

「……ここが私有地なら、他の人間がいたら不法侵入だから撃つても……冗談だ」

当然のように銃を構えるな尾形。

というか、さつきから何の反応もないから話聞いてないのかと思つたが。そもそも明治に不法侵入とかいう罪が実際にあるのかは知らない。良くないという意識はあるはず。

「あー……一面のクソミドリ……」

ちよつと疲れてきた。まだ流れる水の音すら聞こえてこないのに。こちとら運動不足の女兒だから許せ。

何せ初夏なので、どこもかしこもとにかく青々しく葉が茂っている。植物に関する知

識がないので、どれも『草木の葉』としてしか認識できない。うーん、知的貧困。植物の名前を覚えて山菜採りに精を出すほうが簡単な、と思いつつ。

ふと、顔を上げた先。

「――新緑の中に揺れる、鮮やかな紅葉。

……紅葉？

有り得ない。そう思ったところで、それが着物生地の柄であることに気づく。そして、非常に見覚えがあることも。……どこで見た？

微風が吹き抜ける。木枯らしでもないのに、体温が奪われていくような錯覚。

“それ”が風に吹かれて、揺れている。

布がたなびいている、とは少し違う。

“中身のある”揺れ方だった。

まさか。

「……おが、「おっ母」

とつさに彼の名前を呼びかけた瞬間。他でもない、いつの間にか隣まで来ていた彼の呟きに遮られる。

さすがにぎよつとしたが、尾形は落ち着いていた。少なくともそう見えた。“それ”



を瞬きもせずじつと見つめている。

いや、まだトメと決まった訳じゃあ。そんな慰めを口にする気にはなれなかった。

立ち尽くす尾形。

かと思えば、

「つ、ちよつと、危ないって……！」

ずんずん先に行ってしまう。視線が正面に固定されたままなので、傍から見ると危険極まりない歩みだ。慌てて追いかけた。

登って、降ってを何度か繰り返し、ようやくその「足元」まで辿り着く。クソ、だから運動不足にはきついんだって。

「はあッ……百之助?」

三足先くらいに到着していた尾形は、無言でそれを見上げていた。

立派な枝ぶりの広葉樹、一際太い枝にぶら下がる着物姿の、明らかに死体。

——首吊りか。

口には出さず、ただ思う。わかりやすく自殺の手法で、逆に良かったのかもしれない。これで他殺を疑われる死に方だったら、また新たなトラブルを生んでいただろう。

帯か何かを解いて、それを紐代わりにしたようだ。だから見慣れた紅葉柄の打掛が風にそよいでいた。前が大きくはだけたその姿は扇情的と呼べなくもないが、中身が腐乱

死体では興奮も何もあつたものではない。

腐乱というか——その段階は通り過ぎているようにも見えるけど。肉が削げ、骨が覗いている箇所もわりとある。

いつ頃死んだのだろう。冬に死んで、春になって死体が腐つた？ 見た目は散々なものだが、ひどい腐臭がする感じはしない。まだ暑くなる前だからだろうか。

今さらだが、死んでいたこと自体には特に驚きはなかった。まあそうだろうな、という薄味の納得だけがあつた。死んで惜しむほどの交流があつた訳でもない。なぜなら俺は最後まで以下略。

しかし、尾形は何度もこの辺りを搜索していたはずなのに。冬場はここまで辿り着けるような環境ではなかったのだろうか。私有地だからこそ誰にも見つからなかった？

——……意外と平気なもんだな。

それは、初めて腐乱死体を見ても気分が悪くなったりしなかった自分に対してでもあつたし。実母のそれを見ても、泣きも叫びもしなかった尾形に対しての感想でもあつた。

尾形が泣くような状況、原作では当然ないにしても、俺が生み出せるとも思えないが。泣くまで殴つても泣かなそうでもないな。

「……ない」と、

「あ?」

そんなことを考えていたら、尾形の微かな眩きに対する反応が遅れた。

今こいつは何と、

「埋めない」と

なるほど、埋め——

「……え?」

「ここに死体があるのはおかしいから」

おかしい。……そうなのか?

葬式はやったので対外的には死亡扱いだが、少なくとも我々が死体を見つける分には問題がある訳でもない。面倒事は増えるかもしれないけれど。

クエスチョンマークを撒き散らす俺をよそに、尾形は何もかもわかったふうな顔で、

「おつ母の葬式はもうやったから」

「……」

こいつもしかして、人生はただ一度の葬式でしか閉じられないと思っっているのか。

それが済んでしまったこの死体は尾形に言わせれば既に行き場がない状態で、だから墓に入れずここで処理する必要がある、と言いたい?

葬式にやたら執着しているなどは思っていたが、そこまで深い意味を込めていたと

は。だからこそ、トメの葬式をやるとなった時にあんな抵抗したとも言えるか。埋める。埋める、か。

……こんな高いところにぶら下がっている成人女性の死体を、子ども2人で？

「……埋め……まあ、いいけど……」

殺されるだけでは飽き足らず、新たな罪の共犯者にまでなるつもりか。

自分自身に呆れる気持ちがない訳ではなかったが、今更だという感情のほうが強かった。どう考えても死体をこのまま放置しておくより面倒な事態を招きかねないが、尾形がそうすべきだというならやぶさかでない。

尾形は一瞬、俺に目をやって。

「シャベルを取ってくる」

「……バレルなよ？」

こいつ、最初から俺のこと巻き込むつもりだったのかな。

「……つ、かれた……」

で。死ぬほど時間と体力を使ったが、何とかトメを木から下ろして、地面に穴を掘って、元通りに均して、が終わった。本当に、死ぬほど時間と体力を使ったが。

尾形が平気な顔をしているのが恐ろしい。こいつ作業中も銃担いでたし。成長して接近戦よわよわ（比較対象がおかしいことは否定しない）になるとは思えないゴリラっぷり。

手頃な岩に腰掛けて、汗を拭う。

野外に放置されていた死体なんぞ触りたくもないのでその辺りは尾形に任せため、手の汚れは泥くらいなものだ。よくわからん体液よりずっとマシ。

「……百之助……？」

尾形は、少し離れたところで掘り返して埋めたばかりの地面を眺めている。

飽くまで機械的に作業を済ませた彼は、今に至っても手を合わせたような素振りを見せていない。……葬式は終わったから、か。尾形の中では明確な線引きがあるのだ。

「暑い……」

着物は通気性が悪すぎる。今は咎める人間もいないので、前を寛げて空気を通す。

佇む尾形の横顔にも玉の汗が浮かんでいるのが見える。泣いているみたいだな、とくだらないことを考えた。

何か声をかけたほうがいいか。逡巡しているうちに、尾形がぼつりと呟いた。

「……やっぱり、おつ母の鍋に殺鼠剤を入れるべきだった」

いや、やっぱりって何だよ。

「……………」

瞬時に背筋が冷たくなる。

案の定、殺鼠剤でトメを殺す構想自体はこちらの尾形にもあつたらしい。結局は機会を逃し、その殺害方法がそのままスライドする形で俺に降り掛かってきたようだ。

「あんな偽の葬式、やらなければ良かった。少なくとも急ぐべきじゃなかった」

それまだ言うか、と思ったのも束の間。

「『本物』の葬式なら……お父つつあまも来てくれたかもしれないのに、」

「ちよ、ちよつと待て」

とつさに口を挟んでいた。

どういう理屈だよ。葬式にホンモノもニセモノもないだろ。また謎理論か？

「……………」

土饅頭を挟んで、俺の「意味わからん」の不可解な視線と、尾形の「なんで今止められたんだ」の不満げな視線が絡み合う。

ややあつて、俺が理解できていないことに気づいたらしい尾形が、淡々とそう思うに

至った根拠のようなものを口にする。

「葬式を二度やる人間はいない」

「あの墓の下におつ母が入ることはない」

「永遠に宙ぶらりんだ。何もかもが」

うーん、わからん！

が、つまり……棺桶に死体があれば幸次郎は葬式にやってきたのかもしれないのに、と？ その違いは、単なる弔問客には知りようもないことだったのに。

尾形節の最骨頂だな。つまり、常人には理解不能ということである。

訳わからんのマリアーージュで内心白目を剥きかける俺の前で、尾形百之助はポケットに入れた有線イヤホン並みにこんがらがった理屈の総括を弾き出す。

「……おつ母、かわいいそう」

「っ、」

かわいいそう——だからあの時、自分に「ちゃんと殺されておくべきだった」、とでも言いたいのか？

巡り巡って俺に当てつけるような言い草に、こちらも剣呑な雰囲気にならざるを得ない。いや、被害妄想か。舌打ちを飲み込み、視線を逸らす。

「……………」

「なんだろうな……生死に倫理観が介在していないこの感じ。あくまで手段のひとつとしてしか捉えていないというか、不可逆的な罪であるという認識が欠如している。」

存在を消す、葬式をする、を何の疑問もなく目的に据えて、その過程で必要不可欠となる『殺人』を必要だから、と何も考えず実行できる人種。//殺したかったが死んでほしかった訳ではない”を地で行くタイプ？

でも罪悪感はあるんだよな。

よくわからないよー。

……立ち上がる。微動だにしない尾形に歩み寄り、汗にまみれた顔を覗き込む。

「百之助」

子どもらしくふつくらとした頬に手を添える。しっとり湿つて、温かい。

尾形が俺を見る。

「百之助がお母さんを殺さなくて良かった」

これは、本心。

いくら尾形が今の母を哀れもうが、実の息子に毒を盛られて挙句「無意味だった」と切り捨てられるよりはマシ。そう思いたい。

「……何故？」

「人間には罪悪感があるから」



結局、それが元で尾形百之助は「罪悪感」に囚われ続ける一生を送るのだから。

「真面目で優しいお前はその罪悪感に耐えられないから」

間違えて、それでも生きようとして、さらに間違いだけを重ね続けた。最期にその矛盾が噴き出して、苦しみながら死んだ。

こちらを見つめる尾形少年の瞳に、かつて見た彼の最期を想う。

「……罪悪感？」

尾形が大きな目を瞬く。何かとても予想外のことを言われた。そんな雰囲気だった。

「殺した相手に対する罪悪感、」

柔らかなみのない動作で首を傾げる。

「……そんなもの、あるのかなあ？」

一応言っではみているが、俺も今のお前にはないんじゃないかと思えてきたぜ。勇作

殿の立派さには本当に頭が下がる。

「……いや……そうか、」

場違いに明るい声。嫌な予感がした。

「俺は愛のない妾の子だから、罪悪感なんて感じないんじゃないか？」

「――、」

「完成された理論」に、息を呑む。

尾形百之助の成長が止まった瞬間を、目の当たりにしているような気がした。

「……愛のない子？」

全てを知っている俺でさえ戸惑っているのだから、いきなり現れた妻の子にこの理論を振り翳された幸次郎の困惑やいかに。

しかも殺されてるし。かわいそうになってきた。俺たちもはや殺トモだもんな。

「愛」

細い指先を重ね合わせて、尾形が夢見るような調子で呟く。

「お父つつあまに愛があれば、おつ母を見捨てることはなかったはず」

ぐるぐると。思考の螺旋階段は内に、下に、続いている。張りぼての問答たちをしつかり踏み締めて、自分の殻に閉じこもっていく。

「愛がない両親の間に出来た子どもは、何かが欠けているのでは？」

出た謎理論。尾形の世界には、尾形以外に通用しない概念が多すぎる。

「欠けた人間……」

隙のない、完全な方程式だ。——尾形の中で温められている間だけは。

彼の唇から飛び出した瞬間、ありとあらゆる人間と、それにまつわる事象がそのxとyとに当てはめられることとなる。尾形自身はそんなことには興味がないのだろう。そもそもが自己を慰撫するためのだけのガラスの要塞だ。

でも、俺は興味がある。

「……その理屈だと、両親の愛など証明しようがない俺は、両方から見捨てられた俺は、全てが欠落した人間ということになる」

前世の俺には愛してくれる両親がいた。家族がいた。……それでも、俺が欠落した人間であるという評価自体には、異論がない。

まあ、そんなことはどうでもいい。

「お前は俺をそう思っているの？」

尾形を見る。——ほんの一瞬、そんなこと考えたこともなかった、みたいな顔をした。穴がわかりやすすぎる。

「……………」

で、答えない。思案しているようでもあった。

罪悪感のある相手。

罪悪感のない自分。

その違いを、また彼なりに模索しているのかもしれない。……結局は、根底から間違った結論を肯定するための歪んだ理論武装だ。

ここで理由を出されても、また理解できるようで理解できない内容なのだろうな、と思つた。

「両親の愛の有る無しで人間の出来が変わるなんて、後付けの理由に過ぎない」

都合の良いエクスキューズを探しているだけだ。自分を赦し、生きながらえるための。

「全員に当てはまる訳もない。でも、それで目の前に見過ごせない外れ値が出てきたら、きつとお前はまた新しい後出で、自分を納得させてしまおうだろう」

ぴくつと、小さく肩が跳ねる。尾形が顔を上げて俺を見た。黒々とした瞳に、責めるような色が浮かんでいる。

歳が歳なら、不貞腐れた目線の代わりに銃口が即座にこちらへ向いていたのだろうな。まあ、銃自体は既に手元にあるけど。小柄な体に不釣り合いなライフルの姿を視界の端に捉えながら、さらに続ける。

「……馬鹿げてると思わないか？」

前提も、ゴールポストさえ自由自在の「仮説」なんて、そんな。それで一体何が明らかにされるといふのだろう。

「お前は何を『証明』したいの？」

言うまでもない。自分は正しいということ。

でも、本当は何もかも間違っていたのだということ、最初からお前が一番よくわかっていたんじゃないか。

一步、距離を詰める。腕を伸ばす。尾形はそんな俺をただ観察している。

「百之助はそんな人間じゃない」

華奢な体を強く抱きすくめて、囁いた。

呪いを、祈りを。

「何もかも、お母さんを想つてのことだ。お前はあの人を愛していた。何も欠けてなんかいない」

尾形は黙っていた。203高地での時のように、相手を、こちらを、抱きしめ返すこともなく。

「いつかわかる日が来る」

……花沢勇作は、あの203高地で尾形を抱擁して、何を思ったのだろう。

あの時、彼は泣いていた。今の俺は嘘でも涙など流せそうにもなかった。

なぜなら、俺は決して高潔な人間などではないからである。

——結局。あの後、マネキンのように微動だにしなくなってしまった百之助をやむを

得ず置き去りにして一人、下山した。

だって、マジで直立不動で動かないんだもの。俺よりは力があるので無理矢理引きずって帰るのも不可能。何を言っても無視してくるし。鴨を撃ってくる前の関係性に戻ったのかと思った。

……いや、戻ってしまったのか？

「……………」

眉間に指を押し当てる。

——大人気なく嫌味なことばかり言い過ぎている、という自覚はある。

いくら理屈が破綻しているからといって、10歳そこらの子どもをそんなにド詰めするものじゃないのかもしれない。あの歳であれだけのを考えられるのだから、同年代から見ればじゆうぶん賢い子だ。

俺が同じくらい歳の頃だった頃なんか、その辺の虫を殺すことしか考えてなかったぞ。

「……………はあ、」

いやでも、どう見ても尾形はこの時点の理論が更新されないまま大人になっている。

ここで多少強めに否定しておかないと、結局は元の木阿弥なのかも。まあ……既に一度訳わからん理由で殺されてるし、俺にはその権利が多少あるだろう。

そう考えでもしないとやってられない。

そこまで自分を納得させて、

「あ、ていうか釣り……まあいいか」

問答で消耗して、とてもじゃないがそんな気分ではなくなってしまった。

ボウズでしたー、で誤魔化すか。素人のガキだし、別に不思議ではないだろう。

「ん……」

遮蔽物のない平地に降りると、急に日差しが眩しい。とつさに手を翳して防ぐ。

日差しというか、もはや夕陽だ。死体隠蔽と問答で時間を使いすぎたな。どちらにせよ釣りをする時間なんか残っていなかったかも。

傾きかかった、を通り越して、今まさに沈もうとしている太陽をぼんやり眺める。よく橙色と言われるが、今のこれはどちらかというと、

「……血みたいだな」

深い赤。手のひらが、泥で汚れた着物が、血にまみれたみたいに赤い。不気味な色だと思った。

「尾形……」

大丈夫かな。日が暮れたら、帰ってくるのが難しくなると言うけれど。

「——あ？」

そこで。漠然とした心配の巡る思考回路に、急に割り込んでくる明瞭な不安感——尾

形がトメの後を追ったら、どうしよう？

銃も、シヤベルも、手の届く範囲にある。彼は既に銃の使い方を知っている。絶対にやらない、とは言えないのだ。何せ相手はあの尾形百之助なのだから。

どうして今まで考えなかったのだろう。やはり俺はまだまだ考えが甘い。唇に手を当てる。

「……ヤバいかも？」

呟いて、改めて思う。

1人にするべきではなかった。少なくともあの場にだけは。ぶん殴つてでも連れて帰るべきだった。

噴出した懸念が前頭葉を覆い、心拍数を跳ね上がらせる。

——お前の葬式には絶対出てあげる。

そう囁いたことを今になって思い出す。尾形ならば、それだけを糧に一步を踏み出しかねない。そういう精神性の持ち主なのだ。

まさか、過去の自分に足を掬われるとはね。いや、俺に限らず大抵のことはそうか。他ならぬ尾形がそうだったのだから。

「尾形、」

頼むから、こんなところで死んでくれるな。



とにかく、彼を探しに戻らないと。

全身の疲労も今は気にならなかつた。急がなければ。日が沈んでしまう。慌てて踵を返して——尾形百之助と、目が合った。

「……………え、？」

数メートル離れた位置で、小銃を構えた尾形が、こちらを無感動に見据えていた。

山を下りていた。無事だつた。

欲していたはずの情報より先に、その銃口がこちらを捉えていることに目が行つた。

「あ——」

——タアン。

目の前が、夕陽のそれではない赤に染まつた——ような、気がした。

そして、暗転。

すぐそばで、虫の鳴き声がしている。

「……………」

緩やかに意識が浮上する。

目覚めてすぐに、辺りが既に暗いことに気づいた。虫がうるさい訳だ……妙な納得をしつつ、今までのことを思い返す。

あれ、というかここ野外？

「タマ」

囁くように名前を呼ばれて、肩が跳ねた。尾形の声。頭上からだった。

とつさに声のしたほうを見て——正面の視界が彼の無表情に占領されていることに気づいて、また肩が跳ねる。見下ろされている。

……膝に寝かされている？

頭の下にあるのはざらついた土の感触ではなく、弾力と温度のある何かだ。尾形の膝を枕に、畦道に横たわっている。

尾形のぬるい手のひらが、俺の額を撫でた。優しく、その丸みを確かめるように。何でそんなことするんだろう——と思ったのもつかの間。今日の全てを思い出す。

トメのこと。

その後のやり取り。

背後から彼に撃たれたこと。

……いや撃たれた、

「……………、は？」

あんこう鍋の冬を通り越して、初夏。  
尾形百之助に、また殺された。

## 5話 郷愁が足りない

「……………」

ぐわあ、ぐわあ。

マガモの濁った鳴き声が聞こえた気がして、初春の空を仰いだ。

「まだいるのか」

薄く雲の散りばめられた空を渡る、小さな黒い影。早く北に行ってしまったよ。漠然と恨めしさのようなものを覚える。鴨鍋の味にもいい加減、愛想が尽きたところだった。

19歳、春。

時間が経つのは早いもので、幼い子どもだと思っていた自分自身は、いつの間にか大人の女になっていた。

それと同時に目の前へ迫り来る『結婚』の2文字。現代ならいざ知らず、明治の女としては避けられない事態。尾形のことを考えると、呑気に身を固めている場合じゃねーのだが……今から断る理由を考えるのが億劫である。

「はあ」

朝方は、まだ冷える。

ようやく最近、吐く息が無色透明になってきた頃だった。

農作業が一区切りついたので、その足で山菜採りにでも行こうかと思つたが、一旦家に戻つて茶でも飲んだほうがよかつたかも。このままだと寒くて嫌になつてしまいうだ。

「北海道はもつと寒いんだろうけどな……」

見合いを断るのは面倒だが、別に尾形を追いかけての北海道入りが楽しみな訳ではないんだなあ。飛行機とかない時代だし、女の一人旅だし。

それを改めて突きつけられて、ちよつとげんなり。寒いのは苦手だ。

「……さつさと採つて帰ろ」

なんだかんだとここまで来てしまったし。尾形には「寒いのは嫌だから……」とわざわざ第七師団に入る男とは思えない台詞で、同伴を断られている。北海道ナメんな。

まだ残っている落ち葉を踏み分けながら、獣道の脇に並ぶ草木に目を凝らす。

タラ、ウド。有名どころはもちろん、前世であればただの葉っぱにしか見えなかつた山菜の名前もわかるようになってきた。視界の解像度が上がると、少し山に入るのが楽しくなる。知識は人生の栄養だ。

「お、コシアブラがある……」

ひよろつと地面から生えた木、その先端にある若芽を摘み取って籠に入れる。タラの芽もそうだが、ヤマウルシの新芽と似ているので注意。口の中かぶれちゃうよ。

これが一番美味しいと思うのだが、尾形曰く「違いがよくわからん」。出ればもりもり食べるので不味いと思っっている訳ではなさそうだが。

「コシアブラいっぱい採れたし、今日はもういいか……」

案の定というべきかこの裏山、私有地なのであまり気にせず山菜採りに励めていい。意識しているのは採りすぎないこと、くらいだろうか。だって、翌年採れなくなったら困るから。これはアシ~~ン~~バが語っていたカムイとの付き合い方と通じるものがある。

「よし」

籠を背負い直して、踵を返そうとして。

——できなかつた。

唐突に浮遊感、

「——ッ、」

視界に落ち葉が舞う。

首筋に、夜露で濡れた土の感触。

転んだ？

……いや、引き倒された。誰かに。

背中から籠が落ちて、集めたばかりの新芽が地面に散らばる。ああ、もつたいない。仰向けで横たわり、顔を傾けてその惨状を眺める俺の体に、その「誰か」が覆いかぶさってくる感触。俺より体格が良い——男か？

概ね尾形、大穴で知らんやつ。

そう思つて視線を向けた先、

「……………」

……どうやら無事、大穴のほうを引いてしまつたらしい。

全く見覚えのない若い男に、とっさに眉根が寄る。マジで覚えがない、誰だこれ。

「あ……………」

男はぎらついた眼差しで俺を見下ろしている。荒い吐息が横顔にかかつて気色悪い。

すわ物盗りか、とも一瞬思ったが。今の俺は若い生娘なのだった。人気のない場所だ。男が見知らぬ婦女子を押し倒して、まあやることはひとつだろう。

俺は今から、一切記憶にないこの男にレイプされるのだ。

「……………」

——うん、まずつたな。

というかここ、私有地なはずなのに。暴漢にはそんなこと関係ないのか。まあ、家に

押し入ったりする輩もいる訳で、量刑上乘せどんと来いというやつなのだろうか。

完全に油断していた。

尾形に銃でも借りておけばよかった？

いや、何もかも後の祭りだ。

「つへへ、前々からあんたには目をつけてたんだ、」

さいですか。眺めていた近所の柿が食べ頃になったから窃盗すると。畜生そのものだな。

ううん、死に物狂いで抵抗すれば行為自体は免れるのだろうか。代わりに殺されかねないが。無傷で撃退するのは難しいだろう。女とか男とかいう以前に、完全にマウントを取られた状態で持ち直せる人間は早々いない。

「大きな声を出したら、殺すからなっ」

殺すって。得物も何も持たず言っても説得力が無いのでは？

こちらがうんともすんとも言わないうちに、男の汗ばんだ手が、引きちぎる勢いで着物の衿目をはだけさせる。おいおい、一張羅なんだから乱暴に扱うなよ——あ。

「殺すな」

思わず、その一言が口をついた。

懇願ではなく、命ずる響きだった。



「は、？」

赤らんで、鼻の下が伸びた不気味な表情で固まる男。それから、俺の視線が覆いかぶさる自分ではなく、そのさらに背後を捉えていることに気づいて、とつさに振り返った

「な、……あ、がつ」

——その唇に躊躇なくねじ込まれる、ライフルの銃口。男は目を白黒させ、銃の主は反対にうつすら笑みを浮かべた。

見慣れた小銃と、それを構える見慣れた少年——否、もう男と呼ぶべきか。

形の良い坊主頭、特徴的な目元。目立つパーツ自体は子ども時代から変わらず、けれど最近、大きく変わったのは。

「大きな声を出すな。殺すぞ」

「駄目だって……百之助、」

低音ボイスで放たれる色気たっぷりの殺し文句（物理）を、食い気味に制止する。17歳の尾形百之助が、途端に鼻白んだ顔をした。

「というか、どうしてここに？」

俺の帰りが遅いので、探しにでも来てくれたのだろうか。家にいない時の俺は十中八九この山にいるし、通るルートも大体同じだ。

とりあえず、相手の男に、銃を突きつけられて萎える程度の理性があつて良かった。動かなくなつたのを良いことに、その下から抜け出して、乱れた服を整える。

乳がこぼれる寸前まで露わになつた胸元を見て、尾形がこの上なく嫌そうな顔をした。まだ何もされてませんよ。

「……………」

「ヒッ」

銃身で軽くどつかれて尻餅をつく男、不機嫌の治らない尾形。こいつ今すぐぶつ殺したい、が顔から滲み出ている。

「…………馬鹿は死なんと治らん」

むしろ俺は、仮にも明治の男である尾形が、強姦魔は死ねという価値観を持っていることに少し驚いていた。目の前で襲われればそんな気持ちにもなるか。

「私たちがわざわざ治す義理もないよ」

駄目なもんは駄目、と念押ししておく。

が、尾形は納得いかなかったようだ。しゃがみ込んで懐から折り畳みナイフを取り出し、それを男の下半身近くでわざとらしく弄びながら、

「二度と女を抱けん体にしてやろうか？」

字面とC.V.

津田健次郎だけ見ればセクシーな口説き文句にも見えなくはないが、

実際のところは単なる脅迫なので、男は青褪めてガタガタ震えている。

うーん。

「……まあ……その辺りは任せるよ」

「えっ」

なぜか見捨てられたような雰囲気醸し出してくる強姦魔。こつち見んな。

こいつにもはや興味がなく、当然ながら同情する余地もまた無いだけだ。その場でぶっ殺しさえしなければ、男として使い物にならなくなろうが俺には関係のない話。

そんな俺のニューアンスを知ってか知らずか、尾形が薄い微笑みを浮かべる。

「目的の問題だ、タマ」

下げていた銃口をゆっくり持ち上げ、男の眉間に押し当ててみせる。ごり、と鈍い音がした。汗だくの男は、蛇に睨まれた蛙のように微動だにしない。

「……目的？」

「殺したいのは二度と立ち上がらせたくないからだ」

引き鉄に指を掛け——ばん！ 尾形がわざとらしく口にした銃声の真似に、まあ可哀想なくらい震え上がる男。

「息の根が止まれば、その目的は未来永劫完璧に達成され続ける。……でも、それが駄目なら別の方法でその足を折ってやるしかない」

言いながら銃口を下げ、代わりに折り畳みナイフの煌めきを見せてくる。

二度と立ち上がれなくしたい。そのための銃であり殺人であるから、それを拒否しておしまい、ではない。代替品が必要なのだ。

そういうことか。

うーん、欲を言えばやめてほしいが、その辺りが最低限の譲歩ポイントだろう。

「……なるほど？ 合理的」

「だろう？」

「え——ぎゃあッ」

自業自得な悲鳴をバツクに、一足先にその場を立ち去る。

「……殺すなよー？」

念押しで振り返った先、尾形がひらひらと左手を振ってみせた。本当に大丈夫かな。

まあ、一応は同じブツを持っていた者として、人間オスの去勢シヨを間近で眺める趣味はありませんので。南無三。

尾形と別れて。

「……目的、」

畦道を歩きながら、ぼんやり思案する。

目的が要請する工程としての、殺人。

尾形にとつての“殺し”について。

……何だか、数年前にも同じようなことを考えたような気がする。

「トメの死体が見つかった時だったか？」

あの時の尾形は、トメが失踪し、偽物の葬式をせざるを得なくなつたという結果を逆手に取つて、自分が彼女を毒殺しようとしたことを肯定していた。

今の尾形は、強姦魔が二度と俺に危害を加えなくなるという結果を求めて、ヤツを銃殺しようとすることを肯定している。

目的と、結果。いや、

「……道理？」

目的に、殺人を肯定するだけの“道理”が存在すれば良い。それがあれば躊躇なく禁忌を犯せる。犯すことを厭わない。

罪悪感も、発生しない。

そういうことか？

「そんなことはないと思うけどな……」

これがあの時の回答？ 人間というものを単純に考えすぎなのではないか。

——道理さえあれば、罪悪感など覚えずに人を殺し得る。その素質が、全ての人間に存在する。

だから、俺はおかしくない。

皆、同じはずなのだ。本当に高潔な人間など存在しない。

尾形の声が鼓膜の内側から聞こえてくる。

——そう振る舞っているだけでは？

花沢勇作の涙が脳裏をよぎる。

ああ、

「……本当の『欠けた人間』は、道理などなくとも人を殺せるんだぜ」

瞼を閉じて、拳を握る。

道理も所詮はエクスキューズに過ぎない。

それを欲する心の動きこそが罪悪感の発露であり、お前が欠けた人間などではない証  
拠なのだから。

皆同じ。その結論だけは間違っていない。尾形百之助が欠けた人間であるという前提が誤りなだけだ。彼は普通の人間だった。

ああ。嫌だなあ。

タアン。

聞き慣れてしまった銃声に、顔を上げる。あの銃で背後から頭を撃ち抜かれてからというものの、見えない位置でこの音がすると若干身構えるようになってしまった。

まさか、あの男を撃ち殺した訳ではなからうが。音がしたほうに足を向ける。

「あ、」

案の定、発生源は尾形で。

けれど、彼はいつもの畑の脇で、撃ち落としたのであろう鴨を拾い上げるところだった。

「……百之助?」

呼びかけると、振り返ってこちらを見た。

男への仕置きは済んだらしい。帯に、紅白のまだらに汚れた折り畳みナイフが挟んである。紅は血として、白は……うん。

「ありがとう」

無言で鴨を差し出してくるのを、受け取っておく。ここで渡されても困るんだが。

今日もエンドレス鴨鍋記録更新だなー、とか思いながら獲物を眺めていたら。

同じく、尾形がじつと俺を見つめてきているのに気づく。

「なに、」

「陸軍に入ることにした」

語頭を食って放たれたその一言に、小さく息を呑む。

「……、そう」

知ってたけど。そろそろかなー、とは思っていたけど。やっぱり、そうなるのか。

胸に去来するのは、原作通りに事が進む安堵か、尾形百之助が俺のコントロールド下から離れることの不安か。これから勇作とか幸次郎とか鶴見中尉とかあるけど大丈夫かな、

「明日ここを発つ」

「あし、」

急すぎるだろう。

予想外の衝撃に白目を剥きかけた。寝る直前にいきなり小学生の我が子から「明日の授業で空の2Lペットボトルが2本必要なんだけど」と言われた母親みたいな気持ちになっている。いや知らんけど。

「……北海道の、第七師団だ」

その後に続く言葉は、大体予想がつく。



これだつてそうだ。やはり尾形百之助は第七師団を選ぶ。わかつていたことだ。でも、しらばっくれておく。

「何でまた、」

「父上はそこの師団長をやっている」

……どこからそういう情報を得ているのか。とにかく、いつの間にか中佐からそこまです昇進していたらしい。

妾とその子を捨てて本妻との間に男児が生まれたおかげで無事に中将になれたよ！  
やっただね幸次郎！

「ならば……正妻との間の息子も、おそらく第七師団に入れたはずだ」

尾形の低い呟きで、我に返った。

「軍人の子は軍人」

父に愛された異母弟。祝福された子。昏く澱んだ瞳が、彼を想ってさらに濁る。

虚ろな表情のまま、一度ゆっくり瞬きして。ぱつと、顔を上げて俺を見た。

「そいつの顔を拝んでくる」

一転、勝ち気に笑んでみせる。そんな顔をされてもこちらの不安が減る訳ではない。憂うと真顔になり、傷つくと笑う子だから、むしろ心配になるんだよな。

「北海道は寒いだらうね」

「ああ」

「風邪、引かないようにね」

「……ああ、」

「百之助、寒がりなんだから」

「お前もな」

「茨城は大丈夫だよ……」

しかし、火鉢にケンケンする猫ちゃんが真冬の北海道で雪食ってた（食ってない）りしてた事実、改めてよく考えると覚悟キマリすぎてヤバいんだよな。同じように恨みがあつた二階堂は、それでも弱音じみたものを吐いてたのに。

「……………」

よしよし。手を伸ばして坊主頭を撫でる。尾形は嫌がらず、目を細めただけだった。

お前は偉いよ。本当に。

ちよつと……努力の方向性を180。間違えちゃつてることを除けばね。

「……手紙書くから、」

ゆつくり体を離す。

「どんな人だったかちゃんと教えてね」

そこで、俺を見つめていたのが、自然な動作で目を逸らして。やがて完全にそつぽを

向いてしまった。いや返信しない気だなこれ。

「……………」

尾形は真顔で、さつきまで撫でてやっていた坊主頭を撫でつけている。それ、後ろめたい時の仕草でもあるんだよなあ。

まあ良いけどね。

結局、1907年までには俺も北海道に渡る予定だし。

「……………案外、汚い台詞を叫びながら局部を振り回す男だったりしてね」

「何だそれは」

言いながら、想像したのかちよつと嬉しそうな顔になる尾形。まあアレ杉元なんですけどね。

そこからしばらく無言が続いて、

「……………帰るぞ」

普段そうやって尾形を先導する俺がだんまりを決め込んでいたせいか、珍しく彼のほうから言い出してきた。といつても俺を待つ気はないらしく、さつきと背を向け、先を歩き始めてしまう。

「……………うん」

——尾形は。

もしかすると、俺にも何も言わず出て行くつもりだったのかもしれない。ふと、そんなことを思った。

——そして、もう二度とこの茨城に戻ってくるつもりはない。

原作と同じく、そう考えている。

いや、これは予想だが、祖父母をわざわざ始末してから旅立っていることを考えると、そう見たほうが自然だろう。

実際、原作の彼は再び故郷の土を踏むことはなかった訳だけれど。

——なぜ、俺に話す気になった？

「……………」

尾形百之助は、気まぐれに見えて「なんとなく」で意思を曲げたりはしない男だ。一挙一動に必ず意味がある。

その理論が他人に理解できる強度なのかはさておくとしても。

——なにか嫌な予感がするな。

こういう時の予感、当たるんだよな。17年の付き合いは伊達ではない。漠然とした不安を覚えながら、早足で前に行く背中を慌てて追いかけた。

## 6話 深淵より愛を込めて

家に帰っても、予想通りにと言うべきか、尾形はいつもと変わらぬふうを装っていた。やはり祖父母には、初めから言うつもりがなかったらしい。

それならそれでいい。俺は構わない。わざわざ告げ口しようなんて気にも、もちろんならなかった。何の得もないし。

まあ、その点はともかくとして。祖父母がいる家の中であれこれ聞くのも気が引けて、結局一日中何も話せないまま、床に就くことになってしまった。

元トメの私室である自室で一人、布団に横たわってぼうつと思案を巡らせる。失踪した拳句に自殺した女の部屋なんて不気味だ、とは思わなかった。俺は靈魂など信じない。

「……大丈夫かな……」

漠然とした不安に襲われて寝つけない。

原作開始までに重要なイベントは、あと3つ。

祖父母。勇作。幸次郎。

最初に関しては、夕食が何事もなく済んだのでクリアしたと思いたい。一応、何か入

れたりしていないかはチェックしておいたし。

あとの2つは……もはや俺が関与する余地がない。答え合わせにも数年かかる。そして尾形が素直に本当のことを話してくれるとも思えない。それが心配だ。

「生き霊でも飛ばして邪魔できればな……」

霊魂など信じないと言ったくせに。

セルフツツコミである。

まあ、信条を捻じ曲げて霊だの何だのに縋りたくなくなるくらい、悩ましい事象なのは確かだ。

「……………まあ……………今さら考えてもしょうがないか……………」

ていうか、もう寝よう。

冷気が肌を撫でる感覚で、沈み込んでいた意識が浮上する。

閉めたはずの襖が開いて隙間風が吹き込んできた——というよりは、もつと身近に感じるそれ。例えて言うなら、掛け布団を持ち上げたとか、そういう。

「うん……う？」

寝返りを打った弾みにでも、うっかり布団を捲ってしまったのだろうか。寝相はいいほうなはずなのだけれど。

いや、寒い。

目を閉じたまま、布団を引き上げようと手を伸ばして。その指先が、自分ではない何かにつかつた。……え、ぶつかつた？

普通では有り得ない状況を理解して、一気に覚醒した次の瞬間、

「んわ」

ダメ押しのごとくべちん、と顔面に落ちてくる、柔らかくて薄っぺらい何か。

ぐえー、息ができない。

慌てて布団から手を出して、それを退けたところで。覆いかぶさる影の存在に気づく。

ここでTips。死んでも生き返る、以外の俺の数少ない特技(と云っていいのか)に『夜目が利く』というのがある。まだ夜明け前なのだろう、漆黒に満ちた部屋の中でも、俺の目はその闖入者をはっきり見定めていた。

寝巻き代わりの浴衣を身に纏って俺を組み敷く、

「ひゃくのすけ、」

暗がりの中で、その特徴的な瞳はぼうつと光を放っているようにも見える。

ああ、どうやら俺の顔をビンタしたのは、彼の浴衣の袖だったらしい。

昨日の今日で、まさかあの男が懲りずお礼参りにでも来たのかと思つたが。今度こそ、尾形百之助だった。まあ、別にそれは何ら安心材料にはならないのが悲しい辺りだ。「どうしたの……」

何か知らんが眠いからとつと帰れ、とはなから突っぱねる訳にもいかず。浮かんできたあくびを奥歯で噛み殺しながら、無言のままの彼に水を向けてみる。

「……………」

だんまりか。何か言えよ。

まさか、北海道に行く前に「思い出作り」がしたかったとかそんな訳でもあるまいに。いや、普通の男が夜更けに布団へ忍び込んでやることなんてそれ以外ないのだけど、尾形百之助は普通じゃないから。

嫌な予感がさつそく実を結んだ。

わざわざ出立を告げてきたのは、布石だったのだろう。何かの。

思考のローディングでも終わったのか、尾形が伏せていた目を上げて、俺を見る。

「……花沢勇作は」

あーもうこの時点で『嫌』しかない。



なんで花沢勇作の話を俺に振る。昼間、どんな人だか教えろとか言っちゃったから？  
「父に愛された息子は……満ち足りた、高潔な人間だと思うか？」

おつと、しかもなんかさつそく究極の二択を突きつけられていないか？

Yes↓お前たちのような奴らがいて良いはずがないんだ

No↓俺と同じ人間なら父上に愛されるために邪魔だな

……ですからね、原作の理論で言おうと。つまりどつちに転んでも詰み。

あれ、もしかして勇作殿の命運、今の俺に懸かっちゃってる？ こんなクソ眠いのに。

「高潔な人間……」

近ごろ尾形語に慣れすぎて何も感じなくなっていたが、尾形の言う『高潔な人間』と  
いうのもそこそこ謎の概念である……眠い。

「……高潔な人間、とは？」

幸次郎、今思うと聞かされてた話だいたい尾形語しかなかったけど、本当に意味わ  
かっていたのかな。かわいそうになってきた。

高潔な人間。尾形が謔言のように繰り返す。

「……清いままでいようとする人間」

「……………」

高潔の敷居低すぎない？

ていうかお前、尾形語の説明に尾形語使うのやめろ。パルスのファルシのルシがパージでコクーンかよ。

まあ……うん、でも、尾形の周りにいた清いままдейようとする人間、マジでアシ×パと勇作くらいしかいなかったね。他はどいつもこいつも人殺しに抵抗ないし。

「……………わからない……………」

眠すぎて目が開かなくなってきた。

ただ、俺が明らかに寝落ちかけていることに関する尾形からのコメントは特にないうだ。寝てしまっても構わないと思っっているのか、指摘する余裕がないだけか。

「わからない?」

「最初の、問い」

だめだ、あくび出る。ぎりぎり手で覆えたが、かなりデカめのが来た。

「ふわ、……………俺が答えることが、今後のお前のためになるとは思えないし……………」

明確な回答を、放棄しよう。

尾形の土俵に乗って、まだ見ぬ勇作を評価すること自体が間違っている。そう考えられない。そもそもが尾形流の問いにどんな根拠を与えてやってもしょうがない。

「花沢勇作は、尾形百之助のために生きている訳ではないから」

今の俺が出せる答え。

尾形は勇作の存在を『もう一人のボク』的なニュアンスで捉えていたのだと思うが、まずそれが間違いのものだったのだろう。

「勇作の道はお前の問いのためにある訳でも、……証明のためにある訳でも、ない」  
勇作は、ひとりの弟として。尾形のことを、ひとりの兄として愛していたのに。

「花沢勇作はお前じゃない」

だから、理解できなくてもいい。

その魂も、心も——愛も。

だけど、否定しないでくれ。花沢勇作はただ、息子として、弟として、将校として、精いっぱい自分を生きていただけなのだから。

皆に求められた偶像であろうとした、ただの青年だった。

「彼を見て……お前が何か思うことがあるとすれば……それはお前の問題なんだよ……」

すみません勇作殿、こんな状況でなければもつとまともな話ができたかもしれないが。尾形のせいとはいえ、よりによつて半分寝てる時の俺なんかはその命運を託す結果になつてしまい、本当に申し訳ない。

……というか、尾形の人生で祝福チャレンジやつてる今の俺が言つてもクソブーメラ  
ンだよな。やめてくれ、その技は俺に効く。

「いいだろ、弟……悪くないもんだ……俺にも似たようなのがいるからわかる、」

兄であると受け入れることも、弟として愛することも叶わなかった。でも、決して悪いものじゃないはずだったんだ、それらは。

ああ、勇作殿。

会って見たかったかもしれない。きつと、203高地を生き延びても難しいだろうけれど。

「……………」

尾形はまた黙っている。

もう寝ていい？

「……………もうひとつ、聞きたいことがあった」

「……………」

「……………」

えまだあるのお、みたいな顔をしてしまった自覚はある。もうダメ、眠くて。ぶん殴ってないだけ我慢しているほうなんだ。

ただ、それでめげる尾形ではないらしく。何でもないように続けてくる。

「今朝、なぜ俺を止めた？」

え？ 今さらその話？

「ずっと考えていた。……口ではどう言っても、お前も俺と同じように、人を殺しても罪悪感などない存在なのではないか？ お前が言った通り、両親の愛がないお前は全てが欠落した人間なのではないか、」

同じようにつて、お前が殺してるのは他ならぬこの俺なんだけど。いい加減にしろ。さっきの会話が一切活かされてない質問来ちゃったな。

「どちらにせよ、お前が人を殺せばわかることだと……でも、そんなことそうそうある訳もない。だから、諦めていた。だが——機会は訪れた」

今朝のことを言っているのか。

……いや、なんかデジャヴ。これ樺太でアシ×パが言われてたやつじゃないか？

「……あの時……お前が俺を見過ごすことに期待していた……」

そこで、掛け布団の奥の暗がりでは何か煌めいた気がした。薄い生地越しに、それが腰の辺りに触れる。何か妙に冷た——いやこいつ抜き身の包丁持つてるんデスケドー。見えなくなかったよ。勘弁してくれマジで。

寝所に持ち込むな、出刃包丁を！

なに、何……なの？ どういう心境？

まさかここで、アシ×パや勇作にした殺ハラ（※殺害ハラスメントの略。戦場などにおいて尾形から殺人を強要されること。断ると逆に殺される）かます気か？

もしかして部屋の隅とかに『そこで、今朝の男を縛ったものがこちらになります』とかが既にご用意してあったりする？

慌てて視線をやったが、とりあえずそれらしきものはなかった。この時代の尾形はそこまでキマっていなかったようだ。いや、別にやってたとしても全く驚きはないけどね。

閑話休題。

「——でも、お前は俺を止めた」

あ、まずい、しかもなんかまたよくわからんうちに地雷を踏んでいた気配を感じる。

危険が危ない雰囲気の前で二の句が継げない俺を置き去りに、尾形はいつそ暢気な仕事で坊主頭を搔いてみせる。

「……まいったな……俺が男だからわからないのか？ 女というのは、自分を陵辱しようとした男を殺したいくらい憎むものじゃないのか？ それは道理足り得ないのか？」  
物騒な独り言。そんなこと言ったら俺も別に女じゃないからねえ。

「やはり俺がおかしいのか？」

それは否定しないぜ。

……ヤバい、何か答えないとだろう。こういう時の尾形って、放つとくと最悪の自己完結しがちだからな。

「……………殺すなんて取り返しのつかないこと、そう簡単に決められるものじゃない」  
一般論で茶を濁すしかないか。

別に……………殺してもよかつたけど後処理がめんどいし、尾形の教育にも悪いし……………なんて本音は間違いない口に出してはいけない。

「よく知りもしない人間だ。それだけで殺そうとまでは思えない、……………思う意味がない」  
嫌なことをされたら何でもかんでも殺人に繋げる人間、いないとは言わないが、間違いない異常者だからな。

それに、俺は別にあれに対する怒りがある訳じゃないし。犯罪行為なのは前提として、行動原理は理解できるし、結局は何もされなかつたのだから、恨みようもない。要するにどうでもいい人間、

「つまり——どうでもいい人間だったからだ、と?」

見抜かれてんぞえ。

うーん、バッドコミュニケーション!

「……………そうでないなら恨んだのか? お前にとって手を汚す価値のある男ならば」

俺に尋ねるといふよりは、自らに確かめているような雰囲気の出た。虚空を見つめる尾形が首を傾げる。

「今——俺がお前を手籠めにしたら、」

おもむろに、するりと袷目から入り込んでくる指先。長襦袢を着ていないので、素肌に直接その温度を感じる。冷たい手だ、と思った。

あいつの手は熱いくらいだったのに。案の定、男として昂っている訳ではないらしい。

尾形がぐつと顔を寄せてくる。

「お前は俺を憎んで、殺すのか？」

……結局、主体はそこか。

拍子抜けはしなかった。最初からわかっていたことだった。

「……出来もしないことを言うのはよせ」

鎖骨を覆うだけの中途半端な位置で止まった手に、自らのそれをゆっくり重ねる。なぜか小さく跳ねる体。手箒めにするというなら乳くらい揉んでみせろ。何だこの手は。

……尾形に俺を犯す度胸があるとは、とてもじゃないが思えなかった。遊廓だつて行き慣れてるふりだったろ。

それに。

昼間のことを思い返す。男に向けられた、尾形の刺すような眼差し。

「俺のことが大切なくせに」

——実際、俺が未婚の娘として致命的なステイグマを刻みつけられ、その結果として



人間を殺すところを見たかったのならば。

あの時あのまま、事が済むまで放っておけば良かったのだ。

尾形のそれはブラフでも、あの男は本気だったのだから。終わった後にさもたつた今やつて来ました、という顔をして現れ、慰めついでに銃でも渡しておけば、それでお膳立ては揃う。それだけで良かったのに。

殺す価値もない、というのは結局のところ未遂で済んだ俺の所感であり、実際にレイプされていたらまた違う感想を抱いていたかもしれない。俺は別に前世でも性被害なんか受けたことはないし、それが実際、心身にどんな影響を及ぼすのかなんて想像もつかない。

もしかしたら、去勢を肯定するだけでは飽き足らず。

あの男を自分の手で殺してやりたい、と思った——のかもしれない。

でも、尾形は怒ってしまった。

「……………」

自らの検証を自分自身の手で台無しにした。

その自覚があるのかないのか、尾形は虚を衝かれた表情で黙り込んでいる。

「大切……？　俺が……？」

呆然。その一言が似合う漂白された雰囲気、自然と体に力が入る。昔から、こいつ

の意表を突いたことを言うとは大抵口クな目に遭わないからな。

視線が泳ぐ。何かを探し求めるように、落ち着きなく、振り子のごとく左右に揺れていたそれが、ぴたりと。前触れなく止まった。

「……………アあ、そうか」

妙に据わった声音に、鳥肌。

いや、何か危ない予感——

「大切なものを壊して何も感じなければそれこそが俺に罪悪感など存在しないことの証明になる」

は？ おい、

「う、——っ」

尾形がひと息にそれだけを言って。

それを聞いた俺が嫌な話の転び方に身構えるより早く。

彼の手によって、俺の下腹部に埋め込まれる出刃包丁の切っ先。そのまま、力任せに押し込まれる。

許容範囲外の、“死”に直結するストロングな苦痛に、一瞬意識が飛びかけた。

おいおい入れるものが違うだろ——って馬鹿。

下ネタ言ってる場合じゃない。

マジで、なんなの、こいつ？

「あ……ガッ」

脇腹に近い位置に刺さったそれが。尾形の手によってご丁寧にも真一文字の軌道を描いてから、引き抜かれる。殺意しかない。絶対にこの場で殺すという強い意志を感じる。

内臓が無事ぐちゃぐちゃになったおかげで、死期は確実に早まった。視界がみるみるぼやけていくのがわかる。

おい、道理はどうした、道理は。普通にこれ逆上して刺しただけだよな？

「……憎いか？ 俺が」

声が、微かに震えている。

——尾形は、俺にどうなってほしいのだろう。 “大切” であるはずの俺を殺して、自分も苦しんで。一体、何が欲しいのだろう？

茫洋とした悲しさだけがそこにあった。

急速に体温が失われていく。布団に広がる血溜まりから、儂い生命の温もりを感じる。もはや今の俺には取り戻せないもの。溢れ出て、あとは冷えて固まるだけ。

死。今までで一番、明瞭にその足音を聞いている。ああ、もう時間がない。

「尾形——」

さつそく虫の息な俺の呟きに、尾形が真剣な表情で耳を寄せてくる。——呪われろ、とても言うと思つたか？

残念、はずれだ。

「——こんな真似はもうやめろ、」

彼が、暗がりの中で微かに目を睜つた。それが見えた。

最後の力を振り絞り、手を伸ばして、彼の頬を包み込む。血濡れた指が青ざめた肌に赤い3本線を描く。

「お前のことが……心配なんだ……」

黒目がちの瞳が静かに細められる。同じ血にまみれた手が、恐る恐るといったふうで上から重なつた。

温かい。熱いくらいだ。つい先ほどまで冷たく感じていた指だった。もう死ぬのだな、と他人事のように思つた。

尾形が俺を見ている。自らの興味を満たすように、瞬きさえせず、真つ直ぐに。

「……何故？」

薄れゆく意識の中、絞り出すような尾形の問い。ああ、これが「さよなら」の代わりなんて、本当に俺たちの関係はさんざんだ。

……否、「またね」の代わりなら、及第点くらいはもらえるかもしれない。

震える唇を、薄く開く。

「愛しているから」

——7年近く前のことを、今も昨日のことのように思い出せる。

目が覚めたら。

血まみれだったはずの布団も服も出刃包丁も跡形もなくて、代わりに尾形が使っていた布団一式が敷かれていて、俺はその中に横たわっていた。

けれど尾形百之助はもういなくて、置き手紙だけが残されていて、祖父母はてんやわんやで。何か知らないかと何度も聞かれたが、知らない、で突き通した。

それからずっと、待っていた。

時が満ちるのを。

「……………」

畑の脇に立って見上げる、薄紫色の雲がたなびく空は、あの時と何も変わらない。そ

こを渡っていく鴨たちも。

スリングで肩に掛けた小銃、その撃鉄を半分起こして、引き鉄の前にあるレバーを下げる。もう一度上げて、銃弾を装填する。最後に撃鉄を完全に上げきって、おしまい。

あとは、引き鉄を引くだけだ。

弾数は七発。帯の上から腰に吊るした弾薬入れが耳障りな音を立てる。

「よっよっ」

年季の入った銃身を、軽く撫でる。冷たく滑らかな感触は、何となく彼の肌を思い出す。

——尾形百之助の、忘れ形見。

祖父のものだった小銃。まともに撃てるようになるまで、色々大変だった。

何せ祖父は女に銃など教えてくれないし、かつての尾形もそうであったから、現代日本人の俺は全くの独学で銃の撃ち方を覚えなければならなかったのだ。

この銃とにかく不発が多く、扱いを誤って手指を吹き飛ばしたこともある。ひどい火傷を負ったことも、一度や二度ではない。その度に俺は俺を「リセット」せざるを得なかった訳だが、そんな辺りも尾形に似ている。

まあ、そんな思い出話はいいのだ。

いざ狙撃、と構えたところで、

「タマ、」

背後からの声に、意識が引き戻される。あれからさらに歳を取った祖母の声だった。

「……………」

用件は1から10までわかっている。飽きるほど繰り返されてきたやり取りだ。もはや振り返って確かめるまでもない。

「……………また縁談ですか？」

ははっ、と吐く息とともに笑う。同じ笑い方の誰かさんを脳裏に浮かべながら。

祖母が小さく唸る。

「齡26にもなる嫁き遅れでも、意外と有り難いお話は来るものすなあ」

——縁談。

尾形がいなくなり、当初は祖父母も慌てていたものの。1ヶ月も経つ頃には、これ幸いとばかりに見合いの場を設けてくるようになっていた。思ったより早かった。

……というか、尾形の存在が疎ましかったのだろう。年頃の娘とべつたりな、血の繋がらない個性的な美形。しかも銃持つてる。相手の男が尻込みしてもおかしくはない。

だから遠慮していたけれど、その必要がなくなった。……それにしても、24くらいになれば落ち着くと思っていたんだけどなあ？

「……………ふう」

一旦銃を下ろして。わざとらしく、背後の彼女にちらつかせる。

「……それで？ お相手の殿方は、冬場は毎日銃を持ち出して鳥を撃つ女を御所望で？」

世は明治。女は家に入り、子を産み育てることだけを求められた封建の時代。

銃の扱いに長けた青年は軍人としての将来を期待されるが、生娘ならばただの異常者だ。

言うまでもなく見合い市場では明らかな減点要素なので、大体の男はエイリアンを見るような目をしてくるのが面白い。加えて尾形の話をしておけばパーフェクトだ。

俺は明治の女ではないので、当時の価値観で周囲に気狂い扱いされようが痛くも痒くもないのであった。どつとはらい。

「タマ……おめんこど、あずつてんだあ」

心配なのだ。……尾形にそう囁いたことを、朦朧と思いつく。

「たのむど、おれらんこど、あんきさしてくれっけ？」

祖父母が俺に抱く感情と、俺が尾形に抱く感情はよく似ている。だからこそ、思うところがない訳ではない。

けれど、

「ばさま、そうだご言つてもしやあんめ」

「っ、」



覚えたけれど、ついで使うことはなかった茨城弁。ぼつりと呟くと、祖母が息を呑んだのがわかった。

「……そうですね。おばあ様の不安ご尤も。捨て子の分際で育ての親さえ不幸にするこの身の非情さ、我が事ながらお詫びの言葉も御座いません」

尾形が毒を盛らなくても、娘は行方不明、その子は黙って家を出ていき、ただ一人残された養女も嫁ぎにも行かず獺の真似事に精を出しているようでは、彼らの不幸具合は原作と大差ないのではないか。

そんなことを考えながら、遙か頭上を行く鴨の群れを見上げる。

——でも、俺はこの養父母を祝福するためここまでやってきた訳ではないのだ。

木枯らしにはためく前髪を、そつと後頭部に撫でつける。ゆっくり振り返り、作った微笑みを彼女へ向ける。

「でも私、やるべきことがありますので」

タアン——いつもどこか遠くに感じていた銃声を、すぐそばで聞く。

空を渡る鳥影は、ひとつ減ってみつつ。また今日も鴨鍋だ。尾形がいなくなっても結

局、冬はそれ以外を食べていない。

まあとにかく、本日も命中。

「……うん。今日も絶好調」

レバーを握って、排莢する。——あぶね、この空莢莢がまた熱いんだよな。

「1907年2月」

全ての始まり。

そこで、俺は俺の19年間が無駄ではなかったことを証明しなければならない。

長い長い下準備も、これでようやく終わり。さあ、実証の時間だ。

「待ってる、尾形百之助」

北の方角を見つめる。

自然と笑みが浮かんだ。

「俺がお前を祝福してやる」

1907年

## 7話　うちのヒヤク知りませんか？

「寒い」

——背後から聞こえた、蚊の鳴くような眩きに、思わず歩みが止まった。

若い女の声だった。

聞き覚えのある。

「……………」

一瞬止めた足を、再び進める。さくさくと、軍靴で積雪を踏みしだく音が木立に響く。

「二面、真つ白だ」

……声が、気配が、ついてくる。

けれど、聞こえる足音はひとつだけ。聞こえないふりで歩みを早める。白い吐息が純白の世界に広がる。

その瞬間、

「っ、」

深い黒鳶色をした、癖のない長髪が視界の端を流れていった。——追い抜かれた。

「気づいてぎよっとしたが。『それ』は至って平然とした様子で、こちらの前に立ちただかるようにして、鉛色の空を仰いでいる。息ひとつ、髪のひとつ房も乱れていない、完成し尽くされた立ち姿。

「茨城はあまり雪が降らないから良かった」

華奢な体だ。朦朧と思う。ほっそりとした手足に透き通る肌の白さが相まって、実に儂げな印象を受ける。まるで硝子細工が人間の形をしているかのようだ。

けれどその背には、繊細な容姿に似つかわしくない物騒な火器がごく自然に担がれている。

——スペンサーM1860。

初めて手にした銃の名前を、陸軍に入隊してようやく知った。

そう。この小銃はもともと祖父の物で、それを自分が持ち出したただけだ。記憶の中で銃と『それ』がどうしても結びつかない。撃っているところを見たことがあつただろうか。思い出せない。

しばらく考えて、実家に残した唯一の痕跡だからだ、と思うようにしていた。入隊する際に私物はあらかた処分したが、この銃だけは捨てられなかった。

——常にそうであつたように惜しんだり、悲しんでいるような様子はなかつたけれど。

あれから、いなくなったきり便りも返さない男を想って、あのスペンサーM1860を撃つてみたりもしたのだろうか。

「……尾形、」

“それ”は、無言でこちらを眺めていたようだったが。不意に呼びかけられて、少しどきりとする。

——意識を向けすぎたか。

「チツ……」

心を開いてはいけない。存在を認識してはいけない。話を聞いてはいけない。——でない、取り込まれる。

明らかにこの世のものではないのだから。寒さには慣れたはずの体に、悪寒のようなものが走る。

“それ”が視え始めたのは、いつ頃だっただろうか。少なくとも、第七師団に入ってからだったように思う。

最初は、視界の端に映る程度だった。軍服姿の坊主ばかりの兵営で、戦場で、若い女の姿が目立つ。けれども、最初は見間違いだと思った。思おうとしたのだ。

それが今は、こんな近くに。

「……………」

うつむいたまま、*“それ”*の脇を通り抜ける。目を合わせないように。目指す場所は、もう少し先だった。

吐く息が白い。——この辺りでいい。銃剣を鞘から抜いて、手頃な木の幹へ突き刺す。

——死んだのか？

……何故そう思う？

定期的に届いていた手紙はいつの間にか送られてこなくなっていた。昨日の晩、全て燃やそうとして、できなかつた。結局、数枚の便箋は小さく折り畳まれて軍服のポケットに入っている。

そうだ、手紙がぱったり止んで。その辺りからはつきり見えるようになったのだ。だから、こんな馬鹿げたことを。

鴨鍋を作る華奢な後ろ姿が、あんこう鍋を作る母のそれと重なって、ぐちゃぐちゃになる。愛した男の好んだ料理を作り続ける女。それで、最後には。

脳裏で、細い何かが不規則に揺れている。足だった。白い両足が、ぶらぶらと、

——いや、あいつが死ぬ訳がない、

だって、あの女は。

畳の上で握った手の温度を、着物の膝に染み込む血の匂いを、布団に散らばる髪の毛の香

りを、今も思い出せる。——ああ、

「尾形」

また呼ばれる。

お前も尾形だろう、と愉快な気持ちになることはできなかつた。

そんな呼び方をされたことが今までにあつたか？ 明らかに不自然だ。ほんの小さい時分から共にいた者を、「尾形」などとそつけなく呼びつけるものだろうか？

そもそもだ、自身も同じ苗字であるはずなのに。事実、思い出せる限りでは「百之助」と呼ばれていた。そのはずだ。

尾形——妙に突き放すような、一歩引いてその様を眺めているような、いやに達観した響きが込められている。そんな気がするだけでもかもしれない。

「俺のこと無視するなよ、」

淡々と、荒っぽい喋り方。

これには身に覚えがある。幼い頃は大体いつもこんなふうで、昔は女というものは成長してから「なる」ものだと思っていた。実際、大きくなつてからは、田舎の小娘なりに淑女らしい振る舞いを見せたりもしていたのだ。

軍に入つて、大抵の少女はそうではない、ということを姉妹のいる同胞から聞いて、少し驚いたものだ。

——……今となつてはどうでもいい、  
内心で独り言ちる。

もう、「本物」に会う機会などないのだ。二度と帰らないと決めた以上、かつてのあれも、これも、確かめる術を失つた。だから、思い出す必要もない——はず、

「……………」

銃剣を支えに小銃を構える。表尺越しに、360メートル先の標的を見やる。

特徴的な刺青をした上裸の男——と、焚き火を挟んでその背を眺める軍服の男、アイヌの少女。

刺青の頭に照準を合わせ、引き鉄を、

「殺すのか？」

「ッ、」

顔のすぐ近くで声がした。

気配を感じる。覗き込まれている。鳥肌が立つ。やめろ。声を聞くな、目を合わせるな、

「……………悪霊め、」

そうだ。悪霊なのだ。

俺を取り殺そうとしている、



「尾形」

どこかで聞いたような声音に、冷たい脂汗がこめかみに滲んだ。やかましい、黙れ。白い指が、頬を撫でる。

ぬるついた感触。鉄の匂い。……これは、血？ あの時腹に突き立てた、いや違う、錯覚だ、こんなものは有り得ない！

何もかもが悪い夢で、幻、

「お前のことが心配なんだ」

——は。呼吸が、止まった気がした。

確かに、聞いた覚えのある囁きだった。

……何故？

“それ”はただ、黙って微笑んでいる。その気配がする。脂汗が、頬を伝って落ちた。

ああ。

「……………タマ、……………」

絞り出すように呟いたその名は——三十年式歩兵銃の鈍い銃声に掻き消されて、彼自身にさえ届かなかった。

「……………ん……………」

——何だか、妙な夢を見ていた気がする。

「……………？？」

夢の内容に気を取られたせいとか、今まで自分がどこで、何をしていたのかを一瞬思い出せなかった。ああ、頭がぼんやりする。

ええと、俺は確か、茨城から北海道まで渡ってきて——小樽までは来たのだったか。それで、小樽の森の中で……………中で？

「あつ！ 目を覚ましたぞ、杉二元！」

……………スギモト？

澆刺とした少女の声で紡がれた覚えのある名前に、思わず瞼を持ち上げる。

間近で、声の主と目が合った。透き通った綺麗な瞳が瞬く。緑が僅かに散った、深い青の虹彩。あれ、これ、どこかで見たような、

「……………あ、？？」

艶やかな黒髪を覆う、複雑な紋様が描かれたマタンブ<sup>㊦</sup>。豊かな白い耳たぶで揺れる銀の耳輪。父から受け継いだテトラペ。

伝統的なアイヌの衣装に身を包んだその少女の名を、俺は聞くまでもなく覚えていた。

「…………え、茨城からひとりで？」

腕からくゆる湯気の向こうで、顔に大きな傷跡のある男が小さく目を瞠った。

雪に埋もれて行き倒れていた俺を見つけた少女の代わりに、その身をわざわざ掘り出してコタンまで運んでくれたという彼もまた、俺は名前を知っている。その来歴も、今から待ち受ける未来さえ。

——杉元佐一。不死身の杉元。

軍人でもない女単独の遭難者とあつて、今は警戒している様子はないが、敵に回したくはない人間の1人だろう。

でもまさか、小樽に来て早々に出会えるなんて。——そう。俺は北海道に来てまず、この2人を探していたのだ。

尾形は第七師団所属だが、脱走兵になることを考えると師団は頼れない。すると、多少手間はかかるが、一度は仲間になるアシ×パ。杉元經由で接触を試みたほうがいい。

いや、他にも色々とパターンは考えられるが、これが一番平和かなって……

「うん。……この鍋おいしい」

「鹿肉で作ったユ×オハウだ。元気が出るようプクサとプクサキナも入れた。たくさん食べる」

「ありがとう」

俺の隣でニコニコしているのは、言うまでもなくアシ×パ。こちらも警戒心ゼロ。若い女が一人で銃担いでるのに。

まあ、とりあえず出された食事は有り難くいただいておく。鹿肉かあ。前世ではジビエ趣味などなかったので初めて食べる気もするが、普通に牛肉っぽい感じ。ヒンナです。

「……茨城なんてあんまり雪も降らないだろうに、怖くなかったのか？」

杉元が、また控えめに口を挟んでくる。ちよつと待て、肉噛みきれない。

「確かに……この時期にひとりで山に入るなんて、無茶苦茶なシサ×だ」

「関東から女の人が単身でこっちまで渡って来られてる時点ですごいけどな……」

鹿肉の筋に苦戦している間に、2人はどんどん話を進めてしまう。最終的に半ば無理

矢理飲み込んで、

「ん、……銃がある」

「そういう問題でもないぞ。……雪に埋もれて動けなくなっていたし。たまたま私たちが見つけたから良かったものの」

「……………」

汗を啜りながら思う。

——たぶん、既に「良くなかった」のだろう。山中を当て所なく歩いていたら急に吹雪いてきたのは思い出せたが、そこからの記憶がない。きつと、また死んだ。

でも、息を吹き返したタイミングでたまたま2人に発見された。不幸中の幸いだ。

死体がヒグマに食われなくてヨカッター。

「……何か、事情があるんだろう？」

うむ。聞かれてもないのに自分からべらべら喋るのもなー、と思つて最低限の情報だけを小出しにしていたのだが、普通にアシ×パに気を遣われてしまった。

「ここで会つたのも何かの縁だ。私たちに手伝えそうなことなら話してくれ。力になりたい」

良い人すぎる。

こんな、怪しくないところを探すほうが難しい和人の女に協力してくれるなんて。こ

れは高潔ポイント高いですよ。

うーん、ここまでされて変に濁すほうが怪しいよなあ。アシ□パはともかく杉元からは疑われたくないんだよなあ。

「……たぶん、手伝えるようなことはない。私にも明確な解決法がある訳じゃないから」  
一応、ワンクッションは入れておく。＼たぶん北海道にいる＼という情報だけを頼りに人探して北海道を彷徨い歩く女、明治時代というデバフを取り除いても狂人だからな。

アシ□パは眉を下げ、杉元は若干怪訝な顔をした。やべ、心臓に悪いのでやめろください。

「でも、命の恩人に隠すことでもないし、話しておくよ」

これは、半分本当。

何度でも生き返るからといって、行き倒れを拾って飯まで与えてくれた有り難みが薄れる訳ではない。アシ□パと杉元は重要なキャラクターであり、俺の恩人だ。恩人になつた。

「会いたい人がいる」

「……アイヌか？」

アシ□パが即座に問うてくる。

なぜアイヌ、と思ったが、この辺りは街中でも何でもなく、人間がいる場所といえればコタンくらいなもの。だから、和人ではなくそちらに用があると思ったのかもしれない。

なるほどなあと思いつつ、首を横に振る。

「いや。……軍人……少なくとも、その時期があつたはず。今もそうなのかは知らないけれど」

誤魔化しの利かない箇所なので素直に口にしてみたが、当然、杉元の雰囲気若干変わった。物腰柔らかな好青年から、帰還兵のそれへ。軍帽の下の瞳が鋭く尖る。

あつ、これキロランケの登場回で見たやつだ！

「……第七師団か」

ひー。

やべえマジで、勘弁してください。

……とはさすがに言えないので、ブルっちやっているのはおくびにも出さず、杉元の軍帽と、小銃を指差して尋ねる。

「その格好、あなたも軍の人？」

「いや……俺は満期除隊した」

その辺りは教えてくれるんだ。

いや、尾形にも教えていたか？

というか、この時点の杉元は既に「この状況で不死身の杉元は手に負えん、片腕だけに（激ウマギヤグ）な尾形を崖から突き落として顎をカチ割っているのだろうか。アシパのコタンにいるあたりその可能性は高い。

「あなたと同じくらい歳のだった。……だから、もう任期が明けていてもおかしくはないはずのだけど」

今も昔も陸軍のシステムについて特別詳しい訳ではないが、階級と任期くらいは知っていた。そして、公式で明記はされていないものの、尾形と杉元は大体同じくらいの年齢だったはずだ。

「日露戦での戦死公報は届かなかった。でもいくら手紙を送っても返信が来ない。今はどこで何をしているのやら」

これも……本当。

手紙書くつて言っちゃったしなあ、と何度か送ってみたものの、案の定返信なんか来やしない。そのうち飽きてやめた。

「……その……わざわざ北海道まで来るなんて、将来を誓い合った仲だったのか？」

軍人から置き去りにされた娘、というあたりで何か自分の来歴に重ねて思うところでもあったのか、杉元がやや雰囲気をもて尋ねてくる。うーん、当の尾形が聞いたら白



目を剥きそうなセリフ。

「フフ……そこまでしておきながら便りのひとつも寄越さない男なんて、放っておいて新しいのを見つけたほうがいいかも」

「……………フフッ」

おつと、杉元の顔が引き攣った。ジョークを効かせた返答のつもりが、数少ない彼の地雷（梅ちゃん）を踏み抜いてしまったようだ。これだからコミュニケーションはダメ。

「……………私が勝手に来たの。心配だから」

さりげなく話を元に戻す。

「除隊しても、ここで何かやりたいことがあるならそれでいいし。今も軍人なら、戦争が終わった今でも何かの弾みで死ぬようなことがあったとしてもおかしくはない」

「とにかく、今どうしているかだけでも知りたい。……私はもう、地元には戻らないつもりでここに来た。どちらにせよ、この地に骨を埋める覚悟がある」

ふん。杉元が小さく鼻を鳴らした。何か考え込むような素振りを見せてから、

「……………名前は？」

「尾形百之助」

「聞いたことはねえな」

まあ杉元、確か第一師団だよな。

別師団の一兵卒の名前なんぞいちいち覚えていないだろう。キロランケのことも知らなかったようだし。

あなたがちよつと前に片腕へし折って崖から突き落とした兵士（おそらく）ですよ、とはまさか言えないので、ちよつとしょんぼりした雰囲気を出して場を濁す。

「そう……ものすごく銃の扱いが上手い子だったから、きつと戦争でも活躍したはず」「ふうん……？」

ピンと来ていない様子。というか、まだ記憶を探ってくれているのか。顔と名前が一致していないだけですぐ近くにあるんだけどね。

「——そうだ、あんたは？」

ようやく一万人の兵士の中から尾形百之助を探すのを諦めてくれたらしい杉元が、おもむろに尋ねてくる。若干心を開いてくれたつぼいところでさらなる爆弾を落とすのは気が引けるが、やむを得ない。

「……タマ。尾形タマ」

いくらこの時代の女とはいえ、初対面で苗字まで名乗らないのはやや不自然だろう。

当然、杉元がわかりやすく目を瞞る。

「尾形？」

「養子だよ。しかも百之助の祖父母のほうの。血の繋がりはない」

一応、アピールしておく。

家族であるということは今後、良いほうにも悪いほうにも働き得る。

「あちらも私を姉や叔母と思つたことはないだろうね」

「……………」

「……………」

本当のことを言つただけなのだが、なんか微妙な空気になつてしまった。

というか、なんか普通に2人の尾形への好感度下がつてないか？ 参つたな、家族扱いされてなくて手紙も返してこない、今何してるかも教えてくれない、つて事実を言つただけなのに。

「…………タマは銃が上手いのか？」

沈黙を破つたのはアシ×パだった。妙に明るい声音で呼びかけられる。

「百之助ほどじゃないけれど」

「そうか、」

ふむ。小さく唸つてから、

「しばらくここにいい。今の時期、シサ×が1人でこの辺を歩き回るのはどちらにせよ危険だ。その代わり、その銃で私の……私たちの狩りを手伝つてくれ。フチには私から言つておくから」

びしつと俺を指差して、そう言い放った。建設的かつ、有り難い申し出に一も二もなく頷く。

「うん……働かざるもの食うべからずってことか。いいよ」

この2人と行動をともしにしていれば、自動的に尾形に会える。そういう打算がなくても、雪と寒さを凌げる場所を貸してもらえらというのは非常に嬉しい話だった。

明治2月の北海道、マジでありえんくらい寒い。こんなんヒートテック重ねた上にダウン着ないと生きていけない。でも明治にユニクロはない。本当に、寒いんです北海道。

俺の即決に、アシ×パはニコツと満足そうに微笑んで、小さな手を差し出してくる。これ杉元にやったやつじやん。俺なんかがしてもらっていいんです？

「私はアシ×パだ。こっちは杉元。汗物にうんこを入れて食う」

「なんで勝手に教えるのお？」

入れねーし、とふりふり怒る杉元を横目に、アシ×パの手をそつと握る。温い手だった。

「よろしく、アシ×パ……杉元、」

握りしめて、握り返されて。彼女の温もりが微かに残った右手を、杉元にも差し出してみる。彼は少し驚いたようだったが、

「……ああ。よろしく、タマさん」

やがて、無骨な手に力強く握りしめられた。ごつごつと骨張って、やはり温かい手。その熱を心地良く感じると同時に、……彼のことを思い出した。

——尾形。

あの時。最期に触れた彼の手はひどく温かく感じたけれど。……きつと、初めと変わらず冷たいままだったのだろう。

彼は今もこの寒い北海道で、冷え切った指で小銃の引き鉄を引いているのだろうか。そんな益体もないことを、少しだけ考えた。

## 8話 さよならだけが人生か

杉元に次ぐ形でアシ×バのコタンに身を寄せて、数日が経った。

今のところ、アシ×バのフチの話を聞いたり、2人と一緒に狩りに行ったり、のんびりとした日々を過ごしている。

「……どうしたの、アシ×バ」

で、何日かめの朝。

このチセには鏡がないので、小屋の隅の何も無い空間を見ながら身支度する俺——の様子を観察してくるアシ×バ。

あんまりまじまじ見つめてくるので、無視するのも逆にどうかと思い、声をかけると。「タマの髪飾り……耳みたいだな！」

「耳？」

俺の頭あたりを指差して言い放ってくる。

髪飾り——ちようど今、髪に結んでいたこのリボン？ 前世は男だし髪なんか短くてもいいのだが、この時代の女の短髪、異常に目立つからな。そもそも、束ねず短くして

はいけないみたいなの法律あつた気もする。

で、リボンの話か。

確か15歳になつた時、尾形がくれたものだったよな。本人は別に何も言っていなかったが、祖母は「大人の女になつたお祝いとして寄越したんだろう」とか何とか喜んでいたつね。

「あー、それ俺も思つてた!」

何が?

……えーと、要らぬ回想を挟んでしまったせいで話の流れがわからなくなった。

耳がどうか言つてたよな。

「……何の話?」

「リボンだよ、そのかわいリボン。黒い先っぽだけ頭から飛び出してるからそう見えるんだ」

わりと高い位置で結んで、先端を立てる形で整えてますからね。

これも最初にやつてくれた尾形の手つきを真似してるだけなのだが、ここまで織り込み済みだったのだろうか。俺は自分の容姿なんか興味ないから今まで気づかなかつたけど。

「猫ちゃんの耳みたい……フフツ」

しかも猫耳っぽくて可愛いとな。

平成生まれアキバ育ちの俺には慣れ親しんだアイテムだが、杉元にはやはり先見の明がある。……何にせよ、尾形プロデューズというところが微妙な気持ちになるなこれ。

「ねッおばあちゃん!」

「アー?」

「……………」

そんな話題フチに振ってもわからんだろ。

この空気なんとかしてよ、という意を込めてアシ×パを見たが、彼女はしたり顔で、

「タマはメコかぁ」

「メコ?」

「アイヌ語で猫のことだ。『寒さで死ぬるもの』という意味がある」

「もつとかわいい名前つけてあげてえ?」

ああ、俺が猫ちゃんすぎるせいで、樺太で披露されるはずのアイヌ語豆知識がこんなところで……俺が猫ちゃんすぎるせいで……

「名前……あ、でも、『タマ』って名前も猫ちゃんっぽくてカワイイ!」

「……………」

杉元の笑顔を尾形リスペクトスマイルで受け止める。こいつ、俺のただひとつの地雷



を悠々と踏み抜いてきやがったな。

「そうなのか？」

「うん……日本では猫の名づけとしてすごく一般的な名前なんだ」

畜生の名前を人間様につけるな。……でも明治時代の名付けって結構テキトーだよ  
ね。

「初めて会った時も寒さで死にそうだったし……なるほどなあ」

なぜかさらなるしたり顔のアシパ。迷探偵やめろ。

「……………」

……やりづれえ。

2人（＋1人）に好奇の目で見守られながら、止めていた手を再開してリボンを整え  
終える。一瞬、低い位置で結び直そうかとも思ったが、逆張りすぎるかと思つてやめた。

終わったよ、という目をアシパに向ける。輝く笑顔が返ってきた。

「……さ、タマも支度が終わったようだし。今日は何を獲ろうか！」

——こんな穏やかな生活がずっと続く、と心から信じていた訳じゃない。

アシ×パもそうだったろうし、これからの出来事を知っている俺なんかもつとそう  
だ。

……でも、それは思っていた以上に唐突だった。

「タマ、……タマ、起きろ」

体が揺れている。アシ×パの声がする。

ああ、もう朝か。それにしても、わざわざ俺を起こしに来るなんて、何か珍しい動物  
でもいたのだろうか。

瞼を開けて。

——彼女が、いつもの弾ける笑みではなく。暗く表情を曇らせていることに気づい  
て、即座に意識が覚醒した。

「……アシ×パ？」

とつさに呼びかける。アシ×パは何かを言いかけて——でも、口をつぐんでしまっ  
た。

「っ、……」

目を逸らして。……でも、決心したように再び口を開く。絞り出すように呟いたの

は、

「杉元がどこにもいない」

——杉元佐一が姿を消した。

まあ、これ自体は原作にもあつたイベントだけれど。……まさか、俺にも何も言わず出ていくとはね。アシ×パに倣ってわりと早寝だったのが災いしたか。

そもそも金塊云々についても何も教えていないから、部外者という認識だったのか。

アシ×パとフチ宅の居候扱い？

「杉元のやつ、許せん……黙って出ていくなんて」

今は、2人でコタン近辺の狩猟小屋を見て回っているところだ。今のところ全てがもぬけの殻、使われた形跡もない。

困惑と不安の賞味期限が切れたのか。アシ×パは今朝方の戸惑ったような態度から一転、ぶりぶり怒り続けている。

「勝手すぎるぞ。……私にも理由があるから一緒に行動していたんだ」

うーん、正論すぎて杉元を擁護する余地がない。いや、別にしなくていいのか？

「……まあ……杉元にも思うところが、」

「タマの話も聞いていたはずなのに」

え、俺？

「私だけじゃなく、お前まで黙って置いていつた。お前は身近な人間に“また”置いていかれた。しかも、その痛みを知っている男にだ。……私はそれが許せない」

予想外の発言で、言葉に詰まる。

——この子は、俺のためにも怒っていたのか。

「……アシ×パ……」

清廉、高潔、世界に愛された子。

さすが、あの尾形がジエネリック勇作として光を見出すだけはある。

「ありがとう、優しい子。私は大丈夫だから」

頭撫では……ちよつと馴れ馴れしいよな、尾形のなら躊躇なく撫でられるけど。

「杉元を探す方法を考えよう」

「……でも……どうしよう、街にいるならもう見つけるのは難しいかもしれない」

「……………」

俺がいてもその問題は解決しそうにない。それどころか女子どもも2人きりでは新たなトラブルを招きかねない、残念ながら。

でも俺からレタ×の話をする訳にも、と思っていたところに。アシ×パの呟き。

「……まさか、何か良くないことでも起こったのか?」「アシ×パ」

正面に回って、膝を折る。俺よりだいぶ背の低い彼女と、目を合わせる。不安げに揺れる碧眼。12歳の女の子の目だった。

「そういうことは考えてはいけない。どちらにせよ『探す』という目的に変わりはないのだから、嫌な予感じゃなく、楽しい未来を想像しよう。そうしないと、心の寿命が縮まってしまふよ」

特に彼女はこれからも色々ある。その問題解決そのものに、俺が役に立てるかはおはわからない。だから、気の持ちようくらいはアドバイスしてあげたい。

アシ×パが、ぐつと眉を寄せて唇を噛みしめた。

「……わかった。すまない、タマ……」

「気にしないで。あなたが心配なだけ、」

——その瞬間。

獣の遠吠えが、大気を震わせた。

背後からだった。いきなりのことでさすがに一瞬驚いたが、声の主を先んじて認めた

らしいアシ×パは顔を綻ばせる。

「……………レタ×！」

ようやくと主役のお出まらしい。

振り返る。切り立った崖に悠然と佇む、白銀の毛並みを持つオオカミ。それが、軽い足取りでこちらまで歩み寄ってくる。

おお、デカ。怖。実は動物つてあんまり得意じゃなかったりする。食うのは好き。

一歩引いたところで北海道版ジャングル・ブックみたいな戯れを見守る俺の前で、賢さSSのアシ×パは見事答えを弾き出してみせる。

「どうしてここに……………いや、そうか、お前の鼻を使えということか！」

さすがあ。

やや離れたところでぱちぱち拍手する俺を、怪訝そうに振り返ってくるアシ×パ。

「どうした、タマ。来ないのか」

「……………私が近づいて平気なの？」

初対面ですが。馴れ馴れしく接して食いちぎられたりしない？ 別に食いちぎられても大丈夫だけどな。

「大丈夫、レタ×はメコを食べない」

「猫ではないんだけど」

うーん、義弟を差し置いてすっかり猫ちゃん扱いされてしまっているな。すまん尾形。

「触っても平気だぞ」

「……では失礼して……」

撫でてもいいぞとばかりに突き出される頭部に、恐る恐る手のひらをうずめる。うわー、寒冷地の獣だけあつてとてももふもふ。

「レタ☒つて良い響きだね」

俺の記憶力は基本的に尾形周りの事象にしか働かせていないので、細々とした話の流れだとか、アイヌ語の意味なんかは失念しているものも多い。

まあ、27年経ってこれだけ覚えていられるのだから上出来だろう。もともとかなり物覚えは良かったほうだと思っていたけど。

「ありがとう。小さい雪だるまみたいだったからそう名づけたんだ。アイヌ語で『白い』という意味だ」

「白……」

白……え、シロ？ あつやべ、

その瞬間、俺の脳内は尻尾を振りながらへっへっ舌を出す柴犬の映像で占拠された。

シロ……シロか。ダメだ、レタ☒だとなんかものすごく格好いい雰囲気なのに、日本語に直すとその辺の軒先で繋がれてるワンちゃんのイメージしか浮かんでこない。

こんな綺麗で立派な白狼なのに……和名はシロ……あーもうおしまいです。

「……知りたくなかったな……」

「うん？」

アイヌでも何でもない女にも毛並みを触らせてくれるレタ☒の優しさを噛みしめながら、そう呟かずにはおられなかった。

……そしてまた観察されている。

背後のアシ☒パから。何さ。

「タマ」

「……なに？」

「……どうして私が杉元と一緒にいるのか、聞かないんだな」

「……………」

そういえば、というあたりだった。

何か意図や配慮があつて切り出さなかった訳ではない。確かに珍しい組み合わせなのかもしれないが、そもそも俺は全てを知っているから。ううん、逆に不自然だった？

「……話そうと思わなかったのは、言いたくないことだからだ。そう思ったことは口に



出さなくてもいい。あなたのことなんだから、あなたがそれを選んでいい」

とりあえず毒にも薬にもならないセリフで茶を濁す。知らなくても知ってはいるから、実際どつちでもいいし……？

「いや。タマは私たちに百之助のことを話してくれたから……私も、私たちの目的を話しておこうと思う」

今のは雀の涙ほどの良心が痛んだな。打算と偽りにまみれた人間で申し訳ない。

アシ×パは、覚悟を決めるように一度深く息を吐き出して。勢いづけて顔を上げる。

「私たちの目的……杉元はどこかに隠されたアイヌの金塊のありかを——私は、それのせいで命を落とした父の仇を討つために」

……かなり詳しく話してくれそうな予感がする。杉元不在で聞いて大丈夫なヤツ？

「金塊？」

「もつと言えば、そのありがが刻まれた刺青を上半身に持つ網走監獄の脱獄囚たちだ」

「刺青でありかを……」

「実物を見たことがある。全員分でひとつの暗号になるらしい」

実際に耳にしてなお思う、やはり酔っ払いの夢物語じみた話だ。刺青囚人たちが実際にいなければ、話の強度は徳川埋蔵金と大差なかっただろう。

「囚人たちに刺青を入れた男はまだ網走監獄で生きている。そいつが父を含めた7人の

アイヌを殺して、大量の砂金を奪った。父たちは金塊を別の隠し場所に移動している最中だったらしい」

アシ×パは、俺が本当にこんな話を信じると思っているのだろうか？

「こんな、野心も何もない、自分を捨てた男に未だ甘ったれているような田舎娘が。」

他人を信用するとかしないとか、よくわからないな。今まで経験がないから。

でも、彼女を嘘つばちだと非難するメリットはない。今はそれでいい。

「……、7人も殺して、まだ死刑執行されていない。金塊が見つかっていないから」

碧眼が睨られる。彼女が僅かにこちらへ身を乗り出した。アンサーとしてはこれでじゆうぶんだったようだ。

「見つければ存在価値のなくなったせいも死ぬ——それで仇討ちの代わりということか、アシ×パ？」

俺を真っ直ぐ見据えるアシ×パが、厳かに頷いてみせる。

まあこれ、俺が賢いとか聡いとかじゃなく杉元が言ったことのパクリなんで。俺が優れてるのは限られた分野の記憶力だけだ。

「だから杉元に協力している？ あいつはそんな大金が必要なのか？」

そこで、若干憂いを帯びた表情で俯いてしまう。あれ、まだ目的知らないんだっけ？  
「……何に使うのかまでは教えてくれなかったけど……」

「また会えたら聞き出すといい。お前にはその権利がある」

いやてか、尾形に言つてアシ×パに言わない理由なんなの？ 別にアシ×パのこと女の子として意識してる訳じゃないんでしょ？

「大丈夫。絶対に見つかる」

ダメ押しで、白い毛皮の上着に包まれた肩を軽く叩いてやる。うわつめちやくちや触り心地良い。レタ×の親のなんだっけ。

「……ああ、」

ようやくはつきりとした笑顔を見せてくれたアシ×パに、何となく胸を撫で下ろす。子どもがかわいそうなの無理だから。大人と獣はどうでもいいけど。

「あ、その前にストウで一発ぶん殴ってやらないとな！」

「……………」

わふっ。蚊帳の外だったレタ×が応じるように短く鳴く。それが一体何なのか、聞かずともわかつてしまった。

ストウ、乱用、ダメ絶対。

## 9話 戯画的ニアミス

「レタ×は目立つ。決行は夜だ」

アシ×パのその一言で、回収した杉元の（ではない）きつたねえ片つぽ靴下ちゃんを手がかりに、すっかり夜も更けた小樽の街へ下ることになった。

広い街中を彷徨って数分だか、数十分だか。すっかり手がかじかんできた頃、レタ×はようやくとある建物の前で足を止めた。

「……この中にいるのかな」

「でかしたぞ、ついに見つけたか」

まあ居るの白石なんですが。

どちらにせよ今後ともに彼の協力が必要不可欠なので、ここはスルー。

「よし、行けッ」

開けた窓からぬるんと中に入り込むレタ×と、アシ×パ。その後を慌てて追う。

入った民家らしきその建物の内部は……よくわからない、土間に直接囲炉裏（？）があつて、周囲を囲む框がやたら高く作られている。ちよつと見慣れない構造だった。

雪国特有のものなんだろうか？ 俺は前世も今世も関東暮らしの人間だから。

「うううっ」

炬端に寝そべる白石、その上に跨って牙を剥くレタ。なかなかシユールな絵面だ。暗がりの中でも居所がわかったのか、アシパがそこに向けて棍棒もといストウを振りかざす。

「え？ ……うわあああつ妖怪!?!」

——で、バキン。痛そー。

「痛だアッ」

「……暗すぎる、灯りをつける」

「灯り?」

「チノイエタツだ。樺の皮でできている」

こんな時にも豆知識。二股の木の棒、丸めた木の皮を懐から取り出したアシパが、火打ち石で器用に火を灯す。

俺は見えているんだけどね。兎にも角にも明るくなり、アシパはそこでようやく自分がんばん殴った男の顔をはつきり視認することになる。

「——杉元じゃない、」

柔らかい明かりに照らされる、打撃の痛みに悶える坊主頭。半纏寒くないのか？

「はあ!」

「お前は確か『脱糞王』の、」

「俺は『脱獄王』の白石由竹だ!」

いきなり謎の棒で殴られてもそこだけは譲れないらしい。それからようやくアシ×パを指差して、

「なんだおめえ……こないだのアイヌのガキじゃねえか——ああいだだだだッ」

「食べちゃダメ」

当然のようにかじられる。それを不貞腐れた顔で制止するアシ×パ。

「レタ×が匂いを間違うはずがない。杉元はどこにいる?」

「いる訳ねえだろ俺ひとりだ!」

「そんな……」

マジで一緒にいたら面白すぎたけど……とは真剣なアシ×パの前ではとても言えない。

「……おかしい。杉元の靴下のニオイをレタ×に憶えさせて追ってきたのに、なんで白石のところなんか……」

「靴下あ?」

アシ×パのぼやきに、白石が反応した。しばらく考え込んでいるふうだったが、いきなり手のひらを拳で打って、

「…………あつ、まさかあの時！」

「あの時？」

「二度、あいつと川に落つこちた時！ 服をいつペン脱いで乾かしたんだが……間違いねえ、その時に片方取り違えたんだ！」

「……………」

おぞましい事の顛末に、アシ<sup>△</sup>パがしわくちやのピカチュウみたいな顔になってしまった。まあでも、気持ちはわかる。

「気持ち悪いッ」

「汚ねえ」

「どおりでいつの間にか靴下が片方だけ新しくなって、……………」

暢気なぼやきが、不自然に途切れた。え、何？ 何となく辺りを見回していた視線を白石に戻す——目が合った。

「……………」

白石は惚けた顔でこちらを見つめている。なんだよ、どこかでお会いしたことありましたっけこの茶坊主……と思ったら、

「……………あ？」

シユバツと、目にも留まらぬ速さで俺の前までやってきて。ピシツと背筋を伸ばし。

真つ直ぐ手を差し出して、

「白石由竹です。独身で彼女はいません、付き合ったら一途で情熱的です！」

ああうん。

……もしかして今まで気づいてなかった？ 明かりなくても見えるからちよつと離れたところにいたしね。そして口説かれてる？

適齢期の女とあらば見境なしかよ。杉元は紳士だったんだな。いや、こいつがおかしいだけか。

「……あ、尾形タマですー」

「はい！」

何となく伸ばし返した手を、速攻で握りしめられる。うわ、汗ばんでて気持ち悪い。

「タマさん……確かに、あなたは珠のように美しい」

「うーん、祝福されてなくてもちちゃんと自立してそんな男はちよつと……」

「タマに変なこと言うな！」

「ギャーッ」

後頭部にストウの二撃目。痛そう。

「何なんだお前！」

「黙れ、気持ちが悪い」



「……アシッパ、この人誰？」

「こいつは一度捕まえた刺青囚人の一人。ウサギ用の罫にかかる間抜けだ」

「おい。お前こそ、こんな美人どこで捕まえてきたんだよっ」

うーむ、話が一向に進みそうもない。

というか、白石この後に一回逃げるんだよな。肝心な突入のタイミングはこの脱獄王が上手く図ってくれるから良いとして、そのくんだり時間の無駄だよな？ うん、無駄。

じゃあ、こうするか。

「……おい、白石由竹」

「ふあいつタマひゃんツ」

柔らかいほっぺたを片手で鷲掴みにして、きらきら輝くその目を覗き込む。

どうやら、こいつにとって俺の存在は好ましいものらしい。だったら利用しない手はないだろう。

「博打は好きか？」

にこつと微笑みかけてやる。あ、確かに若干ピーナッツバター臭するかも。

「……ふえ？」

間の抜けた顔で首を傾げた白石が、不思議そうに目を瞬いてみせた。

——あれから。

白石の協力の下、無事に杉元の奪取に成功した俺たちは、コタン近辺の仮小屋にて一番の被害者（獣？）たる馬の肉を煮た鍋を囲んでいた。

アシ×パにストウでぶん殴られて、俺もなぜか謝られて、オソマ（ではない）を通した仲直りが済んで。

これで一件落着——かと思いきや、なぜか杉元の表情は曇ったままだった。ここに来て何を憂いているのかと思っただが、

「……タマさん、あの……」

中身が減らない取り皿を握りしめたままの彼に、慎重に名指しされる。嫌な予感がした。

「——言わなきやならないことがある、」

……言わなきやならないこと？

何だ？ 身構えて次の言葉を待ったのに、杉元はなぜか俺からアシ×パに視線を移し

た。

「……アシ□パさん、最初に2人で捕まえた刺青囚人を覚えてるかい」

2番目の刺青囚人——確か名前は笠原勘次郎——それがどうした？ 何か重要なイベントがあつただろうか、と考えかけて。

最も大事な出来事を見落としていたことに気づく。間違いない、あれを殺したのは、

「ああ、……？ ああ……軍服の男に撃たれて死んでしまった、………つ、！」

シヨウ・タツカーが嫌いそうな勘のいいガキ筆頭であるところのアシ□パは、それだけで全てを理解ってしまったようだった。おもむろに目を睨り、杉元を見やる。

「まさか、」

「ああ」

アシ□パと杉元が頷き合い、そこでようやく視線が俺に戻ってくる。

……ああ。言いたいことは全てわかつている。忘れるはずもない。

「俺は顔を知らないから、おそらく……おそらくだが、俺たちを狙撃しようとして返り討ちにした第七師団の兵士……あの男が、多分タマさんが探している『尾形百之助』だった」

おそらくではない。『そう』なのだ。

さて——これ、どうしたものか。

とりあえず、杉元が一通り話し終わるのを待ったほうがいいな。

「……………」

「…………エ？ なに？」

この件に関しては100%部外者の白石が、間の抜けた顔を突っ込んでくる。ちよつと黙つててくれ。杉元に続きを促す。

「…………どうして？」

「鶴見中尉が言つていた。川岸で瀕死の部下が見つかつて、その男は『ふじみ』と指で文字を書いた。名前は尾形、尾形上等兵…………」

——ああ。ここで、繋がってきたのか。

そういうえば、そうだったかもしれない。原作の杉元は当然、軽く流したはずだ。だから俺もあまり意識していなかった。

「鶴見中尉は結局、そいつの生死については口にしなかった。少なくとも、崖から転げ落ちたというだけでは死ななかつたようだが…………」

死んでいるかもしれない。

湯気に溶けた語尾はそう語っていた。実際、杉元は殺すつもりで小銃をぶち当てて突き落としだのだろう。死んだ、と思つたはずだ。彼だけではなくアシ<sup>△</sup>パも。

茨城からわざわざ探しに来たという身内を、既に殺めてしまつていたかもしれない。

どんな感情なのだろう。

……でも、それは今の俺にはどうでもいい。  
生きているはずだ。

そして、軍病院を逃げ出す。

記憶から導き出された解という以上に、確信めいたものが胸の裡で揺れていた。

「……やっぱり間違っていないかった」

唇をなぞる。何度も、執拗に。

眩きに、杉元が伏せていた顔を上げた。

「……………え、？」

「正面から行っても会えないんじゃないかと何となく思っていたんだ。案の定、大つぴらには言えない危険なことに首を突っ込んでいた……むしろ、これは僥倖なのだと思う」

僥倖。

隣のアシ☒パが、呆然と繰り返した。それにしつかり頷き返す。

「ああ。ここで手を引いても、何もわからないままだし。杉元たちに金塊を巡って第七師団と争うなど言う権利もない。だったら、私はあなたたちに協力し続けるほうを選ぶ。それが唯一の手掛かりだと思うから」

淡々と、脳内のカンペを読み上げる。

今は、ある程度筋の通った理屈を捻り出して、杉元とアシキを納得させることが最優先事項。こんなところで立ち止まっては行られないのだ。何とか同伴の継続を飲み込ませないと。

「い——いやいや、良いのかよ、そのヒャクノスケとやらが敵になつても……」

そこで、黙っていた白石が身を乗り出してきた。うーん、常識人枠。

「既に事態は取り返しのつかないところまで回り始めている。私がそこから目を逸らすことで、百之助を取り巻く状況が好転する訳もない」

「いや、」

これは事実だろう、と思ったのだが、白石の顔が引き攣つた。何故。

「私」が「俺」であることは関係なく、この時点の「尾形タマ」にはもはや「尾形百之助の死を直視するか否か」という選択肢しか残されていないはずだ。一介の田舎娘に根本的な解決方法などある訳がないのだから。

手について、上半身を捻る。

飴玉のような白石由竹の瞳を覗き込む。頭皮はどうも甘いらしいが、目玉も舐めたら甘いのだろうか？

「——私の目の前で死ぬか、私の与り知らぬところで死ぬか。もはや、その違いしかない

と思わないか？」

ごくん。白石の喉が上下する。

しばらく見つめ合って。さらなる反駁はないようなので、身を引いて元の位置に戻った。

すると、それでようやく口を開いたかと思えば、

「……………肝が据わってるを通り越して、実におつかねえ別嬪さんだなオイ…………」

肖像画一枚で全国津々浦々の監獄に収監されていた男には言われたくないな、と思った。俺は囚人生活なんか御免だ。

「最初からある程度の覚悟はしていた。そのための銃だ」

ライフルの銃身を撫でる。…………もう、弾が残り少ない。

道中に覗いた店に、これに合う弾薬は売っていなかった。女の鉄砲撃ちにも優しかった男店主は、払い下げの軍用銃を勧めてくれたが、何となく買う気にはなれなかった。

尾形と会えたら調達しよう。

それで、撃ち方を教えてもらおう。

それまでに間に合うだろうか。ぼんやり考える。

「まあ…………とにかく。襲ってきた見知らぬ男を撃退しただけのことを今さら悔いてもしょうがないだろ。アシ箱バと杉元が無事で良かった」

「……………」

無理矢理、話題を終わらせて。それきり、無言が流れる。杉元も白石も、何か言おうとして、躊躇っているようだった。

結局、口火を切ったのは、

「…………タマ。お前が知っている百之助は、どんな男だったんだ？」

少女の声に優しく問われて、何となく息が詰まった。

——どんな男？ とんだクソガキだ。俺を何度も殺した。屁理屈ばかりで、本当のことなんか何ひとつ口にできない臆病なひねくれ者。

今も俺のことなんかどうとも思っちゃいないはずだ。

…………でも。それでも、

「…………真面目で、優しい子だよ」

ずっと前に、そう囁いたことを思い出していた。祈りと、事実。目を伏せる。

アシ<sup>×</sup>パがそつと肩を寄せてくる。目線を落とした膝に乗せられる、

「百之助に会えたら、このストウでぶん殴ってやれ」

小さな手が、慎重に肩を撫でてくる。

励ましてくれてるんだな。

そう思った。優しい。優しい、光だ。今の俺には眩しすぎて、よく見えない。俯いた



まま、ただ頷いた。

「……………うん」

ただし、ストウの乱用は決して許されていない。

## 10話 怖い女

どうも、小樽の山中からこんばんは。

俺は今、仮小屋の中で白石由竹から刺青囚人の話を聞いています。with（泥酔した）アシ×パ杉元。俺はザルなので酔わない。

「めっぼう腕の立つ獵師で、毛皮商人たちからは畏怖の念を込めてこう言われていた……冬眠中の罫もうなされる——悪夢の熊撃ち、二瓶鉄造」

——二瓶鉄造。

予想通り、ファーストエンカウンターはこいつになるらしい。

というか、昼間に杉元たちとちらっと見たんだよな。マジで齒車みたいな頭してたなって感じ。

「……二瓶鉄造、」

その時。トドマツの葉で組んだ仮小屋の屋根をセルフで突き破ったままのアシ×パが、何かを言った。

「その名前、聞いたことがある」

「アシ×パさんなんか言った？」

「昔、獵師を殺して獲物を奪う悪い奴らがいた」

「だから聞こえねーって……んもお」

杉元が席を立ち、クソコラみたいになっているアシ×パを回収しに行く。

「私と父が熊を撃つた時も、そいつらに狙われたことがある……」

——無事に屋根から収穫されたアシ×パは、鹿のチタタ×？を頬張りながら、二瓶鉄造が網走に収監されるきつかけとなった出来事を話してくれた。

「……とんでもない男だな、」

話を聞き終えた杉元は、まず苦々しい顔でそう呟いて。それから何かを思案するような顔つきになり、

「その二瓶ってのはどんなやつなんだ？ 容姿は？」

「毛皮商が数週間前に見た時は、茶色のアイヌ犬を連れていて、18年式の単発銃を持っていた。俺が知ってる限りじゃ、髪は白髪混じりで初老の男さ」

「……」

白石の発言に、杉元は目を瞪り。まずアシ×パを見て、次に俺を見た。

昼間、杉元が仕留め損なってレタ×が喉笛を噛み切った鹿の残骸。それを眺めていた男二人組。その片方の特徴そのものだった。

「……昼間見た男かも」

「ああ……兵士の装備をした男の連れだ」

「あ、そうだ！ それともうひとつ、」

白石がぱんと手を叩く。それで、3人分の視線が再び彼に集まった。

「そいつは、『もし、白い狼の毛皮が手に入ったらいくらで買う？』……と、毛皮商に聞いていたらしいぜ」

その一言に、アシ×パがこれまでになく動揺を見せた。父譲りの青い瞳が揺れる。

「……レタ×だ」

——初老の男マタギなどあちこちにくらでも居れど、白い狼は彼一体しかない。

そこようやく、アシ×パは二瓶たちの本当の狙いに気づいたようだった。

「白石、なんでそれを早く言わない！」

「そうだと白石、てめーは『フ×？チャの刑』だ噛めオラ！」

「ええ？ 屋根じゃんそれ——ばあああッ」

杉元の手により屋根からむしられたトドマツを口に押し込まれる白石。新芽以外は苦いっただけで、別にそれ刑でもなんでもないだろ。

「レタ×……」

「アシ×パさん、今は朝を待とう。しつかり休まない……レタ×が心配なのはわかる

けど」

落ち着かない様子のアシ<sup>△</sup>パを、冷静になだめる杉元。——けれど、その瞳には既に  
獯猛な闘志が燃え盛っていた。

「……………」

見て見ぬふりで、匙を口に運ぶ。

あの瞳はいつか、俺に向けられるかもしれない。その時俺は、何を思うのだろう。

「タマはここに残ったほうがいい」

——で、翌朝。

いぎ二瓶鉄造確保に出発、という直前、アシ<sup>△</sup>パがとんでもないことを言い出した。  
ここに、残れと。俺に。

「……………ええ？」

今まさに仮小屋を出ようとしていた時にそんなことを言われた俺は、「なあんだただ  
の尾形か」みたいなポーズで固まってしまった訳だが。杉元までもが訳知り顔で俺を見

下ろしている。え、俺クビ？

「何故、」

「その銃……弾が残り少ないし、手に入れるあてもないんだろう？ 無茶はしなくていい。銃は杉元が持っているし、私にも弓矢がある」

「え？ 俺は？」

「二瓶を確認できるのはお前だけだろ」

「……………」

銃の残弾か。ちよつとホツとして。

……言わなきゃ良かったかな、と思った。ちよつとした雑談のネタのつもりだったが、弾切れすればバレることだし、理由があつて黙っていたと思われるのも面倒だ。

事の成り行きを無言で見守っていたらしい杉元が、ぼそつと口を開く。

「…………タマさんの、かなり古い銃だよな」

軍人だけあつて、尾形ほどではなくともそれなりに詳しいらしい。少なくとも俺よりは。

「うん……もともとは祖父のものなんだ。それを家から持ち出してきた。弾も銃も古い輸入品で、今はもう出回ってないと店の人間が……」

「そうか」

村田銃を使い続ける二瓶のように、そんなもん使うなどでも言われるかと思つたが、杉元は谷垣ほど手厳しくはなかつたようだ。

鋭い表情がぱつと温んで、

「あ、じゃあ俺が連れの兵士から軍用銃ぶん取つてきてあげようか？」

「ウフフ……杉元は優しいな。でも、とりあえずは大丈夫」

「いいのお？ 撃ち方だつて俺が教えてあげるし」

「あなたは銃があまり上手くないからいい」

「え？ いきなり辛辣」

「しようがないなあ杉元！」

いや物騒な会話だなオイ。

しかし、三十年式を手に入れたほうが良いのは間違いないのだ。弾薬が入手できないライフルなんて充電の切れたスマホ並みに役に立たない。嘘、鈍器くらいにはなる。

では、なぜそうしてもらわないのか。

杉元に三十年式の使い方を習いました、なんて尾形に知れてみる。「やはり俺ではダメか」ルートまっしぐらだ。道中で軍用銃を手に入れなかつたことに確固たる意図がある訳ではない（また一人で覚えるのは面倒臭いとか値段とか色々挙げられる）が、杉元の介入を避けることには明確な意義がある。

今までこの銃一丁でやってきてしまった以上、既に俺には尾形合流までこれを使い続けるという道しか残されていない訳だ。

うーん。何となく尻込みして買わなかったけど、買ってあげばよかったか？

でも尾形、この銃見たら喜ぶだろうし、三十年式の撃ち方教えてく？（合コンのさしすせそ）とか言ったらもつと喜ぶだろうしな。

うん。とりあえずいいか。

杉元たちに向き直る。

「……私のことは大丈夫だから。とにかく、気をつけてね」

一応そう口にしておく。アシバが、威勢よく頷いてみせた。

「ああ。レタを狙う囚人を、必ず捕まえてくる！」

……と、いう訳で。

酒盛りの爪痕で屋根が穴だらけになってしまった仮小屋に1人、取り残された。

しばらくは大人しくしていたが。

「……アシバ」

できれば現場までついて行って、守ってやりたかった。



なぜなら、二瓶鉄造のやり方は普通にクソと思っているからだ。子どもがかわいそうなの無理なんだって。

あの都丹庵士にもチカパシを巻き込まないという程度の思いやりはあったのに、いくらアシ×パが餌になるからといってもあんまりではないか。拷問してレタ×を効率よく呼び出そう的な外道手段をやらかさなかつただけマシなのかもしれないが、それでもライン越えだ。

アマツポにかかった谷垣に応急処置してあげたあとの彼女（ていうかこれ恩仇つてレベルじゃねーぞ）を、何とか二瓶から逃がせれば――

「できるじゃん」

はたと思い当たる。

いや、できる。今の俺なら。むしろ、今の俺にしかできないことだ。

なぜなら、その時点の杉元と白石は必死にアシ×パを追いかけている真つ最中なのだから。

「よく考えたら、あの2人はアシ×パを人質に取られて引き離されたのだった」

むしろ、ついていかなかつたほうが良かったまである？

いや、それならそれでまた出来ることはあつたと思いたいけれど。

「時間さえ稼げば、あとは杉元たちが何とかしてくれる。……レタ×のつがいがウエン

カムイになるのも防げる」

一石二鳥。汚れ役押しつけてすまん杉元。

本当は、俺が隙をつけて二瓶を殺すのが一番手っ取り早いのだろうか。

今までしてこなかった以上、積極的な殺人はできるだけ避けたほうがいい、という感覚がなんとなくあつた。それに、俺のほうは殺されても別に問題ないのだから、有事の際にはそちらを優先すべきだ。

まあ、とにかく。

「……行くか」

立ち上がる。銃を背負う。

軍人が食えた飯のぶんは働くというなら、俺は与えられた光のぶん動くだけだ。

「足跡を追う。ちよつとは、*ズラしく*なってきたか?」

仮小屋を出て、銀世界に残された3人分の足跡を眺める。一番大きいのが杉元、小さいのがアシシパ、中くらいが白石。

そこまで考えて、ふと思う。

「……二瓶鉄造と谷垣源次郎は、俺の存在に気づいていた?」

鹿の周りに残された俺たちの足跡を見たはずだ。人数くらいは訳なく割り出せただ

ろう。うーん、しかし。

「白石由竹だと思われたかもしれない」

足跡は3つ。現れたのは3人。

俺はそんなに足が小さいほうではないから、そう勘違いしても不思議ではない。

試しに、白石らしき足跡の横を軽く踏みしめてみる。……うん、やはり大して変わら

ない。履き物も似たようなブーツだ。

「これが吉と出るか凶と出るか」

少なくとも、3人が俺の情報を二瓶たちに漏らすことはまずないだろう。

命惜しさに仲間を危険に晒すような真似はしない人たちだから。

「……急がないと、」

目指す場所は、昨日鹿を撃った場所から、さらに先？ それなりに距離がある。

「間に合うか？ ……鹿垣がある方角へ先に向かったほうがいい？」

幸い、その場所自体はアシ♀パから既に教えてもらって見当がついている。

鹿を撃ったエリアを経由せず、そちらへ真っ直ぐ向かおう。一応、身を隠しながら先

を急ぐ。

進み始めてしばらく経った頃、

「——谷垣!! 2人が逃げたぞお!!」

「声でっか」

大気を震わす二瓶のクソデカボイス。

普通に野鳥の群れが飛んで逃げてった。こりや冬眠中のヒグマもうなされますわ。

「杉元たちは無事逃げ出したか……でも、合流するまでにだいぶタイムラグがある」  
時間はないが、危険は増した。二瓶もこちらに向かつてきている。

少し考えて、足元の雪を掬って口に含む。素人の猿真似だが、意味がない訳ではないだろう。うーん……シロップが欲しい。

「……見つからないようにしないと」

開けた場所が見えてきた。

アマツポがあるエリアに到達したらしい。人為的に倒された巨木の影に潜みながら、向こう側の気配を、

「アマツポがあるっ！」

——アシ×パの悲痛な叫び。

顔を出して、そちらを見遣る。前方の斜面下に、蹲る男の姿が見えた。そこに寄り添う少女の後ろ姿も。

「……谷垣……」

最終戦でケツ撃ち抜かれても馬で追いかけてくる義理人情があるなら、ここで死ぬ気

で二瓶止めとけよな（無茶振り）。担がれていたのが金カムの光担当で本当に良かった、俺なら当然のように見殺しにしていた。

とか言っている間にも、林から出てきた二瓶鉄造が彼らに近づいてきている。

……まさか、まだ見ぬ4人目が潜んでいるなどは夢にも思っていないのか。そもそも俺は二瓶とも谷垣とも一切面識がない。

夢にも、というならそれはアシ×バや杉元たちも同じか。……こんな芸当、未来が分かってでもいなければ不可能なのだから。

「……………」

既に弾薬を装填した小銃を、構える。

弾数がやや厳しいのはそうなのだが、銃持ったマタギにタイマンで勝てる訳がない。

いや、でも殺さず無力化したい時ってどこ狙えばいいの？ 教えてオガえもん。

「……………」

——子どもを人質にする、なんて卑怯なやり方には、それ相応のやり返し方つてもんがあるよな。

「……………」

今まさに。二瓶鉄造が、アシ×バに向けて銃口を持ち上げようとして。

——その手元目掛けて、引き鉄を引いた。

「っ、」

さすがに予想外の一撃だったか。

村田銃が吹っ飛んで、新雪の上を滑っていく。どこに当たった？ ……手か。

この距離なら外さない。

排莖して、間髪入れずにその右足を撃ち抜く。——だが、二瓶鉄造は止まらなかった。

膝についてなお、杉元から奪ったのである。三十年式を即座に構えて——発砲。マジか。かなり近い位置を掠めた銃弾に、乾いた笑いが出た。

「クソ、威嚇にもなりやしない……！」

いや、なんでこの世界の間違って足撃ち抜かれてもピンピンしてるんだ？ 白石とい

い尾形といい。

「——ッ、いい、わかってたことだ、っ」

ちよつとくらい足止めになるかと思つたが、やはり撃ち合いでは玄人に勝てない。俺は狙撃手としては下の下なのだ。

でも、俺にはもうひとつ弾がある。

——俺の命という鉛玉が。

丸太を飛び越えて、斜面を滑り降りる。というか、飛び降りる。全く見覚えがないであろう女の姿に、さすがに銃を構えた二瓶の動きが止まった。

「うぐつ」

唯一の好機だ。見逃す訳がない。硬直したその体をクツシヨンにする形で着地する。

その際、驚愕に染まったアシ×パの顔がようやくよく見えた。そりやそうだ。

「タマ!?! なんで……つ」

「逃げるアシ×パッ!」

二瓶にしがみついたまま、叫ぶ。こいつは牛山ではないので、ただの女の危険タツクルとはいえ虫でも払うようには振り解けないだろう。——と、思っていたのだが。

「早く——がッ、」

固めた拳が思いっきり横顔にめり込んで、普通に雪へ沈む。ぶん殴られて目の前に星が散る、をリアルで初体験した。

いつてえ馬鹿。殴ったね、尾形にも殴られたことないのに! でも俺は二瓶のこと既に2箇所も撃ってるんですけどね。

軽い足音が遠ざかっていく。

……ああ、とりあえず良かった。

とつさにそれを追いかけてやるとする二瓶。その脛を狙って、小銃をフルスイング。

「ハ、ッ」「ぐ、」

渾身の一撃は弁慶の泣き所と銃痕にジャストミートして、さすがに動きが止まった。

で、今度は蹴られる。だから痛いつて。

いや、なんでこんな泥試合してんだ。狙撃手の恥すぎる。尾形にはナイショだよ？

——最終的に、仰向けに横たわった俺の心臓に三十年式の銃口が突きつけられて、一旦の膠着状態になった。

風切り音と、谷垣の不規則な呼吸だけがしばらく2人の間を流れて。口を開いたのは、圧倒的有利を確保した二瓶のほうだった。

「……あのお嬢ちゃんの間か……最初から隠れて、好機を窺っていたな？ 二対一では勝ち目がないと」

別にそういうんじゃないけど、無言を貫くことでそういうことにしよう。

なんかそつちのほうが賢そうだし。馬鹿みてえな泥試合しちやっただけど。

二瓶が目を細める。

「ああ。……本当に、女は恐ろしい」

——女。……女。か。

彼の口癖じみたもので、深い意味はないのだろう。けれど、今の俺にはある種クリティカルな問いだった。

前世の俺と、今世の俺。

男と、女。



男の俺ならこんなことはしなかったのだろうか。二瓶の執着を理解し、アシ□パが人質になるのを見過ごしたとでも？

「……………くだらない、」

「何？」

——否。馬鹿げた話じゃないか。

こんなものに男も女も関係ない、

「あんたに理解する気がないだけだ」

与えられた光の分、体が動いただけ。

二瓶が白けたように鼻を鳴らした。

「……………悪いが、理屈っぽいお喋りは嫌いだね。今はそんな暇もない」

ここで俺に構っていても意味がない、ということに気づいてしまったのか。

「……………見失ったか、……………」

退こうとした二瓶が構える村田銃——その銃身を、思いきり握って引き留めた。

駄目だ。まだ、足りない。

もつと時間を稼がなければ。俺がここで殺され、二瓶がアシ□パを再び追つても、もはや彼女に危険が及ばないくらいには。

「一度構えたなら撃て、二瓶鉄造。こんな出来損ないの命、銃床の傷にもなりはしない」

刻まれた7つの傷。人を殺した罪悪感。

殺した責任を背負い込むような甘ったれば、兵士なんぞにならないで俺と熊撃ちをしていけば良かった——その通りだ。

罪悪感があるならば。

兵士になど、第七師団長になどなるべきじゃない。俺と、田舎で鴨でも撃つていけば良かったのだ。

「……どこでそれを？」

二瓶はさすがに少しは驚いていたようだったが、それでも落ち着いて聞いてきた。

原作ではキラウ☒に話したという体で明かされた話だ。二瓶鉄造の名とともに広まっていたもおかしくはない、と思ったのか。

ここでキラウ☒の名を出してもしょうがない。問いは受け流す。

「……あいにく死ぬのには慣れたもんでね。今さら恐怖など感じない。獣の糞になる覚悟はできている」

足音は聞こえない。杉元たちはまだここを見つけていないのか。

背中が冷たい。二瓶が皺の刻まれた頬を歪める。余裕のある笑みだった。

横顔に谷垣の視線を感じた。何を考えている？ いや、そんな余裕はないか。

「面白い啖呵を切るお嬢さんだ、」

「本当かどうか試してみろっつってんだよ」

「……………」

二瓶の、匂いが変わった。

引き鉄に、指が――

「――おおおッ!?!」

その瞬間。苦悶の叫び、骨が碎ける音。

衝撃は来ない。

とっさに目を開ける。……頭上に、予想外の光景が広がっていた。

二瓶の左腕にかじりつく、巨大な白い塊。なめらかな白銀の被毛、黄金の瞳、鈍く輝く肉食獣の歯並び――エゾオオカミ!

「レタ×……………」

レタ×。いや、見間違うはずがない。白い狼なんて彼くらいしかない。

何故。どうして。

混乱で頭がうまく回らない。

「アシ×パが呼んだのか…………?!」

とっさに見回した雪原に、あのこぢんまりとした立ち姿はない。なおさら何故?

有り得ない。

完全に予想外だった。可能性から完璧に除外していた。

誇り高きホケウカムイが、アイヌですらない人間のためにここまでやってくるなんて。

万が一、億が一にも俺なんかのためだとしたら、なおさら来るべきではなかっただろう。アシキパを守るためならともかく、こんなマリオもどきのためにウエンカムイになるのはあんまりだ。

いや——それどころか、彼のほうが二瓶に殺されてしまうかもしれないのに！

「っ、」

では、かくなる上は。

上は？

俺が——ここで二瓶鉄造を殺す？

スムーズにポップアップしてきたその発想に、一瞬思考が止まる。

視界の端に、あのライフルがある。

銃がある。弾がある。それができる。……だから、そうしようとしている？

それだけだった。

「……………」

——人を殺してはいけない。

——罪悪感があるから。

——地獄に堕ちてしまうから。

泡のように、浮かんでは消える。

消えて——残らない。

どこにも、その名残さえ。

ああ。やはり、俺はどこまでも。

ライフルのレバーが薬室に弾薬を送り込む微かな響きを、どこか遠くで聞いた。

「……まさか、こんな場所で会えるとは思わなかったがな。俺の勝ち、——」

歯車じみた奇妙な髪型、その後頭部に突きつけられた——俺が突きつけた銃口。

二瓶鉄造の勝ち誇った眩きが、尻切れトンボになる。

振り返ろうとする。その前に人差し指へ力を込めようとして、

「——ッ、」

灰褐色、ついで鮮烈な赤。

——現れた別の狼が、二瓶の頸動脈を噛み切った。……原作通りに。

それを理解したのは、二瓶が村田銃を取り落とし、その場に膝をついてからだった。

雪の白に、ぱたぱたと赤が散る。

「あ……」

照準の先には、もはや誰もいない。  
空虚な雪原が広がっているだけだ。

我に返る。銃を下ろす。

「……………」

2頭の狼はまだ二瓶に威嚇している。

そこへ、弾丸のように駆けてくる茶色い毛玉。アイヌ犬のリユウだった。恐れていたはずの狼に負けじと怒鳴り返し、そのあまりの剣幕にか、先ほどまで怒り心頭という様子だった狼も引き下がる。

「…………よしよし、リユウ…………湯たんぽにしては頑張ったな」

二瓶の手が、その後頭部を優しく撫でた。

それから寄り添う2頭を見遣り、

「なるほど………… つがい」だったか」

女房にとつちやあ、男同士の勝負など知ったことではないか。

やはり、女は恐ろしい。

なあ、おつかないお嬢さん。

不敵に笑いながら、そう呟いて。

「…………だが、満足だ」

くうん。

リュウが応えるように、物悲しげに鼻を鳴らした。それで、最期だった。

「……二瓶……」

——稀代の熊撃ち、二瓶鉄造は。

生涯をかけて狩ってきたどのクマの爪でもなく。この北の大地に住まうホロケウカ  
ムイの牙で、その命を閉じた。

## 11話 良い音は聞けない

動かなくなった二瓶から、視線を外す。

背後から足音が聞こえていた。

「タマー！」

「タマさんッ」

どこかで合流したのかたまたま行き会ったのか、ゴールドントリオがまとめてこちらに駆け寄ってくる。

待つてろと言ったはずの人間が、なぜか先んじて二瓶とエンカウントしていた状況に、その表情には三者三様の困惑が浮かんでいた。そりやそうじゃ。

「どうして……」

「……アシ×パが心配で。ごめんなさい」

「え、てかその顔の怪我、」

「二瓶鉄造の邪魔をしたら殴られた。でもそれだけ」

「やだ、相変わらずキレてるう……」

なぜかドン引き白石。とっさに二瓶を撃ち殺そうとしてましたって言ったらもつと



引くかな。

「タマ……」

アシ×パも氣遣わしげに呼びかけてくる。別に気にしなくていいんだけど、

「二瓶鉄造を殺すつもりだったのか？」

おっと。

やつべ、こつちにはバレてんじゃん。

もしかして見てました？

「……、必死だったから」

「……………」

我ながらテキトーな誤魔化し。彼女はまだ何か言いたげにしていたが、レタ×の隣に寄り添う雌狼の姿に視線を移す。

「もしかしてあの夜……レタ×を呼んだのは、」

そこで、レタ×たちのそれとはまた違う、甲高い遠吠えが雪原に響き渡った。アシ×パがはつとした顔になる。

「別の遠吠えだ！ しかもこれは、」

声が出た方角——リユウほどの小さな毛の塊が、ひとつふたつみつつ、よつつ。3頭は「彼女」と同じ灰褐色、残りの1頭はレタ×によく似た美しい白銀の毛並みだった。

「…………レタ□□……お前、家族が…………」

アシ□□パが、澄んだ瞳に綺麗な涙を浮かべる。——ひとりぼっちだと思っていた狼の子が、同じ仲間を見つけて、家族を作った。それがどれほど尊く、喜ばしいことか。

「……………」

涙を拭うアイヌの少女から、エゾオオカミの親子が連れ立って遠ざかっていく。

アシ□□パは今度こそ追わず、嘆くこともなかった。ただ、それを泣き濡れた優しい微笑みで見送った。

…………でも、俺は到底、その美しい光景に心打たれる気分にはなれなかった。

「アシ□□パ」

「本来守られるはずだった」アイヌの少女に、慎重に呼びかける。

「どうして、レタ□□は…………」

「……………」

——若干、不可解な顔。

ああ。お前も、疑問に思っていたのか。

良くない確信を得て、身震いする。そんな俺の前で、アシ□□パは怪訝そうな顔のまま、

「…………私が…………誰でもいい、とにかくタマを助けてほしいと願ったから…………」

「……………」

だから、レタ<sup>△</sup>はアシ<sup>△</sup>の意を汲んで、命の危険を冒してまで俺を助けに来た。

——本当に、そんなことが有り得るのか？

俺は、嫌な予感を覚えざるを得なかった。

嫌な予感。それは、どう足掻こうが変わらぬ事象もあるのではないか、という懸念。

俺が強引にアシ<sup>△</sup>を逃しても、結局は何も変わらなかった。レタ<sup>△</sup>とそのつがい

二瓶を襲撃し、彼は首を噛み切られて死んだ。

ならば——尾形百之助は、？

「……………いや、」

——考えるのはよそう。

試してみなければわからないということには変わりない。躊躇する理由にはならな

い。

とにかく、今はそういうことにした。

そこで。地に臥していた谷垣がふらつきながら立ち上がったことで、全員の意識がそちらに向く。

谷垣はまさに這々の体といったふうで二瓶に歩み寄り、その傍らに膝をついて。

「……………コレヨリノチノ、ヨニウマレテ……………ヨイオトキケ」

阿仁マタギの唱え言。谷垣源次郎は、一匹の山に生きた獣として二瓶鉄造を見送つ

た。

……けれど、俺の脳裏をよぎっていたのは、その慣習を知った当時に考えたこと。

——動物を、人間の都合で殺したことに對する罪悪感。

それゆえに祈り、赦しを請う。恨みつらみを抱かぬように。呪いを齎さぬように。

ああ、またか。

「罪悪感」

「……なに？」

「いや？」

垂れてきた鼻血を、手の甲で拭う。

当時の俺は、阿仁マタギの気持ちを理解できなかった。今もまだ、谷垣源次郎の気持ちには理解できそうにない。……永遠に？

「……………」

「……タマ、白石、この男とアイヌ犬をコタンまで運ぶ。担架を作るから手伝え」

「ええッ」

びつくり仰天シライシ。やめとけよ、とでも言い出すのかと思つたが、

「杉元は？」

そつちかよ。できる限り楽をしようとすな。

「俺は二瓶の皮を剥いでくる」

「ちえ。というか、マジで連れてくのかよ」

今さら。むしろ主題はそこだろ。

「死にかけてるのに置いていけない。アイヌ犬だって、ほつとけばいつまでもあそこにいる」

取り付く島もないアシ×バ。白石は助けを求めるように佇む杉元を見たが、冷めた目で谷垣を見下ろしていた彼は淡々と、

「アシ×バさんがそうするっていうなら俺は止めないよ。……それに、」

意味深に言葉を止めて、俺に流し目をくれてくる。言いたいことは何となくわかった。

「こいつが第七師団なら……なおさら聞きたいこともある」

尾形百之助のこと。——そして俺は、花沢幸次郎と、その息子である勇作のことを。

「……うん」

頷く。待ち人は、いまだ来らず。

その後。

(故)二瓶鉄造と組んでレタ×の毛皮を剥ごうとしてました、という情報を伏せられてコタンに迎え入れられた谷垣は、それなりに手厚い看病を受けているようだった。

「ユ×オハウ、うまいか？」

「……………」

……まあ、第一の被害者であるアシ×パからしてこんな感じなので、別にそれが判明していたところで問題なさそうな気もする。

しかしマタギ云々以前に、私利私欲で本来捕まえるべき刺青囚人と手を組んで小さい子が大切にしている絶滅危惧種を銃で追い回すとか普通にゲロカスムーブだと思っただが、意外と好感度って何とかなるもんだな。

まあ、犯した罪の重さが好感度とか信頼度に直結する世界じゃないしねゴールデンカムイ。

大体みんな犯罪者だから禿という概念が存在しない。治安悪っ。

「——カムイチエ×？ アン クスケライ アオカイ シ×ヌアン ペ ネ——」

夜も更けてきて。鮭のルイペをいただきながら、フチのウパ×クマを聞く。

アシ×パの通訳を挟みながらだが、……これ鮭というよりは、砂金の話だな。アイヌの埋蔵金にまつわる話だ。

——鮭は神の魚とも呼ばれ、アイヌにとつて重要な食べ物だった。

——しかし、北海道のあちこちで砂金が採られるようになったせいで、水が汚れて鮭が川をのぼつてこなくなった。

——それが何年か続いたせいで、鮭が獲れず生活が苦しくなったため、話し合つて砂金を採るのをやめた。

——集められた砂金は隠され、やがて時が経ち、その居場所を知るのはこの村の年寄り一人になった。

「……その年寄りものつぺらぼうに殺された」

杉元が低く呟いて、フチの代わりにそのウパ×クマを締め括る。

「え、」

慌てたのは白石だった。

「いやいや……ちよつと待て、それが例の埋蔵金つてことか？ 北海道各地から何年もかけて集められたつて？」

「……このウパ×クマは私も初めて聞いた、」

声が微かに震えている。アシ×パにもこの展開は予想できていなかったようだ。

じゃあ。白石が再び口を開く。

「ばあちゃんの違い伝えが本当なら、俺たちが聞かされていた20貫より……もつとたくさんあるんじゃないかねえのか？」

——2万貫。現代の数値に直せば、75トン。

「……桁が違う、」

そこでようやく、今までだんまりだった死にかけの谷垣が口を挟んでくる。……今さらだけどき、こいつがいる中でこんな話して良かったんです？

「そのばあさんの言うように、埋蔵金の話はあちこちのアイヌの間で密かに伝わっている。……俺たちを率いている中尉は『情報将校』で、情報収集や分析能力に長けている」

杉元が、ほんの一瞬息を呑んだ。

「鶴見中尉か」

「ああ……中尉の推測では……囚人が聞かされていた量の1000倍はある、と」

今度は白石が面食らう番だった。

……面食らったというか、文字通りひっくり返っていた。なぜか隣に座っていた俺目掛けて。

「いつて」「ごみんタマちゃん」



いやなんでこつちに倒れてきた？

——刺青人皮の暗号は、地図になつていないのか。

早々にその推測に辿り着いた彼らが、人ん家の炉端に今まで集めた死体の一部を広げて、ああでもないこうでもない話し合つてゐるのを、少し離れたところで見守る。

具体的に言つと、部屋の隅で伏せてゐる谷垣の近くで。

この少し前に「ていうかタマさん金塊の話知つたのか」「私が教えた」「なんで勝手に教えるのお？」というアシ×バ杉元のやりとりがあつたが、瑣末事である。

「——津山を捕まえるのに、我々は3人犠牲にした。最後は鶴見中尉がやつを仕留めた」今は、残りの刺青囚人の話をしてゐる。

そろそろか、と思つたところで白石が、

「……鶴見つてやつもかなりの曲者だな？」

旭川の第七師団本隊を乗つ取るとか。

それでどうするんだ、東京に攻め込んでクーデターか。

「……………」

いかにも未従軍者らしい、ぎっくりとした意見である。他ならぬ俺もそんな感じのこ

としか思い浮かばないからわかる。

「金塊がそんなにたんまりあるんならよお……お仲間と山分けして遊んで暮らそうって発想にならないのか？ なんだって第七師団を乗っ取るうなんて物騒なことを……」

白石は純粹に不思議そうだった。

「なにがあつた？」

「……旅順攻囲戦だろう」

「……またもやだんまりの谷垣の代わりに、杉元が重々しく呟く。

旅順攻囲戦。203高地。俺はミリオタでも歴オタでもなかつたので、今までは教科書に載っている程度のことしか知らなかつた。

「……情報将校だつた鶴見中尉は、203高地攻略に否定的だつたが、命令に従うしかなかつた……」

目を伏せた谷垣が、やたら流暢かつ丁寧に旅順攻囲戦における鶴見中尉の話を始める。まだ良い感じに劇場つてますなあ。

「勝利はしたが、旅順攻囲戦に投入された第七師団1万の将兵は、203高地を陥落させた頃までには……半分以下になつていた」

目を伏せて、その時を待つ。

「この作戦の参謀長でもあつた、元第七師団長、花沢幸次郎中将は……手柄を立てようと

正面突破に固執し、多数の将兵を戦死させたとまで揶揄され——」

……いや、ここまで来てしまったらもう、何も変わらないか。

「——帰国後、自責の念から割腹して亡くなった」

死んだ。花沢幸次郎は自害した。

原作通りに。少なくとも、死因はそうだ。

……驚きも、悲しみもなかった。

思い入れ云々以前に、幸次郎が満州鉄道の件で鶴見中尉に煙たがられていたことは知っていた。尾形の迷惑がなくとも、花沢幸次郎の死は避けられなかった。少なくとも俺はそう解釈していた。

「政府部内では、花沢中将が自刃したのは部下たちの落ち度とし……勲章や報奨金はおろか、陸軍の中での我々第七師団は格下げ扱いされ、冷遇された、」

「……花沢中将は死んだのか？」

話が一区切りついたタイミングを見計らって。囲炉裏の灯りが揺らめく壁を見つめたまま、言葉を放り投げてみる。

「息子の花沢勇作は？ ……父が自刃したとなると、こちらやはり戦死したか？」

「……！」

わかりやすく息を呑んだ音がした。

それは、こんな何だかよくわからない女が花沢中將の息子に覚えがあるという根本的な不可思議さについてか——あるいは。

「どうせ第七師団に入れたんだらう。あいつの読み通り」

そこで、ようやく谷垣が途切れ途切れながら意味のある言葉を口にする。

「……………なんで、……………あんたがそんなこと知っている?」

壁から視線を離して、谷垣を横目で見遣る。揺れる瞳を見下ろして、その疑問に対する「答え」を与えてやる。

「私の名前は尾形タマ。尾形家の養子だった女だ」

「おが、……………!!」

途端、谷垣が目を剥いた。酸素が足りない魚のように忙しく口を開閉させて、けれど言葉にはならず、見るからに気が動転している。

——案の定というべきか、尾形は俺の存在を（少なくとも谷垣あたりの）周囲には明かしていかなかったらしい。

「尾形百之助上等兵の——厳密に言えば、義理の叔母ということになるな。……………生きてるのか? あいつは」

「っ、……………」

生きているのか、とは聞いたものの、谷垣は同行していた造反組がヒグマに殺されて

以降、小隊には戻っていないはず。こいつが得ている情報は『尾形上等兵は未だ意識不明の重体』止まりだろう。

やはり、この時点で無事を確かめるのは不可能か。夕張で尾形本人に会わなくては。で、谷垣は何を言うのかと思えば、

「……尾形上等兵からあんたみたいな女の話を聞いたことはない……真実だという保証がない、」

「あ？　なんだテメー」

なぜか俺より先に杉元がぶちギレているが、やはり疑ってくるか。面倒くせえ、尾形が秘密主義なせいだ。

「一兵卒の身内を騙って何の得があるのかというのは置いておいて……お前が信じる必要はない。嘘だと思うならそれでいい」

どうせ、揃っての再会は鉋路だ。手負いの谷垣源次郎が、ここで俺に対する疑念を募らせていようが何の問題もない。

「冷てえ男なんだな、尾形百之助」

フォローのつもりか、炬端に頬杖をつけて寝そべっていた白石が会話に参戦してくる。

「百之助は昔からそう。小さい頃からマジで本当に可愛くないクソガキで……」

「ボロクソ言うじゃん」

しかし、よく考えると、客観的に見て俺と尾形の関係を証明できるようなものはないんだな。

尾形が夕張で「こんなやつ知らん」とか言い出したらどうしよう。その場合、自分のことを尾形の家族だと思いついて入っている異常成人女性が爆誕してしまう。

ヤバいな、ちよつと尾形からのなつき度を高く見積りすぎた？ でもあいつのなつき度つて既存の概念だと計れないじゃん。

「……私のことなんか、もう忘れちゃっているのかも」

まあ、記憶力が良いからそれはないと思うが、忘れるつもりでいたというのはじゅうぶん有り得る。

思わずこぼした眩きに。

「……………」

「……………」

湿度高めな沈黙が落ちる。やべ、なんかさらに尾形の好感度下がった予感する。俺またなんかやつちやいました？

湿っぽい空気を変えたくて、一番気まずそうな顔で沈黙を貫いている谷垣の枕元に手をつけて、顔を寄せる。

「な、」

「そもそも信じていないようだから、こんな忠告は意味がないかもしれないが……」

囁く。これは、保険だ。

「もし今後、尾形百之助に会うことがあっても私のことは口にするな。どうせ信じないだろうし、間違いなく面倒なことになる」

谷垣は、近いうちにこのコタンで尾形（with二階堂）に再会し、尾形の勘違いゆえに戦闘にもつれ込む。その時に余計なことを言わないための、あらかじめの口止めだ。

夕張で会うまでにまだまだタイムラグがあるのに、余計な情報を尾形に与えたくない。

「いいな」

念押しすると、谷垣はなぜか青ざめた顔に引き攣った笑みを浮かべて。

「……その目……尾形上等兵にそっくりだ」

うん？ 拾った命が惜しくないのか？

「……血は繋がってない」

「うふッ」

まだムチムチ度が足りない胸板をぺん、と軽く裏拳で叩いて、枕元から離れる。とい

うか信じてねーんじやなかったのかよ。

膝を使って元いた席に戻る。すると、そのやり取りを聞いていたらしいアシ×パが、澄んだ眼で

「百之助とタマは似てるのか？」

「……さあ？ 似ていると思つたことはないけど」

な、谷垣一等卒。

ニコツと微笑みかけると、なぜか目を逸らされた。おい。お前がふっかけてたんだろ。

谷垣がとつさに信じなかつたあたり、顔の作りは別に似ていなさそうだが。だから血が繋がってないんだって。

はあ。杉元がため息をつく。

「尾形百之助……俺のこと恨んでるかな？」

「恨んでるだろうね。あの子は記憶力がいいし、かなり根に持つ性質だから」

「ヤダあ……」

俺は根に持つ性格じゃねえ（大嘘）。

実際接してみて思つたことだが、対人関係では本当に引くほど記憶力がいい。俺が何気なくこぼした一言なんかを、冗談抜きで永遠に覚えている。俺は逆にそつちはあまり頭が働かないから、相性が悪いんだよな。



「また会ったら仲良くしてやって」

「無理じゃん？」

本編で通算3、4回くらい尾形に本気の殺意を向けてきた男に、微笑む。

というか、肝心な勇作殿の生死は聞きそびれたな。聞いて素直に教えてくれそうな雰囲気でもないか。

まあ、結局のところ、実際に知りたいのはそこではない。それは幸次郎もだ。何故死んだか。……あるいは、誰が殺したか、だ。

——嫌な予感。

——どう足掻こうが、変わらぬ事象もあるのでは？

「」

昼間に考えたことがふっと意識を占有して、思考が止まる。——いや、少なくとも尾形の身内に関しては明確な反証がある、

「……トメは殺鼠剤で死んだ訳じゃない」

「……んえ？ タマちゃんなんか言った？」

「……」

拳を強く握り込む。

目先の結末に怯えるな。

結果として齎された事象そのものが変わらなくても、その過程が変わることに意味があるはずだ。

トメは結局死んだ。

しかし、尾形百之助に殺された訳じゃない。

幸次郎の死も——勇作の死も。

「……ああ、」

鶴見中尉の謀略、尾形百之助の執着。

その向こう側の景色を見に行こう。

## 12話 元氣よく死ね

ひとまず、二瓶鉄造の死体から刺青人皮を手に入れた俺たちだったが。

新しい囚人の情報は、そう間を置かず白石由竹からもたらされることとなる。

「——最近、あちこちの漁場でヤン衆が殺されてるんだ。犯人は、辺見和雄という男に違いない」

自分が殺めた人間の背中に文字を刻んでいく、凶悪な殺人犯。

そこまで聞いて、子熊を抱いてあやしていた杉元が小さくあ、と声を上げた。

「どうした？」

「……ひよつとして、その文字は“目”じゃないか？ 漢字の……この、目だ」

「っ、」

ドンピシャだったのか。自らの目元を指し示しながら言う杉元に、白石がぎよつとした顔を向ける。

「なんで知ってる？」

「……あれから、コタンに帰る途中で比較的新しい男の死体を見た」

辺見和雄に繋がる手掛かり。それは、アシ箱パ杉元とともに俺もこの目で確認してい

た。

杉元は話し出した俺に説明権を譲る構えのようだ。横顔に落ち着いた視線を感じながら、続ける。

「後ろ手に縛られ、背中に包丁を滅多刺しにされて……明らかに殺されていた。一応、刺青囚人かもということ、杉元がそいつの背中を確認したんだ」

「……それで？」

「あの刺青はなかったけど、」

よく見える位置に、やたら丁寧にきっちり刻まれたその一文字。ひと目見てわかった。これは、典型的なシリアルキラーの手口だ。

辺見和雄。もちろん手口その他について知ってはいたが、改めて目の当たりにするとさすがにぞつとする。

「包丁で、漢字の『目』が？」

白石の呟きに、頷いて応える。おもむろに降って湧いた特大級の情報に、さすがの白石も顎を摩りながら唸り出した。でもこいつ、この時点で既に土方側のスパイ(?)なんだよな。

「……その刺青囚人が近くまで来ているってことだな？ 叔父が狙われないか心配だ」

黙っていたアシバが、会話が途切れたタイミングでそう呟いた。

「オソマのお父さんだね」

「ああ。今、海岸に行っている。ニシンを追って海岸に来たクジラを捕まえるためだ」  
「え、クジラ?」

慣れ親しんでしまった嫌な予感にか、杉元が身を乗り出して口を挟んできた。しかし  
アシ×パはそれには構わず俺を見て、

「クジラの脳みそ食べたいよな?」

「うん。……うん?」

「タマさん?」

「よしつ、タマもそう言っているし、海へ行こう! クジラを食べに!!」

「アシ×パさん?」

振られた以上無視はできないし、抗うメリットがないから……許せ杉元。クジラ肉つて美味しいよね。脳みそは知らん。

——で、到着即きさら海ジャンプ。

道中、白石が辺見の印象と遍歴を話してくれたが。うーん、性癖が歪むってこういう

ことなんだなど。それで深刻な心的外傷を回避した方がいいが、代わりに連続殺人という業を追うことになってしまったタイプですね。

二瓶の件があつたせい（おかげ？）か、アシシパたちは銃の弾数を理由に、また俺を置いて行こうとはしなかった。これはこれで良かったのだと思う。

アシシパの叔父と漁に参加する予定が、追われたクジラに突つ込まれた船からヤン衆が落ちてしまい、救出に向かう——ここまでは原作通り。それはいいのだが。

「白石！ 杉元！ クジラの分け前をしつかりもらつてくるんだぞー！」  
「えええええ」

……問題は、船の組み分けがなぜか「俺・アシシパ・叔父」「杉元・白石」で、俺たちが辺見の救出に駆り出される側だったことである。え、これマジ？

「急げ！ 岸の漁場にはニシン加工用の焚き火があるはずだ！」

「ありがとう……ありがとう……」

とにかくここでこのヤン衆——辺見和雄に死なれると、別の問題が雨後の筍が如く発生してしまうため。アシシパの叔父と力を合わせて、辺見を引き上げてやる。

「海に落ちて死ぬなんて、こんな死に方……絶対イヤだ、」

船の底で心からほつとしたような笑みを浮かべる辺見を、黙って見下ろす。

「こんなつまらない死に方……」

「……………」

理解不能な価値観だ。

生物の死因につまるもつまらないもあるものか。単なる状態変化としての生命活動の終わりがあるだけだ。

「ふううう……暖かい……命拾いをした」

岸まで辿り着いて。火にあたる辺見の後ろ姿を、アシ×パと並んで眺める。

さて、これからどうすべきか？

「……濡れた服は脱いだほうがいい」

とりあえず、序盤は杉元エミュに徹してみる。この段階で、アシ×パの前で堂々と疑うのもおかしいものな。

「え……………!? ここまで服を?」

案の定、〃同じ値段でステーキを!?〃並みの謎の驚きっぷりを見せてくれる辺見。

「肌着も脱いだほうが……………」

「あの……………なんというか、若い娘さんたちの前で全部脱ぐのは……………恥ずかしいです」

「……………」

原作よりは自然な理由づけ来たな。俺アラサーだから別に若くないけどね。

予想通りだ、やむを得ない。背負っていた荷物を下ろして、毛布を手渡す。

「布がある」

「え……良いんですか、」

……辺見は、本来ならばここで杉元から同じ人殺しの匂いを感じ取り、自分を残酷に殺してくれることを期待するはずだが——今の男の目に、俺はどう映っているのだろう。

そんなことを考えながら、その背中を見つめていたら。——目が合った。

「……なにか？」

「い、いえ……」

慌てて視線を外し、いそいそと脱衣に戻る辺見和雄。不気味だツピ！

そこに、

「タマー！」

アシ×パの叔父がやって来た。今回は女一人だからもしかかしてと思ったが、

「私はひとりで杉元たちを追ってみる、後は任せた！ アシ×パの面倒も頼んだぞ！」

「わかりました」

普通に置いていくんかい。漁師もやってるだけあって声がクソでけえんだなあ。



——まあ、銃持ってるし……

銃持ってるって普通に撃ってて杉元たちから仲間判定されている訳で、その辺の女とはまた認識が違うのかもしれない。百理ある。

「タマ……これからどうする？」

アシ×パに着物の裾を引かれて、我に返った。うん、とりあえず事故ったヤン衆を助けるという当初の目的は達成してしまつた訳で。

「……白石に、辺見和雄の似顔絵でも描いておいてもらえば良かったね」

……視界の端で、毛布にくるまった辺見がごそこそ番屋に向かうのを捉える。

辺見和雄。こいつは泳がせておけばおくほど、無関係な死人が増える。

アシ×パの安全のためにも、さっさと方をつけてしまつたほうがいい。

杉元が不在なのだから、そうせざるを得ない。それだけだ。

「……………」

……俺は基本的に人殺しが嫌いなんだな。その事実気づいて、何となくほつとする。

“道理”があればいいってもんじゃないが、無いならもつと最悪なだけだ。

よし。

「——アシ×パ、」

彼女に向き直り。肩に手を置いて、その顔を覗き込む。

「……ちよつと、あの番屋で便所を借りてくる。ここにいてくれ」

辺見が今まさに向かっている二階建ての建物を指差して、告げる。

「タマ……」

アシ<sup>×</sup>パは、大きな瞳を瞬いて。耳元に唇を寄せてきたかと思えば、

「……オソマか？」

「フフ……すぐでかいオソマだ」

「慌てなくていいから、ゆっくりしてくるんだぞ」

……アシ<sup>×</sup>パがウンコネタ大好きなキッズで良かった。いや良かったのかこれ？

「……ああ、」

頷いて、背を向ける。逸る気持ちを抑え、できる限り落ち着いて歩を進める。

彼女から見えなくなった位置で——走り出す。番屋の扉を慎重に開ける。

草履を吊るした紐を携える辺見の後ろ姿、それを布団から見上げる初老の男。

——間に合った。

「おら、風邪が、………あんた、誰だ？」

いきなり背後へ現れた見慣れぬ女に、風邪つぴきの男が怪訝な顔をした。振り返ろう

とする辺見。——でも、もう遅い。

「え、——ぐッ」

——その後頭部目掛けて、思いつきり小銃の柄を振り下ろす。はつきり言つてこれだけで当たりどころが悪ければ死ぬと思うが、この世界のネームド異常に丈夫だからな。

唐突な暴力行為に目を剥く男へ、出来るだけ落ち着いて呼びかける。

「こいつは連続殺人犯だ。早く逃げろ、不運な風邪気味さん」

「ひっ……」

……どちらにせよ、ここで銃を使えばアシ×パが気づいてしまう。他のヤン衆が来てしまつてもまた厄介だ。できる限り、俺一人で内密に片付けねば。

発言を信じたのかあるいは俺に怯えたのか（十中八九後者）、這々の体で逃げ出そうとする男。その背中に向かって落ちていた小刀をぶん投げようとする辺見。危ねえ！

「油断も隙もない、」

「あつ」

ブーツでその手のひらを踏みつけ、投擲を阻止する。ついでに小刀も回収した。堂々と人殺しを続行するな。

右手で眉間にナイフを突きつけながら、汗だくの辺見に言い放つ。

「お前……辺見和雄だな？」

ぎよつ。そんなオノマトベが似合う表情で目を瞠つてから、それでも。

「……………だ……誰のことです……………?」

んくシラの切り方が下手っ!

さっきの男を執拗に殺そうとしたことはどう説明つける気なのだよ。

マジで人体の破壊にポイント全振りしたようなスキル構成だな。船からも落ちるし。でも、おどおどしているから一見無害そうには見える……………のか?

「僕は、」

「しらばつくれるでも無駄だ。見えたんだよ、お前は隠し通せていたつもりだったようだが」

嘘だ。これはブラフ。

しかし、こいつは件の刺青を病人に一瞬見られた程度で殺人に踏み切るような男だ。確実に、乗ってくる。

「……………」

——匂いが、変わった。

来た、

「うッ」

——足首を掴まれて、引き倒された。

こいつ、杉元に負けず劣らずの馬鹿力かよ。とっさに体勢を立て直そうとした頭上に

迫る、……取り外された梯子？

「やば、」

さつきまで頭があつた位置に勢いよくめり込む角材。すると辺見は梯子を躊躇なく投げ捨て、今度は傍らにあつた誰かの煙管を取つてこちらの目を狙ってくる。

銃身で防いだが、だからこいつ力が強いんだって！

「この、……ッ！」

クソつ、こいつ日常生活の全てが殺人行為に直結しているタイプ！

理解しているつもりではいたが、実態は予想以上に厄介だ。杉元を殺し特化にフルチューニングしたような人種で、心身ともに銃頼りの俺では圧倒的に分が悪い！

——もう撃ち殺すか!?

“もしも”に備えて、弾自体は既に装填してあつた。引き鉄さえ引けば撃てる。

この距離で外す訳がない。

辺見和雄を殺せる、

「……………アシ×ハ、？」

——窓に。

映り込んだ黒髪の少女に、思考が止まる。

一瞬。ほんの一瞬だった。

けれど、致命的だった。

「——が、ツ」

背後に回った辺見が、何か細いもので俺の首を絞め上げてくる。先端で揺れる草履。あの病人を絞め殺すはずだった、？

「っ、！」

ぎりぎりど、遠慮なく力が込められる。苦しい。

こんこん。小さな手が窓を叩く音。

ダメだアシッパ、来ちゃダメ。

「……………ア……………」

声が、出ない。

窓が開く。辺見が顔を出す。

クソ、死んでくれマジで。

「……………はい、何でしよう？」

「んんツ……………その……………タマは、まだ出てこないのか？」

まずい。アシッパ、来るな。

思考が浮腫む。熱い。脳髓が蕩けていく。

「……………え？」

「ここで便所を借りると言って……」

「……あ、ああ！　そうですね、」

——取り落とした小刀が、ぎりぎり手の届きそうな位置にある。ああ、アシ×パ、アシ×パ——

「実は、僕も使いたかったんですが……どうもまだ、聞いたところによれば時間がかかるようで」

震える指を、伸ばす。

あと少し。もうちよつと。

「……本当か？」

「……、ええ」

「………つ、………！」

拾った小刀を——辺見和雄の太ももに、突き立てた。そのまま深く抉り込む。

お前、マジで、この子に、何かしたら、海に沈めてブチ殺してやる、から、な！  
ああ、もう、意識が——

「つ、………まだ何か、」

「じ、………実は………その、私も、んんツ、へんんツ」

いやトイレ行きたかっただけかよ！

そう言えばそうだった！

「…………お手洗いですか？ ……ああ、では…………親方の屋敷のを借りに行きましょう、かッ」

あ。

——ごきん、と。

自身の頸椎が折れる音を、どこか遠くで聞いたような気がして。

「……………ご案内しますよ、」

それが、最後だった。



## 13話 きらめけ！ 辺見ちゃん

「……………ん、……………」

カモメの鳴き声で、目を覚ました。

見知らぬ天井。……いや、そんな惚けたことを考えるまでもなく。

一瞬で、全てを理解した。

——辺見和雄！

「——っ、やられた、！」

飛び起きる、

「っ、い、い………」

後頭部に衝撃。

——柱か何かに、盛大に頭をぶつけた。

狭い。大量の布団に挟まれている。どうやら俺の体は、番屋の物置だか押し入れだかへ適当に詰め込まれていたらしい。

無理矢理折り畳まれた手足が痛む。雑に扱いやがったと思うが、原作だと汲み取り式の便所に押し込まれていたのだったっけ？

いや、そんなことはどうでもいい。

辺見和雄はアシ×パと接触していた!

「クソ、」

幸いにも肩に引つかかったままだった銃を引つ掴んで、外に飛び出す。

失敗した、失敗した、失敗した!

アシ×パを一人にしてしまった、否、それどころか、辺見和雄と引き合わせてしまった。彼女はやつが辺見ということはまだ知らない。隙をつかれたらおしまいだろう。

嫌な想像ばかり駆け巡る。

何もかもが俺のせい。

ああもう、最悪だ!

「アシ×パ! アシ×パっ! どこだ!」

がなりながら駆け回る女にヤン衆から奇異の視線が集まるが、構っていられない。

違う、落ち着け!

こんな広い漁場、やみくもに探しても見つかるものか。思い出せ、辺見は最後に何と

言っていた?

——お手洗いですか?

——では、親方の屋敷のを借りに行きましようか。

乾いた唇を、なぞる。

「……ニシン御殿、」

恐らくだが。まだ、それほど時間は経っていないはずだ。

死体の隠蔽が甘すぎる。辺見和雄は、あれからすぐにアシ□パを連れて番屋を離れたのだらう。であれば、彼女の案内が終わった時点で再びここに戻り、改めて処理を済ませるつもりのはずだ。

「……………」

——番屋で待つていればまた現れる？

アシ□パに危険は及ばないはずでは。

駄目だ、彼女を探さなくては。

この状況はもはや何もかもが「原作通り」ではないのだ。何があってもおかしくはない。

希望的観測は捨てろ。

「アシ□パ、」

頼むから、無事でいてくれ。

向こうに見える豪華な建物目指して、どれだけ走ったのか。

途中に見えた浜辺に——見覚えのある姿がいた気がした。

「っ、」

視認して。

足が、止まる。

俺とは逆の方向にふらふら走っていく、ヤン衆の格好をした男。間違いない、

「……辺見和雄」

どくん、と心臓が跳ねた。

何故ここに？ いや、

——1人だ。

アシ×パはどうした？

ニシン御殿で別れたか——あるいは。ふらつく辺見は全体的に血濡れているように見える。

誰の血だ？

背中のライフルに手が伸びた。

ほとんど無意識だった。

撃鉄を半分起こす。レバーを引き、再び押し込む。弾薬が薬室に送り込まれる。撃鉄を最後まで上げ切って——銃身を、構える。

その頭に、照準を合わせて。

「……………」

考えて。……結局、銃口を下げた。

引き鉄を引く。膝を撃ち抜かれた辺見和雄が、視線の先で崩折れる。

「……………これでいい、」

とりあえずは。

思わず漏れた眩きは、誰のためのものだったのか。

今は、アシ~~ン~~パの無事の確認が最優先だから。そう言い聞かせて思考を放棄し、さすがにすぐには立ち上がる様子のない辺見に駆け寄……いや念のためもう一発くらい撃つとくか。

「…………え、…………？」

辺見の澀んだ瞳が、丘を下って近寄ってきた俺の姿を認める。苦痛にしかめられていた顔が緩んで、惚けた表情になった。

脇腹から出血している。……なんかこいつ、既に満身創痕では？俺が撃つまでもなく。

泡立っていた思考が、ここに来てようやく風いでくる。ああ、焦っていいことはない。

「…………あ…………どうして…………？」

持っているのは、例の玉切り包丁ではなく——銃剣？どこで手に入れた？

辺見はまだぼうっとしている。

首をへし折って確実に殺したはずの女が、自分を追いかけ、銃で撃ち抜いてきたのだから当然か。

「ゆめ……?」

「残念ながら夢じゃない」

それ痛いだろ、と撃ち抜いた足を指差すと、揺れる瞳がさらなる疑問を訴えかけてきた。何故。……微笑みかけてやる。

「不死身なんだ」

ふじみ。ぺたんと尻餅をついたままの辺見が、朦朧と繰り返して。そのだらしなく開いた口元から、唾液が一筋滴った。

……信じたのか? これだけで。

まあ、信じざるを得ないか。それにしても飲み込みが早い。無差別連続殺人犯の思考なんぞわかりたくもないが。

「別に、お前が初めてじゃない。俺を殺そうとしたやつは他にもいたし……殺されたこともある」

「ほ、……他にも殺されたことが……?」

「3回くらいか。毒殺、射殺、刺殺?」

「~~~~~ッ、」

座った姿勢のまま、ぐんにやと仰け反って悶える辺見。うーん、グロテスクな話のはずなのに、なんかセクハラされてる気分。

「ど……………どれが一番……………」

「……………まあ、そんなことはどうでもいい、」

お喋りは終わりだ。話したいことはもう話した。……………こいつには、どんな手を使ってでも今のうちに聞き出しておかねばならないことがある。

「アシ×パに……………俺の連れの、アイヌの子どもに何をした？」

新しく弾薬を装填して。

改めて、銃を構える。

「答えろ、辺見和雄」

なぜかここですだんまり。おい。逆に、それ以外の理由でここまですると思うか？

「今ここでお前を動けなくして、海に放り込んでやったっていいんだぜ」

絶対に嫌だとまで言い切ったその「つまらない死に方」をちらつかされて、それでようやく辺見の肩が跳ねた。本当に、こいつは。

「お、お手洗いを借りたいというので……………親方の住む豪邸に……………でも、そこですぐ別れました……………」

「傷つけてないだろうな」

「こ、殺す訳ない……」

「信用ならねえんだよ teme エは」

こいつすぐしらばっくれるし。すぐ殺すし。とにかく、信憑性が薄いとはいえ、本人の口から情報は得られた。

……あとはこいつを片付けて、御殿までアシ×パを探しに行けばいい。

辺見は、恍惚とした表情で銃口を——その向こうの俺を見上げている。

「あなたみたいなのと、初めてだ……」

「そりやそうだろうな」

死ぬ度に生き返るタイプの物理的不死身がその辺に何人もいて堪るか。

「輝いて死にたい、」

「……………」

「でも、僕ではあなたの望む煌めきには足りなかった……だからあなたは……そういうことなんでしょう……?」

尾形に負けず劣らず謎理論。

しかもなんか気色悪い解釈されてないか?

「あなたほどの人が求める至高の煌めきをこの目で見てみたかった、きつと、とても美し



かったんでしようね……ああ、でも……」  
「違う、」

唾液と熱にまみれた不気味な語りを遮る。

顎を上げる。傷ひとつない首筋を、海風が撫でていく。

「俺は死ぬために生きてる訳じゃない。生きてるのは果たしたい目的があるからだ」

尾形百之助が、欠けた人間にふさわしい道を選ばないように。

その選択を、函館駅行きの列車で見届けるために。

「こんなところで……止まってられないんだよ」

そのためなら、この体が幾度無意味な死を迎えても構わない。俺は、”つまらない死

に方”に怯えたりなどしない。

「それだ！ その思いが強いほど、強く激しく煌めくんです！ 素晴らしい……ッ」

「……!?!」

で、どういう訳だか瀕死の辺見のテンションを盛り上げてしまったらしく。

明らかな満身創痍から一転、身軽に立ち上がって銃剣を構えてくる。いい加減にし

ろ。

「あなたの知っている “一番のやり方” でッ！ 僕をとことん煌めかせてくださいいッ

!!」

悲報、こいつマジで話通じない。

「うるせえなあ、一人でやってろ!!」

大体、毒殺はここじや無理だろ!

力いっぱい振り下ろされた剣先を、ぎりぎり銃床で防いだその瞬間、

「タマさんっ!?!」

「っ、」

背後から聞き慣れたクソデカボイス。

……ああ。もうクジラを仕留めて陸まで戻ってきたのか——

「——杉元佐一、」

辺見の背中越しに駆け寄ってくるのが見える。いきなり見知らぬヤン衆とバトっている俺に最初は困惑の表情だったが、

「どうし、」

「杉元ツタマちゃんっ!! そいつが辺見和雄だぞっ!!」

遅れてこちらに気づいたらしい、白石の魂の叫びを聞いた途端。

「——その人から離れるッ!!」

シームレスにガチギレ。

躊躇なく銃剣を抜き、悪鬼の表情でこちらに迫ってくる兵士の姿に辺見は当然大歓

喜。

「あああ同時になんてっ激しすぎるッ！」

「やかましいっ」

辺見が、興奮に任せて再び振り上げた右腕に——音もなく突き刺さる、見覚えのある矢尻。

「……！」

とつさにその方角を振り仰ぐ。

崖の上で、矢を射ったそのままの体勢でこちらを見下ろすアイヌの娘、

「アシッパ！」

見たところ五体満足、どこも怪我などしていないようだ。ひとまず安堵する。

今になって思う。辺見の負傷は、やはり御殿に控えていた第七師団の兵士とエンカウ  
ントした結果だったのか？ この銃剣は彼らから奪ったもので、命からがら一人で逃  
げ出したところを、俺が見つけたと。

——ならば、こいつはいよいよ用済みだ。

「急げ杉元ッ、第七師団が追ってきてるぞ！」

わかつている。

こんなもの、杉元にやらせるまでもない。

「づつ」

一瞬の隙。くるぶしに蹴りを入れて転ばせる。

仰向けに倒れたその右手から、銃剣を蹴り飛ばして。腹に足を掛け、眉間に銃口を突きつける。

「……ロウソクの灯火、命の煌めき……どれも、お前がただそう思っていたいだけだ」  
死ぬことに意味などない。

人間は生まれも、そして死に方さえも選べはしないのだ。死とは単なる結果でしかない。

「消えるところが見たいからロウソクをつけるのか？ 馬鹿げていると思わないか？  
命が煌めいているのはいつか来る死を輝かせるためではない」

命に価値があるとするならば、それは今生きていることそのものであり、死ねば全てが終わるだけだ。

ああ。辺見が深く息を吐く。

「……あなたみたいなの素敵な女性」に殺されるなんて……生きててよかった……」  
「……………」

聞いちゃいねえし。

まあ、どうでもいいか。こいつが言う「素敵な女性」が俺の内面外見どちらに因るも

のでもないことも、どうでもいいことだ。

「……はあ、」

「あ……せめて……最期に名前、」

名前。そういえば、名乗っていなかったつけ？

「……おが——」

まあそれくらいはいいか……と引き鉄に指をかけたつ、口を開いたのが良くなかったのだろうか。

ざっばん。がぶー。

——おもむろに海から飛び出してきた、巨大な「何か」が、波打ち際で辺見の左腕に噛みついて。

そのまま、波間に引きずり込んでいった。

一瞬の出来事だった。

「……は、？」

「……え——ツ!?!」

「なんだこりゃ!!」

遠ざかっていく。

白と黒、ゴムのような滑らかな体表、ぴんと立った背鰭。これは、

「レブンカムイだ!!」

……忘れてた!!

そうだ、辺見は結局シヤチに襲われるのだっけ!!

アシ×パのことで完全に頭から飛んでいた、クソ、波打ち際から引き離しておくべきだった? いや何もかも今さらだ、

「タマさん、走れるか!?!」

呼びかけに、顔を上げる。

いつのまにかすぐそばまで来ていた杉元に、空いていた左手を取られて――

「あ、ああ、「行こう!」「ヴェツ」

――明らかに、リードするとかそういうレベルじゃない力加減で引きずられる。

ぬいぐるみじゃねんだぞ。別に女とかそういう点は考慮しなくていいからせめて生身の人間としての扱いをしてくれよな!

「アシ×パさん、白石、船に乗れッ! 刺青がシヤチに食われちゃう!」

「あああ」

なんかもはや杉元のダツシユがヤバすぎて両足浮いてない? 俺飛んでる!

「辺見和雄を取り返すぞッ!」

「どうやって!?!」

で、しゅっこー。

元気いっぱい血気盛んなゴールデントリオとは対照的に、俺は既にグロツキー。

取り返す？ 取り返す方法、

「う……海に飛び込む、」

「やっぱそうなるよねえ!？」

「わたし……私が、……泳げないけど」

「泳げないんじゃない！ 泳げないんじゃない！」

「色々は無茶だタマ！」

死に戻った直後に激しい運動をしすぎたせいとか、体調がだいぶ良くない。具体的に言うときつそく船酔いが酷くてリバースしそう。いやこれ杉元のせいかな？

「シャチが辺見をぶん投げてる！」

「何やってんだ？」

「……ヒグマのリコシノツと同じようなものかも、」

「吐きそう」

もはやシャチによる辺見の蹂躪ショーを眺めている余裕もない。

「……げ、第七師団だ！ アイヌの船を奪って追ってきたッ！」

「何にしてもシャチがすぐ喰わねえってんなら……この隙に取り戻すしかねえっ！」

「だからどうやって!？」

「う……海に飛び込む!」

——と、いう訳で。

「チクシヨウこのクソ冷たい海に飛び込むのかッ、止まるなよ俺の心臓ッ!」

船縁に立って気合を入れる全裸の杉元。新しい二つ名みたいになってしまった。全身の傷跡が生で見るとだいたいぶエグい。

「アシッパさん見ないで、……タマさんはまずせめて隠す振りからして!」

「酔いがヤバくて……動いたり視界隠すと吐きそうだから……」

寒さで縮んでるけどナイスちんちん。前世で見慣れてるのでオツケーです。

「俺は不死身の杉元だッ」

詠唱のち、波打つ海面にダイブ。

あとは流れでお願いしまーす。



杉元が捨てて身で回収してくれた辺見から皮を剥いで、用済みになった遺体を今度こそ水葬する。

ただ船から捨てただけとか言ってはいけない。海洋生物さんたちの栄養になるのでオールオツケーです。一応、拾われても個人が特定できないように杉元が顔面を滅多刺しにしていたけど、それでも大丈夫なんです。

「大丈夫か、タマ？」

「うん……だいぶ良くなってきた」

人間の解体現場を見つつ船酔いが改善するの、倫理観のバグで草。いや、俺のことは別にどうでもいいんだけど。

それよりだ、

「はああ」「む、」

隣に座るアシ×パの体を、抱きしめる。柔らかく、温かい。命の手触りだ。

海風に吹かれてもさらさらの黒髪を優しく撫でる。ああ、生きている。

「アシ×パが無事で良かった」

思わず漏れた呟きに、腕の中から惚けたような青の眼差しが返ってくる。やべ、ちよつと馴れ馴れしかった？

しかし、アシ×パは次いで照れたように笑んで、手を伸ばしてきた。同じように頭を

撫でられる。

「……タマは大袈裟だな。私は平気だ」

「……………」

——杉元佐一ならば。もっと上手くやったのだろう。原作の通りに。

俺が女だから上手くいかなかったのだとは思わなかった。それは事実のようでいて、都合の良い責任の転嫁だ。俺が不死身の杉元でも脱獄王白石でもない、ただの「俺」である限り、この思考はつきまといていくのだろう。

「ごめん、杉元も……寒くない?」

「ああ。タマさんこそ怪我しなかったかい?」

「大丈夫」

頷くと、向かいに座る杉元がにと歯を見せて笑った。

「しかし……あんた、相変わらず度胸があるな」

今のところ、変に疑われたりはしていないようだ。

「……第七師団も刺青囚人も、もはや銃を担いでもらうだけで怯んでくれる連中ではないし。それで戦闘員として頭数に入れられることもあるだろうから、やっぱり戦わなきゃ」

言いながら、考える。

今回のことで改めて見えてきた、重大な懸念事項。

——やはり俺は、俺が思っていた以上に殺人に対する抵抗がなさすぎる。まあ、辺見はともかくとして。

良くない。これは、だいぶ良くない発見だった。

17歳の尾形の思考は理解できないと思っていたけれど、あれはただ、当時の俺が抵抗する手段を持っていなかっただけだった。

もし、山で男に襲われたあの時。俺に銃があつて、使い方を知っていたならば。——俺はとっさにやつを撃ち殺していただろう。そんな、嫌な確信があつた。

何故。

最も効率が良いやり方だからだ。

殺しさえしてしまえば、最短距離で目前に迫る危険を取り除くことができる。

当時の尾形が語ったことを、今になって揺るぎない事実として受け止めた。

きつと、人はどうすれば人を殺せるのかを本能的に識っている。脳を使わずそれができる。殺さずに無力化するためには思考が必要だ。

ただ、その「本能」を大抵の人間は無意識下でセーブしているのだろう。

それが無い人間は「とっさ」で人を殺せてしまう。それは例えば辺見や、杉元や……俺だ。

——まずいな、

改めて思う。

俺は極力、人を殺すべきではない。

例え、その結果として俺が殺されても。

それは、尾形に語る持論に説得力を持たせるためである。罪悪感のある人間がそれを口にするから意味を持つのだ。欠けた人間が同じことを言っても机上の空論に過ぎない。

少なくとも、尾形の前でうっかり殺してしまうのは絶対に避けるべきことだ。

その場合、きつと尾形は異母弟（偽）が局部を振り回していた時並みの素敵な笑顔を見せてくれるだろうが、その時点で俺たちの旅はバッドエンドがほぼ確定してしまう。

極力、抵抗しないことに心を砕こう。

殺すくらいなら殺されたほうがまし。

しかしまあ、やはり銃など覚えるべきではなかったな。俺も、尾形も。

——…とか言つて、今まで二瓶とか辺見とか当然のように殺そうとしてたろ。

セルフツツコミ。

どの口が、という話である。いや、だからこそ、と言うべきか。

覆水盆に返らず。一度喪失してしまえば、二度と清い体には戻れないのだ。

本当に、今後は気をつけなければ。

「……………うん」

……いや、やっぱ辺見は別に良くない？

俺を殺した相手を俺が殺しても、発生した罪が相殺されてニユートラルな状態に戻るだけで（謎理論）。

「おい、見てみるよ」

——白石の漠然とした呼びかけに、思考の沼から引き上げられる。

とにかく、やるべきことは決まった。

これ以上だらだらと考えるのはよそう。

船縁から身を乗り出し、白濁して揺蕩う海面を覗き込む彼に向き直る。

「この白く染まった海水……全部ニシンの精子だぜ」

「精子？」

「ニシンのメスが海藻とかに卵を産みつけて、オスがそれに精子をかけるんだ」

「精子？」

スルー安定白石。聞かれて困ることを口に出すんじゃない。大人は汚ねえよ。

「お、……いいものが流れてきたぞ。高級食材、子持ち昆布！」

掬い上げられる……なんかカビちやいましたみたいな昆布。第一印象が失礼。

さすが明治の北海道、自然が豊かである。腹が減っていたらしい白石は嬉しげなく

ほく顔だが、俺は違うところが気になってしまった。

「子持ちって言うけど……それ別に昆布の実子じゃない……」

「後妻……いや托卵か……?」

「やめな〜?」

「精子?」

昆布の親権が無から発生しているが、単に産卵床ごと卵を食っているだけである。

そして頑なにスルーされ続けるアシ×パの疑問。どつちか教えてやれよ。

で、結局俺にお鉢が回ってくる。

「タマあ、精子ってなんだ?」

「精子っていうのはねえ、」

「タマさん女の人そんなこと言っちゃだめえっ」

杉元に勢いよく制止される。精子だけに、じゃなくて。

面倒臭えな、摩羅を女陰にくとかそういう話をしてる訳でもないんだから黙つとれ。

明治の価値観とはいえ俺がはしたない女扱いされるのは腹が立ったので、翻つて杉元を刺してみる。

「杉元……精子も卵子も別に人間だけのものではないし……こんな単なる知識の話でいやらしく感じてしまうのは、単にお前がいやらしい男だからなんじゃないか?」

「エエッ」

予想外の展開に、なぜか頬を染めて目を剥く杉元。やめろ、俺がセクハラしたみたい  
な……いやこれセクハラか？

「杉元はいやらしい男なのか……？」

「えっ違っ違うよアシッパさん!」

アシッパがやけに神妙な顔でその幫助をしてくる。年端も行かぬ少女に言われるほ  
うが心的ダメージがあるのか、杉元は赤い顔を今度は青くした。

「動物なら新たな生命を生み出す、人間ならお互いの気持ちを確かめ合う、そういう本質  
を無視して助平なところにしか目が行かないんだからそういうことだよなあ……？」

「杉元お……」

「いやらしくない！俺いやらしくないもん！」

「ねー何の話？」

昆布をぽりぽりかじる白石が口を挟んでくる。えーと……精子の話だっけ？ どち  
らにせよロクな話題じゃない。

「……で、その精子っていうのは男側が持つてる子どもを作る素で、人間だと普段は金玉  
の中に入ってるんだよ……タマだけに」

「そうなのか」

「ウフフ、タマちゃんってマジでクソみたいなダジャレ好きだよねえ」  
「んもおくタマさんっ！」

俺の激ウマギャグをクソみたいなダジャレとは何事か。けしからん。

「百之助も好きだから」

「確かになんか言ってた気がする」

この状況で不死身の杉元は手に負えん、片腕だけに。

絶体絶命の状況で何言ってるんだ？ 身内のネタは積極的に擦っていくスタイルです。

どっとはらい。

「あ、タマちゃん子持ち昆布食べる？」

「食べる」



## 14話 人魚の夢

辺見の皮を手に入れてから。

何やかんやシャチ食ったり土方歳三と会ったりしつつニシン場を出た俺たちは、コタン近くの川でキロランケに遭遇していた。白石を餌にして(?)釣り上げたイワンオンネチエ?カムイもとい、クソデカイトウの姿焼きを囲みつつ、話をする。

……こう要約するとなんか食ってばっかだな。

「目玉しやぶっていいぞ杉元」

「おつきい」

「もう一個あるからタマも食べろ」

「やった〜?」

イワンオンネチエ?カムイから穿り出されたクソデカ目玉をしやぶらされる杉元(と俺)を眺めていたキロランケが、そこで小さく反応した。

「杉元……」

茹でダコの味……? 熱が通ってタンパク質が変質してしまっているのか、硬くてかじれそうにはない。あむあむ。なんかボールとかにして遊べそうですね。

「不死身の杉元か？」

「あつっ」

無理に歯を立てたら、薄皮から煮汁が飛び出してきて火傷しそうになった。なんか周りはシリアスムードになりつつあるのに。

「……なぜそれを？」

その一瞬で。隣の男の顔が、魚の目玉べちやべちやしてヒンナヒンナしていた杉元佐一から、不死身の鬼神に切り替わる。

アシ~~パ~~と白石に緊張が走る。

しかし、杉元がそんなクレイジースイッチボーイであることをまだ知らないキロランケは、優雅にキセルの煙を燻らせながら、

「俺は第七師団だ」

「……………」

杉元は、そこで静かに目を細め。けれど、銃剣に手は伸びなかった。代わりに、  
「……尾形百之助という兵士を知っているか？」

え、そこ聞いてくれるの？

そう問われたキロランケは当然、

「いや……知らんな。少なくとも俺がいた小隊に尾形なんて男はいなかった。俺は既に

除隊して村で生活しているから、誰とも関わりはないし……」

それはそうだ。彼は鶴見中尉の直属の部下ではない。……なおのこと、別の師団にまでその名を轟かせる『不死身の杉元』の異質さが際立つ訳だけだ。

聞いた杉元は、静かに視線を落とす。

「鶴見中尉の手下ではない、か」

「……………」

その呟きを耳にして、思う。もしかして、尾形のことを聞き出すついでに鶴見中尉の手下かどうかを炙り出す一石二鳥テクニク？ 頭良い。怖い。

それを知ってか知らずか、キロランケは至つてのんびりとした雰囲気のまま、

「名前と顔の傷でピンときた……不死身の杉元、こんなところで戦争の英雄に会うとはな」

そこで、傷跡が横断する頬に微かな笑みが浮かんだ。自嘲の微笑みだった。

「英雄なもんか。……死に損なつただけだ」

死に損ない。聞いたばかりの八尾比丘尼の話が思い浮かぶ。人魚の肉を食って、不老不死になった娘。死に時を逃した哀れな子。

俺が考え込んでいる間にも、終わつた戦争の話題に拘泥するつもりはないらしいキロランケは、どんどん話を進めていく。

「アシ×パは、どうしてこの人たちと一緒にいるんだ？」

緊張が解け、再びイトウにかじりついていたアシ×パが顔を上げて。杉元を見た。

「——相棒だ、」

相棒。尊く煌めくその響きに、杉元が眩しそうに目を細める。

「そしてこつちの白石は役立たずだ」

きらきらお目々でサムズアップ白石。役立たず同士、強く生きていこうな。

で、最後に俺に向き直ったアシ×パが何を言うのかと思えば。

「あと、このタマはメコだ」

「猫ではないんだけど」

どんな説明の仕方だよ。さしものキロランケも微笑の中に「猫……？」みたいな疑問符を浮かべている。

「ヒトです」

「そうか……アシ×パがそう言うなら信用できるんだろう」

あつ今この人テキトーに流しましたよ。

「今よりもっと小さい頃から恐ろしく賢い子どもだったからな……最後に会ったのは、」

お前の父親の葬式か。

……ウイルク。

葬式といつても当のウイルクは生きていた訳で、弔われた遺骸の正体は存在しないと思われていた8人目のアイヌ——キム□□だったはずだ。

「戦争から戻っていたなら、会いに来てくれればよかつたのに」  
「行つたけど、お前はいつも村にいないと聞いたぞ」

ちよつとむくれるアシ□□パに、昔馴染みの保護者らしい柔らかい笑みを向けるキロランケ。それがおもむろに引き締まる。

「——だから、俺はここで待つていた。お前に伝えることがあるのだ」

「……？」

キロランケが言うには、ある日、年老いた和人が村に来た。

その和人はある女性を探していると云つていた。その人の名は、*“小蝶辺明日子”*。

「私の和名だ……！ どうして、その名前を知つてゐるのは死んだ父と母だけなのに、」

かつてなく動揺を見せるアシ□□パ。色んな意味で蚊帳の外な俺は、明日子はともかく小蝶辺つてどういう意味なのかと考へたりしていました。

「網走監獄で起きたこと……俺は既に知つていた。のつぺらぼうは、外にいる仲間に囚人が接触できるヒントを与えていた」

それが、『小樽にいる小蝶辺明日子』。

網走監獄にいるのつぺらぼうは、父母しか知らないアシ□□パの和名を元に、彼女に金

塊を託そうとしていた。それが意味することとは。

「——のつぺらぼうは、アシ×パの父親だ」

ゴールデンカムイという作品の、その核心に触れる情報に。アシ×パが崩折れる。

もちろん、杉元たちも混乱の渦中入りだ。

金塊が見つければ、仇どころか当のアシ×パの父が死刑になってしまう。

ならばどうする。どうすればいい。思惑が錯綜する中、最たる当事者が鶴の一声を放つ。

「……私は信じない。自分の目で確かめるまでは。だから、のつぺらぼうに会いに行く」  
異を唱える人間はいない。

娘のアシ×パがそうしたいと言っているならそうすべきだ。……では、どうやって？

アシ×パ。杉元俺の眼差しが、1人の坊主頭に注がれる。言うまでもなく適任がいる、  
「脱獄王、」

サンキューシライシ。

それはいいんだけど、キロランケなあ。どうしても、こいつ尾形と組んでウイルク殺すんだよな〜という目で見てしまうな。

「……こりや、随分と古い銃だねえ」

in 札幌。網走までの中継地点であるこの町で、俺たちは鉄砲店に立ち寄っていた。

道中で白石が遭難したりもしたけど、フチの家にいた谷垣が元氣そうだったのでオツケーです。そして相変わらずビビられる俺というね。尾形と扱いが変わらん。

話を戻そう。

それで、この三田火薬銃砲店の店主は、俺のライフルを見るなりそう言った。

「うちの店では弾薬も本体も取り扱ってないよ。これ、戊辰戦争時代の舶来品じゃないのかねえ。聞いたことだけはあるよ。なんでも、随分と高価な銃だったとか」

「……タマさんの親御さんって何者？」

「さあ……？」

戊辰戦争……天皇擁する新政府軍と、将軍擁する旧幕府軍の内戦だっけ？ 何度も言うが興味がないのでよく覚えていない。尾形タマが産まれる前の話だろうし。

実家、言われてみれば武家屋敷っぽかった気もする……と思いを馳せる俺に、店主が

慎重に声をかけてくる。

「飾って眺める分には価値があるんだろうが……鉄砲つてのは撃つて使うもんだ。見たところお若いようだし、そんなレトロな銃にこだわる意義は、あんまりないんじゃないのかねえ」

うーん、正論！

そして優しい。特に抵抗する根拠が見当たらない。尾形の忘れ形見というのは事実にしても、それこそ攻撃手段としての銃火器をお守りにしてどうするのだという話で。最初の彼の発言に立ち返ってしまう。

「安くしとくよ、三十年式」

優しいうえに商売上手。

かと言って、超個人的な理由から首を縦に振る訳にはいかない俺が黙っていると。

「……いや、とりあえず遠慮しとくよ」

隣で事の成り行きを眺めていたらしい杉元が、口を挟んできた。代わりに、やんわりと断ってくれる。

「な、タマさん」

「……うん、」

そして水を向けられたので、便乗して頷いておく。商売上手な店主はそこで無理に追



い継ることなく、また気が変わったらいつでも来てくれよ、とだけ言って引き下がった。サンキュースギモト。

その場から少し離れて、

「……ごめん、杉元」

「いや。大事なものなんだろう」

非合理的な判断だということとはわかつているつもりだ。何か言われても文句は言えないと思つたが、彼はここに来てでも思いやりがあつた。

「……女の人が銃を使うつてことは、並大抵の覚悟でできるものじゃない。その銃、あなたにとっては単なる武器じゃないんだろう。何となくわかるよ」

彼なりに理解を示してくれる。

優しいかよく。杉元との親密度が上がれば上がるほど、尾形との今後が不安視されるというのはとりあえず考えないでおこう。

その後、店主から近隣の空いている宿屋についての情報を得た結果。

いよいよやつてまいりました。札幌世界ホテルもとい、家永カノの殺人ホテル。

——で、肝心の部屋割りだが。

辺見和雄の件で、戦闘力たったの5のゴミとアシ×パを組ませてしまったのが流石に杉元の反省点となったのか、キロランケ・白石／アシ×パ・杉元・俺という組み分けである。俺はアシ×パとベッドを共有。

……いや、杉元が俺に手を出す訳がないという大前提はともかく、これはこれでどうなんだ？

「シンナキサ×」「シンナキサ×」

そして、先んじて家永に襲撃された白石が不在のまま、ホテルの廊下で牛山辰馬にも遭遇。デカアアアイツ、説明不要！

「……なに？」

「変な耳」

「それは柔道耳ってやつだ」

餃子耳って言ったりもしますね。

「アンタ、相当やってたね？俺は体質なのか、そんな耳にはならなかったよ」

素人目から見てもかなり鍛えているとわかる牛山に、戦闘狂の血が疼いたのか。杉元がぐいぐい距離を詰めていく。

「ほう……心得があるのかね？」

牛山が差し出した手を、杉元ががちり握り返し。一瞬の硬直の後——お互い掴み合

いになった。ええ？

すわ喧嘩かと思つたが、確か原作ではそうならなかつたはず。案の定、牛山はパツと杉元の胸ぐらから手を離して、

「……このままでは殺し合いになる。こんなに強いやつは初めてだぜ、気に入った……」  
ふすん、と得意げに鼻から息を吐く。

「奢つてやる！ 飲みに行こう！」

やったあ、奢りだあ。

まあすぐに殺し合うんですけどね。

またまた場所が変わつて、西洋料理が売りという『水風亭』に連れて来られる。今日は移動が多い。ちよつと疲れちやつたよ。

さて、気を取り直して、本日の乾杯メニューは？

「エゾシカ肉のライスカレーだ」

カレーライス！

田舎暮らしの俺は、この時代で実物を目にしたのは初めてだったが、杉元は慣れた様子でスプーンを手に取っている。もしかして軍で食べたことがあったのかもしれない。

「オソマ……」

無論、アイヌの子であるアシ×パなんかは威嚇する犬の目で湯気立つ平皿を眺めている訳だが。

かと思いきや、隣でカレーを掬う俺をちらつと見て。口に含み、嚥下するまでをじつと観察してくる。え、毒味？

「おい、いよ」

慣れ親しんだ現代のカレーよりは本場志向というか、さらさらしていてスパイスが効いている。俺はインドカレーも好きなので無問題。

アシ×パは、そんな俺を見て恐る恐るスプーンを口に運び。ばくつと、勢いよく食らいついた。そして、

「……、……い」

だん、と拳で机を叩き。細い肩を戦慄かせながら突つ伏す。あまりの様相に杉元が見かねて呼びかけてきたが、彼女が言うには、

「ヒンナすぎるオソマ……」

いやオーバーリアクション。お前は美味しんぼの登場人物か。

しかもウンコであるという評価は変えないんだ？

——飲みに行く、という当初の発言通り、食事の後はビールの飲み比べ勝負（と言っ

でも飲んでるのはほぼ牛山)が始まった。

コップでちびちび飲んでる俺たちとは対照的に、牛山は一升瓶をラムネのようにガンガン一気飲みしている。正気か？

いつの間にか酔っ払って(発育に悪い!)牛山の額のハンペンをもぎ取ろうとするアシ×パ。それを酒の肴で眺める俺に、すっかり出来上がった杉元が声をかけてくる。

「タマさん全然赤くならないねえ……お酒つよおい……」

「酔わない訳じゃないよ」

ただ、酒豪揃いの親戚の集まりでしか酔ったことはない。それに、俺は酔うとものすごく機嫌が悪くなるらしく、最終的にあまり飲むと言われていた。別に酒の味自体は好きじゃないから良いんだけど。

「お嬢ちゃん、良い女になりな……いいか、男を選ぶ時はチンポだ」

そしてアシ×パの凶行を笑みひとつで流す心が海より広い牛山、彼女に対して未成年にしてはいけないタイプの絡み酒。

持論とはいえ偏った言説すぎる。アシ×パを性豪にでもするつもりか。

「チンポは海で見たけどお……なんか、……フツッ」

しれっとアシ×パも杉元に気があるということをゲロっているが、どいつもこいつも酔っているせいか誰も気に留めない。俺もカプ厨ノスタル爺ではないので軽く流す。

「ねえ、男は寒いと縮むんだよ？ 伸びたり縮んだりするの知ってる？ アシ□パさん」

「私は良いチンポだと思つたよ、杉元。ナイスちんちん」

「ほんとオ〜？」

乗つておいてなんだが、何の話なんです？

抱くとかどうとか、中身男の鉄の処女にはほぼ無縁の話だな。強いて言うなら尾形が吝かでない寄りの吝かであるというだけで、俺は基本的には男に体を許す予定はない。まあ、その尾形も大概ヘタレなので。

「大きさの話じゃないぜ〜？ その男のチンポが “紳士” かどうか……抱かせて見極めろつて話よ」

「そのとーりー！」

牛山の自説に、最終的に妻子をコタンに残して樺太で息絶えるキロランケが熱い同意を見せる。ウイルクもやべーけどこいつもじゆうぶんやべーよな。

で、今度は俺をじつと見てくる牛山。何だよおと思つたのもつかの間、

「あんたもかなりの美人だが、うーん……ちつと色気がな……」

「銃持つてるからでは？」

和装にライフルの女、インディーズホラーゲームの敵キャラみたいだもんな。

エロい以前にミスマッチかつシニール。峰不二子がモーニングスター持つてるよう

なもんである。

「ま、でも、そんだけの器量良しならすぐに良い男が見つかるさ。嬢ちゃんもだが……特に肌が白いのがいい。七難隠すって言うだろ？」

「はあ……」

別に、こいつに見初められてもいいことないしラツキーか。そんなことを思う俺の目の前に、牛山が空にした何十本目のビール瓶がダアン、と勢いづけて置かれる。

「よしッチンポ講座終わりッ！ 帰るぞッ！ 女将が部屋で俺を待っているッ！」

「せんせーごちそうサマー」

それで、眠くなる前にお開き……となつたのはいいのだが。

「ちよ……アシッパ？ 寝てる、」

いつの間にか、アシッパがセミの如く俺の背中にしがみついていた。おまけに、酔っていたせいか既にぐっすりのようだ。

「髪食うな」「あら〜」

夢の中でも何か食べているのか、もしやもしやと掃除機のように口に吸い込まれていくポニーテールの先っぽを取り上げる。唾液でべっちょよべちょ。

いやちよつと……平均的成人女性である俺が、12歳の児童を背負ってホテルまで帰るのは、物理的に無理があるんですけど？

「剥がれな、……え、子泣き爺？」

「そのまま連れて帰るしかねえなあ」

寝てるくせに力が異様に強い。もはや怪異の類である。そして他人事キロランケ。支払いを済ませた牛山は既にこの場にいない。

「……………マジで背負って帰るの？」

「荷物持つよ」

杉元が雀の涙ほどの配慮を見せてくる。

あの、荷物はいいからアシ×パごと俺をおぶってくんない？

「重いつ」

「アシ×パさんは本当にタマさんが好きだなあ」

結局というか案の定というか、別に近くもないホテルまで俺がアシ×パを背負って帰ることになった。何これ、拷問？

アシ×パに定位置を奪われた銃を代わりに背負ってくれている杉元が、隣からのほんとしたコメントをかましてくる。

苦痛で埋め尽くされていた脳内にポップアップしてきたその発言に、思考が止まっ



た。

「……そう、なのかな……」

よく、わからない。

信頼するとかしないとか。愛しているとかいないとか。好きとか、嫌いとか。

もしかすると、そんな空っぽの人間に愛しているなどと嘯かれる尾形百之助の不幸具合もまた、原作と大差ないのかもしれない。

黙ってしまった俺に何を感じたのか、

「……でも、本当に、頼りになるって感じがするよ。俺もそう思う」

杉元視点からもフォローが入る。

まことに……？

「……、そう思ってもらえるのは、有り難いこと、なんだろうけど、ね、……」

「ああ。アシ×パさんは、あんたを信用してるはずだ……」

この時点で深い意味はないんだろうけど、将来的にアシ×パの手を振り解く可能性もある身からすれば耳が痛いぜ。

「……ありがとう。期待に応えられるよう、頑張るよ」

「……………」

今度はなぜか杉元が黙ってしまった。あれ、そういうことじゃない？

——で、異常に時間をかけつつも、何とかホテルに帰着。

「はあ、」

道中の階段なんかはさすがに杉元の助けを借りながら、どうにかこうにか部屋までは辿り着いた。

ベッドに腰掛けた途端、見計らったかのように背からぽとりと落ちて、ぐうぐう平和な寝息を立てるアシ×パ。それはいいのだが、唾液でびちよびちよの肩が冷てえ。

「……杉元」「ん〜?」

彼女の荷物を、ベッドの端の邪魔にならない位置に寄せつつ。扉の近くでしゃがみ込む杉元に呼びかける。……明らかに酔っ払って眠いです、みたいな返答に不安を覚えたが、とりあえず続けてみる。

「キロランケに会う前に……人魚の肉の話をしたと思うけど」

「にん……ぎぎよっ」

「おい」

FXで有り金溶かしたみたいな顔してる。

こりやダメかと思ったが、杉元は若さの感じられない掛け声とともに立ち上がり。

「いや……覚えてるよ、不老不死の話だろ?」

軍帽を目深に被り直して、ベッドに横たわった。それ寝る姿勢じゃんと思いつつ、言

葉を繋ぐ。

「あの時。杉元は、死すべき時に死ねないつらさ、と言っていたけれど、」

それを聞いて、考えたこと。

不死身などという大層な二つ名をつけられた彼。実際に死んでも死なない俺。

メタ的に言えば、杉元佐一はこの物語の最後まで生き残る。それはわかっている。わかっているけれど。死に損なつた、とキロランケに語つた彼を、見つめる。

「あなたは……『不死身の杉元』には、今まで死すべき瞬間があつたと思つている？」

我ながら無礼な質問だと思つたが、杉元は落ち着いていた。少なくともそう見えた。

「……どうなんだろうな。でも……『人魚の肉を食べた瞬間』はあつたのかもしれない。俺が気づかなかつただけで」

人間をやめた瞬間。

不死身になることを選んだ瞬間。

それでも叶えたい願いがあつた。だから恐れなかつた。杉元が大きくあくびをする。澆刺とした喋りが眠気で蕩けていく。

「タマさん、俺はね……まだ、どうしても死ぬ訳にはいかないんだ、……あの子に、梅ちゃんに、アメリカで目を治すための金を渡してやらないと……」

「梅ちゃん？」

「ああ……好きだったひと……俺は幸せにしてやれなかったけど、」

明らかに寝落ちる寸前のせいとか、かなり細かいことまで話してくれる。アシ×パとい、既に知っているプライベートな話を本人の口から聞くのは謎の気まづさがある。

「杉元は優しいな」

ふ。小さく息を吐き出す音がした。笑ったのだ、と少し遅れて気づいた。

「……あんただって、尾形百之助が心配でわざわざここまで来たんだろ……アシ×パさんにも良くしてくれるし、……優しいよ」

「……………」

優しい——その評価からは目を逸らして、尾形について考える。

そうだ。俺も同じなのだ。何が何でも生きて、あの列車に乗らなければ。

「……ああ。俺も、まだ死ねないんだ」

独り言じみた呟きだったが。杉元からの反応はなかった。顔を上げる。

「……………杉元？」

「グー」

いや普通に寝てて草。

寝づらそうなので軍帽は取ってやろうかとも思ったが、結局すぐに起きて動き回ることにするはずなのでやめておいた。

「……………」

静かになった部屋で、俺もベッドに体を横たえる。

天井を見つめる。家永カノを思う。

若い頃は力強く、美しかった。他人から奪ってまで最高の自分にしがみついた。

「……老いとは病か？」

戻りたい輝かしい過去なんでものは、俺には思い出せそうもなかった。

過去とは単なる足跡だ。それを見て想起されるのは、かつての俺がその場所を歩いたという事実だけ。そこに羨望が入る余地はない。

「『足りない』ことは悪なのか？」

欠けた人間。非難する意図を含んで放たれたかつての言葉を、朦朧と反芻する。

欠けている。何が。……『理想』か？

「他人から奪って理想が手に入るものか？」

それさえ結局は無いものねだりだろう。

そんな都合の良いことが簡単に起きる訳もない。あの家永も、本当に望んでいた『完璧』を手に入れることは叶わなかった。

尾形百之助のことを考える。父の愛を求め、愛してくれた異母弟を殺して成り代わろうとした彼のことを。

人間は自分以外の誰かになることはできない。

胸元に手を当てる。着物越しに、前世では存在しなかった柔らかな膨らみに触れる。それでも、何の感情も湧いてはこなかった。

「俺は、尾形タマにはなれない」

俺はどこまで行っても俺のまま。

いくら外見を取り繕っても、それだけなのだ。悲しくはなかった。そうなのだろうな、と思ったただけだった。

「……………」

俺がこの旅で得られるものは何も無い。

事実を、事実として受け止めた。

「……………俺も寝よう、」

微かに甘い匂いが漂ってくる。

これで寝て起きたら即で家永との戦闘かと思うと、普通に嫌だな。

眠いので寝ますけど。

## 15話 我ら不死トモ

ぎし、と木製ベッドが軋む音を、眠りという膜に包まれた意識の外側で聞く。ゆつくりと、浮上する。

……もう朝？ いや違う。

眠る直前に留めていた思考が、アドレナリンに変換されて脳味噌を叩き起こす。

これは、

「……………っ、」

瞼を開ける。

ランタン片手に、隣に横たわるアシシパを覗き込もうとする細身の人影。

——家永カノ！

「……………」

俺の覚醒に気づいた家永が身構えるより。

俺が、枕元に備えていた銃を掴むほうが早かった。

その横っ面に、渾身の力で振りかぶった銃床がクリーンヒット。それでベッドから転げ落ちる家永——と思いきや、やつはその直前に、俺の着物の袖を掴んでいた。

「ぐえ」

2人揃って床に落下。

え、俺には言い訳さえしてこない感じ？ 勝てると思われたか。

一手早く動いた家永が、無言でのしかかってくる。何とか掴んだままだった銃で応戦しようとしたが、今度は俺が遅かった。首筋に走る鋭い痛み。

「っ、！」

視界の端に、細い指先に押し込まれる注射器のブランジャーが見えた。

——打たれた。何を？

クソ、

「家——」

その瞬間。

ドパン。

ビンタを1000倍強烈にしたような、何とも形容しがたい打撃音が鳴り響いて。

次の瞬間には、家永が目の前から消えていた。代わりに視界を縦断する、ロングブーツに包まれた長い足。

「てめえ……何してんだ？」

——さすがにこの騒ぎで目覚めたらしい杉元が、静かな怒りを滲ませて、たった今蹴



り飛ばした家永を見据えていた。

それから足元にいる俺を横目で見て、庇うようにやや前に出る。優しい。

慌てたのは家永のほうだった。銃持つてるとはいえ俺だけならともかく、杉元相手ではさすがに勝ち目がない。正面から突破するのは不可能と見たか、鼻血と涙を美しい顔に垂れ流しながら、

「っ、い、いいえっ、私はただ……先ほどホテルに戻られた時、お子様の具合が悪そうだったので、様子を見に来ただけなんですっ」

今さら言い訳。そしてどの口。俺のことは完全に殺しに来てたろうが。

ただ、当の杉元の敵対メーターは既に振り切れてしまっているらしく。瞳孔の開ききった瞳で彼を睨みつつ、淡々と問うてみせる。瞳孔の開き

「おい……どうやってこの部屋に入った？」

「……え？」

予想外の質問だったらしい家永が、目を瞬いた。いつもの癖か、あるいは何か策があつてのことかは知らないが、こいつは隠し通路からこの部屋に入ってきたのだろう。

俺のほうもそれがどうした、と思つたところで。

「つつかえ棒してあつたのに——どこから入ってきた、って聞いてんだよ」

家永が扉に目をやって。その怪訝そうな表情が、一瞬でわかりやすく凍りつく。

俺もつられて視線を向ける。——先端を床板の隙間に噛ませる形で戸に立てかけられた、杉元の銃剣。よく見ないまま、扉の前で何をやっているのかと思っていたが、ちゃんと仕事していたのか。

杉元が家永の気を引いてくれている隙に、立ち上がって銃を構える。その瞬間、扉が激しく軋んだ。誰かが、外側から強く叩いている。

「杉元！ タマちゃん！」

白石の呼ぶ声。場慣れしていない俺はとっさに振り返ってしまったが、杉元は家永から目を離さない。

「入れてくれッ、このホテルはヤバい！ 地下の拷問部屋に死体があつた！」

曰く、女将は刺青囚人であり。

以前話していた、『同物同治』の思想の下に患者を監禁してその肉を食らっていたという元医者 of 囚人だと思われること。そして、このホテルは彼の見初めた「獲物」を捕らえるための罠そのものであるということ。

「……こいつのことか……同物同治だから……のを信じて、人を殺しまくったジジイ……」  
で、別に入れてはやらない杉元。この状況で銃剣取って扉開けてくだと隙生まれちゃうからね、しょうがないね。

「俺たちの肉も食うつもりだったのか？」

杉元の詰りに、家永が微笑を漏らす。小鳥のさえずり、澄んだ鈴の音。誰もが聴き惚れる可憐な——他人から奪ったその響きで、彼が囁く。

「若さ、強さ、美しさ——充実した生への渴望……結局、ひとは無いものねだり。欲深い生き物なのです」

でも、見てください。

「私は正しい、」

恍惚と胸を張る家永に、今度は杉元が笑みをこぼす番だった。

「同物同治だなんて、そんな都合のいい話があるかよ……自己暗示だろ？」

でも、人体におけるプラセボ効果って馬鹿にならないみたいですね。

ただそんな現代知識はさすがにない煽り耐性ゼロ家永、こめかみに青筋を立てる。入念に塗られた白粉にヒビが入ったのが見えた……ような気がした。

「だが……確かに人間ってのは欲深い生き物だぜ。俺はてめえの刺青を引き剥がして、持ち去るつもりなんだからよ」

「……………」

家永の瞳から光が消え、

「あッー」

躊躇なく、アシ箱バ目掛けて放られる2本の注射器——いや、思い出した、これは杉

元が防ぐ、ならば今の俺がやるべきことは。

引き鉄を引く。

「づつ」「危つぶ」

俺が放った銃弾は、絵画の裏に入り込もうとしていた家永の肩口を掠め。ほぼ同時に、彼が続けて投げていた注射器が、俺の首筋を掠めていった。

ぎりぎりの攻防に俺が気を取られているうちに、いつの間にか家永は完全に姿を消していた。逃げられた。せめて、腕でもなんでも直撃さえしていれば時間稼ぎにはなったかもしれない。

そのやり取りで俺がトチったことが悟られたか、立ち上がった杉元が振り返らないまま、

「白石！ 女将が逃げたぞッ」

「ええええ？」

ばたばたと、扉の向こうの足音が遠ざかっていく。同室のキロランケを起こしに行つたらしい。

そこでようやく余裕ができたのか、注射器をベッドに投げ捨てた杉元がこちらに呼びかけてくる。

「タマさん、大丈夫か」

「うん……」

とつさに首筋へ手をやろうとして、やめた。代わりにただ頷いておく。何を打たれたのかはよくわからないけれど、今のところ、体に異変はない。

だから、大丈夫。

大丈夫——ということにしておいた。

杉元こそ指は平気なのかよ。普通に血が出ているみたいですけど。

で、ちよつとほつとした顔の杉元、今度はこの騒ぎでも眠ったままのアシ×パに視線を移して、心配そうな顔に逆戻り。

「アシ×パさん、」

「息はある。もしかしたら、薬……ガスか何かで眠らされているのかも」

「ガス？」

不運な夫婦の旅行客も言っていたが、甘い匂いの正体はそれだろう。

「俺たちは目が覚めたが……」

「アシ×パはまだ子どもだから、効き目を弱くしていたのかもね」

家永の独白を適当にぼやかして伝える。

彼はそうか、と相槌を打って、

「とにかく、女将を追わねえとだな」

それに異論はないのだが、この複雑怪奇な殺人ホテルの構造なんて、原作を読んでい  
たってわかりっこない。現状、俺は白石より役に立たないおそれがあるという訳だ。

「あの人……どこから来て、どこに行ったんだろう？」

「あいつ、つかえ棒してたのに部屋に入つて来やがった。もしかしたら、やつしか知ら  
ない抜け道みたいなものがあるのかも……厄介だ」

きつちり役目を果たした銃剣を床から引っこ抜きながら、杉元がぼやく。よく研がれ  
たその刀身を眺めながら、

「……タマさんはここにいて、アシ×パさんの目が覚めるまで守つてやつてくれ。俺は  
あいつの刺青を、」

ドオン。

突如、鳴り響いた轟音。同時に部屋全体が激しく振動する。

「うわ」

「キロランケの手投げ弾か!？」

開けた扉から顔を出した杉元が吼える。確かこれは、キロランケの荷物から手投げ弾  
を拝借した白石の犯行だった気もする。

俺も廊下の様子を窺う。煙臭い。奥のほうから白煙が漂ってきている。

——その霧の中から飛び出して来る、この時代では珍しい黒のドレス姿。

「……………」

「……………向こうから来た、」

隣の男が獯猛に笑んだ。

その前に悠々と立ち塞がる杉元。直後、家永の背後の壁を突き破つて、スーツ姿の巨漢が現れた。牛山だ。

前門の虎、後門の狼。わかりやすく追い詰められた家永は、虎と狼を競わせて、漁夫の利と決め込むことを選んだらしく。

背後に迫る牛山を示して、

「——こちらのお客様も刺青の囚人でございますよおお!!」

そう、高らかに叫んだ。

「不敗の牛山」様ですッ」

で、瞬きした次の瞬間には。

どんがらがっしやん。

「えええ」

家永そつちのので取っ組み合いを始めた2人が、当然のように壁をぶち壊して隣の部屋に転がり込んだのが見えた。何ここ、壁の薄さレオパレス並み？

「……………」

……え、この状況で俺はどうしたらいい？

「……とりあえず……白石たちと合流、」

はい。

もはやできることは何も無い。

まだ目覚める気配のないアシ×パを抱えて部屋を出ようかとも思ったが、俺では逆に危険だ。とにかく、一番力のあるキロランケに彼女を回収してもらって、ホテルを脱出する準備をしなければ。

「白石！ キロランケ、っ」

いや、部屋どこだっけ!?

兎にも角にも、廊下を回り込んだところで。

数歩先の壁をまたもや襖か何かのように軽々突き破って、もつれ合う男2人が目の前に転がり出てきた。

「——は、!?!」

杉元と牛山!

なんてタイミングの悪い。

驚愕に立ち尽くす俺の目の前で、

「この野郎ッ」



牛山の剛腕で天井、壁と交互に叩きつけられる杉元。取っ組み合いでそんななることある？

……で、その背中が床板にめり込んだ方がいいが、いや良くないが。

「えっ!？」

隠し通路を塞いでいた部分だったようで、薄い板一枚を突き破った杉元は、そのまま階下へと真つ逆様。危ない、わりと俺のすぐ足元まで穴が空いたぞ。

「おわ~~~~~……」

ドップラー効果で音を引きずって遠ざかる断末魔（ではない）に、牛山は心底落胆した様子で、

「くそッこれからだつたのに……………ん？」

あつやべつ。

牛山と、目が合った。頭の中で戦闘！ポケモントレーナーのBGMが鳴り響く。

紳士牛山、明らかなクソザコナメクジを見逃してくれそうな雰囲気では……………無い!!

「……………」

杉元との戦いが中途半端に終わったせいか、まだまだ戦闘モードでこちらに向き直る牛山に、仕方なく銃を構えてみる。

……え、俺、ここで不敗の牛山とタイマン勝負しなきゃいけないの？ 銃一丁で？  
あんまりな状況に目眩がする。

——いや、目眩？

「あつ」

単なる比喩に止まらなかったそれに、視界が歪む。平衡感覚が狂う。

とつさにたたらを踏め——なかった。

爪先が空を切り。

「嬢ちゃんッ」

杉元はともかくただの女の俺が2階から地下に落ちれば死ぬと見たか、牛山が腕を伸ばしてくれる。

けれど、銃を持っていた俺は、当然その手を掴むことは叶わなかった。

「うわ~~~~~……」

危険な浮遊感。

ヤバい死ぬ、と思った、が。

「おぶえ」「あああ悪いっ杉元っ」

先んじて落下していた杉元の上に、ケツから堂々と着地することで難を逃れられた。いや、本当に申し訳ない。

「すまん本当に、怪我してないか、」

「あ、ああ……タマさんも、牛山から逃げてきたのか？」

「逃げてきたというか……」

「どういう質問？」

杉元をクツシヨンにすること前提で穴に飛び込むの、ちよつと畜生すぎると思うんだけどそういうことすると思われている？

「アルコール臭いな……」

あの高さから人間が落ちてきたらまず無事では済まないと思うのだが、さすがというべきか、杉元はピンピンしているようだった。危なげなく立ち上がる。

——問題があるのは、むしろ安全に着地できたはずの俺のほうだった。

「っ、……………」

目眩と吐き気が治まらない。

全力疾走でもしたみたいで心臓がばくばく脈打って、熱くもないのに嫌な汗が滲む。とつさに立ち上がれない。

……まずいな、これ。

「……タマさん？」

俺の異変に気づいてしまったらしい杉元が、振り返って、鋭く呼びかけてくる。まずい、既にもう「単純に疑問を持っている」というような生温い響きではない。

「大丈夫か」「……うん」

何とか、頷いた。

頷いたけれど——同時に、これは駄目かもしれないな、と思った。

原因は既にはつきりしている。家永が俺に打ち込んだ注射器の中身。攻撃手段として用いてきたので案の定というべきか、単なる麻酔薬の類ではなかったらしい。

しかし今になって、このタイミングで効果が表れるなんて。ついてない。毒……神経毒、ヘビ毒か？ 何にせよ、毒物ならば成人の致死量は優に超えていた可能性が高い。

解毒は当然、不可能。

何というか、辺見和雄の時も思ったが、主要人物補正が働いてない状態で主要人物っぽいことをするとこうやって普通に死ぬんだな。理解した。

病院で同じように注射を打たれた月島軍曹は2時間動けなくなるだけで済んだが（動いてたけど）、おそらく俺は助からないだろう。うんと言いつつ動く気配のない俺に、杉元が核心をついてくる。

「あいつに何かされたのか」

「……………」

ここで即座に酔いがうんたらとか言えたなら良かったのかもしれないが、一瞬流れた気まずい沈黙が全てを物語ってしまった。

クソ、家永め（責任転嫁）。

「……………すこし、疲れただけ……………休めば大丈夫だから、」

仕方ない。作戦変更だ。

このまま待っても俺の体調が改善することはないだろう。そもそも時間がないのだ。

何とか、早急に彼をこの場から離脱させなくては。——俺を見捨てさせてでも。

空間全体が揺れている。

「先に行け、」

俺はここで中毒死しようが焼死しようが圧死しようが生き返るが、杉元は無事では済まないかもしれない。ここは地下だ、地上部分が崩落してしまえば脱出するのにも手間がかかる。

……………それに、彼が行方不明となれば、アシ×パはとても心配するだろう。

何かが爆ぜる音が背後で聞こえた。アルコールに引火する。炎が立ち上がる音がする。

「必ず、後で追いつくから……………」

別に嘘ではない。死亡フラグの建設と約束の履行を同時に行う高度なテクニックス。す。

熱気が肌を舐めていく。時間がない。

だから、もう行ってくれ。

死ぬところを見られても困る。

そんな思いを込めて、掴まれたままの手首をぐっと引き戻す。が、

「駄目だ」

満身創痍関係なく俺よりも遥かに力のある彼は、微動だにしない仁王立ちのまま、そう言い放った。続けて、

「置いていけない。引きずってでも連れて行く」

いや、引きずるのは勘弁してください。

首を横に振るのすら億劫だった。

引つ張られたつてついでいけない。だって、

「杉元、……………」

もう、足が動かないんだ。

目の前が霞む。うまく息ができない。

項垂れたまま動かない俺を、杉元は黙って観察していたようだったが。

「あ………？」

伸びてきた手が、背負ったライフルのスリングを慎重に肩から下ろす。そのまま、  
「うわ」

急激な浮遊感。密着した右半身から高い体温を感じる。顔が近い。彼に抱きかかえられていて、とそこで気づいた。

背中には銃があるせいか、横抱きだ。でもこれでは両手が塞がってしまう。アシ×パは最悪、キロランケが運べばいい。けれど、成人女性とかいう邪魔なんてもんじゃない余計な荷物を持った状態で、原作通り脱出できるのか？

不安と、後悔と、反省が自由にならない体の内側で渦巻いていく、

「むりだ、」

「無理じゃない。俺を誰だと思ってるんだ」

食い気味に否定される。眩い晴天の瞳が得意げに俺を見下ろしている。

ああ、こんなところで死ぬ訳がない。

何故なら彼は、

「………ふじみの、すぎもと………」

蚊の鳴くような響きだったが、彼の耳にはしっかり届いたらしい。晴れやかに笑ん

で、

「ああー！」

優しいが過ぎるだろ。

俺が本物の女だったら普通に好きになってたかもしれない。顔も良いし。

助ける以前に自ら毒を盛って俺をブチ殺したどこぞのクソガキとは大違いですわ。

「ここから脱出するぞッ！」

あそこまで言われたら仕方ない、不死身の杉元に身を委ねるしかない。薄れゆく意識に抗わず、瞼を閉じる。

「……………」

……あと、お願いだから腕の中の俺が死んでることには気づかないでくれよな。

翌日。

倒壊したホテル跡地にて。

「もうそんなに動いて大丈夫なのか？」



——結局、あの後。杉元たちがホテルを脱出し、安全な場所に腰を落ち着けた頃には、俺は既に息を吹き返していたようだ。とはいえ、目覚めたのは翌朝だった訳だが。

折れた木材を持ち上げる背中に届いた少女の優しさに、微笑みで返す。

「うん。心配してくれてありがとう、アシ×パ」

諸々が死んでリセットされたおかげか、むしろ元気。

しかし、アシ×パは杉元に姫抱きされた俺をぼつちり見たはずだが、特にそれについてはコメント無し。普通に心配されている。あれ、もしかして俺って杉元たちに女と思われてない？

3人で瓦礫を漁る中、キロランケが戻ってくる。死傷者はまだ見つかっていないらしい。地下室にあるのかも、と言う彼に杉元は、

「——爆発の直前まで、家永も牛山も俺たちと同じ2階にいた、と白石が言っていた。地下に埋もれたとは思えん」

「2人とも、無事に避難できたかもしれないな……」

「そのハンペン捨てなさいよっ」

ホテルの前で拾ったらしい、ちよつと焦げたハンペンを意味深に見つめるアシ×パ。当然のようににべもない杉元。

それを少し離れたところで眺める俺は——昨日の夜のことを考えていた。

——杉元佐一は、尾形タマに危険が及んだ場合、自らの身の安全は度外視で助けようとしてしまうのだな。

アシシパにその傾向があることは何となく把握していたが、まさか杉元もとは。

若干、予想外だった。信頼ゆえなのか、アシシパのことを考えてか、あるいは彼の良心に基づいてか。まあとにかく。

——もう少し、身の振り方を考えるべきか。

俺の死に戻りに、残機1の彼らを巻き込んでしまつては元も子もない。死ぬならもつと見えないところで。そういうことだ。

会話の主題はいつの間にか、姿の見えない白石由竹に移っていた。

「そういえばシライシあいつ……どこ行った？」

「ススキノだろ。あのエロ坊主……」

杉元の悪態に呼応するように、

「だが、そのススキノで俺は、囚人の情報を掴んできたぜッ」

ぴこつと瓦礫の山から生えてくるタコ坊主。ススキノに行つてたことは否定しないんかい。

「網走の計画だつて上手くいく保証はないんだからよう、」

お前がそれを言つていいのか脱獄王。

「道すがら囚人の情報が手に入れば、そこへ向かってみるべきだと思っただよな！」

白石の神出鬼没のクズっぷりには慣れっこらしい杉元、顔色を変えずに、

「……で？ その囚人はどこにいる」

「日高だ」

ちなみに札幌から日高への道のり、約100キロあるそうですよ。

## 16話 見る女たち

白石が持ち込んだ囚人の情報をもとに、日高行きが決定したのはいいが。

札幌を出た俺たちは結局、苦小牧の勇払で足止めを食らっていた。ここで何かトラブルが起きた訳ではない。

強いて言うなら、問題の発生源は俺たちの懐にあった。

「キツネの皮は1枚1円くらいで売れる。カワウソも同じくらいで、ヒグマだと今年は5円くらい。木鼠はもつと安く20銭くらい」

油樽の罠で捕らえたキタキツネと、木に仕掛けたくり罠で捕らえたエゾリス数匹を指しながら、アシ×パが解説する。

それを眺める白石、顎をさすりながらしたり顔で、

「キツネ1匹で酒が6升、つてところかあ」

酒と女を好む生臭坊主——もとい今回の「元凶」に、杉元の冷やややかな視線が降り注ぐ。

「お前がホテルでキロランケの爆弾を台無しにしなきゃ、猟でカネ作って買い直す必要もなかったのに……」

白石由竹、迫真のてへぺろコッソ。

「腹立つなコイツ」

煩惱にまみれた成人男性のぶりっ子に、シンプルに殺気を漂わせる杉元。

そう、金が無いのだ。

ホテルの騒ぎがなければ日高に直行できていたところが、キロランケの手投げ弾がおじやんになったことで、買い直さなければならなくなってしまった。それで、足止め。

「杉元オ、それにな、この男は札幌で……」

「キロちゃんっそれ言わないでえ!？」

クソ雑魚白石力ずくの口止めも虚しく、あつさりその手を引き剥がしたキロランケは、

「……アシ×パから借りた金、競馬で全部スツたんだぜ」

「きやはあああツ☆言っちゃったあああツ」

さくつとクズムーブをバラされて、白石がこの世の終わりみたいな顔になる。

とはいえ、そんな顔をしたのはアシ×パ杉元のほうで。どこからか取り出したストウを素振りするアシ×パ、キツネ獲りに使った油樽を構える杉元。

「あのお金、博打に使ったのか……」

「樽の底の油舐めろ」

「やだあッ」

そしてその残当制裁を傍観する俺と、キロランケ。

「……しばらくここに滞在するしかねえな」

「そうだね」

ここにもアシパのフチの兄弟が住んでいるらしく、今晚は彼の家に泊めてもらえることになった。

しかし、彼が言うには、奇妙な客人は俺たち以外にもいるらしい。彼の話を同時通訳してくれるアシパによれば、

「……この間も不思議な女がこの村に現れ、居着いている。過去や未来が見えるというその女のせいで、村のみんながおかしくなっている」  
ちようど来た。

その発言で、全員が彼の指さしたほうを振り返った。こちらに歩いてくる、紅色のチンチリを身に纏った妙齢の女。

「インカマツという名の女だ」

出た、インカマツ。

彼女は悠々とこちらまで近寄つてくると、薄つすら刺青が入った唇を蠱惑的に緩め。紅で彩られた眦を細めてみせた。

「素敵なニ□。パたちがいらつしやいますね」

良い声（CV・能登麻美子）で囁いてくる。

着物の上からでもわかるスタイルの良さ、ミステリアスな美貌。リアルに間近で見ると普通に見惚れてしまうレベルの容姿であり、当然、白石なんかはメロメロである。

「白石由竹です!! 独身で彼女はいません!!」

「あら……頭から血が出てますよ?」

「釘のついた油樽を頭から被せられたんです!」

その怪しい情報、恋愛対象にする男としては普通に減点だろ。

で、インカ□マツ、頭部から流血する不審な坊主はとりあえずスルーで、

「私、顔に傷のある男性にとても弱いんです……そちらの兵隊さんも、とても男前ですね」

「……、そりやどうも」

真正面から美人に褒められた杉元、軍帽の鍔を下げてちよつぱり照れたご様子。しかしそれで面白くないのがアシ□バだ。隣を指さして淡々と、

「スギモト オハウ オ□ オソマ オワレ ワ エ」

「んまあ！ 臭くないんですか？」

何となく内容を察してしまったのだろう。杉元がぎよつとする。

「アシ×パさん!? 今スギモトとオハウとオソマ並べたよね!? また俺が汁物にウンコ入れて食うって勝手に教えたでしょ!!」

「言つてない」

「入れねーから!!」

「言つてない」

微笑ましいやり取りを見てにやつくキロランケ。ムーブがおじさん臭い。

そこへ、なんかいかにも占い師然としたポーズを取るインカ×マツが口を挟んでくる。

「あ……ちよつと待つて、あなたたちは……小樽から来たんじゃないですか？」

白石だけが迫真の表情で振り返る。

「ええ? どうしてそれを……?」

「大叔父の親戚が小樽に多いと誰かに聞いたんだ、きつと」

「なるほど」

白石の100倍冷静なアシ×パと杉元。白石、普通に詐欺とかに引つかかりそうで心

配だな。



「私、見えるんです。あなたたちは誰かを……あるいは、何かを探している」  
 「嘘でしょ!? すごいッその通りです!」

「……………」

うるせえシライシ。

ドヤ顔のインカマツが、肩から提げた鞆を開いて、何かを漁り出す。

「占いが得意なもので。『ニウオ』といつて、アイヌは事の大小に関わらず、何か判断に迷った時は占いで決めます。ニウオの結果は神の意志として、疑うことなく従います」

やがて取り出されたのは——木屑に包まれた小さな何か? インカマツがそれを丁寧に取り払うと、中から獣の頭蓋骨が出てきた。

「『シラツキカムイ』……占いに使うキツネの頭の骨です。柳の木の削りかけで作った木幣という祭具に包まれています」

「このシラツキカムイは、私の先祖代々から伝わる頭骨で、最も霊力の強い白狐の頭です」

莫座を広げて、地面に敷く。その上に正座して、頭蓋骨の下部分を頭に乗せる。

「占う時は、まず下顎の骨を頭の上に乗せます」

「ゆっくり頭を下げて落とし、落ちた具合で物事を占います。歯が上になれば良い兆し

です……」

「あなたたちの探し物が見つかるかどうか、占いましょう」

上体を傾けたインカマツの頭頂部から、キツネの顎が落ちる。緩やかな軌道を描いて莫塵に墜落したそれは、

「——歯が、下を向きました。希望は持ってません」

沈黙が、流れる。

「不吉な兆候を感じます。予定は中止すべきでしょう」

マジかよ、と白石が小さく呟いた。杉元は無言。キロランケはしらけた顔をしていたが、そんな中でアシバはきつぱりと、

「何にでも当てはまりそうなことを、当てずっぽうで言っているだけだ。私は占いなんかに従わない。新しいアイヌの女だから」

バーナム効果ってやつつすな。

しかし、インカマツはここに来て冷静だった。薄く微笑んで、シラツキカムイを鞆に仕舞う。

「……そうですか。飽くまで占いであって、指示ではありませんから」

ところで。

「探しているのは、お父さんじゃありませんか？」

自然と提示された正解に、さしものアシ×パも小さく息を呑んだのがわかった。隣の白石はもつとわかりやすく伊藤潤二作品のやられ役みたいな顔。こいつ何なの？

「まあ、当てずっぽうですからお気になさらずに……」

イカツカ×・チロンヌ×？め。アシ×パが忌々しげに呟いたのが聞こえた。

微妙な空気が流れたところで、

「あら、お綺麗なカツケマツ……」

インカ×マツが、俺に声をかけてくる。カツケマツてなに？

「あなたは……また別に、無事が気になる方がいらつしやるようですね？」

「……………」

思い当たる節は、もちろんあった。

それはアシ×パも同じだったようだが、さっそくインカ×マツへの好感度がマイナス

振り切れている彼女はただ冷ややかに、

「タマ、耳を貸すな」

言うと思いました。でも、

「……………言ってみてくれ」

すまんアシ×パ。好奇心である。

むーんとした顔になってしまった彼女に一応の申し訳なさを感じつつ、インカ×マツ

に向き直る。……すぐ目の前に綺麗な指先があつて、ちよつとびっくりした。

「ウエインカ☒。『千里眼』です。これで占つてみます」

やや高い位置に手を差し伸べるようなポーズの彼女が、そう言つて微笑んだ。それから目を伏せ、

「男性……まだ若いですね、カツケマツより歳下？　そしてこれは……軍人さん？」

「家族。きょうだいでしょうか。でも、血の繋がりはない」

淡々と、告げていく。

俺の探し人についてある程度詳しく知っているアシ☒パと杉元が、怯んだような顔をした。

「どこかで大きな怪我を負つて……でも、無事です。生きて、この北海道にいます」  
「つ、……………」

そして、当てずっぽうで言うにしても細かい内容に、杉元が困惑の表情を俺に向ける。軍人ならば怪我など珍しくないとはいえ、茶を濁すだけならここまでは言わないはずだ。

なるほど。少なくとも、俺が知っている情報とは完全に合致している。

最初から疑っていた訳ではないが、確かに彼女の力は本物らしい。

「無事？」

「ええ。時が来ればきつと……あなたに会いに来てくれるはずだ」

——会いに来てくれる。

潤滑に回っていた思考に、小さな棘。

「……？」

えつと。

尾形のこと……だよな？

会いに来る、というニュアンスが何となく引つかかった。

原作通りに行けば、尾形は単に夕張で、俺と思いがけず『遭遇』するだけのはずだ。彼は、俺が北海道に来ていることすら知らないのだから。

でもまあ、歳下の男、軍人、血の繋がらない兄弟と来て、要素は完全に一致している。

「……………」

——インカ□マツは、鶴見中尉と繋がりがあった。

だから、尾形百之助について……脱走兵となった彼の弱みに繋がる俺について、知っ  
ていてもおかしくは……ない？

いや、かつての俺は、彼女が中尉に会ったのは競馬場以降だと考えていた。おそらくその解釈は誤ってはいない。インカ□マツがウイルク殺しの犯人と聞かされたキロラ  
ンケを警戒するようになるのもそれ以降で、辻褄は合っている。

やはり、この結果は単に彼女の能力か。そう考えておくのが妥当だし、精神衛生上良  
いはずだ。

「……どうされました、カツケマツ？」

「何でもない」

俺の視線をどう解釈したのか、

「ご家族のことが心配なのですね。そんな時にはこれっ」

え、通販番組？

彼女が懐から取り出したのは、細い紐というか……ブレスレットみたいなもの。

「エカエカというお守りです。白と黒の糸を撚り合わせて作り、火の神様の庇護の精神  
が乗り移っています。手首に巻き付けておけば、災難を免れます」

「わあ」

「20 銭です」

「わあ〜」

商売上手！

アンパンが1銭で買える時代なので、何とというか、結構リアルなお値段である。まあ、  
俺個人の貯えも多少はあるので、思い出として貰っておくか。

という訳で、お買い上げ。インカ☒マツに手首の邪魔にならない位置に巻いてもら

う。

「勝手に売りつけるな、キツネ女！」

「でも、これかわいいよ」

「んもおく、タマあ〜！」

ぶんぶんアシ×パ。かわいい。

そんな俺たちのやり取りを眺めていたインカ×マツが、控えめに

「……カツケマツは、この方たちとどういったご関係なのですか？」

うーん、どういう意図の質問？

若そうな女が銃持って男3人とアイヌの娘のチームに加わっているのが不思議なのか、あるいは——何かが「見えて」いるのか。

少し、考えて。

「この2人は……命の恩人だ」

事実を、ただ伝えておく。アシ×パと杉元が、視界の端でちよつと気恥ずかしそうに目を瞬いたのが見えた。

「私に協力してくれているし……私も、できる限りのことをしてあげたい」

これも、紛れもない事実。インカ×マツ相手に嘘をついて良いことはないだろう。

さりげなく省かれたことに気づいた白石が、ぬるつとフェードインしてくる。

「タマちゃん、俺は〜？」

「……………」

「え？ タマちゃん？」

や、ノーコメントで。

で、翌日。

苦小牧競馬場における、インカ☒マツの占いを利用して大儲けしようという白石由竹の企みは、寓話めいて失敗に終わった。

錯乱して木の葉に埋もれる白石を、当然ながら誰もフォローすることなく、各々コタシに帰っていく。

後には、佇む俺と白石だけが残された。いや、特に残った理由はないんだけど。なんかかわいそうだったから。

「キツネに化かされた……」



「……………」

別に、インカ<sup>■</sup>マツがわざわざ白石をハメたという訳でもないのだが。

地面に丸まってくすくすんと鼻を嚙る白石。埒が明かないので、肩を貸して無理矢理立ち上がらせる。

「……………ほら、帰るぞ白石」

「ふええん……………」

「泣くな」

鬱陶しいから。別に、同情している訳ではない。

最低限の憐れみがあるだけだ。

「タマちゃあん……………ねえ、何がダメだったんだと思う……………」

「え……………何もかも……………」

キロランケのことがなくても、いつかは痛い目に遭っていたらと言えろ。それくらいお手本のような調子の乗り方だった。

「上手くいくと思っただけどなあ……………」

「そうだな」

適当に相槌を打つ。

大儲け、か。前世でもギャンブルに興味はなかったが、金持ちにはなりたかった……………

かもしれない。まあ、金は天下の回り物と言いますし、あればあるだけ良いのだよ。

「私も楽しんで金が欲しい。少しでもいいから」

何気ない呟きだったが。なぜかそこで白石の足が急に止まった。何か呟きながら、ごそこそと半纏のポケットを漁り出す。

「……あッ！ あつた！」

——で、取り出したるはくしやくしやの一円札が2枚。

先のレースで素寒貧になったと思いきや、まだへそくりが残っていたようだ。白石らしい。それを、なぜかこちらに差し出してくる。

「……くれるのか？」

どろろ風風の吹き回しだよ、と思ったのもつかの間。頬を染めた白石が言うには、  
「ほッ……ほっぺに接吻してくれたら……」

「……………」

こいつ、自分が何言ってるかわかってるのかな？

普通にちよつとした買春行為だ。アシ<sup>シ</sup>パに聞かれたら脛にストウでは済まなさそうだが。うーん。白石の目を見つめ返す。

「頬に接吻ねえ……してほしいのか？」

「はいッ」

良いお返事の白石。金を払って誰かに何かしてもらいたいと思ったことがあまりないので、その気持ちはよくわからない。

そもそも、白石は素人童貞とはいえ女を知っている訳で、こんな児戯みたいな接触で満足なのだろうか。それも謎だ。

「ふうん……」

……別に、そこまでの抵抗感がある訳ではない。

頬にキス。アシ×パにしろと言われればできるし、それは杉元も同じだ。性別にかかわらず身体的な接触に抵抗が薄いのは、おそらく前世から変わっていない。粘膜同士の接触はさすがにまた話が変わってくるが。

特に好きとも嫌いとも思ったことがない。必要ならそうする、それだけだ。

「……………」

だから、別に良いのだけど。

手を伸ばして、頬に触れる。なぜか目をぎゅっと瞑る白石。おい、別に唇にする訳じゃないんだが？

少し、考えて。

頬から、青々とした坊主頭に指を滑らせる。形の良いそれを、手のひらで包み込むようにゆっくり撫でた。

「え、」

「接吻はしない。お前が『これ』に値段をつけて、その分の金を出せ」  
そう告げて、手を離す。

坊主頭、久しぶりに触ったなあ。幼い尾形にはよくしてやっていたけど。

で、約束を違えられた白石、少しくらいは怒ってみせるかと思つたが。なぜか、おずおずと一円札2枚をこちらに突き出してくる。

「あれ、全額くれるのか？」

「ウン……」

何かが彼の琴線に触れたのか。まあ、とにかくラッキー。懐に仕舞い込む。

「じゃあおまけでもうちよつと撫でとこう」

「キューン」

ガチ坊主なので、つるつるして尾形のそれより触り心地がいい。確かに獣なら齧りつきたくなる……のかも、しれない？

心地良さそうに目を細める白石を見て、ふと思つたこと。

「お前は百之助に何となく似ているよ、」

「ええ？」

何だろうなあ。

上手く言えない。ダメさの方向性？

無茶苦茶な計画を立てて、すぐ調子に乗って、案の定失敗する、みたいな。

可愛げと言い換えてもいいかもしれない。そこが良いところでもあるのに、彼の周りには、彼を白石扱いしてくれる人間はいなかった。まあ、それは尾形自身のプライドの問題も大きいのかも。

「仲良くなれるかなあ？」

「いやそれは無理」

「え？」

まあ、会話をガン無視していた原作よりは仲良くなれたらいいねえ。

そんなことを思いつつ、何となく撫でていた手の匂いを嗅ぐ。うーん、ピーナッツバタートーストが食べたい。

## 17話 空前絶後の?超絶孤高の?セクシー上等兵

さて、いよいよやって参りました。

炭鉱の町、夕張。

一応の目的は、人間の皮を表紙にした本の作成者——江渡貝弥作についての情報を集めることである。

ここでの問題は、俺は坑道でのトロツコ追いかけっこに参加すべきか否か、という点だ。

夕張に来るまでの間、フキ食ったりヤツメウナギ食ったりしながらずっと考えていたが、明確な答えは出なかった。一番現実的に即した回答として、参加しても、参加しなくても同じ。要するに、結果には影響しない気持ちの問題なのだ。

まあ……避けられる危険は避けたほうがいいのかもしれない。また心配や迷惑をかけるだろうし。

何度か殺されて、感覚が麻痺してきている部分は確かに、ある。

「……………」

「タマ、どうした? 腹減ったのか?」

聞き込みをしながらも考え込んだふうの俺に、アシ×パが気を遣って声を掛けてくれる。

それは良いのだが、一応はそれなりの年齢の女であるはずなのに、最初に上がる内容が空腹って何？ 食いしん坊と思われてる？

俺が返答に悩んでいる間にも、アシ×パはくるつとキロランケを振り返り、

「なあ〜キロランケニ×パあ、そろそろ食事にしないか？ タマも腹が減ったと言ってる」

言ってるねえーし。

それで言うなら、減ってるのはお前のほうだろ。ついでぎゆるる、と鳴り渡ったもちろんアシ×パの腹の音に、キロランケも何とも言えない表情をしている。

「まあ、そうだな……………ん、」

煙管を唇から離れたキロランケが、長い睫毛に縁取られた目を瞬く。呆気に取られたような仕草だった。何、と思ったのも束の間、

「……………あれ、杉元と白石どこ行った？」

「えッ」

いやさっそく出遅れてて草ア！

振り返った先、あの目立つ2人組の姿はもうどこにも見えない。うーん、さつきまで

すぐ隣にいたはずなのに。アシ×パに気を取られている場合じゃなかった。

第七師団絡みだから何かあれば声をかけてくれるかも、と思っていたが。

「野グソかなあ」

「こんな街中ですか?」

「……………」

漠然とした不安を覚えたが、今から離脱して杉元たちを追っても、もはや手遅れだろう。アシ×パ、杉元、両者に要らぬ心配を掛けるだけだ。

「まあ……………あいつらのことだから、心配は要らんだろ」

言いながら、キロランケがさりげなく俺の着物の袖を引いてくる。呟くというよりは、こちらに言い聞かせるような響きだった。

「先に飯屋を探すか」

「……………、うん」

ここで抵抗しても仕方ない。

先を行くキロランケと、アシ×パの背を追う。この辺りは炭鉱が近いせいか、その労働者による外部経済効果が発生しており、飲食業やサービス業の発展が目覚ましい。

食事にも期待できそうだ。……………今はそう考えて、気を逸らすしかなかった。

しばらく歩いたところで。



「うおッ」

——急に、地面が揺れた。

轟音。震動。大気が、戦慄く。

一瞬、地震かとも思ったが、明らかにそれとは質が違う。突発的かつ、人為的な現象だった。

たたらを踏んだキロランケが、怪訝な顔で音のしたほうを見やる。

「何だ？ 爆発か？」

ガスケだ、とすれ違った男が口にしたのが風に乗って届いた。

「ガスケ？ ……炭層ガスの爆発か!？」

「炭層ガス、」

「炭鉱ではよくあることだが……」

平和な昼下がりの街中が、にわかに騒がしくなる。老いも若きも、男も女も建物の中から出てきて。炭鉱があるのであろう方角を、緊張した面持ちで見つめている。

再び、激しい地鳴り。

野次馬たちが騒ぎ出す。

「またガスケだ」

「今のは久々にデカかったな」

「山が揺れたぞ、」

「大非常だ……!」

大事故。——炭鉱事故に関する話は、歴史に明るくない俺でも多少は知っていた。

メタンガスの溜まり場。ガス突出。爆発。それに伴う火災。かつての鉱業は危険と隣り合わせだ。

一応は無関係なはずの俺たちも、騒ぎに飲まれて立ち昇る煙を眺めていたが。

「……なんだか嫌な予感がする……」

もしかして。アシ×バが、呻くように呟いた。

「杉元たちは、何か刺青人皮の手がかりを見つけて、炭鉱に向かったんじゃないか?」

それで、この事故が起こった?

アシ×バはそう言いたいのだろう。……実際は、杉元たちが坑道にやってきたことと、ダイナマイトがガス溜まりを引き当ててしまったことには直接的な関係性はない。むしろ、杉元たちはただ事故に巻き込まれただけだ。

キロランケが顔を顰めた。それなりに信憑性があると思ったのか。

「あいつら、勝手に行動しやがって」

立ち尽くす人混みを掻き分けるようにして、炭鉱に向かう広い背中。どうしても人の波に飲まれやすい体躯のアシ×バの手を引いてやりながら、俺もその後を追った。

辺りにいる人間に細かい道のりを聞きながら、ようやく辿り着いた坑口のひとつでは。

——既に、板と粘土による密閉作業が、佳境を迎えたようだった。

「この坑口はもう塞がれたよ、」

煤と煙にまみれた半裸の炭鉱夫が、がらがらの嗚れ声でそう教えてくれる。

確かに、今まさに、暗がりの奥からノコギリやスコップを持った労働者たちがわらわらと、蜘蛛の子を散らすように出てくるところだった。

「誰か、探しているのかい？」

「……炭鉱夫ではないんだ」

年齢も、性別も、服装もばらばらな労働者たちの中に、見慣れた軍帽と坊主頭はない。まあ、これはわかつていたことだけけれど。

「……………」

アシ×パが無言で繋いだままの手に力を込めてくるのを、握り返す。

その時。どよどよと、纏まりなく騒いでいた労働者たちが。一齐に、沸いた。

「誰か出てくるぞッ」

1人が、坑口を指差してそう叫んだ。

煙を纏って穴から出てくる、大柄な人影。上半身がやけに膨らんだその影は、  
「すげえ! あの旦那、2人も助け出したぞ!」

杉元と白石——を軽々担いだ、スーツの巨漢。札幌世界ホテルで行方が知れなくなつた牛山辰馬その人だった。

「よお……嬢ちゃんら。また会つたな」

牛山ガチ勢のアシ~~ン~~パは、杉元らの無事より彼との再会が嬉しかったようで。少女らしく、頬をりんご色に染めて微笑んだ。

かと思えば、懐からいそいそと茶色い紙屑のようなものを取り出し、手のひらに乗せて彼に見せつける。……ホテルで拾ったハンペンのミイラですかね、これは。

「チンポ先生エ……」

「ハンペンまだ持つてるうッ」

乾き切つた声ながら、それだけ元気にツツコミができるなら安心だな杉元。

「水を分けてもらつてくる、」

「デキる大人の男キロランケが、炭鋳夫の集まりに駆けていくのを視界の端で見送り。俺は、坑口に向き直る。」

まだ。まだ1人、出てきていない。

……牛山辰馬が杉元たちの救出に乗り出したということは、  
「居る」はずなのだ。  
これは、希望的観測などではない。

間違いない。

何度目か、煙臭い唾液を飲み込んだ。

——そうして、「彼」が現れる。

「っ、」

軍服の、男。風にたなびく白い外套と、伸びた黒髪を神経質に撫でつける左手。反対の利き手に握られているのは、三十年式歩兵銃。

安堵はしなかった。ただ、よくわからない感情だけがいつぱいに膨らんで、胸を満たしていた。

とつさに名を呼ぼうとして。

できなかつた。

彼が、顔を上げる。

「——」

——目が、合った。

確かにこちらへ近づいていた歩みが、ぴたりと止まり。漆黒の瞳が、見開かれる。気づいた。

「百之助……」

ようやく、喉の奥からその響きが漏れて。

……けれど、すぐに逸らされてしまう。

彼の手が、慌てたように外套のフードにかかり、目深にそれを被ってしまふ。焦っているというか、怯えたような仕草だった。

え、なんで今無視した?

「銃の嬢ちゃん、今……?」

俺の眩きに、牛山とキロランケは怪訝な顔で俺たちを交互に見て。事情を知っている3人組は、緊張した様子で一挙一動を見守っている。

「あ、ちよつとタマさん……!」

……埒が明かない。

とつさに走り出した背中に、杉元の声が掛かったが。構ってられない。

フードの裾を限界まで引き下ろし、佇んだままの彼へ、一直線に駆け寄る。そのすぐ目の前を陣取って、最後に会った時よりまた背が伸びたその顔を、フード越しに睨む。

爆発の煙が未だ充満しているせい、空気を吸い込むと肺が痛い。構わず口を開く。

「百之助っ!」

びくつ、と。肩が跳ねた。

おそるおそる、といったふうでこちらを見る彼の引き絞られた瞳孔が、俺の顔を再び捉えて。息を、呑んだ。それが聞こえた。

「……………タマ、……………」

掠れた声。困惑の滲む表情。

それに、何となく違和感を覚えた。

……………まるで、たった今、ようやく俺に気づいたみたいな。確かに目が合ったのに。

「どうして……………」

彼が——尾形が、改めて俺に向き直る。

自然な手つきでフードが取り払われ、陽光の下に晒される血の気のない顔を、俺も改めて見つめ返す。

未だ生々しい顎の縫合痕。そして、空前絶後のセクシー上等兵の二つ名を欲しいままにするに至った、代名詞のひとつとも言える黒髪ツーブロオールバック。義姉に向かつて何だそのツーブロオールバックは。

「知り合いだったのか？」

「……………タマさんはずっとあいつを探していたんだ。家族らしい」

「家族……………」

「あの男だったんだ尾形百之助、」

背後から、水を飲む杉元たちと、牛山の会話が聞こえてくる。

煤にまみれた顔が何となく痛々しくて、手を伸ばして拭ってやる。触れる瞬間だけ小さく身動きしたが、尾形は抵抗しなかった。

拭うついでに、盛り上がった縫合痕を指の腹でなぞってみる。尾形タマの知らない傷。杉元佐一が残した爪痕。

「俺」にとつては、見慣れているとも、見慣れていないとも言えるその姿。

尾形は、無表情で俺を見つめている。観察されているみたいだな、と何となく思った。

「馬鹿。手紙も返さないで……心配したぞ」

「……………」

しかし——何というか、妙に落ち着いている。もう少し取り乱すかと思ったが。

まあ、ポケモンと違ってこいつが混乱した時にする行為って基本的に他傷なので、平常心でいてくれるのに越したことはない。

「……手紙」

「うん？」

黙っていた尾形が、喉奥から絞り出すようにこぼした。手紙。それがどうした、と思ったところで、底のない目が俺に焦点を合わせてくる。

「生きていたのか」



次いで淡々と呟かれて、さすがに一瞬面食らった。

……死んでいたと思われていた？

何故。尾形はその身を以て「知っている」はずだ。疑問に二の句が継げない俺の頬に、今度は彼の手が添えられる。温もりを確かめるように。

冷たい手だ。何度目か同じことを思っ、

「ぐんっ」

なぜか、何の前触れもなく頬肉を強めにつままれる。待つてどういう意図？

「……………」

そしてなぜか無言。何か言えよ。

だんまりのまま解放された頬をさする。

いや、っーかそれにしても、

「クサイ」

「…………炭鉱爆発に、巻き込まれたから…………」

いつの間にかやけに距離が縮まっていた分厚い体を、やんわり押し返す。

とにかく焦げ臭い。セクシー上等兵からしちやいけな二オイがしている。メタンガス自体は無臭だが、爆発と火災が起こればそれなりの悪臭が発生するものだ。

そこで、尾形はようやく俺が担いでいるブツのほうに目が行ったらしい。肩に食い込

むスリングを軽く指先で持ち上げ、

「……スペンサーM1860。悪夢が正夢になった」

え、なんて？

理解できる単語がひとつもない眩きに、彼の顔を見返す。至近距離で、インクを塗り込めたような漆黒の瞳と再び目が合った。

「納屋にあつたジイさんのだな……？　こんなレトロなライフルでよく……」

そこでもうやく、先程の呪文がこいつの型番だったことを悟る。銃と銃と銃のことが得意じゃない鬱々ニ×パは伊達じゃないらしく、尾形は見ただけで名前と出処がわかったようだ。

「……戊辰戦争時代の輸入銃だから、弾の流通も無い。お飾りの威嚇用か？」

来歴にも詳し——いや顔が近い。鼻先くつついちゃうって。

ああ、異様な距離感の俺たちを遠巻きに眺める5人の気配を感じる。

しかし、案の定というべきか銃の話か。ええと、

「弾は残ってたのをありつたけ持ってきた。……黙ならこれで仕留めたことがある」

そう付け加えた途端、尾形はなんとも言えない微笑みを浮かべてみせた。満足げなというか、恍惚とした、というか。うーん、不気味！

「ああ……撃てるようになっていたのか」

……二瓶とか辺見とか家永の刺青囚人に躊躇なくバンバンぶっ放したことは、絶対に言わないようにしよう。というか、言わなくて正解だった。とつきの判断だった。

つか、いやだから、

「百之助……クサイ」

「……………」

気を抜くとガンガン距離を詰めてくる尾形を、やっぱりやんわり押し返す。みんな見てるんですよ。

そこでようやく我に返ったか、誤魔化すように髪を撫でつける尾形。頭髪があるとその妙な癖もなんとなく様になっている。

後ろに控える5人に目をやり、

「どうして北海道に……今までこいつらと行動してたのか?」「うん」

クソ今さらである。俺が持つてる銃、俺がここにいる事、なの本当に歪みねえな。何か逆に安心してしまった、変わらなすぎで。

当時の一般女性ならば有り得ないはずの出走と金塊争奪戦への参加にそこまで強く疑問を呈してこないのは、俺ならやりかねないとも思われているからなのだろうか。

はあ。尾形が嘆息する。

「しょうがねえ……ついてこい」

いや……とにかく、知らん顔されなくて良かったです。マジで。

「百之助、その前にお水飲みなさい」

「……………」

「やだ、お母さん〜?」

## 18話 偽となるか真となるか

ついてこい、と居丈高に言い放った尾形がその足を止めたのは、家主を永遠に失った「江渡貝剥製所」の前だった。

室内に踏み入ったところで、彼はおもむろに小さな切れ端のような物を取り出し。指先に挟んでこちらに見せつけてくる。

「俺がここで拾ったものだ」

薄橙の地に、片方の端だけが黒っぽく染められている。紙や布ではない。それなりの分厚さがある。口を開いたのは、まだ何も事情を知らないキロランケだった。

「……まさか、人間の皮膚か？」

若干、自信の無さそうな口ぶりだったが。軍帽の鍔を引き下げた杉元がその後を引き継ぐ。

「鶴見中尉は、ここで剥製屋に刺青人皮の贋物を作らせていた。俺たちは炭鉱で中尉の手下と、剥製屋の男の2人と贋物の奪い合いになったが、爆発事故が起きてうやむやになった」

もともとが人間の死体から剥がされた非合法的な代物だ。そっくりな贋物を作ろうと

思えば、新たに死体を引っ張ってこななければならない。普通の人間なら思いついても実行できない作戦だが、鶴見中尉はやり遂げた。

「刺青人皮の贖物……」

「恐ろしい男だな……鶴見中尉」

「剥製屋の坊やは死んだ。俺が死体を確認した」

外套を翻し、尾形が再び歩き出す。

扉を開ける。その小部屋には、既に先客がいた。並べられた5つの椅子。顔を突き合わせる6人の男。指を立てたり、膝に手をついたり、各々自然なポーズを取っている。

異様なのは、彼らが微動だにしていないこと。瞬きさえしていないのだ。そしてそれ以上に目を引く——生皮を剥がされた上半身。

明らかな死体の集まりに、キロランケやアシシパのみならず、事情を知っているはずの杉元たちさえ息を呑む。

「贖物は——おそらく、この6体の剥製を利用して作られた」

彼らの間を猫のようにすり抜けた尾形が、なぜか得意げに腕を広げてみせる。

「坊やと一緒にいた鶴見中尉の手下……月島軍曹は屈強な兵士だ。坑道からやつ死体が出なければ、6枚の贖物が出回ってしまうことを想定しなければならん」

にやあ。

甘えたような獣の鳴き声が、すぐ近くでした。とつぎに音の発生源を追った視線は、自らの足元にたどり着く。

——1匹の猫が、俺のくるぶしの辺りにしなやかな体を擦りつけていた。

江渡貝の、おそらく飼猫。ハチワレというには貧相な模様がどことなく間抜けに見える。相変わらず絶妙に可愛くねえ猫だな。

「猫がいる」

「タマが呼んだのか？」

「なんで？」

ドラクエのモンスターじゃねんだからよ。そんなほいほい仲間と呼べないんですわ。……いやそもそも猫ちやうわ。

俺の足を8の字に行ったり来たりしていたのが、音もなく離れていく。

「行っちゃった」

白石がどことなく名残惜しげに呟いたが、猫好きでも何でもない俺には未練などない。放置して話に戻ろうとしたところに。

なあう。また、猫が鳴いた。

少し離れたところにある戸棚の近くに座り込んで、繰り返し、こちらを見て鳴き続けている。

「ジジイは呼んだか？」

「もうすぐ来るはずだ」

「猫ちゃん呼んでるんじゃない？」

「……………」

面倒臭い。しようがなくその場を離れて、猫が引つ掻いているその下を覗き込む。

何かがあった。

乱雑につくねられた——というか、うっかり落とした、というような風貌の薄橙の塊。見覚えのある奇妙な紋様が刻まれたそれに、あ、と思わず声を上げていた。

「なに？」

「……………刺青人皮だ」

「え、」

立ち上がって、広げてみる。

江渡貝弥作の忘れ形見。これは6枚目の贋物だった気がする。確かに本物と遜色——と言っても、俺はそもそも刺青人皮をまじまじと見たことなんてないけれども。

「これは贋物？ 本物？」

何となくの眩きに、背後から応える声があった。

「……………ああ。その忘れ物が、どちらなのか」



未だ俺の足元に纏わりついていた猫を、慣れた手つきで抱き上げる長髪の老爺。  
「判別する方法を探さねばな」

——土方歳三。

頭に霜を置く歳になってなお、光の衰えぬ瞳が杉元を真っ直ぐ射抜いている。かと思えば俺に視線を移し、優雅に微笑みながら、

「お嬢さん、それを頂いても？」

「あ……はい」

「この猫と交換しよう」

「いや猫はいらないんですけど」

おいだからいらねえって。半ば強引に押しつけられた江渡貝の猫を、渋々抱える。

「なあん」「なあんじゃないっての……」

俺が可愛くない猫の扱いに悩まされている間にも、小さく首を傾げた杉元が、

「ジイさんあんた……見覚えがあるような。どこかで会ったかな？」

ニシン場でのことを言っているのだろう。尾形に負けず劣らず対人記憶力に優れた男だ。

慌てたのは白石だった。何せ、彼はこの段階で土方陣営のスパイなのだから。

「いや……！　会ったことがある訳ねえ、」

こいつは、土方歳三だぞ。

「……………」

箱館戦争の敗残兵、新撰組「鬼の副長」。

脱獄の指揮をした囚人の親玉であり、のつぺらぼうをよく知る人物。

白石の一言に、杉元の纏う雰囲気が変わる。銃のスリングを握った手が、それを肩から下ろし。異様な空気を察知したか、ふしやあ、と腕の中の猫が毛を逆立てる。

こいつ、離したくても着物に爪を立てられていて下ろしようがないんだが、何これ罨？

早々に戦闘ムードの若造を尻目に、当の土方は落ち着いたもので。

「……………久しぶりだな、白石由竹。お友達を紹介してはくれんのか？」

玉の汗が坊主頭に滲んでいる。余計なこと言うなジジイ、の顔だ。

「ひよつとして……………キロランケの村に来たってのはこのジイさんか？」

「……………そうだ」

「土方歳三……………会ったら聞きたいことがあった。のつぺらぼうがあんただけに伝えた情報があるはずだ。あんたをある程度信用してるのか……………あるいは、大きな目的が一致してるのか」

この辺りもはや俺には関係ない話なので、人間の剥製でも眺めて暇を潰す。旅の目的

上、皮を剥がれた死体は何度か見てきたが、江渡貝の腕前なのか、こちらのほうが綺麗な剥がされ方をしている……気がする。

「手を組むか……この場で殺し合うか、」

グキユルルル。

張り詰めた空気に響き渡る腹の音。

「刺青を売った金で故郷に帰り、嫁さんでももらって静かに暮らせる道もあるが。若いもんにはつまらん道に聞こえるかね？」

「……のっぺらぼうに会って、確かめたいことがある。それまで金塊が見つかってもらっちゃ困る」

相棒の頼もしい発言に、瞳を静かに輝かせるアシシパ。グルルツ。コロコロコロツ。そして腹の虫で台無し。

「会いに行くだつて？」コロコロ。

コロコロコロコロコロツ。

「なあに!! コロコロつて!!」

ぶち壊された空気の中で青筋を立てる杉元。育ち盛りだからね、しょうがないね。

「結局あの時、食べ損ねたから……」

「そういえばそうだったな」

俺もさすがに腹が減ってきた。

で、そこで永倉新八の後ろからひよつと出てくる細身の人影。

「私が何か作りましょうか？」

「家永生きてた！」

お話の続きは、食事の席でされてはいかがでしょうか。

と、いうことで。

「『なんこ鍋』でございます」

江渡貝邸の長机を借りて、家永特製の鍋料理を囲む。

「おい家永……この肉、大丈夫なやつだろうな……？」

箸でつまんだ肉をじつと見つめる白石。俺は同じテーブルに皮剥がされた人間の剥製が座つてゐることのほうに気になるけどね。

「ご安心ください。『なんこ』とは方言で馬の腸という意味ですから。馬のものを使つてます」

途端に嘔き出す愛馬家キロランケ。俺の愛馬が！

要するにモツの味噌煮込みで、この辺りの炭坑夫の郷土料理らしい。

「……………」

鍋は美味い。美味いのだが。

問題は、今の俺がなぜか杉元と尾形の間挟まれているという点である。

事の次第としては、キロランケ、白石と来て、杉元がその隣に着いたので。俺も詰めて座るかと思つたら、その隣になぜかすぐさま尾形が来てしまったのが原因である。

同陣営のはずのアシバがタツチの差で負け、彼女は「しょうがないなあ〜」みたいなシバシバ顔で許容していたが、杉元はすごい勢いで尾形を威嚇していた。もう気まづい。

「……………あんたら、その顔ぶれでよく手が組めてるな」

しかも杉元煽る。もう煽る。

「特に、尾形百之助……………こいつは鶴見中尉の手下だったはずだ。一度寝返った奴はまた寝返るぜ」

身内の前でめちやくちや言うじゃん。俺はどう反応するのが正解なの？

とりあえず無視して飯を食う。なんか喉乾いてきた。

「杉元……………お前には殺されかけたが、俺は根に持つ性格じゃねえ。だが今のは、」

「嘘つくんじゃないねえ、タマさんお前のことかなり根に持つ性格って言ってたぞ！」

「ちよ百之助その土瓶取つ……………え？」

「……………」

つい実家ノリで尾形に茶を取らせようとしたら、思いもよらぬ方角からの流れ弾が飛んできた。おい馬鹿バラすな杉元。

どういう感情なのか尾形の目が瞬時にキュツとなつて、それでも染みついた癖なのかちゃんと土瓶を取つて、しかも湯呑みに注いでくれた。やさしい。

「……………ありがとう」

「……………」

土瓶を戻した尾形はむすつとしたまましきりに髪を撫でつけていたようだが、やがておもむろに、

「……………、随分とこいつに馴れ馴れしいようだが……………お前が小樽で俺にしたことは話したのか？ 北海道までわざわざ俺を探しに来た女に対して、お前は今までどの面を下げて接してきた？」

あーもうなんかさつそく面倒臭い。

そう来たか。杉元を不快にするためなら俺の存在を引き合いに出すことも厭わない、という強い意志を感じた。

杉元も放つておけばいいものを、そもそも尾形みたいな男がめちやくちや癩に障るタイプなのか、几帳面に青筋を立てている。

「俺の腕を折り——銃剣を突き立てようとした手で、そいつに触れたのか？ 傷つけぬように優しく？ どんな気持ちだ？ 教えてくれよ、不死身の杉元オ……」

「っ、テメエ、」

「やめなさい百之助」

煽り全一かよ。いよいよ隣からシンプルな殺意を感じたので、ひとまず仲裁しておく。

「……………」

で、なんか知らんが素直に黙る尾形。

杉元のこととは語彙をフル活用して煽るくせに、俺については不自然なくらいノーコメントか。昔から尾形は俺をほぼ叱らないんだよな。別に俺が良い人間だった訳ではない。

「…………怒られてやんの」

「杉元もだ」

「ハイ」

5歳児か。

「…………タマは、これからどうするんだ？」

クツソ低レベルな喧嘩が一区切りついたところで、頬に異常な量の米粒をつけたアシ

「パが俺に尋ねてくる。いやどう食ったらそうなの？」

杉元と白石もそれは気になっていたのか、2人の視線が集まるのを感じる。アシパの頬の米粒を気にしろよ。ていうかちよつと待て、モツの筋嚙みきれない。

「尾形百之助は見つかった訳だけど」

「……ん、百之助がおとなしく私と実家に戻ってくれるというなら、手を引くけれど？」

アシパがお弁当ついでる」

「ん」

「お弁当っていうか一個小隊分の食糧って感じだけど」

手を伸ばして米粒を取ってやる俺の頭上で、ちよつと嫌な顔をする尾形。最終的にぶいっと目を逸らして意思表示してくるのを、背後の杉元たちに顎で示す。

「……ね」

「なんか言えよ」

ド辛辣杉元。やめてあげてください、見かけによらず繊細な子なんです。

「もし、ここであなたが「駄目だ」と言ったとしても、私は今まで通りアシパと杉元の旅に同行するだけだから」

尾形がいるからと言って、俺の籍が土方陣営に移る訳ではない。アシパ杉元には変わらず助けてもらった恩があるし、無理筋な理論という訳でもない。



「私は構わないぞ。な、杉元」

「……ああ」

明るく頷いてくれるアシ×パはともかく、なぜか軍帽の鍔を下げながら答える杉元。怖いんですけど。

「あなたがここで何か成し遂げたいことがあるというなら、最後まで見守るよ。おとなしく実家に、と言ったけれど、あなたにそれを強いる権利は私には無い。あなたに私を縛る権利が無いように」

尾形は、しばらく無言で俺を見つめていたが。やがて、髪を撫でつけながら、  
「……好きにしろ」

ぼそつと呟かれた言葉に、なぜかアシ×パのほうがほつとした顔をしていた。

「相変わらず、肝の据わったおつかねえ別嬪さんだよ」

「良いじゃねえか。女は度胸だ」

にやあ、と足元でねこまんまにがつついていたハチワレ猫が、得意げに鳴いた。

翌日。

熊岸長庵目当てに月形の樺戸監獄に向かう前に、江渡貝邸、夕張炭鋤と二手に分かれて。前者は残された贖物の手がかり、後者は月島軍曹の死体を探ることになった。

俺はまあ、尾形がいるから、と土方率いる江渡貝邸の探索チームに加わった訳だが。「三十年式欲しいなあ」

俺の呟きに、振り返った尾形がやや不可解そうな顔をする。手に入れる機会がなかった訳ではないだろう、という雰囲気だった。

「買えばいい」

「撃ち方がわからないから」

戸棚を漁る音が、止んだ。

「……あいつに教わらなかつたのか？」

今度は振り返らないまま、尾形が淡々と問うてくる。杉元のことだろう。彼は三十年式を使っているし、実際、教えてあげると申し出てくれたこともあった。

でも。

「百之助に教えてもらおうと思って」

「……………」

無言の返答。いつもの癖をやりながら、自然なふうで遠ざかってしまう。あれ？

うーん、良かったんだか良くなかったんだか。「確かにそうだね」とか返すよりはマシな答え方だったと思いたいが。

尾形が部屋を出て行ってしまったので、しようがなく一人で部屋の剥製を眺める。俺がここで判別の手がかりを見つけてもしょうがないんだよ。

……で、その背後に忍び寄る影。

ズズズツ。

蕎麦でも啜るような不快な響きに思わず振り返ると、至近距離でばっちり目が合った。

「うわ」

言うまでもなく、家永カノ。

彼は未だズチャチャ、と舌なめずりと歯軋りの境目のような舌技を真顔で繰り返している。妖怪？

「気色悪い」

俺の率直な罵倒にもめげない家永、ぐいぐい顔を寄せてくる。やめろ。

「あのホテルで私があなたに打ち込んだ液体……成人男性の致死量を超える毒を配合してありました」

「そう……」

そんなことだろうと思ったけど。こいつが言いたいのは、それでは無いのだろう。

「その並外れた強靱さ……どこを食べたら手に入るのでしょうか？」

出たあ（ドラえもんバトルドーム）！

「まるで不死身のよう」

「……………」

不死身。——家永としては単なる比喩表現なのだろうが、本質を突いた発言だった。こいつが俺の肉を食べば不死身になるのかな。

その検証に興味がないと言えば嘘になったが、家永カノには「死ぬべき時」があるのだ。

「血液？ 肝臓？ ……それとも、心臓？」

「それ以上俺に近づいたらこいつでドタマぶち抜くぞ家永ア」

「やんっ」

それはそれとしてシンプルにウザいので、わざとらしく弾薬を装填して、横目で睨みを効かせる。んまあ、我ながらお行儀の悪い。

尾形にはナイショだよっ！

ぶりっ子する家永が距離を取って、一息ついたのも束の間。

——隣で、窓ガラスが割れる音がした。

「あッ!?!」

尾形の焦ったような声。

家永がつかられて部屋の外に出て、俺もそれを追いかける。

「どうしたんでしよう……っ、!?!」

床を舐める炎の舌に、仰け反る家永。

この時代の建物は、レンガでなければ大抵は木製だ。火の回りは早い。

わかっていたことだが、第七師団の兵士が攻め込んできたらしい。

「火事です！ 逃げないと……!?!」

「外に出るな。撃たれるぞ」

玄関に向かおうとする家永の首根っこを掴んで、引き戻す。とりあえず開いていた窓の近くまで誘導して、

「煙を出来るだけ吸い込むな。何でもいい、布を口に当てろ、……」

姿勢を低く、と付け加えようかと思つたが、やめた。結局は牛山たちが助けに来る。その時に外から姿が見えなければ、元も子もない。

「タマさんは、」

「尾形の援護に行く」

お気をつけて、とさつきまで俺の血肉を食ろうとしていた人物のそれとは思えない

エールを背に、急な階段を駆け上がる。

中腹に差し掛かったあたりで、上がつてすぐの部屋から鈍い打撃音が聞こえてきたのに気づいた。ほぼ同時に、階下がにわか騒がしくなる。杉元たちが乗り込んできたのか。

とにかく上がり切つて、部屋に駆け込む。煙漂う中でも見えた、部屋の隅で仰向けに倒れた尾形と——それに跨る軍服の男。

とつさに、家永のことで既に準備万端だった銃を構えて、引き鉄を、

「っ、」

——撃つな！

すんでのところでシナプスにブレーキを掛け。とつさに引き鉄ではなく銃身を掴んで、長物の要領で少し離れた位置の男目掛けて振り下ろす。

「がッ」

濁った声を上げて倒れ伏す兵士。まだ息はあるようだが、もう動けないだろう。

それを退けて上体を起こした尾形が、俺を無言で見上げてくる。

——ぎりぎりで間に合った。

胸を撫で下ろす。

尾形のことではない。……人間に向けて銃を撃たなかったこと、だ。

殴るのと撃つのでは訳が違う。

抵抗ではなく、殺傷するための手段に躊躇いがないところを見られてはまずい。

「……大丈夫？ 百之助」

なぜか立ち上がらない尾形に、一応手を差し伸べてみる。彼はなぜか倒れた兵士にちらつと視線をやつて。傍らに落ちていた、その兵士が使っていたらしい三十年式を、差し出した手のひらに乗せてくる。

「おいそれさつきまで殴られてた銃だろ」

めちやくちや自然に渡してくるので受け取りそうになつたが、普通にちよつと嫌。

「……タダで手に入った。喜べよ」

「血ついでるんだけど」

そんなこと言つたら俺のスペンサー銃の銃床にも兵士の血は多少ついているが、身内の血だと『嫌』の次元が違う。

そんな俺の訴えは無視して、再び窓に近づいていく尾形。一発撃つて様子を見ていたかと思えば、窓に背を向け。

「行くぞ……タマ」

俺に向けて、手を差し出し出してくる。

「……うん、」

温もりの足りない指先に五指を重ねると、しつかり握り返された。そのまま階段へ走り出すのを、慌てて追いかける。

杉元は結局、上がってこなかったな。俺がいるからいいと思つたのかもしれない。

「逃げるなら今しか無いッ！ 急げ！」

「行くぞジイさん！」

杉元の声が、少し離れたところから聞こえた。いよいよ建物全体に火が回って、いつ倒壊してもおかしくない状況だ。

何とかぎりぎりのところで脱出したが、他のメンツはとつくに離脱が済んでいたように。遠ざかっていく背中がちらつと見えた。

「……………いつらと？」

しばらく走って、夕張の街中。

ようやく他のメンバーと合流できたのはいいが、馬に乗った土方たちはもう出立するところだった。聞き取れたのは、呆気に取られたような牛山の呟きだけ。

「何の話だ？」

尾形の疑問に、3人が振り返る。振り返って、まず俺たちの顔を見て。……次に、繋



がれたままの手を見る。じっと、無言で。

そこでようやく気づいたのか、尾形がそれとなく手を離してきた。ようやく温まってきたところなのに。またすぐに冷たくなってしまふのだろうな、とぼんやり思う。

「……………」

で、誤魔化すように黙って背を向けてしまふ。しょうがないので俺が代わりに聞いておく。

「で、何だった?」

「二手に分かれて、月形の樺戸監獄に向かうことになった。タマは私たちと一緒に」  
牛山の肩で戸愚呂兄みたいになったアシシパが、簡単に状況を説明してくれる。

ようやく、か。

なんとなくそんな気持ちになった。

「……………じゃ、行こうか」

三十年式を、担ぎ直す。金塊争奪戦も、アイヌの独立も、本質ではない。なかった。  
「尾形タマ」の旅は、ここから始まるのだから。

## 19話 作麼生・説破

「用心して、他の人間とは出来るだけ接触せずに、月形の樺戸監獄まで移動したほうがいい。土地の人間の目撃情報なんかを伝つて追跡されるからな」

夕張を出た俺たちは、第七師団の監視の目を避けるため、山中の道なき道を進むことで月形へと向かつていた。

俺を含めて山歩きには慣れたメンバーばかりなので、何の問題もない。

問題があるとすれば、俺の古い銃だった。

残弾数が7発を切り、いよいよ鈍器以外の使い道がなくなったスペンサー銃。かと言つて俺は二瓶鉄造ではないので、小銃2丁持ちなんて嵩張る上に無駄な真似はできない。

ただ、ちよつと特殊な銃ということで、むやみに捨て置くのも良くないという話になつたのだ。避けられるリスクはできる限り避けるべき、ということである。

「すみません、先生。荷物を増やして」

「良いつてことよ」

で、牛山に持つてもらっている。鬼に金棒とは言うものの、牛山レベルの鬼神ならば

そんな「金棒」は邪魔なだけだろう。

「俺もこの際、ライフルの使い方をちゃんと覚え直すかな」

「確実に必要ないと思いますが……」

もはやデバフまである。

鈍器扱いにしても、銃なんかで殴るより、明らかに自前の拳で殴ったほうが重い一撃が入るだろう。

「見ろ、2人とも」

そこで、アシ×パが呼びかけてくる。……まあ、杉元と、俺のことなのだろう。

顔を向ける。彼女が指差す先、クチバシの細長い鳥が地面を器用に歩いていた。

「トウレ×?タ　チ×がいる」

「トウレ×?タ?」

「ヤマシギだ」

ヤマシギ。聞いたことのあるような、ないような。動物に興味がないもんで。

クチバシがオオウバユリの根を掘る「トウレ×?タニ」に似ているから、ウバユリを掘る鳥——トウレ×?タ　チ×と呼ばれるのだ、というアシ×パの豆知識を聞きながら。俺は、まん丸の目がやたら上についているせいで不安になるフォルムだな、と考えていました。デザインに失敗したぬいぐるみみてえだ。

「美味しいの?」

「脳みそが美味しい」

「出た脳みそ」

俺たちの会話を聞いていたらしい尾形が、少し離れた場所で、すつと銃を構えて。しかし、アシ□パに見咎められる。

「おい、百之助! やめておけ」

ほほ面識のないアイヌの娘に、いきなりファーストネームを呼びつけられたことが衝撃だったのか。尾形がきゅつと瞳孔を細める。

無言で視線を逸らしたのち、

「……………、食うんだろ?」

「1羽に当てられたとしても、他のが逃げてしまう」

蛇行して飛ぶので、その銃で仕留めるのは難しい。アイヌはヤマシギの習性に詳しく、たくさん獲れるくくり罠の仕掛け方を知っている。

真面目な顔で、懇々と止めるに至った根拠を語るアシ□パ。……の後ろで、「怒られてやんの」顔の杉元。懲りないねえ。

「フン…………」

で、わかりやすく拗ねる尾形。このやり取りの中で一番精神年齢が高いのがアシ□パ

なの、何かのバグか？

離れていく尾形の背中を見つめる肩に、ぽんと置かれる小さな手。振り返ると、したり顔のアシ<sup>パ</sup>と目が合った。

「……なに？」

「あとで慰めてやれ。な？」

「まあ……いつものことだから……」

「いつものことなんだね」

罵倒ならともかく、正論言われて不貞腐れるルーティンまでフォローしていてもしょうがない。当人の気質みたいなものだ。

尾形から、地面をうろちよろするヤマシギに視線を戻す。

「あ、ヤマシギが掘り出したミミズ食べてる」

「かわいいッ」

「かわいい……?」

杉元の感覚、よくわからんな。

結局、その日はヤマシギを見つけた川辺で夜を明かすことになり。

並んで眠りについたまではないが——体が持ち上がるような微妙な浮遊感で、目が覚めた。

「……………ん、……………」

瞼が開く。辺りはまだ明るくなつたばかり、という雰囲気だった。

他の3人はまだ眠っているようだ。じゃあ何だ、と視線を彷徨させたところで。

「……………ひやくのすけ……………」

俺の隣で寝ていたはずの尾形が、体を起こそうとしていた。どうやら、彼が身動ぐ度に妙な浮遊感じみたものが襲ってきている。

どういふ訳だと視線を向けると——何のことはない、俺がうつかり尾形の外套を下敷きにして寝入ってしまったていたせいらしい。要するに、彼は重石の俺から上着の端を引つ張り出そうとしていただけ。

「悪い、……………起こしてよかつたのに」

起き上がって、解放してやる。

ようやく立ち上がった尾形は怒るでもなく申し訳なさそうにするでもなく、無言で銃

を担ぎ直したただけだった。どこかに行こうとしているのだろうか。こんな朝つばらから。

「どい、……」

「……寝てろ」

「俺も行く、」

手に入れたばかりの三十年式を担いで、遠ざかっていく背中を慌てて追いかける。あ、寝起きのせいで足元がふらつく。こちらと何の訓練も受けてない一般人なんでね。

先に行く尾形の足が止まったのは、昨日アシシギパたちと手分けして罟を仕掛けたエリアから、少し離れた場所だった。

どつかと地面に座り込んだ尾形が、構えた小銃で狙うは、

「……ヤマシギ？」

昨日と変わらず、地面を行き来する鳥の群れ。——ああ、そういえば、だった。

アシシギパの発言に不貞腐れた尾形は翌日、単独でヤマシギを獲ってくるのだ。隣に座つて、彼が淡々と鳥を仕留めていくのを見守る。銃声は2回。撃ち落とされた鳥は、2羽。相変わらず、機械みたいな腕前だ。

で、立ち上がつて獲物を回収してきたのを、ぱちぱちとぬるい拍手で出迎える。が、尾形はここに来て呆れたような顔で、

「なんで来た」

「三十年式の撃ち方……」

教えてもらいたくて。

あくびを飲み込んでそう伝える。ため息とともに、彼が再び隣に腰を下ろしてきた。いいから戻っているとは言われなかったことにほっとしつつ、

「早く、撃てるようにならないと」

撃てない銃を、それこそお飾りの威嚇用としてぶら下げていたってしょうがない。

何気ない眩きだったが。

尾形が、俺を見た。

「……………」

「……………、？」

単に視線を向けたというには慎重な仕草に、うつすら疑問を覚える。しかし、首を傾げたところで目を逸らし。こちらに手を突き出して、

「……………貸せ」

教えてくれるようだ。が、尾形はその自分をボコボコにした三十年式が手元に来るなりむつとした表情になる。

「手入れがなつてねえ」



「まあまあ……」

……ということらしい。銃と銃と銃のことしか得意じゃないだけはある。俺には違いがわかりませんが。

話が進まないので適当になだめておくと、尾形は嘆息しつつも、腰に巻いた弾薬盒に手をつ込んで。弾を取り出してくる。

「——装弾数は5、」

指先に挟まれた、底を何か金属の留め具で纏めて固定されている5本の実包。

「5……7じゃないのか」

「スペンサーはそうだったな。気をつけろ」

頷く。いつもの感覚で撃つていたらいつの間にか弾切れを起こす、ということだ。

「これは？」

「挿弾子だ。これごと装填する」

「へえ」

何度も言うがミリオタでも何でもないの、誰でも知っているようなことしか知らないし、原作の銃を留意して見た覚えもない。まあ、尾形の講釈を素直な気持ちで聞けてよかったとも思おうべきか。

「お前が使っていたスペンサーと三十年式では仕組みがまるつきり違う。前者のほうが

装填から排莖までの一連の動作は速い。だが、暴発の危険も多かった」

それすら言われてみれば、という感じだった。

「三十年式の発明は偉大だったが、それがなくとも株を奪われていただろうな」

「……………」

なぜか得意げ尾形。こいつ銃のことになるといきなり饒舌になるよな。

…………と、教えてもらっている立場でそんなちくちく言葉をぶつける資格はないので、無言の視線で続きを促す。

「撃ち方だ。安全子を引き出して、倒す。これが起きていると引き鉄が固定されて撃てない。槓杆を起こして引くと、弾倉が露出する。実包を押し込み、挿弾子は取り除く。

この状態で槓杆を戻し、薬室が空の状態一度空撃ちする」

丁寧な手つきで解説してくれる。

取り除くんだあ。スペンサーは弾の入ったチューブごと弾倉にぶち込んでましたが、実包かさばらなくていいね。

「槓杆を元の位置に戻す。これで撃てる」

そう呟いた瞬間、いきなり目にも留まらぬ速さでボルトを押し込んで。おなじみ座射の姿勢で、即座に第一射。再びボルトを操作し、空薬莖が地面に転がる。

「…………排莖。…………までだ」

うーん、最後のほうが流れるような一連の動作すぎていまいち頭に残らなかったが、多分大丈夫！

「簡単」

「そうか」

三十年式を俺に渡そうとして。はたと、動きが止まる。何、と思ったのも束の間、再び銃を手元に引き寄せた尾形は、

「この、遊底止にある槓杆止。ここを押しながら、槓杆を引くと——」

小さな出っ張り。そこを薬指と小指で押さえながら、人差し指と中指でボルトを挟み。開放されたそれを引き抜く。——こうやって記すと随分ちんたらした動作に見えるが、ほぼ一瞬の出来事である。

抜き取ったボルトを器用に指の先で回しながら、

「……これで、この銃は撃てなくなる」

で、出たり、伝家の宝刀ボルト抜き。

鶴見中尉もやってたけど、こんな芸当とつきにできるかな？ まあ、怪しい小銃があつたらとりあえずボルト抜いとけてこと？

「……覚えておいて損はねえ」

ボルトを再び銃に収めながら、尾形が言う。俺で役立てられるといいけどねえ。

それで今度こそ銃をこちらに返してきたかと思えば、

「撃つてみる」

ええ？

……今の俺の心境、まだうろ覚えの業務をいきなりベテラン上司の目の前でやらされることになった時のそれ。

「……………」

まさかここに来て嫌ですと言う訳にもいかず、恐る恐る三十年式を構える。尾形式座射には慣れていないので、いつも通りのやり方で。途端、ため息が降ってきた。

「どんな構えだ。変な癖がついてるな」

「我流なもので……………」

それからはもう散々で。ちゃんと肩に委託させて安定させるとか、表尺があるんだから使えとか、手の位置がおかしい重心を支えろとか、俺は陸軍二等卒かと錯覚するような尾形上等兵殿の有り難いご指導が入りまくった訳だが。

「……………まあ……………狙いのつけ方は悪くない」

「アリガトウゴザイマス尾形上等兵殿」

最終的に、とりあえず当たってるからいいか……………ということ放免された。身内補正がないまま尾形にねちねちやられていたであろう谷垣一等卒その他に、合掌。

はあ。

嫌な汗をかいてしまった。北海道の朝はまだまだ涼しいはずなのに、文字通り撃ち方を手取り足取り教わっていたせいで、密着した背中あたりが少し蒸し暑い。

絵面だけ見れば座った状態のあすなる抱きなのだが、行われているのはパワハラぎりの射撃指導である。

ヤマシギは既に手に入っているし、これ以上鮮度が落ちる前に戻るか。

そう思つて、立ち上がろうとしたのが。

——動けない。

「っ、」

尾形の両腕が、俺の胴体をがっちり捕らえていた。俺が動いたことは伝わったはずなのに、腕を緩めてくれる気配はない。何か、意志のようなものを感じた。

「……百之助……？」

タマ。

抱きすくめられたまま、名前を囁くように呼ばれる。すぐ耳元で。

そのせいだけではない悪寒のようなものが、汗ばんだ背に走った。

何か嫌な予感、

「あの銃で誰か殺せたか？」

ひゆ、と。喉が乾いた音を立てた。

……殺せた？

愉快げな響きを含んではいたが、からかっているふうではなかった。どこかで見た覚えのある問いに、背筋を冷たい汗が伝う。

「江渡貝剥製所で……俺を襲っていた兵士を、わざと撃たなかったな？」

いやバレてーら。誰だよぎりぎり間に合ったとか言ったやつ。

「何故だ？ ……手を汚したくなかったからか？」

どくどくと、自分の鼓動がうるさい。……いや、これは尾形のものか？

「ここまで来ておいて、自分は清いまま、この争奪戦をやり過ぎすつもりか？」

清い人間。尾形は、俺をそう思っているのか。アシ~~ン~~パや、——勇作と同じように。

朦朧と思う。彼はまだ話し続けている。

「なぜ三十年式の撃ち方を習いたがった？ アイヌやマタギの真似事で、食うための獣を仕留めるためか？ ……違うはずだ、」

骨張った指先が、俺が構えたままの銃のラインをなぞる。ゆつくりと、しなやかに。見せつけるような仕草だった。

スペンサー銃も、戦争で使われていた銃ではあるが。そう前置きして。

「三十年式歩兵銃……洗練された、美しい形をしている。人間を効率良く殺すためだけ

に生み出されたモノ」

手の中の銃。あの兵士は、これで誰か殺したことがあるのだろうか？

「お前はたった今、人間の殺し方を覚えた。他ならぬお前自身が望んだことだ」

もう、後戻りはできない。俺を優しく抱きしめた悪魔が囁いてくる。硝煙の香り。あ、頭がくらくらする。

「お前がこの銃で殺すところを見てみたい」

そうか、俺は見たくないけど。

いや、何か言わないと、

「……駄目だ、」

せめてもの抵抗で、後ろ手にやんわりその胸板を押し返したけれど。

「何故？」

鋭く問いが飛んでくる。尾形がぐつと顔を寄せてくる。離れたはずの身体が再び重くなって、俺の頭上に昏い影を落とした。

「お前は俺と同じ、欠けた人間のはずだ」

逆光。それが生み出した暗がりの中で、尾形は無表情のまま、俺を見つめていた。

同じ。単なる事実以上の意図が込められた眩きに、唾液を飲み込む。喉が、乾いていた。

駄目だ。唇を動かす。

「人間を殺すと、罪悪感が生まれるから」

「……罪悪感？」

くつ、と片眉が跳ね上がった。歪んだ唇から尖った歯並びが覗く。珍しく、悪辣さを全面に押し出した笑みだった。

「帰還兵に言う台詞じゃねえな。お前は日露戦争で俺に死んでいてほしかったのか？」

罪悪感ゆえに敵兵を殺さず、代わりに殺される、清く正しい愚か者として」

クソ、尾形のくせに痛いところを突いてくる。

しかし、人殺しはいけません、などと戦場帰りに説いても仕方がないのは事実だ。戦争が事実として起こり、彼らが命を賭して動員されてしまった以上、それは単なる綺麗事の嫌がらせでしかない。

負けを認めて死ぬという勇氣はないのに、馬鹿げている。そういうことだ。

尾形の読み通り、反駁に詰まった俺に対して、彼は饒舌に畳みかけてくる。

「俺はあの203高地を生き残った。それは決して、1/2の当たりくじを引いたからなどではない。俺に罪悪感は存在しなかったからだ」

てかおい、なんか理論が原作よりも進化してないか!?

勇作殿とどんなやり取りをしてきたのかなんてわかりようもないが、とにかく日露戦



争を経て尾形の理論が嫌な形で煮詰められてしまっているのを肌で感じる、

「道理だ」

聞き慣れた単語に。

はっ、とした。

道理。——これまでになく落ち着いた気持ちで、その底の無い瞳を見つめ返す。

「明確な道理さえあれば、罪悪感など覚えず人間は人間を殺し得る。それができなかつた奴から死んだ。罪悪感などというまやかしに惑わされた、『清い』人間から」

結局は、それか。

変わらぬ本質を前に、俺の胸に去来するのは、安堵か、空虚か。

道理。道理。口の中だけで繰り返して、舌ですり潰して、飲み下す。何の味もしなかつた。呟いてみる。

「……道理、」

いつの間にか、笑みがこぼれていたらしい。尾形がすつと目を細める。

「何がおかしい?」

何がおかしいって。

そうだ、

——道理も、所詮はエクスキューズに過ぎない。

——それを欲する心の動きこそが罪悪感の発露であり、お前が欠けた人間などではない証拠なのだから。

7年近くも前に考えたことを、今なお自分ごととして噛み締める。

顔を上げる。

ああ、尾形百之助。

「……その生み出した道理こそが意図的な閉目であり、罪悪感なのでは？」

滲んだ汗が、緩くつり上がった頬のラインをなぞるように伝って。銃身に、滴った。

尾形が、静かに目を瞠った。

沈黙が落ちる。

「――」

やがて、血の気のない唇が薄く開いて、何かを言いかけて。また、噤んでしまう。けれど、尾形は落ち着いていた。恐ろしいくらいに。

ああ。彼が、喉の奥から絞り出すようにそう漏らして。

「よく、わかった」

雰囲気、温む。——それに、一瞬でも油断したのが良くなかったのだろうか。

強引に腰を捻り、前面を向けた俺の上体。今度は背後からではなく、正面からそれを優しく抱きしめられて。硝煙の香りがする肩口に顔をうずめたところで、

「……………あ、？」

違和感に、体を離す。

今度は抵抗されなかった。

恐る恐る視線を下げる。何かが、腹から生えていた。否。深々と突き刺さる、

「づ、」

激痛。背筋が一瞬で冷たくなった。

視界の端に、中身のない銃剣の鞘が映る。臍下丹田の位置に突き立てられたその刀身。

——また、かよ。

復旧不可能なダメージに、ぐらりと傾いだ体を受け止められる。

熱くて冷たくて、息が苦しい。目眩がして、吐きそうだ。しきりに上下する背中を撫でられる。穏やかに、慈しむように。

「おが…………た、」

俺の虫の息に応えるように、耳道に淡々と吹き込まれる囁き。

「俺は、罪悪感など感じない」

——それは、*“大切”*であるはずの俺を殺しても？

「……………」

そこでふと気づいた。

足音が、近づいてきている。

背後から迫る、第三者の気配。尾形は俺を抱きしめたまま動かない。

「おい、尾形」

やがて、杉元のそれとも違う、低い男の声。……牛山だ。そう思った。

目覚めて尾形が近くにいないので、同陣営のよしみで探しにきたのだろうか。

「朝から何やって、……あのお嬢さんも一緒か？」

胡座をかけた尾形の背から飛び出す足を見たのだろう。あと少し歩いて、ちよつとでも覗き込めば「見える」距離だった。

ぜいぜいと落ち着かなかった呼吸はもはや下火になって、普通の寢息程度に落ち着いていた。これ以上良くなることはもちろん、無い。脱力した手足が冷たくなっていく。

「どうかしたのか、」

呼びかけに反応しない俺を見て、牛山が平坦に問うてくる。

尾形は、焦るそぶりも見せなかった。真っ直ぐ前を見据えたまま、唇だけが動く。機械のように。

「寝てるだけだ」

落ち着いた、いつも通りの声。

相手は尾形とはいえ、仮にも家族だった男の言うことだ。牛山は全く疑った様子もなく、ははつと軽妙な笑い声を上げて、

「仲が良いねえ、まったく」

牛山に、助けてほしい訳ではなかった。

おそらく、そのはずだった。

そもそも、この傷ではもう助からないだろう。バレても面倒だ。……それでも。

「……………」

最後の力で、伸ばしかけた手を。

——尾形のそれが、難なく捕らえて。深く、指を絡めてくる。檻から出られぬまま、重なり合つて、胸元に墜落する冷たい手。

「……………すぐに戻る」

微かに掠れた、低い呟きが耳を打つ。

柔らかな死刑宣告。

最後に見たのは、既に息絶えたヤマシギたちの、光を失ったボタンのような眼だった。

## 20話 人の生という芸術よ

「——マ、……タマ、起きろ、」

意識を包む薄い膜の外側で、誰かが俺を呼んでいる。

ぼやけていたその声の輪郭が、どんどんはつきりしてきて。覚えのあるその澄んだ響きに、声の主が浮かぶより早く。

「起きろー」「ぎゃ」

……眉間に衝撃が落ちてきた。

全ての段階をすつ飛ばして、意識が覚醒する。かつと見開いた視界に映るは、見慣れた綺麗な青の双眸。覗き込まれている。

「あ……アシ×パ？」

うん、と気負いなく頷いた彼女は、柔らかい微笑みを浮かべて。

「タマが寝坊なんて珍しいな」

……寝坊？

そうだったか。

何をしていたのだった。体を起こす。全身が妙に怠い。アシ×パの背後に控える男

たちの姿が見えた。杉元、牛山——尾形。

「っ、」

そこで、全てを思い出す。

ヤマシギ、三十年式、銃剣……また、死んだのだ。4度目、尾形百之助に殺された。

「おれ、」

「百之助と一緒に狩りに行ったのに、お前だけまた寝てしまったんだろ？」

寝起きでまだ頭が働いていないと見たか、アシ×パがすらすらと、何でもないようにそう述べてみせる。

「百之助がお前を背負って戻ってきたぞ」

「……ああ、」

「そういうことになった」のか。

さりげなく視線をやった先の尾形は、素知らぬ顔であらぬ方向を見つめている。

クソが。

忌々しい気持ちになったが、今さら尾形を責めてもしょうがない。どうしようもないことだ。

それよりも。

「……………」

問題は——今回の件で、花沢勇作の生存説が、絶望的になってしまったことである。いや、根拠がある訳ではない。

今朝の会話でも、その判断に繋がるような核心を突くワードは出てきていない。

何となくだ。しかし、肌感覚ながらある程度の確信が得られてしまった。

あの会話の内容で逆上して手を上げるレベルの精神性で、花沢勇作とのコミュニケーションに耐えられると思うか？

そういう問題なのだ。

そもそも、俺に対して突発的に殺ハラ（以下略）を仕掛けてきた時点でお察しである。

「……はあ」

——さっそく、先行きが怪しい。

早々に暗雲立ち込める旅路にうんざりした気分になりつつ、それはそれ。これはこれ。れ。

気持ちを切り替える。……切り替えた、ということにしておいた。

完全に覚醒しましたよアピールで、アシ×パに向き直る。

それで、

「さあ、タマも起きたし、ヤマシギを食べよう！」

……と、なったはいいのだが。



「チンポ先生。ヤマシギの脳みそです」

アシ□パが敬愛する牛山、好きな人には好きなもの理論に基づいて、さつそく手ずから脳みそを食わされそうになっていた。

「……………」

木匙の上でぶるぶる揺れる抉りたての神経中枢を、困惑を滲ませた表情で眺める牛山。

それから隣にちらつと目をやる。真横で、既にキマつちやつている顔で脳みそをジュルジュルチパチパやる杉元を無言で見つめてから、差し出されるそれに視線を戻す。

「先生え、脳みそは嫌いか?」

「いや……………食っていいものなのかい? それ……………」

アイヌが味噌に馴染みがないように、和人は脳の喫食に馴染みがない。特に鳥獣の頭に近い部分を食べるの、和人の感覚だとなくなぐグロテスクなんですよね。

「私は大好きなんだが……………な、杉元お? ヒンナだよな?」

「うん! ヒンナヒンナ!」

杉元からの後押しを受け、再び牛山に向き直るアシ□パ。父譲りのつぶらな碧眼からきゆるるん、と星が舞っている。

それを受けた紳士牛山、未知への躊躇と良心の呵責を天秤にかけ。

「……………」

紳士らしく、後者を取った。

指先で掬った小鳥の餌並みの量を、たつぷり時間をかけて口に含み。もちやもちやと咀嚼。わかりやすく微妙な顔をしているが、対照的にはあつと笑顔になったアシ。パが追撃を仕掛けてくる。

「ヒンナですか先生？」

「ひ、ヒンナ……………」

チンポ先生、あんた漢の鑑だぜ。

「なんだ尾形あ、さつきからじろじろ見て……………心配しなくても、お前にも食わせてやる」

「いや俺はいらん」

で、12歳児の好意をノータイムで無碍にする25歳児。

良い大人なら普通は取らない対応に、後ろの男2人がぎよつとしている。だが、アシ。パはめげなかった。

「フツ……………」

しょうがねえなあ、という雰囲気ですて隣の俺に手渡してくる。なぜか。

「……………え？」

とつさに受け取ってしまったが、何？ 俺の手からなら食うだろうということ？

明らかにそんな理由で脳みそを拒んでいる訳ではないようだが。事態を察してまた目をキュツとさせる尾形。哀れ。

「ほら、タマ。食わせてやれ」

というかアシ×パ、もしかして俺が尾形を完全に手懐けられていると思っっている？

いや、いやいや。

その勘違いもそうだしさつき逆上して殺したばかりの女の手から、普通ものは食わな、

「……………」

食うんかい。

至極不本意ですみたいな顔で脳みそをもちやもちやる尾形。もうお前のことがわかんないよ俺は。どういう感情なの？

「……………」

「フッフ」

その横で、被害者と加害者によるバッドコミュニケーションをほほえま顔で眺めるアシ×パ——と、「なんも言えねえ」な杉元牛山。茶番に巻き込んですみません本当に。

「タマも食えッ」

「もがッ」

テンションの上があったアシ×パにより、選択の余地なく口に突っ込まれる匙。味と食感という観点だけで答えると、くどい白子みたいでそんなに好きじゃないよ！

「あとは内臓ごとチタタ×？にする」

「出た〜っ、チタタプ！」

ここに来て杉元の情緒がいきなりバグっている。いや、最初からか？

いざチタタ×？。紳士牛山が素直にアシ×パの指示に従ってやっているうちは良かったのだが、孤高の山猫尾形に代わったところで。

「……………」

「アシ×パさあん、尾形がチタタプって言ってませえん!!」

ぴんと右手を伸ばして言い放つ、不死身ならぬチクリの杉元。正義感からではなく嫌いな同級生を貶めるためだけに密告を行使する、カテゴリ的には悪童の類。

アシ×パも放っておけばいいものを、面倒見の良い、優しい彼女にそんな発想はないらしい。

「百之助え〜…どうした？」

良い教師ヅラの彼女には構わず、無言でこちらに銃剣と小刀を押しつけてくる。え、やれって？

尾形はそっぽを向いたまま、いつものように髪を撫でつけている。しょうがないの

で、彼が座っていた位置に腰を落ち着け、チタタ□?の続きとしけ込むことにする。うーん、尻が生温い。

「……チタタプチタタプ」

やれと言われている以上、俺には逆らう理由もないので。普通に言ってみたが、新たな争いの火種を生んでしまったらしい。俺を見ていた杉元がハンツと鼻を鳴らして、

「はーあッ、タマさんがお前に全然似てなくて良かったぜ尾形アー!」

「……………」

やめて尾形、杉元に向かって初めて勇作殿とすれ違った時みたいな顔しないで!

おかげさまで、はらはらしつつ出来上がったヤマシギのオハウをいただくハメになった。一触即発の空気を変えたのは、アシ□バのふと思いついたような一言。

「アイヌの神謡には、ヤマシギのカムイが出てくるお話がある。クマゲラのカムイとの恋の話だ。題して、〃ヤマシギの恋占い〃」

それまで囁みつきそうな勢いで尾形を睨んでいた杉元の表情が、途端に甘く和らぐ。

「え、恋のお話……? 聞かせて……?」

「……………」

さすがの尾形も「何なのこいつ?」顔である。口に出さなかっただけ偉い。

「じゃあ、始めるぞ」

息を吸い込んだアシ<sup>×</sup>パが、唇を開いて。神謡というだけあって、リズムに乗せて紡がれるその物語。

ざっくり解説すると……北海道の名産を使った花占いの歌みたいなものだ。と言っても好き嫌いとかいう重たいあれではなく、既に恋仲の人間に会えるかどうかというライトな内容である。お子様にも安心。

アシ<sup>×</sup>パが愛らしい声で歌い終えたところで。しみじみと耳を傾けていた杉元と牛山が乙女フェイスを突き合わせ、

「なんてカワイイお話……」

「ああ……」

「おかわりいい?」

「おい、肉ぼっかり取るんじゃねえ」

大事なものは色気より食い気。これ、サバイバルの鉄則ね。

樺戸近くの、偽アイヌ村にて。

事情を全て知っているとはいえ、先んじて俺がヤクザの変装を暴いても新たなトラブルが発生するだけなので。万事を適当に流しつつ、アシ×パとともに幽閉されておく。

——熊岸長庵が毒矢で死ぬことも、俺は知っている。……けれど、何もしなかった。彼は既に表舞台では死人扱い。そして、ここで実際に死んでいたほうが、何かと都合が良いからだ。

虫の息ながら、贋作師としての知見から得た手がかりをアシ×パに伝える熊岸。それを、杉元の隣で黙って見守る。

「貧しさゆえ……贋作に手を染めても、芸術家であろうとした……ちつぽけな意地さ、」  
芸術家とは。ぼんやり考える。

「……本物の、作品を作りたかった……」

本物。贋物。その違いとは何だ？ 贋物には何かが欠けているのか？

……馬鹿げている。

足を踏み出す。数歩進んで。熊岸長庵の枕元に、ゆっくり膝を折る。

「タマ……？」

左胸に手を当てた。薄い生地越しなのに鼓動が弱い。死ぬのだな、と思つた。

「贋物にも魂は入るさ」

俺の眩きに、隣のアシバが小さく息を呑んだ。熊岸が微かに目を瞠る。

「人生だつて変えられる。そも、芸術の本質とは真贋ではない。……あなたの目にはたまたま見えなかつただけ、」

目を伏せる。シスター宮沢の肖像画でも、白石由竹でもなく。江渡貝弥作を思う。彼はただ、鶴見中尉の役に立ちただけだった。その一心で作られた贋物だった。

けれど、杉元たちは最後までその「魂」に苦しめられることとなる。

「大丈夫。あなたはちゃんと、芸術家だ」

熊岸が、途端にくしやりと顔を歪める。その眦に、新しい涙が宿った。

何かを言いかけて。……けれど、その口から漏れたのは、言葉ではなく魂だった。

そのまま、静かに息を引き取った熊岸長庵の臉を、そつと撫でて閉じてやる。

「……………」

立ち上がる。微動だにしない杉元の隣をすり抜けて、外に出た。

つい先ほどまでとはうって変わって辺りに広がる、地獄絵図——というにはつまらない光景。

死体が、モノのように地面に散らばっている。因果応報にしても退屈な結末だ。風に乘つて漂ってくる、人間の中身のおい。



「……臭い」

佇む尾形が、俺を見ている。

一瞬絡んだ視線を逸らして、まだ綺麗な村の端のほうへと足を向けた。

今は、何となく1人になりたい気分だった。涼しい北海道の風に吹かれながら、生い茂る草木をただ、眺める。

「はあ……」

誰も近づいてこないかと思ったが。

……やがて、接近してくる小柄な気配。

来るなど拒むのもあまりに大人気ないので、気づかないふりで放っておくことにする。

「……………」

で、さりげなく隣に来た気配——アシ×パが、これまた何気なくを装って、俺の投げ出していた右手を握ってくる。……ううん、こんな甘えたな子どもだったかな？

「タマは優しいな」

……先ほどの、熊岸とのやり取りを言っているのだろうか？

穏やかに、しかし確かに、内側が冷えていく。優しい。……本当に優しい人間は、ま  
ず熊岸を見殺しにしたりなどしないはずだ。

尾形のこと、何もかも。俺は優しくなどない。

しかし、そんなことをアシ×パに言っても仕方ない。飲み込んで、空を仰ぐ。  
「……………そうかな」

ああ。力なく肯定したアシ×パが、次に何を言うのかと思えば。

「杉元は、……………ときどき、怖い」

——怖い。

息を呑む。

思わずアシ×パを見たが、彼女は唇を引き結んで、前を見つめているだけだった。

怖い。恐ろしい。……………それこそ、俺が言われるべき言葉なんじゃないのか？

杉元佐一は、心からお前を想って、あんなに頑張っているのに、

「……………お前のことが心配なんだ、」

とつさに口をついて出た言葉に、アシ×パがはっとしたように顔を上げる。

お前のことが心配なんだ。

……………覚えのあるセリフで、それゆえに気分が悪かった。けれど、一度音になってしまった言葉は取り消せない。仕方なく、続ける。

「大切に……………愛しているから」

「……………」

うつむいたアシ×パは何も言わなかった。マタン×の下から覗く特徴的な耳が、赤く色づいている。

「お前を守りたくて、杉元なりに一生懸命なんだ。あいつはただ『不死身の杉元』を頑張っているだけ。最後は、こちらがどう受け止めるかではない」

俺は、アシ×パの道に必要な存在だ。

そうあるはずだし、そうあるべきなのだ。

だから、俺を頼らないでくれ。愛さないでくれ。お前には、杉元佐一がいるのだから。そんな思いを込めて、微笑みかける。

「……ああ、」

今度こそ明るい笑顔が返ってきて、少しだけほっとした。

「コタンの女たちがお礼をしたいと言っている」

——この時期に採れるトゥレ×?の料理で、私たちをもてなしてくれるそうだ。

死体の隠蔽も落ち着いた頃。巻き込まれていたアイヌの女性たちから、そんな有難い申し出があった。

獲ってきたヤマシギを食べたきり、ロクな食事を摂っていなかった我々が、やったあ、

となつたのも束の間。

「あ、手伝う感じなんだ」

アイヌの女たちと並んで、ウバユリの鱗茎を掘り起こす。おいそれさつき死体を埋めてた鍬だろ。

「トウレ<sup>㊦</sup>?の加工は水をたくさん使うから、川のそばでやる」

洗つた鱗茎を集めて、川辺まで持つてきたイウタニとニス——日本語で言うところの杵と臼——で潰す。もちろん手伝う。

ドチャドチャとただ杵を打ちつける合間にも、女たちはエツサオーホイ、ホイヤオーホイ。リズムを取つて、ずいぶんご機嫌な様子である。

「これは掛け声？」

「ああ。単調な作業がちよつと楽しくなるだろう？」

「ふうん……」

楽しい、か。そこでふと、頭に浮かんだ記憶。特に考えず、口に出してみる。

「どうせなら、さつき言つていたあの……神謡を歌つてもいいんじゃない」

「ヤマシギのか？」

ふむ、と小さく唸つたアシ<sup>㊦</sup>パは、少し何か考えていたようだったが。ぱつと顔を上げて、

「試しに合わせてみる」

合わせてみる？

……ここで歌えということか。

うーん。言い出した手前、今さら嫌だと言つて後には退きづらい。仕方なく、咳払いで喉の調子を整える。

えーつと、歌い出しは何だったか、

「……ノーノチキ、」

瞼を瞑り、一度聴いたきりのアシ×パのそれを、なんとか思い出しながらひと通り歌つて。……目を、開けたところで。

——なぜか、アシ×パや杉元どころではなく、その場にいた人間全ての視線を集めていることに気づく。皆一様に、呆気にとられたような表情だった。あれ？

「……タマ、お前……」

呆然とした表情で固まっていたアシ×パが、その顔のまま、ゆっくり口を開いて。一体、何を言うのかと思えば、

「歌がものすごく下手だな！」

——は。

「げほっ、」

「ア!? 百之助!?!」

背後でアシ~~ン~~パとともに見学に徹していた尾形が、おもむろに咳き込んだ。

いや、咳き込んだただけなら良い、タイミングといい、明らかに、明らかに笑いが混ざった息の吐き出し方だった!

——歌が、下手!?!

しかも、ものすごくとききた。

その意味を理解した瞬間、俺の脳裏には、今までの人生（主に前世）で歌を口ずさんだ場面が走馬灯のように雪崩れ込んでいた。

やがて、記憶の群れがキャパシティをオーバーして。宇宙が、広がる。

いや、尾形、問題は今の尾形で、

「う、…………え、…………い、いま、わらっ…………」

「ごほっ、んんッ、」

駄目だ、言葉が出てこない。俺より先に復帰した尾形が、やっぱり笑いが隠しきれない声で続ける。というか、顔が完全に笑ってしまっている。

「いや…………下手…………下手、ねえ。ガキだった俺の耳は問題なかったってことが十何年か越しにわかって、胸を撫で下ろしたただけだぜ」

子どもの頃の尾形!?!

歌つ……いや、歌った、トメの病状が悪化して、いよいよ尾形との添い寝もしなくなつた頃。この歳で一人寝はさすがにかわいそうだからと、一緒に寝てやつて。

それで、なんとなく。彼女の真似のつもりで、子守唄を歌つてやつたのだ。ただ、途中で止められた。

止められて、それから困つたような顔で、もういいと言われた。

あの時は、母親恋しさにその真似事を拒んでいるのだと解釈していたが。

——歌が下手、だったから？

こちらも、答え合わせだった。

単純に、下手だったから。

聞くに堪えなかったから！

言語化できない衝撃に、目の前が明るくなったり暗くなったりして。

「~~~~~」

結局、やり場のない感情を杵にぶつけて、ウバユリを磨り潰すことに専念する。

前世では、授業の一環でも歌なんか真面目に歌っていなかつたから、誰にも指摘されなかつた。カラオケだつて行つても歌わなかつたし。今世で、初めて真面目に歌つてやつて……それで音痴が発覚するなんて。

顔が熱い。火が出そうだ。

もういい。もう知らない。

「はわあ……タマさんのほっぺが焼いてるお餅みたいになっちゃったあ……」

「タマあ、悪かった、私はその、……個性的でいいと思う！」

「ははあつ」

もう歌なんか絶対歌わない！

“ 紆余曲折ありつつも、月形に到着した俺たちを出迎えたのは、ふたつの “悪い知らせ” で。

ひとつは熊岸長庵の死亡。正確に言えばこちらは誤認だったのだが、今となっては揺るぎない事実となつてしまったため、結果的に問題はない。

問題があるとすれば、もうひとつの知らせのほうだった。

その内容とは——第七師団による、白石由竹の執縛。

「おそらく今頃は、旭川へ着いてしまっているだろう」



白石を助けるチャンスは何度もあった。

しかし、それは叶わなかった。

——彼自身が躊躇ったからだ。

機会を完全に失ったことを確かめ合うだけの時間の後、長い沈黙が広がる。

ああ白石、白石由竹——

「……………」

——まあ……………いいか……………

刺青の写し云々以前に、明らかに日頃の行いが災いした結果の淡白な諦めムードが一行に漂った、その時だった。

「いや」

毅然と声を上げた男がいた。

「俺は助けたい」

不死身の鬼神、杉元佐一。軍帽の下の、輝く琥珀色の瞳がその決意を物語っていた。

アシ<sup>△</sup>パが顔を上げる。

「……………私も、」

完全に便乗する形になって申し訳ないが、俺も名乗り出ておく。

「同じ気持ちだ。杉元」

「タマさん、」

うっすら表情を緩める杉元。

いや、白石は後半のキーパーソンだし、多少ここで恩を売つとこうかなと思つて（クソ）。

え、対外的な動機？ いや、白石はほら……餡とかくれるから……あ、2円もくれたし。

「助けるつて……どうするつもりだ？」

俺が脳内で後付けの理由を捻り出している間にも、キロランケに問われた杉元は鈴川の禿頭に手のひらを乗せ。

「この詐欺師を使う」

## 21話 胎内怠慢対談

近くのコタンで話し合いを済ませた後。俺たちはいよいよ、軍都・旭川に足を踏み入れていた。

白石奪還作戦の決行である。

「タマの分だ」

「ありがとう」

——まあ、それはそれとして、みんなでおはぎは食べる。

言うまでもなく土方歳三さんの奢りです。あざす。ゴチになりまーす。

集まると目立つので、適度にバラけながら実食。

「餡子食べるの久しぶり」

前世で和菓子をそこまで好んでいた覚えはないが、この時代で甘味と言えばそれくらいしかない訳で。じゅうぶん有り難い。

うん、外観からして明らかに高級志向っぽい店のただただはあって、上品な甘さでヒンナでございませう。

「……………」

「百之助？」

お行儀悪く指についた餡子を舐めたところで、背後に佇む尾形に気がつく。顔バレ防止で外套のフードを目深に被ってしまっているの、いつも以上に表情がわかりにくい。

無言でこちらに差し出される、懐紙に包まれた手付かずのおはぎ。

「……ああ、」

ピンと来て、受け取る。尾形は最後まで何も言わず、フードの端を引つ張りながら踵を返して離れていく。そのやり取りを見ていたらしいアシ×パが、

「百之助、食べないのか？」

「昔からそうなんだ」

そう。今に始まったことではない。

幼い頃から、尾形は甘味が出る度に手をつけず、俺に横流ししてきた。おやつの手し柿に始まり、四季折々の節句菓子に至るまで。

俺も別に断ったことはないの、彼がこういつた菓子類を食べている姿は見たことがない。

「甘いもの嫌いなのかも」

へえ、とアシ×パが軽く応える。

原作のプロフィールだと、嫌いなものは確か椎茸だけだった気もするけど。まあ、そんなに好んで食べているような描写もなかったしなあ。

そんなことを考えながら、2つ目のおはぎにかじりついた。

いぎ、計画実行の時。

27 聯隊司令部敷地内の樹の上から、尾形とともに事の成り行きを見守る。

「よく見える〜」……………」

おニューの双眼鏡を片手に。

言うまでもなく、ここに来るまでに土方歳三の金で買ってもらったものである。ちなみに、何かと必要だろうとフード付きの外套も貰ってしまった。これがパパ活ちゃんですか。

「大丈夫かな」

「……問題があるとすれば、不死身の杉元の演技力だろうな」

「いやアレに演技力も何もないだろ」

皆さんご存知、犬神家のパク……パロ……オマージユの変装である。

スケキヨって言うけど、あれはだいたい青沼静馬定期。まあそんなネタバレはどうでも良くて、網走監獄看守の杉元はだみ声の「イヌドウ……」しか口にしないという設定なので、演技とかそういう次元の話ではない。

双眼鏡を全く有効活用できていない俺とは反対に、あちこちに気を配っていたらしい手練れの狙撃手が隣で声を上げる。

「む、」「なに？」

まずいぞ。そう呟いてから、微かに眉根を寄せる。

「鯉登少尉が慌てて入っていった」

「コイトシヨイ？」

「鶴見中尉お気に入りの『薩摩隼人』だ」

「……………」

鯉登音之進。何となく聞き返してしまったが、もちろん彼についてのデータは頭の中に入っていた。今後、俺が彼と関わることはそうそうないだろうけれど。

双眼鏡を仕舞い込んだ尾形が、無言で銃を構える。——鯉登が建物の中に消えてから、どれほど経ったのか。

「……………」

映画ばりに2階の窓ガラスを突き破って転がり出てくる、杉元と白石。  
「出てきたっ！」

2人の後を追って身を乗り出した兵士の肩に、尾形が正確に一撃を食らわせる。

「逃げるぞー！」「ああ、」

猫ちゃんの如く身軽に枝から飛び降りた尾形を、慌てて追いかける。ちよつと俺はこの高さから飛び降りることを想定した訓練などは受けていないんですけど。

「向こうに馬を待機させてあるが……これでは間に合わん、」

門から背を向けて、できるだけ建物から遠ざかる方向へと走る。その途中で、血みどろの杉元を支える白石に出会った。既にちやつかり手錠を外している。

「杉元、白石！」

「こつちはダメだッ！ 南に走れッ！」

辺りがにわかに騒がしい。銃声を聞きつけた兵士たちがぞろぞろ集まり出している。何せ、ここは聯隊の心臓部なのだ。

「お前ら遅いぞッ」

「無理だ、杉元が撃たれちまった！」

「不死身なんだろう、死ぬ気で走れ！」

無茶苦茶である。さすがの白石も、この傷では危ないと弱気な様子だ。

かと言って俺には何もできないしなあとか考える視界に、突如映り込む白い塊。

「……何か見える、」

「あ、……？」

あれ、と指差した先。ちよほど白石たちも気づいたようで、やや後方から驚きの叫びが聞こえてきた。ええと、あれは確か、

「——気球隊の試作機だ！」

何とか兵士たちから気球を奪って離陸できたはいいが、鯉登少尉がぎりぎりでも乗り込んできてしまった。さすが、薩摩隼人は気合いの入り方が違う。いや知らんけど。

それぞれ兵士から奪った軍刀と、尾形から借りた銃剣を構え、一足一刀の間合いで睨みあう鯉登と杉元。

戦闘能力からして妥当な選出ではあるのだが、今の杉元は胴体に2発も弾を受けている状態だ。普通なら死んでる。

「クソっ、」

さすがに責任を感じているのか、焦った様子の白石。置かれた道具を漁って、この状況を打破する手段を探している。



「これ以上、あの状態の杉元を戦わせる訳にはいかねえ……！　なんとかしねえと……」  
尾形と一緒にって鯉登を煽つてもしょうがないので、俺もそれに加わる。回収し損ねたらしい道具箱を持ち上げたところで、その下から、いいものを見つけた。

「……俺たちが交戦してあれを退けるのは、もつと無理だ」

ならば。隙をついて、気球から突き落とすしかない。

俺が引つ張り出してきた麻縄に、白石が目を瞪り。その後、ピユウ、と口笛を吹いた。  
「冴えてるウ」

緩く束ねられていたのを解いて、端を白石に放る。そっち側は本人に任せるとして、俺は骨組みに縄を括りつけに行く。うーん、これ原作だと両方白石がやってるんだよな。

「どう結ぶ？」

「もやい結びつて出来るか!？」

「ああ、船の……？」

「さすがだぜタマちゃんつ」

別に凄くはないだろう。

というか、そんな誰でもわかるようなのでいいのか。まあ時間もないし、ときつちり結んでから、白石を振り返る。ムカつく笑みのサムズアップが返ってきた。

あとはタイミングを計るだけだが。

猿叫とともに軍刀を振り上げる鯉登、そのすぐ脇の柱に見慣れた鍔が突き刺さり。彼の動きが止まる。

「今だ、」

身軽に跳躍した白石が、彼らの頭上に影を落とす。振りかぶった爪先が、鯉登の胸元にめり込んで鈍い音を立てた。

着地のことなど考慮していない、全体重を乗せた重い一撃。完全に隙を突かれた鯉登の体がぐらつと傾いで、白石もろとも気球の上から落下する。

「白石イ!!」

杉元が焦った様子で声を上げたが。

——ピンツ。

即席の命綱のおかげで、白石の体は空中で静止する。いや解けなくてヨカッター。本人はあつけらかんと為す術なく墜落していく鯉登の猿叫を嘲笑って、

「あはははっ、アバヨ鯉登ちゃんっ」

「おい、木に突っ込むぞ!」

「え? ——痛ッ、痛ででッ」

うーん、締まらない。

白石はひとり通り林にバリバリやられた後。無事に出てきたが、そこでは思わぬ釣果があったようだ。その姿に、顔色の悪い杉元がそれでも明るい笑みを浮かべる。

「アシッパさん！」

「百之助、白石たちを引き上げるから手伝え」

「フン……」

いや、どう見てもこれを俺が一人でやるのは無理があらうと思われます。

——5人を乗せた気球は、結局、大雪山の近辺で止まってしまった。

おそらく燃料切れを起こしたのだろう。試作機だったということ、最初から大して入っていなかったはずだ。

気球は目立つ。大まかな居場所は既に第七師団に割れているはず、という訳で、先を急ぐことになったが。

「——見つかった！」

今まで以上に双眼鏡で周囲に気を払っていた尾形の一言に、緊張が走る。

「大雪山を越えて逃げるしかない、」

マジかよ。白石が呻くように呟いたのが聞こえた。

明らかに、こんな軽装で進んでいい山道ではない。けれど、他に選択肢はない。

やむを得ず、俺たちは無謀な大雪山越えを決行することとなった。

しかし。

「……まずいぞ、天气が急に崩れてきた」

鉛色に曇った空、吹き荒ぶ寒風。

季節が逆戻りしてしまったかのような厳しい気候と、それをカバーする手立てさえも

ない亜高山の荒れた土地。

寒いというより、もはや全身が痛い。手足が自分のものじゃないみたいだ。外套があ

るだけマシかとも思ったが、このレベルでは焼石に水。

……この気候、初めて小樽に来た時を思い出す。確か、あれもこんな寒さだった。

それで、俺はあの時、

「う、」

——何かに躓いたか、踏み外したか。

それも定かではないまま、大きくバランスを崩した体を。

「つ、……百之助……」

いつの間にか、すぐ隣まで来ていた尾形に支えられた。さりげなく外套に包まれる。

「……悪い、」

「……風を避ける場所を探すんだ、低体温症で死んじゃうぞー！」

がなり声すら、今はどこか遠い。

駄目だ、すっかりしなくては。強く拳を握り込んで、気合いを入れ直す。

「ユ☒だッ！」

アシ☒パの声。この気候でも元気に生きてるんだから動物つてすげえや。

「杉元！ オスを撃て！」

「エゾシカを!?!」

「大きいのが4……いや、3頭必要だ！」

アシ☒パの呼びかけに、一步早く尾形が反応した。俺からするりと離れて、小銃を構える。銃声が1、2、3発。

……そこで、近くにいた白石の様子がおかしいのに気づく。いや、さつきからおかしかったけど。

「おい何してる、」

バタバタと、忙しなく手足を動かして何かをしている。……服を、脱ごうとしている

?

「白石?」

「な、なんかあつくてえ……ヤバイよお、」

暑い訳がない——矛盾脱衣。

原理は証明されていなかった気もするが、実際にいくつかの事例がある現象だ。

面倒臭い。が、やむを得ない。右手を振りかぶって、バチイン。

「ぶえッ」

良い音が鳴った。

仰け反った白石の胸ぐらを掴んで、顔を覗き込む。やや光を取り戻したその瞳を睨み

つける。

「しつかりしろ白石由竹。もっと強い気つけが必要か?」

「あ、あい……」

俺も先ほど尾形に助けられた身だからあまり強くは言いたくないが、ここで脱がれて

錯乱されても余計な手間が増えるだけだ。

「杉元たちが鹿の皮を剥がしてくれている。もう少しだけ我慢しろ」

「ウン……」

「おい、大丈夫か!」

鹿の処理が済んだらしい杉元たちが、心配して様子を見に来てくれたようだ。

「ああ……ヴェツ」

良かった、と一安心したところで。

首根っこを掴まれた。そのまま、近くの鹿の中に引きずり込まれる。え、妖怪？

いや、

「百之助、」

白い外套がちらつと見えた。

3頭しかいないので、必然的に2頭分はタンデムになる訳だが。

案の定というべきか、俺は尾形と鹿を共有するというのが、彼の中では既に確定事項だったらしい。まあ、別に俺は何でもいいのだけど。

「あつたかいね」

「……………」

特に返答はなし。成人2人だが、そんなにめちやくちや狭いという感じはない。もしかして、一番大きい鹿を選んだのか。

少し落ち着いて、細かいところの不調に意識が行く。

「……指の感覚が無い……ん、」

背後から回った尾形の手が、俺の手を包んで無言で揉み始める。

色つぼさの欠片もない事務的な動きだったが、優しさだけは伝わった。凍傷怖いからね、日露戦帰りなら余計だろう。

「血の臭い」

節の目立つ尾形の指に指先を絡め返して、思ったことを口に出してみる。

「戦場ってこんな感じなのかな」

何気なくの眩きだったが、

「……203高地はもつと焦げ臭かった」

あまり間を置かずに背後から答えが返ってきた。狭いところで密着しているので、自然と声量もいつも以上に控えめになる。

すぐそばでCV・津田健次郎の囁きボイスが聴こえる環境、好きな人には最高なんだろうなああと全く関係ないことを考えた。が、鹿の裂いた腹の中というシチュエーションはあまりに人を選びすぎる気がしないでもない。

「鉄の焦げる臭いと、人間の焦げる臭いだ。すぐに慣れたが」

淡々と続けてくる。珍しく饒舌だと思ったが、2人きりだといつもこのくらいは喋るのだった。どうやら会話に人が増えれば増えるほど寡黙になるタイプ。



「そう……」

「……………」

相槌に、無言が落ちた。話したいことは話してしまったのか。

今日はこのまま寝る雰囲気かとも思ったが、尾形はおもむろに、

「……………第27聯隊に入って、……」

軍隊の話を書くのは初めてだな、と思ったが。なぜか早々に言葉を止めてしまう。

「うん……?」

さりげなく相槌を打って、先を促すと。それでようやく続きを話し始めた。

「本妻の息子に会った」

——花沢勇作。

どきりとする。まさか、尾形の口から勇作との話を聞くことがあるなんて。

だって、第七師団以外の登場人物はほとんどが知らなかったであろう関係だ。第七師団の人間だって尾形から聞いたというよりはただ、『自分の目で見て知っていた』というだけのだろうし。

「花沢幸次郎のか」

「ああ」

どういふ魂胆なのだろう。

本妻の息子がいる、ということとは俺も知っていた——のを、尾形は知っていたはずだ。だから、別にこうやって話題に上がること自体はおかしくないのかもしれない。

でも、花沢勇作は。

いや、ここは部外者の俺が深刻になるような場面じゃない。努めて平静を装って、毒にも薬にもならない話題を振ってみる。

「……百之助に似てた？」

ふん、と尾形が鼻を鳴らす。そのごく軽い響きに、何となく安堵を覚える。

「まったたく、これっぽっちも、似ておりませんでしたなあ」

「あはは」

誤魔化すような口ぶりではなかった。

顔を見て、覚えているのか。

「おかしな男だった。何度注意しても部下の俺を『兄様』と呼んでまとわりつく。一人っ子でずっと兄弟が欲しかったから、と」

死に体の幸次郎が明け方の自宅で聞かされた話を、鹿の腹の中で聞く。語る尾形は、どこか夢見るような口調だった。

「兄様……」

何度聞いても芸術的な呼び名だ。というか話の流れに納得いく箇所がひとつもない。

俺が尾形ならタチの悪いドッキリかと思う。

「じゃあ私は姉様か……」

「……………」

高身長・高貴な血統・高潔の3Kが揃った勇作殿に『姉様』と呼ばれてまわりつかれた人生だった。何か言えよ尾形。

咳払いして、話を戻す。

「それで？」

「203高地で死んだ」

いやいきなり話が飛んだな。

別に異母兄弟のキャツキャウフ兵営エピ（例：ぼつとん便所に落ちて軍袴を借りた）等を聞き出したかった訳でもないのだが、紹介即故人はちよつと高低差で戸惑ってしま

う。  
「花沢少尉殿は聯隊旗手をやっていたから、……わかるか？ 軍旗を持って、戦場で兵士を鼓舞する」

旗振りの真似で何とかイメージを伝えようとしたのか、軽く結ばれた拳が俺の胸元で左右に振られる。けれど、そこまでしてくれなくても、俺の脳裏には既に軍旗を掲げて戦場を駆ける花沢勇作の画が浮かんでいた。具体的に言うとなら165話扉絵。

「それじゃ良いマトだ」

「ああ、……なるほど、お前も案外、ちゃんと狙撃手をやっているんだな」

頭を撫でられる。尾形はちよっぴり嬉しそうだが、聯隊旗手って良い標的だよねーという話題で義姉と通じ合う異母兄嫌すぎる。狙撃手ってみんなこんな物騒な会話しかないんですか？

「……だから撃たれたの？」

「……………」

沈黙が肯定の代わりだった。

改めて、考える。

——そうか。勇作は死んだのか。

浮かんできた感情は、やはり、だった。

もしも尾形が撃たなければ生きて帰れた、と今まで勝手に思っていた節もあつたけれど。旗手の殉職率は尾形も言っていた通り、高い。その上、舞台はあの203高地だ。

歴史の修正力とか勘繰るまでもなく、何にせよ、花沢勇作があそこで死ぬことは何ら不自然ではない訳だ。

トメと同じ。ただ結果を先急ぎ、不必要な業を背負っただけ。その気づきはまた新たな悲しさを生んだ。

「……処女童貞は弾に中らない」

尾形が、歌うように呟く。

「ゲン担ぎなぞ所詮、根拠のない神頼み」

地を這うような低い囁き。どこか恨みがましいようにも聞こえる響きだった。どういう意図があつての発言なのだろう。

わからない。

花沢勇作は死んだ。敵兵に撃たれて。

……本当に？

「……百之助……」

尾形百之助は信用できない。

「お前が殺したのか？」

ほとんど、反射的な問いだった。

一瞬。沈黙が落ちた。

「……何故そう思う？」

その後、淡々と尋ねてくる。

なぜ、つて……原作の世界線ではヤツチャツテルからですが……とは流石に言えないので、一旦無言で茶を濁す。実際、今もその疑念が払拭できた訳ではない。

嘘をついている。平気な顔で俺を誤魔化している。

自分の手で勇作を撃ち殺しておきながら。

その可能性は、否定できない。

「……………」

うーん、でもこれなんて返すべき？

やっぱり言わなきゃ良かったかな、

「やりそうだから」

「ははあ」

「づうんっ」

再会した時のように頬肉をなかなか強めに引っ張られる。これ嫌いだ。

「だとしたら……………何のために？」

なぜか頬をつまんだまま続けてくる。いや痛いんですけど。

「ひやくろすけ」

「理由があるはずだ、」

「ほっぺはなへ」

だから痛いって、

「おい」

そこでようやく解放された。頬肉もげるかと思った。

じんじんと痺れる頬をさすりながら、とりあえず一辺倒の案を出してみる。尾形百之助が花沢勇作を殺す「理由」。

「……祝福された本妻の子が憎かった？」

「いや、……」

違うな。

直々に否定される。それから、例えばだ、と前置きして。

「ただ……どうなるのかと思って、」

どうなるのかと思って。小学生のような言い草だが、尾形が口にするとなると不思議としつくり来た。お前はそういう男だよ。

まあ、小学生がアリの巣に水を流すのと同じ感覚で殺されては、勇作殿も堪ったものではないだろうけれど。

彼が小さく息を吐いた。ため息みたいだな、と思った。

「何も考えた通りにはならなかった。そんなものか」

「……………」

尾形は、ひどく落ち着いていた。

何も考えた通りにならなかったと言った。勇作に関しては、自ら手を下す前に死んだ

こと？ 少なくともこの段階では、尾形の口ぶりからしてもそう考えるほうが自然なのか？

幸次郎のほうは……原作通りに祝福された道を否定されたことも取れるし、単純に勇作が死んでなお愛されなかった、という自身の状態だけを指しているとも言える。後者は希望的観測すぎる？

わからない。謎だらけだ。

ううん——駄目だ、いよいよ眠くなってきた。温かいし、尾形の声は落ち着くし。

「……タマ？」

うつらうつらしだしたのが伝わったのか、尾形が控えめに呼びかけてくる。

「寝たのか」

「……ん…………おきてる…………」

「寝てるんだな」

失敬な。ちよつと目を瞑って静かにしているだけです。それを人は睡眠という。

「タマ、……………」

尾形が、また呼びかけてくる。

今度は何だと思ったが、

「…………お前は俺のことをいろいろ探っているようだが、俺からすればお前のほうがよっ



ぼどわからん存在だ」

独り言のようにも聞こえる呟きだった。

「わざわざ北海道までやって来て……何が目的だ？ 中尉と繋がっているのか？」

中尉……鶴見中尉？　そこでなぜ鶴見中尉が出てくるのかがわからない——ああ、いい加減頭が回らない。いや、その前に尾形は何と言った？

「もくてき……？」

思わず回らない舌で呟いていた。まだ意識があるとは思っていなかったのか、寄り添った体が微かに跳ねる。

「俺は、ただ……お前に……」

ダメだ、眠い。

瞼を閉じる。尾形は、今度こそ何も言わなかった。重なった手が温かい。

「……………」

風の音が微かに聞こえる。

ただ、夜が更けていく。

## 22話 きょうだい

——ごとん。ピツ。

鈍い音と、甲高い断末魔。

「獲れたっ！」

罨にかかり、石に押し潰されて圧死した小型齧歯類を、アシ $\square$ パがつまみ上げる。うーん、トムとジェリーのダメージ描写レベルにぺらっぺら。

「そのネズミ、下山するにつれてだんだん獲れなくなってきたな。山の上にはいっぱいいたのに」

「高いところにはしかない変なネズミなのかもしれないな」

さつきから皆してネズミネズミ言っているが、こいつは確かエゾナキウサギ。希少な動物である。

隣の尾形はきゅつと引き絞られた瞳孔でそれを見つめている。シー、猫ちゃん！

「またネズミかあ」

白石はわかりやすくガン萎えだが、俺は絶滅危惧種を食うという現代なら犯罪まっしぐらの行為にちよつと興奮しています。

……今さらだが。

寝袋代わりのエゾシカに目をつけたヒグマに襲われかけたりしつつも、俺たちは無事に大雪山を越えようとしていた。

今はもう、高地に棲むナキウサギも獲れなくなってくるような辺りまで降りてこられたところだ。

「我慢しろよ。銃声が追手に聞こえちまうかもしれないから、鹿や鳥がいても撃たないほうがいい」

「タマ、あとでくくり罠を見回ってこよう。木ネズミが獲れてるかも」

「そうだね」

「ネズミばかりく〜く〜ッ」

でんぐり返り白石のケツを眺めながら、こんがり焼けたナキウサギをかじる。食うところがほぼ無い。

「少ないけど、百之助も食べろ」

リスより貧相なその肉塊をアシ<sup>×</sup>パから受け取った尾形、無言でカリカリ。本日もノーヒンナ。

「百之助え、ヒンナは？」

「……………」

で、無視。大人気ねえですよ。

ほっときなよ、と杉元が苦言を呈するのにも構わず、アシシパは例のシパシパ顔で、「百之助はいつになったらヒンナでできるのかな？好きな食べ物ならでできるか？」

圧倒的、無視。黙ってナキウサギをかじる尾形を、彼女はしばらく見つめていたがやがて、くるつと俺に向き直り。

「……タマ、百之助の好物って何だ？」

「あんこう鍋」

「……………」

アシシパ、尾形が言わないことは全部俺に聞けばいいと思ってるんじゃないのかね。まあ良いけど、と思いつつ答える。

「ケツ、大人の男ぶっちゃってよ」

でお前は何なんだ杉元。

その小物感溢れる悪態は華麗に無視して、尾形が立ち上がる。外套のフードをきつちり被って、これ以上構うなムードだ。

放っておくかと背を向けたところで。すれ違い様に、ぽつりと。

「……………鴨鍋」

その、さりげない眩きに。先ほどの発言を訂正しなかったのだな、と咄嗟に思った。尾形の好きな食べ物。

あんこう鍋ではなく——鴨鍋？

ああ鴨鍋、

「え、ッ」

「え？」

「うん？」

——その意味を理解した瞬間、喉奥から踏み潰されたカエルのような声が漏れた。

しかし、尾形は当然振り返ることなく、変わらぬ歩みで離れていつてしまう。その背に何か言うこともできず、黙って見送ることしかできなかった。

やがて、その背中が完全に視界から消え。微妙な沈黙だけが流れる。

その静寂を破ったのは、氣遣わしげな顔をした杉元だった。

「……何かあったのか？」

何かあった？

……何と答えたらいいか。とにかく想定外のこと起きたのは確かだった。

尾形百之助が、好物を問われて「鴨鍋」と答えた。

あんこう鍋でも、他の何でもなく、よりによつて鴨鍋、と。

「つ、……………」

それを、俺はどう受け止めるべきなのだろう。

とにかく、何か言わなければ。

心配、好奇心、純粋な疑問。色々な感情が混じった3対の瞳を、決心して見つめ返す。話そう。俺たちのことを、少しだけ。

「ずっと、昔の話だ」

「実家にいた頃……百之助は冬になると、毎日のように畑に出て鴨を撃ってきて……それも、まだ10にもならないような時分からの話だ」

さっそく、杉元と白石が驚愕の顔を突き合わせる。

「あいつ、そんな小さい頃から？」

「どおりで銃が上手い訳だよ、」

「……あんこう鍋は、どこから出てきたんだ？」

ただ1人、尾形の銃の腕前には大して興味がないらしいアシ×パが、その勘違いの出処について問うてくる。

「あの子の母親がよく作っていた料理で……でも、もともとは百之助じゃなく、その父親が『美味しい』と言ったものだった」

不穏な気配を感じたのか。ゴールドントリオが揃って黙り込む。

「百之助の母親は、どうしても自分を捨てた父親にもう一度振り向いて欲しくて——百之助は、どうしてもそんな母親を振り向かせたかった」

そのための銃であり、鴨だった。

——でも、結局それは最期まで叶わなかった。

俺の眩きに、3人が息を呑んだ。

そう。尾形トメは死んだ。最期まで都合の良い夢に浸ったまま。土間で揺れる鴨の脚。受け取られなかった尾形百之助の“愛”。

俺がそれを代わりに受け取った——否、奪ったのだ。今になって、思う。

「百之助は私じゃなく、母親に鴨鍋を作ってほしかったはずだ。でも、あの人が鴨を受け取ることはなかったから……」

だから、尾形は。

唇をなぞる。殺鼠剤の入った鴨鍋の味。吐瀉物が喉を焼く痛み。

やはり俺では駄目だった。代わりにあってあげられなかった。答えはあの時、出ていたはずなのに。

「百之助……」

……おかしな話だが。

ここに来て、初めて尾形百之助の悲しさを自分ごととして考えた。

悲しかった。寂しかった。けれど、尾形はそれをどこかで諦めてしまったのだろう。存在しなかった。そういうことにした。母が作ったあんこう鍋の味を忘れることで。

そんなことは最初からわかっていたはずなのに、こうやって事実として突きつけられて出てきたのは、後悔だった。

俺のせいだ。

項垂れる。

愛してやるなどと言っておきながら。こんな単純なことにも実際、俺は耐えられないのだ。

息が詰まるようだった。真綿で首を絞められている感覚。——俺が、尾形百之助の記憶から母親を消し去ってしまった、

「タマ」

肩に手が置かれる。

はっと、我に返る。……アシ×パが、優しい眼差しで俺を見つめていた。

「大事なものは、誰がするか、じゃないはずだ。百之助のハポがやらなかったことをお前がやった。それはとても意味のあることだったのだと思う」

意味があった。そうなのだろうか。



俺にはわからなかった。

「現に、百之助はお前の鴨鍋が好きだと言ったじゃないか。お前が百之助に伝えたかったものは、きちんとあいつの中で息づいてる」

アシ×パは、鴨鍋について「誰かがやるべきことだった」と解釈しているのか？そして、その「誰か」が特定の人間であった必要はない、と。

本当は母親が、という無いものねだりに初めから意味などない。価値があるのは、行為そのものなのだから。尾形もそう考えていて、だから「鴨鍋」と答えたのだ、と？俺が、尾形百之助に伝えたかったもの。

……愛、か？

尾形は、俺の愛を受け入れている。少なくとも、アシ×パにはそう見えている。それなら、いい——のだろうか。

「……ああ」

少なくとも、気分はやや晴れた。

多少明るい気持ちで、顔を上げる。俺がやってきたことは無駄ではなかった。

他の誰かからそう見えているのなら、それでいい。少なくとも今は、そういうことにしておこう。

再び目が合ったアシ×パは柔らかく表情を緩め。しかしその直後にあ、と声を上げ

て、

「じゃあ、百之助はタマが作った鴨鍋ならヒンナできるのか……フフ、良いことを聞いた」

「なんでそんな尾形にヒンナさせたがるのお？」

「なっ、タマ！」

アシ箱のきらきらした瞳が向けられる。おっと、これは期待されている顔か？

うーん鴨鍋、鴨鍋ねえ。

いや、

「もう私は飽きたから向こう数十年は作るのも食べるのもしたくない！」

「急に辛辣☆」

「タマさんが好きな食べ物は何だい？」

「甘いもの」

……4人分の喧騒が、少し離れた場所から微かに聞こえてくる。  
その騒めきには背を向けたまま、ぼんやりと口ずさむ。ほとんど無意識に。

「……鴨鍋」

鴨鍋。空を往く鳥の影。

眉間を押さえる。ゆつくりと、瞼を閉じる。

穏やかな、晩秋の昼下がりだった。

兵舎の窓ガラス越しに、快晴の青天井を渡っていく鳥影を見た。

見慣れたその姿——今年ももうそんな時期か、とぼんやり思つて。

「……鴨」

何気ない呟きだったが、隣の男の耳には届いてしまったようだった。途端にぐつと顔を寄せ、こちらを覗き込んでくる。

「兄様、いかがなさいましたか？」

「いえ鴨……近い近い、少々近すぎます勇作殿」

規律が緩みますので。

軍帽が文字通り鏝迫り合う位置まで迫ったその巨軀を、嗜めつつやんわりと押し返す。年季の入った板張りの廊下が、男2人の体重を受けて大きく軋んだ。

——会話を適当に聞き流し、窓の外を眺めていたことに対する叱責はない。その輝く瞳には、「兄」の言葉をひとつも聞き漏らすまいとする、純粹な好奇心だけが宿っていた。

距離を取って、ため息混じりにその顔を見返す。弟であり、その前に上官であるはずの男——花沢勇作少尉の、端正な顔を。

「申し訳ありません、退屈だった訳ではないのです。ただ……少し、昔のことを思い出しております」

「昔のこと、ですか」

そこで、窓ガラスに歩み寄った勇作が、同じようにその向こうに広がる空を見上げる。そうして、困ったような顔をした。

「鴨、……なのでしょうか？」

「ええ。あの翼と体色はそうでしょうな」

「兄様は大変、目が良くていらつしやる」

照れたように笑ってから。ふと、思い出したように、

「……兄様ほどの狙撃の名手ともなれば、幼い頃からご実家で、猟の手伝いなどもされていたのしょうか？」

頓珍漢なことを言われて一瞬、面食らった。

そういえば、入隊する以前の話を勇作にした覚えはない。そもそも、軍の中でも鶴見中尉と、宇佐美くらいにしかした覚えはないのだけれど。そんなことを思いながら、口を動かす。

「別に、家業で獵師をやっていたという訳でもないのですが。鳥は、よく畑に出て撃つておりました。小さい頃から」

ただ事実を述べただけのつもりだったが、勇作はなぜか大きな瞳をこぼれ落ちそうなくらい見開いて。ぱんと胸の前で両手を合わせたかと思えば、

「それは……ああ、やはり兄様は素晴らしい才能をお持ちです！ 並みの人間にできるようなことではありません。我が軍の宝と呼んでも過言ではない」

「……勇作殿、士官が一兵卒をむやみやたらと褒めちぎるものではありません。規律が乱れます」

嫌味なくそんなことをはきはきと言われて、むずがゆいような、尻の座りが悪いような感覚に陥る。

我が軍の宝。日ごろ何かあつたらとこちらをいびつてくる他の上官が聞いたら、卒倒しそうな発言である。

……けれど、その裏で漠然と、心が落ち着くような感覚もあつた。矛盾している。しかし、悪い気分ではなかった。再び口を開く。

「……初めて鴨を撃った時、」

はい。勇作が穏やかに相槌を打つ。

それに、後押しされたような気持ちになって。

「本当は、母に渡すつもりだったのです」

低い呟きに、小さく息を呑んだのが聞こえた。

山猫の子は山猫。どこから広がったのか、そんな下卑た噂話は、既に聯隊中に蔓延していた。信じる信じないに関わらず、その内容自体は勇作の耳にも入っていたのだろう。

そして、それ以上に彼には思うところがあつたはずだ。父が捨てた妻の子。祝福されなかつた、出来損ないの倅。

「鳥があれば、母はあんこう鍋を作らないだろうと思って……でも、そんな目論見は外れてしまいましたかね」

臉を閉じる。息を吐き出す。

手の中で温度を失っていく鳥の死骸。引きずった小銃の重さ。煮えるあんこう鍋を愛おしげに見つめる母の顔。——何もかも、昨日のことのように思い出せた。

でも。

「やむを得ん、捨ててしまおうと思つたところに……祖父母の養女が現れて、私に言いま

した。捨てるならその鴨をくれ、と」

そこまで言ったところで、勇作がまた驚いたのがわかった。

「他にご家族が？」

「捨て子だったそうです。私と歳も近く、入隊するまで実家でともに暮らしておりました」

「そうだったのですか、」

指先で口元を押さえてみせる。祖父母や親はともかく、きょうだいに近い人間が身近にいたという事実は、それなりに彼へ衝撃をもたらしたらしい。

まあ、一人っ子の寂しさ余ってこんな人間を兄と呼び慕う男のことだ。きょうだいという存在に並々ならぬ思い入れがあるのだろう。そう自分を納得させて、続ける。

「そいつは、私が鴨を渡すと、不器用な手つきで羽をむしって、見様見真似で鍋を作って出してきました。生まれて初めて鴨の鍋物を食べましたが……まあ、素人の餓鬼が知識もなく作ったものです。最初の頃は食べられたものではありませんでしたよ」

血と臓物の味がする鍋だった。不味い、と伝えたら、不貞腐れた顔でうるせえ、と返ってきた。でも、段々と上手くなっていった。

「……おかしな女でした。幼い頃は特に。笑いも泣きもせず、何を考えているのかさっぱりわからない。……でも、私が畑で撃ってきた鴨を渡すと、いつでも『ありがとう』と

言つて。嫌な顔ひとつせずその鴨を捌いて、鍋を作るのです」

そこで、記憶の沼から浮上して。こちらを見つめる勇作の目が、何か眩しいものでも見るように細められているのに気づく。

「……なにか？」

「いえ。良いお話だな、と」

良い話。

……まさかそんな評価をされるとは思いもよらず、一瞬口をつぐんだところで。柔らかに表情を緩めた勇作が、さらに続ける。

「兄様は、その方にとても——愛されていたのですね」

——愛。

心臓に、深々と突き刺さったその言葉に。今度こそ、しばらく二の句が継げなかった。

「……」  
愛されていた。……愛されている。

「……」

——ああ。

喉の辺りで蟠っていた息を、大きく吐き出して。顔を上げた。軍帽の下の煌めきが、穏やかにこちらを見据えている。



目が合つて、優しい微笑が悪戯っぽく崩れた。

「ふふ、申し訳ありません。知つたような口を聞きました」

「……いえ」

目を伏せたこちらとは対照的に、勇作は顎を上げて、再び空を仰いだ。

「姉様」

姉様——夢見るような甘さをはらんだ眩きに、思わず苦笑じみたものが漏れる。

自分に「兄様」なんて畏まった呼び名が似合わないように、彼女にもそんな大仰な呼称は相応しくないように思えた。

「……私もそうですが、勇作殿と血は繋がっておりませんよ」

「そうですね……それでも、兄様の大切なご家族ですから。許されるなら、そうお呼びしたい」

胸に手を当て、至極真面目なふうでそんなことを言つてのける。

「いつか——機会があれば、勇作も頂いてみたいです。……姉様の作られた鳴鍋」  
それからにつこりと、花が咲くような微笑み。

どんな人だったか、ちゃんと教えてね。

いつか聞いたそんな囁きが頭をよぎる。

姉様と呼ばれて、どんな顔をするだろう。いや、まずちつとも似ていない、と笑われ

るだろうか。帰ってくるなりまた鴨鍋か、と今度こそ呆れられるかもしれない。そこまで考えて、ふと。

——何だ。なんだかんだ言つて、それなりに期待しているんじゃないか。

「……はは、」

つい、笑みが漏れた。

観念して、自身の坊主頭に手を伸ばす。

ああ。まったく、悪い気分ではないあたりが我が事ながら小憎たらしい。

「……ええ。きつと、あいつも喜ぶでしょうな」

「……………」

——目を、開ける。

兵營のよく軋む廊下ではなく、鬱蒼と茂る森の木々が視界に広がっている。

隣には誰もいない。彼が、あの微笑みをこちらに向けることはない。永遠に。

外套越しに、左胸に手を当てた。軍服の内側、縫い付けられた衣囊。その中身。忘れることも、手放すこともできなかつた。

「勇作」

澱んだ瞳で彼の名を呟く。

同胞の名を。弟の名を。

朦朧と仰いだ空に、鳥影はない。

果たされなかつた祈りと約束を抱いて、白雲だけが穏やかに流れている。

## 23話 情動反応ですの

「痛あッ」

藪の中から、白石由竹の悲鳴。

手近にいた俺、アシ箱バ、杉元がそちらを見遣る。離れた場所にいる尾形が、ワントレ  
ンポ遅れて一瞬だけ横目をくれてきた。

呼びかけてみる。

「どうした白石」

「オソマをしようとして肛門に小枝でも刺さったのか？」

「いや、金玉を笹で切ったんじゃないか？」

杉元、絶妙に痛そうな例えやめろ。既に無い玉がヒユンしそうになった。あ、

「……タマだけに？」

「タマさんは相変わらず自分の名前を下ネタに接続することに一切の抵抗がないなあ」

「楽しそうだな、タマ！」

ちなみに、あれからだいぶ歩いてこの辺りはもうほとんど平地。ナキウサギはとつく  
に獲れなくなって、空気が夏の森特有のぬめった生温さを含んでいる。

「いや、」

白石が、ようやく藪から這い出してきた。青褪めて、汗の滲んだ顔。しかも、坊主頭から流血までしている。

何事だと思ったところで、左手をこちらに掲げてみせる。その指先につままれた何か細長いもの、

「転んでへびに頭噛まれた」

「へび!?!」

真っ先に反応したのはアシ×バだった。見たことのない憤怒(?)の表情で、錆びついた金切り声を上げる。

その瞬間、頭の中で原作知識と既存の生物知識とが混じり合い。弾き出されたのは。

「それ……マムシ?」

「毒へびじゃねえか!」

「そのマムシは死んでるのか!?! 死んでるのかッ!?!」

特徴的な三角頭と、斑模様。

一瞬で杉元の背中に隠れたアシ×バが、威嚇する猫みたいな勢いで白石に対して捲し立てる——のを、真横で見る。

「……あれ、タマさん?」

「へビは嫌いだ」

同じように背中にしがみつく俺に気づいたのか、杉元が振り返って怪訝な顔をしてきたが、嫌なもんは嫌。トカゲもウナギも平気だが、へビだけはなんか……生理的に無理。別に女になつたからじゃない。へビは前世から大嫌いだった。いやそもそもこれが単なる感情由来のものであると判断することがそもそも誤りなのでは、これはおそらく一種の情動反応と考えていい、へビに対する恐怖心は人間以外の動物にも先天的に存在しているという米国での実験結果もあり、

「ダイジョーブ、死んでるよ……石でぶつ叩いてやったわ」

「おい馬鹿そこら辺に捨てるなまだ生きてたらどうする」

「タマさんツいきなり全体重掛けられるときさすがに重いんだけど!」

とつさに体を地面から離したいあまり、首だけを支えにぶら下がる形になり、杉元がさすがに苦悶の声を上げてきた。

ああ、とうとう来てしまったか、マムシのエピソード。勘弁してくれという感情が強い。

杉元と同じように苦しげな呻きを上げた白石が、目の前で地面に倒れ伏す。

「咬まれたところすげえ痛くなってきた……毒で死ぬかも、アシ<sup>□</sup>パちゃん吸い出してくれ!」

かざした手の下、患部が腫れ出している。それを見てまたゾワツ。ヘビほどではないが、毒のある生物全般がそもそも不気味で苦手である。

「色々と気持ち悪いから嫌だ!! マムシの毒では滅多に死なないから我慢しろ」

薬草を探してくる、と言い残し、脱兎の如くその場から走り去るアシ□パ。そこに、騒ぎを聞きつけた尾形が入れ替わりのようにやって来る。

「何やっとなるんだ」

「ちよ、尾形、助けろ、首絞まってる!」

「白石の馬鹿が自分を咬んだマムシをその辺に投げ捨てた、どこにいる!」

「え? 馬鹿?」

三者三様阿鼻叫喚な大混乱の中、顔を顰めた尾形は最終的に、杉元の背で子泣き爺と化したままの俺を見て。

「……、いいからこつちに来い」

手を伸ばしてきた。

普段なら、杉元より体格に劣る尾形に体重を預けるなんて危険な真似は躊躇うところだが、今はそうも言っていられない。——飛び移る勢いだがみついたが、尾形は存外、危なげなく受け止めてきた。

横抱きというよりは、腕に座るような姿勢になる。俺が軽いのか思った以上に尾形の

腕力があるのか、涼しい顔をしている。宥めるように背中を軽く叩かれた。

「〃へび嫌い〃は相変わらずか」

「……………」

「ええ、そんなにムリなお？」

自然豊かな実家の周辺では、へびもよく出た。前世ではそれなりの都市住まいだった俺は野生のへびなど1、2回見たことがあるかないか——というレベルだったので、今世で悠々と畑にのたくるヤツを見た時は心底面食らったものだ。そのたび尾形に泣きついていたので、当然ながら彼はそれを知っている。

「だから石でぶつ叩いたってえ」

「死んだと言ってるぞ」

「白石の言うことなんか信用ならないッ」

「さつきからめちやくちや辛辣じゃない？」

単なるへびならまだしも（それもじゅうぶん嫌だが）、マムシは毒へびだぞ!?

こいつらがなぜ平然としていられるかのほうがわからない。理解不能だ。有り得ない。人間じゃない。

「いや、そんな話よりマムシの毒だつて！ ねえ、タマチやあん！」

「……………」



白石が泣きついているが、この状況ではもはや知ったことではない。顔を背けて、尾形の外套に鼻先をうずめる。わかりやすい拒否の態度に、杉元が軽い笑い声を上げた。

「お前がマムシをそこらに捨てたせいでご機嫌斜めみたいだな」

そんなあ、と嘆く白石。このことが無かつたら毒を吸い出してやった——だろうか？  
いや、こんなことでうっかり死にでもしたら洒落にならん。やっぱいいいや。

「じゃあもうお前からいいや、毒を吸い出してくれよお、チュツチュとー」  
「……………、滅多に死なねえつてよ」

「キシヨい」の一点詰めではなく、理詰めで処置を拒否する杉元。でも純粹にオノマトペがキモい。

「まれに死んだのがみんな頭を咬まれた奴だったらどうすんだよ！ 網走監獄を知り尽くしていて潜入できるのは俺だけだぞ、俺が死んだら困るだろ!? だからホラッ、尾形ちゃん、吸ってくれよお」

原作通り要求を振られた尾形、この状況で何を言うのかと思えば。

「こいつがしがみついて……離れないから」

うーん、百理ある。

宣言した通り、アシ×は日が暮れる前に大量の草っ葉を抱えて戻ってきた。

「私たちが『ノヤ』と呼んでるヨモギと、シヨウブを採ってきた」

既に熾していた焚き火に、容赦なくそれらをぶち込んで。時を経て冗談みたいな形に腫れ上がった白石の頭頂部を、そこに近づけさせる。絵面だけ見ると焼き土下座の強要。

「これらを火に焼べた煙をへびに咬まれたところに当てると、傷が良くなる」

「もぐさのお灸みたいなものか」

冷静な豆知識が交わされるその間で、燻されて盛大に咳き込む白石。

「苦しいッ、頭は無理でしょコレ」

「白石の燻製ができる」

「タマ、シライシの肉は不味いぞ」

食ってきたかのように言うじゃん。

アシ×はヨモギの香りを嗅いで昔のことを思い出したのか。懐かしそうな顔で思いついた話を語ってくれたが、やがてはっとして、

「杉元！ さっきのママシの頭にヨモギの茎を刺してくれたか？」

「ああ。やつといたけど、あれどういう意味があるの？」

「悪さをしたママシはああすれば生き返らないとフチが話してくれた」

「そうなんだ……タマさんは頭を振じ切ってチタタブにしろとか言ってたけど……」  
「……………」

アイヌの伝承を否定するつもりはないが、生命科学に基づいて考えれば、脊椎動物は全身を微塵切りにすれば確実に死ぬ。

俺は皆のためにもより安全な策を選択しようとしただけだ。何も、おかしくない。

「フ……………」

おい、何ワロてんねん尾形。

アシ×パがヨモギ汁の湿布を体積が3倍くらいに増えた患部に貼ってやるのを視界の端に捉えつつ、隣の尾形を睨んでおく。

「あとはこうして湿布しておけば、必ず良くなる」

「ほんと？ 良かった……………」

それで、とりあえずマムシ騒動に一区切りついたかと思えば。いきなり顔に妙な影を落としたアシ×パが、でも、と口を開いた。

「…………咬みついたのがただのマムシじゃなく、サ×ソモアイエ×？」  
「……」  
「石は助かつちやいないんだらうなあ……………」

「なんだい？ それは」

アシ×パ曰く。

サ×ソモアイエ×?——夏に言われぬもの——とは、胴体が丸太のように太く、その姿を見たものは悪臭で髪が抜け落ち、全身が腫れ上がるという恐るべき妖蛇のこと。

「へび」と口にするに出てきてしまうので、便宜上「夏に言われぬもの」と呼ばれているらしい。北海道のヴォルデモートかよ。

この辺り、ちゃんと読んだはずなのにあまり覚えていないのは、嫌い故に記憶から意図的に抹消していたのかもしれない。

で、こんな話を聞くだけでも俺はぞつとするのだが、不死身と脱獄王は平気な顔で、

「夜に口笛を吹くとへびが来る、みたいな話だね」「ぴー♪」

「わあああ! やめろッ」

「……………」

「タマ、苦しい。外套の中に頭を入れてこようとするな」

当然、取り乱すアシ×パ。俺は……俺は、別に取り乱してなんかいない。大人だから。

「アシ×パちゃんでもここまで苦手な生き物がいたとはなあ。ぴっぴっ♪」

「やめろ!!」

「あ、ほら、タマちゃんも。ぴー♪」

「殺すぞ」

「え?」

クソ坊主が。呪われる。

思わず本気の舌打ちも漏れる。こいつが敵だったら今ごろ三十年式で蜂の巣にしているところなのに。竦み上がる白石を不憚に思つてか、巻き添えを食うのを恐れてか、尾形が珍しくも助け船を出してくる。

「……あまりこいつをへびの話でからかうな、顔面に良いのを一発もらうハメになるぞ」「もらったことあるのお？ 尾形ちゃん」  
ありましたねそんなことも。

あの尾形百之助と言えども、一応は普通の悪ガキとしての側面も持ち合わせていたらしく、一度だけ生きたへびを使ったドツキリのようなものを仕掛けられたことがあった。結果は……まあ前述の通りである。

「昔の話だろ……」

「あるのかよ」

……というか、そろそろ件の大蛇が登場してくるところなんじゃ——と思つたところで。

尻餅をついた杉元と白石の背後で、ゆらりと立ち上がる黒い影。夜目の利く俺は、暗闇の中でもそいつとばっちり目が合つて、

「ギャーッ」

「サ☒ソモアイエ☒?だ!!」

「……!!」

カエルの如く竦み上がってしまった俺を、半ば引きずるようにして撤退を手伝ってくれる義弟。サンキューオガタア!

「アマニユウだ。樺太ではこの草をへびが嫌うと言われているので、帯や襟に挟んだり、手に擦りつけたりする。……タマも使え」

「ありがとう……」

命からがら、サ☒ソモアイエ☒?から逃げ出して。アシ☒パが慌てて掻き集めてきたへび除けの薬草のおこぼれを頂戴する。

アマニユウ。聞いたことのあるような、ないような名前だが、見た目は典型的なセリ科だ。匂いも大体そんな感じ。

はああ。寿命が縮んだ。

ヒグマも第七師団も不死身の杉元も、へびに比べれば全く怖くない。サ☒ソモアイエ☒?を見た後では、はつきりそう思う。

「百之助え、ヒグマでも何でも私が倒してやるから、へびだけは……頼んだぞ……」

「昔からそうしてやってるだろ」

「うん……」

「だからもうその変な草を俺の服に入れるのをやめろ」

俺がせっつかくもらったアマニユウをお裾分けしているのに、詰めた端からポイ捨てしていく尾形。ニオイが気に食わないらしい。

「変な草じゃない、アマニユウだ」

「……何でもかんでもあの娘の言うことを鵜呑みにするな」

呆れたご様子。良いだろ別に、こういうのに縫りたくなるくらい嫌いなんだって！

「この土地で毒のあるヘビはマムシだけだから、その主かもしれないな……ウエペケでは、マムシは盗賊が死んだ魂の成れの果てと言われている。嫌われているんだ」

アオダイシヨウは良い守り神だけど。

アシ×パはそう付け加えたが、俺はアオダイシヨウも普通に大嫌いですな。

翌日、釧路湿原にて。

仕掛けた罟を見て回る、というアシシパ杉元に、普通に置き去りにされた俺たち3人は。ただ、野原に並んで座って時間を潰していた。

尾形は当然喋らず、俺も別に話題を提供しようという気にもならず。静寂だけが流れる。ただ、俺は特に尾形との無言の時間には慣れてるし、構わないのだけれど。

「……おなかすいたね」

口から産まれたような男だけあつてか、ただ一人この沈黙に耐えられなかったらしい白石が話しかけてくる。で、

「……………」

尾形百之助、迫真のシカト。

真隣にいるのにマジで一瞬たりとも視線を寄越さないあたり、プロ黙殺師の風格が窺える。明確にいないもの扱いである。

白石がそんな尾形を飛び越してクウーンみたいな目線を向けてくるが、見えていた地雷に突っ込んだだけだ。だから仲良くなれないって言ったじゃない？

まあ、このクソ不味い空気を放置しておくのも何なので、

「……何が獲れるんだろうね」

「……水鳥の類だろうな」



ボールが返ってきた。白石のことは自然に無視するのに、俺とは会話するのか。

それは白石も思ったらしく、やっぱりクウーン顔で尾形を見ている。うーん、なつき度の問題かな？

「あー！ 良かった、帰ってきた」

タンチョウヅルを抱える杉元と、その隣のアシ×パの姿に、あからさまにほつとした顔をしてみせる白石。もはや俺が気まずい。

一応、フオローしておくか。昨日のことは別に許してないけど。許してないけど。

「白石」

「え……ナニ？」

「大丈夫。私も最初の8年くらいはずっと無視されてたし」

「いや俺そんなに長く尾形ちゃんというつもりないけど」

特別天然記念物（予定）の大湿原のど真ん中で、即席の囲炉裏を囲む。

現代だったらSNSが炎上では済まないSDGsに中指立てる大凶行だが、明治時代なので無問題。オラ、ワクワクしてきたぞ！

いざ、獲ってきた鶴の汁を実食。

……と、なつたはいいが、

「うーん……」

「泥臭いような、むつとする変な匂いがするだろ？」

「なんでタンチヨウヅルなんか獲つたんだ！」

「百之助おいしい？」

「不味い」

黙々と食べているので気に入ったのかと思つたが、普通に不味いらしい。

うーむ。そうだな。

何というか。魚の味ならともかく、獣からすると本気で傷んでんじゃないか、と疑いたくなるような、ぬめつとした風味である。

好んで食べるようなものではないな。

「私も普段は獲らないけど、杉元とタマが『北海道の珍味を食べ尽くしたい』といつも言っていたから……」

「え？」

「言つてねえだろ、俺はそんな目的で北海道を旅してるんじゃないんだよ！」

なぜか当然のように巻き込まれて反応が遅れた。隙……見せちまつたな……

「……、杉元は……どうして金塊が欲しいんだ？」

真面目な顔になったアシッパが、控えめに問うてみせる。……杉元が小樽で姿を消した時にそんな話をした覚えがあるが、結局あれから尋ねていなかったのか。

あれ、まだ言つてなかつたつけ。

微妙な乙女心を解さない杉元、至つて軽い調子で話し始める。

「戦争で死んだ親友の嫁さんをアメリカに連れて行つて——目の治療を受けさせてやりたいんだ、」

は。——おもむろに。尾形百之助の嘲笑が、その眩きの語尾を食い散らした。

「“惚れた女のため”……つてのは、その未亡人のことか？」

「……………」

「え？　そうなの？」

シライシシ空気読め！

またもや俺には修復不可能な微妙な空気が流れてしまったが（だいたい尾形のせい）、それをブチ壊したのは他でもない、

「フーン！　トリ！　フンチカッ！」

上衣の裾をひっくり返してつまみ、翼のようになったそれをばたつかせながら舞うアシッパ。

「あ……アシッパさん、どうしたの？」

「サロルンリ☒セ。釧路に伝わる踊り」

その動作——ホパラタについての豆知識が入るが、明らかに杉元たちの関心はその踊りの内容ではなく理由に向いている。

「へえ……どうして急に踊ったのお？」

「別に……鶴食べたから」

あからさまなアシ☒パと杉元のやり取りに、厄介カプ厨おじさんみたいな笑みを浮かべる尾形——が、それを途中でキャンセルして。

「こつちに誰か来るぞ」

そう、低く呟いた。

——駆け足でやってきたのは、再会は勇払ぶりな占い師インカ☒マツと。そもそもはじめましてなアイヌの少年、チカパシ。

しかし、それまで彼らを引率していたはずのドジスケベマタギの姿が見えない。

まあ、俺はその原因については既に知っているのだけど。

「遠くからアシ☒パが踊ってるのみえた、やつ、つと見つけた！」

額に汗を滲ませるチカパシの発言には妙なタメがあった。小樽から相当苦労してこ

こまでやってきたらしい。

「私を探していたのか？」

「谷垣ニ□パと小樽から探しにきた！」

「谷垣？」

「……………」

隣の尾形が無言でうつむく。影の落ちたその横顔。ああ、まだ小樽での造反組殺しの誤解が解けていないんだっけ？

俺が尾形の顔色を窺っている間にも、チカパシは迫真の表情で、

「でも……………谷垣ニ□パが大変なことにも！」

「一体、何があつたんだ？」

「私たちを巻き込みたくないと言って……………はぐれてしまいました、昨日から追われているんです」

追われている。——インカ□マツ曰く、地元のアイヌたちに。

谷垣は、近ごろ現れる家畜や野生の鹿を惨殺して粗末に扱う「カムイ穢し」の犯人だと誤解され、憤る彼らに今も追い回されているらしい。

うん、なるほどね。

出、出く!! 姉畑支遁奴く!!

「そいつ……詐欺師の鈴川聖弘が言つてた刺青囚人も」

俺は当然として、姉畑の哀れな被害獣たる鹿を見かけたアシパ杉元にも、真犯人に ついての心当たりがあつた。……当時は深く考えなかつたが、わざわざ雄鹿つてよりヤバくない？ 鳥じやないんだからさあ。

「……アシパさん。俺たちで犯人を取つ捕まえて、阿仁マタギを助けに行こう」  
そういうことになつたのはまあ、いいのだが。背後を振り返る。あれ。

「……百之助がいらない」

「え？」

いつの間に。

インカマツの話に気を取られていた。さすが、腐つても手練れの狙撃手。適当に流して、手でも繋いで捕まえておけば良かったか。

——谷垣源次郎のところに行つたのだろうな。

追いかけたほうがいい。

しばらく出番の無かつた三十年式を構え直す。俺に探し出せるだろうか。

「ついでに白石もいないぞ」

「それはまあ……いいや」

「いいんだ？」

## 24話　ズーフイリアつてかネイチャーフイリア

鳴り響いた銃声を頼りに足を向けた林の中、見慣れた白い外套の背中が見えた。良かった、方向合ってた。

「——頼めよ。助けてください、尾形上等兵殿」と

空砲の葉莖を吐き出ししながら、尾形が悠然と呼びかける。こちらからではまだよく姿が見えないが、*「彼」*も居るのだろう。

銃を捨てろ。

誰かが叫んだ。聞き慣れない声だった。インカマツが言っていたアイヌの男か。多少急いだほうがいいな。

尾形の横をすり抜けて、俺が多少ひらけた場所に出たのと——膝をついた谷垣源次郎が口を開いたのは、ほぼ同時だった。

「あんたの助ける方法なんて、」

「——助けてください、尾形上等兵殿」

淡々と復唱しながら。幾つもの銃身越しに、ずぶ濡れの谷垣と視線が絡んだ。

谷垣は尾形にぶつけかかった制止を飲み込んで、代わりにいきなり現れた俺にぎよつ

と目を瞪る。尾形からは特に目立った反応は無し。

「つ、尾形タマ……」

低く、唸るような呟き。もうそれ尾形と会った時とほぼ同じ反応じゃん。あの短期間でどんだけ俺は警戒されてんだ？

「谷垣源次郎」

アイヌの男数人に取り囲まれたその姿を、見るともなしに眺める。少し見ないうちにまたムチムチ度が増した気がする。濡れて張りついたシャツがセクシー。

まあ、ファースト写真集の表紙を飾れそうなドジスケベマタギはどうでもよくて、今問題なのは未だ殺気立っているうちのセクシー上等兵のほうだ。とりあえず敵意バリバリなこの姿勢のままだと話が進まないの、

「百之助——銃を下ろせ」

構えた三十年式改め、三八式の銃身に手を乗せ。やんわり力を込める。

「……………」

尾形は一瞬こちらを見て、でも、それだけだった。抗うことなく銃口を下向ける。

とりあえずこれでいい。

残る問題は、尾形がいたずらに刺激してしまった地元アイヌたちだが。

「……………テツポ アマ ヤン」



俺たちの動きを見てか。最も年嵩らしい老翁が、小銃を構える男たちに振り返って言った。俺にアイヌ語はわからないが、男たちはそれで渋々といったふうながら銃を下ろす。

さらにその老翁が続けるには、

「コタン オレネ チトウラ ワ パイエア」

うーん、なんて？

多少複雑な文法のリスニングはさっぱりです、助けてアシパ先生〜！

どうやら、彼は「村に連れて行く」というようなことを言っていたらしく。

男たちに引きずられていく谷垣を追いかけた先、辿り着いたのは彼らのものらしいコタン。そこでは既にアシパと杉元が待機しており、ヘペセツ——子熊用の木檻に拘束された谷垣を囲んでの言い争いに、彼らとともに巻き込まれることとなった。

「殺してはダメだ」

「でも逃せば同じことを繰り返す」

「和人なんだから警察に連れて行けッ」

アイヌの中でも意見が割れているらしく、ひとこと言えば、カオスである。

まあ、和人が動物を強姦殺害して回るなんて事件は前代未聞だろうし、彼らもジャツジしかねているのかもしれない。そうそう起きて堪るかこんなもん。

——最終的に、なんか体の部位をいっぱい切って放逐しようみたいな方向性で纏まり出してしまったので、

「ちよつと待った」

静観していた杉元が、さすがにその間に割り入った。しかし、

「お前もこの男の仲間か!? 退けッ」

杉元よりも上背のがある巨漢のアイヌが、固めた拳をその顔面に叩き込んだ。

……彼は、その一撃でノックアウトできると思ったのだろう。だが、こちらは帝国陸軍が誇る不死身の鬼神。ふらつきさえしなかった杉元は悠然と軍帽の鏢を上げ、

「……まあまあ。落ち着きなつて」

瞬間。巨漢のアイヌは躊躇なく腹パン。次いで流れるように横つ面をぶん殴る。

「杉元ッ!」

見かねたセコンドアシッパが声を上げる。が、彼女が案じているのは無論、杉元の身

ではなく相手のアイヌの無事である。

「……………」

「……………」

案の定ピンピンしている杉元は、無言で彼女を制止して。鼻血で汚れた顔にこやかな笑みを浮かべたかと思えば、

ボコオン。

彼の良い右ストレートが、顎に入った。

不死身の一撃を食らった巨漢は、ぐらつと大きくふらついて。——そのまま、後ろにひっくり返って動かなくなった。

「……………」

そういうことじゃないんだけど……のアシ~~ク~~パ谷垣の真顔が杉元を見つめ、沈黙の中で尾形の拍手だけが微かに響いている。

「……………犯人の名前は姉畑支遁、」

豪快に鼻血を拭った杉元が、その手を谷垣の（ぱつんぱつんの）胸元に伸ばして。

パアアン。流れるようにボタンを飛ばし。

プチイン。流れるように胸毛をむしる。

「この谷垣源次郎は、寝てる間に犯人に村田銃を奪われたドジマタギだッ！」

「うーふッ……!」

フアサア。格好よく後ろ手で宙に放られる胸毛。だが胸毛だ。

「俺たちが必ず姉畑支遁を獲ってくる」

クシユン。胸毛を顔から浴びたアシ☒パがくしやみをして、綺麗なオチがついた。  
……いやこれどんなオチ?

「百之助はどこだ?」

「あ! あんなところにいる!」

メロスの如く3日の猶予を与えられた杉元たちは、さつそく出立——の前に、当然のように単独行動の尾形を探していた。

少し離れた場所で、人んちの穀物庫の前へ勝手に陣取るその姿。相変わらず放つておくと高いところに登りたがるな。

「なんでまたそんなところに……」

「ほら……馬鹿となんちやらは高いところが好きって言うし」

「ウフフ、ぼやかすところ違くなあい〜?」

「……………」

無言の抗議を感じるが、無視です。

とりあえず話が纏まったところで、谷垣は既に檻へぶち込まれている。あの檻臭そう。

穀物庫の前に仁王立ちしたアシノバが、真つ直ぐ尾形を見上げて、  
「私たちが3日以内に、姉畑支遁を連れて戻れなかった時は……」

百之助が、谷垣を守ってくれ。

原作を読んだ時もあったまさかの采配だが、尾形は泰然と前髪をかき上げながら、  
「あの子熊ちゃんを助けて、俺たちに何の得がある？」

うん？ 俺「たち」？

あれ、これアシノバも尾形も、俺を自分たちのグループの頭数に入れて話してないか？  
俺は1人しかいませんよ。

そこで、アシノバの視線が斜め下横にスライドする。目が合った。

「……じゃあ、タマが谷垣を守ってくれ」

なんで俺。まあ良いけど。

尾形に倣って拒否する理由も別に見当たらないので、安請け合いしておく。

「尾形合点承知之助」

「おい」

途端に鋭く声が飛んでくる。

「やっぱりおこかなびえん、と思いつつその顔色を覗つてみたが。……いや、あれ谷垣を守る云々つてよりは俺の激ウマギャグに対する抵抗の顔か？」

「百之助はいつも通り、谷垣を守るタマを守ればいい。それなら問題ないだろう？」  
微笑むアシシパ。なるほどなあ。

うーん、これはウイルクの娘。

「……………」

尾形のほうはうんざり顔をしつつも、じゃあこいつも守らんとかいう逆張りはしてこなかった。最低限の好感度は保証された事実について喜ぶべきか。

「……………よし、これで安心だなー」

「ちよつと待て。……奴は、鶴見中尉の命令でこちらを追ってきた可能性が高い。あの男は、中尉を信奉し、造反した3人組を小樽の山で殺した」

そこで思い当たる節があったのか、今度は杉元が口を挟んでくる。

「谷垣と行動していた3人のことか？ ……あいつらを殺したのはヒグマだ。俺がその場にいたんだから間違いない」

「いやてか、襲われてやむなくとはいえ、造反組がヒグマにブチ殺されたのは主に杉元のせいだよな？」

「ヒグマ？」

「谷垣はマタギに戻りたがっていた。足が治った後も軍に戻らずフチの家に行ったと聞いたし……あいつに何かあれば、フチが悲しむ」

「アシ×パさんの頼みを聞かねえと、嫌われて獲物の脳みそももらえなくなるぜ？」

「脳みそいる？」

尾形、原作通りここで不穏な煽りを入れてくるかと思いきや。

「……フン」

目を逸らしつつ、鼻を鳴らして髪を撫でただけだった。あら。

俺が残る手前、そういう発言は口だけのそれだとしても避けようという気になったのか。あるいはまた別の理由か。

とにかく、原作とは違ってアシ×パは微笑ましいにこにこ顔のまま、大きく手を振って村を出て行った。

「タマの言うことよく聞くんだぞ！」

こいつが有事の際に俺の言うこと聞いた経験とかあんまりないけど大丈夫かな？

2人がコタンを発つて。

要するにセリヌンティウス役を任された俺たちだったが、特に今の段階ではすること

もない。脱走は確か2日目なんだよなあ。

しばらく尾形に寄りかかって空などを眺めていたが、監視役らしいアイヌの1人がこちらを見ているのに気づいたので、挨拶してみる。

「イランカラ☒?・テ〜」

どもども〜、と手を挙げる。

すると、なぜか彼はこちらに近づいてきた。どこか見覚えのある顔。マタンプ☒を目深に巻いた——えーと、確か名前はキラウ☒。後々、土方陣営に加わるアイヌだった気がする。

「……アイヌ語わかるのか?」

「単純なあいさつだけなら」

へえ、なかなかやるじゃんみたいになるキラウ☒。警戒心が無いな、なんか。

よくわからん人間からワカサギをもらって素直に喜ぶ末っ子気質だし、もともと人懐っこいタイプなのかもしれない。

「道すがら、こういうコタンにお世話になることも多いから、アシ☒パ……一緒に旅をしているアイヌの女の子に教わった」

「ああ、あの……」

教わったと言っても、本当に初歩的な数単語だけだが。アイヌ語の挨拶は日本語のよ



うな「おはよう」「こんにちは」という時間帯による使い分けはなく、全て「イランカラ  
☒?テ」で済ませられるらしい。合理的。

「ここは良いところだな。自然も豊かで……タンチョウヅルなんて初めて見た」

「サロルンカムイか」

「不味かったけど……」

「ふ、はは、食べたのか?」

キラウ☒が笑顔を見せる。そんなに愉快的話なのだろうか。まあ、その辺にいるミシ  
シツピアカミミガメを捕まえて煮て食ったという話ならちよつと面白いかもしれない。  
馬鹿みたいという点において、だが。

「泥臭かった。アシ☒パはマナヅルのほうが美味しいと言っていた」

「オクンネシヤロルンはたまにしか飛んでこないんだ……俺も一度だけ食べたことがあ  
る、確かにサロルンカムイよりは美味いだろうな」

「そう……食べてみたかった」

「……………」

背後から「なに馴染んでんの?」という圧を感じる。

良いじゃん、雨が降るまで特にすることもないし。もたれかかっていたのを、さらに  
体重をかけてみる。……背中ごと軽く押し返された。

で。昨晚からの雨が夕方まで降り続けた、2日目。

なぜか尾形から『猫でもわかる！ 外套を使った身代わりの術』の指南を受けつつ、檻の屋根を外して救出した谷垣とともに、見張りの隙を突いてコタンをこっそり抜け出した。

いや、普通に重労働でしたが。原作ではこれを一人でやった尾形はとても偉い。

偉い、のだが。

「……杉元たちを信じて待つても良かったのに……」

谷垣、まだ言っている。というか、最初から抵抗を示していたのだが。

最終的に尾形の「騒ぐな気づかれる」の一喝でなあなあになつていたが、コタンから離れたここに来てまた言い出したらしい。

「時間が迫ればそれだけ監視も厳しくなる」

その解答はちよつとずれてないか？

「逃げれば罪を認めるようなものだ、」

「……お前の鼻を削ぐのは俺がやっても良かったんだぜ、谷垣源次郎」

「何にせよ、このまま私たちが姉畑を見つけてしまえばいい、」

おそらくは、知識のあるアシタパ杉元が原作通りに姉畑を見つけるのだろうか。

理論上は、捜索の人手は増えるし、そこで本当に見つかれば谷垣の嫌疑も晴らせて一

石二鳥な訳だ。

「……それにしても、」

しばらくの無言の後、谷垣が口を開く。

今度は何だと振り返ったところで。

その先には、驚愕の光景が広がっていた。

「……ッ、」

「え、」

——谷垣源次郎が、泣いていたのだ。

その瞳から大粒の涙を流し。大の男が、恥じらうこともなく堂々としゃくり上げ、鼻を擽っている。いやこの一瞬で？

「よがっだ……ッ、会えて、本当に……ッ」

——は？

途切れ途切れの眩きから察するに……谷垣は、俺たちの再会を我が事のように喜んでくれているらしい。今さら。泣くほど。

嘘じゃん？ お前、初めて会った時にそもそも全く信じてなかっただろうが。

「ぶひ……ッ」

「……………」

さすがの尾形も二の句が継げないのか、呆気にとられた表情で、男泣き谷垣を見つめている。

いや、これどうしたらいい？

「……………」

で。尾形と2人で「なんで泣いてんのこいつ」の顔を、無言で見合わせる。情緒大丈夫そ？

マタギに戻って涙腺まで緩くなったか。最終的にはチカパシどころか紅子先輩との別れでさえ号泣する情緒レベルだったし、おかしくはないのか？ いや、そもそも谷垣源次郎には死別してしまった妹がいたのだから？

沈黙を破ったのは、いち早く驚愕から復帰したらしい尾形だった。

「……………おい待て、」

びつくり顔から、剣呑な色が宿った顰めっ面に移り変わった表情で。

「いつ会って——いつから、俺との関係を知っていた？」  
「……………」

当然の指摘に、潤んだ目を瞪る谷垣。

——尾形と谷垣は、ここで会うのが「久しぶり」ではない。既に、フチのコタンで交戦している。……谷垣源次郎は、俺との約束を守ったのか。改めて思う。

「お前……あの村で会った時、俺に何も言わなかったな？」

瞬間。わかりやすく青ざめ、やべつ、みたいな顔になる子熊ちゃん。涙も引つ込む。菊田さんよりスパイ向いてなさそう。

「……………」

「……………」

また、質の違う静寂が流れて。

「タアニガキゲンズロオ……」

「ブヒイっ」

再び胸毛をむしられる谷垣。空前絶後のセクシー上等兵にムチムチドジマタギがなぶられている光景、シユールかつスケベである。

うわっ漂う毛で鼻がこそばい。

「くしゅっ……やめろ百之助、子熊ちゃんをいじめるな」

ひとまず、仲裁しておく。

「私が口止めしたの……くしゅん」

「……口止め？」

脅しをかけたとも言う。思い出したのか若干顔色が悪くなる谷垣。おい。

「ああ。だって……言ったら絶対にクソ面倒なことになるから……ずび、」

ようやく鼻のむずむずが治まってきた。冷静に考えるとこれが谷垣源次郎の胸毛由来なの、シンプルに不愉快すぎるんだが。まあ、とりあえずそれは脇に置いておいて。

「約束を守ってくれてありがとう、谷垣源次郎」

「タマ、」

「どうせ信じていなかったただけだろうが」

「……………」

微かに安堵したような表情から一転、途端にうーふッ顔で目を逸らす谷垣。

喜怒哀楽の遷移がわかりやすすぎて面白いな。常に地蔵みたいな尾形を見慣れてるとより愉快に感じる。

——その瞬間。

聞き慣れた破裂音が、わりと近くから聞こえた。尾形がいち早く反応を見せる。

「銃声……」

「アシ×パたちか？」

「いや……村田銃だ」

村田銃——このシーンで誰か銃を撃つていたっけと思つたが、これは確か、姉畑がリュウと揉み合いになつた末の誤射だつたか。杉元は水没した三十年式をうっかり壊しただけで、発砲には至らなかつたはずだ。

「……姉畑支遁」

「急ぐぞ」

「ああ」

近い。とにかく、姉畑を確保しないまでも、追手のアイヌたちと交戦する前に、その現場〃を目撃しなければいけない、

「いたぞツ、逃げた3人だ！」

……とか言つてたら来ちやつた！

「見つかつた！」

ところどころ草丈が高く、風が吹いているせいか。接近に気づくのが遅れた。

「……………」

かなり近い位置に現れた彼らに、もはや逃走は間に合わないと見たか。三八式を構えんとする尾形。いや、それはまずい！

慌てて周囲に視線を向ける。目を凝らす。もう近い、近い……はずなのだ。

振り返った草むらの遙か向こう、微かにちらつく茶色い塊——居たツ！

「待てツ——姉畑支遁がいるツ!!」

——ぎりぎりで間に合った！

俺の渾身の叫びに、アイヌたちもさすがに足を止めて、指差す方向を見やる。

「姉畑支遁?!」

「ヒグマしか見えんぞ?!」

「その後ろだ!」

雄叫びを上げるヒグマの尻の辺りに張りついた、小さな薄橙の塊。息を呑む音。

「……なんてこった、」

和人×ヒグマの、アツプロードされた瞬間にBANされそうな無修正ナマ映像。珍し

く明らかなドン引き顔の尾形が、絞り出すようにそう呟いた。

「信じられん、」

「みんな見てるか?」

「おいもう手遅れだろ」

最後のコメントは、今さら尾形の手で目元を覆われた俺から。遠目ながらもうばかり見ましたけど、姉畑とヒグマ♂のウコチャヌ☒?コ☒。邪魔なのですぐ退かした。



「姉畑支遁すげえッ」

「杉元は何をはしゃいどるんだ、」

ヤチマナコに嵌っているせいかな姿は見えないが、弾んだ声だけは聞こえてきた。

「やめろお！」

アシ×パの叫び、リュウの鳴き声、ヒグマの雄叫びが奏でるアンサンブルが、穏やかな大湿原に木霊する。カオスである。

そこへ駆けつける黒い影。——ヤチマナコから這い上がってきた杉元佐一だった。

杉元は本懐を果たした姉畑を説得しようとしていたようだったが、当の姉畑は一切の反応を見せない。それもそのはず。

「勃ったまま死んでる……」

「……………」

原作を読んだ時もあったが、こうして実際に目の当たりにしてなお思う。俺たちは一体何を見せられているんだ？

フィギュアのようにぼろんとヒグマの背から取れる姉畑、ヒグマとの取っ組み合いを始める杉元。……その一瞬で、彼は拾ったアシ×パの矢を巨体に突き立てていたらしく。

「ガガガガッ」

トリカブトの毒に、苦悶の呻きを上げるヒグマ。文字通り一矢報いた杉元は、その隙をついてヤチマナコに飛び込む。

ふらつくヒグマは、数歩進んで——けれど、それだけだった。倒れ込んだ弾みで、大きく草が揺れる。それを最期に、もう、動かなかつた。

「ウコチャヌ☒? コ☒して力尽きるとは……鮭みたいな奴だったな」

「ウコチャヌ☒? コ☒」

ウコチャヌ☒? コ☒、声に出して読みたいアイヌ語。しかし、こんなんの死に様を神の魚の生殖行為と一緒にしていいんです?

安らかな死に顔の姉畑だが、  
「どうしてこんな馬鹿な真似を」

自らの文化と、それを取り巻く自然を愛するアシ☒パはどこまでも冷ややかな態度。  
「決死の想いも恋は成就せず、……だった訳か」

対照的に、なんか良い話風に纏めようとする杉元をきつと睨みつけ。

「姉畑支遁が本当に動物を愛していたなら、どうして最後に殺すんだ? あいつもきつとどこかでは、良くないことだと分かっていたんだ。終わってからその存在ごと無かつ

たことにしようとするなんて……本当に自分勝手だ、」

マジそれな  
心底承諾。

他人の嗜好を頭ごなしに否定するのもどうかと思うが、清らかな自然とひとつになりたいために強姦殺害を繰り返すのは、擁護するポイントが本当にひとつもない。

自分の欲求由来の行動ながら、性行為のステイグマを受け身側に押しつけるのは男あるあるかもしれないが、獣相手だとより醜悪に映る。機構自体は前世の感覚でわかつてしまうぶん最悪。一人で勝手に死んどけマジで。

「ああ。このヒグマだって……姉畑支遁がいなければこんな場所で死なずに済んだかもしれない」

タマの言う通りだ。俺に熱い同意を見せたアシパは改めて杉元へ向き直り、

「どうしてウコチャヌ？コする前によく考えなかつたのか……そうすれば殺さず済んだのに。なあ杉元、そう思わないか!？」

「……………」

で、胸に一物どころか百物くらいありそうな顔で押し黙ってしまう杉元。男の子だね。

微妙な沈黙が流れ、のち。

「……………男つてのは出すもん出すとそうなんのよ」

「オイやめろッ!」

手籠めにするとか言っておきながら乳すら揉めなかった過去を持つ尾形が大人の男ぶってそう吐き捨て、杉元は当然ブチギレる。

賢者タイムってやつね。姉畑の場合は悟り以前にバーサクと化していたけど。

最終的にアシ××。パは、

「……そうなのか? タマ」

「いやそれをこつちに聞くのはおかしいだろうが」

何だと思われてんの?

やっぱり女と思われてない? 前世で出すもん出したことも、今世で出されたことも

ありませんけれども。

いやまあ……男に賢者タイムがなかったら世の中はもうちよつとだけ平和になっていた、のかもしれない。何となく。

うーん。そうだなあ。

「……男がウコチャヌ××? コ××する時に、もうちよつと理性が働く生き物だったら、私は捨て子にならずに済んでいたのかもしれないねえ」

「……………」

「もうこの話やめない?」

男2人がいよいよ気まぎれな顔をしている。  
兎にも角にも、姉畑支遁の刺青人皮、ゲットだぜ。

## 25話 ツルカメキナボ

カムイ穢しの騒ぎが一区切りつき。

無事に谷垣源次郎の嫌疑を晴らした俺たちは、キラウのkotanで、ヒグマを送るカムイホプニレの儀式を共にした。

その翌日。

「白石たちには、はぐれたら釧路の街で待つように言っておいた」

昨晩のことでフチへの想いを振り切ったらしいアシパ、もうすっかりいつも通りの顔で出発の支度をしている。

「今頃きつと心配してるはずだ」

「俺の銃も壊れたし、修理に出さないと」

「壊れた……」

「ああ。ヤチマナコに落とした時、うっかりそのまま撃つちまった」

土壇場での銃の故障。これがメインウエポンな身としてはもはや他人事ではない。あな恐ろしや。

「……銃身に水が入った状態のまま、引き鉄を引いた。結果的に強い圧力が掛かり……」

破裂した」

シヤフ度な尾形がドヤ顔で解説してくれる。それは既に知識として知ってるんだけどね。とつさの場面で活用できるかはまた別ということだ。

尾形、とりあえずノーコメントを貫く俺の肩に軽く手を回しつつ、横目で杉元を睥睨。「軍で何を教わってきたんだか……お前はあんな馬鹿げた真似はするなよ」

「キーンツ」

わかりやすくおこな杉元、ていうか、と前置きして尾形の抱える銃を指差す。

「その最新式の小銃！俺が気球乗る時に第七師団から奪い取ったやつじゃん。返せよ」

詰められた尾形、軽く顎を引いて。

「……これは三八式歩兵銃だ」

芝居がかった仕草で表尺をぱちん、と立ててみせる。世界が俺は正しいと言ってそう。

「この表尺を見る。……2400米まで目盛りがあるな？」

その枠越しに、虚ろな瞳がこちらを見つめてくる。見ろと言ったって、表尺に刻まれている文字なんかクソちっちゃいので、この時点で読み取ろうとしたら顔面くつつくレベルまで近寄らないと無理だが。

「三十年式は2000米までだ。この銃から採用された尖頭弾の三八式実包なら、2400米先にまで弾が届く」

「だから何だよ！」

「……お前が使っても、豚に真珠ってことだ」

あんまりな煽り文句にブチギレ顔で黙り込む杉元。原作の彼はそれで終わっていた。

——が。

「……タマさあん！」

「……………」

尾形のことかどうしても気に入らない杉元佐一、実戦同様、舌戦においても使えるものはなんでも使っていく戦闘スタイルらしく。案の定というべきか、「使える」俺に目をつけてきた。

やかましい巻き込むなど一喝するのも大人気ないか。とりあえず受け入れ態勢を取ってみる。

「どうしたの、杉元」

「あいつ何とかしてよお！」

ドラえもんの威を借るのび太がごとく、俺の膝に泣きついてくる不死身の杉元。己の身内に対して距離感も考えずべたつく杉元に、彼の読み通り青筋を立てる尾形。



「おい、気安く触るな」

「ハンツでもそもタマさんはお前のものじゃありません！　ねータマさん、尾形に豚って言われたあ〜！」

「モノの諭えだろろうが」

「百之助、お友達との喧嘩は結構だけど、あまり強い言葉を使うなよ。弱く見えるから。杉元は重いからそろそろ退け」

「え？」

「というか、そろそろ『時間』のようだ。」

呆気にとられた様子の子の彼の背後にぬつと現れた、小柄な人影を見上げる。さすがに意図的なこれは見過ごせなかったか、

「……杉元！　タマを困らせるな！」

「あーん」

むくれたアシ×パの小さな手が、その首根つこを鷲掴み。白石のような鳴き声を上げながらずるずる引きずられていく杉元。膝が軽くなった。

部屋の隅で杉元にお説教するアシ×パの、その膨れたほつぺたのシルエットを微笑ましく見守る。

……俺を困らせる、か。口から出まかせにしても可愛いものだ。

俺にはわからない煌めき。しかし、悪い気分ではなかった。

「複雑なお年頃だな」

「……………」

まあ、こつちもね。

視線を向けてはみたが、案の定既にそっぽを向いている尾形。アシ箱パと杉元を囓し立てるような気分でもないらしい。

しきりに髪を撫でつけるその合間を縫って。手を伸ばして、頭を撫でてやる。尾形は小さく肩を跳ねさせたが、何も言わなかった。それからぽつりと、

「……友達じゃねえ」

「はいはい」

うーん、平和ですなあ。

姉畑支遁とウコチャヌ箱？コ箱したヒグマのオハウを丁重に断りつつ、in 釧路。

海ジャンプは添えるだけ。

「アシ×パさあん、尾形が海ジャンプしてませえん！」

出たチクリの杉元。

相変わらず無視安定の尾形だが、アシ×パも飽きずに良い教師ヅラで声を掛けていく。

「なんだ百之助え、またみんなと一緒にできないのかあ〜？ タマはできてるのになあ

〜？」

「……………」

だから、俺を引き合いに出しても意固地になるだけなんだよな。アシ×パに誘われたからやったけれど、尾形の気持ちを汲んで不参加に徹したほうがよかったかもしれない。

「ごめんね百之助……私に聯隊旗手が務まるタツパと腕力があれば、百之助を膝から持ち上げてジャンプに参加させてあげられるのに……」

「どういう発想？」

30巻ミニポスターの構図ですが何か。

鈴川聖弘が吐いた、鉏路にいるという刺青囚人——姉畑支遁の皮は早々に確保してしまったので、この時間は余暇みたいなもの。

各々、自由に過ごし始めている。

俺はといえよ。とりあえずぼうつとして過ごすかな……と海を眺めていた。——と  
ころに、なぜか白石由竹が隣へやって来る。

無視するのも何なので、

「海に来たのも久しぶりな気がする」

「確かにそうかもなあ」

観光地としては当然手つかずの釧路の浜辺には、色とりどりの貝殻だの海藻だのが、  
あちこちに打ち上げられている。

最後に海を見たのは、確かまだ水が冷たくて入れないような時期。そう、

「……辺見和雄の時以来か……」

「嫌な思い出し方だねえ」

「ほら白石、ウニの殻」

「食べさせようとしないでえ？」

ウフフアハハとしばらく平和な会話をしていたところで、白石がおもむろに顔を上げ  
る。何かに気づいたらしい。

「あ、アシ×パちゃん走ってくる……なんか嫌な予感がするんだけどお」

アシ×パ。彼が見た方向に顔を向けると、確かに喜色満面の彼女がこちらに駆け寄っ

てくるところだった。

「タマ！ 白石！ 船に乗れ、エチンケを獲りに行くぞ！」

エチンケ……って何だったっけ？

「エチンケ？」

「ウミガメのことだ。遠くにいるのが見えたらしい」

「ええ……わざわざそんなことしなくてもインカマツちゃんに奢ってもらおうぜ……」

生粋のヒモ男白石由竹のカス発言に、近くでチカパシたちと戯れていたインカマツもさすがに「は？」の表情。石川啄木と同じ合う器なだけはあるぜ。

「食べたことないなあ」

「食べてみたいだろう？」

そういえば、ウミガメのスープっていう水平思考クイズがありましたね。

アシパから目を逸らし。ぎりぎり声が届く位置にいた尾形に顔を向けて、一応呼びかけてみる。

「ウミガメだって、百之助」

「……………」

双眼鏡から目を離れた尾形、「なんで俺に声を掛ける」の微妙フェイス。かと思えば再

びグラスを覗き込む姿勢に戻ってしまう。

わかりやすく拒否の姿勢だ。

「ほつときなよ、タマさん」

「早くしないと船が出てしまうから……」

普通に辛辣な杉元、やんわりと急かしてくるアシ□パ。……説得している時間はない、か。仕方なく、背を向ける。

「……………え？ 結局これ俺も行くの？」

「早く来いシライシ」

白石由竹が体を張って（主に頭）捕まえてくれたクンネ・エチンケ、食べた覚えがない味だったので良かったです。

そもそも俺、無人島に複数人で漂着した経験とかないけどね。

翌朝。

エチンケのオハウを皆で食し、フチの妹さん（15番目）のチセに泊めてもらったのはいいが。なぜか、アシ□パによる杉元への呼びかけに起こされた。

薄く目を開けた先、チセの中はまだほんのり薄暗い。夜が明けたばかりなのだろう。

で、アシ<sup>△</sup>は杉元を激しく揺さぶりながら何を言っているのかといえば。

「なあ杉元お、キナポ食べたくないのか〜?」

……なんか……よくわからないけど、何かを獲りに行こうと誘っているようだ。

「夏しか獲れないんだ、杉元お〜……水面で昼寝してるところを船で固定して、その上に乗って捌くんだ……面白そうだろ?」

いやこれ何の話?

そして、さつきからまな板のパン生地並みにごろごろ捏ねられている杉元は、

「……………ぐ、ぐー」

うーん、狸寝入りが下手っ!

「……………」

「……………」

「……………ふこッ」

沈黙、それから寝ぼけた白石の鳴き声。

涼しい朝の空気の中、微妙な静寂が流れたかと思えば。フウと憂い気な息を吐いて、

「タマ〜」

やっぱりこつちに来たか。

インカ<sup>△</sup>マツという前提もあるし、キラウ<sup>△</sup>のコタンでの件で多少距離を置かれるか

とも思ったが、彼女は特にあれを引きずってはないようだ。うーん、よくわからんな。別に、アシ×パのやることについていくのに杉元ほどの抵抗もないので。とりあえず先手を打って起き上がり、揺きぶりをキャンセルしておく。酔っちやうから。

「……どうしたの、アシ×パ」

「杉元が起きないんだ。お前はマンボウに興味あるよな？」

キナボ……ってマンボウのことか？

そういえばそんなシーンもあつたような、なかつたような。俺が記憶を辿っている間にも、アシ×パはきゆるきゆるの目で、

「マンボウの脳みそ食べたくないか？」

「マンボウに脳みそとかあるの？」

やべ、これってヘイトスピーチかな。馬鹿にしてすみませんでしたマンボウ。

まあ、これで目的はわかった。

アシ×パは、杉元をマンボウ漁に誘っていたらしい。ただ、原作でそんなシーンは確か無かつたことを踏まえると、今の状況通り、彼は寝たふりでそれを回避したのか。

ただ、俺は断る理由がない。

「マンボウ漁か……いいよ」

「よし、それでこそ私が見込んだメコだ」



「猫ってマンボウ食べるの?」

いぎ、出発。

——と、立ちあがろうとした俺の袖を引っ張ってくる指先。言わずもがな俺の真横で寝ていた、

「……………おい、どこ行く」

尾形百之助。

ガチ寝起きの掠れた声で追及してくる。自慢の前髪がすっかり乱れてしまっている。

「おはよう」

「ん…………」

一応あいさつしてみる。呻きだけが返ってきた。もともと寝起きが悪いほうではなかったと思うが、何だか今日は眠そうだ。目が開いていない。

「アシ×パがキナポ漁に連れてってくれるんだって」

「キナ……………何だ……………?」

「マンボウだ」

「マンボウ……………」

「夏しか獲れないからな」

眠たげな視線があつちに行ったりこつちに來たり。わかりやすく困惑している。会

話の理解ができないのは俺がまだ覚醒していないからなのか、とでも言いたげな雰囲気だ。

「百之助も行く?」

「……………」

ぎゅつと目を瞑って。文字起こしできない不明瞭な唸りを喉の奥から絞り出してくる。

うん、見るからにまだ眠そう。珍しいな。

「ねむい? 待ってる?」

まだ起き上がる気配のない尾形の崩れた前髪を、それとなく整えてやる。幼少期を知ってしまったているぶん、こんな状態でもセクシーというよりは微笑ましいんだよな。

「フフ…………心配しなくても、捕まえたら百之助の分も残しておくよ」

「いらん」

いきなり食い気味に拒否された。あれ、そういうことじゃない?

ぐしゃぐしゃと髪を掻き乱して、大きく息を吐き。勢いづけたように、上体を起こす。

「…………ちよつと待ってる」

「百之助も来るんだな!」

そういうことになったらしい。

ウミガメ漁はパスして、マンボウ漁にはついてくるのはどういった心境なのか。相変わらずよくわからん。

まあとにかく話も纏まったし、と改めて立ち上がったところで。

「おい……銃。目を離すな」

枕元に置きっぱなしだった三十年式を、軽く投げて寄越される。おっと。普通に3キロ以上あるんですけどね、これ。

なんとか銃を受け止めた俺を見て、アシ×パが不思議そうに、

「でも、銃は使わないぞ？」

「……そういう問題じゃねえ」

「ふふ」

アシ×パは納得いかないような顔をしていたが。色々あるんですよ、狙撃手には。

昨日も乗せてもらった妹の夫の船に、今日は尾形とアシ×パと乗る。

波に揺られる尾形はフードの下でまだどこか眠たげな顔をしていて、

「くあ——む、む」

超・あくび。

しかも、

「……………」

「……百之助、舌しまい忘れてる」

髭面成人男性の猫ちゃんムーブ、リアルで見るとなんかこう……全ての感情を超越して『衝撃』が最初に来るな、と思った。

眠気を覚ますためか、ぐるっと首が回って。それが、微妙な位置で止まる。見ている。……俺の腕？

「……………」

何かあったつけと視線を落とした瞬間——左手首に巻いていた黒のリボンが解かれて、抜き取られる。

「あ……………」

そういえば髪、解いたままだった。今さら気づく。

野宿の場合は、寝る時にも不測の事態に備えてポニーテールのままのことが多い。とはいえ普通に邪魔なので、チセに泊まらせてもらったりする際にはわりと解いたり、下で緩く結び直したりしているのだが。今日に限って忘れていたな。

「……………」

そのまま、やんわり肩を掴まれて。背中を向けさせられる。

髪に指が通る感覚。……尾形に髪を結んでもらうなんて、実家にいた時以来だ。

「ありがとう」

礼を告げてはみたが、当たり前のように無言が返ってきた。代わりにと言っては何だが、確信犯疑惑のあるアシ×パが口を挟んでくる。

「メコの耳もかわいいいけど……私は下ろしたままでも似合ってると思うぞ?」

「邪魔だからなあ……」

「……………」

前世では当然のように短髪だったので、こんなに長い頭髮があるという時点でそこそこ不愉快なのだが、その点はしょうがない。だが、これを放置しておくのは耐えられない。そういうことだ。

尾形がなぜか意味深な目でアシ×パを見ている。ポニテ萌えの性癖でもあんのかな?  
?

俺の髪の話をしてもしようがないので、マンボウの話題を振ってみる。

「アイヌはマンボウも食べるんだ」

「いや……本州でも、宮城や千葉なんかの沿岸部では食う習慣があるらしい」

「そうなの?」

「俺も実際に食ったことはない」

へええ。前世でも知らなかった知識だった。

「百之助は物知りだねえ。アシ×パもそうだけど……」

大インターネット時代の申し子俺よりよっぽど様々なことに造詣が深い。やはり宝はただ持っているだけでは意味がないのだなあ。

「……兵營で聞いただけだ。第七師団はあちこちの地方からの寄せ集めだからな」

髪を撫でつけながら、尾形がそっけなくネタバラシをする。

「マンボウ、楽しみだね」

「……………」

「あー、いたらしいぞー！」

指差す先を見やる。……なるほど、大海原に揺蕩う巨大な灰色の板つぺら。

マンボウの昼寝、諸説あるらしいが、未だ特定されていなかった気がする。

マンボウに近づいて、一際船が揺れた。アシ×パが、借りた銚をその巨体に打ち込んでいた。

「気をつけて」

固定されたその体に、マキリ片手に軽々飛び乗るアシ×パ。俺だつたら重くて沈んでしまうだろうな。体重の軽い彼女にしかできない荒業だ。

こちらを見てにかつと笑ったかと思えば、

「すぐに食わせてやるからな……!」

「あ、生きたまま捌く感じ?」

躊躇なく突き立てられるその切っ先。既に拘束されたマンボウにもはや成す術はなく、ただぎよろぎよろと眼球を動かすのみ。かわいそう。

「あんまり意識したことなかったけどマンボウって顔気持ち悪いな」

「……………」

もはや俺たちにはできないことはないので、尾形と並んでマンボウの解体を見守る。俺の呟きに、手際よくマキリを振るっていたアシ×パが反応した。

「カムイユカ×に、人間の始祖である半人半神の英雄オйнаカムイが、鬼と術比べをするという話がある」

「鬼?」

「ああ。オйнаカムイはそれに勝ち、鬼の体を海に投げ込んだ。その体の半分がマンボウになった、と言われている。……よし、大体皮が剥けたぞ」

なかなかとんでもねえ言われよう。マンボウが何したってんだよ。顔がキモいだけなのに。

俺が今まさに殺されかかっているマンボウの風評被害を憐れんでいる間にも、アシ×パはその体内に腕を突っ込み。

「これが……っ、肝臓！」

「でかつ」「危なっ」

ひと抱えもありそうな白っぽい塊。体面積の1/10くらいを占めてないか？

アシ×パの身を案ずる俺たちとは対照的に、アイヌたちははしゃいだ様子。

「キナポス×！」

「なにか喜んでる」

「マンボウは肝臓の油が大事なんだ」

油。魚油ってやつですか、江戸時代にネコマタが舐めてたりする。発想が貧弱で申し訳ない。

「ヒグマやシカから採ったりもする。アイヌにとって、その生き物に油がどれくらいあるのかっていうことはとても重要なことだ」

「寒い地域だからかな……」

寒冷地ゆえに、植物油より動物油のほうが主力なのか。

アイヌたちに肝臓を手渡したアシ×パは、再びマンボウの上でしゃがみ込んでしま  
う。まだ何かするんです？

「マンボウの肉も食べろ！」

「むぐ」



……と思つていたら、おもむろに切れ端を口の中に突つ込まれた。マンボウの刺身？  
「時間が経つとすぐ不味くなる」

「うん……………味が無い。ヒンナ」

食べた感触としては、ふぐ刺しとかイカ刺しに近い。こりこりしているが、味らしい味がない。

「百之助も、……………起きてる？」

フードを目深に被つて胡座をかいたその姿、どう見ても寝ているようにしか見えなかったが。尾形は俺の呼びかけに顔を上げ、薄く唇を開いてきた。食わせろってか。

アシ×パからどんどんおかわりが来てしまうので、食べつつ、尾形の口にも入れる。

「ヴェツ」

「酢味噌とか……………合いそうだね」

精一杯のフォローでやんす。

「……………刺身はそうして食うらしい」

「スミソ？」

アシ×パが食いついてくる。ああ、味噌を知らないなら酢味噌を知る訳ないか。

「あー、えーと……………酸っぱいオソマ？」

わかりやすさを目指し、アシ×パの味噌知識に絡めて答えてみたが、彼女は楯図かず

お作品のびっくり顔のような表情になつて。

「シサ☒はすごい調味料を使うんだな……」

「誤解を生んでねえか」

「下痢つてことか？」

「……………、まあそうだね」

「おい」

明らかに食欲を失うやり取りだったが、排泄物呼ばわりしてなお味噌フリークのアシ

☒パはじゅるりと涎を啜り。

「酸っぱいオソマは気になるけど、杉元が腹を壊すのはかわいそうだ……」

「不死身だからいんじゃない？」

「……………」

ていうか、あの味噌自体も杉元からひり出されてる訳じゃないんだけどね。

面倒だから訂正しない。許せ杉元。

そのまま、まだマンボウの上のアシ☒パとともに刺身を頂く。味が無い。

「百之助え、ヒンナか？」

「……………」

懲りずに呼びかけてくるアシ☒パ。いや、本編でも尾形がイエスヒンナしたのは樺太

で、

「また言えないのかあ〜？ うん？」

「ヒンナ」

——言った。

しかも結構はつきり。

「え、」

「ヒンナ」

尾形の「ヒンナ」に、アシ箱がクララが立ったハイジのような表情になる。尾形が言った！……で、その興奮を隠しきれない顔のまま、俺をぱつと振り返り。

「……!!」

「あ、うん。聞いてたけど」

なんか……そこまで親身に喜んでやれなくてごめん。こういう魂胆、みたいなほうに目が行っちゃったよむしろ。

「次は杉元たちの前でも言えるようになるな……!」

「……………」

無理でしような。

「あとは……腸が美味いらしいんだが、これは火を通したほうがいいな」

「長っ」

容赦なく引きずり出されるモツ。マンボウが既に死んでいることを切に願う。

そもそも目立つ部位が筋肉と肝臓と消化管しかないのだな。かなりシンブルな体の構造をしている。

そして、ひと通りの剥ぎ取りが済んだところで。

「……何してるの?」

アイヌたちの手によって、空いてしまったスペースに詰め込まれる木屑。いや、これは確かイナウ……アイヌ文化における神への捧げ物だった気がする。アシバが綺麗に剥がした皮で蓋をして、リリース。

「肉や肝臓をもらった後はこうして、海に還すのが決まりなんだ。そうすれば、再び生き返って泳ぎ出すと言われている」

「え、マジ?」

アイヌ文化、奥が深いぜ。主に死生観が今まで学んできたそれとだいぶ異なる。まるで尾形百之助だな……いやこれ悪口。

まあ、何にせよ。

「キナポが獲れて良かったね」

アハハ、ウフフ（尾形を除く）。

というか、今までは原作に入ったらそのイベントをなぞるだけと思っていたが。思いがけず貴重な経験ができました。

まあ、三次元で生きてるんだからそういうことも普通にあるよな。……そういう意味でも重要な経験ができた気がする。

「……酔味憎くださーい」

「しょうがない、浜に帰ったら杉元に出してもらおう」

「……………」

## 26話 小屋とラッコ鍋と私

結局、あれから。

若干ながら船酔いしてしまった俺は、アシ×パの勧めで、尾形とともに先んじて浜ま  
で送り届けてもらっていた。

未だ元気いっぱいなアシ×パは、まだ彼らのマンボウ漁に付き合うつもりらしい。パ  
ワフルだな。

「あー……イヤイライケレ？」

俺の発言に、わざわざここまで俺と尾形を運んでくれたアイヌたちが笑顔を見せる。

「合ってたみたいだ」

アシ×パからちよつぴりアイヌ語を習っておいてヨカッター。俺が使える単語、「あ  
りがとう」と「こんにちは」くらいしかないけど。

再び漁に戻るらしい彼らを見送ったところで、隣の尾形が控えめに呼びかけてくる。

「……大丈夫なのか」

「うん。……というか、2人が大袈裟なんだって」

ちよつと気分が悪い、程度であそこまで騒がれるとは思わなかった。

実際、今はもうほとんど平気になったし。とうに成人した女に対して過保護すぎるんじゃないのかね。

「フフ……ほら百之助、ハマナスの実」

「いらん」

浜に戻ってきたはいいが。

特にやることもなく暇なので、チカパシを通訳としてアイヌ相手に物を売ってみたり、打ち上げられた海藻を拾って食べたり（尾形に止められた）、砂浜で白石と銃を使った棒倒しをしたり（尾形に止められた）して、適当に時間を潰している。

今は、インカマツが貴重な食料と言っていたハマナスの実を尾形と食べ……食べさせているところだ。強引に。

「だからいら、……」

「あ、インカマツと谷垣源次郎だ」

視界の端に見慣れた姿が見えたので、尾形の口にハマナスを押し込むのをやめて、そちらに体を向ける。

2人は砂浜に何か莫産のようなものを敷いて、並んで座っていた。なぜか谷垣は上裸だったが、よく見ればインカマツの手元に着ていたらしいシャツがある。

「杉元がちぎったボタンを縫いつけてあげてるみたいだな……夫婦みたい」

「フン……」

しかしインカマツ、顔に傷（痕）のある男性が好みらしいが。この嗜好を形成したのがウイルクであろうことを踏まえると、谷垣の顔面はかなりウイルク度が低いんだよな。あの程度でいいのかよという。

そんなことを考えながら2人を観察していたら、何かを持ったアイヌの男（老爺？）が彼らに近づいてくるのが見えた。

「誰か来た……何か手渡してる？」

色からして肉？ 珍味の気配。

そちらへ向かおうとした背に、尾形の声が飛んでくる。

「おい、ひとりで行くな」

「百之助がついてくれば良い」

何気なく返して思ったが、こいつは別に頼んだ訳でもないのに俺のそばをうろちよろしているのだ。構っても鬱陶しげな反応しかないくせに、おかしな男である。

今もまた、やや間を置いて後ろをついてくるごく小さな足音。狙撃手として癖がついているのか、尾形の歩みは非常に静かだ。

「あら」「……！」



丘を下ってきた俺たちを見て、インカ☒マツは微笑み、谷垣はわかりやすく「うわっ」みたいな顔をして尾形に睨まれていた。

彼女の切れ長の瞳が、俺と尾形をゆっくり見比べて、

「尾形カツケマツ……探していたご家族に無事、会えたのですね」

そういえば、再会しつつも何だかんだゆっくり話す機会がなかったな。

彼女から購入したエカエカは、今も手甲の上から右手首に巻き付けてある。

「うん。……あの時、占ってくれてありがとう。あなたの占いで勇気づけられたよ」

「いえ、私はそんな……」

微かに頬を染めて、首を横に振るインカ☒マツ。可愛い。……と思ったのも束の間、

「……………」

「……、？」

なぜか、無言で俺を見つめてくる。何か言いたげで、でもそれを躊躇っているような、

なんとも言えない表情だった。

「イン、」

「ウムレ☒ エチネ カ ヤ？」

俺の呼びかけを遮る形で、蚊帳の外だったやたら綺麗な目をした老人がこちらに声を

かけてくる。顔面が妙に細長いな。

「……………」

出鼻をくじかれたが、彼を無視してまで微妙な疑問を解消しようという気にもならず。先ほどの続きではなく、彼の発言に対する通訳を求めてインカマツに向き直る。

「……アイヌ語はわからない、何と？」

「ええと……おふたりもどうか、と」

肉の話か？

俺が首を捻っている間にも、老人はその丸ごと肉を綺麗に背骨から真つ二つに割つて。こちらに差し出してくる。

いや、ていうかこの肉、原作にも出てきていた気がしたけど何だったっけ、

「これは？」

「ラッコの肉です」

出、出〜！

海獺肉奴〜！

鍋匂欲情脱衣相撲回奴〜！

瞬間、原作以外でも繰り返し見たワンシーンが走馬灯のようにフラッシュバックする。

いやでも珍味は珍味だ、現代でラッコの肉を食べる手段なんかほぼないのだから。

「いら、」

「イヤイライケレ」

「……………」

尾形の否定を遮って、老人から肉を受け取る。

「煮て食べればいいのかな？」

「そ、そうですね……………」

妙に歯切れが悪いインカマツ。ラッコ肉には欲情を煽る作用があると俺たちに言いたいが、谷垣がいるので言えない、という煩悶が手に取るようにわかる。

「……………」

「……………何見てる、谷垣二等卒」

「い、いや……………」

むしろ谷垣は、俺に振り回されている尾形のほうに興味があるようだが。あの“尾形上等兵が、おとなしく身内の面倒を見ているのが意外だったか。 ”

「じゃ」

顔が真っ赤のインカマツがハマナスを採りに行きたげだったので解放してやり、また気ままな2人歩きに戻る。

谷垣の姿が見えなくなった辺りで、1・5歩後ろを行く尾形が、

「訳わからんものを受け取るな」

「訳わからなくない、インカ<sup>□</sup>マツがラッコの肉だつて言った」

「あの女は信用できない」

大して絡みもないわりいきなり好感度がクソ低い。鶴見中尉との繋がりが露見する前だつていうのに、野生の勘か何か？

「腹も減つたし」

「そんなもの食うんじゃねえ、捨てろ」

容赦ねえ。

とはいえ、わざわざ貰ったものを捨てるのもねえ。そんなことを考えている間にも、俺から少し離れた尾形は、取り出した双眼鏡で遠くを眺め出してしまふ。

……と、いうか。

このまま放つておいたら、俺もあのラッコ鍋騒動に巻き込まれるんじゃないのか？

ラッコ肉の味は気になるが、女の身で興奮した屈強な男5人に囲まれるのはちよつと不安だぞ。尾形だけならともかく。

どうしてあんなことになったのだっけ。

本筋というか尾形に関係のないことの記憶、いよいよ穴抜けだらけになりつつあるな。漠然とした不安を覚えつつ、空を往く海鳥を眺める。

そこに、

「タマー！」

尾形が、双眼鏡片手に駆け足で戻ってくる。珍しくも焦ったような顔。

「どうしたの」

「……まずいぞ」

言いながら、水平線の向こうを振り返る。そういえば、俺も双眼鏡持っているのに全く有効活用できてないな？

思いながら視線を向けた先。

「何が、……！」

息を呑む。

唸りを上げながら、こちらに接近してくる黒い雲のようなもの。その正体とは、

「バッター!!」

飛蝗じゃん!

あつという間に視認できる距離まで飛来してきたかと思えば、バシバシ体にぶつかってくる大量のバッターたち。気味が悪いし痛い!

慌てて外套のフードを被ったが、この状況では焼石に水だ。

「いたた、齧られてるっ」

「あそこに避難しろッ」

手首を掴まれて引つ張られる。遠慮のない力の入れ方で、少し痛い。

向かった先は、平屋の木造建築。原作で避難した番屋かとも思ったが、

「……杉元たちは!？」

建物の中に入ってなお、彼らがこちらに来る気配はない。俺は一瞬慌ててしまったが、尾形は落ち着いた様子で、

「向こうにも番屋がある、問題ないだろ」

言いながら、ぴしゅんと後ろ手に扉を閉めた。

「……バツタがいっぱい……」

虫が苦手という訳でもないが、このレベルになるとさすがに気持ち悪い。という訳で窓にはできる限り近寄りたくないのだが、窓辺に立つ尾形は平気な顔で外を眺めている。

「『飛蝗』ってやつだ」

バツタの羽音に紛れてしまいそうな尾形の呟き。蝗害のことだろう。聞いたというか、その名を見たことだけはあった。

「洪水やら何やらで条件が重なると大発生する時がある」

——ぐきゆるるる。

う。盛大に腹が鳴った。だから、朝からマンボウの刺身しか食べていなくて、腹が減っていたんだって。

尾形が一瞬こちらを見て、再びガラス窓に向き直る。

「……こいつらが集団で飛び立つと、何十キロもの距離を移動して、海だって越えちまう」

ぐるるっ。

「移動した先々では農作物はもちろん、」

コロコロッ。

「……草木は食い尽くされ……家の……」

コロコロコロコロッ。

「……」

「……」

視線が痛い。いや、別に鳴らしたくって鳴らしてる訳じゃあないですよ！

……で。結局。

「捨てろって言ったのに……」

囲炉裏にかけられた鉄鍋、その中でぐつぐつ煮えるぶつ切りのラッコ肉。

「お前の腹の虫はバツタより厄介だ」

鍋の用意を手伝ってくれた尾形が、淡々とそう吐き捨てる。

そう。彼はただ、腹減りの俺に食事を与えてくれようとしているに過ぎない。

ただ、この肉はラッコなのだ。

当然、頭を過ぎるあのワード。

——これ……合法的なウコチャヌ？コ？コ？チャンスか？

いや、成人同士がウコチャヌ？コ？コ？するのに、違法も何もないのだが。俺たちは血筋的には赤の他人な訳だし。

でも、今まで自然に2人きりになれる夜なんてなかったしな。まず尾形にその気がなかったただけだろとかは言ってはいけない。

これは、チャンスなのでは。

そうかな？ そうかも……



「しかし……やけに臭う肉だな」

「うん……でも窓は開けられないし……」

「腐ってたんじゃねえのか」

「死にたてつて感じだったけども」

飛蝗のせいで閉め切られた部屋の中、ラッコの煮える匂いが充満していく。ちよつとしたサウナ状態だ。しかも臭い。

——ラッコの煮える臭いは欲情を刺激し、ひとりでは気絶するほどなのだという（原作12巻より）。

さて、いよいよクライマックスという感じだが。ちらつ。様子を横目で窺う。

「……………」

なるほど、尾形がどう見ても色っぽ……いやよくわからん!!

やや顔を顰めて、暑そうではある。

さあ、これからどう動く、

「頭がクラクラする……」

「大丈夫か百之助ッ」

なるほど、セオリー通り来たか（?）。

実際にふらついたその体を、近くまで行つて支える。ぐったりしていて、呼吸が浅い。

「ここまで弱っている姿は初めて見るかもしれない。

なんか苦しそうで可哀想。」

「横になれッ、今すぐにッ！」

こちらでも原作通りのムーヴで行ってみる。で、

「胸元を開けて楽にしたほうがいい、」

……とりあえず……脱がしとくか。

原作通りに。

暑そうだし。他意はない。

シャツはともかく、ズボンはダルいから前だけ開けておけばいいや……と思つたところで、あつ、これ抱き枕カバー（公式）で見たやつだ！

全部脱がせろと言われていたあたり、原作の尾形はガチ全裸だった可能性があるんだよな。

「……………」

マグロ尾形、ここまでされるがままで、浅い呼吸を繰り返しながらじつとしていただけ。淡く滲んだ虹彩が、虚ろに天井を見つめている。

日に焼けない白い肌が薄つすら赤く色づいて。乱れた黒髪が、汗ばんだ額に散らばるその姿。指先でなぞつた頬は、熱い。

「……百之助……」

何となく、彼の名前を呼んで。

そこではた、と。

気づいてしまった。

いや、

——別に俺、尾形百之助とウコチャヌ☒?コ☒したくねえな。

うむ。

見誤っていたな。何を？

冷静に考えて、したい訳がない。

俺は男で、まあ自認としてはノンケ寄りだったし、尾形は血が繋がらないとはいえ身

内だ。積極的になる要素がない。

そもそも、俺のほうは特に身体的な変化を感じていないのだが？

「……………」

立ち上がる。

数歩動いて、元いた位置に腰を落ち着け、腕に鍋の中身をよそう。

「……………」

「獣臭っ」

リアル抱き枕と化した尾形の寝姿を眺めながら、ラッコ汁を啜る。なんかこんな感じのシニールAVあったよな。

興奮した男を裸同然に剥いておきながらそれを放置していきなり飯を食い出す異常成人女性が爆誕してしまったが、別に俺自身は興奮してないんだからしようがない。

本来なら強引に迫ってでも一発ズドンしておくべきシチュエーションなのか？ でもまあ。

そもそもの生育歴が特殊なので、色仕掛けが効くタイプの男でもなくない？

普通の男なら抱いた女に情を抱くのだろうが、尾形百之助は普通じゃないから。何せ、一番性欲を持って余してそうな時期ですら乳揉みを躊躇うレベルの男だぞ。メリットがものすごく有るといふなら考えなくもなかったが、はつきり言つて無さそう。

尾形も動く気配はない。

……別にこいつも、俺としたい訳じゃないらしい。まあ、わかっていたことだけだ。

「ふー……」

硬く、生臭い肉を黙々と咀嚼して。とりあえず、腹は満ちた。

箸を置く。窓を見る。まだバツタが大量にへばりついている。これからどうしよう。

……それを眺めていたら。迫る人影に対する反応が、遅れた。

「……………え、」

影が落ちて、視界が暗くなって。ようやく、佇むそれに気づいた。

尾形の手のひらが、俺の肩を押す。一切身構えていなかった体は簡単にぐらついて、その場にひっくり返る。その弾みで普通に後頭部を強かにぶつけた。いてえ。

「いつ、」

頭を抱えて痛みに悶える俺に、ゆっくり覆いかぶさってくる熱。

ぎし、と板張りの床が軋む音。——半裸の尾形百之助が、熱っぽい瞳で俺を見下ろしていた。

「えっちよ、オガタ、……!?!」

骨張った手が、着物の袷目から滑り込んでくる。熱い。火傷しそうだ。

そこまで考えて。

いや、これは。

「っ、……」

し、しちやう!?

ウコチャヌ☒?コ☒!!

いやあの、さつきはああ言ったが、前も言った通りに別に尾形本人がその気なら俺は吝か寄りの吝かでないというか、まあ前世では男だったけど今世の肉体は女な訳だし、これは単なる自然の摂理として、

「んっ」

——顔が、首筋に埋まって。

思考が、停止した。

髪が、髭が肌に当たってこそばゆい。熱い吐息が喉元を撫でていく。尾形は、雄として明らかに興奮しきっていた。

妙に爽やかな香り。これは彼の整髪料の匂いだろうか。不思議なことに、そこで初めて、もう大人の男なのだなあ、と思う。

尾形の顔が、迫ってくる。目を瞑る。

ああ、もうごちやごちや考えるのはやめだ。

いけーっ 淫売の息子!!

「わう」

……が。

想定していた感触は、なかった。

代わりに、頬を這うざらついた舌。

あれ、舐められている？

「ん、う、……百之助？」

ぐる、と尾形が喉を鳴らす。満足気な響きだった。

そこからさらに何かしてくるかと思ったが……繰り返し、頬を舐めてくるだけ。ええ。

はつきり言つて拍子抜けだったが、尾形は本当にそれ以上のことをしてくる気配はない。これマジ?

「ン猫ちゃん……いいで」

尖った歯並びが頬肉に食い込んでくる。かじるのはやめてください……じゃなくて、ひやくのすけえ……」

んもう猫ちゃ、いや乳くらいは揉めや!

二敗!!

## 27話 ギシンアンキってカタカナだとなんかエロい

あれから。

ひとしきりペろペろされた後。

尾形は、俺に覆いかぶさったままいつの間にか寝落ちしてしまっており。尾形を退かすほどの体力が残っていないかった俺も、そのまま眠ってしまった。

——目が覚めたのは、そこからだいぶ時間が経って、翌日の夜明け前。

2人とも、無言で身支度を整え、番屋を出たまでは良かったが。その近くの草むらで、蹲るアイヌの子どもに出会した。

「あ、尾形カツケマツ……」

きゅつと頭頂部で結ばれたちよんまげが可愛らしい、チカパシ少年。昼間会って以来だった。

「チカパシ……こんな時間に1人でいたら危ないぞ」

なんでこんな場所にいるんだ。しかも、なんだか元気がないようだし。近くにリュウも見当たらない。

「飛蝗は大丈夫だったのか」



「あ、うん……俺とリュウはコタンのほうにいたから……」

それはいいのだが、チカパシはなぜかそこで、俺の後ろに佇む尾形を見て。再び、俺に視線を戻したかと思えば、

「お……尾形カッケマツたちも、オチウしたの？ 痛くなかった？」

オチウ。また意味がわからないアイヌ語が出てきてしまった。尾形が代わりに聞いてくれる。

「オチ……なんだ？」

「えと、和人の言葉でなんて言うんだろ……だからね、あの……うーん、例えば……」

幼さ故に日本語に明るくないらしいチカパシ、少ない語彙から俺たちに意味を伝えるべくうんうん唸っていたが、やがて。

「男の人のちんちんを、」

「わかったそれ以上言わんでいい」

尾形キャンセル。

オチウ。……要するに、セックス？

ウコチャヌ☒？ コ☒はニュアンスとしては「交尾」に近く、オチウは人間同士のセックスを指す訳か。なるほどねえ。

で、隣の尾形は静かにスペースキャットフェイス。まあその辺のキッズにお前らセッ

クスしたの?とか聞かれたら普通に衝撃だわな。

「ちよつと待て、……も?」

……から復帰して。

俺さえ聞き逃していたその一言を、今さら引つ張り出して来る。チカパシは控えめに頷いて、

「谷垣ニ□パとインカ□マツが……俺、なんだか怖くて……」

初めて無修正AV見てグロいつて思うオタクみたいだね。我ながら最悪の例え。

まあ、セックスなんて綺麗な訳がないんだよ。そもそも人間自体が汚いんだから。

いや、谷垣とインカ□マツの話か……この辺り、マジで本筋に関係ないからほとんど記憶がない。最終的にデキてたことは覚えてはいるが、そんなシーンもあったかもね、程度だ。チカパシは……2人の行為を覗いていたのだけ?。

賢い尾形はその発言でさっそく件のラッコ肉との関係性を見出してしまったらしく、イライラが滲み出た顔で、

「まさかあのラッコ肉、アイヌの中で何か言い伝えがあったのか? あの女……」

「ノー、谷垣の前で言うのが恥ずかしかっただけだと思う……」

「チツ」

微妙な乙女心を解さない孤高の山猫スナイパー、尾形百之助。

こちらに背を向け、例のごとく髪を撫でつけながら離れていくのを見送る俺の横顔に、チカパシの追撃が放たれる。

「オチウしたんだ」

「してないよ」

並々ならぬ興味があるご様子。お年頃ですな。

「なんで？」

なんで。男女は当然そうなるものと思っっているのか、特に何も考えていないのか。

「……………」

アイヌの少年相手に自己解釈に基づいたエロスとフィリアとアガペーの違いを力説してもしょうがないので、適当に話を捻じ曲げて茶を濁す。

「……チカパシはインカマツのオチウが気になるんだね」

「うん！ インカマツは綺麗だし、オツパイも大きいし、見るとちんちんがむずむずするから！」

「……………」

チカパシ、*“強い”*な……

そこら辺のガキじや束になっても敵わない強さがある。是非ともそのまま健やかに育ってほしい。まだ見ぬエノノカと仲良くな。

そこまで考えて、ふと。

「……………私は？」

「え、」

自分の女性的な魅力、今まで意識したことはあまりなかったけど。白石に聞いてもなんだかんだで恥ずかしがりそう（というかアシッパの妨害が入りそう）だしなあ。

この際、率直な感想を聞くのも悪くない気がしてきた。

「お、尾形カッケマツは……………」

「インカッマツほど胸はないけど」

比較対象が巨乳と二次性徴前と後期高齢者しかいなかったもので、手のひらに収まってしまう自分のこれが世間一般で見てもどの程度のサイズなのかはよくわからない。前世童貞には土台無理な話でした。

でも。着物の裾を両手で掴んだチカパシが話し出して、我に返る。

「うん？」

「でも……………いい匂いするし……………確かにインカッマツよりトカッ？はないけど、いつつも銃の帯で締めつけられて……………」

スリングの話か？ 意識していなかったが、パイ斯拉ッシュ状態だったと。

なるほど、彼に緊縛性癖があるだけという可能性は否めないが、とりあえずエロスの

素養はあるらしい。

「苦しそうだなんて思うけど……でも、やっぱり……」

俯き加減だったチカパシは最終的にガバツと顔を上げ、

「やっぱりちんちんがむずむずす、」

「おいあつちに焚き火が見えた行くぞ」

おっと。再びの尾形キャンセルで首根っこからずるずる引きずられていく。

遠ざかっていくチカパシにグッドサインを向けたら、見様見真似で返してくれた。少年よ、大志と劣情を抱け。

「あれ、尾形ちゃんとタマちゃん」

俺たちが焚き火の近くまで辿り着いたのとほぼ同時に、お楽しみだった谷垣インカマツ、杉元白石キロランケもやってきた。アシ×パを除く全員がラッコ鍋でなんやかんやあったの何かのバグか？

「バツタ大丈夫だった？」

「うん」

杉元が心配してくれるのを受け流しつつ、アシ×パの挙動に目を配る。……その向こうにいるインカ×マツが、キロランケの姿を目にして、明らかに緊張した様子を見せた。ただ、当のアシ×パは落ち着いたもので。黒髪を靡かせながら、振り返る。

「——キロランケニ×パが、私の父を殺したのか？」

開口一番、彼女はそう言い放ち。

「え？」

白石は動揺していたが、隣の杉元はキロランケに横目をくれただけだった。ただ、キロランケ自身はさすがに落ち着いてはいらなかったようで。

「……俺が？　なんだよ、いきなり……」

その動揺に、嘘は見えない。……これから殺す予定の相手を既にお前は殺しているのだと言われたら、それは誰でも慌てるか。プロシユート兄貴かよという。

「……証拠は、」

アシ×パの凶行にむしろ冷静さを取り戻したらしいインカ×マツが、胸元から小さな紙切れを取り出す。

「馬券についた指紋です」

これは、アシ×パの思いつきなどではない。吹き込んだのは彼女であり、もつと言えば鶴見中尉だ。

「インカ×マツ……!?!」

「なに?」

「指紋?」

またしても何も知らない谷垣源次郎、渦中のキロランケ、無関係の白石が三者三様の反応を見せる。何か口挟まねえと気が済まないのか白石。

指紋照合。明治40年の日本では未だ実用化に至っていなかったが、海外では数年前から現場で使用されていたこの技術に、かの“情報将校”は既に目をつけていたらしい。

「苦小牧の競馬場で男性方の指紋を採取し、照合を依頼したところ——キロランケさんの指紋が、数年前ある場所で採取されたものと一致しました」

その場所とは。

「アシ×パちゃんのお父様が殺害された現場です」

微動だにしていなかった隣の尾形が、そこで微かな反応を見せた。

「遺品のマキリの刃に指紋がついていたそうだ。父とは何年も会っていなかったと言ったよな?」

「……おいおい、俺が犯人なら網走監獄にいるのつべら坊は何者だよ？」

「極東ロシアの独立資金として金塊を持ち出そうとした、あなたのお仲間の誰かでは？」  
ウイルクと顔見知り以上の仲である3人のアイヌたちに、ピリついた空気が広がって。

「ちよつと待った、」

そこへおもむろに割って入る、三八式の銃身。尾形百之助だった。

「この女……鶴見中尉と通じてるぞ」

その銃口は、真つ直ぐインカマツを捉えている。慌てたのは谷垣だった。対照的に平然としている彼女と、尾形の間には肉厚の身体を割り込ませる。

「よせッ何を根拠に……！」

「谷垣源次郎……色仕掛けで丸め込まれたか？」

ムカつく相手とかイジリの対象との口喧嘩で優位を確保している時の尾形、たぶん日常生活で一番いきいきしてるな。俺は嬉しいよ。

「殺害現場の遺留品を回収したのは鶴見中尉だ。……つまり、やつだけが指紋の記録を持っている」

「っ、」

今度は、はったりだとは言わなかった。谷垣は仮にも鶴見中尉の息がかかっていた



男、その辺りの話はもしかしたら実際に耳にしていたのかもしれない。

慌てた様子で彼が振り返った先。佇むインカ<sup>□</sup>マツは、ここに来て冷静だった。その狐目で谷垣を見遣り、

「鶴見中尉を利用しただけです」

その発言は、鶴見中尉との繋がりがあることを認めるのと同義だった。

……こういう時に泣き落としにかかるのを「女の怖さ」とかのたまたま輩もいるが、はつきり言つてエアプだ。本物の「女の怖さ」、今のインカ<sup>□</sup>マツがこれ以上なく体現している。な、(故)二瓶鉄造。

「……………」

純朴とムチムチの複合体が服を着て歩いているような谷垣、寝た女が堂々と裏切りに手を染めていた挙句、仲間を陥れようとしていたことがわりと衝撃だったらしい。わかりやすく狼狽して二の句が継げていない。

「大した女だな? 谷垣よ……」

……が。そこまでは良かった尾形、

「あのラツコ肉も仕込みだったのか? あの肉……大方、男の欲情を煽る効果でもあったんだろう。アイヌ文化に詳しくない谷垣がそこまで知るはずもない。色仕掛けの準備も万端だったという訳だ」

調子に乗ると口が回りすぎる性格が災いして、原作ではインカマツしか知り得なかったいらん解説まで全員の前で言ってしまう。お馬鹿！

「え？」

真つ先に反応を示したのは、お察し白石由竹だった。

「あの肉……どおりでやたら杉元が可愛く、ツ」

「おい馬鹿っ」

「は？」

男同士、誰にも言うなよ、の鉄の約束をさっそくブチ破ってくれる。途中で気づいて口を覆うも時すでに遅し、キロランケが止めに入ったが逆効果。参加者の大半が速攻で割れるまさかの展開。

原作とは違い、その共犯関係にはならなかった尾形はわかりやすく「嘘でしょ？」の顔をしている。当時のヤンジャンを買って読んでた読者も同じ気持ちだっただろうな。

「いや、お前からで食べたのか？」

「……？ インカマツは私と一緒にいたぞ」

よくわからんけど、というふうで話に入ってきたアシパの発言がとどめだった。

男3人、ラッコ鍋。

何も起こらないはずはなく。

が、押されるだけの彼らではない。そもその情報源は尾形なのだ。ということは、彼も決して無関係ではない。それに先んじて気づいたのは、白石の口滑り事故に不運にも巻き込まれた杉元だった。

「い、いや………ていうか、お前はなんでそんなこと知ってんだよ尾形」  
「……………」

旗色が悪くなったのを悟って急に黙り込む尾形。なろう追放系の元パーティーより自分の不利に気づくのが遅い。しかし、

「ラッコ肉の半分は尾形ニ□□と尾形カツケマツが持っていていききました。……私は効能についてはお伝えしていませんが、ご自分の経験に基づいた発言なのでは？」

インカ□マツが、詰められた恨みか一転攻勢でいきいきと抉ってくる。おい。

ご自分の経験。

それつまり、

「え、……………」

杉元白石谷垣キロランケが、なんとも言えない目でこちらを見てくる。こいつらウコチャヌ□□? □□したんだ!

逆に尾形は野郎だけでラッコ鍋を食った3人を汚いものを見る目で見ているし、いやそんなことは五十歩百歩なのでどうでもいいのだけど、ていうかこの中で実際にヤッ

ちゃったのはしれつと除外された谷垣インカマツで。あーもうめちやくちやです。

尾形ア!!

「……………」

墓穴を掘るとかいうレベルに収まらない広範囲爆撃に、圧倒的沈黙が落ちる。

「え？ 何の話だ？」

ただ一人、真正銘ラツコ鍋には無関係な少女アシパだけが汚い大人たちを見回して怪訝な顔。おいどうすんだよこの空気。

「……………ンツ、」

その嫌な静寂を破ったのは、わざとらしいキロランケの咳払いだった。

「お、…………俺の指紋と一致した、なんて鶴見中尉の情報を信じるのか？」

真面目な顔を作った彼が、手を翳して尾形に銃を下ろさせる。愚弟が本当に申し訳ない。

「殺し合えば中尉の思う壺だ。この状況がやつ狙いだろ？」

さらに言葉を重ねるキロランケ。その場凌ぎの発言だったとしても、これは的を射ている。

実際のところ、網走監獄にいるのつぺら坊は本物のウイルクであり、インカマツは鶴見中尉に一杯食わされたに過ぎない。

「どっちだ？ どっちの話が本当なんだ？ 誰が嘘をついてるんだ？」

……嘘か真か、という観点だけで見れば。

どちらも真である。

インカ<sup>×</sup>マツは鶴見中尉の発言をただ横流ししているだけ。キロランケは、「まだ」ウイルクを殺していない。強いて嘘つきを挙げるならば、鶴見中尉ということになるが。

「……白石。この中で『監獄にいるのつぺら坊』と会つてるのはお前だけだよな？」

尾形の発言を、琥珀色を眇めた杉元が引き継ぐ。

「本当に、アシ<sup>×</sup>パさんと同じ青い目だったのか？」

ポーランド人の父、樺太アイヌの母。多くの血が混じり合つた複雑な煌めきのブルー。

けれど、白石はさらに狼狽えた様子で、

「え？ 俺は一度も青い目なんて言つてねえぞ、あんな気持ち悪い顔まじまじと見たことねえよ」

魔剤？ 俺だつたら顔面の皮剥がされて生きてる人間とか珍しいからまじまじ見ちゃうけどね。

——のつぺら坊と会話しているのは、おそらく土方歳三のみ。脱獄の計画は、彼を通

して囚人たちに伝えられた。

白石由竹の発言が意味することとは。

のつぺら坊は、本当にのつぺら坊なのか？

……ひよつとして、全ては土方歳三が仕組んだことなのではないか？

絡め取られた疑心暗鬼の中、短い夏の夜だけが静かに明けていく。

——何にせよ、一旦チセに戻って出立の準備を整えようということだ。

各々コタンに向かうその顔ぶれの中に、見慣れた外套の姿はなかった。

さりげなく引き返す。……こちらに背を向け、波打ち際にひとり佇む、

「百之助」

呼びかけても、彼は振り返らなかつた。双眼鏡を持つている訳でもなく、ただ朝陽に照らされる海を眺めている。何となく、思い詰めているみたいだな、と思った。

「どうしたの？」

隣に立って、その表情を覗き込む。そこでやっと、薄く唇を開いた。

「……あの女」

あの女つてどの女だよ、と一瞬思ったが、男女比がバグっているあのメンツでは、未成年であるアシ×パを除けば対象者は1人しかいない。インカ×マツのこと、と聞き返すより早く。

「知り合いだったのか？」

尾形が尋ねてくる。唇から音を突き飛ばすような、妙に勢いづいた話し方だった。

知り合いだった？

そういえば、インカ×マツとは昨日少し話した。尾形はそれを見ていたのだ。

「少し前、苦小牧の勇払で会ったんだ。アシ×パたちも一緒だったから、聞けばわかると思うよ」

事実をそのまま口にする。けれど、尾形の纏う雰囲気は変わらなかつた。

「……………」

うんともすんとも言わないまま、俯き加減で俺の横をすり抜けて行ってしまふ。知りたい情報は得られたのか。……あるいは、今この状況で問うても無駄、と判断された？  
そこから導き出される解とは。

——疑われている？

「……鶴見中尉か？」

インカマツと同じように。

尾形の背が豆粒程度のサイズになるまで遠ざかってから、呟いてみる。

けれど、その立ち姿はそれ以上小さくも大きくもなる気配はない。彼がこちらを振り返った。俺を待っているのか。

……尾形は、俺の一連の不可解な行動について。鶴見の息がかかっているため、という理由づけで自分を納得させている？

確かに、最も現実在即したアンサーなのかもしれない。ただし、そこには根拠がない。俺が鶴見篤四郎に与するメリットとは何だ？ 尾形タマはインカマツではない。

大金に目が眩んだ。これでは北海道行き決行の時点で躓く。

尾形が心配だった。当の尾形は第七師団を離反しているのだから本末転倒だ。

……ただ、信用されていないだけか。

そんな理由づけが必要なほどに。

馬鹿げている。

「……………」

焦れたのか、尾形がこちらに近づいてくるのが見えたので。一旦、思考を打ち切つて、足を踏み出す。濡れた砂浜を踏み締めて、彼のもとへ向かう。



ああ。『12巻』が終わろうとしている。

あと200頁足らずで、俺たちは網走監獄に到達してしまう。時間が無い。

「……何やってる、」

やや呆れた様子の尾形に、黙って微笑み返す。

そろそろ、真剣に考え直す時が来ているのかもしれない。

——尾形百之助による、網走監獄におけるウイルク殺害の阻止について。

## 28話 鳥の眼、猫の眼

塘路湖のコタンで盲目盗賊の親玉——都丹庵士の情報を得た俺たちは、そこからさらに屈斜路湖の近辺までやって来ていた。

今は、情報収集と慰安をかねて、教えてもらった温泉旅館で身体を休めているところだ。

「おーい、杉元！」

「お……来たな。ありがとう、あんまさん」

「いえいえ。あたしも貴重な経験ができました」

割り当てられた部屋で通いの按摩にマッサージを受けていた杉元が、白石が呼びに来たタイミングで起き上がる。男子勢はこれから揃って露天風呂に行くらしい。

「じゃ、行ってくる。……タマさん、アシ×パさんのこと頼んだよ」

「うん」

手拭いとともに、用心深く三十年式を担いだ杉元にそう声をかけられて、とりあえず頷いておく。頼まれても困るんだが。

そして、襖の向こうに消えた彼と入れ違いでひよっこり顔を覗かせる、

「あれ……インカ☒マツ？」

「谷垣ニ☒パが、1人でいるのは危ないからと……」

なるほど。それでこっちに寄越したのか。何というか、ちゃんと家族をやっているのだな、と少しほっこりした。

なぜか申し訳なさげに佇んだままのインカ☒マツに、手を伸ばす。

「そうか。おいで、インカ☒マツ」

それではやくいそいそと入ってきて、俺の隣に座るインカ☒マツ。谷垣の漢気(?)を汲んでか、彼女を苦手とするはずのアシ☒パも、目立った拒否を見せなかった。

代わりにと言っては何だが、按摩を指さし。

「……タマもやってもらったらどうだ？」

「私？」

「やってみますか」

マツサージかあ。

その類、前世でもあまり受けたことがないんだけど。若かったし、身体的な問題を抱えていた訳でもないし。

まあ、按摩のほうもやる気のようにだし、わざわざ断るのも……と思った、のだが。

「くすぐったいっ」

「おお」

痛いとか気持ちいいとか以前に、耐えがたいこそばゆきにより速攻でギブアップ。

「しなやかで無駄のない体つき……こちらの方の身体もまた、猫を思わせませぬ」

「タマはメコだからなあ」

「メコ?」

なぜか得意げアシ×パ。インカ×マツがちよつと困っている。

「アシ×パが勝手に言ってるだけ、」

するつと按摩の下から抜け出す。あーくすぐったかった。せかせか着物を整える俺

を見て、按摩はくすりと笑みをこぼし。

「必要なさそうですな」

杖と手拭いを持って、危なげなく立ち上がる。慣れた動きだった。

「じゃ……あたしはもうこれでおいとまさせていただきますよ。良い夜を、御三方」

「ひとりで大丈夫か?」

部屋を出て行くこうとする彼に、アシ×パが声を掛ける。相変わらず優しい子だ。

「ありがとう。夜道はお嬢ちゃんより得意だよ」

「ほんとに?」

「真つ暗な中でも、転がっていった小銭だつてすぐ拾えるんだから。お嬢ちゃんにはで  
きないだろう」

「ああ」

それで、こちらに背を向けたかと思えば。おもむろに足を止めて、再び振り返る。

「……そうだ、お嬢ちゃん方」

——夜のゲタの音に気をつけなさい。

「ゲタ？」

「夜になるとこの辺りに出てくる盲目の盗賊さ」

盲目の盗賊。——都丹庵士の情報と合致するその情報に、アシ<sup>シ</sup>バ<sup>バ</sup>がはつと俺を見  
た。

「ゲタの音……つてどんな音なんだ？」

現代日本人の俺は一応、実際に耳にしたこともあつたけれど。アイヌである彼女には  
馴染みのない響きだつたらしい。

「木の幹を斧で叩いた時の音に近いかもしれない。もつと軽いけれど」

「いや、本当は違うはずさ。ある晩にあたしも聞いたことがある……あれは舌の音だ」

——来た。都丹庵士。

湧き上がる気持ちを押し隠して、努めて冷静に唇を動かす。

「……盲目と何か関係が？」

「舌を鳴らして、その音の反響でものを『見る』んだ。そういうやり方があるんだよ」

エコーロケーション……生きるということは今の環境に適応していくということ。先天的にも、後天的にも。それは動物だけの専売特許ではないという訳だ。

俺が改めて感心している間にも、アシ♀パが微かに震えた声で続ける。

「舌を鳴らすつて……どんなふうに」

按摩は、小さく顎を上げて。

——カンツ。

鋭く鳴り響いたその音に、こぼれ落ちそうなほど碧眼を瞞るアシ♀パ。彼女は、既にその不審な音を耳にしていたのだ。

「……屈斜路湖のコタンで聞いた音だ」

低い呟き。……のち、弾かれたように部屋の中へと取つて返し、荷物を漁り出す。

「杉元たちが危ない！」

俺もその後を追つて、外套を羽織り、立てかけていた三十年式を担いだ。

唐突に身支度を始めた俺たちに、インカ♀マツが怪訝な目を向けてくる。

「どうしたんですか、尾形カツケマツ……アシ♀パちゃんも、」

「……塘路湖のコタンで聞いた盲目の盗賊たち。屈斜路湖についた時から、私たちは彼

らに監視されていた……」

「えッ、」

話自体はコタンで聞いていたインカマツ、それでようやく現在の危機的状況を我が事として受け入れたらしい。

「杉元たちは今、風呂だ。襲うなら一番無防備な瞬間を狙うだろう」

「……谷垣二ッパとチカパシが……」

仲間以上に、『家族』2人の危機に青ざめるインカマツ。……この様子では、危ないからついてくるなと言っても無駄だろう。

「おそらく森のほうへ追い込まれたはずだ。俺たちは旅館の外から森に向かってみる。インカマツはひとまず脱衣所に向かって、谷垣たちの銃を探してくれ」

「は、はい……!」

ばたばたと部屋を出て行くその後ろ姿を見送って、俺たちも向かうか、と廊下に出たところで。未だ状況が飲み込めないらしい按摩が、不安げにこちらを窺っているのに気づいた。

「どうかしたんです、」

「詳細は言えないが、その盗賊は我々を狙っているようだ。……盲目のあなたを襲うこととは無いだろうけれど、明るくなるまでここにいたほうがいいかもしれない」

「……銃声だ、」

アシ×パとともに旅館を出たタイミングで、森に響き渡る破裂音。

「小銃にしては軽い。拳銃だろう」

「やつら、銃を持っているのか？」

アシ×パがつぶやく。拳銃を使うメンツはあの中にはいない。つまり、そういうことだ。

増えた不安要素に、俺の服をぎゅつと掴んでくる。……安心させてやらなければ。俺が。俺しかいないのだから。

「……杉元やドジスケベマタギはともかく……百之助は銃を持ち込んでいるはずだ」  
きつと、大丈夫。

言い聞かせて、アシ×パの肩を抱きながら森へと足を踏み入れる。ぎりぎり旅館の灯りが届いていた森の外とは違って、木立が鬱蒼と茂るその空間は漆黒に飲まれている。

「灯りをつけるな」



自然に慣れたはずの彼女がやや怖気付いた様子で荷物に手を伸ばすのを、落ち着いて制止する。

「でも……暗くて何も見えないぞ、」

「問題ない。俺は夜目が利く」

ほとんど唯一と言つていい俺の特技。

ようやく役に立てる時が来た。

「何もかも、見えている」

木立の合間に人影がひとつ、ふたつ。

全裸で逃げ出した杉元たちではない。きちんと服を着て、目元を隠したその姿——都丹一味だ。

「……メコー！」

「猫ちゃんじゃない。大きな声を出すな」

既に撃てる状態の三十年式を、ゆっくり構え直す。表尺越しに照準を合わせる。できればもう人は撃ちたくなかった。否、撃つところを見られたくはなかった。

しかし、この際やむを得ない。この状況で銃を使えるのは俺しかない。あちらは長物を持っている。接近戦で勝てる見込みはない。

それに、もはやそんな操立て自体が無意味な気がしているのも事実だ。夕張の山で見

た尾形の目を思い返す。

殺さない。殺されない。

あとは、それだけだ。

「俺から離れるなよ」

俺たちに気づいて、ちいかわに出てきそうな刺股を持った一人が近づいてくる。

その踏み出した足、草むらから飛び出した脛の辺りを——撃ち抜いた。

「ぐあッ」

響き渡る銃声、苦痛の呻き声。

排莖。即座に再装填する。

「……当てた……?」

寄り添うアシ♀が小さく呟いた。

その合間を縫って。

——カンッ。カンッ、カンッ、

「……来た、」

10時の方角。草を踏み締め、向き直る。

音はどんどん近づいてくる。まだその姿は見えない。それはあちらも同じだろう。

俺の目と、お前の目。どちらが先に相手を捉えられる?

「お前が俺に気づいて構えるのが早いか、俺がお前に気づいて構えるのが早いか——早撃ち対決だぜ」

草むらが、揺れて。

——見えた。

「——ッ、」

足を狙ったはずが、少し“足りなかつた”。すぐ手前の地面を抉つたのであろうその一撃に、絶え間なく響いていた舌の音が止まる。

それ以上近づいてくる気配はない。

闇はお前だけのものではない。

さあ、どう動く、

「……アシン×パ？」

……そこで、今まですぐそばにあつたはずの温もりが消えているのに気づく。

慌てて辺りを見回したが、それらしき姿は見えない。

「クソ、」

普通にはぐれてしまった。この一瞬で。

どうする？ 都丹との戦闘を優先したほうがいい？ 問題はない。原作では単独で

乗り込んだ彼女を杉元が保護していたはずだ。

……ひとまずどこかに身を隠そう、隙を見せすぎた、

「ぶえ」「っ、」

木の影に飛び込んだ瞬間。

何か、弾力のある温かいものに顔面から激突した。ふらついた身体を抱き止められる。

「む」

そのまま無遠慮にぺたぺたあちこちを触られて。

「ぶん」

最終的に頬肉をつままれてから、

「……タマ？」

控えめに呼びかけられる。いやほっぺたの感触で判別してんの、

「百之助」

原作通りとはいえ、無事で良かったけど。

全裸の義弟の胸筋にダイレクトアタック、これゴールデンカムイ流ラッキースケベ？  
まあ……温泉回で、（俺を含めた）女性陣がみんな服着てんのに、野郎どもは揃いも揃って全裸なあたりで「ごく一般」からはかけ離れた世界観の漫画だからな……

「最初はドジマタギが釧路での反省をようやく活かしたのかと思ったが……」

全裸に銃という特殊性癖もびっくりなファッションの尾形が、やや呆れた様子でそう吐き捨てて。それから、真面目な顔で俺の肩を掴み、

「とにかく……威嚇でもむやみに撃つな、他の奴らに当たったらどうする」

おお。……尾形に怒られている？

尾形が俺を叱るなんてまず無いと思っていたから、謎にテンションが上がってしまった。でも、これは誤解なのだ。

「大丈夫。見えているから当たらない」

「……見えている？」

少し驚いた様子だったが、即座にはったりだと切り捨ててはこなかった。彼なりに納得が行く部分でもあったのか。

「この暗さでか」

言いながらさりげなく小銃で股間を隠す尾形。かわいいと思つてやるべきなのか。さつきから全然見えてたけどね。

「いや」

暗い、か。

もたれかかった裸の胸。温もりと、心臓の音。やや早く感じるそれを聴きながら、仄かに明るくなりつつある空を仰ぐ。

今が本格的に秋が深まる前で良かった、  
「もうじき……夜が明ける」

辺りが明るくなり。

ようやく狙撃手としての勘を取り戻した尾形についていく形で、廃旅館の前までたどり着く。都丹たちが逃げ込んだその建物の様子を窺っている間に、

「尾形……とタマさん、」

ちいかわ刺股を携えた杉元が、アシ箱バを連れてやってきた。

当然全裸なので、歩くたびに杉元の杉元がぶるんぶるん揺れている。ご立派ア！

「……………」

「やああつあんまり見ないでタマさんっ」

「杉元！ タマはメコだから揺れるものが気になるのはしょうがないことなんだ！」

「それ飛びつかれるやつじゃんッ」

「おい今どうでもいいだろこいつのチンポは」

じゃあ尾形のチンポを見るということか？ 視線をずらす。……普通に手で目元を

覆われた。

というか、

「アシ×パ。……離れるなど言ったのに」

「すまなかつた、」

「いや……俺のせいだ、悪い、タマさん」

だーれだ状態のまま説教しても面白いだけだと思うのだが、2人からは案外素直な反省が返ってきた。あれ、俺がおかしいのか？

「……都丹庵士と手下2名があそこに入っていた。あの廃旅館が奴らのアジトだ」  
「百之助見えない」

「銃を取りに戻っていたら逃げられる。このまま突入して一気に片をつける」

言いながら、杉元が俺にちらつと視線を超越す。

「……アシ×パさんは外で待機していてくれ」

……俺は一応、戦闘要員として数えられているのか。まあ、状況が状況だしな。

それで、3人揃って突入したのはいいが。——ここは彼らの根城。罨そのものである。俺はわかっていたし、そもそも見えているからいいのだが。問題は、闇に閉じ込めら

れて狼狽する杉元と尾形のほうである。

「……………」

まあ、最初から俺だけで良かったんだけど。杉元たちがそれを知ってなお、俺の単独突入を良しとするとは思えないしなあ。

どこか、安全な場所に避難させなくては。

「うわっ」「……………」

男2人の手を取って、廊下の突き当たりまで誘導する。壁を背にしたここなら、少なくとも隙をつかれることはない。

「ここにいろ」

あとは、俺が早々に片をつけてしまうしかない、か。杉元に顔を寄せて、囁く。

「タマさ、」

「俺が行く」

立ち上がった。

すぐ背後まで迫っていた盗賊の足に、一撃。

「ぎゃっ」

その場に転がった身体を跨いで、ブーツの爪先で杉元たちの方角に押し退けておく。あとは彼らが何とかしてくれるだろう。



「あと3体」

こちらが見えているなどとは考えもしないであろう彼らは、無防備にこちらから向かって来てくれる。俺はただ、当てればいいだけだ。鴨を撃つより簡単な作業。

「……やはり、見えているのか!？」

都丹の驚愕に染まった叫び。

まさか、その辺の人間に動物並みに夜目が利く輩が混じっているとは思わないだろう。不運だったな。——そもそも、お前たちは杉元たちに負ける運命なのだけれど。

「そいつに近づくな、っ」

遅すぎる忠告虚しく。

銃声。悲鳴、空葉莢が畳に転がる軽い音。硝煙越しに、足を抱えてのたうち回る男を見下ろす。落ちた武器を拾って、遠くに投げる。

「……あと1体」

そこで、近づいてくる足音に気づく。盗賊たちのそれより軽いこれは。視線を向ける。

ふらふらと、亡霊のように彷徨うその腕を掴んで引き寄せた。彼女は一瞬体を跳ねさせたが、

「っ、タマ……!」

アシ×パ。奥にいる杉元たちより先に会えたのは、幸運か不運か。特徴的な耳に唇を寄せて、吹き込む。

「しゃがめ。左に三步。後ろに二歩。その壁伝いに右へ。突き当たりに杉元たちがいる」

チカパシを逃がそうとしていた男だ。アシ×パをわざわざ狙うような真似はしないだろうが、一応だ。頷いたアシ×パが廊下の向こうに消えたのを見送って、向き直る。

「……舌の音でものを『見る』……」

都丹が動く気配はない。いる部屋はなんとなく見当がついていた。口を動かしながら、ゆっくり足を進める。

「素晴らしい技術だ。きつと身につけるまでに相当な苦勞をしたんだろう。俺の眼はただの生まれつきだから」

背をつけた壁越しに、呼びかける。

「……でも、それでやるのが強盗殺人なら世話ないな」

呟いた、次の瞬間。

「うおおおッ」

もはや正攻法は無意味と見たか。

雄叫びと無茶苦茶な銃声、その凶弾によって部屋が壊れる騒音の洪水の中で。

カシツ。乾いた音——弾切れ。  
リロードする気配はない。

静かになった部屋の中、都丹の荒い吐息だけが響いている。……潮時か。  
襖の残骸を踏みしだきながら、半壊した部屋に銃を携えて入る。

「投降しろ」

部屋の中心。膝をつき、項垂れた都丹に向けてそう告げると。彼はゆっくり頭を振って、

「全て見えていたなら……何故……殺さなかった、」

「俺の勝手だ」

どんな相手だろうと関係ない。俺が殺すか殺さないかは俺自身で決めること。誰かに指図されるようなものではない。

「……お前ら鉱山会社の連中と、網走監獄の犬童は報いを受けるべきだ……囚人の命と光を奪って得たもの全てを、奪って……やろうと……」

——そんなことをわざわざ俺に告げて、この男はどうしたいのだ？

「そうか」

冷えていく。内側が。何もかもが。

それを感じる。

「同情はしない」

俺の眩きに、都丹が微かに喉を鳴らした。笑ったみたいだな、と思った。

「……いまさら按摩なんてできねえ、飢えて目も見えない俺たちはそう生きるしかなかった、」

だが、アイヌも和人も無関係の人間は殺しちやいねえ。

申し訳程度に付け足されたその言葉。くだらない。乾いた笑いさえ出てこなかった。

——ああ、

「……他者を傷つけておきながら、それでなお自身の痛みを理解させようとするのか。馬鹿げていると思わないのか」

もはや誰もお前の痛みに寄り添えない。

お前は傷つけすぎた。

「……痛かった。辛かった。苦しかったはずだ。ずっと。俺なんかには想像もつかないくらい。でも、お前はそれを他人に押しつけて生きる道を選んだ……」

己の痛みをそれ以外の人間に当てはめて考えられないというのなら、その苦痛はもはやお前だけのものだ。誰にも触れられない。理解することはできない。

——それが救いではなく呪いだと感じるならば、最初からそんな真似はしなければ良かったのだ。

都丹は黙っている。

「お前を理解し、肯定したら、今までお前に奪われてきた人間はどうなる？ 弱かったことが悪だとしても？ 人間を傷つけて……殺してなお、それをなかつたことにできる。『道理』などこの世には存在しない。」

——だから俺は尾形百之助を肯定しない。

尾形トメも、花沢幸次郎も、花沢勇作も、死んで当然、彼に殺されて当然だったなどとは欠片も思わない。

尾形は選択を間違えた。

それが全てだ。

罪悪感のある普通の人間が振り翳す『道理』ほど醜悪なものはない。全てを飲み込んで生きる覚悟さえなかつたくせに。

——後悔するな。

馬鹿げている。

「……………」

悲しくはなかつた。

それがまた、虚しかった。

きつく目を瞑る。ようやく視界が黒に包まれる。瞼の裏に広がる、俺だけの闇。

「……久しぶりだな、都丹庵士」

——唐突に響いた声に、はっと顔を上げる。

いつの間にか、微かながら光が差し込んでいて。俯いたままだった都丹が低く呻く。

「その声……なんであなたがこんなところに、」

照らされる、凜としたその立ち姿。

「犬童典獄と喧嘩だ」

会うのは旭川ぶりだった、

「……土方歳三」

俺の眩きに、都丹を見下ろしていたその瞳がこちらを向く。そのまま、鋭く微笑んでみせる。

「どうも。猫のお嬢さん」

うーん、銃だったり猫だったり。俺は猫ちゃんじゃありませんよ。

「杉元……都丹の処遇は我々に任せてはくれないか。お前たちを襲う心配はもうないだろう」

やや遅れてやって来た永倉新八が、土方と二言三言会話を交わしてから、杉元にそう告げた。この世界線では取っ組み合いに至らなかつた杉元の解答は、

「俺の分も刺青を写させてくれるなら……」

まあ、原作通り。

そこからただ、と付け加えて。

「ここらのアイヌの村には、アシシパさんたちの親戚もいる。殺して皮をひん剥いてくると、こちらとしては安心だがね」

その不穏な提案も、まあ……原作通りだった。

アシシパは通常運転の杉元をしばらく黙って見ていたようだったが。おもむろに、都丹庵士へと向き直り、

「こんな暗いところで隠れて暮らして、悪さをするため外に出るのは夜になってから……これでは、いつまで経ってもお前の人生は闇から抜け出せない」

その、温かい呼びかけに。

「……、参つたな、こりや……」

柔らかな苦笑を浮かべる都丹。

……眩しい。

光だ、と思つた。

俺では逆立ちしても出てこないような言葉と、表情だった。眩しすぎて直視できない。夜を見通す瞳は強い光に耐えられない。

「……………」

目を逸らす。瞼を閉じる。

そういえば。前世でも、暗闇を恐ろしいと思ったことはなかった。俺を包み込む柔らかな闇。誰の目も届かない。それは確かに安寧だったのだ。

「ん」

しばらく、そのままじっとしていたが。

アシ×パが声を上げたので、とつさにそちらを見てしまった。彼女がつまんでいるのは、

「塘路湖のペカンペ……ニンジャのマキビシにしようかと思ったけど、タマがメコだったおかげで使わずに済んでしまったな」

指先で弄ばれるヒシの実。そういえば、原作はそれで切り抜けたんでしたっけね。

「塩茹でにして、ご飯に混ぜて食べてしまうか。タマ、いっぱい食べていいぞ」

「やった〜」

寝もせず一晩中歩き回っていたので、確かにだいぶ腹が減っていたところだった。旅館のご飯も美味しかったけど。楽しみです。



「お腹空いたなあ」

「……タマさんは本当に、肝が据わってるなあ」

軍帽の鍔を下げながら杉元が苦笑する。なんだよお。

……ていうかクソ今さらだけど、こいつ帽子被ったまま風呂入ってたの？

## 29話 嫌な予感?

屈斜路湖を離れ、北見にて。

「写真を撮らないか?」

杉元が、おもむろにそんなことを言い出した。何でも、この町には写真館があり、土方歳三の古い知り合いである写真師が招かれているらしい。

唐突かつ場違いな提案に、

「何だって急に写真なんか……」

「本来の目的」の1人であるキロランケは怪訝な顔をしていたが、この謀計を案じた当の杉元は落ち着いたものだった。

「アシ×パさんの写真を、フチに送ってあげようと思ってね」

——本来の目的とは。

疑惑の渦中にあるキロランケとインカ×マツの人相を手に入れて、その正体を探ること。

まあ、そんなことはもはや俺には関係のないことなので、普通に撮影会に参加する。

「……………」

「百之助」

で。さりげなく出て行こうとするその襟首を引つ掴んで、捕獲。

原作でもこいつのカットはなかった気がするが、やはり撮っていなかったのだろうか。

「……俺はいい、」

「何だよ尾形ア、お前まさか、魂抜き取られるとかいう前時代の噂話信じちゃってんのぉ？」

出た煽りの杉元。不名誉な二つ名ばかり増えていくぞ杉元。

「……………」

「百之助く……タマが撮りたいと言ってるんだから撮ってやれ？ な？」

「ブチ殺すぞ」みたいな目で杉元を見ていた尾形だったが、アシ×パによるダメ押しが入ったことで諦めがついたらしい。

「……1枚だけだ」

「駄目だ、並んでるのも撮らないと！」

「……………」

谷垣との件でさすがに懲りた。

こいつは俺のことを周りの人間に言うような男ではない。その気になれば、尾形は

俺を容易に振り切ってしまう。客観的な証拠が必要なのだ。

「さあ、撮りますよ」

俺たちの番が来たのは、皆一通り撮り終わった後だった。それぞれ1人だけの写真を1枚ずつ撮った後に、撮影用バックペーパーの中で、肩を並べる。

尾形は最後まで納得していないようだったが、逃げ出していないだけ頑張っているほうだろう。

「そうやって並ぶとよくお似合いだ……」夫婦ですか?」

当然のように銃を担いだままの尾形（まあ俺も持つてるけど）が、隣の俺を一瞬見て。

「……違う」

まあ、事実だしな。

尾形の呟きに、写真師——田本は刻まれた皺をさらに深めて、笑みを浮かべる。レンズを通して、さまざまな人生を見てきた含蓄のある微笑みだった。

で、撮影室を出たところで、神妙な面持ちで待機する谷垣とぼったり。あれ、俺たちで最後かと思っていたんだが?

「谷垣源次郎……まだ撮ってなかったのか?」

「あ、ああ……なぜか、あの写真師に『最後までもいいか』と聞かれて、」

「次の方あ! どうぞ!」

「…………!!」

扉を貫通する声量に、真面目な谷垣は飛び上がる勢いで席を立つて。ばたばたと、撮影室に消えていく。それから間もなく、

『いいよ、いいよお!』

『あの……すみません、ほんとに脱がなきゃダメなんでしょうか、』

『他の人たちはみんな脱いだよ!』

「……………」

「聞くな」

含蓄がある……んだろう、多分。

——現像が終わった写真を、そつと指でなぞってみる。変な手触り。あんまり直接接触らないほうがいいのかもしれない。

兎にも角にも、尾形百之助の写真ゲットだぜ。

「次に百之助がいなくなったらこの写真で探す」

「いいじゃん」

実家に写真があればねえ。それなら谷垣も信じただろうし、色々な面倒ごとをスルー

できた気もする。

お祖父様が特に古い人間だったので、そんなハイカラな文化は我が家には入ってきませんでしたね。一面のクソミドリしかないクソ田舎だったし。

「あれ……そういうえば、タマさんの写真は？」

杉元に言われて、ようやく気づく。尾形の写真が目的だったけど、現像が済んだ写真は一通り見ていた。その中には無かったような。

「……出してもらった中には無かったけど」

「そうなのか？」

「ちやんと撮ってたよな？」

アシ×パが問うてくる。それは確かだと思いが。

あと、現実的に考えられる線としては――

「誰か持っていったのかな」

「ええ、」

アシ×パの写真はともかく、なぜか谷垣源次郎のセクシーブロマイドまで持っていた杉元という例もある。誰か、俺の容姿が気に入った人間が勝手に取ったのかもしれない。

俺が写真を見せてもらったのはかなり早い段階（尾形が自分の写真を回収しそうだと

思ったから) のことだったのに、随分と手の早いことだ。

「……まあいいや!」

「いいんだ?」

杉元は驚いていたようだが、SNSもないこの時代に、そこまで個人情報に対するこだわりがある訳でもなく。

「別にいらないし……」

それに。唇をなぞりながら、呟く。

「自分の顔はそんなに好きじゃない」

尾形とのツーショットを持っているのは、やむを得ずだ。本当はこれだって欲しくはなかった。

鏡を見るたびに、鳥肌が立つ。

平気で尾形タマのふりを——普通の人間のふりをしているその貌。悍ましい。

一瞬、沈黙が落ちて。

「……私がかわいいと思うぞ?」

「美人さんだよねえ?」

空元気のアシ<sup>①</sup>パと杉元が、口々にフオローしてくれるが。そういうことではないんだ。外見など単なる飾りに過ぎない。

「とにかく、いいんだ……」

2枚の写真を着物の袷目にねじ込んで、彼らに背を向ける。

杉元とアシシハはまだ何か言いたげだったが、見えない、聞こえないふりをした。

写真師田本に別れを告げ、北見を出て、とうとう網走監獄の目と鼻の先までやってきた。

相変わらず、ウイルク殺害を阻止するための良い案なんてものは浮かんでこない。

……そもそも、今までのことだって、俺が知恵を働かせて何とかしてきたという訳でもないのだ。トメは勝手に失踪して自殺、花沢親子に至ってはノータッチ。俺は結局、何もしていない。できていない。

——変えられるのか、俺に。

浮かんできた不安を、頭を振って払う。こんなところでめげていたら、尾形百之助の悲劇的な死を阻止するなんて土台無理だ。



ウイルクの射殺は、巡り巡って尾形がアシパの毒矢で片目を失うトリガーとなり得る。

とにかく……何とかしなければ。

俺が、何とか、

「——はい出ましたチタタプ!!」

杉元のがなりで、はっと我に返る。

……そうだ、今は潜入の下準備も済み、網走近郊のコタンで夕飯の支度をしているところだった。決行前夜、全員揃って食事をするのも、これで最後。

これからのことは考えずに、少しくらいは楽しむか。

「チタタプ?とは本来、鮭のチタタプ?のことを指すんだ」

「チタタプの中のチタタプ!!」

「痛ててツつねった!!」

なぜかキマった目でキロランケに飛びかかり、二の腕の下を振り出す杉元。そこ痛いところじゃん。

「エラと氷頭をチタタプ?する。チタタプ?すればするほど美味しくなる」

「チタタプ言えよ夏太郎ッ」

「チ、チタタプ、チタタプ……」

ほぼ初対面なのに不死身のチタタ□?にチタタ□?強要される夏ちゃん。チタハラやめな〜?

「何なんだあいつ?」

「杉元はチタタプのこととなると見境がないからなあ」

「どういふことだよ……」

「ハイッ次タマさんの番ッ」

「はいはい」

攻撃された二の腕をさすりながら呆れ顔のキロランケ……を横目に、俺もチタタ□?に駆り出されることとなった。

「チタタプチタタプ。……はい、次は百之助でいいのかな?」

「……」

「……尾形く〜く?」

俺から受け取った小刀で、無言でチタタ□?始める尾形を、当然見逃さないアシ□。ハ。

「みんなチタタ□?言ってるぞ? 本当のチタタ□?でチタタ□?言わないなら、いつ

言うんだ?」

「……」

「みんなと気持ちを一いつにしておこうと思ったんだが……」

フウ、と息を吐いたアシ箱パが立ち上がり、こちらに背を向けたその瞬間。  
「——チタタプ、」

消え入りそうな声で、淡々と紡がれたその一言。真隣にいた俺にはもちろん聞こえたが、

「……!? 言った!!」

クララが立ったハイジリターンズである。次は杉元たちの前で言えるように。 釧路でのその願いが叶った訳だから、彼女としては喜びもひとしおだったのだろう。

「聞いたかタマ!?!」

「聞いてたよ」

「なあ! いま尾形がチタタ? って、」

喜色満面のアシ箱パとは対照的に、スン……とした顔を向ける杉元谷垣。

「んもくく!! 聞いてなかったのか!?!」

しかし尾形、原作ではこの後、普通に裏切ってくる訳でな。なんか……最後だからちよつとくらい情けをかけとくか……みたいな気分になったのかな? 知らんけど。

鮭のチタタ?、身の串焼き、米とヒエの粥にイクラを入れたチポ? サヨ、塩煮ジャ

ガイモのマツシユとイクラを混ぜたチポ<sup>△</sup>ラタ<sup>△</sup>ケ<sup>△</sup>?——と料理が出揃ったところで。

豪華な夕食が始まった。

漁と料理を多少は手伝ったとはいえ、こんな良いものタダで食べちゃっていいんですか?」

——インカ<sup>△</sup>マツと谷垣のもだもだがあつたりしつつも、宴もたけなわとなつてきたところで。

「どうした、杉元」

杉元がおもむろに席を立ち。隣のアシ<sup>△</sup>パが、それに声をかけた。オソマかな?

「クツチをたくさん食べたせいで肛門が痒くなつたか? ここで搔いてもいいんだぞ」

「ヤダア〜アシ<sup>△</sup>パさんつてば!」

いつもの調子でぶんすこ怒りながら、俺の背後をすり抜けて——

「……!」

その瞬間。

見えない位置から軽く、着物の袖を引っ張られた。

とつさに視線だけ動かして彼を見る。目が合った杉元は、さりげなく右手を動かした。その微かに持ち上がった人差し指は、チセの出入り口を——外を指差している。

「……………」

どういう意図だ。

別に、拒否する理由はないが。

かと言って、すぐさま彼の後を追って出て行くのも気が引けた。とりあえず、茶碗に残った飯を全て片付けてから、そつと席を立つ。

「タマ、どこか行くのか？」

この騒ぎとはいえ、誰にも見咎められないはずはなく。アシ×パが、軽い調子で呼びかけてくる。うーん、なんて答えるべき？

「……………」ちよつと花畑に雉を撃ちに……………」

「混ざってる混ざってる」

「なんだ、オソマかあ」

「ぼやかした意味くく！」

冴え渡る酔っ払い白石のツツコミをBGMに、そろつとチセを抜け出す。

……………杉元は、少し離れた場所にただ立っていた。やはり、俺を待っていたのか。目が合つて、なぜか逸らされる。

「……………」どうしたの？」

寒い、早く戻りたいが正直な感想だが、杉元の横顔は何だかシリアスムードだ。

少し、間が空いて。

「網走監獄潜入の前に……ひとつ確かめておきたいことがあるんだ」

確かめておきたいこと。嫌な予感に身構えるより早く、

「——俺は、尾形百之助を信用してない」

俺に向き直った杉元が、きっぱりそう言い放った。

それは、わかつていたことだが。

杉元が俺に告げたいこと——否、確かめておきたいことは、それではないのだろう。

「あんたはもともと、あいつを追っかけて北海道まで来たんだろ？」

だったら。……そこで、杉元は一旦言葉を区切った。引き結ばれた唇。

どうしても尋ねたいのに、口に出してしまいたくない——そんな雰囲気だと思った。

でも、決心したように顔を上げて。

「あいつがもし、俺たちを裏切った時……あんたは、尾形についていくのか？」

——クリティカルな質問だった。

そして、いつか来るだろうと思っていた問いだった。さすがに、すぐには答えが出せない俺を見て。先ほどの勢いはどこへやら、萎れた様子の杉元が、再び口を開く。

「……タマさん。アシ×パさんはあんたに懐いてる。信用してるんだ、」

どうか。それを裏切るような真似だけはしないでくれ。

琥珀色の瞳はそう訴えていた。

アシ×パは杉元佐一に愛されている。とつさにそんなことを思った。ああ。言うべきことは、決まっている。

「……ええ。私もアシ×パが大切。彼女のこれからが心配でもある」

杉元がわかりやすく表情を緩める。まさか俺が、アシ×パに対してあんなクソガキだろうでもないとか言うとても思っていたのか。

ただ、俺は杉元が望む言葉を与えてやるつもりはない。単なるその場しのぎとしても、そんな誤魔化しは口にしたくない。

「でも、一方で安心もしている」

俺もとい尾形タマは、アシ×パに必要な存在だ。元からそうであったように。

「あの子には杉元も、白石もいる。何があってもあなたたちがアシ×パを守ってくれる確信がある」

杉元不在の樺太においても、その意志を引き継いだ白石が立派に彼女を守った。

「百之助には誰もいない、」

杉元も、アシ×パも、土方も、鶴見も。結局、彼を必要とはしなかった。彼自身が振り解いてしまった手を、誰も手繰り寄せようとはしなかった。……当然の話だ。

「あちこちをふらふら行ったり来たりするコウモリを、真の仲間だと思ってくれる人間

はいない。誰も彼を愛さない」

誰もやらなかったこと。

できなかつたこと。

それを誰かが成し遂げた時——尾形はその先に、何を見るのか。

「——俺には、尾形百之助の選択を最期まで見届ける覚悟がある」

アシシ。パに俺は必要のない存在だった。

ならば、尾形百之助は？

彼が本当に俺を必要としてくれるかどうかは、これからわかることであり、自らの手で選び取らねばならないことだ。

「愛しているから」

あなたが、アシシ。パを愛しているのと同じように。

小さく息を呑んだのが聞こえた。それに、微笑みかける。

「だから……あなたはあなたの成すべきことをして。杉元佐一」

杉元は、しばらく俺を睨むようにじっと見つめていたが、やがて、観念したように大きく息を吐き出した。軍帽の鍔を引き下げながら、

「……わかつたよ。タマさん」

いつも通り名前を呼んで、そう言ってくれただけで、今はじゆうぶんだった。否、そ



れ以上を望むのは贅沢というものだろう。

「ありがとう、」

杉元は軽く頷いた後、目を逸らして。

「ただ……本当にあいつには気をつけろよ」

真に迫った口調だった。

「小さい頃からずっと一緒のタマさんに言うことでもないかもしれないけど……何か、嫌な予感がする」

……まあ、その嫌な予感が手遅れに繋がったことは既に何度かあるねえ、という言葉  
を飲み込んで、とりあえず頷いておいた。

「……………」

杉元佐一。

俺に背を向けようとしているその横顔を見て。ふと、思い出したこと。

……彼は、203高地で花沢勇作の死に様を見ていたのでは？

「っ、」

とつさに、口を手で覆う。——どうして今まで忘れていたのだろう。俺が求めていた  
答えは、ずっとここにあったのだ。

顔を上げる。

「……………杉元……………」

俺の、蚊の鳴くような呼びかけにも。

「ん……………何だい?」

杉元は気負いなく応えてくれる。その優しい笑みを見て微かに胸が痛んだが、今を逃せばその機会はないかもしれない。

「こんな時に、嫌なことを思い出させるようで悪いんだが、」

振り返った表情が、疑念にか微かに強張った。でも、続けるしかない。

「……………花沢勇作少尉について……………何か、覚えていることはないか?」

杉元が、目を瞬く。純粹に不思議がつているようだった。

「……………どうして?」

当然の質問が返ってくる。誰、ではない。花沢勇作童貞防衛作戦に駆り出された彼には、顔にも名前にも覚えがあつたはず。……………この際、言うしかない、か。

いや、そもそも杉元は土方の口からこのことを聞き、尾形もそれを知っていたはず。躊躇う必要はない、

「尾形百之助は——第七師団長……………花沢幸次郎中将の息子だ」

俺の暴露に、杉元が目を瞪る。

「……………異母兄弟だったのか」

この流れで、さすがに勘づいたらしい。まあ、少し考えればわかることだが。

「百之助の兄弟なら私にも全くの無関係じゃない……でも、百之助はきつと聞いても教えてくれないだろうから、」

「旅順攻囲戦で見たよ」

気負いなく、答えが返ってくる。

旅順攻囲戦——それは、俺も知っていた。原作で見た。杉元は、勇作が背後から尾形に撃ち抜かれて死ぬ場面を実際に、

「ただ……俺が見た時は、敵兵の弾に当たって怪我をして、後衛に運ばれていったようだったけど」

——は。

「……………え？」

怪我。死んだところを見たならば、死んだと言うだろう。例えば、頭部を撃たれたとか。……でも、そうではなかった？

「息があつた、……………」

外したのか？ 尾形百之助が。

第七師団が誇るスナイパーが？

有り得ない。

「え、ああ。旗を持ってない、みたいな話をしていたから、手でも撃たれたのかな……」  
……やはり、敵兵に撃たれていた?

しかし、尾形は「死んだ」と言った。杉元の口ぶりからして、それが致命傷だったとは思えない。傷の治りが悪かったのか?

運ばれた、その後、

「その後は……!?!」

「えっ、その後!?! いやっ、俺も詳しいことは知らないっていうか……!?!」

別の師団だったし!

杉元のやけくそじみた叫びで、はっと我に返る。いつの間にか、彼の胸ぐらに掴みかかる勢いだった。慌てて手を離す。

彼はそれでごほん、とわざとらしく咳払いをしてから、困ったように。

「ええっと……俺も、本当にちらっと見ただけだから……信憑性はないよ?」

「……………」

杉元も、まさか俺がここまでの反応を示すとは思っていなかったのだろう。

「わかつ、た……」

少し、落ち着いた。……そういうことに、とりあえずしておいた。

「……………ありがとう、杉元。色々」

これ以上、彼を問い詰めても仕方ない。必要な情報は得られた。あとは、俺が考えることだ。

俯いて、黙り込んでしまった俺を見て。杉元が、小さく息を吐き出した。

「タマさん……あまり、一人で何もかも抱え込まないでくれよ?」

やんわりと、肩に置かれる温かい手。

「俺だって、できるだけ俺んたの味方でいてやりたいんだ……」

絞り出すような、苦しげな呼びかけだった。

軍帽の下で、澄んだ瞳が揺れている。彼は、俺を憎むことを拒んでいる。

……嫌いになってくれればよかったのに。尾形のように。俺のことで杉元が心を痛める必要なんて、これっぽっちも有りはしないというのに。

「……………」

今度こそ、踵を返してチセに戻っていく杉元の背中を、黙って見送る。

彼がチセの中に消えたのと、ほとんど入れ替わりで。……背後から近づいてくる、静かな足音。聞き慣れたそれに、振り返る。

「百之助」

返答は、いつも通りなかった。

外套のフードを目深に被り、双眼鏡片手に三八式を抱えた立ち姿。明らかに狙撃手モードなその雰囲気と、このタイミング。わざわざ俺たちを追いかけ、観察していたのだろうか。

「……杉元を撃つ気だったの？」

安全装置が解除された小銃に、思わずそんなことを呟いていた。半分冗談のつもりだったが、

「何かあれば、だ」

至極真面目な顔で言つてのけるので、何とも言えない気分になってしまった。

アシ×パの意を尊重する杉元が、今のところ俺を脅したり殴ったり、ましてや殺したりなどするはずもないのだが。それに、あの目。

「……やつは、アシ×パに敵対する人間ならば子供だろうと容赦なく殺すはず」

だから、俺も? ……そうであれば、むしろ安心できるのだけど。思ったが、言わなかった。

「何か余計なことを言つてないだろうな」

余計なことつて何だ。尾形を愛してゐるってデカめの声できつぱり言ったことか?

……あるいは、花沢勇作についての話を聞いていたか。

「大丈夫だよ。……たぶん」

しかし、お互いがお互いを一切信用していないのが面白いな。尾形は杉元が俺を疑って殺しそうだと思っていて、杉元は尾形が俺を裏切つて殺しそうだと思っ  
ているらしい。

相手への不信感が強すぎて、本来の対象である俺を素通りしてクロスカウンターで殴り合っている感じだ。

尾形と、杉元。

そこまで考えて、思考が再び後退する。2人の、花沢勇作についての証言。

——203高地で死んだ。

——怪我をして後衛に運ばれた。

……杉元佐一が、この件でわざわざ俺に嘘をつく理由があるとは考えにくい。

ならば。隣の尾形を、そつと盗み見る。漆黒に塗り潰されたその瞳。何の感情も窺えない。

ああ、ウイルクの殺害阻止についても何も思い浮かんじやないっていうのに。

わからない。

何も。

「……………」

尾形百之助——お前は、一体どこまで、何を俺に隠しているんだ？





## 30話 愛を手放さないでね

今更だが。

この網走監獄潜入作戦において。

俺は、ぎりぎりまでひとつの“賭け”をしていた。

「——谷垣と夏太郎は川岸に用意した丸太船で待機、尾形は山に隠れて何かあれば狙撃で援護……」

最後の作戦会議。機械的に担当を割り振っていた杉元が、そこで顔を上げた。

「……タマさんはどうする？」

まとめてコタン行きとはせず、悩む余地があるらしい。少し、驚いた。確かに戦力になるともならないとも言いがたい、微妙なポジションではある。

それに、杉元は都丹庵士戦での俺の動きを見ている。少なくとも、単純な非戦闘員扱いではないということか。

「コタンで待っていてもいいんだよ？」

優しく呼びかけられる。

さて、どうしたものか。いや、もちろん考えていない訳ではなかった。

避けたほうがいいポジションは、「舎房潜入組」と「援護狙撃組」。前者は、俺がいては脱出の足手纏いになりすぎるため。後者は……まあ、ここでは明言を避ける。

コタン待機組に割り振られても、大した問題はないのだ。どうせインカマツはそこから抜け出して、網走監獄までやってくるのだから。俺は「百之助が心配」とか理由をつけて、それについて行けばいい。

口を開きかけた瞬間、

「この際、戦力は多いほうが良いだろう」

部屋の隅で俯いていた尾形が、おもむろにそう口にした。髪を撫でつけながら淡々と続ける。

「こいつは銃も使えるし、夜目も利く。いざとなれば暗闇の中でも一人で逃げられる」

正論——なのだろうか？

今の俺は、そこに嫌な匂いを嗅ぎ取らざるを得ない。考えすぎだろうか。

明後日の方向を見つめていた尾形が、首を捻る。こちらを見た。違う。その視線は俺を素通りして、

「……潜入のメンバーは、最小限に絞ったほうがいい」

隣のキロランケが、そう呟いた。

「否、『引き継いだ』のだ。」

呼吸が、一瞬止まった。

硬直する俺に、キロランケが柔らかく微笑みかけてくる。作られた笑み。

「援護狙撃は尾形に任せればいいとして……俺たちと宿舎で待機しておくか？」

決定打だった。

俺の首から伸びる鎖。それをしつかり握りしめる彼の姿を、幻視する。……なるほど、根回しは抜かりない訳だ。

抗うほうが不自然か。

固まった唇を、ゆっくり開く。できるだけ、ぎこちなく見えないよう。

「——ああ、」

俺の『賭け』。

——この世界の尾形百之助は、ウイルク殺害に踏み切ることは無いのではないか？

彼がキロランケと手を組んだ理由は、杉元たちも考察していたが。俺の考えは少し違う。尾形はおそらく、「自らは欠けた人間である」という信念に基づいて行動したに過ぎない。

欠けた人間だから。

仲間を裏切っても何も感じないし。人を殺したって罪悪感など覚ええない。

その証明であり、確認。

自らの間違いを間違いだと認識しないために塗り重ねられる、さらなる誤り。

ああ。

——本当は、どこかで期待していたのだ。

尾形はウイルクを殺害するだろう、という前提の中で動いておきながら。

俺がやってきたことは無駄ではないと。

俺は彼を正しく「愛せていた」のだと。

欠けた人間としての証明に己の人生を費やすのではなく、それによって手に入れた満

ち足りた人生を歩んでくれるのではないかと。

——やはり、俺では駄目だった。

代わりにになってやれなかった。

尾形は俺を必要としなかった。

……ばかみたいだ。

「……それで……構わない」

たったひとつの賭け。

俺は、それに負けたのだ。

——尾形がもし、ウイルクを殺す予定ならば。その過程で邪魔になり得る俺には、何かしらの手を回してくるだろうと思っていた。

俺がコタンにいては、勝手に尾形のところへ向かってしまうのを防げない。同じく山で狙撃にあたった場合も、妨害を阻止できる第三者がいないので良くない。

ただ、後者は俺も避けたいところだった。なぜなら、殺してしまえば済む話だからだ。一度死ねば、俺は数時間は再起不能になる。生き返ることを知っている尾形は、目的のためなら躊躇いなく俺を殺すだろう。

閑話休題。

それゆえ、コタン待機と山での狙撃の道を塞ぎつつ。……監視下に置いてきた。今回の作戦の発端である、キロランケの。

この様子を見る限り、彼自身も尾形から何か言われているのか？

——何にせよ。尾形百之助は、キロランケと手を組んで網走監獄でウイルクを射殺する。

もはや、これは決定事項だ。

「……………」

いや。

それなら、それでいい。

俺は構わない。

何もかも、今更の話だろうが。

まだ。まだ、終わっていない。終わらせて堪るものか。こんな場所で。

ぎゅつと、三十年式を抱きしめる。

やらなければならぬことが、ひとつに絞られただけだ。

そして、決行当日。

潜入組がさつそく看守に見つかるとの軽微な（軽微か？）トラブルはあったものの、宿舎待機組の俺たちが何とか鎮火。そのまま宿舎に戻ったのはいいが、

「土方歳三はどこ行った？」

その隙に、土方がいなくなっていた。当然ながら彼を怪しむキロランケだったが。

——カンカンカンカン。

突如、けたたましく鳴り響く鐘の音。明らかに、非常事態だった。

「うるさっ」

「見つかったのか!？」

とにかく、杉元たちのところに向かおう。ということでも部屋を出た途端。  
ドオン。

遠くで爆発音。

この騒ぎ、土方歳三の裏切りとインカマツの裏切りによって起きてるんだよな。この後は彼らに特殊召喚された看守（and 囚人）と第七師団のエイリアンvsアバターが始まる訳で、勝手に戦え！

再び爆発音。

「うわっ！」

「なんかヤバいぜ、」

今度は、かなり近かった。駆逐艦の砲撃がいよいよ網走監獄本体に迫ってきたのだ。

「逃げるぞッ」

外壁への砲撃。そこに面して建つ宿舎はひとたまりもない。降り注ぐ煉瓦の雨から俺たちは何とか逃れることができた。

——が、

「インカマツ!!」

背後で、聞き慣れた声と名前が聞こえた。見れば、倒壊しかかった宿舎から出てきたばかりの谷垣が、その中に蜻蛉返りするところ。

「谷垣たち……川岸からトンネルを通過して来たのか!？」

何かしらの危機を察知したらしい牛山が、踵を返して宿舎へと駆けて行く。俺もとっさにそちらへ向かおうとしたところで、

「タマッ!」

「……!!」

強く腕を掴まれて、阻まれた。——キロランケ。そのまま引つ張られる。

「来いッ、アシ×パが心配だろ!？」

どうしても、俺から目を離したくないらしい。

「……静かに、俺たちだ」

舎房のそばで、土方から逃げ出してきたらしいアシ×パを捕まえることができた。それに加えて、

「シライシ!？」

「……!?! アシ×パちゃん!!」

「杉元は!?!」

脱獄王曰く、自分は抜け出せたが、杉元は未だ舎房の床下に閉じ込められたまま。



「わかった、杉元は俺たちが助けに行く！」

キロランケの鶴の一声に、

「杉元を教誨堂に連れてきてくれ！ 土方歳三がのつぺら坊はそこにいて……！」

「そつちにも行つちやダメだぜ、俺は杉元にアシ×パちゃんと正門で待つように言われた！」

なんか揉め出すアシ×パと白石。こんなことしてる場合ではないと思うのだが。

「……とにかく、早く助けに行かないと」

「ああ。……杉元を助けたら、教誨堂へ向かう！ なんとか正門までのつぺら坊を連れてくる、」

キロランケの背を追って走り出したところで。

「つ、タマ、待って！」

アシ×パに呼び止められる。振り返った先、突きつけられる木製の鞘に入った小刀。

「……これを……杉元に！」

「……マキリ？」

「見せればわかるはずだ……頼んだぞ、」

息を呑む。父親との繋がりを示す、大切なモノ。キロランケではなく、俺に。

「ああ」

頷く。絶対に、渡さなければ。

そして、伝えなければならぬことがある。

——白石は、杉元は床下に閉じ込められていると言ったが。その居場所は、すぐにはわかった。

「あ?!? 杉元?!?」

通風口からクソソコラのように生えた軍帽の頭。うねうね動いてちよつと気持ち悪い。

「キロランケ!? タマさんッ」

「どういう状況?」

「馬鹿かよオマエ、出られる訳ねえだろ!!」

白石は出られたし尾形ならワンチャン出られた。

目の前に膝をついたキロランケは、素手で躊躇なく土を掘り始める。

「どうすんだ、」

「壁と土の隙間に手投げ弾を詰め込む、……タマ、俺の荷物から5個、あとマッチ!」

「うん」

慣れた手つきで即席の穴に手投げ弾を収め、火をつける。後退りつつ俺も下がらせ

て、

「……よし、どこかに身を隠せつ」

「ええ？　ちよつと待——」

ドンツ。

ドリフのコント並みのテンポで、舎房の壁の一部が爆ぜ飛び。

「……………」

ややあつて、穴から黒焦げの杉元がのっそり這い出してきた。普通に逃げ遅れたらしい。そりやそうじや。

「ごほッ」

「のっぺら坊は教誨堂にいる」

「アシ×パが、これを見せろと……………」

懐に入れていたマキリを、杉元に差し出す。アシ×パと長く共にいた彼は、それが何なのかすぐにわかったようだった。

「アシ×パさんのマキリ……………父親が作ったマキリか……………」

それを一度ぎゅつと握りしめた後、

「……………2人は正門で待っていてくれ。白石だけじゃ不安だ」

またしても戦力外通告。脳内白石がクーンと鳴いている。俺よりは役に立つって。

「俺がのつぺら坊を連れてくる。必ず会わせる、とアシッパさんに伝えてくれ」  
自信に満ちた、その琥珀色。

揺らぎのないそれに、何となく悲しい気持ちになった。きつと、これでしばらくお別れだ。杉元。強く、優しい男だった。

「ん、」

手を伸ばして、その耳たぶをつまむ。軽く外側に引っ張って、離れた。

「……頼んだぞ、不死身の杉元……！」

そして。

とうとう、インカマツの先導で正門の上までやってきてしまった。今のところ、何も有効な手は打てていない。

時間がない。

しかし、

「タマ」

ふと、我に返る。

屋根の上、中途半端な位置で立ち尽くす俺に。背後から、穏やかな声がかかっていた。

「……弟のことが心配か？ あいつなら、きっと大丈夫だ」

優しく肩に置かれる手。振り返る。奥底へ微かに青の滲んだ、綺麗な瞳、

「キロランケ……」

その手に、指を重ねて。

輪飾りの揺れる耳に、そつと顔を寄せる。

ああ。タタールの美しき虎よ。愛に狂った望郷の獣よ。——これが、最後だ。

「尾形にウイルクを殺させるつもりだな？」

その囁きに。

「——」

一瞬、間があつた。

その直後、飛び退さるキロランケ。いつぱいに目を見開いて、肩で息をしながら、呆

然とこちらを見上げている。

「な、……にを根拠に……」

この、虚を衝かれた反応。

なるほど。

——尾形は、俺がウイルク殺害を悟っていることまでは読んでいなかったか。

単に、俺が心配から意図せず邪魔をすることを恐れていたただけだったようだ。

くだらない。

「……はあ、」

軽く腕を振って。首を回す。

何だか、どっと疲れた。

俺をじつと見つめたままのキロランケが、震える唇を動かす。いくら予想できなかつたとはいえそんな態度、疑ってくださいと言っているようなものだ。

「……家族なんだろう？ 弟で……それがアシパたちを裏切って……ウイルクを殺すと？」

くだらない——くだらない問いだ。

「ああ」

頷く。彼を横目で見やる。汗が滲んで、引き攣った微笑みと目が合った。

「あいつは裏切り者の人殺しだよ」

そんなこと、俺が一番よく知っている。

そんな当然の話をされたって。今さらすぎて、何の意味もない。息を吐き出す。

「……お前にはお前の意地があるんだろう。でも、俺にも譲れないものがある」

無駄にはしない。させない。

何もかも。俺を作ってきた全てを。キロランケを強く睨みつける。

「ウイルクがそんなにも愛しく、憎いのなら自分の手で殺してみせる……！」  
「っ、！」

短く息を詰めたキロランケが、腰元から何かを取り出した。闇夜に煌めく——マキリ。

勢いよく突きつけられたその切っ先を、落ち着いた気持ちで眺める。

「……手が震えてるぞ」

俺を傷つけるのが怖いのか。その向こう、青ざめたキロランケの揺れる瞳を、ゆっくり見つめ返す。

「あいつにも最初からそれくらい躊躇いがあれば……まあ、もうどうでもいいか」

余計なことを考えるのはやめよう。終わったことを考えるのは。さあ、今度こそ。

運命は、俺自身の手で変えてみせる。

振り返る。屋根の端に足をかける。

息を、精一杯吸い込んで。

「——杉元ッ!!!」

空気が、揺れる。

声を、魂の底から張り上げる。

この騒音で、この距離で、女の声で届く訳がない。否、否、そんなことは考えるな、こ

の一瞬に、俺の、全てを賭けろ！

「狙撃されるぞッ!!」

俺に手を伸ばしかかったキロランケ、その驚愕の顔が、視界の端に映る。

「っ、」

その手を、彼はとっさに引つ込めて。

ぴんと、挙げる。上へと。

「——杉元ニッパが撃たれたッ!!」

初撃。インカッパが叫ぶ。おそらく杉元は動いた。照準がずれた。

「杉元オ!!」

アシッパの悲痛な叫び。

「チ、当たってしまったか……」

それきり、もう誰も叫ばなかった。次を撃たなかった？ 外したのか？

とにかく、俺ができる仕事はもうない。

脱出の準備に移らなければ、

——あ、？

「——っ、う……」

振り返った鎖骨のくぼみに、深々と打ち込まれた短刀。



——キロランケの、マキリ。

ワントンポ置いて溢れ出した血が刀身を濡らす、その光景が悲しかった。

顔を上げる。——持ち主の、凍りついた無表情と目が合った。

違う。そんなつもりはなかった。

今にもそんな声が聞こえてきそうな驚愕の顔に、思わず笑みがこぼれた。口を開く。

逆流した血が唇の端を伝う。構わず舌を動かした。

「そんな顔するくらいなら最初からするなよな」

後悔するな。

一方的な理由でウイルクを殺そうとしたくせに、その過程で邪魔になった俺やインカ

☒マツを手を掛けたことには心が痛むのか？

馬鹿みたいだ。

青褪めたキロランケが、俺に何かを言いかけて——パアン。

すぐ足元の瓦が爆ぜちった。キロランケが俺を離し、即座にある一点を見遣る。

ああ。そこに、尾形がいるのか。

「あッ」

アットウシに包まれた分厚い体を押し返し、勢いに任せて屋根から転がり落ちる。突

き刺さったマキリが抜けて、鮮血が夜闇に散る。

「うぐッ」

なんとか、門の外側には出られたようだが。そこその高さから地面に激突して、衝撃に一瞬息が止まった。意識はある。

どこか骨が折れたかも。

でも、もうどうでもいいのだ。

「……………これは……………死ぬよな、」

咯血混じりの自嘲が浮かぶ。あとどれくらい保つだろう。半ば這うようにして、キロランケが見上げた方角を目指す。

痛い。痛くて苦しい。

「……………」

キロランケは追ってはこない。

俺は死んだと見て、今度こそ自分でウイルクの始末をつけに行ったのか。インカ☒マツたちが何も言わなかったから、まだ生きているはずだ。

これも希望的観測？

わからない。

「っ、……………」

手足の感覚がない。

吐き気と頭痛がひどい。寒い。震えが止まらない。

「……………あ、……………」

最後の灯が、消えた。

もう、前に進めない。

「げ、え……………」

喉の奥から熱した鉄が迫り上がってくる。逆らわず地面にぶち撒ける。

——ああ、死ぬ。

それを単なる悲観ではなく、絶対的な事実として受け止める。

結局、尾形のところまで辿り着けなかった。彼は原作通りウイルクを撃ってしまったのだろうか。

「……………」

ふと、気づく。

地面が、微かに揺れている。

砲撃による地鳴りではない。誰かが、地面を蹴ってこちらに近づいてきている？

はっ、はっ。短く、断続的な吐息。

走っている。……………それが、俺の目の前で止まった、

「タマ、」

整わない息で名前を呼ばれる。慣れ親しんだ、あの響きで。

「…………おが、た…………」

腕が伸びてきて、慎重な手つきで抱き起こされる。冷えた体が覆いかぶさってくる。強く、強く抱きしめられた。鼻先を埋めた尾形の外套は、血と硝煙の匂いがした。

五感の中で、聴覚だけは最後まで残る。

彼の匂いもやがて感じ取れなくなり、もう何も見えなかつたが、乱れた呼吸音だけは聞こえる。櫓から走ってここまでやって来たのだろうか……俺のために。

「…………キロランケ…………」

尾形の呻くような低い呟きを最後に、意識は闇に溶けた。

「…………舟を出せ。逃げるぞ」

アシシパと白石が発見した、笹藪に隠れるようにして浮かぶ予備の舟。

キロランケがやってきた直後に現れた人影、その姿に、白石がぎよつと目を剥いた。

「——おいおい、どうしたんだよタマちゃん……!」

現れた尾形の腕に力なく抱かれる、細身の体。白い手足が、モノのようにただ揺れている。

次に青ざめたのはアシ×パだった。

「狙撃に……つ、気づいたから、まさか、」

「……気を失っているだけだ。命に別状はない」

片腕にタマを抱えたまま、器用に舟底へ滑り込んでくる。腕の中、安らかに目を瞑るその頬へ、尾形が無表情を擦り寄せる。

「すぐに目を覚ます」

その着物の袷目が、普段より僅かばかりはだけていた。

細い喉から、鎖骨の辺りまで、発光して見えるほどに白い——傷ひとつないなめらかな肌が、夜の空気に晒されている。

「……………」

アシ×パも白石もそれぞれではなかったが、『下手人』はそうではなかった。

すぐに「気づいた」キロランケに、尾形が無言で流し目をくれた。冷たい眼差しだった。肩を抱いていた手が、さりげなくその袷目を正す。

それから、

「……谷垣源次郎は、鶴見中尉たちに捕まった」

「っ、!?!」

淡々と、機械的な報告に、タマの頬を撫でていたアシヅパが飛び上がる。

「アチャと杉元は!?!」

「近づいて確認したが……杉元は射殺。ウイルクは……刺し殺されていた」

響き渡る、少女の慟哭。

泣き崩れるアシヅパの体を、白石が慌てて支える。

必死にアシヅパを励ます白石。しかし、キロランケと尾形の目下の関心は、残念ながらそこにはなかった。無言で見つめ合う。

——否、睨み合う。

「……………」

2人の男の想いを乗せて。舟はゆっくりと、網走の川を流れていく。

## 31話 メコオヤシ

頭上で、何かの鳴き声が出ている。

鳥……波の音？ 海鳥だろうか。これは何の鳴き声だろう。聞き覚えがあった。

ああ、そうだ。

ニヤアニヤア鳴くのは、

「……………あ、？」

——目が覚めた。

揺れる青い瞳が、俺を見下ろしていた。その背景で旋回する、あ、ウミネコ、

「っ、タマっ！」

「ぐえ」

「目が覚めたか！」

碧眼の主に絞め殺す勢いで抱きつかれて、ぼやけていた意識が一気に覚醒する。地面が揺れる。波の音がする。いや、これは舟なのだっけ？

「アシ×パ……？ 白石、」

ぐりぐりと頬に押しつけられる艶やかな黒髪と、その後ろで俺を覗き込む坊主頭。

……網走監獄を脱出したのか。

ぼんやりと思つた。尾形は、あれから俺の死体を回収してくれたらしい。その事実  
に、純粋に安堵する。

第七師団に捕まることも想定はしていたが、結果的には“怪我の功名”だったと言え  
るかもしれない。まあ、怪我では済んでいない訳だが。

小さな手がぺたぺたとあちこちに触れてきて、我に返る。心配そうな表情。

「大丈夫か？ どこも痛くないか？」

「うん……大丈夫だよ」

「もお〜全然目を覚まさねーから、心配したぜえ〜」

辺りがとつくに明るくなつて見えるのを見るに、俺は一晩ぐつすり眠つてしまつていた  
らしい。周りは眠れぬ夜を過ごしただろうに、我ながら暢気なものである。

アシ×パの髪を撫でながら、機械的に唇を動かす。

「杉元とウイルクは、」

重苦しい無言だけが返つてきた。それが答えだった。アシ×パが、強く体を押しつけ  
てきた。

「そうか……」

結局のところ。



尾形は、ウイルクを殺さなかった。

そう見ていいだろう。俺がキロランケに殺されたのを見た尾形は、ウイルクより杉元佐一より、俺を優先した。

「……………」

抱きついてくる体を抱きしめ返しながら、何気なく辺りを見回す。大海原という雰囲気ではない。周囲を取り囲む色とりどりの、

「舟……………」

「港に着いたみたいだぜ」

港。——ここから、樺太行きの船に乗り換えるのだったか。

そんなことを考えながら、再び口を開く。不自然にならない程度に会話をしておかなければ。

「これからどこに？」

「…………樺太に向かう」

背後から返答が来た。首だけを捻って振り返ると、船尾に腰掛ける尾形と目が合った。

…………少しは驚くべきだっただろうか。声を掛けるタイミングを逃したのか、結局はそっぽを向かれてしまった。

船首で前方を見据えるキロランケは、無言を貫いている。その後ろ姿を目にしてなお、何の感情も湧いてこなかった。

腕の中のアシ□パに視線を戻す。彼女は、微かに震えていた。

「……………アチャ……………杉元……………」

——実際のところ。

ウイルクを守り、杉元とともにアシ□パの下へ辿り着くことも、俺ならばできたのかもしれない。少なくとも100%不可能ではなかった。

ただ、そうしなかっただけだ。

ウイルクの生死は俺にはどうだっていいことだから。彼が生きていると不都合だから。

杉元佐一のことだって。守ってやりたかったけれど、当たってしまったものはしょうがないから。……………本当に？

「……………」

瞼を閉じる。

アシ□パ。杉元佐一。

優しい2人の期待を裏切り、踏み躪って、俺は今、この場所に立っている。

ああ。茨城のお祖母様。お祖父様。結局、短い置き手紙しか残してやれなかった。尾形百之助を救おうとする度に、俺は俺を愛してくれた人間たちを傷つけていくことになる。今、漠然とそう確信した。

俺は優しい人間などではない。

「……大丈夫。杉元は絶対に大丈夫だから。元気を出せ」

肩を叩いて、ゆつくり体を離す。

こんな人間の胸で泣いちゃいけない。涙は、杉元佐一と会う時までにと取っておけ。立ち上がった白石の後を追う。

舟底で座り込んだままのアシ×バに、微笑みかける。手を伸ばす。

「行こう……アシ×バ、」

波止場で、女が海を眺めている。

直立不動。水平線を見据えたまま、微動だにしないその立ち姿の中、黒鳶色の尾と、それを結ぶ黒いリボンだけが海風に靡いている。

「……タマ、」

呼びかけに、ゆっくり振り返る。

こちらの姿を認めて、漂白された無表情に薄い笑みが乗った。悪魔の微笑みだった。キロランケ。女が眩いた。

怯えるどころか、警戒する素振りさえ見せない。それがまた不気味だった。

「交渉は決裂したのか？」

淡々と、抑揚の薄い囁き。素人が台本をただ読み上げているような、感情が不自然に抜け落ちた声音だった。

張りつけたような微笑だけがこちらの様子を窺っている。獣のように。

「知っていたのか、」

「何を？」

それでいて、冷静にシラを切ってくる。

何を、どこまで把握しているのか。光さえ飲み込む朔月の瞳。いくら覗いても、底どころか中身のひとつも見えそうにない。

血は繋がっていない。尾形の言葉を思い返す。しかし、ぞっとするほどよく似ていた。

「……あの時……」

マキリを突き立てた感触を、確かに覚えている。溢れ出す赤色を。

「……………」

喉元を刃物で刺されて生きている人間がいるものか？ 否、そんな誤魔化しはやめよう、こいつは。闇夜に輝く傷ひとつない肌を思い出す。

女はじつとこちらを見ている。

瞬きさえしないその静寂の佇まいには、生命の息吹が感じられない。待っているようだ、と思った。『決定的な言葉』を口にするのを。

「——欠けた人間、」

無言のまま、どれだけの時間が経ったのか。

薄い唇が、おもむろに動いた。

それだけを呟いて。こちらを見つめていた瞳が自然に逸らされ、再び凧いだ海に向き直る。

「愛ある両親から産まれることができなかつた人間は、何か欠けたまま育ってしまうのではないか？」

何の脈絡もない発言だった。

「今までの何とも符合することがないその問いに、思考回路が硬直する。」

「……………は、？」

「あいつが言っていたことだよ」

あいつ——尾形百之助。とっさに気づいたが、随分と冷ややかな態度だ。家族にする扱いはとても思えない、突き放した口ぶり。

「欠けた人間……欠けた人間、」

俯いたまま、壊れたように繰り返す。細い指先が執拗に唇をなぞる。

やがて、顔を上げる。

「尾形百之助は自身が欠けた人間であるという証明をしようとしているに過ぎない」

無表情のまま、はあ。深く息を吐き出した。

憂いているみたいだな、と思った。

ぐるりと、柔らかみのない動きで頭が一周する。崩れた前髪が顔にうちかかったままなのも構わず、再び話し出す。

「……自分は実は第七師団の脱走兵などではなく……中央のスパイであり、そもそも鶴見中尉とは相反する存在だった……中尉を監視し、その目論見を阻止することが真の目的だった……」

「っ、」

息を呑む。細部は違えど、その眩きは尾形百之助が語った内容によく似ていた。

尾形が話したのか。

部外者の彼女に？ 有り得ない。

ならば何故。インカマツは鶴見中尉と繋がっていた。彼女はどこからその情報を得た？

ただ、当の彼女はそれ自体にはさして興味がなく。また、その出処について語る気もないようだった。瞳孔だけがぎよろりとこちらを睥睨する。

「そんなものはただの方便だ」

くだらない。吐き捨てて、続ける。

「己を欠けた人間だと思い込んでいるから、それに相応しい道を歩もうとしているだけ。仲間を裏切り——殺人に手を染めても何も感じない、罪悪感など覚えのない存在……」

「あの状況でも、ウイルクと杉元を殺すことは可能だった。関係のない俺など無視して、狙撃を続ければいいだけだった」

でも、尾形は怒ってしまった。

その低い呟きには、どこか怒りが滲んでいるような気もした。それが、ゆつくりと膨らんでいく。

「『大切』を壊されたことが許せなかった。自らの証明を、他でもない自分自身の手で台無しにした。……二度も」

恐ろしいほど落ち着いていたはずの女は、今やその内側に静かな憤りをたぎらせて、

じつと水面を睨んでいた。きつく握り締められた拳が微かに震えていた。

それから、しばらく無言が続いて。

女が息を吐いた。その横顔が、一瞬で冷え切り。もとの風いだ無表情に戻る。

「やはり欠けた人間などでは無いのだ」

解かれた指先が、落ち着いた仕草で前髪を撫でつける。『彼』のように。

「馬鹿げていると思わないか？」

穏やかに問われても、何も答えられなかった。

それどころか、何を思うべきなのかもわからなかった。その感情に寄り添うには、女が抱える情動は異質すぎた。

聞きたいことは山ほどあったはずなのに、今や踏み込むことさえ恐ろしかった。

無言の返答に、女が鼻を鳴らす。興奮めと言わんばかりの冷たい響きで。

「……尾形は……俺に起きたことを受け入れていたはずだ。どうしてだかわかるか？」

その囁きに、尾形百之助のあの眼差しを思い出す。純粹な敵意だけが滲んだ黒の瞳。

尾形には、彼女が蘇ったことなどはもはや瑣末事だったのだろう。今ならわかる。男はただ、『大切』を壊されたという事実に憤っていた。……それは、何故？

「試したからだよ、何度も」

こちらが何か言う前に。女が、どこか愉快そうな響きでネタバラしをした。



——試した。何度も。

その意味を理解した瞬間、背筋が凍りついた。対照的に、女は静かに目を細めて。  
「……言っただろう？ 裏切り者の人殺しだと」

薄つすらと、微笑みを浮かべる。

美しい女だった。白磁の肌、吸い込まれそうな瞳、通った鼻筋、形の良い唇。どこを取っても過不足がない。なさすぎて、作り物じみていた。

精巧な人形が、人間のふりをしている。

そう言われても納得のいく、完成し尽くされたその佇まい。不気味だった。考える。

——彼女を刺しさえしなければ、何もかも思い通りに事は進んだのだろうか？  
無理だろうな、ととっさに思った。

彼女が尾形百之助の家族として存在している時点で、この結末は避けられなかった。なせだかそんな気がしてならなかった。

「タマ」

——背後から、声がした。

「っ、」

とっさに振り返る。瓜二つの漆黒の瞳が、こちらを真っ直ぐ見据えていた。

ただ、それも一瞬で。現れた尾形百之助は、こちらなどいないものかのように隣をすり抜け、彼女のもとへと向かう。

「……何してる。あいつらが探してたぞ」

さりげなく間に入るように立ったその背中越しに、女の微笑みが見えた。

暖かく柔らかい、人間らしい笑顔。

作られた、微笑。

「ごめん、百之助」

尾形、と冷たく呼びつけていたことなど嘘のように、愛しげにその名を呼ぶ。尾形の横顔が、微かに温んだのが見えた。

そのまま連れ立って、離れていく。並んだ2つの背中が遠ざかっていく。

それを、黙って見送る。

「……………」

黒いリボンが、海風に揺れている。

このタマはメコだ。

初対面時のアシ×パの発言が頭をよぎる。あの時は冗談だと思つたし、事実、そうだったのだろう。彼女は何も知らないのだ。

どうして猫なのだ、と聞いてみたことがある。髪飾りが耳のようだろう、とアシ×パ

は無邪気に笑って言った。

猫。何となく、腑に落ちる。

けれど。猫は猫でも、ただのイエネコなどではなく、

「……メコオヤシ……」

ウイルクから聞いた昔話。何もかもを喰らい尽くし、奪い去る化け猫の話。

あの「猫」は、何を喰らおうとしているのだろうか。今はまだ、わかりそうもない。

「尾形……お前は一体、何に魅入られているんだ……？」

その微かな呟きは海風に攫われて、誰の耳にも届くことはなかった。

「あ……タマちゃん」

港の隅でしゃがみ込む白石とアシパに気負いなく近づいてきた女は。その隣に腰掛けることなく、無言で2人を見下ろしている。

落ち着き払った眼差しに何となく気圧されつつも、白石は、ずっと温めていた疑問を彼女に対しても口にした。尾形とキロランケがいる中では出せなかった内容だった。

「あのさ……あの時、気づいたんだろ？ どういうやつだったとか……見えた？」

アシパちゃんは見えなかったって。

言いながら、隣の少女に横目をやる。俯いて、明らかに塞ぎ込んだその姿。こんな様子を見るのは初めてだった。

タマは、しばらく無言でアシ<sup>△</sup>の姿を眺めていたようだったが。やがて。

「……私は夜目が利くし、銃についても多少は詳しいから」

底のない瞳で白石を見つめながら、淡々と唇を動かしていく。

「もともと……そういう、遠方からの狙撃に警戒しておこうと思っていた。あの時は、敷地の外側からこちらに銃口を向けている人影らしきものに気づいて、杉元に忠告したつもりだった。私が見たものが、実際に犯人だったのかまではわからない」

焦りも怒りもない、隙の見えない響き。しかし、白石にはその声音以上に、気にかかるところがあった。

敷地の外側から銃を向ける人影。

外に下手人を探すまでもなく、該当する人物が1人、すぐそばにいるではないか。

「……………それって、……………」

とつきの眩きを、やはり反射的に飲み込んだ。続きは、口には出せなかった。

タマはその挙動不審な仕草をじっと観察していたが、白石が無言で俯いたところで、顔を上げ。

「ウミネコって食べられるのかなあ」

にやあ、にやあ、と鳴きながら青天井を旋回する海鳥の群れを見て、そう呟いた。それだけだった。

網走監獄近郊の病院にて。

——尾形百之助に頭部を狙撃されてなお、意識を取り戻した杉元佐一が、谷垣を通して得られたインカマツの報告を聞いていた。

ウイルク射殺の際に不審な動きを見せたキロランケを問い詰めた彼女は、逆上した彼にマキリで腹部を刺されて重傷。しかし、キロランケがウイルクを殺すに至ったと思しき理由、そして、彼に連れられたアシパが向かったであろう場所については、既に彼女の中では答えが出ていたのだ。

キロランケたちは樺太に向かった。

谷垣は、そこで口ごもり。

ややあつて、ぎこちなく話し出した。

「……………それと……………尾形タマのことだが……………」

未だ、行方知れずの「彼女」についての情報。目覚めた杉元佐一が、アシ×パの次にその居所を尋ねた女。

「キロランケは……屋根の上から突き落とした彼女について、『殺すつもりはなかった』と言っていたと……自分を刺したマキリは、既に血で濡れていた、とも……」

インカ×マツは、発砲の際の合図だけではなく——彼と揉み合った末、屋根から落下した尾形タマの存在を見咎めて、キロランケに詰め寄ったのだ。

「……殺した？」

谷垣が再び口をつぐんだ部屋の中。杉元の呟きだけが、やけに響いた。

殺した。その発言を否定できる根拠は、この場にいる誰も持ち合わせてはいなかった。

「タマさん」

ぼうつと、宙を見つめる杉元がその名を呼ぶ。応える名の主は、ここにはいない。

「杉元、」

見かねた谷垣が声をかけたが、杉元は一度俯いて。決心したように顔を上げ、

「……これで確信が持てた。尾形はキロランケと結託してウイルクを殺すつもりだった。タマさんはそれに気づいた……いや、」

耳に触れた冷たい指の感触を、覚えていた。彼女は、最初から何もかも。

「……気づいていた……」

そこで、黙って着衣を整えていた軍服の男——鶴見が、ゆったりと口を挟んできた。

「尾形タマ……尾形上等兵から話を聞いてはいたが、まさか北海道まで来ていたとは」

網走監獄を攻め落とし、杉元、谷垣、インカマツを捕らえた第七師団の頭。傷口を隠すホーローの覆いが、射し込む朝陽を受けて鈍く輝いている。

杉元はその発言に無反応だったが、谷垣は微かな驚きを見せていた。谷垣たち一兵卒は知り得なかった存在だったが、鶴見は既に尾形自身の口から耳にしていたのだ。

「あ……それで、インカマツは結局、タマのことは見つけられなかったと……」

ふうむ。鶴見が鼻を鳴らす。

「遺体の回収はまだ始まったばかりだからなあ……そのうち見つかるやも、」

「……どちらにせよ……尾形百之助が既に運び出したはずだ」

「ほう？」

鶴見の呟きを遮って、杉元が淡々と語り始める。尾形が、損にも得にもならなさそうな身内の死体を回収した。意外だったのか、鶴見が小さく驚きの声を上げた。

「狙いを外したのだからさらに撃ち込んでこなかったのは、現場を見ていたからだろう。尾形はその時点で狙撃を放棄して、タマさんのところに向かった……」

仮定などではない。杉元にはそれが事実だという確信があった。

「……あいつがタマさんを傷つけたやつを許すはずがねえ。尾形とキロランケの交渉は既に決裂していると見ていい」

そこで。鶴見に呼ばれてきたのか、無言で部屋の隅に佇んでいた将校服の青年が、小さく鼻を鳴らした。

褐色の肌が眩しいその薩摩隼人——鯉登少尉が、嘲るように目を細める。

「……あの尾形百之助が？ 信じられんな」

「見てりやわかる」

きつぱり言い切られて、鯉登がキエ、と小さく猿叫を漏らす。

尾形と彼の折り合いの悪さは、杉元も旭川で実際に目にしていた。杉元自身、尾形と気が合うなどと思ったことはない。

しかし、これは事実なのだ。

鼻白んだ顔の鯉登をよそに、杉元は谷垣の顔を真っ直ぐ見上げて。

「タマさんは絶対に生きてる。あの人だつてたいがい不死身だ。俺は見てきたからよく知ってる」

「……杉元、」

「インカマツにもそう伝えておけよ」

ああ。明るく頷いた谷垣だったが、それでは済まないのが鶴見一派だった。情報が増



えたことにより見えてきた状況は、今まで以上に不透明になっている。

「なるほど。彼女の存在で話が複雑になってしまったな？ お前の話だと、尾形は既にキロランケを殺している可能性もある」

「タマさんが生きて……白石とアシ×パさんもいるなら、ひとまずトラブルは避けるはずだ。ただ、時間の問題だろう」

もしも、尾形百之助がキロランケを殺し——アシ×パたちを連れて逃げ出したとしたら。

その行き先は、もはや誰にも読めない。

「急がねば」

「金塊の謎を解く鍵」の行方を案ずる鶴見一派とは対照的に、杉元佐一は「アシ×パ」と名付けられた、優しく賢いアイヌの少女のことを考えていた。そして、彼女が愛した1人の猫のことを。

「とにかく……尾形は一発ぶん殴るくらいはしてやらねえと気が済まねえな」  
握りしめたマキリには、2人分の体温がまだ、残っているような気がした。

## 32話 スチエンカ!!

来たぞ樺太。大泊港。

「……………」

「……大丈夫? タマちゃん」

船酔いしております。

今まであんまり意識してなかったけど、俺って乗り物酔いしやすいタイプなのかな。俺っていうか、この体の話だけ。単に死に戻ったばかりでフル充電じゃないだけか。

「……、これからさらにどこへ向かうんだ?」

「キロちゃんは北に向かうって……尾形ちゃんみたいな顔色してるけどマジで大丈夫?」

シライシの優しさが痛いぜ。

もどすほどの量を食べていけないので、吐いたりはしない。尾形が気を使って背をさすりに来てくれたほどなので、よほど酷い顔色なのだとは思う。

グロッキーな俺（とその介助をしてくれる白石）をよそに、キロランケとアシ $\square$ パは真面目な顔で何か話し合っている。

「この辺りには樺太アイヌの集落がある」

「樺太アイヌ……」

「情報を集めながら進もう」

で、土地勘があるらしいキロランケの案内で辿り着いた樺太アイヌの集落。

こっちは既に雪が降りまくっているの、進むのが普通に大変でした。

「犬がいっぱい」

「リュウを思い出すねえ。ね、アシ×パちゃん？」

「……………」

気遣い白石に雑談を振られたアシ×パ、俺の服の裾を掴んだまま無言。無視されてクウーンになってしまう白石。犬が増えた。

それをスルーして、たくさんのアイヌ犬と、それを世話する樺太のアイヌたちをぼんやり眺める。

えっと。確か、ここで会うのは、

「あなたたち……アイヌ？ どこから来たの？」

——鈴を転がすような可憐な囁きに導かれ、振り返った先、立っていたのは。

見慣れない帽子と、どこか見覚えのある衣装に身を包んだ幼い少女。艶やかな黒髪のポブカツトの中で、大きな瞳が星のように煌めいている。

「わたし、エノノカ。会えてうれしい」

男3人が聞き込みだか話し合いだかをしている間に、俺はアシ□パとともに、エノノカの家で過ごさせてもらうことになった。

塞ぎ込んだままのアシ□パの身を案じた白石の粹な計らいである。俺は保護者粹。

「はい。これ、フレップの塩漬け。わたしの名前もフレップから取ってる」

ことん、と目の前に置かれる、陶器の椀一杯の……何だこれ。爪の先程度の小さな赤い木の実が、何か液体に浸かっている。

「フレップ……」

「樺太では夏にたくさん採れる。お酒にしたりもする」

いや、なんかどつかで見た覚えあるな。そもそも原作ではきちんと紹介されていたはずだけど。何だったか……コケモモだっけ？

「おいしいけど、たくさん食べない。ゲーするから」

「食べていいのかわ？」

「どうぞで」

促されるまま、椀に指を伸ばす。だって箸とかないから。素手で取って、口に入れる。

「……うん。ヒンナ」

なんかこう……うん。食レポの語彙力がなさすぎて上手く説明できない。強いて言うなら、カリカリ梅に近いかもしれない。

北海道のきみまる杉元は、これについて何と言っていたっけな。

「おいしい?」

「うん」

「よかった」

ふっくらほっぺでにこのエノノカ。かわいいね。そのまま健やかに育ってくれ。

普段はこうなんだけどねえ、と隣で俯いたままのアシ×パを見やる。放っておく訳にもいかないので、

「アシ×パも食べてみる?」

つまんで口元に持っていくと——食べた。なんか動物に餌やりしてる気分。これが尾形だったら無理矢理口に押し込んだ。

アシ×パはしばらくそれを真顔で咀嚼していたが、やがて、自らフレツプに手を伸ばして、口に運び始めた。

無言でもぐもぐ。椀の1/3を空ける勢いで食べ続けた後、ようやく顔を上げた。

「……ヒンナ、」

ちよつと笑つて紡がれたその言葉に、エノノカもほつとしたような笑顔を見せる。それはいいのだが、

「アシ×パ、ほつぺたについて……本当にめちやくちやついてる」  
「ん」

フレップが赤いから人食つたみたいになつてゐるぞ。今に始まつたことじゃないが、どういう食い方したらこうなるんだ？

手拭いで清めてやると、俺のほうを見上げて表情を緩め、

「ありがとう……タマ」

……その眼差しに、なんとも言えない気分になつた。

本当は、これは彼女一人で立ち直るべきことなんじゃないか？ 俺は杉元佐一のように、ずっと彼女とともにいる努力をしている訳でもないのに。肝心な場面では寄り添つてやれないかもしれないのに。

俺が悶々としている間にも、少し元気を取り戻したららしいアシ×パは、

「父から樺太にいるアイヌの話は少し聞いていたけど……こうやって実際に会うのは初めてだ。色々違いがあつて面白いな」

フレップを頬張りながら言う。

「これも初めて見た」

「北海道には無いんだ？」

「少なくとも私は知らなかった」

ふむ。アシ×パは高山に棲むナキウサギのことも知らなかったしな。もしかすると、コケモモも彼女が見たことがないだけで、北海道にも自生しているのかも。

「マキリの形も違う」

「マキリ？」

エノノカは怪訝な顔をしていたが、アシ×パの指が腰に下がった小刀を指しているのを見て、合点がいった顔をした。

「これ……エピ×ケ」

わざわざ腰紐から外して、俺に渡してくれる。わりとデカイ。湾曲した鞘に刻まれた、精巧な模様。先端の一部がくり抜かれて空洞になっている。

そもそもアシ×パのマキリさえまじまじと見たことなどないので、俺には明確な違いがわからないのだが。皆さん器用ですね。

「死んだオナハがわたしに作ってくれた」

「っ、」

とっさに息を呑む。確かに、この家には彼女が“ヘンケ”と呼ぶ老爺（祖父？）しかおらず、両親の話が出てきたこともなかった。

まさか、既に故人だったとは。明治に生きて四半世紀は過ぎたものの、俺はまだまだ平和ボケしている。

「わたしのオナハとウヌフ、海で死んだ……ヘンケ優しい、セタいっぱい、わたし幸せでも時々、すごく悲しい」

悲しい時もある、と言いつつ、エノノカはどこまでも落ち着いていた。既に自身の力で痛みを乗り越えた者の目をしていた。

オナハとウヌフ——話の流れからして、彼女の父と母のことだろうか。アシパは「アチャ、ハポ」と呼んでいたが、やはり樺太アイヌは言語も北海道とは違うらしい。

そこでエノノカはアシパを見て、

「あなたのオナハとウヌフは？」

無邪気な問いに、目を瞠ったアシパが小さく肩を震わせた。「あんなこと」があったばかりで、さすがに冷静ではいられなかったらしい。

しかし、そんな事情は知らないエノノカは興味津々な様子で、

「あの男の人？」

「いや……キロランケニパは違うんだ、」

「ふうん。じゃあ、ユポ？」

悪意ない追撃に、アシパの顔色が悪くなっていく。最終的に、俯いてぎゅつと瞼を



瞑ってしまった。膝の上で固く結ばれた拳が震えている。

「私、……私は……」

元の様子に逆戻りしてしまったアシ□パに、さすがにエノノカも自身が踏み込み過ぎたことに気づいたらしい。はつとして、しよげたように身を引く。

「……ごめんなさい、嫌なこと聞いた」

「いや……大丈夫だ」

まだ癒えない生傷の痛みを感じつつも、似た境遇ながらも冷静なエノノカを見ていた彼女には、何か思うところがあつたのか。

ゆるく頭を振った後、顔を上げる。その表情には、若干ぎこちないながら、既に笑みが宿っていた。

「……エノノカはしっかりしているな。私も、乗り越えなければ」

空つぽの腰元に手を当てる。本来あるはずの小刀は、今はそこにはない。

「私のマキリは……今は、とても大切な人に預けているんだ。会ったら、返してもらおう」  
「そう……」

アシ□パの柔らかい呟きに、エノノカもようやく表情を緩めた。微笑んで、

「アシ□パ、絶対会える。わたしも応援してる」

「……ありがとう。エノノカ」

笑顔を向け合う幼女2人。

「イイハナシダナー、と思いつながらフレップをつまもうとした先。あれ。もうない。

「あー！ タマ、フレップ食べすぎ！ ゲーするよ！」

「船酔いが治ったばかりなんだから、無茶するな！」

「……………」

……………うん、俺なんかよりもよっぽどちゃんとしてるよな。

「……………え、刺青囚人？」

次の目的地は、ロシア人の農村。

キロランケから普通に避けられている（あたりまえ体操）俺にはその理由までは降ろてこず、仕方なく白石由竹に聞いたところ。上記の答えが返ってきた。

「うん。どうも、北海道から逃げてきた囚人が、その村の辺りに潜伏してるんじゃないかって」

あの平和そうなコタヌで、一体どういう聞き込みをしたらそういう危険な情報が手に

入るんだか。

「心当たりがあるのか？」

「うーん……情報が少なすぎてなあ」

「……………」

俺には覚えがあつた。

樺太先遣隊とスチエンカ（あとバーニヤ）を繰り広げた瞳の綺麗な異常者、岩息舞治。俺がそんな情報をとうの昔に得ていることなど知る由もない白石は、まだ考えている。

「外国人は一人いた気がするけど、別にロシア人つて感じの風貌じゃ……」

「とにかく、あなたが顔を見ればわかるはず」

どちらにせよ、ここで俺たちが岩息の刺青を手に入れることはない。その必要もないのだ。あとは先遣隊に任せておけばいい。

「……………ま、それもそうだな」

俺の一言に軽く唇を尖らせた白石が、樺太の空を仰ぐ。

……損な役回りばかりやらせてしまっている気がするな。俺のことも薄っすら怪しみつつ、それでも仲間として心からその身を案じてくれている。優しい男だ。

で、件の農村についたところで。

「情報集めはあの2人に任せて、お茶しようぜ〜？」

傷心のアシシバはともかく俺、樺太に来てからマジで何もしてなくてワロタ。

白石は「お茶」と言ったものの、入ったこの店はどちらかといえど酒場としての役割のほうが強いらしく、中は昼間なのにアルコールの匂いで満ちていた。ただ、それ以外を出していないという訳でもないようで、身振り手振りで頼んだら普通に紅茶が出てきたが。

「あれ何？」

「самовар」

「お湯沸かしてるのかね」

サモワ………なんとか。金属製のウオーターサーバーみたいな見た目の器具だ。

頭頂部が若干寂しい男店主が出してくれた紅茶を、3人で飲む。ガラスのコップが細工の施されたホルダーに入っていておしやれ。

無言のティータイム、口火を切ったのは発案者である白石だった。

「……今はまだ第七師団がいるだろうからさ。ほとぼりが冷めたら、遺体がどうなったか探そうよ」

あんまりくよくよしてたら、体に良くないぜ。

なぜかオシヤンに小指を立てながらカップの茶を啜る白石。ちよつと鬱陶しい。アシシバ、原作通りここで弱音を吐くかと思いきや、

「……ああ。あのコタンで、エノノカと話して……私も前を向かなければと思つた」  
お。何だかさつそく立ち直りかけている。

願わくば、彼女の中では「俺のおかげ」などではなく、全てが「エノノカのおかげ」であつてほしい。

「そうだけ。アシ×パちゃんの父ちゃんだつて、きつと何か事情があつたんだろ。もしかしたら真相を知つてる人間がどこかにいるかもしれないし……アシ×パちゃんだけでも味方になつてあげなよ」

「あつ」

「……そうか。……そう、だな」

猫舌加減を見誤つたゆえのノイズが入つてしまいましたが、無視してください。

「それと……杉元のことだけどきあ」

自らの坊主頭を撫でさすりながら、白石が空元氣と期待の入り混じつた声で呟く。

「あいつ、まだ生きてんじやねえかなあ？ 根拠はまったくないけど……俺は、あんな野郎が簡単に死ぬとは思えないんだよな」

そうであつてほしい、と願う声音だつた。

アシ×パのためと——自分のために。杉元に向けられた愛を、改めて噛み締める。

そして、言われた彼女は。

「……何言ってるんだ、シライシ！ 杉元が死んでる訳ないだろ、あいつは『不死身の杉元』だ！」

ぱつと顔を上げ、明るい笑みとともにそう言い放つ。いつもの調子を取り戻し始めているアシ△パ△に、白石も安堵の笑顔を見せた。

「……うん。私もそう思う」

杉元佐一。あれから色々考えたが。

……彼が本当に死んでしまっている、という可能性も、ゼロではないのだ。杉元は俺の声を聞いて、初撃を避けようとした。その結果、弾に当たってしまった。

それがどういう位置で、どう当たったのかを俺は知らない。原作通り脳みそが削れるくらいで済めばいいが、実際はもつと深刻かもしれない。

何が起こってもおかしくはない。

俺たちの旅は既に手遅れかもしれない。

だから。でも。

「……………」

杉元佐一は生きている。

根拠は無い。しかし、生きているはずだ。彼は不死身の杉元だから。

ただ、それだけだ。

「ああ……杉元もきつと、タマに会いたくて寂しがつてるはずだ」

俺の同意にアシキが目を細めて、そう呟いた。——寂しがつている。

「……、そうかな……」

賢い杉元は、俺が尾形の裏切りを見抜いていたことに、既に気づいているだろう。杉元が生きていたとして。

彼は俺を許さないかもしれない。

「——ここにいたか、」

呼びかけられて、我に返る。

聞き込みから戻ってきたらしいキロランケと尾形が、俺たちを見下ろしていた。

「……あー。おかえりい、キロちゃん」

白々しい、暢気を取り繕った笑み。本当に、嫌な役回りだよな、白石由竹。

ああ、と応えたキロランケは、こちらに顔を寄せ、囁く声量で。

「例の囚人の話だが。……ここでやってる『スチエンカ』には来るかもしれないと」

出たスチエンカ。ラッコ鍋とバーニヤの次くらいに有名なやつ。この漫画ちよつと男キャラの露出が激しすぎるだろ。

「スチエ……なんて？」

「スチエンカ」

当然ながら耳慣れない白石に、尾形が淡々と繰り返す。

「正式名称は『スチエンカ ナ スチエンク』。日本語で『壁 対 壁』という意味の、ロシアの伝統的な競技……」

「え？」

「要するに、男同士の殴り合いだ」

んまー、野蛮。

俺が前世通りの性別だったらこういうの（スチエンカ）とかああいうの（ラッコ鍋）に巻き込まれていたかと思うと……まあ、一概に女になったのが悪いとも言えないよな。

軟弱と言われようが、俺は男同士の肉体言語（意味深）は別に好きじゃないもんでね。

「殴り合い……」

「……………」

そして何だか雲行きが怪しい。

……え？ やるのスチエンカ？

ていうか、やってたっけ？

「今晚、また開催されるらしい」

さいですか。

……行くつもりじゃないよね？



その時はそれで済んだが。

村で宿を取って、それぞれ就寝となつてから、しばらく経つた頃。同室だった尾形が、こっそり部屋を出て行く気配がした。

「……………」

案の定か。

今このタイミングで声をかけても誤魔化されるだけだろう。現場を押さえるしかない。

仕方なく、その気配が完全に消えたタイミングで、三十年式を担いで隣の部屋に入る。キロランケとアシ×パの部屋。しかし、片方のベッドは空っぽだった。やはり。

「……………起きろ、アシ×パ」

「ん……………タマ……………？ どうしたんだ……………？」

寝ぼけ眼で起き上がるアシ×パ。瞼を擦りつつ、俺を見て、隣のベッドを見て。はた、と動きが止まる。

「あれ、キロランケニ×パ、」

「多分スチエンカに行つたんだ」

「スチエンカ……………って、昼間言つていた？」

俺たちを置いて行ったのは巻き込まないためか、止められるのを防ぐためか。

ようやく目が覚めてきたらしいアシ×パの手を取って、立ち上がらせる。その辺の刺青囚人とかならともかく、無駄なこととわかっておきながら身内がボコボコにされるのをただ見過ごすのは寝覚めが悪すぎる。

「30秒で支度しろ」

「行くのか？」

「あいつらで勝てる訳ないだろ、止めに行かなきゃ」

一応、外套のフードを被って、弓を携えたアシ×パとともに会場に向かう。

きつともう日付が変わるくらいの時間帯、周囲の民家は真つ暗だったが、その建物だけは煌々と明かりが灯されていた。

観音開きの扉をぐつと押し開けた瞬間、

「——う、」

ムツワアア。顔を舐めていく異様な熱波、白人特有の濃ゆい体臭。シンプルに不快。

「すごい熱気だっ」

「クサイ」

入口から見えるのは、こちらに背を向けて何かを囁し立てる男たちばかり。こいつら

は観客だろう。もつと奥に行かなければ。

アシ×パの手を握って、興奮した男たちの群れを掻き分けて進む。

「……あッ！」

「……………」

観客がひしめき合う空間の中央、木の柵で囲われたその内側で殴り合う半裸の男たち。

で、その中で悪い意味で目立つ、

「——げッ!? タマちゃん!?!」

フードを被っていても……いや、被っているからこそか。三十年式と隣のアイヌの少女で、半裸の白石由竹は近づいてきた女が俺だということに気づいたらしい。その刺青、目立ちすぎるだろ。

「なんでここに……」

「ん?」

「……………」

近くには同じく半裸のキロランケ……そして尾形がいる。タタールの血が入ったキロランケの肉体美は周囲のロシア人と比べても見劣りしないが、宇佐美にタイマンで負ける尾形は白石同様、悪目立ちしている。

まあ、彼らはともかく。

「バカ白石……お前も相手に顔を知られてる、堂々とスチエンカに参加したら囚人を誘き出せないッ」

「あ、そ、そうか……」

「はあ……警戒されて、もうここにはいないかも」

上裸が半強制みたいなものようだし、顔を隠しても無駄だったろうが。そもそも、白石はこの村に来た時点で岩息に目をつけられていたのだから、何をしても無駄である。

しかし、スチエンカの真っ最中にいきなり話し込み始めた辺りで、俺たちも衆目の対象となつてしまったらしい。しかも、参加資格のない女子供ときて、血の気の多い輩の逆鱗に触れてしまったか。

「Отвали!」

屈強そうなロシア人の男が、何事かを叫びながら俺の肩を掴んできて。

——パァン。

抱いた三十年式からノータイムで放たれた空砲に、跳ね上がって飛び退さる。

「俺とこの子に触るな」

スチエンカは肉と肉のぶつかり合い。飛び道具なんて野暮なものは持っていない者

が大半だ。

俺の首など片手でへし折れそうな男たちでも、獣と同じで銃は恐ろしいのか。途端に距離を取られて、少し涼しくなった。

嫌ですわねー、男同士の拳の語らいは聖域だから女子供は立ち入るなみたいな価値観。俺はそもそも女じゃないけどね。

観客も参加者も頭のおかしい日本人の女を遠巻きに見守る中、反対にこちらへ近づいてくる男が1人。大事な手にきっちりテーピングまでして準備は万端の、

「……百之助」

「タマ」

柵越しに見つめ合う。既に頬へ擦り傷を作ったその無表情。お前が一番心配なんだけどね。白石は……まあともかく。

手を伸ばして、なぞる。

「馬鹿な真似を……お前は近接戦闘に向いてな、……正直周りに比べたら力が弱、……銃の才能があるんだから、自分に合った戦場で戦えばいいのに」

「……………」

「タマちゃん何も隠せてないって」

「この一大事に本当のこと言って何が悪いんですか？」

しかし、尾形はやんわりと俺の手を引き剥がして。

「……心配するな。俺はやる」

「……………」

男の子だね、いい加減にしろ。

くっ……どいつもこいつも戦闘能力に比例せず血の気が多い!

「無駄な真似はやめろ!」

「ねえさつきからめちやくちや辛辣じゃない!」

「Бей!」

「ぐえっ」

「シライシート」

俺たちの乱入で半ば中断されていたスチエンカが、その一言で再開したらしい。隣の男に殴られてあつという間に地面に沈む白石。無茶しやがって……!

後はもうめちやくちやで、殴って殴られての泥試合。血と汗とが飛び交っている。

「……あれ? アシパ?」

しかもアシパがない!

ここの参加者と観客は八百長に犬泥棒とこの世の悪を煮詰めたような奴らだが、さすがに年端も行かない子どもに何かするほど腐ってはいない……と思いたい。慌てて周

困を見渡した先、喜色満面でこちらに駆け寄ってくる小さな影。安心したのも束の間、「タマ！ このスチエンカ、観客は金を賭けられるらしいぞ！」

「いやそれは知って……ア!？」

きらきらお目々で紙幣を握りしめるアシ×パに嫌な予感……も、時既に遅し。

「キロランケニ×パに賭けてきた！ 行けーッ！ そこだッキロランケニ×パーッ！」

即席のリングを囲う木製の柵から身を乗り出し、声を張り上げるアシ×パ。かつて競馬に勤しむ白石を蔑んでいた彼女だが、明らかにギャンプラーの素質がある。

ええい、こうなったらやむを得ない！

「っ、が、頑張れ、キロランケー！ アシ×パが路銀をお前に賭けてしまった！ 元は取れるくらいには頑張ってくれー！」

「……え？ ぐぐぶッ」

キロランケーッ！

横つ面に良いのを一発食らってひっくり返るキロランケに、脳内ゴングが鳴り響く。いやこれ俺が余計なこと言ったせいだな、本当に申し訳ないと思っている。マジで。あ、ちなみに尾形はどうにノックアウトされています。

## 33話 バーニヤツ!!

結局。

最初から見えていた結末とはいえ、スチエンカは惨敗に終わった。

「くっ、賭け金があ……」

「はあ……」

財布の中身まですっからかんになって散々な有様だが、とにかく男どもを連れて早々に撤収しなければ。さらなる面倒事に巻き込まれそうだ。

手始めに、柵の一番近くで転がっていた白石に声をかけようとして。

——いつの間にか意識を取り戻していたらしい彼が、驚愕の表情で俺を見上げているのに気づいた。いや、俺ではない。

その背後の、

「——あッ!?! 岩息!?!」

「……!?!」

ガンソク。

——岩息舞治!



慌てて振り返ろうとしたその先、ちようどこちらに身を乗り出していた男の分厚い身体に阻まれる。

「むぐっ」

「あつ、白石！ キロランケニッパ！」

俺が人混み（というか胸筋）に揉まれていた間にも。アウトレイジトリオは、先ほどまでダウンしていたとは思えないほどの機敏さで、岩息を追いかけて出て行ってしまったらしい。それをアシッパの声で知る。

「タマ、大丈夫か!？」

「う、……白石たちは!？」

「いきなり外に走って行ってしまった……追いかけるか?」

何とかアシッパの手で壁際まで引つ張り出されたはいいが、彼らを見失ってしまった。

「……きつと刺青囚人を見つけたんだ。俺たちも行こう」

——岩息舞治は、おそらく白石を警戒しつつも、会場までは来ていたのだろう。

それが、何らかの理由で彼に顔を見られてしまった。そういうことだ。

建物の外に出たが、案の定、辺りは既に静まり返っており、何の手がかりも掴めそうにない。

「どこに行つたんだ?」

「……森に逃げたのかもしれない」

先遣隊の流れを踏まえれば。

岩息は林に逃げ込み……まあ……なんやかんやでバーニャの小屋まで辿り着くはず。なんやかんやは……なんやかんやである。

この辺りは不確定要素が多すぎて何とも言えない。何せ、先遣隊とうちのアウトレイジじゃ、そもそもその戦闘能力に差がありすぎるし。まあ、現役軍人・阿仁マタギ・不死身の組み合わせに勝てるパーティがそうそう居てたまるか。

「足跡を探して辿るしかないな」

例によって俺は夜目が利くので、アシ×パの手を引いてガンガン奥に進んでいく。

大体、銃を持つてるであろう尾形はともかく、キロランケ(丸腰)と戦力外(白石)じゃクズりに勝てるかも怪しい、

「——!？」

瞬間。

背中に衝撃。

皮膚に走る鋭い痛み、首筋を舐める熱い呼吸。子泣き爺——いや、まさかそんな訳はない、これは、

「うああッ」

「クスリだッ!!」

いやこつちかーい!!

つて言ってる場合じゃない、何とかこいつを斃さなければここで嘯み殺されてしまう!

銃を背負った状態で背後から飛び掛られたので、俺にはもはやどうにもできない。アシ×パに毒矢で仕留めてもらうしかない——のだが、

「駄目だ、暗すぎる!」

さっきの衝撃で少し距離が開いてしまったらしく、俺は今、アシ×パが視認できる範囲外にいるらしい。下手に近づくと彼女まで襲われかねないのでそれはいいのだが、このまま放っておかれても困、痛い痛い。

「明かりを、」

「いいッ!」

せつかく番えた弓を下ろそうとするのを、慌てて制止する。そんな時間はないし、どちらにせよ明かりを持ったままでは弓が使えないし、弓を構えたままでは明かりを使えない。BLEACHの巻頭歌か?

やむを得ない、

「アシッパ、俺の指示通り射てッ」

「でも……………」

「大丈夫だ、俺を信じろ！」

「っ、」

毒矢ゆえに俺にブチ当たったら死ぬが、普通の矢ではクズリを仕留め切れない可能性がある。

その逡巡は痛いほどわかったが、今はとにかくこいつの息の根を止めることを優先してもらわないと、俺の息の根が止まる。まあ最悪止まってもいいのだが、息を吹き返すのを彼女に見られても面倒だ。

「……………わかった、」

厳かに頷くアシッパ。こちらこそ面倒をかけて申し訳な、痛い痛い痛い。

「……………」

とはいえ、俺だって目測で、しかも射撃側から位置を定めるなんて真似はやったことではない。いや、しかし外せない。絶対に。これは俺のためではない、アシッパのためだ。

息を吸い込む。考えろ。今まで彼女の弓は何度も見てきたはずだ、イケる——はず！

「行くぞ……………拳ひとつ右……………ふたつ上——そこだッ」

瞬間、耳元で風切り音。

直後に獣の呻き声がしたかと思えば、しがみついていた重みがすつと消える。背後で軽い音がして振り返った先、毒矢の突き刺さったクズリが雪に埋もれていた。

「……………ふう……………」

手間ア掛けさせやがって。

肩を払いつつ息を吐いたところで、心配そうな顔のアシ×パがこちらに駆け寄ってくる。彼女が一番肝が冷えたはずだが、俺を信頼してくれてよかった。

「タマ、大丈夫か？」

「うん……………外套があつて助かった」

フードが首筋にわだかまっていたおかげで、即座に重篤なダメージを受けることは免れたようだ。かなり痛かったけど。ヨカッター。

胸を撫で下ろしたのも束の間。

——すぐ近くの茂みが、動いた。

「……………誰だ？」

クズリに押さえつけられていた三十年式を下ろして、鋭く呼びかけると。

木の影から、音の主がのっそり姿を表してきた。

「いえ……………悲鳴が聞こえてきたものですから」

日本語。そしてかなりの巨漢だが、丸腰だ。まだ少し警戒した様子のアシ×パが、

「……クズリが襲いかかってきたただけだ。もう倒した」

「そうでしたか……」

言つて。用は済んだとばかりに、こちらに背を向けようとする。その背中に、

「では、」

「待て」

——三十年式の銃口を、突きつけた。

坊主頭、眼鏡、やたら澄んだ目。

実物を見ていた訳ではないが、その顔、既に俺には覚えがあつたのだ。

「お前……白石由竹が言つていた刺青囚人だな？」

「っ、」

隣のアシ<sup>×</sup>パが、目を瞠る。ただ、巨漢改め刺青囚人の岩息舞治は、落ち着いていた。ゆつくりと両手を上げ、その体勢のまま、

「あなたがたにも顔を見られていたとは……不覚です。しかし、今私を殺せば、白石さんたちの居場所はわからなくなる……」

「……!」

白石。やはり、岩息はこの森で彼らと遭遇していたのだ。しかし、今その姿は見えない。

——ならば、なおさら見過ごせない。  
距離を詰める。

「あの3人に……百之助に何をした？」

「ロシア式蒸し風呂、バーニヤに入ってもらっているだけです。……中から開かないように細工はさせてもらいましたが」

いや出たバーニヤ。結局。

しかし、岩息は先遣隊の時のようにともに入ることではなく、単に白石たちを誘導して、その中に閉じ込めるのに使ったらしい。

……殺す気か。

「すぐにそこまで案内しろ。そうしたら見逃してやる」

「タマ……」

「背に腹は代えられんからな」

原作に仔細な内容が載っていない事態については、用心に用心を重ねて挑むべきだろう。希望的観測は捨てろ、ということだ。何度も言うが、今ここで俺たちがこいつの写しを手に入れる必要性はないのだから。

「わかりました。では、向かいましょう！ はあッ☆」

素直に了承した岩息がやたら機嫌良く歩き始めるのを、銃を構えたまま追いかける。

「ずんずん先を行くその背中に、アシバが心底不思議そうに、

「お前……こんなところまで逃げて来て、何をやってるんだ？」

「フフ……お嬢さん方にはなおさら理解しがたい感覚かもしれませんが、

微笑とともにそう前置きして、

「暴力こそが私の、唯一の自己表現の方法なのです。絵や歌や文章や踊りなんかで、自分を表現するのと同じこと。スチエンカで好きなだけ殴り合える……私という男を肯定してもらえるこの環境は素晴らしいッ」

「暴力？」

頭のネジが根こそぎ取れているとしか思えない発言に、それでもこの旅で多種多様な変態を見慣れてしまったらしいアシバはただ、長いため息をついて。

「それで網走監獄に……呆れたな」

「ええ。残念ながら、世間は私を理解しませんでしたね……たははっ☆」

——理解。

その言葉が、何となく引かかった。

野薔薇の棘のように。魚の小骨のように。飲み下せないそれを、じつと見つめる。

理解。そんな。そんなもの、

「誰にも理解はできない」



思わず呟いていた。

これは悲観などではない。

「俺を理解できるのは俺だけだ」

単なる事実である。

目を瞑る。唇に触れる。

喉に突き刺さっていたはずのそれは、もはや跡形もなく。そうだ。これは最初から俺だけのもの。そうであれば、痛みも苦しみも、感じるはずもないのだから。

「お嬢さん」

穏やかに呼びかけられて、我に返る。

足を止めた岩息が、肩越しにこちらを振り返っていた。

「あなたはとても綺麗な目をしている。怒りと優しさが入り混じった、悲しい色だ」

うん。

……いや、あのウイルクにも勝る綺麗な目をしたお前には言われたくないが。

ゴールデンカムイ世界、『瞳が綺麗』がほぼ褒め言葉じゃないのすこいよな。賛辞としてまともにも機能するのはアシクバくらいなもので、この世界だと目が死んでるほうがまだまともである。

「一度、殴り合ってみたかった……」

「死ぬだろ」

男の状態でも御免だわ。

はあ。くだらないことを考えてしまったな。時間もないって言うのに。

「……急ぐぞ。早くしないと白石たちが蒸し焼きになる」

「タマ、白石の肉は不味いぞ」

だから、食ってきたかのように言うじゃん？

「あの小屋です」

少し歩いて、やや開けた場所に出た。

そこで岩息は足を止め。その中にぼつねんと建っている小さな平家を指差して、そう言った。

うーん、あれが原作と同じバーニャなのかどうか、よくわからんな。

「……アシ×パ、中を確認してきてくれ」

「わかった」

岩息に一杯食わされても困るので、こいつには銃を突きつけたまま、アシ×パを斥候として向かわせる。多少明かりが漏れているので、彼女でも迷わず辿り着けるだろう。

「うーむ……しかし、樺太にまで追手が来るとは……もうここにはいられないかもしれ  
ませんね」

憂いたような呟き。

……妥当といえれば妥当な判断だが、それはまずい。何とかこいつには、先遣隊が辿り  
着くまではここにいてもらわなければ。

「……白石くらいで日和るな。もう少しここで頑張ってみろよ。いい出会いがあるかも  
しれないし」

杉元とかね。

小屋に辿り着いたアシ×パが扉の門を外し、その中から見覚えのある全裸男性3人が  
飛び出してくるのを眺めながら、適当に励ましておく。

脅されていたというのもあっただろうが、岩息は嘘をついていなかった。ならばこち  
らも約束を守らねばフェアではないだろう。

「それでしようか……」

「ああ」

銃を下ろして、その隣をすり抜ける。向かった先では、なぜか地面の氷を突き破った  
白石が湖にドボンしているところだった。

『ギャーツ助けてキロちゃあんツ』

『シライシート!』

「何をやつとんだあいつらは……」

そこで、ふと。足を止めて。

「……………」

何気なく振り返つた先には、既に誰の姿もなく。ただ、何もない湖氷が広がっているだけだった。

——あれは、確か。

小学2年生の、3学期だったと思う。

作文を書け、という課題が出たことがあった。400字詰め原稿用紙に1枚。

題は、『すごいと思う人』。

要するに、身近な尊敬する人間について書けという話だったのだが。当時の俺はそんな微妙なニュアンスを理解できず、母親に「日本で一番偉い人間」について尋ねた。住

んでいる国のトップに君臨する存在なら、間違いなく『すごい人間』だと思ったからだ。彼女は『内閣総理大臣』と答え、俺は当時の総理について調べ、それを纏めた。発表当日。周囲のクラスメイトはほぼ全員、自らの両親あるいは親戚をその対象として挙げていた。

愕然としたが、若い担任教師は俺の題材選びを「慧眼」としてことさらに誉めた。

俺は「格好つけている」としてクラスメイトの男子数名に目をつけられた。

ある放課後、例の如く彼らに呼び出されていた俺は、その中の1人（鈴木とかいう名前だったと思う）に突き飛ばされて、植え込みの角で額を切ってしまった。今ならわかるが、鈴木は俺にそこまで重大なダメージを与えようとしていた訳ではなかった。ただ、少し脅かしてやるつもりだったのだろう。

しかし、自身の止まらない流血を見た俺は、「これはいけない」と思った。

彼らは俺を殺すつもりなのだ。

やられる前に、やらなければ。

俺は予想外の事態に固まるクラスメイトを、1人ずつ殴って昏倒させ、その足で保健室に向かった。小学生2年生には当然、救急車を呼ぶなどという発想はなかった。

俺の出血を見た養護教諭はそれでまず青ざめ、次に事情を聞いて、俺の手当てをするより先に保健室を飛び出して行った。

翌日、俺の両親は学校に呼び出されることになった。

『上手くいかないなあ』

額にガーゼを貼りつけた少年が、怯えた目のクラスメイトを睥睨してそう呟く。

その背中を、少し離れたところからただ眺めている。

ああ。

馬鹿げているよな。

「……………」

どこかで、鳥が鳴いている。

——久しぶりに、「昔」の夢を見た。

ゆっくりと瞼を開ける。乾いた目覚め。何の後味も残らない、空虚な舌触り。

……昨晚、岩息と妙な話をしたせいかな。

思い出とも呼べない記憶の羅列がそこにはあった。ただ、それだけだった。

「タマちゃん」

どこかで白石の音がする。宿の薄い掛け布団の中でそれを聞く。——起こしに来たのか。

「起きてるう?」

隣のベッドを使っていたはずの尾形は、もう支度を済ませたのだろうか。気配がしない。

ふらふらとおぼつかない歩みが、ベッドのすぐそばまで来て、止まった。

「タマちゃあん、」

「……白石」

掛け布団から顔を出す。

いつも通りの白石由竹と、目が合った。……おかしな夢を見たせいかな。妙に、胸騒ぎがした。

「……うん?」

その目を見つめながら。

ずっと考えていたことを、口に出す。

白石にしか頼めないことだった。

「アシ~~ン~~パのこと……頼んだぞ」

俺の脈絡のない呟きに、白石が垂れ目がちの三白眼をきよとん、と瞬いた。

「どしたのいきなり、」

「杉元佐一がいないうち、お前があいつを守ってやるんだ。わかったな」

構わずはつきり続けると、一瞬口籠もつて。視線が、困ったように左右を彷徨う。小  
手先の誤魔化しは効かない雰囲気だ、ということだけは伝わったらしい。

最終的に、眉を下げた頼りない笑みを浮かべて、

「……なんで、俺え？」

そう、呟いてみせた。戯けた調子の裏に確かな戸惑いが滲んだ、不安定な響きだった。

「ほら……俺なんかじゃなくてさ、ずっと一緒だった尾形ちゃんとかいるじゃ、」

「尾形百之助とキロランケを信用するな」

腕を伸ばして手繰り寄せた坊主頭。その耳元に、囁くように吹き込む。肩が、小さく  
跳ねた。

「っ、……………」

強張った無表情の中、瞳孔だけが動いて、俺を捉える。白石は何も言わなかった。俺  
は今、どんな顔をしているのだろう。

はあ。息を吐いて、彼を解放する。やや起こした上体を、再びシートに沈める。

「……お前しかいないんだ……お前しか……」

彼しかいないのだ。——間宮海峡の流氷原で、尾形百之助からアシ□パを守ってやれ  
るのは。

傷つけない。傷つけさせない。



俺はあの流水原で、何としてでもその二箇条を達成しなければならぬ。それには、彼の協力が必要不可欠だ。

「何もかも終わったら、頬でも唇でも、好きなだけ接吻してやるから……」

眩きながら、目を瞑る。何度も死んできたことに比べれば、それくらいは安いものだ。俺は何だつて耐えられる。どんなことだつて。

「……………」

白石は、しばらく無言で俺を見つめていたようだったが。ふーっ。彼が長く息を吐き出したことで、思わず瞼を開ける。

「……………野暮なこと言うなよな、おっかねえ別嬪さん」

彼は、優しい笑みで俺を見下ろしていた。

かと思えば、おもむろにしゃがみ込む。その手が、俺の投げ出していた左手を取り。自らの頭頂部に、手のひらをかぶせてみせる。

「俺にや、これ」でじゅうぶんさ」

言いながら、押しつけられる坊主頭。温かい。少し驚いていたら、手のひら越しに、にっと得意げに笑いかけられた。

ああ、白石由竹。

「……………ありがとう」

俺は、本当に仲間に恵まれた。

アシ~~シ~~パ、杉元——白石。彼らが俺に与えてくれたもの。大切な光。ぐつと、唇を噛み締める。

——何度目かの“運命の時”が、再び、近づいてきていた。

## 34話 感情の清算をお願い

ロシア人の農村で、岩息舞治の刺青を手に入れることを諦めた俺たちだったが。

海岸で捕まえたトドの皮を買ってくれたアイヌの紹介で、その残りを養狐場に持ち込むこととなった。

キツネの養殖、馴染みのない文化だ。そもそも現代では毛皮の売り買い自体が難しい立場だしなあ。

「キツネは何でも食うよ！ 魚は安いけど、そればっかじゃ栄養が偏るから、飼料に牛とかクジラとか色々混ぜんのよ。トド肉も有難いわ！」

気前の良さそうな飼育場の主人。肉食動物を使つての畜産業は大変そうですね。

何となく檻の中を覗き込む。腥い獣臭。黒い毛並みのキツネたちがぐっつろいでいる。見慣れない色だ。

「黒いキツネって初めて見た」

「……私たちはシトウンペカムイと呼んでる。病気を治してくれたり、海の漁で助けてくれたりする善い神様なんだ」

「そこにいるのはみんな外国から輸入したキツネだね。白い差し毛が入ってるのは『銀

狐”って言って、高値で取り引きされるんだよ」

樺太は寒いから良質な毛ができる、と笑って言う。

アシ×パが言っている「シトウンペカムイ」とは、単に突然変異であるメラニズムの個体か——あるいは、こういつた養狐場から逃げ出した生き残りなのだろう。

「……このあたりに樺太アイヌの村があったはずだが、知らないか？」

いつの間にかアシ×パの隣に来ていたキロランケが、主人にそう問うた。彼はああ、と軽く応えて、

「2、30年前にはここにアイヌの村があったらしいけど。この飼育場を建てる頃には、もう何もなかったな」

「……………」

無言で俯くキロランケ。そのあからさまな仕草を見たアシ×パが、穏やかに呼びかける。

「誰か知り合いがいたのか？」

問われたキロランケは、顔を上げ。

「……ここには、お前の父親……ウイルクの生まれた村があった」

ウイルクの母親も、そのまた両親も。

そう呟く彼の瞳には、雪原を埋め尽くす広大な檻しか映っていない。

「……みんな、どこに行つたんだ？」

アシ<sup>×</sup>パの眩きに、空虚な飼育場を見つめるキロランケが唸るような声音で答える。「日本とロシア、2つの国の間ですり潰されて——消えてしまった、」

その重苦しい語りを聞きながら、ゆっくりその場から遠ざかる。何となく、俺が聞くべき話ではないような気がしていた。

「……………」

黙つて、離れた場所で檻の内側を眺める。つがいなのか、きようだいなのか、折り重なるようにしてしきりに互いを毛繕いする2頭のキツネ。——どうせ、この後は皮を剥がされて死ぬだけだというのに。

「タマ」

すぐ後ろで、声が出た。

尾形百之助が、光のない目でこちらを見つめていた。

「百之助……」

無言で、隣に立つ。肩がぶつかりそうなほどすぐ隣に。そのまま、しばらく2頭のキツネを眺めていたかと思えば。

「のつぺら坊は……ウイルクは、娘でなければ解けない暗号を残した」

この距離でなければ聞き逃してしまいそうな、独り言じみた囁き。否、問題はその内

容だ。金塊の暗号——どきりとした。

「今、おそらくアシ×パの頭の中には、暗号を解く鍵がある……」

本来、これはキロランケとの間だけで交わされる黙約だったはずだ。

それを、なぜ俺に？

考え込んで二の句が継げない俺を、尾形が見下ろしてくる。その眼差しは、俺に何を求めているのか。わからない。

黙ったままの俺を、いつもより柔らかく見える無表情で見つめる彼が、続ける。

「アシ×パはお前を信用しているはずだ」

だから——何だ？

お前は、何を考えているんだ？

そう、尋ねかけて。

すんでで、飲み込んだ。何と答えるべきなのだろう。わからなかった。目を逸らす。  
「……………」

結局、曖昧な返事で茶を濁して。尾形に背を向ける。

金塊の鍵——ホ×ケウオ×コニ。

俺は既に知っている。けれど。

——今、答える訳にはいかない。

まさか尾形も、今のアシシパさえ気づいていない金塊の鍵を、俺が既に手に入れてるなどとは思ってはいないだろうが。

「……………」

尾形はそれ以上、何も言うてはこなかった。

ケーン。シトウンペカムイの高らかな鳴き声が、だだっ広い檻に虚しく響き渡った。

樺太アイヌの犬籠と契約して早々に辿り着いた国境近くの町、敷香。

そこから少し歩いた森の中で。

——ドオオン。

天高く木製の棺を掲げるウイルタ族の“天葬”を眺めていた俺たちの耳に届く、一発の銃声。

「……………なに?」

「尾形ちゃんかな」

まあ、このメンツで俺以外に銃持つてるの尾形しかいませんからね。

「百之助、何を撃つたんだ？」

近づいていくアシッパの背中を追いかける。慣れた手つきで三八式を排莖する尾形、その足元に倒れ伏す大型の偶蹄目。

おっと。

「エゾシカだ」

「……………」

尾形の眩きに、やや遅れて来たキロランケが、緊張した面持ちを向ける。代わりにアシッパが答えた。

「これはユシじゃないぞ。……確かに似てるけど、こんなの初めて見る」

ああ。これはシカではない。

流血する頭部から生えた、特徴的な長いツノ。異文化交流に慣れた現代日本人の俺には、むしろ見覚えがあった。

これは、

「……………馴鹿」

馴れた鹿と書いて、トナカイ。

サンタさんの櫓を引いてるアレね。と言っても、実物を見るのは初めてだったが。



「知ってたのか？」

「まあね」

アシ×パへ適当に相槌を打ちつつ、無言で見つめ合う男2人を観察する。

……おそらくだが。

用心深い尾形は、網走監獄潜入前にあらかじめ、間宮海峡までの仔細な経路をキロランケから聞き出していたのだろう。その中には、ウイルタ族の飼馴鹿をわざと撃つて猟に加えてもらい、彼らの衣装を借りて国境を越えることまで含まれていたはず。若かりしウイルクの経験を利用した、キロランケの案。

キロランケとの交渉が決裂してなお、尾形はその役割をこなした。

それは、この密入国は必要なことだと考えているから？ ……あるいは、まだアシ×パが「金塊の鍵」を思い出していないから。

どちらにせよ、彼は間宮海峡でキロランケを裏切ろうとするのだっけ。

尾形は、これから一体、どこに行こうとしているのだろうか。

「あれ……この馴鹿。何か首から提げてるぞ」

それから。

尾形が撃ち殺した馴鹿の飼い主であるウイルタ族に出会った俺たちは、「馴鹿を殺したら馴鹿で返せ、返せないなら山馴鹿の狩りを手伝え」という提案を受けて、彼らの狩りに参加することになった。『予定通り』に。

「実は……アシ×パの父親も若い頃、尾形と同じように飼馴鹿を撃ちまっつてな」  
「アチャガ？」

「……………」

根性逞しいキロランケ、動じることなく自然にウイルクのエピソードを紹介する。

というか、そもそもその目的を考えると、『ウイルタ族を隠れ蓑に密入国』はむしろおまけみたいなもので、この話をアシ×パに教えることが本題だったのだろう。彼女に父親とのことを思い出させるため。

「その話も初めて聞いたかも……………」

自分が知らない父の姿を見て、薄っすら頬を緩めるアシ×パ。それから、顔を上げて。  
——なぜか、俺を見た。

「タマ、行こう。何かアチャガのこと思い出せるかも」

自然に差し出される、小さな手。

それを見て。

——アシ×パはお前を信用しているはずだ。

養狐場での、尾形の発言がフラッシュバックする。アシ×パは俺を信用している。  
……だから、何だ？

「……、うん」

疑念を振り払って、その手に手を重ねる。

アシ×パが優しく微笑んだ。今は、それが全てだった。

「——ウイルタたちは、飼馴鹿を『ウラー』、山馴鹿を『シロ』と呼んで区別している」  
キロランケが指差す先には、無心で雪を穿り返す山馴鹿の群れ。彼らの目当ては、その下に生えた餌となるトナカイゴケらしい。

ただ、夢中になって見えているように見えても、群れの中には『ヌガ』と呼ばれる見張り役が必ずいるらしく。まずは、そのヌガを狙って混乱させるのが狩りの定石のようだ。

「ヌガに見つからないよう、飼馴鹿の首に長い紐をつけて先に走らせ。その後ろに隠れて、山馴鹿に接近する」

「……『オロチツクウラー』」

大人しく聞いていたアシ×パが、ぼそつとそう口にした。キロランケが反応を示す。

「……どうしてそれを？」

「オロチツクウラー……山馴鹿狩りの罠に使う、『化け馴鹿』。アチャが話してくれたのを今、思い出した」

明るい笑みでそう話したアシ×パに、キロランケも笑顔を見せる。……これも、予想通り”な訳だ。

アシ×パはただ、父との失われた思い出を探すことに楽しさを覚えているだけだが、その思い出が宝となる人間にとっては「楽しい」では済まないのである。

そして、いざ思い出の“化け馴鹿作戦”決行、となつたはいいが。

「俺が撃つから、邪魔すんなど伝えろ」

手練れの狙撃手の本領発揮である。

冗談みたいなスピードと精度で群れを片っ端から斃していく尾形に、ついて来てくれたウイルタ族の親子どころか白石まで引いている。

「弾を込めろ」

ぼいっとキロランケに放られる、空の三八式。弾のない銃なんて鈍器くらいにしかありませんからね。そこそこ役には立つ。

「……はい。百之助」

半強制的に手持ちの銃をパクられるウイルタ族が可哀想だなど思っていたところだったので、先手を打って俺の三十年式を差し出しておく。ちらつと俺を見てから、無

言で受け取る尾形。どういう感情？

うーん、それはいいのだが、普通に手持ち無沙汰になつてしまふな……と思つたところ。

「……え、貸してくれるのか？」

同伴のウイルタ族から、なぜか笑顔で差し出される小銃。そんな……尾形のカツアゲを免れたんだから、自分で持つていてくれていいのに。

日本語しか喋れない身では上手く伝えられないので、とりあえず受け取つてはみたが。

「ベルダンM1870」

うっ。

途端、にゅつと背後から生えてくる銃と銃と銃のことしか得意じゃない鬱々ニハ。わかりやすく興味津々のご様子である。

「……知つてるんだ？」

「帝政ロシアが採用した単発式の歩兵銃で、」

「ああ……うん！ うん！」

「面倒臭がらないであげてえ？」

あいにく、俺はミリオタでもなんでもないのでね（n回目）！

というか、単発銃の撃ち方なんてわからないんだが。そう思ったところで。

「……………」

ベルダン M1870。

……これを持っていたおかげで、尾形はヴァシリの狙撃を免れたんじやなかったか？  
ふと思いつく。では、俺が持っていたらまずい。幸い、尾形はこれに興味を示して  
いる。

「使つていいよ。私、単発式の撃ち方なんてわからないし」

右手でベルダンを差し出し。同時に、空の左手も出して置く。ただ、と前置きして、

「……………三八式と交換ね」

俺の三十年式は、ベルダンを貸してくれた彼に渡す。

——ここに来て、わざわざ無関係なウィルタ族を危険に晒す必要はない。

撃たれるのは、俺だけでいい。

「国境はまだ!?!」

「もうすぐだ!」

馴鹿の蹄の音に混じって、白石とキロランケのそんな会話が流れてくる。

櫛の並びは、ウイルタ族の親子が先頭で、白石キロランケ、尾形アシパ、そして俺が単独でしんがり。三八式を持つて俺が撃たれるとしたら、他のメンバーから離れていればいるほどいいからだ。

もうすぐ、国境。

誰かが、必ず撃たれる。

「っ、」

半円形のハンドルを、きつく握りしめる。

死にはしない……はずだ。

そのために、おそらく男性用であろう馴鹿の毛皮を使った帽子を用意してもらった（逆に白石はなんで女性用被ってんの？）。

相手は頭を狙ってくる。ダメージを減らすために、わざわざ内側に詰め物までしたのだ。きつと、致命傷にはならない。

はあ。はあ。自分の呼吸がうるさい。

緊張しているのだ。

「……慣れないもんだな、」

乾いた笑いが漏れた。

それと同時に、

「国境を越えた!!」

その。「た」まで、聞こえなかった。

一瞬で。——音が、消えた。

側頭部に衝撃。何が何だかわからないまま、天地がひっくり返る。

「!!」

明滅しながら回転する視界に、こちらを驚愕の表情で振り返るアシ♀パと——尾形が一瞬映つて、すぐに見えなくなった。

……冷たい。雪に落ちたのか？

どこまでが地面で、何が自分の身体なのかわからない。感覚器官がめちやくちやになつていた。

「……………う、…………」

……最初に戻ってきたのは、耳鳴りだった。頭蓋が粉々になつてしまふようなその激しい脈動を感じながら、息を吸い込む。

生きている。

「——ッ、!!」

耳鳴りにかき消されて、周囲の音がほとんど聞こえない。

まさか、鼓膜が馬鹿になったんじやあるまいな。そんな不安を覚えつつ、雪を握りし



める。ああ、これが俺の手足。

「……………うるせ、」

五感の復帰がまだ不完全で、ダメージ具合が計れない。申し訳程度に頭を振っておく。

はあ。——撃たれたのだな。俺が。

良かった。まずそう思った。

無関係なウイルタの父親が、息子の前で傷つくことがなくて良かった。

「……………」

だいぶ、感覚が戻ってきた。ゆっくりと、身体を起こす。立ち上がる。

「——マ、タマッ！」

幸いあの衝撃でも鼓膜はイカれていなかったらしく、左右の背後からアシ×パの悲痛な叫びが聞こえてきた。ああ。また心配をかけてしまったな。

でも、まだ終わっていない。

2本の足で、しっかりと雪原を踏みしめ。彼方の林を睨むように見据える。ああ、自立歩行が可能な程度には体は動くのだな。

「……………」

撃たれた方角はどちらだ。

ヴァシリ・パヴリチェンコはどこにいる？

次を撃つてくる様子はない。そうだろう。

こんな、撃つてみる”といわんばかりの態度は、お前の気に食わないはずだ。

これは我慢比べだ。

そして、俺”たち”が勝つ。

——ドオン。

すぐ脇をすり抜けていく銃声、

「っ、」

——手をぐつと後ろに引かれて、逞しい腕の中に閉じ込められる。硝煙の燻るベルダンをぶら下げた、尾形百之助。

一瞬目が合つて、それでも尾形は何も言わず、俺を抱えたまま櫓の後ろに滑り込んだ。

「今だ、行けッ」

その一言に、妙に安堵した。

勝つたのか。我慢比べに。

お前は、イリヤに当てた。本当は、これも避けるべき事態だったのかもしれないけれど。

……馴鹿櫓は、森の中に入って少しの場所で、ゆっくりと停止した。

「はあ……」

周囲の警戒もそこそこに、冷たい雪の上に躊躇なく座り込んだ尾形の腕の中、深く息を吐く。どつと疲れた。……背負っていた三八式と、借りた帽子は雪の中に落としてきてしまったな。

手袋を外した手が、慎重な手つきで耳たぶに触れてくるのを甘受する。

「タマ、傷はツ!？」

バタバタと駆け寄ってきたアシバが、俺の側頭部を覗き込んでくる。すぐにほつとした表情になって、

「耳を掠めただけみたいだ……大きな帽子のおかげで狙いが逸れた」

「音は!? ちゃんと聞こえてるか!？」

「う」

シライシ耳元で声がでけえ。せつかく守れた鼓膜がお前のせいで破けるかと思つたぞ。俺を抱っこする尾形は当然渋い顔。

「やかましい」

「聞こえてるよ……私は平気。百之助やお父さんが無事で良かった」

少し離れた場所から、ウイルタの親子が心配そうな顔でこちらを見ているのに、手を軽く振って応える、

「づえ」

……アシ×パに、いきなり抱きつかれた。突然のことで、座椅子代わりにしていた尾形の体がちよつぱり揺らぐ。

「タマ……」

俺の胸に顔を埋めたアシ×パから漏れる、頼りない呟き。今にも泣いてしまいそうだった。

「……………」

何と声をかけていいのか、わからなかった。とりあえず、帽子越しにその頭を撫でておく。

ウイルタの親子は無事だった。

尾形百之助も、そして、尾形タマも。

俺がしたことは、間違っていないかった。……そう、思いたかった。

日露戦争延長戦。

あれからそう言い放って櫓を離れた尾形だったが。なぜか、まだ見える範囲にいる。  
——待っているみたいだ。

何となく、そう感じた。

行かなければ。半ば強迫観念じみて思う。

さりげなくアシ<sup>×</sup>パのそばを離れて、彼のところに向かう。ゆっくり近づいていくと、双眼鏡片手に佇んでいた彼が、目だけでこちらを見た。

……なぜ来た、とは言われなかった。

代わりに、

「タマ。……無茶な真似はよせ」

低く、抑えた呟き。短い響きへ無理に感情を押し込めたような、いやに違和感のある  
声音だった。

「……無茶？」

乾いた気持ちのまま、繰り返す。

何について言っているのか。きつと、さっきの話なのだろうけれど。

「たまたまお前の三八式と交換した。それで俺が撃たれた。それだけの話だろう」

そう口にしても、尾形は全く納得していないようだった。顎を引いて、薄く唇を噛み

しめた、焦燥が滲んだ横顔。らしくもない。

彼が、絞り出すように続ける。

「……挑発するような態度を取った」

「死んだふりなどして、さらに撃ち込まれたら堪ったものじゃない。手練れの狙撃手は、獲物がああいう態度を取ったらむしろ引く。そう思ったただけだ」

「違う、」

違う。怒りと、焦りとが明確に表出したトーンだった。声を荒げた。そう言っても差し支えない強い否定に、流石にたじろいだ。

きつ、と。こちらを睨みつける尾形が、薄氷の平静を再び纏って、口を開く。

「知っていたんじゃないのか」

知っていた。……不気味な響きだと思った。ぞくりと一瞬、背筋が粟立つ。

その理由を精査しないまま、青ざめた彼の顔をじつと見つめ返した。

「……何を？」

「……………」

尾形は、その質問には答えずに。無言で目を逸らす。彼自身、自分で口にしておきながら戸惑っているふうでもあった。

唇をつぐみ、しばらく何か考えているふうだったが。やがて、顔を上げた。怯えを硝

子の決心で上書きした、脆く儂いその表情。

「お前は、……俺を誘導しようとしているんじゃないのか？」

だから、どこに？

尾形はそこでも具体的なワードは口にしないまま、彼にしては珍しく、はつきりしないしどろもどろの調子で続ける。

「網走監獄の時も……キロランケがお前に手を出せば、俺はやつとの契約を放棄する……そういう見立てで、わざと、……」

「殺された？」

切れた蜻蛉の尻を、ねじ込む勢いで貼りつけてやる。尾形が微かに肩を震わせた。

気を抜くと荒ぶりそうになる呼吸を、必死に抑える。心臓が早鐘を打っている。――

何故だか、妙に苛立っていた。

「お前が俺を助けに来ることを期待して？」

空回りする激情を潤滑油に、唇を動かす。尾形はもはや、死人のような顔で俺を見つめているだけだった。瞬きさえしない。

「くだらない……くだらないな、」

最初から。

最初から、そう思っていてくれれば。そう考えることすらくだらない。何もかもが。

終わったことで、どうでもいいことだった。

——クソガキが。

もう、手遅れだ。投げ出していた手を持ち上げる。前髪を、ゆっくり撫でつける。

「俺が、今さらそんなことをお前に期待するでも？ 尾形百之助」

はっ。目を睜つた尾形が、短く息を吐き出した。鳩尾を殴られたみたいだな、とぼんやり思つた。

「なに、を……」

「何度も俺のことを殺したくせに、」

お前が。お前こそが。

今さら、そんなことを俺に言う資格があるとでも思っているのかよ。ああ、くだらな  
い！

「——、」

尾形は、こぼれ落ちそうなほどその瞳を見開いて。真一文字に唇を引き結んでいる。

固く握られた拳が、微かに震えている——ように、見えた。

それを見て、今度は無性に悲しくなった。全身の力が抜ける。項垂れる。

「……馬鹿げているとは思わないのか？」

そんな顔するくらいなら、最初からするなよな。



後悔するな。

ああ。本当に、どうしようもない。

「……………っ、」

一瞬苦しげに眉根を寄せた彼が、何かを言いかける。しかし、それは音にはならなかった。無言の彼が、こちらに背を向ける。

遠ざかっていく。離れていく背中も、その歩みも、既にどこまでもいつも通りだった。後には、佇む俺一人が残された。

視界から、その姿が完全に消えて。ふと、意識を取り戻す。妙な言い方だが、まさしくその通りの感覚に襲われた。

ゆっくり、目を瞬く。

「……………言い過ぎた、…………？」

いや。言い過ぎたな。

これは、客観的事実だ。

じわじわと、インクが染み込むように後悔が広がっていく。後に悔やむと書いて後悔だ。

…………馬鹿げている。俺のことだ。

「はああ」

思わずその場に蹲って、顔を手で覆った。何やつてるんだ。俺らしくもない。

今さらこんなことで尾形を責めてどうする？ 何の意味もない。忘れておくべきことだった。夕張の時はちゃんとできたのに。

きつく瞼を瞑る。

「焦っているのか？」

わからない。

何もかも思った通りには進んでくれない。

キロランケの手を早々に離れてしまった尾形の動向は、もはや全てが未知数だ。

時間がないんだ。もう、時間が……それでこんなことをしているようじゃ、本末転

倒じゃあないか？

「尾形……」

銃弾が掠めた耳が、今になって痛む。ずきり、ずきりと脈打つように。

ここぞという場面に、最悪の精神状態で送り出してしまった。

「最低だ」

そう自嘲することさえ、もはや自らに対する慰撫でしかないのだ。

今の尾形は俺が大切なだけに。

——後悔するな。何度も反芻した言葉が、翻って己の心臓を貫く。ああ、本当に。

## 35話 Q. E. D.

木立の向こうから、モシンナガンM1891の、重く鋭い発砲音が5発。  
装填数も、5発。

「  
」  
時が来た。ようやく。

ゆっくりと身体を起こす。

雪を含みすぎた舌の感覚がない。凍りついたように全身の筋肉が重い。

しかし、この機会を逃す訳にはいかない。

——ウイルタ族の棺は、偽装フェイクの偽装フェイクだった。

——ただし、そう思わせるためには俺自身が「偽装フェイク」を完璧に演じ切る必要があつ

た。

——息を殺し。熱を殺し。己の生命の証を全て握り潰して、それを成し遂げた。

樹木の幹に立て掛けていた三八式——雪原から回収したその銃口を、棺を睨む男の横顔に向けて引き鉄を、

「っ、  
」

一瞬、視界が歪んで、傾いた。  
発砲音。

まずい、ととつさに思った。

——外した？ 顔を上げる。視界には殺風景な木立が映るばかりで、先ほどまでその中央にいたロシア人の姿は見えない。

当てたのか。

肝心な部分を見逃してしまった。くだらないミスだ。俺としたことが。

「う、……」

ひとまず身を隠そうとしたところで、再び視界が揺れる。血液が、臓腑が激しく脈打っているような不気味な感覚。暑くて寒い。

気分が悪かった。

吐き気を堪えて、じつと木々の向こうを睨みつける。こんなところで隙を見せて撃たれでもしたら、堪ったものではない。

「……………」

動く気配は、ない。

日露戦争延長戦。

俺は、それに勝利した。

飛び出そうとして、

「はあ、ツ……」

今度こそ、盛大にふらついた。

狂った平衡感覚では自立状態を保つことが不可能で、雪原に膝をつく。

脂汗が止まらない。

——こんな場所で立ち止まる訳にはいかない、

震える手足を叱咤して、立ち上がる。

歩いて、歩いて……どれだけ進んだのか。いつの間にか、目の前にはあの馴鹿橇と、ウ

イルタ族の親子がいた。

「」

息子が何か言っている。

しかし、通訳がない今は、ロシア語でもアイヌ語でもないその言語から意味を読み

取することは不可能だった。

「……ッ、」

再びよろめいたところで、男の手がやんわりと橇に座らせてくる。抵抗する余力は既に残されていないかった。

やがて、

「尾形ちゃん」

隠れて双眼鏡で様子を観察していたのであろう白石たちも戻ってきた。

「随分と顔色悪いな、いつも悪いけど……」

「ひどい熱だぞ」

小さな手が額にかざされて、その温度にかアシッパが驚愕の声を上げる。

「……大丈夫か、尾形」

キロランケの呼びかけ。

……心配されている。その事実気づいて、腹の底の据わりが悪くなる。

何か、何か言わなければ。意識を逸らさなければ。その不安感のようなものが、体調

不良を押し退けて顔を出す。

「……少し……雪をくちに過ぎただけだ……こんな熱どうってことな、……」

そこまで言って、ふと。

3人を自然に押し退けるようにして、こちらの前にやってきた人影に気づく。

和服、白い肌、細い指。

「……タマ……」

——来てくれたのだ。

熱くも冷えきった心の裡に、微かな煌めきのようなものが灯る。

あの時は様子がおかしかったけれど、何か彼女なりに考えることがあつたのだろう。彼女は俺のことが心配なはずだ、

「タマ、」

顔を上げて。——凍りついた。

「っ、」

そんな。有り得ない。

途端にばくばくと、心臓が激しく脈打ち出す。

そこに立っていたのは、彼女ではなく。

——長く癖のない黒鳶色を結ばず、下ろしたままの姿。

背負っているのは三八式でも、三十年式でもなく、夕張の土に偽アイヌとともに眠っているはずの、スペンサーM1860。

雪国に相応しくない、白い長襦袢一枚というその格好。そして、その下腹部に広がる赤い、

「白湯飲んだ？　たくさん飲んだほうが良いよ」

「急いでここから移動するぞ」

白石とキロランケの呼びかけも、もはや耳に入ってこない。

「尾形」

「それ」が——久方ぶりに目にした悍ましいその悪霊が、うつそりと微笑んでみせた。

馴鹿櫓が、雪原を駆けていく。

隣には、「それ」が座っている。

——どうして？

底冷えるような悪寒が治らない。

夕張で彼女と再会してからは、ずっと視えていなかった。それなのに、なぜ今になつて。

そもそも、当の彼女はどこだ？

姿が見当たらない、

「寒い」

眼下で、小さな声でした。



とつさにそちらへ視線を向けて——瞬間。ぞつと、背筋が粟立った。

太ももを枕に横たわり、こちらを見上げる幼い少女。いつの間に。鳥肌が立ったが、恐怖はそれだけでは済まなかつた。彼女の右側頭部は大きく抉れており、脳漿と血液が崩壊した頭蓋から絶え間なく滴っている。

誰がどう見ても生きているとは思えない、グロテスクな風貌だった。

見覚えがあつた。

顔にも、——傷にも。

「( )は北海道より寒い」

同じ声で隣から眩き。投げ出していた左手を握りしめられる感覚に、再び総毛立つ。

膝上のそれとよく似た、それよりやや幼く見える少女が、俺の手を握つて俯いていた。

その唇からぼたぼたと滴る赤。

悍ましい。気分が悪い。

タマ。早く、何でもないように笑いかけてほしかった。それだけで良かった。

どこにいるんだ、

「本当は存在しない」

右隣からぴしやりと声が飛んできた。

心を読まれている。不思議と驚きはなかつた。この世のものではないのだから、それ

くらしいの真似はしてもおかしくない。

頬杖をつき、流れていく雪原を眺めていた。それが、喉を鳴らして笑う。深い焦茶の髪が風をはらんで美しく靡いている。

「それこそが幻覚だったのでは？」

幻覚。まさか。心臓が煩い。

「死んだ人間が生き返るはずもない」

膝上の少女が淡々と呟く。

死んだ？ そうだ。

間違いなく。けれど、

「最初からいなかった。ずっと都合の良い夢を見ていただけだった」

隣の少女が、幼い見た目に似つかわしくない形式ばった口ぶりでそう紡ぐ。

ごごぶ。その喉奥から濁った音がしたかと思えば、緩やかに吐血した。小さな口から大量の吐瀉物を垂れ流しながら、それでも少女は顔色ひとつ変えず、自身の膝を見つめている。

ニンニクの刺激臭にも似た、ツンとした臭いが鼻をつく。

鴨鍋に入れた、殺鼠剤。それを口に含む前の少女だけが「本物」だった、と？

考えてみれば、それが最も『妥当』な結末で。けれど、そう信じるにはもう、俺の中

には色々なものが積み重なりすぎていた。

俺を騙そうとしているだけだ。邪魔をしようとしている。取り殺そうとしている。

馬鹿げている。

悪霊が。

「……悪霊？」

すぐそばで声が出た。

いつの間にか、「それ」が鼻先のつきそうな距離からこちらを見下ろしていた。影が落ちる。解いた髪の毛の滝に視界を遮断される。

目を、合わせるな。

視線を落としたその頬を包み込む冷たい指先。氷のようだった。

「そうだな。お前が俺を殺したのなものな、尾形」

「それ」はただ、優しく微笑っている。その気配がする。

「百之助、」

耳慣れた呼び名に、とつさに顔をそちらに向けたが。澄んだ青い瞳に迎えられただけだった。彼女ではない、

「立てるか？ 中に入って暖まらせてもらおう」

気遣わしげなアシンバに支えられながら、座席から降りる。いつの間にか櫓は停止し

ていて、周囲には湯気のくゆる小屋が立ち並んでいた。

「……どうした？」

——タマは？

そう尋ねようとして、できなかつた。

誰のことだ——当然のようにそう聞き返されたら。そう思った瞬間、唇が縫いつけられたように動かなくなった。

“それ”は、入り口に立つてこちらに手を伸ばしている。血濡れた指先を。

「ほら……おいで」

小屋に入って座らせられた途端、楽器を手にしたウィルタ族たちが賑やかな音楽を奏で始めた。それについてキロランケやアシバが何か言っていたようだが、もはや内容を咀嚼して意味を飲み込む余裕はなかつた。

騒ぎを、ひとつの外套を同じように頭から被った“それ”の胸に顔を埋めたまま朦朧と聴く。

「うるせえな」

俺の髪を撫でながら、ごく軽い調子で嘲笑ってみせる。

触れる肌の柔らかさも、丸みも、確かにここに感じているのに。薄い長襦袢越しでさえ、その鼓動は聞こえてこない。

……いや、そもそも彼女の鼓動など聞いたことはあつただろうか？  
考えるな。

疑念を振り払う。

「……会いたいかな？」

細い指の背で頬に触れながら、*“それ”*が穏やかに問うてくる。同じように高温の湯気を至近距離で浴びておきながら、汗ひとつかいていない冷たい肌。

「お前に残った、たったひとつの*“大切”*」

大切。頬の手が、するりと喉を滑って。軍服の胸元に重なった。

捨てることも、忘れることもできなかった。手紙。写真。そして、

「また会えて嬉しかった」

膝に寝そべる少女がぼそりと口ずさんだ。どきりとした。

嬉しかった。……俺が？

「とても楽しい旅だった——本当に、」

左肩にもたれかかった少女が淡々と続ける。絡まったままの手に力がこもる。痛いくらいだった。

ああ。

楽しかった。嬉しかった。

ヤマシギの脳みその味、鹿の胎の温度、燻したヨモギの匂い、マンボウの刺身の歯ごたえ、ラツコ鍋の煮える音、頬の柔らかさ。何ひとつ失いたくない、大切な光だった。素晴らしい旅路だった。

だから守ってやりたかった、

「でも、また殺した」

“それ”が吐き捨てる。

ひゅ。乾いた喉が鳴る。

濡れた感覚。長襦袢の腹から染み出した鮮血が、床にまで滴っていた。鉄と、土と、獣の臭いが。消えない。ずっと。

殺した。穢した。

守ってやれなかった、

「……勇作……」

勇作。俺の弟。

会えて、嬉しかった。楽しかった。……はずなのに、どうして？

「最初から間違えていた」

違う、

「後悔するな」

違う！

俺は何も間違えてなどいない。

宙ぶらりのままではいられない。それでは生きていられない。人生に二度目の葬式は存在しない！

「百之助、大丈夫か？」

アシシが覗き込んでくる。いつの間にか、音楽は止んでいた。頭痛がひどい。

「……頭が痛え」

「たくさん汗はかいたし。もう横になって休んだほうがいい、」

「何だこれ」

「鉢巻」

「そりゃ見ればわかる」

その背後で似た顔がみつつ、ウイルタ族から手渡された——何か帯のようなものを眺めて話合っている。

促されるまま、柔らかい敷物に横たわって。その上から毛皮を掛けられた。

血濡れの少女たちとともに鉢巻を弄んでいたはずの“それ”は、既に隣へ寄り添うよ

うにして寝そべっている。

「子守唄でも歌ってやろうか」

要らない、と拒否する余裕もなく。俺の胸元を一定の間隔で叩きながら、  
“それが”どこかで聴いた歌を口ずさみ始める。

——行きはよいよい、帰りはこわい、

「……………」

聞き慣れた声で紡がれる、破綻のない美しい音色。柔らかく眠りに誘うその響き。

——ああ。やはりお前は。

ゆつくりと、瞼を閉じた。

荒野でひとり、空を仰いでいる。

「……………俺は愛のない妾の子だから、罪悪感なんて感じないんじゃないのか？」

暗いのに、どこか明るいその色。



夜だった。星は見えない。

吹き荒ぶ風が、冷たい。

「愛がない両親の間に出来た子どもは、何かが欠けているのでは？」

虚空に放られたその問い。答えるものは誰もいない。そう、思っていたのに。

あ。

息を呑む。——いつの間にか、誰かに抱きしめられていた。

「兄様はけしてそんな人じゃない！」

軍帽、肋骨服。美しい瞳から涙を流す花沢勇作が、俺を抱擁してそう言った。

力強く、温かかった。

「きつとわかる日が来ます、」

勇作殿。——勇作、

恐る恐る伸ばした両腕が。

「……っ、」

空を切った。

ふらつく。膝をつく。

先ほどまで確かに重なっていたはずの体温も、質量も、どこにもなく。もはや、その名残さえ欠片も見当たらない。

二度と還らぬ温もり。

そうだ、勇作は。

「百之助はそんな人間じゃない」

耳元で、そう囁かれた。

はつと我に返る。幼い少女の声だった。背中に腕の回りきらない小さな身体。

——タマ、

「いつかわかる日が来る」

冷たく、柔らかい声。

俺だけの優しい闇。

ああ。でも。でも、俺は。

「お前は、……お前だけは……」

そのためなら、俺はこれから何を失っても構わない。はつきりそう思えた。

だから。

抱きしめ返そうとして、

「もう遅い」

——突き飛ばされた。

一瞬で体が離れる。

既に、少女の姿はなく。『それ』が、冷えた無表情の底に確かな悲しみと憤りを滲ませて、肩越しにこちらを見下ろしていた。

尻餅は、つかなかった。

地面がない。ただ、真つ直ぐに奈落の底へと堕ちていく。——地獄へと。

遠ざかつていく『それ』が唇を歪めた。

笑ったみたいだな、と思った。

「いい加減目を醒ませよ。尾形」

すぐ耳元で声が聞こえた。

視線を上げる。

その瞳を、

「百之助」

瞼を、開けた。

誰かが枕元に腰掛けて、肩越しにこちらを見下ろしていた。

「……良かった、目が覚めて」

熱も下がったみたいだね。

冷たい手が額を撫でる。一瞬、小さく肩が跳ねる。けれど、その姿は。

「……タマ」

「うん？」

リボンで結ばれた黒鳶色の尾を揺らしながら、女が——タマが小首を傾げる。慈しむような、柔和な微笑み。

起き上がって、

「わ、」

その華奢な背に腕を回した。胸元に顔を埋める。横顔を小紋の袷目に押しつける。「どうしたの、百之助……」

タマは少し驚いていたようだったが、拒みはしなかった。優しく髪を撫でられる。

——鼓動が、聞こえる。

温かい血が内側に流れる音。魂の足音。ああ、生きている。

「驚かされていたよ。嫌な夢でも見た？」

その何気ない呟きを、噛みしめて飲み込む。そうだ。少し嫌な夢を見ただけだ。

あの悪霊はもう視えなかった。

不安が解けて、柔らかい温もりに包まれていく。甘い万能感が心地良かった。

彼女は生きて、ここに居る。

何も、恐れることはない。

「出発には、まだ時間があるし。もう少し寝ていても……」

「いや、」

やんわりと離れていこうとする体を、腕を伸ばして繋ぎとめる。

悪寒も、頭痛も、既に消えていた。満ち足りた気持ちで、彼女の耳に唇を寄せる。

「もう……大丈夫だ」

——そう。大丈夫なのだ。

何もかもが悪い夢で、幻。

だから、何の問題もない。

「問題は、ない」

ああ。

今度こそ。

## 36話 渡る世間は嘘ばかり

どれほど時間が経ったのか。

ヴァシリとのスナイパー対決を終えて戻ってきた尾形は、明らかに憔悴しているように見えた。

「随分と顔色悪いな、いつも悪いけど……」

櫓に腰掛けたまま微動だにしない尾形に、白石がおずおずと声を掛ける。

ひどい熱だ。額に手を当てたアシバが、驚いたようにそう呟いた。

俺はと言えば。……何と声をかけていいかわからず、少し離れた場所から彼をただ見ている。

とにかく、イレギュラーな中でも無事に戻ってきてくれて良かった。安心した。まずはじめにそう思ったが、今の俺にそんなことを言える資格はない気もした。

「……少し……雪をくちに過ぎただけだ……」

掠れて頼りない声に、どきりとする。

ラッコ鍋の時とは明らかに違う、憔悴しきったその姿。あの時も何となく体調が悪そうに見えていたが、今はその比ではない。

——風邪を引いても自分で戸棚から薬を出して服むような子どもだった。

もともと丈夫なほうなのだろうけど、病に臥せている様子は見たことがなかった。看病らしい看病などしたこともない。

ここまで弱っている姿を見るのは、初めてだった。何となく落ち着かない気持ちになつて、足を前に出す。尾形を囲む三人をやんわり掻き分けて、前に出た。

「……こんな熱、どうつてことな、……」

俯いて、地蔵のようだった尾形が微かな反応を見せた。俺に気づいたのか、ぎこちない動きで顔を上げる。

タマ。小さく唇が動いて、でも、それきりだった。

薄く開いた唇から、濃い白霧だけが音もなく漏れている。漏れ続けている。

「早く暖かいところで休ませたほうがいいな」

明らかに様子のおかしい尾形を見て、アシ×パがそう俺に耳打ちしてくる。

「……そうだね」

彼はまだこちらを見てはいるようだが、何も言つてこない。だいぶ衰弱しているようだ。

それと同時に、思うこと。

熱に浮かされる尾形百之助が見た「悪霊」。その肉体を死に至らしめた一撃の通り

に、額から血を流す花沢勇作少尉の幻覚。

彼の罪悪感の発露。

今も「それ」は目の前にいるのだろうか。

「……………」

黙ったままの彼に、唇を噛む。

やはり、言ってはくれないのだ。例え、そうだったとしても、事実をありのまま話して、泣きつくことが尾形にできたならば。

何かを注視しているようで、何も映してはいないその漆黒の瞳。

——尾形百之助。今のお前には、「何」が視えているんだ？

「これを頭からかぶれ！ 湯気に蒸されてたくさん汗をかけ。ヤイスマウカレという治療法だ」

狩りを先導してくれた親子のいところだという彼らの家を借りて、尾形を休ませること



になった。

上着を脱がせ、外套のフードを被らせて、スワシを煮出した汁の湯気を浴びせる。他所様の治療法に口出すのも何だけど、これ余計に弱っちやうんじやないでしようか。

「……なんだ？」

やがて、見慣れない装飾品をつけたウイルタ族の男がテントに入ってきた。何か太鼓のようなものを持っている。

「いとは『サマ』なんだそうだ」

いわゆる祈祷師みたいなもので、太鼓や歌で神に祈願をして、病人に取り憑く悪い化け物を取り去ってもらうらしい。

「賑やかにすれば神はより早く来てくれる」

「うるせえな」

マンボのノリでヨードプ——魚皮のマラカス——を振りたくる白石とアシ□パ。

サマの装備はもつと豪華で、太鼓の他にも金属製の腰飾りがとつても賑やかである。

「音楽は霊的なものであり、無意識に深く影響する」

患者に取り憑いている『何か』との因果を明らかにするんだ。

マンボな2人をよそに、優雅に煙管をふかしながら、キロランケが呟く。

「取り憑いている何か……」

どうしても、考えざるを得ない。

外套に包まれ、項垂れる尾形はやはり微動だにしていない。今の彼の目に、世界はどう映っているのだろうか。

「……………ふう、」

飽きたのか、疲れたのか。

おもむろに白石がヨードプを置き、席を立つ。

「ちよつくらウンチしてくるけど、アシ×パちゃんもう見ないでね」

いつもの軽い調子で言いながら、小屋の出入り口まで来たところで。

アシ×パに向かつて、立てた親指で外を指し示す。……………そうか。『話し合い』の時か。

「私もオソマー！」

「お手洗いって言え、アシ×パ」

すくつと立ったアシ×パが、彼の後を追うのを横目で眺めていたら、白石と目が合った。

ややシリアスなその表情は、「来ないのか」とこちらに問いかけているみたいで、でも、軽く微笑んで、拒否する。

——俺は、ここに残るよ。

——尾形を置いては行けない。

だから、お前は一人で行くんだ。

俺はもう、杉元佐一の代わりになってはやれないんだ。お前しかいないんだ。

「……………」

白石は、しばらくこちらを見つめていたようだったが、やがて、神妙な表情で、一度深く頷いた。その姿が夜の闇に消えていく。

——そうだ。それでいい、

これには結局、キロランケの邪魔が入るし。アシ×パが拒否して終わるけれど、それでも。その程度の話だとしても。

太鼓の音が鳴り響いている。

2人は帰って来ない。

「……………」

煙管を仕舞い込んだキロランケが、無言で立ち上がった。昏い瞳をしていた。

「行くのか？」

俺の呼びかけに、広い肩が小さく跳ねる。けれど、彼は動揺を露わにすることなく、こちらに背を向けたまま、続ける。

「白石由竹は……アシ×パを連れて俺から逃げるつもりだろう」

「知っている」

——ユルバルス。

哀しき孤高の虎。尾形は、陽気な彼が内側に抱える虚無感に共鳴したのかもしれない。

今、何となく思った。

俺の素っ気ない答えに、キロランケが低く喉を鳴らした。笑っているようにも聞こえた。

「……不死身の化け猫め、」

化け猫——キロランケは、アシ×パのふざけた初紹介をきちんと覚えていたのだな、とぼんやり考える。本当に、真面目な男だ。

「お前は……どこまで行くつもりなんだ？」

吐き捨てるような罵りから一転、彼がふと、思い出したように問いかけてくる。どことなく柔らかい響きだった。

——どこまで？

俺は、尾形百之助とともに、どこまで行けるのだろう。考えて、きつとそういうことではないのだろうか、と思った。

彼は、「覚悟」の話をしているのだ。

「地獄の底まで」

そこに至るかどうかは、あの函館駅行きの列車が決めることだ。

儀式として一通りの工程が済んだのか、サマが太鼓を叩くのをやめて少し経った頃。やけに神妙な顔つきの3人が帰ってきた。まあ、脱走するしないの話当事者交えてやってきたのだから、当然なのだが。

アシ~~ン~~パの勧めで、尾形はとりあえず横にならせる。その流れで頭が痛い、と漏らしたのがなんとも言えず可哀想だった。弱音なんか吐く子じやないのに。

「大丈夫か？」

「……寝たみたい」

呼吸が僅かに落ち着いてきた。汗ばんだ、安らかとは呼べないその寝顔を見つめる。「とにかく、少しでも熱が下がって良かったな。あのままでは体がおかしくなってしまう」

とりあえず一安心……したところで、サマが俺に何かを差し出してくる。

「……くれるのか？」

「セワ」というお守りだ。尾形がさつき頭が痛いと言っていたから……これを身につ

けると頭痛が治るんだそうだ」

木の皮を削り出して作ったらしい……何と言えいいのか、表面に人の顔のような傷がつけられている。手製のお守りかあ、

「とりあえず軍服のポケットに入れとこう」

「勝手に入れるんだ?」

原作だとこの後どうしたかの描写はなかった(白石のチンポは出てきたけど)が、せつかくの好意を無碍にするような真似はしたくないし。

畳んでおいた軍服の内側に手を入れて。

「……………」

——既に何か入っている。

薄っぺらい、紙のようなものが何枚かと、これは何だろう。束ねられた……縄? 紐

?

他に内容物は無いようだ。あつ、内容だけに……(激ウマギャグ)

「……………」

尾形の個人的な持ち物。気にならない訳ではなかったが、引つ張り出して勝手に検分するまで行くのは、さすがに無礼だろう。既に許可なくなんか入れちゃっている訳だけど。

中のモノを潰さないように気をつけつつセワを収めて、上着を畳み直す。

「フウツこれで良しっ」

「ほんとに〜?」

「白石には子どもの男性器のお守りをあげると言ってるぞ」

「エツ」

差し出される小さな木の棒。鈴口まで仔細に掘り込まれた珠玉の一品です。

「どうしてボクが遊郭に行った後、時々オチンチンが痛くなることを知ってるんですか？」

「いっそのこと性病でもげてしまったほうが平和だと思うぞ白石由竹。」

「子どもみたいなチンポしてるからじゃ?」

「いやらしい下品な顔だからだ」

「お前さつきから赤ん坊におっぱい飲ませるとこじろじろ見てるだろ」

「失礼なこと言うなッ」

と、言いつつ。

「……………」

「づッ」

性懲りもなくぢつと授乳風景を視姦する白石の脇腹に、軽く肘を入れておく。

痴漢、ダメ、ゼツタイ。

しかし実際、男性器のお守りって何を治したい時に使うんでしょうね。尿結石とか？  
「た、……タマちゃんこそ、怪我は大丈夫なのかよ？」

「掠めただけだ」

尾形を待っている間、簡単な手当てをしてもらったが、それでもう血も止まった。今は痛くもない。

「私より、百之助のほうが……」

原作通り行けば、翌朝には良くなっているはずだけれど。わかっではいても、いざ弱っているところを目の当たりにすると、心配というか。不安というか。

「熱は下がってきたし、このまま横になって休めばきつとすぐ良くなる」

膝を使って彼の枕元へにじり寄った俺の背中に、アシシパの気遣いがかけられる。

まあ、そうなんだろうけどねえ。

思いつつ、何度目か汗ばんだ額に手を伸ばそうとして。

「……勇、作」

乾いた唇からこぼれたその一言に。

世界から一瞬、色が消えた。

今、



「……………え、……………」

頭を鈍器で殴られたような衝撃だった。

何とか復帰して、思考を回す。

——今、この男は何と言った？

ゆうさく。勇作、

「ユウサク……………って、誰だ？」

凶らずも、同様にその謔言を耳にしていたらしいアシ□パの疑問で確信を得る。

今、尾形は「彼」の名前を。

「……………花沢勇作……………」

杉元、尾形両名からその面影を見出されておきながら。彼女自身はついぞ知ることのなかった人物。既に失われた輝き。

「自刃した第七師団長——花沢幸次郎の、正妻の子」

俺の眩きに、アシ□パが目を瞠った。賢い彼女は、網走監獄潜入直前の土方歳三の発言を、しっかり記憶していたらしい。

「じゃあ、」

「百之助にとつては異母弟にあたる。同じ師団に所属していて……………百之助にとつても懐いていたようだ」

とても懐いていた。そのワードに、今度はその大きな目を瞬いた。

二重螺旋をさらにねじったような性格の尾形、基本的に周囲の好感度はさんざんなもので。その中で、わかりやすく好意を示していたと評される身内の存在は、彼女の興味を惹いたらしい。

「その人は今……どうしてるんだ？」

好奇心を隠さないままに問われる。……でも、残念ながらその期待には応えられそうにもなかった。なぜなら、などと言うまでもなく、彼は。

「203高地で死んだ」

尾形が俺に告げた内容を、そのままそっくり差し出す。アシ×パが小さく息を呑んだ。

「私は顔を見たこともない」

俺が知っているのは、杉元と尾形の目を通して見た『偶像』としての花沢勇作だけだ。生身の彼については、何も知らない。

アシ×パが、重苦しく息を吐き出した。原作では知り得なかった事実には、彼女は心を痛めているように見えた。

「そう、か……百之助は戦争で家族を、……」

家族。自然に貼られたそのラベルに、一瞬、息が詰まった。何でもないふりをした。

「……百之助の弟なら、タマにとつても弟だな。どんな人だったんだろう。私も会ってみたかった」

アシシパはこちらを励ますような優しい微笑みを浮かべているが。正直なところ、俺の主たる関心は、もはや彼女には向いてはいなかった。

俺の意識の大半を占めていたのは。

アシシパから目を逸らし。顔を歪め、浅い呼吸を繰り返す尾形を、じつと見つめる。

「……………」

満身創痍の尾形百之助が、夢うつつに花沢勇作の名前を呼んだ。これは原作にも登場したシチュエーションである。

大問1。

ここから導き出される解を述べよ。

目を瞑る。息を、吐き出す。

「……きつと、お前みたいな優しい光ひとだったはずだよ」

翌朝。

これまでさんざん世話になった、ウイルタ族との別れの時が来た。

見ず知らずの尾形の不調にも親身になってくれた彼らは最後まで優しく、俺たちの助けになるだろう、とひとつお使いまで与えてくれた。

「大切な馴鹿を貸してくれてありがとう。……必ず兄弟に渡しておく」

北に住む兄弟に、飼馴鹿を一頭届けるといふ簡単なもの。

「アグダプシエー」

俺が習いたての礼を述べると、笑顔で肩を撫でてくれた。本当に、良い人たちだ。

「……………」

隣の尾形は、もうすっかりいつも通りの無表情。

結局あれから一晩眠って、目覚めたと思ったくらいいきなり抱きつかれた時は驚いたが、その真意はよくわからなかった。

——もう、大丈夫だ。

俺を抱きしめる尾形は憑き物が落ちたような雰囲気で、そう言ってみせた。

大丈夫。問題は、ない。

……何の話だ？

正直な話。原作で起きた花沢勇作とのあれこれを知っている俺は、この場面で出てきたその発言には、嫌な勘繰りをせずにはいられない訳だが。

——自分の中で勇作とのかたを振り切れた、という意味なのか？

罪悪感に蓋をして。俺という不完全な代替品で、彼の存在も記憶から塗り潰して。

杉元佐一の証言が頭をよぎる。

花沢勇作は即死ではなかった。これは少なくとも事実で、原作との明確な相違点だ。

——では、誰が勇作を殺したのだ？

……駄目だ。ここまで来ても、筋の通った仮説は生み出せそうにない。

だから、諦めた。

考えるのを諦めることにした。ここまで来ては、もはや単なる時間の無駄だ。

——希望的観測は、捨てろ。

尾形百之助が、花沢勇作を殺したのだ。

その「最悪」を想定して動くしかない。

俺は、それでも構わない。……この際、そう考えるしかない。尾形が、実際に欠けた人間にふさわしい道を選んでしまったとしても、受け入れるほかない。

俺は彼に高潔な人間になってほしかった訳ではない。清らかさとは罪悪感を生み出さないための単なる手段でしかない。

罪悪感を「乗り越えて」、普通の人間として生きおおせられる可能性があるのなら、全てを懸けて、その道を選び取ろう。

その選択に迷いは、無い。

——近くにいたキロランケは一番世話になった親子と二、三言会話を交わしていたようだったが。やがて、振り返り。

「……白石由竹。お前ともここで別れよう」

唐突に別れを促された白石だったが、彼は慌てなかった。……昨晚の件で、覚悟はしていたのだろう。

「お前が言う通り、俺はロシアではお尋ね者で、一緒にいればこれまでになく危険が伴うはずだ」

優しく、肩に手が置かれる。

「俺から『逃げる』必要なかねえんだぜ」

最初から部外者だと。

やんわり諭される。甘い毒だ。安心という蜜で舌が痺れてしまえば、その裏に潜んだ苦い無力感などどうでも良くなる。

アシ×パは、柔らかい無表情で白石を見上げていた。透き通った青の瞳には、怒りも悲しみも浮かんでいなかった。ただ、待っていた。

俯いた白石が、声を絞り出す。

「確かに……命あつての物種つてな。俺とアシ□パちゃんとは、背負つてるもんが違  
うわ」

投げやりな眩き。

アシ□パが、穏やかな笑みを浮かべた。わかっていた、と言わんばかりに。

「……お前にはいろいろ、」

「——でも——」

瞬間。白石が、声を張り上げた。

彼らしくもない、付け焼き刃の元気が空回っているようなトーンだった。

「ロシア側には金髪のおネエちゃんと遊べるところが、きつとたくさんあるんだろお？

　　白石由竹、世界を股にかける”……なんつってな！”

「……………」

その勢いに、最初は呆気にと取られた様子の彼女だったが。

「つたく……………」

やがて、嬉しさを隠しきれない年相応の苦笑を浮かべて、

「またチンポ痛くなっても知らないぞ!!」

「これがあるから大丈夫ッ！」

懐から取り出されたウイルタ族お手製のチンポが揺れる。おい、それは別に身代わり人形的な使い方をする訳じゃないだろ。

呆れつつ、彼の横顔を見ていたら。……また、目が合った。何となくデジャヴを感じた。

ふざけたベロ出しの顔でグッドサインでも見せてくるのかと思いきや、

「……………」

白石は、悲壮と呼べるくらいに張り詰めた——それでも優しい微笑みを浮かべて、俺を見つめ返してきた。

全く彼らしくない表情に、とっさに息が詰まる。肺が、上手く膨らまない。

予想外に大きな何かを見せつけられて、動揺してしまった。……でも、彼は俺との“約束”を果たしたに過ぎないのだ。

手のひらに、まだ彼の滑らかな頭皮の感触が残っている。

ああ。わかつているよ。

蟠っていた二酸化炭素を、ゆっくりと吐き出す。

「……………白石、」

白石由竹は、逃げなかった。

最初からここに残り、アシ箱パを守ることを選んだ。その根底を支えているもの。



そうだ。覚悟。

——覚悟だ、

「……………」

拳を、強く握る。

お前がそう言うなら、お前に託した俺が逃げる訳には行かないよな。

俺には、尾形百之助の選択を最期まで見届ける覚悟がある。

## 37話 恋は悪徳

「なんだ、この足跡?!」

ウイルタ族と別れて、森の中。

先に行くアシ□パが、そんな声を上げた。

「どうしたの?」

「見ろ、タマー!」

呼びかけたのは何となくだったが、アシ□パはわざわざこちらまで来て、俺の手を引いてその場所まで誘導してきた。

彼女が指差した先にはあったのは、銀世界に刻まれた肉球痕。大人の握り拳くらいはある。

「ネコ科の足跡だね」

「うん。メコみたいだけど、大きすぎる!」

「タマちゃんの足跡じゃない?」

「タマの足跡かあ」

「なんで?」

「どういふ思考機序で納得したんだよ。俺はどうぶつフォーゼする特殊能力なんか持つちやいないが。」

「……その足跡はオオヤマネコだ」

案内役として俺たちを先導していたキロランケが、振り返つてそんな解説。

それを聞いたアシ×パは露骨にテンションが上がった様子で、

「もしかしてこれがメコオヤシ!? アチャが昔話してくれた『ネコの化け物』はこのことだったのか!」

——メコオヤシ。

原作では、尾形に対する揶揄として持ち出されていたオオヤマネコだったが。

ウイルタ族のテントでの、キロランケの呟きを思い返す。彼は、俺を『不死身の化け猫』と呼んだ。おそらく、彼の頭にもメコオヤシが浮かんでいたのだろう。

——山猫のきようだいか。

片や芸者の息子、片や化け猫。血も所以も異なる身ながら、妙な符合が見えてきた。

「ウイルクと一度だけオオヤマネコを獲った。毛皮がものすごく高く売れたな」

「味は!?!」

「アクがすげえ多くて困ったよ。……お前の親父は不味そうな顔してた」

当然のように肉まで食ったこと前提で聞くアシ×パ、当然のように肉まで食っている

キロランケ（Withhウイルク）。肉食獣だから美味しい訳ないんですがね。寒冷地の狩猟民族は遅いな。

「そうか、ネコお化け美味しくなかったか……それも初めて聞くアチャの話だ」

食という身近な分野のエピソードが聞けたのが嬉しかったのか、頬を綻ばせるアシパ。キロランケはそれを無言で見つめていたが、

「……もつと知りたいか？」

昔のウイルクをよく知っている人間がいる。餌に食いついた獲物の手ごたえを感じたらしいキロランケが、優しい微笑みをカムフラージュにそれを手繰り寄せる。

「会いたくないか、アシパ」

「……、どこにいるんだ？」

思惑通り手中に収まったアシパに、笑みを深めた彼が言うには。

——国境を越えた先の港町、アレクサンドロフスクサハリンスキー。『彼女』は、その通称『亜港』の監獄に収監されている。

証拠がないため処刑には至らず、しかし現在まで密かに幽閉されている、ロシア皇帝暗殺の首謀者——ソフィア・ゴールデンハンド。

「女囚？ 親玉は女だったのか」

「彼女なら、俺も知らないウイルクを知っているはずだ」

「つ、……………」

シリアスモードなどところ悪いが、この辺の話はマジで俺に関係ないので、俺は尾形と一緒に森を見ていた。当事者意識ゼロですまん。

「……………」

「お腹空いたな…………ん、」

何となく眺めていた林の奥から、警戒心なくのつそりと姿を現した四つ足の毛の塊。鹿でも熊でも虎でもなく。

この赤い毛並みに斑模様は、

「メコオヤシだっ!!」

「エエツ」

とつさの俺の発言に、少し離れた場所にいた3人が纏めて振り返り、隣の尾形は小銃を構える。これマジ？ いや原作でも見かけていたのだけ、

「撃て百之助っ」

アシ×パの口から放たれた号砲に続いて、三八式の射撃音が静かな林中に木霊した。

「せっかくだから、獲れたメコオヤシを食べよう」

尾形が一発で仕留めたオオヤマネコ、貴重な資金源である毛皮をまず丁寧に剥いで。余った肉はどうするのかと言えば——まあ、アシ×パの上記の発言である。

「ええ、食べるのおくく……？ 毛皮だけでいいじゃあん……」

「アクがヤバくてクソ不味い」という前情報を既に得てしまっている白石、普通に難色を示してくる。ワイトもそう思います。

「タマもネコお化け食べたいよな？」

「え……いや……」

お目々きらきらアシ×パ。俺らがオオヤマネコ食べたなら共食……いや何でもないです。

「まあまあ……オオヤマネコ食べる機会なんてなかなかないぞ？ 不味かったけど」

「不味いんじゃない！ 不味いんじゃない！」

ぶつ切りにされた肉が煮える鍋にぶち込まれる。筋が多くて既に微妙な雰囲気。

「アクがすごいぞッ」

「他の具入れなくて良かったな」

白石と2人でせつせとアクを掬う。これだけ苦勞しても多分この肉不味いんだろうな、という想定がテンションを下げてくる。

で、煮えて。申し訳程度にギョウジャニンニクとニンソウを加えたオオヤマネコ汁

を、実食。

「うーん……」

「……硬いな」

「獣臭い」

「……………」

当然ながらさんざんな評価。あの、ラッコ鍋よりはまだマシ……うーん……うん。

「うん……美味くはねえけど、懐かしい味だな。どうだ、アシ×パ」

「美味しくない！ でも……アチャと同じものを食べられて、嬉しい」

ヒンナ。そう言って、笑顔を見せるアシ×パ。キロランケも微笑み返したところで、

隣の尾形がぼそつと、

「ヒンナ」

えこここで？

当然、網走監獄でのチタタ×？並みの反応を見せるアシ×パ。尾形が言った！

「百之助……今ヒンナって言った？ もう一回言えるか!? ほら！」

「……………」

「言ったよな？ 百之助今ヒンナって言ったよな!？」

「……………」

「……………」

テンション爆上げのアシ~~ク~~パとは対照的に、クソどうでもいい展開にチベスナ顔になつてしまう男2人。

「タマ、聞いてたか!? 百之助が!」

「聞いてたよ」

いやまあ……ファーストヒンナがこんなクソ不味い肉の共食いで良かったんですかね? この後シロイルカ食べるのに。

とつびんぱらりんのぶう。

亜港にて。

とある事情から、ここに暮らすニヴフ民族の集落に滞在することを余儀なくされていた俺たちは、ようやく出立の時を迎えていた。

「待つていたものがついに来た」



聳り立つ崖の上で、タタールの海を見下ろす。普段は穏やかな青が広がっているだけのそこには、今や。

「『流氷』が来るのを待っていた。……もうすぐこの海峡は氷に覆われ、樺太島は大陸と繋がる」

ほとんどが白く覆われたその海面を見つめて、キロランケが厳かに呟いた。

彼の立てた計画とは。

——まず、今回の最大の目的は、亜港監獄のソフィア・ゴルドンハンドを脱獄させ、アシンバと引き合わせることに。

その際、隠れ蓑とするため、監獄の囚人250人全てを脱獄させる。岬にある燈台に支給された爆弾を利用して、複数の外壁を一斉に爆発させることによって。

その後は、海峡に張った氷の上を通過してユーラシア大陸に渡る。そういう計画だった。

そして、決行当日の夜明け。

その時が、来て。

——ドンッ。

亜港に鳴り響いた爆発音は、ひとつだった。

「……、爆発しない、」

目の前で、音もなく消えた灯火。

仕掛けたのは、海峡に面した壁の4箇所。俺とアシ×パが割り当てられた箇所の爆薬は——つまり、不発に終わった。

これは確か、原作と同じ展開だけれど。目の前で起こるとそこそこ焦るものだ。アシ×パが俺の袖を引く。

「爆発したのはキロランケニ×パのところだけだ、」

とにかく、合流しないと。

「……そうだな」

彼女の手を引いて、唯一爆煙が立ち昇るキロランケのポイントまで走る。

俺たちが着く頃には、既に全員がその場に集合していた。不測の事態に、皆一様に焦った顔をしている。

「くそ……爆薬の保存状態が良くなかったか!？」

しかし、起こってしまったトラブルはもうしょうがない。

脱出箇所がひとつに絞られてしまったが、近い位置にいる囚人はそこから出てくるはずだ。……と、思いきや。

静まり返ったままの外壁の穴を見つめて、尾形が呟く。

「妙だな」

コナンくん？

「誰も出てこないぞ……何か起きたのか？」

「……………」

何か。——この時、亜港監獄内には空いた穴からアムールトラが侵入しており、看守も囚人も巻き込んだパニックが発生しているはずだ。

「……もう一度爆薬を仕掛け直す！」

言い放ったキロランケが走り出す。

その背中を、追いかける。

ここまで、どれだけの時間をかけて、どれだけのものを犠牲にしてきたのか。こんなところで終われない。立ち止まってはられない。……その気持ちは、痛いほどわかった。

三十年式のスリングを、強く握りしめる。その肩にやんわり置かれる手。振り返る。

「……百之助」

尾形が、帽子の下から柔らかい無表情で俺を見下ろしていた。

「大丈夫だ」

落ち着いた声。

冷たいそれが首筋を通って、親指の腹が頬を撫でてくる。優しく、慈しむように。

「全て、上手くいく」

囁くような声音に、なぜか一瞬、背筋に悪寒のようなものが走った。それから目を逸らす。

「……うん、」

何もかも、上手くいってほしい。

お前と一緒に。

頬の手に、手を重なる。ここを終着点にはしたくない。お前だってそうだろう？

そうであつて欲しかった。

——ドドン。

「……!!」

近い場所で再び地鳴りと、轟音。

キロランケが仕掛けた二度目の爆薬は、無事起爆したらしい。もうひとつ穴が空いて、そこから人間が溢れ出してくる。それが見える。

「よし、」

立ち尽くす俺たちの脇をすり抜け、走り去っていく囚人たち。ほとんどが男だ。

俺たちはまだ移動できない。肝心の女囚と、まだ巡り会えていない。

……しかし、お目当ては、向こうからやって来てくれた。

「誰かこつちに来る」

「え？」

癖の強い黒髪を三つ編みに纏め、花柄のキャミソールワンピースを身につけた——とだけ描写すると可憐な田舎娘のような雰囲気だが。彼女の印象は……ひとことで例えると、ロシアのドーラ。

そんな彼女——ソフィア・ゴールデンハンドが、こちらに近づいてきていた。

歩きたびに小規模な地鳴りが起こっていきそうなその屈強頑健な体格は、キロランケから事前に聞いていた義賊の長という肩書きにこれ以上ない説得力を与えている。姫ではなく長。まさしく。

「その服……樺太アイヌ、」

ソフィアが開口一番呟いたそのセリフに、北海道のアイヌであるアシ□パは怪訝な顔。

「……？ 違うぞ？」

そんなアシ□パには構わず、ソフィアはゆっくり続ける。懐かしいものを見る目だった。

「ウイルク見せてくれた……子どものトキ着た…… “テタラペ”」

そこで、息を呑み。

ああ、と声を上げる。

「ソノ目……ウイルクの目……」

父譲りの青い目。ソフィアの表情が、勇猛な義賊の顔から、古い仲間を慈しむ年長者の顔に変わる。

その眩きに、アシ×パの表情も緩み。

「……ソフィアか？」

「アシ×パ、」

愛した同胞。愛した父親。同じ男の存在を以て通じ合った女2人が見つめ合う中。

「え？　なんか想像と違うッ」

余計なことと言うな白石。過去編で若かりし頃のソフィアを見た読者はみんな思ってたよ。

「——ソフィア？」

やってきたキロランケの眩きに、ソフィアが顔を上げた。視線が、ぶつかる。

運命の悪戯か、あるいは必然か。数十年前、同じ場所で別れた彼らが、再びこの地で巡り合った。ただ、ピースが足りない。欠けたそのひとつは、もはや二度と戻らない。

「……………」

しばし、無言で見つめ合い。  
そして。

「めっちゃくちゃいい女になったな、」

「……………」

「……………」

デブ専キロランケ、迫真の私情吐露。隣の男2人が瞬時にチベスナ顔で彼を見上げる。ワタシ、デブ女スキデース。

「Юлбаpc……………」

しかし、女をとうに捨てたソフィアはそんな既婚子持ちデブ専からのストライク判定などクソどうでもいいらしく、彼の名をしみじみと呟いて。

バチン。

次の瞬間には、キロランケの頬にその分厚い手のひらを打ちつけていた。情け容赦ない一撃だった。

「?」

突然の暴挙にアシ×パたちは呆気にとられていたが、俺にはその理由がわかってしまった。……あれは愛した男を自らのエゴで殺めた彼に対する、抑えきれない怒りが噴出した結果だった。

それでも彼女は、キロランケを許していたのだろう。少なくとも、その努力はしようとしていた。あのビンタは、けじめとしての一撃だった。

「どうして叩くんのだ？」

「ロシア式あいさつかもしれない」

「絶対違うでしょ」

ぶたれたキロランケは、無言で彼女を見つめている。その痛みを甘受しているようにも見えた。それは彼の覚悟の現れだったのだろう。

キロランケは、俺や白石と同じ。

覚悟をしている人間だ。

「……………」

大混乱の亜港監獄を離れ。完全に氷の張った海峡の上を、6人で進む。

背後をこまめに確認していた白石が、ようやくこちらにしつかり向き直って笑った。

「上手くいった！ 誰も追ってこねえ、脱獄決行を漁師の多い明け方にして正解だった

！」

そう。早朝の流氷原には、俺たち以外にもたくさんの人影がいる。



彼らは漁に出てきたニヴフ民族たち。キロランケは亜港監獄だけではなく、ここにもひとつ目眩しを用意していたのだ。

振り返つても、もう港町は薄ぼんやりとしか見えないう距離まで来た。ある程度安全は確保されたとみたか、アシ×パが口を開く。

「ソフィア……私の父のことを教えてほしい」

あなたしか知らないアチャのことを。

キロランケが翻訳して伝え、ソフィアが優しい笑みを見せる。そうして、彼女は語り出した。

「……………」

しかし、今の俺はそれどころではなかった。

はあ。深く、息を吐き出す。

とうとう流水の上まで来てしまった。

時間がない。何とか、尾形をアシ×パに接触させないまま、杉元と合流しなければ。いや。最悪、合流しなくていい。

彼に無事、アシ×パを引き渡せればそれでいい。俺はもう彼らに会えなくてもいい。それだけが、とにかく目標だ。

顔を上げる。尾形の横顔が見える。

まだ、欠けていない右目。

——俺が、守らなくては。

お前は。お前だけは。

そのためなら、俺はこれから何を失っても構わないんだ——尾形百之助。

### 38話 誰かを愛するということ、誰かを愛さないということである

「……雪、」

帽子で狭まった視界に舞う、白いもの。手袋の手のひらで、それを受け止める。流水原に、雪が降り出した。

あれからどれほど歩いたのか。どこもかしこも真つ白な中では東西南北もあつたものではない気もするが、先導するキロランケとソフィアは迷いなく前へ進んでいる。

「見ろ、アシ×パ！」

おもむろに立ち止まったキロランケが声を上げた。指差す先には流水を渡る、

「オオカミだ……」

褐色の毛並みをしたその群れを、どこか懐かしいものを見る目で眺めるアシ×パ。

「こつちに来るか？」

「大丈夫だろう。トナカイを追っていたのはあいつらかな？」

対照的に物騒な尾形とキロランケのやり取り。まあ、大型肉食獣ですからね。

三八式を再びお包みに仕舞い込むのを何となく観察していたら。目が合った。

尾形が、表情を薄く緩める。

「寒くないか、タマ」

「……私は大丈夫」

……尾形は、ヴァシリとの一件から妙に俺に優しい。

それが何となく怪しい——と思ってしまうのは、俺が彼を未だに信用できていないだけ、なのだろうか？ あんなに傷つけておきながら。

「……………」

オオカミ。それを見つめるソフィアが、再びウイルクとの思い出話を始める。

——ウイルクは、オオカミが好きだった。

純粹な、無駄のない機能美。彼はオオカミに憧れていた。

彼の判断はいつでも合理的で、迷いがなかった。瀕死の仲間の息を絶つことが正解への最短経路だとすれば、それを躊躇なく実行できる人間だった。

“ウイルク”の名前の由来とは。

アイヌの子であつた彼の名もまた、幼少期の行動からつけられている。

オオカミに憧れて。オオカミになりたくて。屍から剥いだ皮を被って走り回る我が子に、ポーランド人の父が与えた名前。

「……“ウイルク”はポーランド語で、“オオカミ”という意味だそうだ」

ソフィアのその翻訳を聞いたアシ×パが、目を見開く。ああ。俺も今、はつきりと思出した。

ウイルクの名前の由来。

母親であるリラッテの話。

彼女が与えた、アイヌ語の名前。

アシ×パの中で、蓋をしていたそれらの思い出が唐突にフラッシュバックして。

——ホ×ケウオ×コニ。

今までの刺青に刻まれていた漢字たち。杉元に教わった読み仮名の響きが、その文字列に接続する。そして、

「……………あッ!!」

繋がった。

思わず漏れたその声は、吹き始めた寒風に攫われて、誰の耳にも届かなかった。

——尾形百之助を除いては。

「……………」

尾形は、じつとアシ×パを見つめていた。今に限った話ではない。彼はずっと、アシ×パの拳動を監視していたのだ。狙撃手が執拗に獲物の好機を狙うように。

喪失の悲しみを反芻して涙をこぼすアシ×パの前に。立ちはだかる影。

彼女が目元を拭って顔を上げたのと同時に、尾形がこちらを振り返って呟く。

「……急がないと、風も出てきたぞ」

「雪も風も強くなつてきやがった、」

海での天候の移り変わりは早い。

それから少しもしないうちに辺りは薄暗くなり、進行の継続が困難なほどに空模様が崩れてきた。大雪山を思い出す荒れた天気だ。

今のところの、大きな変更点。

……白石由竹は、はぐれていない。

彼は重苦しい表情のまま、アシ×パの隣から離れようとしなない。

「避難するしかない。ここでやり過ぎそう」

流水同士がぶつかり合い、隆起した巨大な破片の裏に荷物を下ろすキロランケ。

「流木がある、燃やして暖まろう」

「氷を積んで風除けにするぞ」

ぐしゅつ。……くしやみが漏れた。

尾形を監視しておきたいところだが、俺も正直、寒くてそれどころじゃない。アシ×  
パは白石と話しながら流木を拾っているし、今のところは大丈夫だろう。

そう、思ったところで。

「タマー！」

声が、後ろから飛んできた。

びくつと跳ねかかった体を押さえ込み。ゆっくり振り返る。

「もっと流木がないか、探してこよう」

尾形が、俺に向かって手を伸ばしていた。

「……………」

少し、悩んで。

そちらに足を向ける。

——アシ×パではなく、俺。

その違いについて思考を巡らせてしまうのは、考えすぎ、なのだろうか。

俺は、どうしたらいいんだろう。

どうするべきなのだろう。

——尾形は、アシ×パに声をかけなかった。

——金塊を見つけて成り上がるなんて馬鹿な夢は、諦めてくれたんじゃないのか？

「……………」

淡い期待とも呼べない、微かな希望。

「…………馬鹿げてるよな、」

その通りだ。

でも、本当にそうなってくれたら。

そうであってくれたら。俺は。

考えながら、尾形に連れられた先で、とりあえず流木を探す。……寒い。寒かった。

「…………あつた、」

鼻を啜りつつ、比較的小さな流木の破片に手を伸ばしたところで。

「タマ」

振り返る。

尾形が、俺を見下ろしていた。

——嫌な予感がした。

なに、と聞くより早く。

「アシ<sup>□</sup>パは暗号の鍵を思い出した、」

どくん。心臓が大きく脈打つ。



尾形は、やはり気づいていた。

それは原作の通りで、俺も把握していた。けれど。しかし。混乱が収まらない。また。まただ、

——なぜ……それをアシ×パではなく、俺に言うんだ？

「百之助、」

「お前なら聞き出せる」

聞き出せる。

——今、何と、

「は……」

息が、止まった。

尾形は、金塊を諦めてなどいなかった。

この男は、自らの手でアシ×パから答えを引き出すより、彼女が「信頼する」俺を利用して、その鍵を手に入れる道を選んだ。

より、効率良く。賢く。

ああ、尾形百之助。

「……なん……で、いきなり……」

とつさに口からこぼれた狼狽。しかし、尾形はそれには構わず、続ける。

「俺たちだけで逃げよう」

——逃げよう？

そう、か。

嘘でもなんでも、今はそう言っておかなければ信用は得られないものな。もし、鍵を手に入れた彼が俺を見捨てるつもりだったとしても。

おかしいな、妙に冷静じゃないか。

「キロランケは危険だ。暗号の鍵を聞き出したら、アシ×パのことも殺すかもしれない。あのアイヌの娘がそうなってもいいのか？」

尾形の熱弁を、俺はいやに冷めた気持ちで聞いていた。今も心臓が弾け飛びそうなくらい鼓動は騒がしくて、息は整わないのに、心の奥底だけが凍りついている。

キロランケは危険で、アシ×パが殺されるかも……やはり、その角度から攻めてくるのか。俺にとっても、アシ×パは“大切”だから。

黙っている俺に、何を思ったか。

「っ、」

いきなり。

強く、抱きしめられた。

吹き荒ぶ横殴りの雪から遮られて、彼の温もりを感じる。耳元で、囁かれる。

「……お前をこれ以上危険な目に遭わせたくないんだ。ようやく気づいた。お前以上に大切なものなんてない。アシ~~ン~~パを逃して、俺たちが生きていけるだけのカネを手に入れて……この争奪戦から上がろう、タマ」

ああ、尾形――

……本当に、そう思っているのか？

――ドオオン。

遠くで、銃声が聞こえた。

速やかに俺の体を離れた尾形が、懐から取り出した双眼鏡越しにそちらを見る。

しばらく、そうしていたかと思えば。

「……………」

無言で双眼鏡を下ろし。

……代わりに、三八式を取り出した。ボルトを操作し、ホワイトアウトした地平線目掛けて構える。

「……………どうしたの……………」

問いかけつつ、俺の内心には、新たな光が灯っていた。尾形のこの反応。生きていたんだ、

――不死身の杉元……………！

胸を撫で下ろすと同時に、気が引き締まる。

何としてでも、尾形と出会う前にアシ×パと会わせなければ。白石は上手くやっただろうか？

しかし、俺の思考など知る由もない尾形は銃を下ろし。

「……行くぞ、タマ。お前がアシ×パを連れ出すんだ」

手を、強く握られる。引つ張られる。痛い。手首から抜けてしまいそうだ。

「つ、待って、百之助……！」

このままではマズい。アシ×パのところに行く訳には行かない。

何か言わないと。

時間を、稼がないと、

「キロランケが、」

「あいつはお前を殺したッ！」

——怒号。

理解するのに、ワントテンポ要した。

肩越しにこちらを振り返った尾形が、その声を荒げていた。見たことのない表情。聞いたことのない声だった。尾形は、本気で怒っていた。

「っ、」

肩を掴まれる。指が、食い込む。

黒い瞳が至近距離で揺れている。

「お前は、杉元からアシ×パのことを頼まれていたんじゃないのか!」  
尖った歯並びを剥き出しにした彼が、激しく吼えた。血の気の薄い頬が紅潮している。

これは、演技などではない。

はつきり思った。

いつも平常心を装っていた彼が。醜い激情を露わにすることも厭わず、俺に。

彼の本心はどこにある?!

焦りが、波紋のように広がっていく。

——どうしよう。

——どうしたらいい、

「……ッ、……」

尾形。苦しい。息ができない。

ぐるぐる、ぐるぐると白が廻る。

助けてほしかった。俺は何をすべきなんだろう。

尾形も苦しそうだった。

助けてあげたかった。俺は何をしてあげられるんだろう、

「尾形、おれ、……俺は……」

その、瞬間。

「」

尾形が、大きく目を見開いた。

開かれた唇が、戦慄く。

震える手が、肩から離される。かと思えば、ふらつきながら後ずさる。いきなり。

——明らかに、異常な反応だった。

揺れる瞳が、逸らされる。

何かを探すように、雪原を彷徨う。

「……え、」

尾形はもう俺から目を合わせようとはしない。 “何か” を、必死に探している。

「……っ、タマ……どこだ、」

探しているのは——俺？

そんな。……どうということだ？

「尾形、」

「ツ、ついてくるな！」

恐る恐る伸ばした手は、ヒステリックに振り払われた。——怯えている？

俺が、二の句に迷っている間にも。

そのまま、見当違いの方角に駆けていこうとする背中。見失ってしまう、

「行くな尾形ツ！」

瞬間。その背が、大きく跳ねた。

ワンテンポ置いて、

「……………っ、」

ゆらりと、振り返る。忌々しげな、悍ましいものを見る目が、俺に向けられる。

「邪魔ばかりしやがって、この悪霊が……」

悪霊。俺を睨みつける尾形は、はつきりとそう言った。

「悪霊……？」

何のことだ？

まず初めに浮かんだのは、花沢勇作の存在だった。けれど、花沢少尉殿は撃たれて死んだ、とあつけらかんと語った尾形からは、原作のような執着心は読み取れなかった。わからない。

……待て、尾形は俺の姿を見て「悪霊」と口にしたのか？

どくどくと、心臓がうるさい。

そんな。まさか。でも。

冷や汗が、頬を伝う。

いや……これは、もしもの話だ。

もし。もしも、今世の尾形百之助が見ていた幻覚が、自ら手に掛けた花沢勇作ではないとしたら——

「タマ、百之助ッ！ どこだ？ どこにいる!？」

背後から、声がした。

ああ。幻覚であつてほしかった。

今、一番会いたくない人物、

「……アシ□バ」

思わず、振り返った先。

流水原に立つ彼女は、案の定ひとりだった。——白石由竹は、どこに行つた？

どくん。また、心臓が跳ねる。

対照的に、俺と目が合ったアシ□バは、ほっと表情を緩めて。

……その直後に、激しく強張らせた。

「タマ、後ろッ！」



後ろ？

何気なく振り返って。

——尾形百之助が、構えた三八式の銃口を、こちらに向けていた。

……こちらに向けていた？

あ。

——パンツ。

思ったより、軽い音が鳴って。

肩に、隕石が落ちてきた。

それくらいのは衝撃だった。

脱力していた身体は、簡単にひっくり返って。流水に、背中から倒れ込む。

「い……っ、う……」

——熱い。

とつさに左肩へ目をやる。鎖骨の下、腋の近く。穴が空いて、縁が焦げてしまった外套。その下から広がる、赤い、

「タマツ!!」

アシ×パの声が聞こえる。

引き裂かれるような、悲痛な叫びだった。聞いているこちらの胸が痛くなるような。

「タマ、……タマっ……」

声が近くなつて、視線がやや高くなる。彼女に抱き起こされたのだ、と少し経つて気づいた。鼻を吸りながら、彼女が吼える。尾形のように。

「どうして撃つたッ！」

潤んだ青の瞳から。

尾形に、視線を移す。

啞然。——なぜか彼は、まさにそんな形容詞が相応しい、間の抜けた顔で俺を見つめていた。

まるで全く予想外のことが起きたみたいなの、いつそ無防備な表情。冷や汗が、その頬を伝つたのが見えた。

長い長い、沈黙が流れて。

三八式を握る脱力した両腕に、力がこもる。

はあ。深く、息を吐き出す。開き切つた瞳孔が、改めてこちらを見据えてくる。

「……………、どけ、そいつは化け物だ」

丁寧な手つきで、排莖。

再装填。がちん、とボルトが鳴る。

「お前みたいなのがこの世にいて良いはずがないんだ……これが『道理』だ、」

名前のない激情が弾倉に込められ、後付けの理由がその雷管を叩く。あとは引き鉄を引くだけだ。

そこにもはや理屈はいらない。準備は全て整ってしまったのだから。それが、尾形百之助という男だった。

「っ、……………」

もはや、対話は不可能。

アシ×パはその判断してしまったのだろう。細い指が背後に伸びたかと思えば、もう次の瞬間にはその矢尻が尾形を捉えていた。迷いのない動きだった。

キリキリと、耳障りな音を立てて和弓が引き絞られる。トリカブトの猛毒が仕込まれた矢。当たれば死ぬ。

アシ×パは尾形を殺す気なのか？

他でもない俺なんかを守るためだけに。

尾形は黙っている。彼女相手に原作のような問答を仕掛ける気分ではないようだ。勇作とアシ×パを重ねていない？ そもそも前提条件が違う。

駄目だ、考えが纏まらない！

「…………アシ×パ、だめだ、やめろ…………」

「っ、タマ…………動かないで、」

氣遣う声音を出しながらも、アシ×パは尾形から目を離さない。番えた弓が降ろされることもない。

クソ、撃たれた箇所が酷く痛む。

なぜ急所を外した？

あの距離ならば頭でも胸でも好きな場所を撃ち抜けたはずだ。偶然か、計算のうにか。死ねば俺の特異体質が露見する。それを恐れたのか？ あるいは別の思惑がある？

この男は何を考えている。

今この瞬間になつてさえちつともわからない。わからなかった。

「尾形……」

力を振り絞って呼びかける。

びく、と微かに肩が震えて。でもそれだけだった。

尾形は、青褪めて汗に濡れた顔に確かな憤怒を滲ませながら、改めて三十八年式歩兵銃を構え直す。

「俺は罪悪感など覚ええない……！ 後悔などしていないッ！」

証明終了。

ああ——結局、何をやってもお前はそこに行き着いてしまうのか、尾形百之助？

「——尾形ア!!」

瞼を閉じた、その瞬間。

般若の怒号が大気を震わせた。

俺の前に立ちはだかるアシ×バが、華奢な体を跳ねさせる。

風切り音が、微かに聞こえたような気がした。しただけだった。

ぐらつと、尾形の身体が傾いで。

——毒矢が右眼に突き刺さったその頭が、氷に落ちる前に。手が、きっちり撫でつけられた黒髪を、乱暴に驚掴んだ。

パチン。折り畳みナイフを開く音。

杉元佐一が、尾形の身体に押し掛かっていた。

「ッ、……………」

取り返しをつかないその結果に崩折れ、手を震わせるアシ×バの前で。躊躇なく眼球を抉り出し、口をつける。猛毒を吸い出し、吐き捨てる。それを、繰り返す。

尾形百之助が。

狙撃手の、利き眼が。

ゴミのように。汚いもののように。二度と還らない。戻りはしない。

見覚えのある光景だった。

ああ——あ、あ、

「この流れでは死なせねえぞ、」

トレードマークだった外套を、裂く。

「あの子を人殺しにはさせねえ……お前なんかの“死”に、これっぽっちも関わらせるもんかよ！」

即席の包帯が、その目元全体に巻かれる。そこまでして、杉元佐一が、ようやくこちらを振り返った。

目が、合う。

「……尾形が撃ったのか」

近づいてきて、すぐ近くに膝をついた彼が、震えの収まらないアシ×パに問いかけた。しゃくり上げる彼女は呼吸も整わない中、途切れ途切れに、

「わたし、じゃない……タマを、殺そうとして、」

そこで、言葉に詰まったアシ×パが。

タマ。いやだ。濡れた声で縋りついてくる。今にも泣いてしまいそうだった。

——左肩の付け根。

鯉登少尉が杉元に刺し貫かれた位置に近い。ただ、あちらは刺突なのに対して、こち

らはかなりの近距離から撃たれている。

……助からないかもしれない。

客観的に見て、そうだった。

杉元の喉が、上下する。

「早く、止血して……医者に診せねえと、」

俺を抱き起こし、再び歯で外套を裂いた杉元が、慣れた手つきで患部にそれを巻きつけてくる。

痛い。熱くてたまらない。左肩から先が吹き飛んでしまったんじゃないか。動かない。感覚が、ない。

考えなければいけないことはたくさんあるはずなのに、あたまが、回らない、

「……嘘だろ、」

いつの間にか。

青ざめた表情の白石由竹が近くにいて、俺を見下ろしていた。

「タマちゃん」

呟いて、崩折れるように膝をついて。震える手が、俺の肩に触れる。悲しそうな顔。

「ごめん。……ごめんな、」

……何を謝っているのだろう。

よく、わからなかった。

ああ。いつの間にか雪は止んでいた。雲間から射し込む光を、ぼうつと見上げる。綺麗だ。綺麗な景色だ。

お前と見たかった、

「……おがた……」

「あいつは絶対に死なせない、」

俺の呟きに、杉元が力強く答えた。

それを聞いて、確かに思った。良かった。戻ってきたんだな。不死身の杉元。

「杉元佐一、」

震える手を伸ばして、その顔に触れる。赤い筋が、強張った頬に引かれる。

笑みとは程遠い、眉を蹙め、唇をきつく引き結んだその表情。彼らしくもない。

「お前が生きていて……よかった、」

「……タマさん、」

まだ、そう呼んでくれるのか。

優しい男。

「そんな顔するなよ」

せつかく、アシパと会えたのに。



白石も無事だったのに。

お前の旅はこれからなのに。

「笑って」

尾形の目を抉つても、お前はアシ□パとの再会でちゃんと笑えたじゃないか。これは何よりも望んでいた出来事じゃなかったのか？

どうして？

俺だつて尾形と同じ存在だろう。

悲しむようなことは何も無いはずだ。

だから。あの太陽みたいな明るい笑顔を、またみんなに見せてくれよ、

杉元。

「……………」

唇を、震わせて。軍帽の鍔を引き下げた杉元はもう、何も言わなかった。

白石が無言で顔を逸らす。

アシ□パの啜り泣きだけが、静かになった流氷原に木霊している。

誰も笑っていないかった。——今は、それだけがただ、悲しくてたまらなかった。

## 39話 その残光を見よ

「……行こう」

永遠にも思えた氷上の沈黙。

それを打ち破って声を上げたのは、やはり杉元佐一だった。

「タマさん」

顎が上がって。軍帽の鏝から露わになった琥珀色が、俺を見下ろしてくる。

先ほどまでとは違う。

眩い、晴天の瞳。

ああ。懐かしい気持ちになった。あのホテルから、随分と遠くまで来てしまった気がする。

けれど、お前は変わらないでいてくれたんだね。

俺の光であり、希望。

「、」

そうだ。

脱力していた四肢に、力が籠る。

まだ光は消えていない。

まだ。まだ……死ねない、

「行くぞ白石……アシ□パさん」

呟いた杉元が、俺を抱き上げる。あの時よりも丁寧にしつかりと抱えられて、それが悲しくも、嬉しくもあつた。

——けれど。

「……………」

それではいけない。

杉元が俺を抱えてしまったら、意識のない尾形を運べる人間がいなくなってしまう。

「すぎもと、」

何とか動く右腕を持ち上げて、ぼろ切れのように打ち捨てられたままの尾形を指差す。

——彼が俺を気遣ってくれているのは、痛いほどわかった。けれど、駄目なのだ。

すぐに俺が意図するところがわかったらしい杉元は、ゆつくりと目を瞠って。

声にならない唸りが、その喉奥から漏れ出した。憤怒。焦燥。悲壮。色とりどりの感情がぐちゃぐちゃに入り混じったその吐息が、一瞬だけ白霧を成してすぐに掻き消える。

「くくくくッ、くそ、」

吐き捨てた彼が、語気の荒さとは対照的に、緩慢な動きで膝を折った。慎重な、壊れ物を扱うような手つきで氷上に降ろされる。視界が歪む。ふらつく身体。

それを受け止める、

「タマちゃん、」

白石由竹——憔悴しきつた横顔が、痛々しかった。胴体に腕が回って、支えられる。

「ああ……俺のせいだよな、あんなだけ頼まれてたのによお……情けねえ……」

乾いてひび割れた、苦笑のなり損ないがその唇から漏れる。彼にそんな笑いをさせてしまったことが悲しかった。あんなに頑張つて、期待に応えようとしてくれたのに。

それだけでじゆうぶんだった。

「いい。もう、いいんだ……」

肩に回された右腕を動かして、坊主頭に添える。撫でる、とも呼べないぎこちない仕草だったが、それでも伝わったようだった。

「……よくやってくれた、……白石由竹」

俯いていた白石が顔を上げて。呆気に取りられた表情が、こちらを見た。見開かれた瞳が一度大きく揺れて——決壊した。

大粒の雫が絶え間なく頬を伝う。鼻水まで垂らしながら、それでも拭う真似はせず、

全身で俺を支え続ける白石が前を向く。

「ちくしょう……絶対死なせねえぞ、」

涙交じりながら、芯の通ったその呟き。

自分自身に言い聞かせるような口調でありながら、俺に対する叱咤激励のようにも感じられた。

おかしな話だが。ここに来て、おもむろに生の実感が湧き起こってくる。

そうだ。

俺はまだ。

ならば、やるべきことはひとつだろう。深く、息を吐き出す。

「……アシ×パ。もう泣くな」

左腕は——全く動かない訳じゃない。少しだけ感覚が戻ってきたそれを、しゃくり上げる彼女に向かって差し伸べる。

何度目か、涙を拭って鼻を擦ったアシ×パが俺を見た。泣き腫らした青の瞳がまた揺らいで、彼女が腕に飛びついてくる。軽い衝撃に、痛みが走る。けれど、それこそが生きていく証なのだと思う。

血が流れるのも、痛いのも、命があるからだ。当たり前のことを今、ようやく実感として受け止める。

俺は、ここで生きている。

ああ、

「進まない」と

足を、前に出す。

地面を踏み締める。

こんなところで、立ち止まっている訳にはいかないんだ。

「ありがとう。……思い出させてくれて」

悲壮な顔の白石に支えられながら。激動の世を孤独に生き抜いた虎、その最期を見守る。

アシ×パの囁きに、血濡れのキロランケがはつと目を見開いた。

「……………そうか、」

眩いた彼は。

——今まで見たことがないほどに、穏やかな顔をしていた。雲間から射し込んだ陽光が、その安らかな微笑みを照らし出す。

「あとは頼んだぞ、アシ×パ……!!」

「成し遂げた」男が遺す、祈りと、呪い。血と涙で錆びついた、愛の楔。」「俺たち」のために……ソフィアと、」

そこで、はつと虚空を仰ぐ。

「ソフィア……!!」

そう、短く叫んで。

それが、最期だった。

沈黙。アシ×パが、再び口を開く。

「……キロランケニ×パが、アチャを殺したというのは本当か？」

——キロランケは、応えなかった。

その瞳はもはや、何も映してはいない。

彼が過ごした素晴らしき日々の記憶さえも。

最期に、愛した女の背を幻影の中に見て。彼は、永い永い旅を、この始まりの地で終わらせた。

「キロランケニ×パ。キロランケニ×パ、……キロランケニ×パ……」

アシ×パの呼びかけだけが、流水原に虚しく響き渡る。

「……キロちゃん、……キロランケ」

隣の白石が、呻くようにその名を呼んだ。

もしかしたら、彼が尾形以上に心を許していたかもしれない男。そして白石も、その想いに応えていたのだろう。

でも、今は俺がいる。

彼は、その臉を下ろしてやれない、

「……行つてやつてくれ」

肩に回していた右腕をゆっくり離して、その背を軽く押し出す。不思議と、意識ははつきりしていた。少しなら立つていられる。

「でも、」

「お前しかいない」

お前しか知らないキロランケがいる。

潤んだままの瞳をじつと見つめ返す。眉を下げる白石はしばらく逡巡していたようだったが、やがてぐつと唇を噛み締め。

俺に背を向ける。遠ざかる。

キロランケのもとへ、歩いていく。

「埋めてあげよう。……流水で」

俺を支えていた両手が、愛おしそうに割れた氷の破片を掬い上げる。丁寧な、彼の体を覆っていく。



「この流水……アムール川の水が河口で凍ったものなんだって……」  
キロちゃんが教えてくれた。

——春が来たら、そのまま故郷の水にとけて眠れる。

手袋が外された、震える指が。キロランケの顔に翳される。再び現れたその表情は、穏やかに眠っているみたいだった。

「真面目すぎる男だったんだよ、キロちゃんはさ……!!」

それは確かに、慟哭だった。

真面目すぎた。

間違えて。辿り着けなくて。たくさん失って。それでも諦められなくて、こんなところまで来てしまった。

何度もそのチャンスはあったはずなのに。大事に温めすぎてとうに腐ってしまった。願いなんか捨てて、やり直せたくはないのに。

叶わぬ理想に生き、理想に死んだ。

——尾形百之助、

真面目で優しい子。

お前も同じだ。

けれど、キロランケは最期に望んでいた答えを掴んだ。蘇ったアシバの記憶を以

て、この旅は精算された。希望が、残った。

——この旅は、無駄ではなかった。

——やってきたことは、無駄ではなかった。

——満たされた人生だった。

俺も最期に、そう思いたい。……そう、思ってもらえる生涯であってほしい。

視線を動かす。

尾形を背負う、杉元の横顔が見えた。

「……………」

——杉元佐一は結局。尾形がウイルク殺害に加担していた事実を、アシパと白石の2人には……あるいは俺にも、伏せて話した。

キロランケが合図を出した。

インカマツはそれを見ていた。

それだけだった。

「……………杉元……………」

頭が痛い。

視界の焦点が合わない。

……この状態で立っているのは、今はこれが限界のようだ。転ぶ訳にはいかない。

慎重に膝を折って、座り込む。

吐く息が白い。まだ大丈夫。じっと俯いて、どれほど経ったのか。

「タマちゃん、」

——弔いを終えた白石が、戻ってきていた。

重い頭を擡げて顔を上げると、露骨に安堵した表情と目が合った。

「ほら……お尻が氷にくっついちゃうぜ、」

微笑んだ彼の肩を借りて、再び立ち上がる。

視界が高くなる。

杉元とアシシパの姿が見えない。ついでに、原作では振り落とされていたはずの尾形の姿もない。

「……あ、」

そこで、ようやく気づいた。頬にうちかかる髪。リボンが解けてしまっている。

——撃たれて倒れた時か？

とつさに後ろを振り返ったが、見渡す限り白が広がっているだけ。あの黒いリボンはもう、どこにも、

「えっ……あれ岩息？」

白石の眩きに、そちらを見る。

——尾形を背負ったままの杉元、隣のアシシパ、そしてその背後に聳える巨岩。見覚えのある姿に、彼が顔を引き攣らせた。

「いやいや……なんで連れてきてんだよ、」

「……知り合いだっただな……」

「あ……そうか、じゃあ杉元たちはあいつの刺青を手に入れてるのか!」

スチエンカで手も足も出なかつたうちのアウトレイジとは違い、ステゴロ全振りみたいなメンツの揃った先遣隊は無事、岩息舞治にまで迫り着いていたのだ。原作通りに。

いよいよこちらに近づいてきた岩息に、いち早く反応を示したのは鯉登だった。

「あッ!」

声を上げて。すたすたと近づいていき、彼の前に立ちはだかつたかと思えば。

「おいデカブツ! 月島を運べ! ひどい怪我をしておるのだ! 谷垣は荷物を持って!」

順応が早いよ。まだ一緒に行くとも言っていないのに、使えるどころか使えそうなものは刺青囚人でも使おうとしていくスタイル。さすが筋金入りのお坊ちゃん。

「は? おいッボンボン、」

しかし、それに異を唱える者があつた。連れてきた当の杉元佐一、青筋を立てながら、「岩息! タマさんを背負えッ、こつちのほうが重傷だ!」

「はあ!？」

……なるほど。原作ではその経緯までは描かれていなかったが、杉元は俺の運搬要員として岩息を連れてきたのかもしれない。

しかし、自らの意に逆らった平民を許す鯉登ではない。同じく青筋を立てて、

「おい杉元ッ!」

「こつちや撃たれてんだぞ!？」

「肩ごときが何だ、月島は首から血が出ているのだぞ!？」

「軍曹は仮にも軍人だろうが!」

「だからこそその命、こんな場所で失わせる訳にはいかん!!」

「てめえタマさんは死んでもいいってか!？」

当事者の意向を置き去りに、不毛なお気持ち論争がヒートアップしていく。

あーもうこんな時に……という周囲の呆れた内心が聞こえてくるようだった。

「おやめなさいッ」

「ぶっ」「ぶッ」

結局。埒があかない舌戦を、仲裁（物理）しに入る岩息。ほぼ無傷な不死身の杉元はともかく、既に負傷している鯉登少尉がオーバークイルを受けている。

「議論なんてそんな野蛮なッ……やはりここは穩便に暴力で、」

「穩便?」

月島を背負った谷垣がちよつと引いている。

「そもそも、他の皆さんならともかくそのお二方なら問題なく運べます! おふたりとも小柄ですからなあ!」

大丈夫? ただの女の俺はともかく、その発言帝国軍人の地雷踏んでない?

……で。ともかく。

「お久しぶりですねえタマさん!」

「耳元でデケえ声出すんじゃねえよぶち殺すぞ……」

「……………」

折衷案として、左腕に俺、右腕に月島というあまりにゴリラ過ぎる運搬方法となったが、さすが岩息、ピンピンしている。

おくちの治安が貧民窟な瀕死の女の登場（しかも岩息と知り合い）に、虚無顔になる同じく瀕死の月島軍曹。ていうかこいつ誰だよの表情である。今ちよつと具合悪すぎで淑女ぶつてる余裕ない、許せ。

「たはっそれは失礼ツ☆ お元気でしたか!」

「見りゃわかるだろ失明してんのか……?」

お元気なやつは敵もろとも犯罪者に抱っこされて運ばれるなんて憂き目に遭わない。

「……岩息」

「ハイ？」

「目覚ましになんか喋れ……なんでもいい、眠くなってきた。今寝たら死ぬ、」

「ええー！」

「おい、」

ノータイムで良い返事が来た。向かいの月島がなんか言っている気がするが無視。

「ふむウ。監獄で初めて私が牛山さんと鬨り合った時のお話などいかがでしょう？」

「は？」

「いい……内容は問わん、」

では。ごほんどわざとらしい咳払いをした岩息が、滔々と語りはじめたのは、

「彼を見た時……私は、目の前に山が現れたのかと思いました。ひと目で見てわかる鍛え上げられた肉体……変形した耳……ここまで私の胸を高鳴らせる雄は初めて見た……溢れる生唾を飲み込み、私は自分の体が火照っていくのを感じていました、」

「……………」

「普段は何人もの看守と一齐に鬨るのがお決まりでしたが、彼は『俺一人でもいい』と他の看守や囚人を遠ざけました。1人じゃ物足りないかもしれない……そんな私の不安

を粉々に打ち砕くほど……彼のモノはスゴかったッ！ 柔よく剛を制す。彼の逞しくもしなやかな腕で、汚れた床に組み敷かれたあの瞬間の法悦が忘れられず……私は彼の行為にのめり込んで……」

「……………」

官能小説なんだか格闘の実況なんだか計りかねる怪文書が良い声で垂れ流される。月島の目が死んでいる。

「——そしてとうとう彼の熱く猛った拳が私の臟腑ナカに、」

「おい誰かこれやめさせろ」

今回の一番の被害者、鯉登の尻拭いで重傷を負った上にこんな話を聞かされる月島軍曹。

渡つてきた流水を逆戻りし。亜港近郊のニヴフ民族の集落にて一旦、ひと休み。

杉元が率いていたメンバーには何名か、懐かしい顔ぶれがいた。傷の手当てをして、



ようやく少し落ち着いたところで、

「タマ」

その中の一人——樺太アイヌの少女、エノノカが控えめに声をかけてきた。

尾形と月島は同じ小屋の中で横になっているが、俺は眠る気にはなれず、座って休んでいたところだった。今も、ぎりぎりのところで繋いでいる意識だ。眠ったら、糸が切れてしまうかもしれない。それが嫌だった。

「どうしたの……怪我してる？」

心配そうな声。俯いた彼女が胸の前で手を重ね、何事かを呟く。アイヌ語だろうか。

「大丈夫だ。……久しぶりだな」

感覚を取り戻してきた右手を、そつと差し出してみる。左腕はそもそも三角巾で吊られていて、動かせない。

小さな小さな両手が、その指をきゅ、と軽く握り返してきた。温かかった。

「元気にしてたか」

「うん……わたし、元気」

「そうか、」

憂いを帯びた表情のエノノカが、そこで何かに気づいたように振り返った。とつさにその視線を追った先、戸口に立つ小さな人影と目が合う。

「尾形カツケマツ……」

「こちらはエノノカ以上に久しぶりだった、

「チカパシ、」

緊張した様子の彼はしばらく戸口のそばでまごついていたようだったが、やがておぼろげとこちらに近づいてきた。

「元氣そうで何よりだ。ちよんまげが愛らしい頭をわしわしと撫でる。エノノカがくれたホッパチリが額で揺れている。」

なるほど、男子三日会わざれば何とやら、というやつか。

「網走以来だな……少し大きくなったか？」

「ほんとに？」

「氣持ちを解したいがための小手先の誤魔化しだったが、チカパシは素直に表情を輝かせる。そのタイミングでこちらに近づいてきた谷垣を振り返り、

「谷垣ニッパ、俺大きくなったって！」

「そうか……良かったな」

「あつちでエノノカと遊んできなさい。」

「柔らかない声でそう促され、元氣よく頷いたチカパシが、エノノカの手を取って外に駆けていく。出ていく直前、俺に向けられたグッドサインに、こちらも親指を立て返して

おく。本当にいい子だ。

それを見送った谷垣が、俺にゆっくり向き直った。膝をついて、同じ高さから顔を覗き込んでくる。

何となく、思い詰めているように見えた。ふう、と息を吐き出してから。決心した表情で、

「インカ☒マツがお前の身を案じていた」

——インカ☒マツ。

頭から冷水をかぶった気分になる。

彼女は結局、こちらでもキロランケに刺されてしまったのだろうか。

谷垣と杉元が話題に出していたということは、とりあえずあの場で死亡してしまったという訳では無さそうだが。改めて、安堵する。同時に、申し訳ない気分になった。

「……性懲りも無くまた死にかけていて、申し開きの言葉もない」

「いや、……」

言葉を濁した谷垣が、目を逸らす。強張った無表情。彼は、杉元から全ての事情を聞いたのかもしれない。今、なんとなくそう思った。

手甲に巻きついたままの腕飾りが視界の端にある。擦り切れてはいるが、まだちぎれていない。

「貰ったエカエカのおかげで、何とか生きてると伝えておいてくれ」

「……ああ、」

谷垣は、そこでようやく薄っすら微笑んでみせた。

最後に、大きな手が祈りのように左肩へ軽く触れて。立ち上がった優しい子熊が、のっそりと小屋を出ていく。

「人気者だね」

入れ替わり立ち替わり知り合いがやってくる状況を眺めていた杉元が、微笑んでそんなコメント。

子どもたちと谷垣がいい子なだけだろう、と思つたが、そこに最悪な冷や水をかけてくる、

「『弟』とは大違いだな」

高飛車が渗むその響き。同じ部屋にいたことを、今さら思い出す。振り返る、

「その洞穴みたいな目だけはそっくりだ」

出た薩摩のバルチョーナク。

男ながら悪役令嬢の四字熟語（四字熟語ではない）が誰よりも似合う鯉登音之進が、勝ち気な瞳で俺を見下ろしていた。

自然と笑みが漏れる。

「……ボンボンが」

「キエツ」

ほぼ初対面の女からこんな侮辱を受けるとはまさか思っていなかったらしい明治の九州男児、カッと目を見開いて、可哀想なくらいわなわなと震えて。

「女ア！」

「誰が女だタマさんって呼べゴラア！」

喧嘩っ早い×喧嘩っ早い化学反応により、目にも留まらぬスピードで場外乱闘が始まってしまった。もうなんか仲裁する気力もなく、月島と一緒に死んだ目でその泥試合を見守る。

「……あの元気さ分けてほしい」

「同感だ」

大変ですね、お互い。いやまあ、俺が売り言葉に買い言葉したせいなんだけど。

さんざんぎやーすかやって、どこかで区切りがついたのか、飽きたのか。いつの間にか静かになっていた中で、鯉登が鼻を鳴らす。

「フン……尾形の」

いやどういう呼び方？ マスタング大佐かよ。

「貴様、尾形と行動していたのだよな？ あいつは一体どういう目的で、」

「お腹すいた……」

「飴あるよタマちゃん」

「キエエツ」

猿叫。無視つて飴をもらう。

鯉登少尉、大成する器なのは確かだが、なんかこう……初対面でもちようど良くナメやすいんだよな。ペろペろ。

雪が降っている。

白み始めた空からちらちらと降り注いでくるそれを、ぼうつと見上げる。

顔を上げると、視界に入ってくる。

静まり返った村の中、唯一明かりがついた建物。——尾形百之助が、治療を受けているロシア人の病院。

重傷の月島軍曹は集落に残っている。俺もやんわり待機を勧められたが、強く希望し

て連れてきてもらった。

家族だから。ほとんどの面子はそれですんなり納得したようだったが。

「タマ」

背後から呼びかけられる。

……神妙な顔のアシ×パが、こちらに近づいてくるところだった。

「……寒くないか？」

言いながら、俺が椅子代わりにしていた櫛に、わざわざ乗り上げてくる。

「大丈夫、」

杉元でもあるまいし、肩を撃たれた人間があちこち動き回っていたらそれは心配にもなるか。

……本当に？

アシ×パは、俺が胸に抱いている尾形の上着をじっと見つめている。脱がされて、置いていかれそうになったのを俺が回収した。三八式と三十年式は、両方あの流水原に置いてきてしまった。

彼女は何かを感じているのかもしれない。恐れている。そんなふうにも見えた。

「……百之助は……」

「……………」

答えない。代わりに、誤魔化すように解けたままの髪に触れてくる。

「リボン、」

「ああ……」

そこに言及してきたのは、彼女が初めてだった。

黒いリボン。尾形からの贈り物。耳だ何だと言われて、トレードマークのようなものだったはずだけれど。……無くなっても案外、誰も気にしないものなのだ。

「あそこで解けて……失くしてしまつたみたいだ……」

「……………」

アシ×パは、しばらく苦しげな表情で俺を見つめていたが。やがて、荷物を漁って、何かを取り出した。

紺色の、短い帯のようなもの。表面に複雑な刺繍が施された、

「マタンプ×……?」

「昔、フチと一緒に作つたものだ」

予備として持っていたのか。それが何だと思つたところで。

——背後に回つたアシ×パが、そのマタンプ×で器用に俺の髪を結び出した。あつという間にいつものポニーテールが完成する。

そもそも髪を纏めるためのものとはいえ、そういう使い方をするためのものではな



い。けれど、彼女は。

「アシ×パ、」

「私が、耳の代わりになるから……だから、」

思わず振り返った先。悲痛に顔を歪めたアシ×パが、それでも真っ直ぐに俺を見据えていた。どくん。鼓動が跳ね上がる。

どくどくと、血の流れを感じる。

全身が脈打っている。

だから。

「もう、無茶な真似はやめてくれ……!」

もう、どこにも行かないで。

失いたくない。

青が、光が、揺れている、

「お前のことが心配なんだ、」

何度目か。

聞いた覚えのある響きに、息が詰まる。

——お前のことが心配なんだ。

それは、何故？

彼女は俺のことを、

「っ、」

——考えるな。

負ける。

目を逸らす。

冷たい肺の裏側で、心臓だけが重く、激しく脈打っている。アシ×パは俺を黙って見ている。瞼を、きつく瞑る。

「……………」

……ああ。ここは良い場所だ。

暖かくて、優しく。

光に満ちている。今、改めてそう思った。何より尊いもの。こんな煌めきが俺の手に入るだなんて、考えてみたこともなかった。

ずっと、冷たかった。

寒さに慣れてしまっていた。その冷えた手を、温めてくれる人たちがいた。

「……………アシ×パ……………私、は……………」

エノノカ、チカパシ、谷垣、インカ×マツ、杉元、白石——そして、アシ×パ。

皆、俺を大切に思ってくれている。

傷つけば悲しむ人たちがいる。

俺の居場所はどこにある。

けれど——でも、

キロランケ、

「俺は、」

俺の、旅は。

# 40話 feel guilty.

何もない暗闇の中を、ただ走っている。

——お父つつあまみたいな立派な将校さんになりなさいね、

時折、泡のように言葉が浮かび上がっては消えていく。どれもこれも、どこかで聞いた覚えのある囁きだった。

——誑し込まれたのはお前のほうだったな、

——申し訳ありません兄様……

——弁えろよ！

声は聞こえるのに、姿は見えない。

もう、どれだけ走り続けているのだろう。いくら進んでも、何も見えてはこない。

そもそも、俺は一体どこから走り出したのだった。この足は本当に「前」へ向かって  
いるのだろうか？

……駄目だ。振り返るな。

——1度寝返ったやつはまた寝返るぜ、

——百之助が好きな食べ物は何なんだ？

——良かった……会えて、本当に、

——随分と顔色悪いな、

はっ。はっ。

自分の吐く息がやたら耳につく。

苦しい。頭が痛い。

弱音を吐くな。

——お前には稀な銃の才能があるよ、

——風邪、引かないようにね、

——百之助は物知りだねえ、

——俺が、今さらそんなことをお前に期待するとても？

違う。

これは夢だ——覚めろ。

息ができない。頭を抱える。

右眼からどろりと滴る、

「——う、ぐ……ああ、」

痛い。痛くて痛くて堪らなかつた。

駄目だ。吐きそうだった。

口を開くな、

「……あ、……う？」

その時。

ふと、気づく。

見渡す限り何もなかった空間に、いつの間にか何か——誰かが立っていた。

こちらに背を向けたその姿。

和服にスペンサーM1860を担いだ、長髪の女。見慣れてしまったそれを視認した瞬間、浮かんではもはや恐怖ではなかった。乾いた笑いだけが喉から漏れた。

「……夢の中にまで出てきやがって……」

悪霊が。

『……悪霊？』

応えるように、声がある。目の前からではなく、どこでもない場所から。

天から降り注いでいるようでもあり、地の底から湧き上がってくるようでもあった。

何だか、猛烈に苛立っていた。

「はあ、？」

『そもそも、何かおかしいとは思わなかったのか？』

こちらを振り返らないまま。ぴくりともしないまま、声だけが聞こえてくる。

『タマは初めから生きていた。生きて、今もそばにいる』

「……どうということだ」

じわじわと。

足元から、寒気のようなものが這い上がってくる。気分が悪かった。酩酊に近い、漠然とした不安感。目を逸らす。

……目を、逸らす？

俺は、最初から。

——考えるな、

『目を合わせないようにしてきた。向き合おうとしてこなかった』

「何の話、」

荒げた声を、遮るように。

“それ”が、ゆつくりと振り返る。

深い黒鳶色をした、癖のない長髪が背を流れる。

前髪の下からこちらを見つめてくる——黒曜を思わせる、煌めく瞳。

伊豆諸島のほうでは、星空を閉じ込めたような珍しい黒曜石が採れるのだ、と言っていたのは誰だっただろうか。実物を見たこともないのに、輝きの散ったその虹彩は、

きつとその石によく似ているのだろうと思つた。

ああ。息を呑む。

『罪悪感だ』

——あれだけ長くそばにいたのに。

初めて見たような気さえするのは、どうしてなのだろう。

冷や汗がこめかみを伝う。

罪悪感、

「……………俺の罪悪感？」

思わず、そう呟いて。

その瞬間、喉から、耳から全身に広がる冷たい怖気。体の中身をぐちゃぐちゃに掻き回されているような、言語化できない。

ふらつく。たたらを踏む。

そんな。有り得ない。

違う——違う、

頭を振る。激しく。

「……………いや、幻覚だ……………毒だ、目玉を抉られた傷のせいだ、」

『こんな真似はもうやめろ』



——タマが初めて俺を愛してくれたから。

「殺した後悔などしとらん……!」

『いつかわかる日が来る』

——罪悪感があるってことは、俺は愛情のある親が交わってできた人間ってことか？

「父上はおつ母の葬式に來なかつた、」

『今は愛していない。愛した瞬間があつた、ということでは?』

——罪悪感など無いと証明したくてタマを殺したのに、必要なかつた？

「毒がまだ、残つて……錯乱してる、」

『お前のことが心配なんだ』

——俺は欠けた人間なんかじゃなくて、欠けた人間にふさわしい道を選ぼうとしてき

ただけでは？

「つ、駄目だ! それでは、最初から間違えていたことになる……!」

『……後悔するな』

黒曜の瞳が、俺を見ている。

真つ直ぐに。

その、光が、

『愛しているから』

——タマの存在が俺に罪悪感を気づかせた、

『違う』

“それ”がぴしやりと言いつつ放った。

違う、？

『最初から自分は罪悪感などない欠けた人間だと思い込んでいたから、良心の所在を他者へゆだねざるを得なかっただけ』

どきりとする。

……罪悪感は、最初から俺の中にあつた？

『だから、お前の良心はいつだって誰かの形をしている。それはいつかの花沢勇作であり……アシ×パであり、尾形タマだった』

悪霊が邪魔をしていると思っていた。

けれど、あれは他でもない、俺自身の良心の呵責だった？

『自らの罪悪感を否定しようとするたびに、お前は“罪悪感を投影した誰か”を現実で傷つけることになる。それは初めからお前の中にあつたものなのに、』

どこか悲しそうな顔。

それでも淡々と、続けていく。

『俺は最初から悪霊でも、尾形タマでも……言ってしまうえば、お前の罪悪感でもない。その表現は正解だが、正確ではない。ただ、お前が俺を通して自分自身を見ていただけ』  
一人芝居。その四文字が頭をよぎる。

俺は、最初から尾形タマの姿をした自らの良心と、自問自答していたに過ぎない、  
『お前は一度だって彼らそのものと向き合おうとはしなかった。……今だって』

「……タマ」

顔を覆ったまま、呟く。

“それ”が——タマが、微かに微笑んだ。それが見えた。

「なあに、百之助」

穏やかに、呼びかけられる。

もう、どこでもない場所から響く声ではなかった。彼女の唇から、確かに息を伴う音として紡がれた言葉だった。

暖かい。暖かくて、悲しかった。

「……やはり俺は、生まれながらにして欠けた人間だ。……俺だけが」

彼女は、どこも欠けてないなかった。

俺とは違う人間だった。

彼らと向き合うことを拒否して、自身の罪を押しつけて、傷つけて。それを、今の今まで気づかずに生きてきた。

俺が。俺は、

「生きている価値のない存在だった、」

瞬間。

びくつと、彼女の肩が震えた。

「——っ、」

鋭く息を吸い込む音。

その顔が、今にも泣き出してしまいそうなほど、くしやりと歪んで。

「馬鹿ッ、どうしてそうなるんだ……!」

数歩の距離を詰め。俺の肩を両手で強く掴んだ彼女が、吼えた。

強く、悲壮な叫びだった。

きれいな星空が。

間近で、揺れて、

「こんなに愛されているのにッ!」

愛、

——お前のことが心配なんだ。

——愛しているから。

「百之助」

重なる体温で、ふと気づく。

——抱きしめられていた。

強く、強く。もう、一生離すまいとするかのように。温かかった。

耳元で、絞り出すようなタマの声。

「……両親の愛の有る無しだけで、子ども的人生が決まって堪るか。子どもは親を選べない。だからこそ、初めから祝福されて生まれた子でなくても、満たされた道は選べるはずなんだ」

おつ母の葬式の晩。

月明かりに照らされた幼い彼女の、微かに強張った表情を思い出していた。

「愛した瞬間があった。……だからなんだ？ 花沢幸次郎はトメを見捨てた。祝福され

て生まれていない。そうだ。それが何だつて言うんだ。そんなことで何が欠けるんだ

？ その価値観そのものが馬鹿げてると思わないか？」

お前は何を証明したいの？

答えられなかった。

彼女は既にその正解を持つていた。そんな問いは馬鹿げている、という答えを。

「タマに罪悪感があったように見えたのは、ただ、タマがお前とは違う人間だからだ」  
蛇ときゆうりが嫌いで、甘い物が好きで、あまり笑わないくせにふぎけた洒落ばかり  
言つて。賢くて、何でもすぐ器用にできるのに、歌だけは下手くそで。

少しだけ違つた。

少しだけ同じだった。

だからこそ、

「人間は——世界は、お前が思っているよりずっと複雑で、むずかしいものなんだ。かつてのお前はそれに耐えられなかった。……でも、いつかきつと、それが救いになるから」  
花沢勇作はお前じゃない。

でも、俺はそんな彼のことを。

——いつの間にか、見慣れた実家の畑の中で2人、立っていた。

山並みの向こうが、薄紅色に淡く光り輝いている。夜明けが近かつた。

「お前は欠けてなんかいない。最初から、愛し方も、愛され方もきちんと知つていた。一番愛してほしかつた人にそれを受け取つてもらえなかつたから、いつの間にかどちらもわからなくなつてしまつていただけ」

一番愛してほしかった人？

我に返る。息を呑む。

——おつ母。見て。俺を、見て。

叶わなかった願いがそこにはあった。

手に取るように思い出せた。

忘れない。忘れなどするものか。

視界が揺れて、滲む。受け取ってもらえなかった鴨。宙ぶらりんの白い足。

ああ、おつ母、おつ母——

「——っ、でも……でもっ、それ以外はなんにもいらなかったんだ!!」

吼える。

——ああ。最初からそうだった。

少尉も師団長も狙撃手も金塊も中央も、何もかもがどうでもよかつたんだ。

おつ母さえ俺を見てくれたら。愛してくれたら。ただ、それだけだったのに。

愛を返してもらえなかつた。でも、仕方ない。そう切り捨てることはできなかつた。

他に欲しいものなんて、何ひとつなかつたのに。

どうして置いていってしまったの？

俺にはあなたしかいなかった！

いつの間にか俺より大きく感じる体にしがみついて、わんわん泣きじゃくる。

「おつ母……いなくならないで、おれを置いていかないで……さみしいよ、」

つらくて、悲しくて、堪らなかつた。

そうだ。ずっとさみしかつた。

気づかないふりをしていただけだつた。だつてそのほうが苦しくないから。欠けた人間のままでいられるから。

今だつて苦しくて仕方ない。けれど、この痛みと同じくらい強く抱きしめてくれる彼女がいるから、怖くはなかつた。

——夜が、明けようとしていた。

どれだけそうしていたのか。

朝陽に照らされる彼女が、優しく俺の坊主頭を撫でて。

『……だからタマを殺した』

そう、淡々と呟いた。

「っ、」

瞬間。

さあつと、背筋が冷たくなつた。

殺した。その囁きに喉がきつく絞め上げられる。嗚咽さえも、ままならなくなる。



涙でぐしゃぐしゃの顔を離して、おそろおそろ見上げたタマは——ひどく悲しい顔をしていた。

『……代わりになつてあげられなかった。やはり俺では駄目だった』  
違う。違うんだ。

タマがいい。

タマじゃないと、

「ちがう、」

必死に首を振る俺から、彼女がそつと体を離す。強い意志の滲んだ動きだった。手繰り寄せようと伸ばした指が、空を切った。

「つ、タマー！」

こちらに背を向けたその姿が、紙に落とした墨のように空間へ広がる闇に沈んでいく。名残惜しげな、悲しげな顔が黒に溶ける。

彼女が、闇に消える、

「俺をおいていかないで！」

俺のことが嫌になつてしまったの？

たくさん与えて、守つて、あんなに愛してくれたのに。愛を返してあげられなかった。

……仕方ない、とは思えなかった。

俺のせいだ。

ああ、ああ！

「タマに嫌われるなんて嫌だ！」

そんなの耐えられない！

——……愛しているんだ、

「ごめん……ごめんね、タマ……」

いなくならないで。

「——ッ、」

全身に、痺れが走って。

瞼を開ける。目が、覚めたのか。

ぼんやり考える。夢を見ていた。長い、長い夢を。苦くも甘い舌触りが、まだ残って

いた。

欠けた視界。葉の匂い。誰の気配もしない。……ここはどこだ？  
寒くて、薄暗い場所。

「は……」

右眼が、脈打つように痛い。

とつさに手を伸ばして。

……全てを、思い出した。

「っ、」

——流水原。悪霊。小銃の引き金。

今までのことが、アルバムを勢いよく捲るように脳内へ流れ込んできて。  
色彩と、触覚と、感情の混ぜものを、苦い唾液と一緒に飲み下す。ああ。

——……タマ。

……ここには居られない。

勢いよく、ベッドから身体を起こした。

## 41話 ブレス・ユー!

「尾形が逃げたッ!!」

——聞こえてきた杉元の叫びに。

はっと、我に返る。

「時間」だ。

行かなくては。とっさに立ち上がった俺の腕に縋る——小さな手のひら。アシ<sup>○</sup>パ<sup>○</sup>だった。

タマ。彼女が俺の名前を呼ぶ。

祈るように。手繰り寄せるように。

「だめ、行かないで、……そんな傷で動いたら、本当に死んでしまう」

——お前のことが心配なんだ。

「は、……………」

唾液を飲み込む。心臓が、喉が痛い。

「……………」

息を吸って。吐き出して。

ゆっくり膝を折る。同じ高さで、彼女と向き合う。潤んだ瞳が揺れている。

「アシ×パ、」

右手で、彼女の肩に触れる。その華奢なラインに手を滑らせて、頬を包み込んだ。温かく、柔らかい。命の手触りだった。

アシ×パ。お前がいたからこそまで来られた。お前が俺を生かしたのだ。だから。

「永遠にお前の味方だ。……どこにいても」

——そんなお前の想いに応えられない山猫の不義理を、どうか、許さないでほしい。アシ×パが目を瞪る。

「俺が行かなきゃ。ひとりにできない」

あの時、誰も尾形を追いかけなかった。

でも、誰かがやるべきことだったんだ。

そうだ。今、わかった。

「っ、タマー！」

鞆と上着を引つ掴み。アシ×パの声を振り切つて、背を向ける。光を目指して走る。肩が痛い。包帯の内側から血が滲む心配がする。

体はもうとつづくに限界を超えている。彼女の言った通り、いつ死んでもおかしくな

い。

意識だけが、冬の朝のように鋭く、冷たく冴え渡っていた。どこまでも。

「ツ……はっ、……はあッ……」

——もう遅い、

「遅くない、」

独り言ちる。

まだ。まだ、こんなところで終われない。俺の旅は。俺たちの旅は。

走る。尾形は馬を調達して逃げたはずだ。ならば、馬小屋を探してそちらに向かえば良い。夜目が利く体質は、こんな場面でも役に立った。

尾形。ここまで、どれだけの時間をかけて、どれだけのものを犠牲にしてきたのか。こんなところで終われない。立ち止まっていられない。……お前も、そう思っているんじゃないのか？

——目の前の小屋から、馬に跨った人影が出てくる、

「——尾形ッ！」

とっさに叫ぶ。

人影がこちらを見た。片目を包帯で覆い、貫頭式の病院着に身を包んだ男。

その歩みが、一瞬止まる。

驚愕に染まった表情と、目が合う。

尾形。まだ、足りない。走らなければ。でも、もう足が動かないんだ、

「……手を、」

彼に向かつて、震える右手を伸ばす。足がふらつく。頭が重くて、項垂れる。

……彼は、動かない。

やはり駄目か、

「っ、」

思った瞬間。

信じられない力で、馬上まで引つ張り上げられた。衝撃に耐えられずその体に倒れ込んで。しかし、危なげなく受け止められる。

——どうして。尾形の顔を見ようと顔を上げたところで、

「タマッ!」

アシッパが、よろめきながら馬小屋の影から飛び出してきた。

「嫌だ! 行っちゃダメ!」

「アシッパさんッ」

なおもこちらに駆け寄ってこようとするその体を、杉元が抱きかかえるようにして押し留める。銃は、持っていないかった。

「不死身の杉元、」

俺の眩きに、杉元が俺を見た。硬く、強張った表情をしていた。

——あいつがもし、俺たちを裏切った時。

——あんたは、尾形についていくのか？

ふと、彼の声が頭をよぎる。そんな会話をしたことを、今になって思い出していた。心臓が、跳ね回っている。

アシ□パのことは大切だ。大切で、尊い煌めきに決まっている。でも。俺は。

唇を噛み締める。真っ直ぐ、彼を見据える。

杉元佐一、

「頼んだぞ……!!」

——俺は、俺のやるべきことをやったから。

——あなたは、あなたの成すべきことをして。

杉元は、じつと俺を見つめていたけれど。やがて、泣きじやくるアシ□パの肩を支えたまま、厳かに顎を引いた。……ああ、

「……ありがとう……」

お前の光は、これからはお前の大切にだけ使ってあげて。俺にはもう必要のないものだから。俺にその輝きは眩しすぎるから。



さよならだ。本当に、ありがとう。

「……………」

馬は、穏やかに荒野を進んでいる。

杉元たちも、病院も見えなくなった頃。寒そうな肩にいつもの上着をかぶせてやった尾形が、小さな声で俺の名前を呼んだ。

「……………」

どうして。彼らしくもない、頼りない呟きだった。思わず笑みが漏れた。

そんなもの決まっている、

「愛だよ、愛―」

振り返った尾形が、目を瞠って。

次の瞬間、

「……………」

今にも泣き出しそうな、それでも満ち足りた。柔らかくて、痛々しい微笑。乾き切った空洞の虹彩が、今は水分を含んで微かに揺れている。

見ているこちらの胸が締め付けられるような笑みが、朝陽に照らし出されている。息を呑む。

美しく、脆く、儂い。

——何も言えず、黙って彼の顔を見つめ返した。お互い白い吐息だけが、朝の澄んだ空気に揺蕩っていた。

それから、どれだけ進んだのか。

馬は、やがて人気のない古びた小屋の前で止まった。近くに村がある訳でもなく、打ち捨てられて廃墟と化しているようだ。

先に降りて中の様子を調べたらしい尾形が、俺の手を引いて小屋に足を踏み入れる。

——埃っぽいが、設備はある程度そのまま残っていた。

部屋の奥にある煉瓦造りの巨大な暖炉は、ペチカだろうか。少数民族にばかり世話になつていたから、ロシア式の家屋をまじまじ見るのは初めてかもしれない。

「……休んでろ」

言い残した尾形が、小屋を出て行く。

——それはそうか。

「どちらにせよ、ここからさらに移動できるような状態ではない。お互いに。」

撃たれた肩を、とつさに押さえる。興奮が収まって、また痛みが出てきた。吊られた左腕の感覚がほとんどない。

——良くなるのだろうか。

——どのくらい時間がかかる？

撃たれて、生き延びてしまったのは初めてだった。痛い。このまま左腕が動かないままだったらどうしよう。銃が、撃てない。

不安ばかりが募る。

……とにかく、椅子に座ろう。

そう思つて、伸ばした手が。

「あッ」

目測を見誤つて、中途半端な位置についた。一本足のミニテーブルが大きく傾いで、乗っていたものがばらばらと散らばる。

俺自身も体勢を崩して、埃の積もった床に倒れ込んだ。

「ッ、っ……」

したたか尻餅を打ってしまった。

腰をさすりながら、起き上がった視界に入ってきたのは。

——先ほどテーブルから落ちたらしい、やや錆びついたペティナイフ。

「」

それを目にした瞬間。俺の脳裏には、それが自らの首筋に深々と突き刺さったビジョンが、明確に浮かんでいた。

これがあれば、死ぬる。

とつさにそう思う。

——死ぬば、この苦痛から解放される。

——元通りの俺に戻る、

「……………」

——死なないと。

何もかも、無かったことにしないと。

ほとんど強迫観念じみていたが、それを意識している余裕はなかった。

もう、耐えられない。

震える手で、落ちたナイフを掴む。それを、喉元に突き立てようとして、

「っ、」

次の瞬間。

からんからん。

背後で響く乾いた音と、手の痛み。

戻ってきた尾形が俺の手から勢いよくナイフを薙ぎ払ったのだ、と気づくより早く。彼の匂いと、温度を感じた。

冷たい床の上で、彼に抱きしめられていた。

「……………おがた、」

耳元で、微かに乱れた呼吸だけが聞こえる。

ああ、網走の時みたいだ。

止められた。自殺を。"リセット"を。

事実と、想起。ふたつの思考が脳内で絡まり合って、ぐちゃぐちゃになる。

痛い。

ええと。ああ、そうだ、

「お前も……………怪我しているのに、このままだと足手まといになる……………」

見られたのは失敗だったな。もっと早くに済ませておくべきだった。淡白な後悔だけがあつた。

でも、尾形だつてわかっているはずなのに。

手負いの体をこのままにしておくべきではないと思った。非合理的だからだ。ずっと

と、今までもそうしてきたのに。

「お前を、守れない……」

これでは銃を手に入れても、どちらか撃てない。単なるお飾りになつてしまう。それでは意味がないのだ。俺にはそれを“解決”するための方法がある。だから、

「尾形……」

離してくれ。そんな思いを込めて、右手で彼を押し退けようとしたけれど。その体はびくともしなかつた。血が、滲む。痛い。

ああ、痛くて痛くて堪らない、

「……………痛い、」

漏れた眩き。腕に、力が籠る。

痛くて、痛かつた。

「……………」

——ぱちぱちと、薪が爆ぜる音。

沈み込んでいた意識が浮上する。

ゆつくりと瞼を開ける。……天井が近くて、少し驚いた。

あれから。ペチカの上で横になって、寝てしまっていたらしい。

まだ、肩は痛む。眠っている間に死ねたらとも思ったが、そう上手くはいかなかったようだ。というか、それはそれで余計な心配をかけてしまうか、

「……いい匂いがする」

……尾形。

眼下、ペチカのコンロで鍋をかき混ぜていた彼が、顔を上げた。料理していたのか。珍しい。

尾形の格好は寒そうな病院着から、軍服を羽織ったごく普通の服装になっていた。

「……お前の金を勝手に使った」

「うん」

いざという時——言っ飛ばせば、こういう状況に備えてこつこつ貯めていたものなので、むしろ有効活用してくれて良かった。

煮えたのか。やがて、かき混ぜる手が止まり。湯気のくゆるホーローの小鍋を片手に、尾形が慎重に梯子を上がってくる。

中身は……何か、雑穀米か何かを煮た、粥のようなもの。香ばしい匂いが漂ってくる。

「それ……」

「Ka III a」

ああ……なんて？

特に詳しい説明は無いまま、鍋を置いた彼が、俺を抱き起こしてくる。

あれからどれだけ経ったのか。血を流しすぎたせいな気もするが、とにかく腹が減っていた。

渡してくれるのかと思いきや。尾形は鍋をかき混ぜていたスプーンで粥を掬って、軽く息を吹きかけたかと思えば、真顔でこちらに突き出してくる。え？

えつ、と。……俺が怪我しているのは左腕で、別に1人でも食事くらいはできるとい  
うか、確かに鍋は熱そうだが、その、

「……………」

……………もちもちしている。

バターの風味と、香ばしき。これは……蕎麦だろうか？ 蕎麦の粥とはまた、日本人には馴染みのないセレクトだ。

未知の食物に考えながら咀嚼している間に、スプーンで再びそれを掬った尾形が、今度は自分の口に入れる。なんだ味見させただけかと思いきや、

「……………あ、」

またもや突き出される匙。仕方なく頬張ると、次は自分自身の口へ。そうして交互に粥を食べて、やがて空になった鍋が傍らに置かれる。



腹がくちくなくなったせいかな、起きたばかりなのにまた眠くなってきた。——生あくびをする俺の頭上に、伸びる尾形の手。

「っ、……」

そこで、思い出す。あの黒いリボンを失くしてしまったこと。アシ×パが代わりにマタンプ×を結んでくれたこと。

「リボン……失くしたみたいで……」

せつかく、お前がくれたものだったのに。

俯く俺を、尾形は黙って見ていたようだったが。やがて、軍服の内側に手を滑らせて。

「……………」

内側から取り出された——黒い紐？

糸というには太いが、縄というには細い。何に使うのか全く見当がつかないというか、どうしてそんなものを持ち歩いていたのかがわからない。短すぎて、特に実用性はなさそうだが。

謎の紐を眺める俺の前で、尾形が腰を上げて、背後に回り込んでくる。

「あ、」

——マタンプ×が解かれる気配がした。とつさに頭へ手をやろうとしたが、すぐに尾形の手が散らばった髪を再び束ねて。軽く引つ張られる感覚。例の紐だろうか。

解けたマタンブは首に回って、スカーフのようにゆるく結ばれる。やや形の崩れた刺繍を、指先でなぞる。

アシパ。優しい子。もう泣いてはいないだろうか。

「……まだ安静にしてたほうがいい」

用は済んだのか。言いながら、俺の体を再びシートに横たえさせる尾形。……安静にしていたほうがいいのは、お前もだろう。

眼球に猛毒の矢が突き刺さって、それを麻酔無しで強引に摘出されたのだ。普通ならばショック死していてもおかしくはない。

俺の面倒など見ている場合ではないはずなのだ。せめてものアピールで、彼の服の裾を掴んで、やんわりベッドに引きずり込んだ。

尾形は特に抵抗しなかった。狭いペチカの上、同じ布団の中で寄り添った熱が、こちらをじつと見つめている。

「………、今までのこと」

しばらく無言でそうしていた彼が、唐突に口を開いた。俺の瞳の奥を覗き込んだまま。

今までのこと？

該当する範囲が広大すぎるため、意識が記憶の海に漕ぎ出したのとほぼ同時に。

「すまなかつた」

——引き戻される。

え。今、

「怒っていたんだろ。ずっと」

しかし。すぐに続いたその発言で、掴みかかった衝撃が押し流されていく。

今、この男は何と言った？

確かに知っている言葉のはずなのに、とっさに理解が及ばなかつた。

「……………怒った、？」

朦朧と、反復する。

怒っていた。

誰が。……………俺が？

尾形百之助に。

どうして？

「……………」

……………ヴァシリに狙撃された時か。

ややラグはあつたが、思い出せた。できれば忘れていたい出来事だつた。

でも、あれはたまたまで。とっさに言い訳しかかつて、立ち止まる。あの時、俺は何

と言ったのだっけ。

——何度も俺を殺したくせに。

ああ、これではまるで。

俺は、尾形百之助に。

「……怒っていた、……のかもしれない」

実際に口に出してみても、まだしつくり来なかつた。けれど、今となつては何となくそんな気がしていた。奇妙な納得があつた。

何か、言わなければ。

尾形はただ待っている。焦燥感に後押しされて、再び口を開く。

「あまり……そういうことは、考えないようにはしていた、から……」

だって、『尾形タマ』には不必要な感情だったから。

何度も何度も一方的に殺されて、それでも愛し続けられる人間なんていない。

でも、俺がもし道理に従つて尾形を心から憎み、拒絶したら、そこで全てがおしまひになってしまう。

実際、あそこで強く拒絶を受けたせいで、尾形は流水氷原であんな凶行に及んだのだと考えられなくもない。俺がありがたのままの感情で彼と接しても、悪影響しか生まないのだ。だから。そこまでつらつらと考えて。

ふと、尾形に問いを投げ返してみる。

「……百之助は私に怒っていてほしいの？」

「……………」

なぜか無言のまま。何でやねん。

何にせよ、そうあつて当たり前前、と思つていいのか。でも、そんなことをしたら。

「嫌いになるかもしれないよ」

言われても。尾形は、まだ黙つていた。

自然に伏せられたその瞳は、全てを受け入れる覚悟をしているようでもあつた。

……落ち着かない。何となく、身動く。

——俺が今お前を見捨てたら、お前はあの列車で死ぬかもしれないのに。

お前はそれでいいと思つているの？

確かめようのないことなのに、内心で問わずにはいられなかつた。俺が再び尾形を拒絶したら、今の彼はそれを当然のこととして受け入れてしまうのか？

考えてもみなかつたことだつた。

そもそも、どうして彼はいきなりそんなことを言い出したのだろう。今の彼はあの恐慌が嘘みたいにひどく落ち着いている。何かきつかけがあつた？

わからない。

行き場のない焦燥感が、腹の底で渦を巻いている。気持ちが悪い。目を逸らす、

「……大好きだよ。本当に……」

誤魔化すように、彼の肩に顔を埋めた。本心とは程遠い甘言をまた口にする。

尾形は何も言わなかった。寄り添った体は蠟人形のようにびくともしない。

さらなる不安感が、さざなみのように内側へ広がっていく。——間違えているかもしれない、という不安。目隠しされたまま手探りで知らない場所を歩いているような、そんな感覚。

間違えている。何をだろう。こんな時にそんな言葉が浮かぶこと自体が致命的な間違いなのではないか？

「……………」

尾形は俺に謝った。

それは罪悪感があったからだ。

罪悪感。俺の罪悪感。

——欠けた人間、

俺のことなのだろうな。

思いながら、ゆつくりと瞼を閉じた。

翌朝。

よく眠れた感じがしないまま、薄暗いうちに目が覚めた。

隣には尾形だけがいて、妙な問答も殺しもなく、甲斐甲斐しく世話をしてくれて。未だかつてなく平和な暮らしのはずなのに、今になっても胸騒ぎばかりがするのは何故なのだろう。

どこかで鳥のさえずりが聴こえる。

「……………」

寝直す気にはなれなかった。

俺の枕ごときに大事な右腕を貸して、それでも穏やかに安らいだ尾形百之助の寝顔を、じつと見つめる。

片目の欠けた痛々しい顔。

何とか防いでやりたかった——のかもしれない。起こってしまった今となっては、当

時の気持ちなどもはや思い出せなかった。

だって、原作通りだし。

……おかしいよな。

既に「知っていた」からといって、家族の片目が抉られて平気なものか？

——今の尾形は。

俺が「もうこんな危ない争奪戦からは手を引いて、田舎に帰ってふたりで静かに暮らそう」と言えば——そうするのもかもしれない、と。ここに来て、ふと思った。

これまで、俺はただ原作をなぞる尾形を追いかけていただけだった。俺の横槍など聞き入れる訳もないと思っていた。だから、そんなことは考えてもみなかったけれど。

今、何もかもがイレギュラーな中であって、その第三の選択肢が浮上してきた。

実際、それは尾形の望みでもあったはずだ。少なくとも、彼もそう口にしていた。

この世界線の彼がどことどう繋がっているのかは、未だによくわからない。けれど、そこにどんな遺恨が残っても、なんでもない顔で「わかった」と頷いてみせるのだろう。

そうするべきなのかもしれない。

……いや、そうするべきなのだ。

俺が本当に尾形を愛しているのなら。

ヴァシリも、金塊も、第七師団も、俺には何ら関係のないことなのだから。



これから彼に起こり得る事象を、俺は既に知っている。  
今ならまだ、逃げられる、

——杉元佐一。

否。

何もかもを捨てて逃げるのか。今までのことは全て無駄だったと？

——白石由竹、

何のために彼らの覚悟を、愛を踏みにじってここまで来たのだろう。

——お祖父様、お祖母様、

これ以上続けて、その先に何が待ち受けていても後悔しないと切り切れるか？ 今、

尾形百之助はここで生きているのに、

——勇作……

“選択”を見届けることを放棄するのか。勇作も、鶴見中尉のことも。まだ何もわかつていないのに。結論が出ていないのに。かつての彼が生涯を懸けて追い求めたそれらは、邪魔でしかなかったとでも言うつもりか？

——……アシ~~ン~~バ、

俺は何のためにここに居るのだ？

思い出せ。

何もかもを忘れて、無かったことにして、彼と平々凡々に生きるためではないはずだ。そうだ。

尾形百之助の「選択」を。

見てみたい。ただそれだけだ。

祝福された彼の選択を。行く先を。多くの人に渴望されたであろう if を。

——その解答を出すにはまだ、足りない。

「百之助」

名前を呼ぶ。

その瞬間。自然に伏せられていた瞼が、予備動作なく開ききった。待ち構えていたかのようなだった。微睡みの名残を欠片も窺わせない狙撃手の眼差しが、俺を射抜いてくる。

それを真つ直ぐ見つめ返しながら、告げる。

「土方歳三のところに行く」

傷の目立つ頬に浮かぶ、得意げな笑みが答えだった。尾形らしいその笑顔に、優しく微笑み返す。それができる。

ああ。やはり欠けた人間なのだ。

俺は、尾形百之助を愛してなどいない。

それで一向に構わない。

——この呪われた旅路に、全ての決着をつけに行こう。

## 4 2話 ぼくら宙ぶらり

——ふと、我に返る。

周囲がにわか騒がしい。

あれ。俺は何をしていたのだっけな。

そこまで考えて。

ああ、そうだ——

「勇作殿」

顔を上げる。

「……飲み過ぎですよ」

俺の咎めるような呼びかけに、対面に座った弟——花沢勇作少尉が、バツの悪そうな顔で手に取りかけた徳利を机上に戻した。

卓上には空になったそれが3つ。申し訳程度に頼んだ食事とつまみの皿が、端のほうに追いやられている。

こうして休日に彼と食事をしたこと自体は何度かあったが、酒が入ったのは今日が初

めてだった。

「ん……」

暑いというほどの気温でもないのに、赤く染まり上がった彼の頬に、また嘆息。明らかに酔っている。

「すみません……兄様とこうして酒を酌み交わせる日が来るとは思わず……つい……」  
ふにやふにやと、締まりない笑顔。どこにいてもよく聞こえてくるその声も、日曜の居酒屋の喧騒に飲まれかけるほど覚束ない。

——失敗だったか。

グラスを傾ける。ただの水を含んだはずの喉奥に、苦いものが広がる。多少酔えば気が大きくなって、「事」が上手く運ぶかもしれないと思った。ただそれだけだった。

まさか、あの勇作が新年会の飲み比べかという勢いで酒をかつ喰らい、案の定ひどく酔っ払うなどとは考えてもみなかった。

“多少”で良かった。それなのに。

「……………」

まいったな。

自らの坊主頭を搔く。このまま放っておいても、すぐには酔いも醒めないだろう。

思わず漏れたため息に、とうとう船を漕ぎ出した勇作が顔を上げる。捨て犬のような

頼りない表情がこちらの様子を窺ってくる。

……やむを得ない。

「今日はもう兵營に戻りましょう。部屋まで送ってさしあげます」

「——まったく、」

勇作の勢いに怯んだだけだったが、こちらは早々に飲むのをやめていて良かった。

肩を貸す——というか、旗手を務める恵まれた体格を半ば引きずるように通りを戻しながら、思う。俺まで泥酔していたら兵營に帰れなくなるところだった。

「聯隊旗手ともあろうお方が、こんな下町の呑み屋で泥酔とは。父上が知ったら、さぞお嘆きになられるでしょうなあ……」

「申し訳ありません、」

「ほら、勇作殿……ご自分で立つ。あまり兄を困らせないでください」

「ふふ……」

何を笑っているのか。再びため息が漏れた。

「こちらはこの後の予定がめちやくちやだ。俺たちの来訪を待っているであろう遊女

たちに申し訳が立たない。けれど、よもや寝込みを襲えなどと言う訳にもいかないし。

「勇作殿？」

「いえ……こんな場所にまで誘っていただけたのが……嬉しくて……」

「……………」

暢気なものだ。

こちらは、異母兄という立場を利用して、高潔で御立派な青年将校を誑し込もうとしているだけだというのに。そう思って、

「お優しいのですね、兄様は……」

優しい。その言葉を聞いた瞬間。

全ての思考を踏み倒して脳裏に蘇る、

——お前はとて真面目で優しい子だよ。

忘れないで。

……タマ、

「それ……タマも……」

気づけば、そう口走っていた。

いけない。慌てて口元を手で覆ったが、時既に遅し。肩口に突っ伏していた勇作が、

顔を上げた気配がした。

「……タマ？」

残念ながら、聞き流されなかったようだった。舌打ちをとっさに飲み込む。なんだかんだと言つて、俺も酔っているのかもしれない。

「いや、」

「姉様のお名前でしょうか」

「……チツ……」

クソ、こんな時だけ妙に勘が鋭い。できればその勘の良さを普段から發揮して、俺を壁際に追い詰めるのをやめてほしい。

うんざりした気持ちになりつつ、とりあえず適当に誤魔化してこの場を切り抜けることにだけ意識を向ける。どうせ相手は酔っぱらいだ。

「……、そんなこともあったと思ひ出ただけです。母にも、父上にも愛されなかった私のような存在が、勇作殿や……あいつのような良き人間であるはずもない。初めから何かが欠けているのですよ。私には人並みの優しさなど……罪悪感さえも、」

「兄様ツ！」

「づえ」

自嘲めいた呟きが、唐突に上半身を襲った衝撃で打ち切られる。——往來で、勇作に抱きしめられていた。



道の中央に近い場所で抱き合う軍服の若い男2人に、通行人の視線が集まるのを感じる。その中には同じ制服を着た男たちのものも混じっていた。

一瞬、意識が明後日の方角に吹き飛び掛けて、やめさせなければ、と思い直す。

「ゆ……勇作殿？ 人目につきますから、」

「兄様はけしてそんな人じゃない！」

やかましい。

耳元で叫ぶな、

——百之助はそんな人間じゃない。

「きつとわかる日が来ます、」

——いつかわかる日が来る。

声が、聞こえる。

抑揚のない、幼い少女の声。

提灯に彩られた安っぽい呑み屋街の夜景に、初夏の木漏れ日に照らされる木立を見た。

鼻を吸る音で、ふと目を瞬いて。

次の瞬間には少女の姿も、青々と茂る緑も消えていた。

「……何を泣いとるんですか」

腕を、引っ込めて。体を離す。

勇作は泣いていた。寶石のような瞳から、その破片がはらはらと剥がれ落ちていく。何となく指の背で拭ってやると、また抱きつかれた。耳元で囁かれる。

「兄様には……タマ姉様と……勇作が……」  
ぐう。

寝言じみたそれを、最後まで言い切ることなく。脱力した体が容赦なく体重を掛けてくる。

「……重てえ……」

勇作は、既に肩口ですうすうと平和な寝息を立てている。……往來に一人、取り残された気分になった。

「おや、」

結局。

遊郭で控えていた鶴見中尉のもとに辿り着いたのは、それなりに夜も更けてからだつた。一人で現れた俺の姿を見て、彼が柳眉を跳ね上げる。

「随分と遅かったな。勇作殿は？」

落ち着いて尋ねてくる。期待に沿えなかった。微かな焦りを感じつつ、今さら慌てたところで仕様がなない。

「……だいが酔っていた様子でしたので、今しがた、兵営まで送り届けてきたところですよ」

「そうか」

いつも通りの淡白な受け答え。それにまた、尻の据わりが悪いような心持ちになる。気づけば、口が勝手に動いていた。

「酔いすぎては使い物にならないでしょう」

俺の言い訳じみた付け加えを聞いて。中尉が、静かに目を細めた。ごく柔らかく。

百之助。名前を呼ばれる、

「——お前が潰したのか？」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。俺が、勇作を？ 中尉殿の命に逆らつて？ そんなまさか。

「……、勇作殿が勝手に杯を重ねて……私に呼ばれたことがどうたら……とか、」  
「なるほど。随分と懐かれていますようじゃあないか」

陽気に紡がれたその発言に、胸を撫で下ろす。大丈夫。俺はまだ。

「……好都合でしょう」

成し遂げてみせる。

この人に従ってさえいれば、俺が求めていたものは絶対に手に入る。甘い万能感が、心地良かった。

「誑し込んでみせますよ」

次は、必ず。

鶴見中尉殿——だから、俺を。

完成された微笑みに、笑い返す。上手く笑えていたのだろうか。

日夜、兵營で訓練に明け暮れて、たまの休みには勇作と出掛けたりもして。

でも、そんな平和な日々は、長くは続かなかつた。日露戦争が始まった。声援に見送られて、俺たちはロシアと戦争するために満州へ向かうことになった。

戦地へ赴くこと自体には——はつきり言って、大した思い入れはなかつた。父が指揮

する師団にいる。それだけが全てだった。何だつていい、彼との繋がりが欲しかった。ただ、毎日毎日、無策な進行で蟻のように一兵卒が死んでいくのを見るのは、気分がいいものではなかった。わざわざ敵陣に突撃するまでもなく、遠距離狙撃ならば無傷で相手の戦力を削げるのに。

そう上官に進言してみたこともあつたが、すげなくあしらわれて終わった。彼らにとつて、一兵卒とは代えの利く駒でしかないのだ。

——……勇作、

聯隊旗手となつた彼は、この旅順攻囲戦において、203高地に軍旗を打ち立てるといふ重要な命を帯びていた。

朝靄の中。塹壕から頭を出したロシア兵のそれを、順繰りに撃ち抜いていく。

……今日が正念場だろうな。

ふと、思った。

「尾形上等兵」

じつと俺の手つきを観察していた鶴見中尉が、慎重に声をかけてくる。

「……とうとうだな」

——とうとう。

花沢勇作は今日、この旅順攻囲戦で死ぬ。俺が、後ろからその頭を撃ち抜くことで。

そういうことになっている。

「……………」

中尉は結局、俺と勇作のやり取りに手ごたえを感じられなかったようだった。計画を変更する。日本を発つ直前、そう伝えられた。

彼の目的には、第七師団という根城が必要だった。そのためには、意のままに操れぬ“高い駒”は、要らない。戦場は格好の隠れ蓑だった。

その通りだ、

「……………鶴見中尉殿、」

「うん？」

前を見据えたまま、空葉莢を吐き出す。また撃つ。絡繰仕掛けの人形のように。彼らは今この瞬間にも命を失っている。あのロシア兵と勇作、何が違うのだろう。

「……………この白兵戦において、兵士はみな花沢少尉を神聖化しています。……………彼の生死は部隊全体の指揮に関わるのでは？」

沈黙が、流れた。

「そうか」

肩に、手が触れる。彼の目がこちらを見ている。闇を塗り込めたような漆黒の瞳。どこかで見たような覚えがあるのは、気のせいだろうか。

「よく、わかった」

お前の言う通りだろう。

鶴見中尉は続けてそう言った。

「……、……？」

その時。視界の端に、何かが映った。兵士というには華奢なその立ち姿。女のようにも見える。ただ、銃を持っていた。

何だろうと顔を向けたら、もういなかった。気のせいだろうと思うことにした。

——負傷した花沢勇作が野戦病院に運び込まれたのは、夜が明けて間もなくのことだった。

203高地から撤収したその足で、野戦病院に向かった。

本来、一兵卒が単独で上官の見舞いに行くなど類のないことだったが。一応は親族であるから、という理由で特別に許可されたようだった。

「……兄様、」

即席の寝台の上から俺の姿を見た勇作は、開口一番。

「軍旗は……」

憔悴した表情だった。それでも、なお。

旗手として。士官として。

軍帽を取り、肋骨服を脱いでもなお、彼はどこまでも、皆に望まれた高潔な青年将校であった。唾液を飲み込む。喉が、乾いていた。

「……鶴見中尉殿が」

中尉は、勇作が取り落とした軍旗を躊躇いなく拾い上げ。それを、203高地に打ち立てた。歓声は、思ったよりも上がらなかった。

我々は多くのものを失いすぎた。

「そう、ですか」

勇作が力なく応えた。失意の滲む声音に、腹の底がざわついた。不安定さを誤魔化すように、拳をきつく握り締める。

「勇作殿。我々は勝ちました。勝ったのです」

「いいえ、」

食い気味に、きつぱりと否定された。表情の翳りが、消えない、

「肝心な所で弾に当たり……天皇陛下から親授された軍旗を取り落とし……鼓舞するどころか多大な心配を掛けた上で、こうしておめおめと生き延びてしまいました、」



父上に申し訳が立ちません。

手を撃たれたらしい。すれ違った一等卒がそう言っていたのを聞いた。

唇を噛み締めながら、その手元を見やる。包帯で巻き取られたその右手は、拳を固めたままそうした、というには小さかった。

指が、ない。利き手の指が。箸をきれいに操る指が。冗談めかしてバツを作る指が。

鼓膜のすぐ内側で、血潮が激しく流れている。心臓が肥大化して、ほかの四臓と六腑を飲み込んでしまったかのようなようだった。

「いっそあのまま、ひと思いに死ねていたならばと……私は、父上の顔に泥を塗るような真似を、……こんな不具の身ではもはや旗手として、いえ、兵士としてすら、」

死んでしまいたかった。

尻切れ蜻蛉のその先が、砂嵐の中でもはつきり聞こえた。

勇作。

——そう気を落とすものではありません。

——有坂閣下が精巧な義手の研究をしていると聞きました。

「……………」

「……兄様……?」

——名誉の負傷です。

——父上があなたを見捨てるはずもない。

伝えたいことはいくつも頭に浮かぶのに、どれも音にはならなかった。唇が、縫い付けられてしまったかのように動かない。

自分の脳味噌は何を考えているのだろう。

それすらよくわからなかった。

奥歯が軋む。

だから。

「……………つ、い、」

俺は、

「い、……………生きておれば、……………それでよいのです……………」

瞬間。ぎよつと、勇作が目を剥いた。

歓喜ではなく、驚愕と怖気の滲んだ仕草だった。はつと、我に返る。

——俺は今、何を。

「つ、あにさ、」

仮にも帝国軍人の端くれならば到底、口にすべきではないことだった。

国のために死ぬ。1人でも多くの敵兵を殺して死ぬ。兵士とは等しく成すべき大義のための駒であり、そこに情など必要ない。そうあれと常に厳しく言い聞かせられてき

た。

聞かれれば、何らかの処罰は免れない。それがわからない身ではないはずだった。それでも。

長い長い、沈黙があつた。

「……………」

勇作が、震える唇を開く。

きらきらと、光を湛えた瞳が揺れている。瞑つた眦からその輝きがこぼれて、汚れた頬を伝つて枕に落ちた。美しかった。

「……………」兄さまから、そのように言つていただけたこと……………私は、……………勇作は、弟としてうれしく思います……………」

ああ。

こめかみを、冷たい脂汗が伝つていく。それをはつきりと感じていた。

「……………」

気をつけの姿勢のまま、軍袴を強く握りしめる。体が鉛のように重かつた。

息を吐き出すことすら出来ず、黙つて勇作の、その涙を見つめていた。

そして、あつという間に数日が経った。

あれから何の報せもなく。こちらとしてもすぐに再び顔を合わせる気にもなれず、戻みしていた矢先に、それは起きた。

——その朝は、陣営が妙に騒がしかった。

落ち着きのない一兵卒どもが、口々に囁き合う内容によれば。

「……………死んだ？」

——死んだ。

花沢勇作が。

非業の聯隊旗手が。

……………そんな馬鹿な、

「良くない菌が入って、体の内側から腐って死んだんだと」

有り得ない。

「眉目秀麗なお方であつたし、そんな姿を見せたくなかつたんだろう」

違う。

「俺たちに心配をかけまいと、緘口令を敷いていたらしいじゃないか、」

違う、

「鶴見中尉が看取つたそうだ」

そこで。

視線が、集まる。

「……あの、山猫の子は？」

俺は、何も聞いちやいない。

廊下に立ち尽くすその姿が、奴らには答えに見えたようだ。ひそひそと何事かを囁き合いながら、それとなく遠ざかっていく。

亡骸は酷い有様で。

伝染病が流行っては困るから、今日の夜にはもう焼いてしまつて。無論、対面は御法度で。——死体は、使われていない物置に安置してある。

「……………勇作、」

考えるまでもなかつた。

足が、勝手にそちらを向いていた。

こんな形で終われない。終わりたくない。早歩きが、だんだん駆け足になつて。気づけば、物置代わりの天幕の中に半ば転がり込んでいた。

伝染病、と脅されたせいとか、周囲に人影はほとんど無い。誰にも見咎められることはなかつた。薄暗い中、寝台に横たわつた白い塊を、じつと見つめる。

「勇作」

整わない息で、名前を呼ぶ。

白い塊は、動かない。

頭から爪先まで、シーツを被せられたその姿。——こんなものは、勇作じゃない。

そうだ。

確かめなければ。

火花が散るように、そのひらめきが脳裏で爆ぜ散る。抗い難い強烈な輝きだった。勇作がこんな宙ぶらりりで終わるはずがない。偽物の葬式なんかするはずがない。

手を、伸ばす、

「尾形上等兵」

ぴしやりと、言葉の鞭で打ち据えられた。その痛みで、咄嗟に動きが止まる。

「……………ここに来てはいけない、と聞いてはいなかったか？」

—— 出入口口に、鶴見中尉が立っていた。ごく自然なふうで。

続いて、やんわりと嗜められる。柔らかく、冷たい響きだった。

「……………」

俺を、止めに来たのだ。

そう思った。ゆっくりと、腕を引いて。寝台から後退りする俺に、反対に中尉は歩み寄ってくる。—— 伝染病が、と言ったのは彼自身のはずなのに。

肩に、手が置かれる。

彼は微笑っていた。

「誑し込まれたのは、お前のほうだったな」

何の話、

「早く持ち場に戻りなさい。……このことは、お前の働きに免じて黙っておいてあげることから」

甘い蜜が、耳道を伝って喉奥へ滑り落ちていく。

心地良く感じていたはずのそれに、初めて胸焼けじみた不快感を覚えた。

——花沢勇作少尉の葬式は、翌日には滞りなく執り行なわれた。

焼かれた骨は、小綺麗な骨壺とともに桐の箱に収められた。さすが尉官は扱いが違う、と呟く声はどこかから聞こえてきた。203高地では未だ腐りきらない軍服の遺体が折り重なり、ところどころ山を成していた。

お前も持つていきなさい。

そう言われて、どこの骨ともわからない白い欠片を中尉に手渡された。見当をつけ

ず、2003高地目掛けて放り投げておいた。

線香の匂いが、消えない。

足音が、背後で聞こえた。

「……宇佐美……」

弾んだ足取りで近づいてきた、妙に上機嫌なその面を睨むように見つめる。この男のことだろうから、どうせちよっかいを出しに來ただけなのだろうけれど。

「アハハ、ひつどい顔」

「……………」

いつも以上に相手をしている気分ではなかった。視線を外して、何も無い地平を睨む。

「死んじやったねえ、ユウサク殿」

他人事みたいな言い方だった。今さら腹も立たなかった。彼について、宇佐美と語り合うことなど何もない。

そもそも宇佐美は、第七師団長の息子であり、鶴見に目をかけられていた勇作を敵視していたような節があった。死を惜しむような、

「ま、僕が殺したんだけどね」

——は。



「……………は、？」

……殺した？

誰が。宇佐美が。

勇作を、？

そこまで、理解して。

伝染病などではなかった。

——浮かんできた副詞は、「やはり」だった。勇作は、殺されたのだ。

“計画通り”に。

「え。だって、もともとそういう話だったじゃん？」

——僕的にはラッキー、って感じ？

——ムカつく奴を殺す時ってさ、やっぱリスカツとするし。

——……あ、ほんとはどうやって死んだか教えてあげようか？

宇佐美の声も、もう頭に入ってこなかった。手足が冷たくなっていく。

殺した。士気が落ちると言った。

攻囲戦には勝った。

だから、もう必要無くなった？

勇作、

「百之助」

——生きていたはずの命だった、

「……ほんと、ばかだねえ」

穏やかな呟きで、我に返る。

宇佐美は、落ち着いた微笑を浮かべて俺を見ていた。いつそ慈しむような笑みだった。

「僕はね。お前がやらなかった、やるべきことをやっただけだよ」

お前は選択を間違えたのだ。

きつと、ずっと前から。

喉元を、緩慢に、しかし確かに絞め上げられていくような感覚。頭が、痛い。

視界が暗く、狭まっていく。

黙りこくる俺を見て、今度は息を吐き出して笑った。明確に、嘲る意図を含んでいた。そうして、足元の地面が、

「使えない駒。……いや、」

——もう、駒ですらないか。

せいせいしたと言わんばかりの、実に晴れやかな笑顔。あ、

「お前、もういらないんだよ」

堕ちていく。

真つ逆さまに。

ああ、鶴見中尉殿。

俺を。俺は、

——初冬の北海道は、未明ともなれば相当冷え込む。

黒塗りの馬車が、旅亭じみた豪邸の前に停まっている。ああ。父は、あんな立派な家に住んでいたのか。枝ぶりの影で双眼鏡を覗き込みながら、そんな場違いな感慨を得た。

まあ、たぶん、もう“いない”のだけど。

案外、何の感情も湧いてこなかった。

やがて。明らかに浮き足立った様子で、見慣れた坊主頭がその中から出てきた。

予め計画していた日程を、中尉が変えることはなかったようだ。おかげで——という

言い方もおかしいが、今、ここで一部始終を観察していられる。

——本当は、俺があそこに行くはずだったのだろうか。

樹の幹にもたれかかって、ぼんやり思考を巡らせる。中尉の囁きを思い返す。勇作がいなくなれば、父の寵愛を受けられる。ならば、父がいなくなれば、？

——第七師団長、

「……士官学校すら出ていない上等兵が、第七師団長にまで出世するのは不可能だ」

かつて、鶴見中尉に言えなかつた言葉を、今ひとり口ずさむ。

「いや……中央に鶴見一派を売れば、あるいは？」

少なくとも、鶴見中尉を頼るよりは現実的な案に思えた。あの人はきよろきよろよそ見してばかりだから。

「……………」

気づけば。

人通りの途絶えた道に、女が一人、立っている。和服の女だった。銃を背負っていた。黒鳶色の髪を流したその後ろ姿には、見覚えがあつた。

通りの中央でじっと馬車を見つめているのにも関わらず、誰も声を掛けない。花沢中将暗殺計画、その漏洩の危機だというのに。

「存在しない」

口の中で呟いてみる。

あれ以来。いつの間にか、はつきりと姿が見えるようになっていた。でも、存在しない。

あれは悪霊なのだ。

見えてはいけない。気づいてはいけない。そもそも、何故？

「……死んだのか？」

日本に帰つてすぐ、定期的に届いていた手紙が、急にぱったりと途絶えた。

日を待たずに何度も事務所を訪ね過ぎて、最初は丁寧に対応していた係の者も、今や俺の顔を見るなり「来ていない」と吐き捨てるようになった。……ああ、そうだ。

死んでしまった。

誰も、彼も。

「結局、父上は中尉の謀略に斃れ、なるかもしれない勇作も死んだ」

失意の中で。

何も思い通りにはならなかった。

——馬鹿げていると思わないか？

脳裏で女が嗤う。

「欲し、焦がれたそれに価値などない」

わかつていた。わかつてしまった。

所詮は風前の灯火。与えられただけの美しい器に過ぎない。誰かが故意に落とせば、割れて粉々になる。その程度のモノだった。

おや、それでは。

「――俺が第七師団長になることに、もはや意義はなかった？」

自ら確かめるまでもなく？

欠けた人間でもなれる、そこにある無価値さを証明するまでもなく、最初からその椅子に価値などなかった？

否、おつ母は父上を立派な将校さんだと言った。……しかし。

「……………」

目を伏せる。銃に触れる。

憂いと、戸惑いと、悲しみだけがあった。

母が最期まで愛した将校の椅子。『第七師団長』という肩書きさえあれば、何もかも上手くいくような気がしていた。それだけあれば何も要らない。何を捨てても、何を壊しても、手に入れたいものだった。

そのはずだった。

……そのはずだった？

「……ああ、」

呻きが乾いた唇から漏れる。

駄目だ。これは過ちだ。考えるな。

——後悔するな。

奇妙な浮遊感に頭を抱える。

今まで確かに踏みしめていた足場が、急に崩れて砂と化したかのような、嫌な錯覚。気分が悪い。思わず伸ばした手は空を切った。

「第七師団長の座に価値などない、」

胸を掻きむしり。喘ぐように呟く。

「ならば、『価値』とはどこにある?」

探さなければ。

だつて、このままじゃ生きてゆかれない。

宙ぶらりんだ。おつ母も、父上も、タマも、勇作も、鶴見中尉も——何もかもが。

それではいけない。

偽物の葬式は二度と御免だ。

今度こそ、間違えない。立ち止まらない。後悔しない。尾形百之助と、彼らのために。

そして、手に入れるのだ、

「俺が本当に欲しかったもの、……」

……あれ。

俺は一体、何がしたかったのだっけ？

わからない。

否、

「……確かめなければ、」

左胸に触れる。

軍服の、その内側。

中身は数枚の便箋と——飾り紐が一本。

納棺の直前、望まれた完璧を貫いた花沢少尉の肋骨服から裝飾が足りなくなっていたこと、気づいた人間はいただろうか。

稚拙な悪戯だったと我ながら思ったが、それくらいしかできなかった。

双眼鏡を、仕舞い込む。

「まずは……造反組だな」



「はつと。」

顔を上げる。

——いつの間にか、寝てしまっていたようだった。とつさに辺りを見回したが、周囲の風景に変わった様子はない。

先ほどまでと同じ、北海道行きの船の中。眠っていたのは、ほんの短い間だったらしい。

「……………」

昔の夢を見た。

自身の手を、じつと見つめる。——ここはあの呑み屋街でも、遊郭でも、203高地でもない。既に過ぎ去った場所であり、永久に戻らぬもの。

右肩が温かい。

隣の彼女が、ややこちらにもたれかかるような姿勢で窓の外を眺めていた。

俺がうつらうつらしていたことなど、全く気づいていない様子だった。彫像じみたそ

の横顔。ここではないどこかを熱心に見据える、底のない瞳。冷たい闇。

鶴見中尉の目であり——あの悪霊の目だった。

——お前はずっと、そんな目をしていたのか。

気づかなかった。……気づけなかった。ずっと、目を逸らしていたから。

あれは確かに悪霊などではなかった。お前は最初から、俺を守ってくれていたのだな。

それから、癖のない黒鳶色を今まで通りに束ねる黒紐を見る。——守ってやってくれ。お前を救えなかった俺がこんなことを頼むのは、あまりに虫が良すぎるかもしれないけれど。

飾り紐を、そつと撫でる。

——……うん。大丈夫だ、

さすがに意識が向いたのか、彼女がこちらを振り返った。不思議そうな表情。指の背を頬に滑らせると、こそばゆそうに目を細めた。

今になってようやく、少しだけわかった気がする。

この旅で、自身が何をすべきだったのか。

大丈夫。随分と、遠回りをしてしまったような気がするけれど。

お前の優しさも、悲しみも、兄が無駄にはしないから。

「……ああ、」

勇作。

たったひとりの弟だものな。

## 43話 野良猫に首輪

来たぞ大泊港。2度目。

馬と金があつたので、まあそれなりの復路だった。改めて、原作尾形のガッツは籠が外れ過ぎていると思う。

——5人で辿り着いた場所を、今は尾形と2人きりで歩く。

数ヶ月前、ここへ降り立った時、俺はどんな未来を脳裏に描いていたのだろう。思い出せなかった。

「……………」

その時。普通に並んで歩いていたのがいきなり、物陰に連れ込まれた。俺の肩を抱える尾形は神妙な表情で、外の様子を窺っている。

「どうしたの、」

「第七師団がいる」

食い気味に吹き込まれた囁き。そろそろと尾形の肩から顔を覗かせた先、地面と辺りを交互に見回す兵士の後ろ姿が見えた。

「……………何か探してる……………?」

「逃げたのかもな」

「逃げた、」

「アシ×パたちだ」

ほぼ断定する口調だった。少し驚いてその横顔を見返すと、

「杉元はおそらく、アシ×パの身柄を引き渡すことを条件に鯉登少尉たちと行動を共にしてたはずだ。でも、あいつがそんな条件素直に飲む訳がない」

はあ。原作でも同じ答えには辿り着いていたはずだが、実際にこうして解説を聞いて、改めてその聡明さに感服する。

撃たれてから病院まではおそらくほとんど意識がなく、目覚めてからも彼らと取ったコミニケーションなど「バルチヨーナク……（脅迫）（暴力）」くらいな中で、よくそこまで思考が巡らせられたものだ。小さい頃から賢い子だとは思っていたが、凄まじいな。

そこで、

——シユパアアツ。

「……!!」

鋭い風切り音。とっさに身を乗り出そうとしたのを、尾形の手を押さえられる。

尾形はじっと、待っていた。

二発目は来なかった。

平和な港町がにわかに騒がしくなってきたタイミングで、

「……………」

「あ、」

物陰から飛び出していく。その背中を慌てて追いかけた。

尾形は防波堤から氷の張った水面へ躊躇なく降り立ち（一応俺にも手は貸してくれた）、一面の白の中で流れ出す赤が目立つ死体へ近づいていく。異様な雰囲気の中の2人組に、流水で遊んでいた子どもたちがこちらの様子を窺っている。

「この撃たれちゃった人、知り合い？」

その中の1人が臆することなく話しかけてきた。いかにもわんぱくそうな鼻垂れ小僧。

「違う」

すげなくあしらいつつ、尾形は流水のその向こう、水平線を見つめている。

「船から撃たれたのか」

——ヴァシリ・パヴリチェンコ。

わかっただけでも、どきりとする。恐ろしい腕前だ。

尾形と同レベルの狙撃手を、俺ごときが何とかできるものだろうか。

「連絡船はどこに停まっていた？」

「あのへん」

当たり前だが、子どもが指差したのは水の途切れ目の辺り。ここからは離れているなんてもんじやない距離だ。

「……手練れだな」

「……………」

尾形はしばらく凧いだ水面を見つめていたが、やがてしやがみ込み、息絶えた兵士の軍袴を脱がせ始める。ムイムイ。

「どうして脱がせるの？」

「必要だからだ」

上着は取らなかつた。荷物を検め、最後に三十年式を担いで、ぼつりと呟く。

「坊主。……生きてるっていうのはそれだけで意味があることなんだ」

——それから。

もう少し情報が欲しい、という尾形について行って、旅館街を練り歩く。

地道な聞き込みを続けた先。

とある立派な旅亭の、エラ張りが世紀末レベルな女将が、  
「正解」に繋がる情報を  
持っていた。

「アイヌの女の子？ ああ、泊まってたわよ」

彼女曰く、海軍がその船を追いかけて連絡船を砲撃したとか何とか。めちやくちや詳しい情報じゃねーか。さすが、宿泊客のバフを受けた井戸端マダムは敵無しだぜ。

「その女の子は捕まった？」

女の子。かわいいなオイ。原作だと普通に撃ち殺そうとしてましたけどね。

「北海道の近くで、船から流氷に下りて逃げちやっただつて」

だから、なんで女将さんはそんなことまで知ってるの？

「やっぱり逃げたか」

淡々とした尾形の呟き。嬉しげとも、悲しげとも取れない無表情の横顔。……でも、

これで心置きなく北海道に行ける。

「……連絡船に乗らなきゃ」

こちらに向き直った隻眼の狙撃手が、厳かに頷いた。

原作尾形が茶番で無賃乗船した連絡船を、今回は普通に金を払って乗る。それでほぼ



素寒貧になつてしまつたが、北海道に着いてしまえばこちらのものだ。

記憶力の良い尾形に連れられて、辿り着いた土方一派の隠れ家にて。

「あ」

出迎えてくれたのは土方歳三——ではなく、今日も今日とて居残り組だつたらしい門倉利運と、キラウ☒のコンビだつた。

「げ、尾形……」

「サロルンカムイ食べたカツケマツ」

速攻でドン引きの門倉とは対照的に、無邪気に俺を指差して言うキラウ☒。それからワントンポ遅れて、

「……と、子熊ちゃん連れて逃げた兵隊さん」

「……………」

尾形が普通におまけみたいな扱いである。どちらかと言えばこつちが本体なのに。

キラウ☒の印象は、鶴食つた俺、谷垣を連れて逃げた尾形だつたようだ。尾形も鶴食つてるし、俺も谷垣連れて逃げてるんだけどね。

「え、知り合ひ？」

「ああ。一度、世話になつたことがある」

そこで、尾形のほうも彼のことを思い出したらしい。髪を撫でつけながら、

「……姉畑の時のアイヌか」

思い出し方ゴミで草。

「あなたこそ、どうしてここに？」

「あの後、コタンがオンネ・シペシペツキの大群にやられてな……しようがないから出稼ぎに行った先で、土方ニ<sup>ニ</sup>パ<sup>パ</sup>たちに会って、それで雇われることになった」

「そう……オンネ・シペシペツキって何？」

「バツタだ」

「バツタかあ」

原作を読んだ時もあったが、金がないにしても何だつてこんな鉄火場に。

対して絡みもなかったくせにさつそく良い思い出がないらしい門倉、キラウ<sup>ウ</sup>の後ろに隠れてこちらの様子を窺っている。

「なんで尾形がここに来るんだよ……」

「俺はもともと土方のジイさんに雇われていた。杉元たちとは利害の一致でたまたま行動を共にしてただけだ」

言いながら、勝手知ったるとばかりに上がり込み、すたすた廊下を進んでいく尾形。しようがないので俺もその後を追う。

その背中途中右に急カーブを切って、開けっ放しの襖から部屋の中に入った。

あ、暖かい。火鉢がある。

なぜか棒立ちの尾形を横目に、いそいそと火鉢のそばに腰を落ち着ける。

「はあ……う、」

——で、その膝にいきなりごろんしてくる尾形。これが目的か。

枕代わりにされた太ももから、じんわりと温もりを感じる。とりあえず頭でも撫でておくか。目を細めて気持ちよさそうなのは結構だが、ここで寝ないでくれよ。

「……ウムレ☒だったのか？」

やや遅れて部屋に入ってきたキラウ☒が、俺たちを見てそんなことを言った。

うーん。キラウ☒、体感だがアシ☒パよりアイヌ語の割合が高く、特にその解説もしないので、和人の俺はちよつと話すのが大変。

門倉が代わりに聞いてくれる。

「ウムレ……何？」

「夫婦のことだ」

「ふ……え？」

「違う」

静かに仰天の門倉、躊躇なく否定の尾形。

ウムレ☒。夫婦。……そういえば、釧路でラッコ肉をくれた老爺が同じ単語を口にし

ていたような？

「コタンでは気づかなかったぞ」

「違う」

大事なことなので二度言いました。

膝上で頭の収まりがいいところを探しながら言っても、いまいち説得力がないが。

「一緒にいられてよかったな」

で、話を聞かないにつこりキラウ☒。

……あの時共にいた杉元たちがいなくなっても、俺だけは尾形のもとに残ったことを言っているのだろう。

「……家族だから」

「そうか」

「……………」

尾形は、これに関しては否定しなかった。こら、火鉢ケンケンするのやめなさい。

「え、きょうだい？」

「うるさいぞ門倉」

容赦ねえ。

「尻の穴覗き野郎が!! 〃尻覗き〃するって……!!」

「うるせえこの野郎ッ」

「こいつら毎日だからだと……」

「おや、」

俺たちを構うのに飽きたキラウ☒たちが花札を始めた頃、家主たちが帰ってきた。

「野良尾形が女連れで戻ってきてる」

土方、永倉、牛山。

前者2人は面識がほぼ無い中、最後の1人だけは俺もそれなりに知っていた。目が合う。

「チンポ先生」

「よう、銃のお嬢さん。元気だったか?」

「チンポ?」

撃たれてて全然元気ではないんですけどね。土方歳三の姿を認めた尾形が、ゆつくり膝上から身体を起こす。胡座をかく。

「……網走監獄から今日まで、何をしていた?」

机の対面に腰を下ろした土方が、厳かに問いかけてくる。

それを鶴の一声として、各々席に着く。永倉と牛山がそれぞれ残りの面に座ってしまつたので、俺の席が無くなつてしまつた。門倉がさりげなく手招きしてくれるのに有り難く乗つかつて、彼らの側で膝を折る。

「あの夜……混乱の中、アシ×バがのつぺら坊を父親と確認するまでは出来た」  
尾形が、髪を撫でつける。

「……キロランケはウイルクを殺すつもりだった。その可能性を疑つたタマがやつに襲われたので、俺はそつちに向かつた。その後、アシ×バを連れたキロランケと合流した」  
口内の空気を、飲み下す。

自分がそこに加担していた事実は巧妙に伏せてきた。原作同様に。それは、そうか。  
無言で尾形を見つめていた土方が、俺に横目をくれてくる。

「あの女……初めは杉元のところに行ったな？」  
ひー。

鋭い眼差しに冷や汗が滲み出た。なんだか知らないがもしかして疑われている？  
尾形のほうがよつぽど怪しい、

「元は俺の身内だ」

——彼の呟きが、俺の思考を遮つた。

「初めから俺を探していた。俺がいれば杉元たちに協力する理由がない」

しきりに髪を撫でつけながら、淡々と続ける。いや、協力する理由は普通にたくさんあるんだけどね……アシ×パとか杉元とか白石とか。とりあえず黙っておく。

尾形に視線を戻した土方が、小さく息を吐き出した。穏やかな響きだった。

「……手負いの娘一人つまみ出したところで、野良猫の怒りを買うだけで益も無い、か」  
ふん。尾形が鼻を鳴らす。

そうしてまた、経緯を話し出した。ひと通り語り終えたところで、

「俺の樺太土産はふたつある」

ソフィア・ゴールデンハンドについて。

そして、アシ×パの持つ暗号の鍵について。

それを聞いて、泰然自若としている土方たちをよそに、ほぼ部外者の門倉がなぜか慌て出す。

「一刻も早くアシ×パを探し出さなくっちゃ！」

「向こうからも来るさ。杉元たちだつて刺青人皮を集めるしか無い。これの在処はもはや土方陣営か、鶴見陣営かに二極化しているんだからな」

気持ち良さげに火鉢へ当たりつつ、尾形がのんびり答えた。にやーん。

そこで、ふと思ひ出したこと。樺太土産。俺にもあったのだった、物理的なやつが。

「あ。そういうえば手土産が」

「お、こっちは本物の樺太土産か？ 気が利くねえ」

「お前にじゃねえだろ」

嬰鑠として門倉を罵る永倉老人。お元氣そうで何より。

鞆から、右手だけで何とかその「手土産」を引っ張り出す。土方に差し出す。本当は両手でやりたかったが、

「棒鱈です……」

「なんで？」

樺太で手に入れて誰かにご機嫌窺いで渡すものと言ったら棒鱈でしょう。異論は認めぬ。

家永が捕まったならここも危険だ、という尾形の意見が聞き入れられ、次の隠れ家を探す方向で意見が纏まったのは良いが。

とりあえず日も暮れてきたし、ということ、今日はこの隠れ家で休むことになった。



なんかまだ帰ってきてないっぽい人がちらほらいるみたいだけど、いいんでしょうか。畳の上にはずらっと布団が並ぶ。

修学旅行かな？

「ん」

棒鱧の甲斐あつてか、尾形のおまけの俺にもきちんと端つこに寝床が用意されていた。潜り込もうとしたところで、隣の尾形の布団に引きずり込まれた。妖怪？

いや、別にいいけどね。

狭いけど。クソ狭いけど。

「おお」

大して広くもない中にぎゅうぎゅうに詰まる俺たちを見た牛山が、謎に声を上げる。布団の中からじつとりした視線を送る尾形。

その様が面白かったのか、豪快な笑い声を上げてみせた。

「お前のだろ、誰も取りやしねえよ」

「……………」

うーん、完全に猫ちゃん扱いである。

——明かりが消えて、どれほど経ったのか。もう、周囲からは時計の秒針と、門倉のいびき（うるさい）しか聞こえてこない。

尾形のおかげで、寒くはない。

それはいい。

いい、のだが。

「……………」

悲報、肩の傷が痛んで寝つけない。

同じような場所を銃剣で刺された鯉登少尉は、病院で数ヶ月安静を強いられていたのに対し、俺は治療もそこそこにあちこち駆けずり回っていたのだからさもありなん。

痛すぎてしんどいし、よく動かす場所だからしよっちゅう傷口が開いている、なんて尾形に言っても嫌がらせにしかならないので、言いはしませんが。

少しは良くなってきたと思っていたんだがな。むしろそのせいかな？

「う、……………」

痛い。寄り添った体、その肩口に頭を押しつける。

布団の中は暖かいのに、冷や汗が滲んでくる。昼間はバタバタしていて気づかなかつたが、落ち着くと駄目だな。

尾形には申し訳ないが、別の部屋で頭を冷やして気を紛らわせるか。

そう思つて、布団から這い出そうとした瞬間。

「……………」

手に、長襦袢の袖を掴まれた。

やんわり引つ張られて、元いた腕の中に引き戻される。

——尾形。さすがに眠っていると思つたのに。いや、これで起きてしまったのか。

仕方ない。ちよつとお手洗いに、とでも言つて誤魔化すか、と思つた矢先。

「……………」

小さな、本当に小さな囁き——否、メロディ。秒針の響きにかき消されてしまいそうなほど密やかな歌声が、吹き込まれる。

低く、丁寧に紡がれるそれが耳に心地良い。その穏やかなテンポに合わせて、胸元で弾む指先。

子守唄だった。

トメが歌っていたものではない。知らない曲だった。同じワンフレーズが、手の動きに合わせて淡々と繰り返される。

「……………」

——幼い頃から寝ぐずりもしない、手のかからない子だった、と言われた。

それを今、思い出していた。

俺が実際に耳にしている、真似て歌える子守唄などひとつもない。トメのそれはただ童謡として知識があっただけだ。

黙って、天井を睨むように見つめる。

なぜだか、どうしようもなく泣き喚きたいような気分だった。

そこに意味など、理由などない。わからない。わかりたくもなかった。

## 44話 鴨鍋と干し柿

札幌の外れにある古寺に移り住んだ。

尾形は相変わらず、裏手の沼地で毎日、狙撃の練習をしている。

——ダアン。

低空すれすれを往く鳥影に向けて、引き鉄を引く。銃声が響く。翼を広げた鴨は変わらず、その場でゆったり羽ばたいている。

「……………」

失敗。

尾形は銃を構えた姿勢のまま、睨むように遠ざかっていく鴨を見つめている。

それを、少し離れた場所から黙って眺める。吹き抜ける木枯らしが髪を揺らし、頬を撫でていく。茂みがざわつく。

昔から、俺は既に銃を使いこなしている尾形しか知らなかったから、何となく新鮮だった。本人はそれどころではないのだろうけれど。

小さい頃からこうやって銃の練習をしていたのだろうか。たった一人で。

「撃てるようになりそう?」

何となく、声をかけてみる。

尾形が一瞬、こちらを見た。

「……まだだ」

まだ。それだけ呟いて、背を向ける。拗ねたその場凌ぎではなく、強固な意志のこもった一言だった。

銃にしか縋れない男。宇佐美が抱いたような感想は浮かんでこなかった。

どこまでも真面目で、一所懸命な頑張り屋。そうだ。俺はそんな彼を17年間見てきたのだから。

「俺も頑張らないと」

左肩の傷は、塞がり始めていた。

視線の先、尾形は銃を背負って、カヤの茂みに入ろうとしている。

原作にあった通り、銃での狩りは諦めて罾で白鳥を捕まえに行くつもりなのか。その背中を、追いかけた。

尾形がふわっくくではなく、後ろから首を銃底で殴って仕留めたクソデカ白鳥を半ば引きずりつつ、帰着。

「うわッ」

速攻でドン引きの牛山。あと門倉。

「デカイ白鳥だなあ、それ食えんのか？」

「何でもかんでも獲つてくるなよ」

完全に獲物という名のゴミもとい虫とかネズミの死骸啜えてきた猫扱いじゃん。

……と、思いきや、

「尾形上等兵……!?!」

体育座り（何故？）から、すくつというかドスツと立ち上がる大柄な人影。

あ。有古じゃん。

存在そのものに激しい既視感を覚える。ジェネリック谷垣源次郎は伊達じゃない。

「有古、お前もか……」

ブルータス。そしていきなりお触り。再会即セクハラはまずいですよ。

「お前が鶴見たちを裏切るとは……わからんもんだな」

「私もあなたが裏切るとは思いませんでした、」

まことに……?

俺だつたらまずコワイ上司がこんな猫ちゃんムーブしてることに驚くけどね。大日本帝国の狗辞めて今度は反社会勢力の猫になったんすか!?!的だ。

まあ、何にせよ「尾形タマ」にとっては初対面の人間なのだよな。とりあえず初見っぽい反応しとくか。

「誰？」

尾形の影に隠れて姿が見えていなかったのか。ぴよつといきなり顔を出してきた女に、有古は少し驚いたようだった。

間に挟まれた尾形は無言で俺と彼を見比べたのち、

「……有古力松一等卒だ」

「あ、有古力松一等卒です……」

おい情報量が特に増えてねーぞ。

で、今度は有古が、逆に誰なんだこいつみたいな目で見てくる。しやーねーな。

「尾形タマ」

「え、」

わかりやすく面食らって。

数秒押し黙り。それから完全に理解した顔で、

「……………妻帯、」

「してねえ」

いやまあ、似てないとそういう認識にならざるを得ないですよ。……数秒の沈黙



は、暗にこいつ結婚とかできなそうと思われてたということでは宜しいか？

——今日も今日とて、尾形は鴨を狙って三十年式の引き鉄を引いている。

まだ、当たらない。

「……………」

あれから。土方歳三に買い物へ連れ出されたり、隠れ家にやって来た石川啄木が俺を牛山が連れ込んだ娼婦と勘違いして五悶着くらいあったりしたが、全体的には特に何事も起こらなかった。

変わらない日々。でもいくつかが、俺のほうでは変化があった。

ひとつは、左肩が動かせるようになってきたこと。

もうひとつは、

「……………久しぶりに背負うと……………妙に重く感じるな、」

背中三十年式。

俺が毎日、尾形の練習風景を眺めているのを知った土方おじいちゃまが用意してくれたやつ。どういう経路で調達してきたのかは不明だが、新品並みにぴかぴかである。

これが以下略。そもそも着物とか化粧品とか買い与えられてる時点で今さら。

スリングを肩から下ろす。

撃ち方は、体が覚えていた。

——ドントツ。

工程をいちいち意識する暇もなく、気づけば指が引き鉄を引いて。その弾が、尾形が仕留め損ねた鴨の胴体を撃ち抜いていた。

——命中。

おお。やった。

忘れかけていた純粋な喜びを、ひとまず噛みしめてみる。

「……………」

でもやっぱり左肩がまだちよつと痛い。

なんだかんだと樺太ではまともに撃っておらず、最後にしつかり撃つたのは網走以前？

我ながら恐ろしい話だが、昔取った杵柄の有効期限が切れていなくて良かった。尾形が振り返る。少し驚いた顔。……そういえば、三十年式を手に入れたことはまだ話して

いなかったような気もする。

しかし、鴨かあ。

何となく撃つてみたが、あれをそのまま放置するのはもつたない。

と、なれば。

「……鴨鍋、」

排莢。無表情で立ち尽くしたままの尾形に、ゆっくり歩み寄る。微笑みかける。

「久しぶりに作ってあげようか」

鴨を片手に帰宅した尾形を見た牛山は、今までとは違った驚きを浮かべた顔で、

「尾形が鴨獲ってきた」

原作では、尾形が左撃ちを習得するのは本格的に娼婦殺人事件の捜査を始めてから。

この段階ではあまりに早すぎる。

そういう認識だったのだろう。しかし、実際それは合っていて、

「……いや」「私が撃った」

尾形の後ろから顔を覗かせた俺と、俺の背中中の三十年式を見て。なんだなんだと集

まってきた男どもが口々に、

「なあんだ」

「嫁さんの手柄取るなよな」

「嫁じゃねえ」

解散になってしまった。なんか……期待させて申し訳ない。いや俺の快方も喜べや。

で、いぎ鍋作り。

夏太郎と有古が手伝ってくれる。手伝ってくれるというか、もともとこの2人（あと門倉キラウ☒）がよく料理なんかをしてきているイメージ。

俺はあまりしていない。明治だし、女ということと家事その他を一手に任されていてもおかしくはない立場なのだが、如何せん重傷者だったもので。

「タマさんって銃撃してたんですね」

鴨の羽根をむしりながら、夏太郎が雑談を振ってくる。まあ、意外で当然なんだけど、何ら戦闘スキルがない瘦せっぼちの女役立たずすぎるだろ。邪魔なだけ。

「フフ……真つ暗闇でも当てられるよ」

「またまたア〜」

「……………」

普通に信じてない夏太郎をよそに、有古はやけに神妙な表情。

そういうえば俺が廃旅館でボコボコにした都丹庵士、こないだ顔を合わせるといなか音を聞かれた瞬間「うわッ」と叫ばれて最悪の再会だった。網走で会ってるんだけどね。

「鴨鍋って美味いんですか?」

「……ちよつと人生と共にありすぎて美味しい美味くないの粹で語れないかな」

「え?」

「な、有古」

「……え?」

急に振られた有古がびっくりしている。なんか挙動がちいかわみたいなんだよな。

「あ、そうだ。肉で思い出したけど俺、埋蔵金見つかったら羊の牧場経営するつもりなんですよ。どうですかね?」

出た、ゴールデンカムイ名物、先見の明んちゆ。真つ先に北海道名物ジンギスカンが思い浮かぶが、それ以前に明治の北海道では緬羊の飼育計画が持ち上がっていたらしい。ジンギスカンはむしろその副産物という訳だ。

「絶対流行る」

「え、ホントですか?」

「鍋料理にしたらきつと肉も売れるよ」

「やった」

夏太郎、土方シンパってことくらいしか印象なかったけどだいぶ弟属性だな。

俺は羊肉そんなに好きじゃないけどね。なんか……BBQの残骸みたいな味するじゃん。

まあタンチョウヅルとかラッコとかメコオヤシとかに比べたら全然美味しい、

「タマさんの夢はなんですか？」

……そこで、思考が止まる。

金塊が見つかったら。

俺の夢。夢、

「……………何だろうな……………ウツ」

「あつすみませんッ」

考え込んでしまったところで。身を乗り出した有古の胸筋アタックが思考回路に玉突き事故を起こしてきた。

いや夏ちゃんはいいんだけどちよつと有古……有古がいると台所が普通に狭いんだよな。身長と体格のせいで一挙一動がドスッ♡ドスッ♡みたいな感じだから。とんでもないモラルハザードだよ。

「有古を見てると谷垣源次郎を思い出すなあ」

「えっ」

「誰っすか？」

さっそく夏ちゃんの記憶から失われているの草萌ゆる。だから網走で会ったでしょ。

「……寝ないのか」

その晩。

布団の中で尾形の指を弄んでいた俺に、背後の彼が声を掛けてきた。

「んー……」

何となく茶を濁しつつ。さっきのは単に、俺が寝られないからさっさとその手遊びをやめろというアピールだったのかもしれない。やめないけど。

「……」

……何年かぶりに作った鴨鍋だったが、尾形は相変わらず無言で完食していたな。

夏太郎なんかは気を遣って美味いと言ってくれていたけど。俺はマジで本当にもう数十年は食わなくていいかなという感じ。

かつてのアシ□パは、俺の鴨鍋なら尾形もヒンナできるとかなんとか言っていたが、結局はノーヒンナだったし。

そこでふと、思ったこと。

「少し……話をしよう」

「話？」

思いの食べ物ときて、頭に浮かんだ話。アシ□パと、杉元のこと。

「……アシ□パが前に話してくれたんだが。杉元は食べ物だと干し柿が好きで、でも、戦争に行つてからは食べていなくなつたらしい」

「脳味噌じゃねえのか」

「それアシ□パの影響だろ」

よくわからない混ぜっ返しを瞬時に挟まれて、若干脱力。

たまに空気読まないというか、話の流れより自分の興味関心に意識が行つちやつてる時あるよね。俺もそうか。

「聞け。だから……干し柿をまた食べれば、戦争に行く前の杉元に戻るんじゃないか、つていう話を、鹿の腹に入つて吹雪を凌いだあの日に2人でしたそうだ」

実際、俺にはしていないけど。

この話をしたのはおそらく事実だろうが、俺はそれをアシ□パや杉元の口から聞いた



わけではない。記憶をもとに、そういういで彼に話しているだけだ。

尾形は一瞬、無言になつて。

「……、それで俺に鴨鍋か？」

「いや。この話を思い出したのはついさつきだよ。好きだつて言つていたから、久しぶりに食べさせてあげようかと思つただけ」

「……………」

これは本当。鴨を撃つて、それで鍋を作るまでに他意があつた訳ではない。けれど、  
「……それで、……何か変わった気がするか？」

意を決して、そう問いかけてみる。

尾形は、すぐには答えなかつた。

代わりに、

「変わつてほしいのか？」

——その鸚鵡返しを、予想していなかつた訳ではないつもりだったが。

口内に溜まつた空気を、飲み下す。

俺は、尾形に、？

「……、わからない……でも、最後には百之助が決めることだ」

尾形百之助をコントロールすることはできない。

それ自体は、昔から思っていたことだった。けれど、今は少し違う。

お前は真面目で優しい、いい子だから。俺がそう言えば、きつとその期待に応えようとしてしまうから。自分の気持ちを押し殺してでも。

黙って、次の言葉を待つ。

心持ちはまるで、死刑宣告を待つ囚人みたいだった。

そして、尾形は。

「……懐かしく思った」

穏やかな呟きだった。

懐かしく思った、

「ええ、」

面食らった。素直に。

懐かしい、と思ったということは、裏を返せば遠く感じたということだ。

もはやこの手に戻らぬものとして、離れた場所からただ眺めている。……それは、アシパが杉元に願った結果とは真逆のものなのでは。いや、別に尾形がそうである必要はないのだった？ よくわからな、

「…………ようやく……少しだけでも、『思い出』にできた気がする」

続いた言葉に。

「つ、」

一瞬、息ができなかった。

二の句が継げない俺の前に、尾形は静かに語り続ける。

「ずっと、忘れてやるものかと思っていた。肌身離さず握りしめ続けてきた。いつだって昨日のことのように思い出せた。それでいいのだと思ってきた」

あいつはおつ母の葬式に来なかった。

あの列車で彼はそう叫んだ。

彼の時間は止まったままだった。ずっと昔から。母親が死んだあの時から。

だから。

「……しかし、」

されるがままだった指に意志がこもって、俺の指に絡んでくる。握り返される。

「今日——初めて、『昨日』が遠く感じた」

淡々と、気負わない口ぶりながら。

重く沈み込むような一言だった。

息を呑む。

「そうやって、感じて、覚えて、忘れて……時折こうして思い出しながら、生きていくもんなんだな」

人間は忘れる生き物だ。

それは悲哀であり、救いでもあった。

どんなに強い気持ちでも、それが永遠になる訳じゃない。燃え盛る愛も、焦げついた憎しみも、いつかは忘れ得る感情だ。それゆえに生きるのはつらい。

……でも、だからこそ、これから生きていけるんだ。それで、時々思い出せばいい。懐かしい気持ちになればいい。

過去から向き直った先、目の前に広がる道は、まだまだ長く続いているんだから。

「……百之助、」

とつさに振り返った先。

肩越しに目が合った尾形は、穏やかにこちらを見つめている。俺を包み込む優しい闇。それを見たら何も言えなくなつて、思わず彼の身体に強くしがみついていた。

背中に腕が回つて、抱きしめられる。今日に限つて、寝室は妙に静かだった。彼の心臓の音しか聞こえない。でも、それで良かった。それだけで良かった。

これまでになく落ち着いた気持ちで、ゆっくり瞼を閉じた。

夢は、見なかった。

## 45話 狙撃手の凱旋

しばらく経ったある日のこと。

昼下がりに、尾形が帰ってきた。

彼がふらつと出て行って、ふらつと帰ってくることに自体はよくあることだったが。その日は、背後に土方歳三がいた。

2人で出掛けたのだろうか。珍しい。弾薬の調達か何かか、と考えかけたところで、

「タマ」

ただいまをすつ飛ばして、畳に座って新聞を読んでいた俺に声を掛けてきた。どつかと、目の前に座り込む。

「……？」

何か言いたいことでもあるのかと思ったところで。尾形が、おもむろに右眼を覆っていた包帯に親指を掛けて、引き上げた。

露わになる空洞——ではなく、

「うわ」

「……………」

……とつさに引き気味の声が出てしまい、微妙な雰囲気にしてしまったが。

少し驚いただけだ。

何のことはない、

「義眼か」

眼球が抉り出されたはずの場所に鎮座する精巧なガラス玉。艶出しの施されていない表面は黒々としていて、およそ人間らしい質感ではなかったが、彼の目元に嵌ると不思議とそれらしく見えた。

手を伸ばして、指先で偽物の眼球に触れる。尾形は嫌がらなかった。つるりと冷たい、乾いた感触。生物のそれではない。

何となく瞼の下に指先を掛けたら、そこで初めて止められた。尾形の手が、やんわりとこちらの手を退けてくる。

「……出るからやめろ」

弾みでポオンしちやうから、ということらしい。ちよつと見たい。

というか、それサイズ合っていないからなんじやないの？ 大丈夫か？

「有り物ではなく、ドイツから来た職人にわざわざ作らせた一点物だ」

戸口にもたれかかってこちらを観察していた土方が、そんな注釈を入れてくる。

原作で公開されたのはビール工場戦の最中だったが、当然、それより以前にモノ自体

は完成していたという訳だ。

しかし、義眼かあ。

両手を伸ばして、頬を包み込む。腰を上げてその目元を覗き込む。

……正面から見ると、本当に天然物と区別がつかないな。元から生気のない作り物みたいな目をしているだけはある。

俺を見つめる尾形がゆっくり瞬きした。

当然、その動き自体は自然に左右で連動している訳で、違和感はない。

「……………」

「……………」

ただ、覗き込む角度を変えると、左眼は追従してくるが、右眼は正面を見つめたまま。そこで生まれる違和感に気づいているのかいないのか、首を捻って頭全体でその動きを追いかけようとしてくる。

「おい、動くな」

釘を打ちつつ、四方八方からおニューの義眼を観察してみて。元の姿勢に戻って、一息つく。

うん。

「……………なんか嫌だ」

何となく。

義眼や斜視を差別したい訳じゃないけど、というおまけすぎる言い訳を内心でくつつけておく。

俺の率直な感想に、むすくれた真顔の尾形はふすん、と鼻から息を吐き出して。

「……………」

無言で、包帯を下ろした。義眼が隠れて、元の隻眼に戻る。

途端、頭上から小さな笑いが降ってくる。土方だった。

「もうお蔵入りか」

それ高かったのになく、というからかい半分の恨み節が窺える呼びかけだった。

案の定というべきか、出資者は土方だったようだ。さすが足長おじさん。

パトロンの茶々に対して尾形はふん、と短く鼻を鳴らして。

「……………元々、顔の形を変えないように入れておくという話だったはずだが？」

身内が嫌がったんでお披露目やめます、というだけのことを、髪を撫でつけながらやたらスタイリッシュに告げる尾形。コマぶち抜いてそう。

「ああ。違いな」

これ以上言っても無駄と判断したか、あるいはそれ以外の理由か。くつつくと喉を鳴らしながら、土方老人が遠ざかっていく。



その背中を見送りながら。

……ふと、気づく。

——尾形は、手に入れて、失くしてしまったものを手繰り寄せようとしているのだ。意識的なのか、無意識なのかはわからないけれど。

それはおそらく、良いことでも、悪いことでもある。今、そう感じた。

俺は、左撃ちの練習に励む彼の姿に、背中を押してもらったような気になっていたが。失くしてしまったもの、二度と還らぬものについて、無理に「元通り」を繕おうとする必要はないのだとも言ってあげたい。軍服も、右眼も——あるいは、銃の腕前すらも。そこには既に、失われたという事実が「在る」のだから。直視するのは苦痛かもしれないけれど。痛みを伴うかもしれないけれど。

それはお前が確かにここまで生きてきた証なのだと、思ったかった。

江別の川岸に立てられた即席の囲炉裏。

そこに掛けられた鍋の中では、チヨウザメ——ピシコカムイチェ——の切り身と魚卵が、湯気を立ち昇らせながら煮えている。

それを見つめる少女、アシパがぼつりと呟いた。

「タマにも食べさせてやりたかった」

今はこの場にはいない人物。

その名に、彼女を知る男2人の間に一瞬、重苦しい空気が流れる。

沈黙を破ったのは、彼女とは面識のない刺青囚人の1人——海賊房太郎の一言だった。

「タマ？」

「お前には関係ねえ」

興味津々といった様子で巨体を乗り出してきた房太郎に、嘯みつく勢いで睨みを利かせる杉元。しかし、アシパはそれには構わず淡々と、

「タマは……私たちの仲間だった、……いや、仲間だ」

俯き加減に放たれたその呟き。抑えた口ぶりながら、そこに含まれた重みを知る杉元は眉を下げて口をつぐむ。

「優しい猫だった」

「え？ ネコ？」

「私は一人っ子だけれども、姉がいたらこんなふうかと思ったこともある」

「うん？ アシ×パちゃんネコだったの？」

「銃が得意で歌が苦手だった」

「人間？」

一貫性のない情報に、頭上へクエスチョンマークを散りばめる房太郎だったが、そこでやや持ち直して。

「……、その子は今どこにいるの？」

沈黙。アシ×パは、地面を睨むように見つめて、唇を引き結んでいる。

「おい、」

「あいつは……どうしても家族のことが心配だったんだ」

見かねた杉元が間に割って入ろうとしたところで、それを遮るように口を開いた。

「弟のところに行ってしまった」

弟。それを聞いて、房太郎は長い睫毛に縁取られた瞳を微かに見開く。澱み、濁り切って底の見えない虹彩。その目は、彼女の——あるいは“弟”のそれによく似ていた。

「家族想いだったんだね」

にこりと、人好きのする微笑を浮かべてみせる。

「じゃあ、良いやつだな。俺は家族を大切に作る人間が好きだ」

言いながら、芝居がかった仕草で顎を上げ、分厚い胸板に手を当てる。稀な長さの黒髪が水のようにさらさらと流れた。

「彼女は正しい選択をした」

睥睨と呼んで差し支えない、鋭い眼差し。それを受けて、アシヅパが身構える。

先ほどもでのやり取りを、まさか忘れた訳ではなかった。祖母は孫娘を心配しているのではないか。そして、ここに来て当てつけるようなこの発言だ。身構えざるを得なかった。

「……何が言いたいんだ？」

「いや？」

剣呑な少女の呼びかけに、対照的に雰囲気を温ませる房太郎。

「……アシヅパさん。あのさ、」

そこで、ずっと沈黙を貫いていた杉元が、重々しく口を挟んでくる。軍帽の鍔を引き下げながら、ゆっくりと語り出す。

「今まで言っていないなかったけど……タマさんは、尾形をひとりにしなことが自分のやるべきことだって言ってた。このままだと、誰もあいつを必要としなくなってしまうから」

「つ、」

アシ×パが目を瞪る。

網走監獄潜入前夜の、彼女との会話。ここまで話す踏ん切りがつかなかったが、いつかは話しておくべきだとも思っていた。

「俺は、本当は尾形なんて放っておいて、何があつてもアシ×パさんのそばにいてほしかった。……でも、それは俺が、俺たちがやるべきことなんだって」

——尾形百之助の選択を最後まで見届ける覚悟がある。

——愛しているから。

彼女は、裏切りに近い傷を負ってなお、それを成し遂げてみせた。彼女が語った「覚悟」がそこにはあった。

「あの人は、あの人がやるべきだと思ったことをやり遂げたんだ……」

深刻な空気を嫌うはずの白石由竹さえ、今や神妙な面持ちで膝頭を見つめていた。箸を握っていた右手が持ち上がり、自身の坊主頭を撫でさする。優しく、慈しむような手つきだった。

「やるべき」と……」

聞き終えて。

呟いたアシ×パの瞳が、揺れる。それから俯いて、膝上で拳をきつく握りしめた。

「……タマは、ずっと私の味方だと言っていた」

頬を包む冷たい指の感触を、まだ覚えていた。どこにいても。蘇ったその囁きをそつと胸に仕舞い込んで、顔を上げる。

憑き物が落ちた表情のアシ<sup>□</sup>パに、杉元が優しく微笑みかける。

「俺も第七師団に捕まった時、あの人が死んだって話を聞かされたけど、結局生きてた。だから、きつと大丈夫だよ」

「杉元の言う通りだぜ。タマちゃんが簡単に死ぬはずない。きつとどこかで元気にやってくるって」

彼女と共に歩んできた男たちからの励ましを受けて、ようやくその頬に笑みが灯る。

「……そうだな」

それからふと、空を仰ぐ。優雅に頭上を行く鴨の群れが見えた。

「タマ……今頃何してるんだろうな……」

彼女は、狙撃の練習をする時、弟の真似をして鴨をよく撃つたと言っていた。

今もそうしているのだろうか。

——そこで、ここまでずっと蚊帳の外だった海賊房太郎が一言、

「……………え、結局ヒトなの？ ネコなの？」

「しやあつ五光!!」

取った札を持ち場に叩きつける。

並んだのは光札が5枚。松に鶴、桜に幕、ススキに月、小野道風にカエル——そして、先ほど取れた桐に鳳凰である。

横で見ていたキラウが、なかなか見ないその光景におおつと声を上げた。

「またタマの勝ち!」

カドクラ弱すぎる。脇ではしゃぐ野次馬がとどめを刺し、彼の顔色がさらに悪くなる。

いやまあしかし、

「マジでこれ逆にイカサマしてんじやないかってくらい引きがカスですね!」

「ウツ良い笑顔で恐ろしいことを……」

脂汗を滲ませる門倉だが、何度やつても高得点の役はおろか、カスやタンすら揃えられないのだ。やり方が悪いという以前に、手札はもちろん山札の引きが異常に悪い。具

体的に言うと、芸術的なまでに中途半端。

勝つても何にもないんだけどね。健全なお遊びですよ。

「監獄で尻覗きしてた門倉さんは花札で尻覗きしても勝てないと思います」

「は？ おまつ、キラウ☒言ったのか？」

「門倉はイカサマしてくるから気をつけろとしか言っていない」

「言つてんだよそれは」

連続で10戦くらいした（そして門倉が10敗した）しな……という訳で、とりあえず茶を淹れて休憩することになった。

何せバックがあのお土方歳三なので、高いお茶菓子食べ放題。やったね。

「しっかし、お嬢さんはあんな男のどこがいいのかねえ」

本来の目的そっちのけで羊羹をモリモリ食らう俺に、茶を啜る門倉が話題を振ってくる。……尾形の話か。塩味が効いていて美味しい。

「……家族なので」

「家族って距離感じゃねえだろお、あれは」

ニヤニヤ笑いを向けてくる門倉。

そうなのか？ 俺は一人っ子だったから、異性のきょうだいとの正しい接し方なんてものはわからない。



「いや……俺も娘がいるもんでな。ちびの時に別れてもう長らく会ってないが、もうあんたくらいになつてるかと思うと、色々考えちゃうよなあ……」

そういえばこの男、バツイチ子持ちなのだけ。見かけより歳がいつていないであろうことを考えると、娘はおそらく俺より歳下の可能性が高いが。

俺がそんなことを考えている間にも、門倉は一転、苦々しい顔で机に突っ伏して、

「娘が……サチが尾形みたいな男連れてきたらどーしよ？　なあキラウ☒」

「マチにもマツネポにもとつくの昔に逃げられてるんだから、お前が心配することじゃないぞ門倉！」

笑顔でしれっと個人情報バラすキラウ☒。何のフォローにもなっていない。門倉のアドバイスの信憑性が薄れたただけだ。

「お嬢さんよ、俺は監獄で何人か似たようなのを見てきたけど、アイツはなあ、女を不幸にする手合いの男なのよ。見りやわかる。ツラと雰囲気の良さに騙されちゃダメだぜ」とか言つてたら、さっそく。

したり顔と頬杖のコンボから繰り出される謎バイスを、黙って聞く。

門倉的には尾形はミステリアスな美形、という認識なのが一番の驚きだった。男はハートで勝負的なタイプだと思つていたから。

「お嬢さんは別嬪さんだし、銃も使えるしでしっかりしてるから、余計にアイツみたいなの

のがよく見えるのかもしれない。このひとにはアタシがいてやらなきゃ……みたいなのは将来的に自分の身を滅ぼすだけだぜ〜？」

「実体験からですか？」

「……………」

実際に嫁と娘に逃げられた側の発言だ、重みが違う。まあ、逃げてるってことは彼女たちは凶運からの脱出には成功してるのだが。

「娘さんいたんですね」

「まあ……………」

「門倉みたいなのがアチャだったら嫌だ！」

「さつきからちよつと手厳しすぎない？」

暇を持て余した有閑ママムの御茶会かよと言いたくなるような俺たちの暢気さに、  
「はあ、もう……………」

「まあや溜息の永倉老人。常識人枠はつらいよ。ストレスで抜ける毛ももう無い。」

「そこで——ガラッ。」

引き戸が開いて、誰かが帰ってきた。

立っていたのは。

「おお……………」

牛山が、感嘆の声を上げる。

視線の先には、小銃を担いだ尾形百之助。そして、その右手にぶら下がる、

「尾形が一人で鳴獲つてきた」

獲物を上り框に置いた尾形が、隻眼を細める。その顔に、目立つ包帯はもう無い。義眼の収められた右眼は、今は黒革の眼帯に覆われていた。

「やつと左撃ちに慣れてきた」

尾形の眩きに、土方が笑みを見せる。

「では、狙撃手は完全復活した訳か」

「いや……」

背負った三十年式を下ろして、胸元で構えながら。真つ直ぐ前を見据えた隻眼の狙撃手が、きつぱりと言ひ放った。

「新生だ」

——旅の終わりが、近づいていた。

## 46話 揚羽蝶の羽ばたき

石川啄木の情報をもとに、俺と尾形を含む土方一派は、札幌市街での娼婦殺し、その犯人探しに乗り出していた。

「タマは何かやらないのか？」

露店に並んだ花火を見るふりをしていたところで、その当の花火売りに扮したキラウがさりげなく声をかけてくる。

「うーん……」

確かに、他のメンツは皆何かしら物売りだの物乞いだのふりをしているんだよな。

夏太郎は新聞売り、土方歳三は金魚売り、牛山都丹は虚無僧、門倉は……なんだっけこれ。

現代の街中でこんなことをしたら目立つこと間違いなしだが、明治の札幌の路上にはなんだかよくわからない物売りが異様に多い。結果的に紛れることができている。

ただ、

「私みたいな女は別にありふれてるからなあ……」

ほっかわりに風呂敷で銃を隠してしまえば、もうどこにでもいる町娘と大差ない。

正直、第七師団でも俺の顔を知っているのはまだ札幌にいない鯉登、月島くらいなもので、警戒する要素もない。菊田宇佐美とは面識ゼロなのよね。

小規模なコスプレ会場と化した札幌の街中に視線を戻す。

「牛山さんの虚無僧は異様に強そうで目立ちますね」

「筋肉は隠しきれん」

都丹はともかく、普通に物乞い以外で食っていけそうな見た目の草。

「確かにかえって目立つ格好は良くないかもな」

「門倉のは何のつもりなんだよ」

「一番目立ってませんか？」

鉦鼓をちやんちやん鳴らしながら、ふらふらの門倉が歩み寄ってくる。

菅笠に水を入れた桶を乗せ、浄衣に鳥足を履いたその姿はまさしく高野行人。でも本

体から漂う雰囲気が生臭すぎる。

「……………」

キラウ☒が無言で小銭を地面に放る。ガニ股を震わせながら屈んでそれを拾おうとする門倉。桶の水が容赦なくこぼれている。

「確かにちよつと目立ちすぎだ」

猿芝居以下の見せ物に速攻で飽きたらしいキラウ☒、今度は尾形を見やってそんなコ

メント。手製の人形で一人二役、この中でも一番手が込んでいる。こんなところで変に力入れなくていいから。

「尾形のそれは何……何なの？」

「親孝行……」

特殊メイクとも呼べない顔の落書き、俺がやってあげたんですよ。

「親孝行の息子です、御報謝願います」

「はははッ！」

「身内にはウケてるけど」

原作で読んだ時も笑ったが、こうしてリアルにさまざまな文脈が乗っかってくると余計に面白い。不謹慎というか、原作のあれこれを踏まえると普通に笑ってる場合じゃないのはわかってるのだが、どうしてもダークな笑いが込み上げてくる。

尾形式ブラックユーモア、俺は嫌いじゃないよ。

あれから、何日か経った。

札幌での捜査は未だ漫然と続いている。犯人はジャック・ザ・リツパーの信奉者ではないか。石川啄木からの有力な情報はあったものの。手がかりは、ない。

「……………」

——いつ、杉元たちと出会ってもおかしくはない。

その時、尾形は原作通りに逃げ出すのだろうか。そうして、二度とどこにも戻らない。尾形百之助はひとりぼっちになる。

少し離れた場所にいる尾形の背中を見つめる。着物の袷を強く握りしめる。

「……………その時は……………」

どこまででもついていく覚悟はある。でも、尾形は俺を、

「お。どうしたお嬢さん」

……………深刻な顔をしすぎたか。通りがかった虚無僧牛山に、声をかけられてしまった。「腹でも減ったか？」

「いや私ってそんなにいつでも腹減りに見えてるんですかね」

アシ×パにも同じようなことを言われていたのを思い出した。淑女とは。

「初めて会った時に食いに行ったライスカレー覚えてるか？ あの店、この辺りだぜ」  
「美味しかったですなあれ」

「だろ？ 今からサツポロビールでぐいっとやりに行かないか？」

「目立つたろこの格好では」

冷静な都丹のツツコミ。まあそうですよね、と思いかけて、二度目の遭遇はその水風亭で発生するのだと気づいて、またげんなり。結局は堂々巡りだ。気晴らしにもならない。

——飴こ買いな。

「……………」

「どうした、都丹庵士」

札幌に現れたもうひとりの刺青囚人——上工地圭二の気配に気づいた2人から、そつと離れる。

人混みの中に、あの目立つ一人二役を探して。

「……………あれ、……………」

……………いない。

まずい、見失ったか。

だからといって、この状況で大声で名前を呼ぶ訳にもいかない。百之助なんて名前の男はそうそういない。

しくじった。



焦りがじわじわと体の内側に広がっていく。早く見つけないと。とつさに一步、足を踏み出して。

「う、」

——腰に、衝撃。

二歩目は出せなかった。

背後から誰かがぶつかってきた。……いや、しがみついている？

それほど身長は高くない。子ども……母親を間違えた迷子だろうか、と特に気負わず振り返って。

「、」

どこかで見た艶やかな黒髪につむじに、呼吸が止まりそうになった。

ホ×ケウカムイの毛皮、特徴的な刺繍の施された衣装。キラウ×のそれと似たこの格好の少女は、

「——アシ、」「タマッ！」

俺がその名を呼ぶより早く、弾かれたように顔を上げた彼女が、俺の名を叫ぶ。

どこか悲壮さの漂う笑み。

それに胸が痛むより早く、

——きやあああッ。

少し離れた場所から聞こえてきた、複数人のどよめきにも似た悲鳴で、我に返る。そうだ。

彼女がここにいるということは、

「……!」

「あッ!」

アシ×パの腕を半ば振り解く形で、ざわめきの方角へ駆け出す。申し訳ないと思つている余裕はなかった。アシ×パがいるということは——「彼」も、必ずここに来てい

る。

人混みを強引に掻き分けた先。

少しひらけたその空間で、地面へ仰向けに倒れた体へ馬乗りになつて、その顔面を繰り返し殴打する見慣れた軍帽の男。——さあつと、血の気が引く感覚がした。

「やめろ杉元ッ!!」

もつれる足で何とか駆け寄つて。倒れた体を庇うように覆いかぶさる。

「殺すなら俺から殺せ!!」

殴られる覚悟だったが、その瞬間、振り上げられた腕がぴたりと止まった。

数秒の沈黙。

やがて、血濡れた拳が重力に従つて力なく垂れ下がり。不死身の狂戦士が、落ち着い

た動作で跨っていた体から退く。

「……………」

ひとまず脅威が去ったところで、ようやく尾形の顔を見た。顔がひしゃげるのではという勢いで殴られていたその顔面は当然、ありとあらゆる流血にまみれていたが。当の尾形は、無表情で空を見上げているだけだった。

息はしている。

とりあえず、それだけが全てだった。尾形のことだから、別に顔面をボコボコにされたくらいではそこまでの心配はない。実際、何度かあったことではあるし。

「杉元、」

そこで、はぐれてしまっていたアシ~~ン~~パがこちらに駆け寄ってきた。聡い彼女は、この現場だけで何が起こったのかわかってしまったようだ。俯き加減、張り詰めた顔つきで唾液を飲み込み、

「…………タマがいいなら…………私はそれでいいんだ…………」

そう、絞り出すように呟いた。

尾形がゆっくり体を起こす。杉元はまだ尾形を鋭く見据えている。彼も軍帽の下で煌めくその瞳から視線を外すことはないまま、口内の出血を地面に吐き捨てた。

それを無言で観察していた杉元が、今度は俺に横目をくれてくる。赤く染まった指が

軍帽を引き下げる。

「左腕……治ったんだね」

いやに淡々とした眩きだった。何となく空恐ろしいものを覚えつつ、とりあえず頷いておく。

「あ、ああ……」

そうだ。本当なら、そこが主題になるはずだったのに。いろいろ要素が重なった結果、それどころではなくなってしまった。

俺も、今はその気遣いを素直に喜べない。そもそも、こんな形で出会うはずではなかったのに。

顔の落書きごとと流血を雑に拭った尾形が立ち上がったので、俺も腰を上げる。

そこへ、

「杉元オ！ アシ×パちやあん！ 黙っていきなり走り出すなよなあ!？」

——まんまる頭のアツカムイが息急き切って駆け寄ってきた。

「つて……タマ!？」

当然、彼は杉元とアシ×パの傍らにいる俺の存在にすぐさま気づいて、ぎよつと目を瞪る。

「白石由竹……！ うおっ」

先ほどよりスピードを速めて走り寄ってきた白石に、いきなり腰から縦に抱き上げられた。花沢勇作方式である。力強いな。

勢いに任せてぐるっと一回転して、

「んも〜こつちも不死身じゃねーかあ！」

「あははっ！」

涙に鼻水まで垂らして、泣き笑いで無事を喜んでくれるのを、純粹に尊ぶ。尾形との因縁などさほど無い彼には、この件で俺の安否以上に気にかかる項目は無いらしかった。

「元気にしてたか？」

「こつちのセリフだっつーのお！」

とりあえず、頭でも撫でておくか。よしよし。

キューンと鼻を鳴らす白石。久しぶりの空気に胸を撫で下ろしかかったのも束の間、

「タマさん」

頭上に打ちかかる影。——杉元佐一が、至近距離で俺を見下ろしていた。

「……………」

口ぶりは穏やかながら、纏う雰囲気はきつく張り詰めた武人のそれだ。和やかな空気は途端に霧散して、仲間であるはずの白石もやや身構えた様子で次の言葉を待っている。

る。

「どうして尾形と札幌にいるんだ？」

核心をつく、その発言に。

俺が息を飲み込むより早く。

……こちらを見据える白髪の人影を、いち早く察知したのはやはり杉元だった。彼の視線を追う形で、その存在に気づく。

「……杉元佐一」

和泉守兼定と、ウインチェスターM1873とを構えたその老爺が、彼の名を呟く。

——土方歳三、

「……」

無言で速やかに戦闘へ移行しようとする杉元、——その前に、凜と立ちはだかるアシ  
 ンパ。即開戦は彼女の機転で回避できたが、一触即発の状況は変わらない。

「ここで戦っても官憲や第七師団に目をつけられるだけだ……」

虚空に放られた俺の呼びかけに、杉元はちらっとこちらに視線を寄越して。構えた銃  
 剣付の三十年式が、慎重に下ろされる。

「……網走じゃハメてくれたな、土方歳三……俺をアシンパさんから引き剥がしやが  
 っつて。おかげで大変な目に遭ったぜ」

土方を睨みつけたままの杉元が、確かな怒りを滲ませた声音でそう吐き捨てた。

「あそこで殺しても良かった」

「やってみろよクソジジイ」

「お前は邪魔になるとわかっていた、」

「そりゃ邪魔するさ」

売り言葉に買い言葉。

——のつぺら坊と土方歳三は、アシ×バをアイヌの偶像たる闘士にして、独立戦争を煽り立てるつもりだったのではと言う杉元。

——女子供の兵は必要ないが、そうでなくても民族の未来を憂いて行動することはできると言う土方。

「じゃあふたりとも殺し合う必要はない!」

そこへ臆せず切り込んでいくアシ×バ。樺太での旅は、彼女を確かに成長させていたのだ。

最終的に。

——我々は手を組むしかない。

彼女のその一声で、第七師団に対抗する新たな勢力が誕生した。

結局あの後、上工地を見つけて追いかけた牛山は、原作通り水風亭に突っ込んでしまったようで（そして取り逃した）。蟲眞の店だから後片付けしたい、という彼を待つているうちに、他のメンバーも集まってきた。

それは、杉元側の「連れ」も例外ではなかったよう。

「……………」

——おもむろに、背後から頭頂部を包み込んでくる大きな手のひら。

とつさに振り返った先……シャツの腹部しか視界に入らない。顔を思い切り上げる。それでようやく目が合った。

「耳無いじゃん」

微笑を浮かべてこちらを見下ろす、長身長髪の色男。彼も、白石同様に杉元とア

シシに置き去りにされていたらしい、

「あんたがタマ？」

海賊房太郎もとい、大沢房太郎。

ていうか、耳って。

アシシがまた余計なことを言ったな。完全な味方ならともかく、敵なんだか味方なんだかよくわからない男にはやめてほしい。あと、普通に手が重くて首が痛い。



「……………」

「おっと」

尾形が無言で払い除けてくれる。サンキューオガタ。さすがの房太郎も彼のことはよく知らない、と思いきや、

「ああ……『弟』か」

知っていたらしい。微かな恍惚混じりの驚愕に、尾形が不愉快そうに眉を顰める。原作では顔を合わせなかつた2人だが、なんかさつそく雰囲気が悪い。

「誰？」

「あー……………えつと……………ボウタロウっていつて、刺青囚人の1人なんだけど……………」

昔馴染み白石が解説してくれる。刺青囚人連れ歩いてんのかよ、と言つても土方陣営も1／3くらいそれですからね。そもそも白石もそれだし。治安が悪い。

崩れた前髪を撫でつけた尾形が、短い嘲笑を飛ばす。

「……………結局そつちも裏切りそんな人殺しとわざわざ組んでるんじゃないか、不死身の杉元」

「ああ!？」

いやなぜここで煽った？

そして瞬間湯沸かし器杉元、当然ブチギレて尾形の胸ぐらに掴みかかる。

おいおい俺が助けた命を速攻ドブに捨てるな馬鹿と思つた、その瞬間。

——シユパアアツ。

風切り音。否、銃声。

空気を裂いて放たれたその弾丸は、確かについ先ほどまで尾形百之助が立っていた、その場所を貫いて行つた。

「……………」

取つ組み合いの寸前の、中途半端な位置で固まる男2人。それから真顔を見合はせて、

「……………お前が好きで助けた訳じゃねえよ」

「……………たまたまだろ……………」

いやそんなこと言つてる場所じゃない、

「狙撃された、」

「身を隠せ！」

「頭巾ちゃんか!？」

「尾形を見つけて狙つてきたのか……………」

「俺ちよつと探してくるッ」

頭巾ちゃん——ヴァシリ。

「そうだ、房太郎に気を取られていたけれど、杉元陣営にはこいつが同行していたのだった！ 改めて血の気が引く。」

「シライシで大丈夫かな〜？」

「え？ ていうか行かせて大丈夫なの？」

「誰だズキンチャンって」

慌てて全員で物陰に身を隠しつつ、白石の戦果を待つ。いや……ヴァシリ、とりあえず不死身の杉元の脅威が去った今では、一番警戒すべき存在だ。確実に。

「……………」

「苦しい」

とりあえず、尾形の頭をぎゅっと抱き込んでおく。作品を代表する名狙撃手とはいえ、肉体は普通の人間なのだ。頭を撃たれば死ぬ。それを、改めて意識した。

もう、これからは何が起こってもおかしくないのだ。

「あつ捕まえてきたッ」

杉元の声で、我に返る。

「…………え、捕まえてきたの？ マジで？」

ちらつと顔を出す。うわ、本当に捕まえてきてる。笑顔で頭巾引きずられてる。距離さえあれば私は負けない（本人談）。

無理矢理連れてこられた頭巾ちゃんもといヴァシリは活きの良い魚の如くびちびちしていたが、尾形の姿を認めた瞬間。

「フン！ フンフン！」

騒ぎ出した。なんか嬉しそう。

その姿を見て、尾形もようやく彼がどこの誰なのかに思い当たつたらしい。

「あの時の国境警備隊か」

原作同様、そこまでの驚きはなかった。

銃は背中、本体は白石にアームロックを掛けられている状態なので、とりあえず害はないと判断したらしい。一応三十年式を構えつつ、尾形がヴァシリに呼びかける。

「……Я Г О В О Р Ю П О — Р У С С К И」

「フン」

「え？ お前ロシア語話せたの？」

「頭巾ちゃん口を怪我して喋れないんだって」

「怪我……？」

「いやロシア語」

怪我。その一言で、体調が悪かった当時の自分がどうやって撃ち損じたかを悟つたらしい尾形が、自嘲めいた笑みを浮かべる。そして堂々と無視られる杉元。

「頭を狙ったつもりだったんだがな」

髪を撫でつける尾形の前に、ヴァシリから差し出される紙切れ。絵ではなく、何か文字のようなものが書き殴られている。慎重に受け取って、目を落として。

「……Василий」

「え、網走？」

「ヴァシリ」

そこで、紙切れから顔を上げ。

「ヴァシリ・パヴリチエンコ」

本来ならば知る由もなかったはずのその名を、きつぱりと口にす。対面のヴァシリが、小さく顎を引いた。

「それが……こいつの名前なのか？」

そこで、ヴァシリがなぜか俺を指差してくる。

「え、私？」

うーむ、せつかくロシア語が話せる人間がいるのに、当の本人が喋れないんじゃないやあまり意味がないよな。少し考えて。

名前だろうか、

「……オガタ。尾形タマ」

「フン」

「ヒヤクノスケ」

「おい」

「フン……」

どうやら合っていたようなので、ついでに尾形のファーストネームも教えておく。ヴァシリは彼を「オガタ」で認識していたようだが、そんなこと言ったら俺もオガタですからな。

「頭巾ちゃん、タマちゃんの絵もわりと描いてたもんねえ」

「そうなんだ……」

尾形はともかく、俺に執着するような要素ありましたっけ。よくわからんな。

ヴァシリはなぜか尾形と俺を見比べていたようだったが、やがて右手と左手で俺たちを指差しつつ、

「フン？」

「してねえ」

「尾形には何が聞こえてんの？」

手練れの狙撃手同士何か通じるものでもあるんでしょうか。知らんけど。

「しかし……頭巾ちゃんじゃなくてヴァシリちゃんだったかあ」

「ヴァシリちゃん……」

「めんどくせえ、頭巾ちゃんていいだろもう」

「……………」

微妙な空気。

あれ、原作では絶対に起こり得なかったイベントのはずなのに。もしかしてあんまり重要じゃなかった感じですか？

「あッ」

結局、白石の拘束が緩んだ、その一瞬の隙について。

ヴァシリは、まさしく脱兎の如くだばだばと逃げ出してしまった。その背中に尾形が三十年式の銃口を向けて——すぐに下ろす。

さらなる騒ぎを恐れたのか。

「あーあ」

「まあ、話せて良かったじゃん」

「話す……………」

暢気な会話を交わす杉元たちを背に、小銃のスリングを握りしめる。強く。

「……………」

一瞬でも。

あそこでヴァシリ・パヴリチエンコの頭を撃ち抜いてほしかったと思つた俺は、きつと間違っているのだろうか。

土方陣営と杉元陣営が手を組んだところで、今すぐやるべきことは変わっていない。おそらく刺青囚人の犯行と思われる、娼婦連続殺人事件。その犯人の捜査。

とはいえ、今日はもう往来で騒ぎすぎたということ。

俺たちだけで使っていた古寺に、男3人と少女を足して、休むことになった。

——ビール工場での戦いまで、あと2日。

ただ、そこにおける尾形の脅威がヴァシリという点は変わっていない。

この件で彼と利害が一致する人間は他にはいない。彼は一人でヴァシリと戦うほかない。

いや、むしろ下手に土方陣営に属したままである以上、尾形は刺青囚人の捜索にも協力しなければならぬのだ。今回、彼はヴァシリにだけ意識を割くことができない。



尾形の存在はとりあえず両陣営から容認されている。ただ、それは決して良いことばかりではないということだ。

大丈夫なのか？

大丈夫だ、とは言い切れなかった。

……「大丈夫でなかった」場合、今度こそ本当にこの旅が終わってしまう。

尾形百之助の死を以て。

「——あんたの夢は何だ？ お嬢さん」

声と、熱。はつと我に返る。

俺の肩に手を回した海賊房太郎が、長い前髪の向こうからこちらを覗き込んでいた。酔っているのか、微かに顔が赤い。

「え、」

「夢だよ、夢。……何だか妙に暗い顔してるけどさ」

どこかで聞いたような問いだ、と思った。あれ。あの時、俺は何と答えたのだった。

何と答えるべきなのだろう。

視線を感じる。皆が俺を見ている。

朦朧と思考を巡らせる、

「……夢」

夢。俺の、夢。

「尾形タマ」の——否、

俺は、

「……………」

……気づけば、一人で真つ暗な廊下に立ち尽くしていた。

襖越しにどんちゃん騒ぎが聞こえる。

俺はあの時、海賊房太郎に何と答えたのだろう。思い出せなかった。

一步、足を踏み出して。

「タマさん」

——背後から声が掛かった。

足が、止まる。

俺をこうして呼ぶ人間を、俺は2人しか知らない。1人は夏太郎。そして、

「……外に行くのかい?」

杉元佐一が、暗がりからじつと俺を見つめていた。追いかけてきたのか。わざわざ。  
……何故？

「1人じゃ危険だよ」

やんわりと、足元から絡め取られるような呼びかけ。声音自体は落ち着いていても、聞いているこちらは冷静ではいられなかった。

滲んだ汗がこめかみを伝う。

「……杉元佐一、」

……最終的にこういう形で落ち着いたとはいえ、土方陣営に属するということ自体が、広義ではアシ×パに対する裏切りだ。

少なくとも、俺はそう解釈していた。お前の味方だ。そう囁いておきながら、俺は私欲のためにアシ×パの顔に泥を塗ったのだ。

杉元は俺を許さないだろう。

「俺を疑っているのか？」

とつさに漏れたその呟き。

杉元はそれには答えず、代わりに。

「今の尾形の目的は何なんだ？」

予想もしていなかった、その問い。

——背後から刺されたような気分になった。

……尾形の目的？

ここ最近は、考えていなかったことだった。いや、考えないようにはしていた。

俺の幻覚との折り合いをつけた彼は、これからどこに向かおうとしているのだろう。確かに、土方歳三のもとへ誘導したのは俺だ。でも、おとなしく従ったのは尾形だ。

それは、何か目的があるからなんじゃないのか？

彼の抱く目的と合致する部分があるということじゃないのか？

それは、金塊？

この期に及んで金が欲しいのか。……何のために？

鶴見中尉に見てほしいから？

花沢勇作は誰が殺したのだ？

あるいは、花沢幸次郎は。

「……わからない……」

わからない。俺には。

——理解することを放棄してきた、ともいう。俺が知っているのは、ゴールドエンカムイの登場人物である尾形百之助のことだけ。俺は弟のことを何も知らないのだ。

杉元は黙って俺を見ている。

焦りが、広がっていく、

「……っ、でも、」

今さら、彼らに尾形を殺させたくはない。何があつても。それだけは確かだった。

少なくとも杉元は、尾形がアシシパパに害を成すと判断すれば躊躇なく殺しに踏み切るだろう。そんな結末だけは避けたかった。

「もう、お前たちに迷惑はかけないから」

板張りの床を、睨むように見つめる。これ以上、俺の都合で傷つけられない。

本当は、こんな形で元鞘に収まりたくはなかった。だって、そんなの冒涇じゃないか。俺は今さら、彼らに何もしてあげられないのに。

「大丈夫だ……次は、……次こそは、」

大丈夫。

これまでなんだかんだと上手くやれてきたじゃないか。大丈夫。きつと。

俺なら、彼らを傷つけず、尾形を助けることができるはずなんだ。大丈夫。必ず、上手くやってみせるから。

「タマさん……」

杉元が眩く。

俺は今、どんな顔をしているのだろう。

彼は。どんな顔をしているのだろう。  
その目を、今は見られなかった。

## 47話 世界線の収束 (feat. 宇佐美時重)

——札幌の夕空に、爪の切り屑のような月が浮かんでいる。

「あんた、一体何がしたいんだ？」

背後に佇んでいた人影が、おもむろにそんな言葉を投げかけてきた。長い黒髪が衣服に擦れる微かな音。振り返って、黄昏色に浮かぶ巨大なその気配を見上げる。

吹き玉売り。ただ、その服装は正しくこの男を表すものではない。これは目的のための単なる目眩しではない。

海賊房太郎——元より、不死身の杉元なんかが利害の一致でつるんでいるような相手に特別興味がある訳ではなかった。ただ。

——海賊には気をつけろ。

そんな白石由竹の言葉が脳裏を過ぎる。まさしく同じ穴の貉であるところの白石がそれを言うのかと思った（実際口にした）が、彼は「タマちゃん心配なんだよ」と続けた。少なくとも、彼女のことに関してはある程度の信頼を置かれているらしかった。

彼女が、今さら突然現れた男の甘言に惑わされるようなことがあるとも思えなかったが。

まあ、そんなことはどうでも良い。対面の男は無言の返答に腹を立てたふうもなく、へらへら笑いを浮かべたまま、

「第七師団の脱走兵なんだって？」

それなら有古や谷垣もだ。

内心だけで反駁する。

「金が欲しいのか？ あんたみたいなのがわざわざこんな争奪戦に加わる理由がわからないな。……まさか、土方歳三が語る蝦夷共和国とやらに期待してる訳じゃないだろう？」

黙って、その目を見返す。

何か口先の誤魔化しを言つてやる気にもなれなかった。口を開けば開くほど不愉快な気分にはさせられるだろうという確信があった。

このままでは平行線だと思つたのか。

「俺はさ。昔、14人もいた家族をみんな疱瘡で亡くしたんだ」

やや小首を傾げるようにして。海賊が、淡々とそう囁いた。大の男を容易に見下ろせる巨体の癖に、下方から顔色を窺われているような錯覚を覚える。

「嘘じゃないぞ。俺は嘘つきは嫌いだ」

嘘。——嘘ばかりだ、とふと思つた。



衰弱死と偽られた母。

自害と偽られた父。

病死と偽られた弟。

そして。彼女の横顔を思い浮かべる。

真実はどこにいったのだろう？

「……家族っていいよな。血が繋がってるかどうかなんて関係ない。自分とそうあろうとしてくれる人間がいるっていうのは、とても尊いことだと思うんだよ」

何が言いたいのか。

自然に浮かんだその一言を、落ち着いて飲み込んだ。

やけに持つて回った言い方をする男だと思った。幸いにといいべきか、そういう喋り方を好む男の心理については嫌というほどよく知っているつもりだった。

相手をしないことが最適解。

しかし、思うところが無い訳ではなかった。喪失を知らぬだけの馬鹿者だと思われるのは我慢ならなかった。喪つてから気づくのでは遅い。そんなことはわかっている。

拳に、力が籠る、

「……俺も『家族』を殺された」

——だからこそ、ここで『終わったこと』になどさせてやるものか。

薫る硝煙を手向けの焼香としよう。真つ赤な花を餞に送ろう。今度こそ、本物の葬式を執り仕切ってみせよう。

「ケリをつけなきやならん」

誰も真実を知らないのだから。

俺がやらなければ。

そうではなくては、何もかもが無かったことになってしまふ。無駄になってしまふ。

それではいけないのだ。

これ以上、無益なお喋りを続けてやるつもりはなかった。踵を返す。

「へえ」

その背中に放られる、

「それって、今自分の隣にいてくれる家族と過ごす時間より大切なことなのかなあ」

背後から、頭蓋の真ん中を撃ち抜かれたような錯覚。

半ば反射的に振り返っていた。

肩越しに見据える海賊は、変わらぬ微笑を湛えてこちらを観察している。

「あの人はあんたとずっと一緒に居たいだけじゃないのか？」

吹き抜けた夜風が、物の怪の類かというほど長い黒髪を靡かせている。

「……………」

無言で、割り抜かれた空洞のようなその瞳孔を見返す。

次に浮かんできたのは怒りでも、悲しみでもなく、そこには既に、微かな驚愕が残滓として漂っているだけだった。漠然とした気怠い虚無感だけが広がっていた。

彼女の願いとは。

もはや、それは湿った期待の入り込む余地などない問いだった。

「……あいつも……」

——あなたがここで何か成し遂げたいことがあるというなら、最後まで見守るよ。  
今になって思う。

それは別に、こちらに寄り添いたいがための発言ではなかったのだ、という気がしていた。手段と目的。もしかすると彼女は、最初から。

尾形百之助の選択。

小瓶に捕まえた羽虫を詰め込んでその末路を眺める子供は、傍目から見ればそれを愛している——と呼べなくもない、のかもしれない。興味と愛情の違いは、どこにあるのだろう。

ずっと一緒に居たいだけ。

その拙い祈りに何もかもを委ねるにはきつと、俺たちは遠くまで来すぎてしまったのだろう。

——彼女も、これまでの全てに決着がつくことを望んでいるのではないか。そう思っていたいだけなのかもしれない。

娼婦殺害事件の犯人探し、その最終日。

最後のピースは、日没直前に、命からがら宇佐美から逃げ出してきた石川啄木によって持ち込まれた。

ホワイトチャペルとよく似た札幌の街。犯人はその犯行現場までもを再現しようとしていたのだ。ロンドンでの凶行と照らし合わせた結果、導き出された5人目の犯行現場は。

——札幌<sup>ビール</sup>麦酒工場。

「4人から3人一組の部隊を作り、工場周辺に散らばって犯人を待つ」

急遽立てられたビール工場での炙り出し作戦。土方歳三の提案により、戦力を分散して犯人の確保に乗り出すこととなった。

街娼に扮した囷役、囷を守って犯人を斃す仕留め役、他の部隊に犯人の出現を報せる合図役。合図の手法として、それぞれに二寸五分玉の花火筒が配られた。

部隊は、4つ。

杉元組、土方組、牛山組、都丹組。

「夏太郎、タマ、門倉、海賊が『街娼役』、永倉、シライシ、キラウ、有古が『合図役』、土方、杉元、都丹、牛山が『仕留め役』」

原作と違い、俺と尾形が加わった都合上、中途半端にあぶれてしまう者が出るが。

何かと動かしやすいこの三役一組の配分を変えろという発想は、土方の中には生まれなかったようだった。

「アシ、パと尾形はそれぞれの部隊で補佐に入れ」

アシ、パはもちろん俺を含めた杉元組、尾形は戦力を考えて牛山組に割り振られている。キラウ、門倉はニコイチでようやく一人前扱いらしいので、まあ妥当。

「……………」

牛山の隣で髪を撫でつける尾形の横顔を、そつと盗み見る。……彼と離れてしまうことも、それなりに想定のうちだった。

怪しむ怪しまない以前に、同じ場所に鉄砲撃ちを2人並べても仕方がない。戦力はあの程度均等に分散させなければ意味がない。

しかし、同じく囀役に抜擢された夏太郎には、この采配に思うところがあつたらしい。「タマさんだけ本物の女性ですけど大丈夫なんですか？」

「まあ、どちらにせよこんな夜更けに1人でいるような女は娼婦と思われるだろうし……」

「合図役にしたところで、万が一にも囀を無視してそちらに行かれたら本末転倒だ」

正論土方。じゃあくソデカ房太郎を街娼役に起用したのは何だったんだよ。

土方歳三が買ってくれたきり筆筒の肥やしと化していた化粧道具で、白石が俺の顔を彩ってくれる。他が紅を引いただけの3秒女装なのに対し（やらなくてよくない？）、俺はわざわざ白粉まではたく徹底ぶり。いや、そもそもこの化粧やらなくてよくない？

「ウーン、やつぱりタマちゃんとびきりの美人だねえ、囀役の中でもイチバン！」

「男と比べるな」

いや単に男っていうか……髭とオツさんと水棲ゴリラと比べられても……

そして。

いざ、作戦開始となつたはいいが。

「……来ないな……」

待ちぼうけを始めて早十数分。道端で佇む俺の周りでは閑古鳥が鳴いている。

あれ、おかしいな。原作では白石のプリケツに惹かれたスケベな男が、少なくとも一人は釣れていたはずだったけれど。

俺のケツは白石以下か？

「……………」

——尾形。

爪の切り屑みたいな月を見上げながら、ぼんやり思う。大丈夫だろうか。

同じチームは門倉キラウ<sup>×</sup>牛山だから、少なくともここにいるよりはやりやすいだろうけれど。そこまで考えて……牛山組。

宇佐美時重と遭遇する部隊だ。

尾形百之助が殺す宇佐美と。

——……まだ、足りない、

尾形は一人にならなかつた。ビール工場での作戦に組み込まれた。けれど、まだ足りない。もつと、相違点を積み上げなければ。

最終的にどう転ぶかなんてわからない。けれど、俺がかつて尾形トメの、ウイルクの

殺害を阻止したこと自体は、決して無駄ではなかったはずなのだ。それが今、この状況に繋がってきた。

少しでも変われば、それを起点に今後の流れも変わるかもしれない。

油断はできない。

殺人だ。

やはり、殺人が分岐点なのだ。このビール工場で尾形は宇佐美を殺す。ただ、そのきっかけ自体は偶然の産物だ。

防ぎようはある。

はず、なのだ、

——ドオン。

ぱあっと、周囲が明るくなった。

とつさに顔を上げる。

見上げた夜空に月はもう見えない。閃光の花びらがぱらぱらと散っている。

「……上がった、」

背後で、アシ×パの眩きが聞こえた。

違う。

これはキラウ×の誤発で、



「行くぞ！」

俺の隣を、杉元佐一が駆け抜けていく。続いて小さな影。アシパだった。

「邪魔する奴は全員ぶつ飛ばすッ！ ジャックの皮は俺が引つ剥がしてやる!!」

——追いかけていけば。

ほつかむりを放り投げ、匣用の派手な打ち掛けを脱ぎ捨てる。中に着ていた小紋自体は普段と同じ、襷を掛けて裾を膝下まで詰めたものだ。そのままでは走れない。

「火花が上がった位置は『牛山組』の持ち場だ！」

ワンテンポ遅れて後を追う白石が叫ぶ。

尾形は今何をしている？

諸々を鑑みれば、既に宇佐美を撃つていても不思議ではないのでは？

あるいは、彼自身が。

——考えるな、

「急げッ、門倉とキラウが頼りねえから犯人を逃すかもしれねえ！」

角を曲がった先、

「杉元ニパ！」

キラウと出会った。——1人だ。牛山と門倉がないのは原作通りだ。でも。

「牛山たちは？」

「工場の中だ!」

建物の外壁、1箇所だけ割れた窓ガラスを指差して、キラウ☒が叫ぶ。牛山はやはり工場に逃げた。では、彼は？

「尾形は!」

俺の呼びかけに、キラウ☒が強張った表情のまま首を横に振る。

「わ、わからない……俺がはつきり見たのは牛山☒だけだ……」

わからない。どこに行ったのか。

宇佐美を追いかけた。

牛山についていった。

どちらも有り得るし、どちらでもない可能性もまた、有り得るものだった。

「……………」

——今、ここで、俺が単独で尾形百之助を探しに行くことは許されるのか？

汗がこめかみを伝う。

拳を、強く握り込む。

「あつタマちゃんツ」

「タマー!」

否。

……目の前に都合の良い可能性があるのなら、そちらに賭けてみるしかない。  
キラウ☒に背を向けて、割れたガラスから中に飛び込んだ。

「……………」

暗い——が、問題ない。

アルコールの匂い。立ち並ぶ樽の合間から複数人の気配がする。杉元たちだけではない。既に第七師団の面々が潜んでいる。

歩みを進めていく。

杉元とアシ☒パはどこだろう。

……足音が、近づいてくる。

立ち止まって、その接近を待つ。ビール樽の影から出てきたのは、

「——」

小銃を構えた月島軍曹。

至近距離、とつさにこちらへ向けられたその銃身へ手を伸ばす。

銃声は、しない。

彼に向かって突き出した俺の指先。その間で鈍く煌めく黒鉄の筒——銃のボルト。月島が目を瞠った。それと同時に、斜向かいから飛び出してくる鯉登。

「うぐっ」

その顔面目掛けて、力一杯ボルトを投げつけた。一瞬怯んだ隙をついて、

「Барчок!」

「キエエツ尾形ああッ」

捨て台詞とともに逃走する。幸い、不意打ちだけは上手くいった。しかし、銃を持っている、俺が正面切つてこの2人とやり合うのは不可能だ。

鯉登の猿叫を背に、ビール樽を駆け上がる。高所ならあるいは、と思つたが、今のところ誰の姿も見当たらない。

ここで時間を取られる訳にはいかない。尾形がないのなら、早くアシッパを連れて別の場所に移動しなければ。

「杉元オ!!」

二階堂の咆哮。

眼下がにわか騒がしくなる。

そのタイミングで、向かいの樽の上に登ってくる人影が見えた。……菊田李太郎。

しまった。今降りてもビールの洪水に巻き込まれる——思つた瞬間、対面の立ち姿が大きく揺らいだ。轟音。振動。

間もなく決壊したビールの水音と、激しいアルコール臭が漂ってくる。

「アシッパ、」

洪水を免れたはずの彼女はどこだ。

振り落とされた菊田も見えない。

慌てて樽の上を飛び移りながらあちこち探したが、姿が見当たらない。クソ、俺が見失つてどうする……！」

どつちみち、菊田に確保されたアシ×パはここでは自力で逃げ出す。それはわかつている。けれど。でも、

「どい」だ、

とにかく、ここから出なくては。樽から飛び降りて、出口を目指す。

観音扉まで辿り着いたところで、2人を見つけられた。出たばかりの位置で、両手を挙げた菊田に向けて和弓を構えるアシ×パ。扉に隠れて様子を窺う。

「……………」

どうすればいい。既に事は煮詰まってしまった。一旦はこのまま放っておくべきか。このタイミングで俺が手出しをして何か好転するのか？

そこで、アシ×パの背後から彼女に近づく人影に気づく。息が止まりそうになった。アシ×パが捕まりそうだからではない。

坊主頭に軍服の、その姿。

——宇佐美時重。

息を呑む。

そして、半自動的に脳内へポップアップしてくる思考。

……これは、願ってもないチャンスなのではないか？

「……ッ、」

考えていたこと。

尾形には、宇佐美のみを積極的に殺害しに行く動機までは存在しないはずだ。

だから。

——もうひとつの選択肢。

ゆっくり銃口を持ち上げる。照準、問題なし。この距離なら間違いなく撃ち抜ける。

ここまで取っておいた禁忌<sup>タブー</sup>を。

パンドラの匣を。

彼に見られなければ、何も問題はないはずなんだ。一度だけ。この一度だけだから。

引き鉄に、指を掛ける。

俺が、宇佐美時重を、

「——嬢ちゃん逃げろッ!!」

その時。

何かが、建物の影から飛び出してきた。宇佐美の腰の辺りにぶつかって、彼が体勢を

崩す。花柄の着物を羽織った、小太りの人影。

「あんたが捕まったら一番困る!!」

門倉だった。

そうだ、このタイミングで。

捨て身の援護を受けた賢いアシ×パは、脱兎の如くその場から逃げ出す。

「チ、」

銃口を上げる。あつという間に混戦状態になってしまった。この状況では撃てない。

とにかく、宇佐美を追いかけないと。

その一心で、考えなしに物陰から飛び出したのが良くなかったのだろうか。

「おっと、」

「……………」

今の今までアシ×パに気を取られていたはずの菊田が、機敏に反応して。抜いたナガンの銃口を向けてくる。しまった。とつさに急ブレーキをかけて、その場に留まる。

「迷い込んできた娼婦……………って訳でもなさそうだな」

「……………」

こちらの動向を警戒しつつも、その口ぶりにはまだ余裕が窺える。……………忌々しい。

こんな奴に構っている場合じゃない。

一撃で、決めなければ。

「参ったな……アイヌでもなさそうな若いお嬢さんまで巻き込んで何やってん、」

「撃たないのか？」

遮って放たれた問いかけに。

菊田が、口をつぐむ。

「その判断が命取りだ」

後悔するなよ、

「なに、」

「地獄で戦死した弟が待っているぞ、菊田李太郎」

瞬間。——僅かながら確かに、その目を睜つたのが見えた。照準がぶれる。ナガンを握る手が微かに緩む、

「……どうしてそれを」

——だから、その判断が命取りだと言っただろう？

既に安全装置が解除された三十年式の銃口を持ち上げて。引き鉄を、引いた。

脛を撃ち抜かれた菊田が、膝からその場に崩折れた。

「ッ、クソ、」

完全に隙をつかれた代償は重く、彼は大事なナガンまで取り落としたらしい。それ



で、じゆうぶんな時間稼ぎになった。

ああ。それでいい。自分に言い聞かせるように、内心で呟く。彼を殺す理由は俺には存在しない。

ややあつて背後から放たれた銃弾は、明後日の方向へ飛んでいった。

走る。……どこに向かつて？

「尾形……」

朦朧と、彼の名前を呼ぶ。

乾いた笑みが溢れる。

探さなければ。

そして、成功させるのだ。今度こそ、何もかもを“大丈夫”にしてみせるから。

——燐寸の頼りない灯りに照らされたその横顔を目にした瞬間、思わず呟いていた。

「宇佐美」

わかっていたことではあったが、第七師団もこの捜査に乗り出していたのか。まさかそれが囿にかかるとは思わなかったが。

ただ、その一瞬のうちに。

より近い位置に潜んでいた不敗の牛山が、ヤツに掴みかかっていた。それでもう、手出し不要の取っ組み合いが始まってしまう。

「……今は撃てんな」

牛山に当たる。

まさか、こんなにも早く機会が巡ってくるとは思っていなかったが。急いで仕事を仕損ずる、だ。一旦、銃口を引く。

その瞬間。

すぐそばで、激しい炸裂音。銃声より朗らかなその響きは、土方から与えられた、「あいつは犯人じゃないだろうが」

夜空に咲く大輪の花に、眩く。

ほんの一瞬、周囲が真昼の如く明るくなった。

非常事態と見てキラウ☒が独断で打ち上げたのか。これが吉と出るか凶と出るか。

「おい門倉！ こいつがまさかジャック・ザ・リッパーじゃねえよな!？」

「そいつは鶴見中尉の手下だ！ やっちまえ！」

門倉が高らかに叫ぶ。

しかし——ひとまずは、凶と出たようだ。

迫ってくる鶴見中尉の腹心たちに、踏み出しかけた足を引つ込める。敵味方入り混じっている中で、この人数は分が悪すぎる。

結局、牛山は兇として宇佐美を放り投げ、その隙に工場の中へ逃げ込んだ。

鯉登や月島がその後を追う中、なぜか宇佐美は門倉を追いかけていく。どういふ訳だと少し考えて。

「……まさか……土方歳三は、門倉に刺青人皮を持たせているのか？」

鶴見中尉並みに用心深いあの男のことだ。それくらいはやりかねん。

「まあ、それならそれでやりやすい」

上手いこと二手に分かれてくれた。こうなればあちらを追いかければいいだけだ。

三十年式を抱えて、飛び出した、

「ッ、」

——その足元を掠める銃弾。

とつさに蜻蛉返りで暗闇に飛び込む。撃たれた。どこから。そこで、ふと。

「……ヴァシリ・パヴリチェンコ……」

来たか。ここまで。

花火のせいで居場所を悟られたらしい。

とつきに浮かんできた感情は——やはり、だった。『手練れの狙撃手』ならば、かつての自身であれば、そうするであろうという確信があった。

「後で相手してやる」

暗闇伝いに、宇佐美たちが逃げた方角へ足を進める。独り言ちながら、考える。

——良い狙撃手とは。

——憎しみに駆られて銃の引き鉄に指を掛けない者。

——冷血で、獲物の追跡と殺人に強い興味のある、慎重な臆病者。

ゆえに。

「俺はもはや狙撃手ではない、」

淡々と、事実として受け止める。

仲間の死を悼む間も惜しんで日本にやってきたヴァシリ。今まさに、激情を燃料に銃を撃とうとしている自身。それなりに頑張ってはみたつもりだったが、はなから向いていなかったのかもしれない、と自嘲する。

銃は単なる手段でしかなかった。

——けれど、そこに誇りがなかった訳ではなかった。願いがなかった訳ではなかつ

た。

積み重ねてきた10余年は、最後に特大の鷹を産んだ。悪い気分ではなかった。「まあ、しかし……引退したつもりだったが、期間限定で復活だな」

これも、自分でつけるべき「ケリ」のひとつだ。

ああ、けれど。三十年式を構える腕に力を込めながら、思う。

狙撃手として生きて死ぬ道も、きっとそうそう悪いもんじゃなかったはずさ。

## 48話 佐藤理玖

——兵營にいた頃、雑談の種が尽きると、宇佐美はよく故郷の話をした。

曰く、新潟の生まれらしかった。「月島軍曹と同じ」と言ったら少し嫌な顔をしていたが、「俺は茨城出身だ」と付け加えたら、じゃあまるつきり反対だ、と笑っていた。

正反対。宇佐美の昔話の半分は鶴見中尉との思い出だったが、もう半分は自身の家族のことだった。

実家はそれなりに大きな稲作農家だった。でも、白米を食べられるようになったのは軍に入ってからだと言っていた。新潟は日本一の米どころなのだと誇らしげにしていた。

力自慢の父と、家族想いの母。快活な姉と、やんちゃな弟と、幼い妹がいた。馴染みのない俺の脳裏にもはつきり情景が思い浮かぶくらい、詳細に、朗らかに彼らの話をした。

宇佐美はこちらが妾の子だと最初から知っていたから、嫌味の一環で言っているのかと思つたこともあつた。でもきつと、そうではなかつたのだ。

戦場で兵士が抱く罪悪感。

犬と、羊。

生まれながらにして欠けた人間。

俺は、宇佐美時重にはなれない。

ダンッ。

短い銃声が鳴り響いた。

脇腹に咲く赤い花——宇佐美時重が、驚愕の眼差しでこちらを見下ろしていた。

「……………よくも勇作を」

鉄の味がする。

敗北の味であり、勝利の味でもあった。切れた唇に啜えた弾薬の冷たさが、まだ舌に残っていた。

途端。情けなく尻をついた奴の呆気に取られた表情に、微かな笑みが乗った。

「勇作殿を殺したのは僕じゃない」

思い出すたび腹が立つから、お前には言っていないかったけど。

お互いに向かつて必死に走るホクロの刺青たち。永遠に縮まらない距離。その間で、唇が弧を描く。

「本当は――」

小銃を抱えて、敷地内をひた走る。

宇佐美時重を見つけないければ。

そして、殺さなければ。

尾形百之助より早く。

そうして成し遂げるのだ、

「……はっ、……は、ッ……」

その時。

――ガシャン。

どこかで、窓ガラスが割れる音がした。  
とっさに顔を上げる。



「……マイケル・オストログ……」

——猛烈に、嫌な予感がした。

待て。……そもそも宇佐美は、一度尾形から逃げ出せていたのではなかったか？

汗が、滲む。

尾形は彼を見失った。

でも、再び見つけるのだ。

杉元佐一の怒りを買ひ、窓ガラスを突き破ったマイケル・オストログ。その音に意識を引かれて、偶然にも。

わざわざ宇佐美を探す必要は最初からなかった。俺はただ、マイケルをアシパたちより先に見つけて殺せば良かっただけで、

「っ、」

背後から微かに蹄の音。

近づいてくる。——殺す。殺さなきゃ、

まだ。俺は。

三十年式を構えるより、早く。

——シユパアアツ。

宇佐美の左胸から、赤が噴き出して。馬上の体が大きく揺らいた。

あ。

「あ——」

心臓を、一撃。——稀代の狙撃手が、左撃ちで、宇佐美時重を仕留めた。もう、遅い。

膝から力が抜けた。

その場にへたり込んで、鶴見劇場を観客席の外からぼうつと流し見る。

「……………」

間に合わなかった。

尾形は、宇佐美を殺してしまった。

原作通りに。寸分違わず。

宇佐美時重の死が、尾形百之助を狙撃手として完成させた。

最後の分岐を変えることはできなかった。ならば、この列車はもはや終点まで、？

……尾形、

「……………尾形……………」

そうだ。

——彼のところに、行かなければ。

膝から、半ば強引に立ち上がる。

行つて——行つて、どうすればいい？

絶対に避けなければいけない事態が起こつてしまった。ここに来て。

俺は何をすればいい？

考えるな。

……弾はどこから飛んできた？　ふらふらと、糸に引き摺られるように歩を進める。

大丈夫。

大丈夫……にしないと。俺が。

俺しかないのだから。

そこでふと、気づく。

「……尾形、」

尾形百之助が、少し離れた建物から出てくるところだった。一瞬、ほつと胸を撫で下ろしたのも束の間。

——それを、俺以外にも見ていた人間が一人いた。

軍帽、コートに身を包んだ若そうな男。小銃を持っていた。——第七師団。

息を呑んだ。

尾形はまだ気づかない。

どうして。男が、銃身を構える。駄目だ。このままだと。スリングに手を掛ける。

引き鉄に指が、

「あつ」

—— ぱん。

思つたより軽い音が鳴つた。

男がいきなり体勢を崩す。頭から勢いよく突き飛ばされたみたいに。それで、うつ伏せに地面へ倒れた。痛そうな音が鳴つた。

動かなくなつた。

あれ。

腕が、重い。ふらついて、尻餅をついてしまった。そこで何気なく目を落として。

—— 硝煙が燻る三十年式。

「、」

俺が撃つた？

「タマ、」

俺に気づいたららしい尾形が、こちらに駆け寄ってくる。

男から目を離せない。

びくともしない。

つてことは。

「……死んだ？」

死んだ。頭に当たった。

「死んだよな、」

後ろから眉間を撃ち抜かれて生きてる人間がいる訳がない。

俺の眩きに、尾形が背後を振り返る。男が動く気配はない。救急車。病院。もう無駄

だ。即死。その二文字が踊る。

「……頭だった……死んでる」

彼が厳かに呟いた。

まあ。そりやそうか。

そうだよな。

手が、肩に触れてくる。

「悪い……大丈夫か」

いや、そうじゃなくて。

死んだ。

殺してしまった。

俺が。尾形百之助の目の前で。

今になって。フラッシュバックが、脳裏で花火のように爆ぜては消えていく。

——何故だ？ 手を汚したくなかったからか？

ここまで頑張ってきたのに。

意味がなかった？

——お前がこの銃で人を殺すところを見てみたい、

俺は清い人間などではない。

でも、どうしてもその建前が必要だった。ぶち撒けた水は二度と盆には返らない。崩壊した建前もはや机上の空論でしかない。

死んだ人間は生き返らない。

焦りが、風船のように膨れていく。

駄目だ。

このままじゃ何もかも台無しになる、

「……アシ×パのところに行かないと」

立ち上がる。

それはまさしく、閃光のようなひらめきだった。輝きに突き動かされて、足を動かす。

「……は、？」

「鶴見中尉から取り返さない」と

「捕まったのか」

小走りですいてくる気配がする。

暗号の解き方。鶴見中尉が知らなければいいのだ。その前に引き離せばいい。金塊がどこにあるのか、俺は既に知っている。

誰よりも早く、終わりに辿り着ける。

それしかない。

「誰から聞いた？ お前が見たのか？」

「ソフィアも……海賊房太郎は死に、杉元佐一と白石由竹では間に合わない、」

「っ、」

尾形は、今度はすぐに言い返してはこなかった。半開きの口から細く息が漏れる。恐る恐るといったふうで手首を掴んでくる。

視線を動かす。目が合う。

「……………」

眉を下げた、戸惑いの表情。

彼が慎重に唇を動かす。

「お前……さつきから何を言ってるんだ？」

頭の中で。

ばらばらと、コミックの頁が捲られている。早送りのように脳裏をコマが過ぎ去って

いく。25巻、26巻、27巻。覚えている。端にこぼしたコーヒーの染みの形さえ。

札幌麦酒宣伝車追跡劇。

海賊房太郎こと大沢房太郎。

小樽の病院で見た女、

「そういうことになってるんだ!!」

だから。

彼の手を振りほどく。

「っ、」

走り出す。向かわなければ。

あの教会に。

「このままじゃ何も変わらないッ、」

どこかで帳尻を合わせないと。

俺はあと、どれとどれを壊せばいい？

何を変えれば未来が変わる？

なんでもいい、

「——タマー！」

でないと、



「行くな、——勇作ッ！」

——勇作。

この場で放たれるはずのないその名に、とつさに足が止まった。振り返る。戸惑いに焦りが一瞬、塗り潰される。

「……………？、……………」

振り返ったその先。

尾形は、その場にただ立ち尽くしていた。

彼らしくもない、呆気に取られたような表情。握りしめられる拳が微かに震えている。

「……………お前の、」

肩を上下させる合間に、彼が身体の奥底から絞り出すように、言葉を紡ぐ。

困惑、焦燥、悲壮。強張った茫然自失の下に渦巻く、色とりどりの感情が見て取れた。

尾形は困って、焦って——そして、純粹に悲しんでいた。

「お前のことが、……………心配なんだ……………」

——は。

呼吸が、止まった。

何度目か、聞いたことのある台詞だった。

お前のことが心配なんだ。

……何故？

見て見ぬふりをしていたその匣の蓋が、緩みかかっていた。——否。答えは最初から俺の中にあつたじゃないか、

こんな真似はもうやめろ。

それは。

尾形百之助が、

——俺のことを愛しているから？

あ。

ダメだ、

「——う、」

何かが迫り上がってくる。

視界が、歪む、

とつさに口を覆った手の内側から、どんどんあふれる——止まらない、ぐちゃぐちゃの。

どす黒い。ぶち撒ける。

これは何だっけ？

ひどい気分だ。

気持ち悪い——穢らわしい、悍ましい。見たくもない。必死に抑えて、隠していたはずの。「俺」の中身が、こぼれていく。

あ。ああ。

そうだった、

——夢。

将来の夢は何ですか。

佐藤理玖の夢は、サラリーマンになることだった。小学校も中学校も高校も大学も、全部全部全部そうだった。

たくさん勉強して、良い学校に入って、良い会社に入りたかった。

そのためにたくさん頑張った。どんな辛いことだって耐えられた。

……何故？

——どうしていつもみんなと同じにできないの？

母さん、

——理玖、お前がわからないよ、なんでこんなことをしたんだ？

父さん、

——ちよつと変な子なのよね……

——佐藤お前、頭おかしいよ、

——どうかしてる。

——普通じゃない。

佐々木先生、山田先輩、金井、赤崎。

普通。ふつう。

みんなと同じ、

そうだ。俺はずつと、“普通の人間”になりたかつたんだ。

だって、“みんな”が俺をおかしいって言うから。俺はみんなの思う“佐藤理玖”になれなかつたから。

映画や漫画や小説をたくさん観た。

興味なんかこれっぽっちも無かつたけれど、それでも観た。何かのランキングに入つた有名な作品を、片っ端から買って読んだ。

『ゴールデンカムイ』を読んだのも、きつとそんなことが始まりだつた。

何年の、何のランキングだつたのかは、もう覚えていない。

普通のみんなのことを理解したくて。そういうことを繰り返せば、いつかきつと同じ

生き物になれるんだと思っていた。  
なれなかった。

誰も俺を理解できない！

故に、俺は俺を否定しない。

誰も俺を理解できないのなら、せめて俺自身くらいは俺を肯定してやりたかった。

だって、そうしないとあんまりつらくて、生きていけないじゃないか。

だから尾形百之助のことが嫌いだった。

彼は「普通」だったから。

何も欠けてなどいないのに、欠けたふりをしていたから。ただ、愛した人から愛され  
たかっただけの子どもだったから。

憎たらしいと思った。

でも、目が離せなかった。

中途半端な巻数ばかり並んだ本棚の中で、気づけばゴールデンカムイだけはきっちり  
最終巻まで収まっていた。何度も読み返した。

お前のことが嫌いだったから。

俺はずっと、お前を見ていたよ。

——尾形百之助は、何をどうしたらあの結末を回避できたのだろうか？

母を殺し、弟を殺し、父を殺し。

もはや尊属殺人フルコンプ説のある彼の道程は、始まる前から全てが終わっていた。

——尾形百之助は、どの時点で、何をどうすればあの悲劇的な死を回避できるのか？  
普通の人間だったのに。

最後の最期までそれに気づけなかった。気づいた時には全てが手遅れだった。

そんなの馬鹿みたいじゃないか。

俺はこんな「普通」になりたかつたのに。そうだ。俺はお前になりたかつたんだ。

だから、教えてやりたいと思つた。

——……何のために？

たくさん、たくさん人を傷つけたな。

二瓶鉄造、辺見和雄、家永カノ、江渡貝剥製所にやって来た兵士、都丹庵士、彼の仲間たち、月島基、鯉登音之進——そして、ビール工場で出会つた第七師団の彼。

人間を傷つけて、殺してなお、それをなかつたことにできる「道理」などこの世には存在しない。

その通りだ。

因果応報。地獄に堕ちろ。

——欠けた人間、

俺に罪悪感は存在しない。

欠けた人間だから。

何もかも間違ってるんだ。

そんなことわかってる。俺は正しくなどない。何ひとつ肯定などできない！

正しくなりたい。

正しくなれない。

あああ。

生きているのはつらかったです。

死んでしまいたい。……あ、死ねないんだっけ。不死身だから。

馬鹿らしい。

前世でさっさと死んでおけばよかったんじゃないか？ そうすれば温情で来世は普

通の人間に生まれ変わったのかもね。

あんなゴミみたいな人生、継る価値もなかった。

誰の目から見ても正しくなかった。

生きている必要がなかった。

なんでこんなことになってるんだっけ。尾形タマでも、この時代に生きる誰でもな

い異常者。普通からは程遠いじゃん。

俺は一体何なんだ？

ああもう、尾形百之助のことなんてどうでもいいんだって。気に入らないなんて思ったのが全ての間違いだった。

誰か俺を助けてくれないですか？

全部お前のせいだろうが。

上手くないかない。

上手くないかない。何もかも。

最低の存在。

早く殺してくれよ！

——…尾形百之助、

真面目で優しい子。

違う。考えるな。

俺を愛してくれた、

——違う！

こんなのは正しくない、

俺という異物が取り除かれて初めて “尾形百之助” は完成する。

そうだ。その通りだ。



存在しなかった。

最初から。

——俺を愛さないで。

だって、佐藤理玖はずっと何もしてあげられなかったじゃないか！

お祖父様、お祖母様。

結局、短い手紙しか残してやれなかった。

杉元佐一。白石由竹。アシ×パ。

アシ×パを裏切らないでくれと言われた。約束を守ろうとしてくれた。……心配、してくれた。

谷垣、エノノカ、チカパシ、インカ×マツ、キラウ×、牛山、門倉、夏太郎、土方、房太郎——

俺の居場所はここにあった。

全部、俺が壊した。

——どうして？

罪悪感なんてない。

感じられない。

欠けた人間だから！

——お前のが心配なんだ。

——愛しているから。

……尾形百之助、

あ。ああ。顔を手で覆う。

ごめん。ごめんね。

本当にごめんなさい。

期待に応えられなかった。

あんなに愛してくれたのに。

慈しんで、大切にしてくれたのに。

愛を返してあげられなかった。

——何もかも、俺のせいだ。

……ふと、我に返る。

煉瓦に擦れる手の甲が痛い。空気の抜けたタイヤみたいな自身の呼吸が煩い。壁際  
で蹲つて、頭を抱えていた。

吐き気と頭痛。手足が震える。

視界の焦点が合わない、

「タマ」

声が出た。

すぐ隣からだった。

こめかみに食い込んだ指先が、やんわり引き剥がされる。頬に、包み込むように手の  
ひらが添えられる。温かい。顔を上げた。

尾形が、俺を見ている。

柔らかい闇。

尾形百之助が俺を見るその目。いつかの杉元佐一の瞳であり、白石由竹の瞳であり、  
アシ□パの瞳だった。

ああ。

どうして、

「……尾形……」

——こんなことはもうやめてしまおう、の一言が、何故言えない？

## 49話 きみは宇宙

肩を貸してくれる尾形に半ば引きずられるようにして、その場を離れる。

こんな形で彼に迷惑をかけている場合ではないはずなのに。

わかっているつもりだった。それなのに、今になっても何の現実感もない。踏みしめる地面の感覚すら曖昧で、どこか夢を見ているようでさえあった。

煙の匂いがある。

マイケルが苦し紛れに放った火種が、工場の中で燃え広がっているのだろう。上工事はもう死んだのだろうか。

——ドンッ。

唐突に響いた鈍い轟音に、顔を上げる。

電信柱に追突した麦酒宣伝車、そこから投げ出された白石と杉元が、再びわたたと車に乗り込むところだった。

「何やっとなるんだあいつらは……」

呆れた口調でありつつも、尾形はこれをまたとない好機と見たのだろう。俺を支える腕に力がこもり、歩みが速まる。それにいち早く気づいたのは杉元だった。

「あつ!? 尾形!」

「早く乗せろ、こつちはヴァシリ・パヴリチェンコに狙われてる」

——ヴァシリ。

何気ないふうで発せられた一言だったが、どきりとする。

やはり、尾形はこのビール工場でヴァシリから狙われていたのだ。気づいた、ということは、つまり撃たれたということだ。原作同様、幸い大事には至らなかったようだが、車内に引つ張り上げられる。

「頭巾ちゃんか……」

「どうか何なんだこれは」

怪訝そうに見慣れない自動車の内部を見回していた尾形だったが、そこで違和感に気づいたらしい。1人、足りない。

「……アシ×パは?」

控えめな呼びかけに、杉元が唇を噛んで軍帽を引き下げる。代わりに白石が口を開いた。

「鶴見中尉に……」

「……………」

述語の欠落した呟き。それでも賢い尾形は即座に事態を飲み込んだようだった。肩

に回ったままの腕に、微かに力が籠る。彼は何を思っているのだろう。

「タマさん、」

つむじに、張り詰めた声が降ってくる。杉元だった。

「何かあったのか」

……何よりも大切なアシバが最も危機的な状況にあつてなお、俺を気遣ってくれるのか。その優しさは、今は痛いだけだった。

問われた尾形は、すぐには答えなかった。数秒の沈黙があつた。それから、

「……いや……」

珍しく言い淀んだような口ぶり。

杉元も、それ以上は追及してこなかった。

……足元を、何かが流れている。

黒い川。何気なくその流れを追っていった先。飛び込んできたその姿に、ぞつと背筋が粟立った。男には稀な長い黒髪、

「……海賊房太郎……」

座席にもたれかかる大柄な人影。

不自然に硬直した手足、青白い顔、血濡れたシャツの胸元——明らかに、死んでいた。

昨日の今頃には、酒を飲んで、笑つて、俺に話しかけてきた男だった。

広がっていく。素肌をムカデの群れがのたくっているような不快感。俺は最初から知っていた。彼がここで死ぬことを。

知っていて、何もしなかった。

——防げたんじゃないのか？

彼は死んだ。筋書き通りに。尾形百之助と大沢房太郎、何が違うのだろう。

視界が歪む。

俺が、崩れていく、

「――」

傾いた体を力強く抱きとめられて、はつと我に返った。尾形の腕だった。

ばらばらになりそうなのを繋ぎ留めるように胴体へ回った腕に、必死にしがみつく。

視界に入る手足が震えている。感覚が遠い。

「有古イポ？テだ！」

そんな杉元の声が聞こえても、もう、顔を上げられなかった。抱きしめた熱だけが、今は世界の全てだった。

「アシッパ、飛び乗れッ」



それから、どれほど経ったのか。いきなり車が大きく揺れた。窓から身を乗り出した尾形が叫ぶ。

——有古イポ☒? テのアシ☒パ奪還計画は、とりあえず無事に成功したらしい。脳の表面だけでぼんやり思う。

俺と尾形という異物が混じっても、何も変わらない。何も。良いことも、……悪いことも?!

アシ☒パがソフィアもろとも隣に転がり込んでくる。銃声。三十年式。立て続けに鳴る。今度のもつと軽い。拳銃だ。

「イポ☒? テが撃たれたツ、杉元止まって!」

「止まるな!! 行け!!」

「アシ☒パちゃん危ない!」

「馬鹿、伏せろツ」

言いながら、尾形の腕が俺の頭を抱き込んでくる。そのすぐ脇を銃弾がすり抜けていく。

現実味が無い。何もかも。

映画を観てるみたいだ。

「アシ☒パさん頭下げてツ」

「アシ×パ、行け!!」

——ドンツ。

鈍い銃声。イポ×?テ。隣のアシ×パが叫んだ。

宣伝車が止まることはない。

「っ、」

おもむろに。

腹に軽い圧迫感を覚えて、目を向ける。アシ×パが、俺に抱きついていて。そんなわかりやすい接触の感覚すらどこか曖昧に感じる。全身が薄い膜に包まれているようだった。

震えている。

傷ついている。悲しんでいる。怯えている。それはわかるのに、何をすればいいのかはわからなかった。手足が動かない。

こうされるのは初めてではなかった気もする。

俺は今まで、どうしていたのだっけ。

微動だにしない俺を訝しんでか、アシ×パが胸元から顔を上げた。

「……タマ……っ。」

困惑したような、気遣うような声色。何も思えなかった。顔を上げる。窓の外を見

る。

雨が、降っていた。

「……………」

がたごとと、宣伝車は揺れながら停車場に向かっている。終着点へ。終焉へと。

俺たちの旅が、終わろうとしている。

その先、何が待ち受けているのだろう。

……俺はその時、どうすればいいのだろう。

——函館山のロシア領事館。

海賊房太郎が、最期に白石由竹へ遺したその手がかり。鍵を鶴見中尉が手に入れてしまった以上、もはや我々には一刻の猶予もない。

——列車でそこへ向かいながら、車内で刺青人皮の暗号を解く。

その半ば賭けとも言える方法しか、こちらに活路は残されていない。

唯一の鼻持ちならない男客をつまみ出し、貸し切り状態になった一等車を丸ごと占領して、暗号を解き始めることとなった。

とはいえ、主力はウイルクをよく知るアシパと土方歳三くらいなもので、他の人間は賑やかし程度にしかなくていい訳だが。……それはつまり、余裕が生まれたということだ。

「少し横になったほうがいい」

隣の彼女に、呼びかける。

俺が言わなければ、遅かれ早かれ杉元か白石のどちらかが口にしていただろう。それくらいの有様だった。

あの不可解な恐慌状態からひとまず落ち着いた——というよりは、何かが良い方に向に極まってしまった。そんな印象を受ける佇まい。

「ひどい顔色だぞ」

項垂れていたのが、微かに面を上げる。眼球だけが動いて、視線を投げかけてくる。

「……………」

崩れた前髪の奥から覗く、不安げとも恨めしげとも取れる陰鬱とした眼差し。とにかく、大人しく従うような気分ではないらしい。

だからといって、暗号が解けるまでここにただ座らせておくのが良いとも思えなかつ

た。

「大丈夫だ、」

血の気のない頬に指を滑らせる。冷たい肌。死人のようだ、とふと思う。

杉元佐一が無言でこちらを見ている。何かと気に食わない野郎だが、彼女にとっては安心材料のひとつだろう。

「杉元も、……アシ箱パもここにいます。何かあればすぐに起こす」

「あれ？ ボクは？」

腹の立つ笑顔で視界に入り込んでくる白石由竹を意図的に黙殺しつつ、軽い身体を座席に横たえた。特に抵抗されなかったことに微温い安堵を覚える。

彼女は少しの間、薄目でこちらの様子を窺っていたようだったが、観念したのかやがて瞼を下ろした。微かな呼吸が聞こえてくる。

穏やかとは程遠い、強張った寝顔。目を逸らす。立ち上がる。

三十年式を抱え直す。

ヴァシリ・パヴリチェンコはまだ付いてきているのだろうか。

扉から露台に出て、双眼鏡を構える。

丸い視界を流れていく景色。

——奴は、俺が麦酒工場を離れたことには勘付いているだろう、という確信があつた。どこかで決着をつけないければ。

……背後から、気配が近づいてきている。扉が開く音がした。視線だけをそちらに向ける。

「尾形」

白石由竹が、見慣れた柔らかい微笑を湛えてこちらを見下ろしていた。

何か言うより早く、

「は……よっこいせつと」

若さの感じられない掛け声とともに少し離れた場所に腰を下ろし、胡座をかく。そのまま唇を尖らせて何も無い空間を見つめている。

何の用だと切り出してやる義理もない。黙っていたところに、前を見据える白石がゆっくりと語り出した。

「……ボウタロウな。お前とタマちゃんのことやたら聞きたがつたんだぜ」

房太郎。

死んだ人間の名前がこの男の口から出てきたことに、まず少し驚いた。そんな感傷的なところがあるようには見えなかった。

それから改めて内容を精査する。

「……聞きたがった？」

「ウン。羨ましかつたんじゃねえの？」

鬱陶しいちよつかいをかけてくる怪しい男、という認識しかなかったが。そういえば、最期にしたのも「家族」についての会話だったと思ひ出した。

——あの人はあんたとずっと一緒に居たいだけじゃないのか？

あれはある意味、彼なりの恨み節だったのかもしれない。今になって思う。

「家族がみんな瘡瘡で死んで。それで、死にきれないほど家族が欲しい……王様になりたいって。ずっとそばに居てくれるやつが欲しかったんだ。お前にとつての、タマちゃんみたいなの」

海賊房太郎はこちらのことを知っていた。

どこまで耳にしたのだろうか。どれだけ傷ついても「弟」を見捨てなかつた彼女の姿は、男の目にどう映っていたのだろうか。

「アイツ……すつこい寂しがり屋だったんだよ。でも、それだけだったのにな」

白石は落ち着いていて、悲しんでいた。海賊房太郎という男が迎えた死への葬いがそこにはあつた。

「本当の家族が全員いなくなつても、寂しくないと思えるようなことがあれば良かった

のかもな……」

空を見つめながら、振り絞るようにそう呟いてみせる。

何度もその機会はあったはずなのに。大事に温めすぎてとうに腐ってしまった願いなんか捨てて、やり直せたくはないのに。

叶わぬ理想に生き、理想に死んだ。

それは、

「……………」

目を逸らす。

白石にこちらを気にした様子はない。最初からただ吐き出す場所を探していたのかもしれない。目を閉じて、呟く。

「ま。寺で育った捨て子の俺にや、よくわからなかったけどよ」

申し訳程度に、何気ないふうで付け足された吸湿剤。はたと顔を上げる。脱獄王と呼ばれた男の、その出自。

両親のいない捨て子。

その発言の本質はそこにはない。

わかっている。それでも、引つ掛からずにはおれなかった。欠けた人間、

「……………愛のない両親の間に生まれた子どもは、何か欠けているのでは？」



ずっと掌で包んで、大事に温めていたはずのものだった。いつの間にか、随分と遠く感じていた。それでも口に出す。

呆気に取りられた表情の白石が目を瞬いたのが見えた。

「え？」

「両親がお前を捨てていなければ、お前は網走監獄になど入ることなく、満たされた人生を送れたのではないか？」

初めから祝福された人間であれば、刺青囚人としてこんな争いに巻き込まれることもなかったのでは？

両親が自分を見捨てなければ。

愛されて育つことが出来たならば。

白石はまだ黙っている。

「……………、そんなの……………」

やがて、両手を坊主頭の後ろで組み。気の抜けた仕草で、空を仰いだ。  
そうして、

「考えたこともなかったなあ」

白石由竹は。

きつぱりと、何でもないことのようにそう言い放った。

二の句が継げない俺の前で、垂れ目がちの瞳を穏やかに細めて。

「尾形ちゃんつてき。とつても真面目で寂しがり屋なのね」

真面目な寂しがり屋。

お世辞にも褒め言葉とは呼べない形容詞だったが、嫌な気分にはならなかった。落ち着いた気持ちでそれを受け止める。

その間にも、白石は与えられた仮定条件に思考が引つ張られたのか、ううんと軽い調子で唸って。

「何か変わったかもしれないし。変わらなかつたかもしれねえな。でも、結局のところ俺は俺だよ。やりたいようにやるさ……」

気取っているようには見えない、いつそ淡々とした口調だった。羨望も、嫌悪も入り込む余地がない。自然体の、柔らかい無関心だけがそこにはあった。

「どう生まれたかでひとの見る目を変えるなんて馬鹿らしいぜ。あのアシ×パちゃんだつて生まれてスグ母ちゃんを亡くしてるし。タマちゃんも捨て子だった。でも、だから何だつて話だろ？」

馬鹿らしい——馬鹿げている。

自らに投げかけ続けていた問いに、解答がもうひとつ増えた。遙か昔に与えられた最

初の答えと、全く同じ形をしていた。

そんな問いは馬鹿げているのだ。

ああ、

「……そうか」

きつく握りしめたままだった拳が開いて。陽の光に照らされた掌の上にはもう、何もなかった。

隣の白石は穏やかに笑っている。

「しかし、まあ。お前、ずっとそんなこと考えてたんだな」

胡座に頬杖をついていた彼が、ゆっくり立ち上がった。こちらに背を向ける。

「でも……聞けて良かったぜ」

彼とこうして話すのは、これが初めてだった。それを今になって意識する。

彼女は確かに白石由竹という男に一定の信頼を置いていたようだった。その理由が、何となく理解できたような気もした。

そこで、扉を開けてまさに車内へ戻ろうとしていた彼が、おもむろに足を止める。

「……そーいや、結局」

肩越しにこちらを振り返り。問いかけてくる。

「お前の夢は何だったんだ？」

一昨日の晩。

酒の席で海賊房太郎に投げかけられて、聞かなかつたふりをしたその質問。少し考えて、

「第七師団長」

「エ」

「……だった」

遅れて付け足されたその三文字に、強張った表情が温かく解ける。それを黙って見つめ返す。

母が最期まで愛した将校の椅子。 “第七師団長” という肩書きさえあれば、何もかも上手くいくような気がしていた。それだけあれば何も要らない。何を捨てても、何を壊しても、手に入れたいものだった。

そのはずだった。

これは、後悔だ。

今さらそれに怯えることはなかった。いつか抱いた理想を懐かしく思うこと。執着を忘れてしまうこと。それこそが人の生の在り方だった。後悔を積み重ねることではなく、人間は生き遂せられない。

「……結局、俺の周りにいた真面目な寂しがり屋は、お前しか残らなかつたな」

息を吐き出した白石由竹が、自らの坊主頭を撫でつける。

「もう手放すなよ」

最後にそう柔らかく言い残して、今度こそ車内に消えていった。その背中を見送る――横顔に露台の隅から投げかけられる、

「……………あの……………もう、何も言いませんから、そろそろ車内に戻っても……………？」

「……………」

「ヒッ」

槓桿をわざと音を立てて操作して、黙らせておいた。

何気なく振り返った車両の中では、未だにアシ<sup>×</sup>パと土方歳三が刺青人皮の群れと睨み合いをしている。

彼女はまだ眠っているらしい。ここからではその華奢な足しか窺えない。その奥で、同様に船を漕ぐ杉元の姿が見える。

「……………」

それを眺めながら。

麦酒工場での、彼女の恐慌を反芻する。

——いきなり嘔吐したかと思えば、遮二無二暴れ出した。頻りに何事かを呟いていたようだったが、ほとんど聞き取れなかった。

明らかに、精神に何かしらの異常を来しているのしか思えない苦しみようだった。

不安定なところがある、と感じたことなどない。彼女はむしろ、大抵の場合で異常なほどに冷静だった。

常人ならば、繰り返し肉体の死を迎えた時点で発狂しているのではないか。けれど、それは彼女にとつてはむしろ瑣末事であつたようにさえ見えた。

でも、彼女はあの場面で明確に錯乱した。

彼女の本質はどこにある？

言い知れぬ不安が心の底に満ちて、細波を繰り返している。小瓶に捕まえた羽虫を詰め込んでその末路を眺める子供。

——本当にそうだったのか？

今となつては、何か大事なことを見落としている気がしてならなかった。このままで彼女は一人で苦しみ続けるだけだ。考えろ、

——知っていたんじゃないのか。

知っていた。

当時はほとんど苦し紛れの発言だったが、今思えば的を射ているような気もした。

客観的に見て、彼女がそこまで心身の調子を崩すような事象があつた工場で起きたとは思えない。第七師団の兵士を殺してしまったことか。人間に向けて一切の躊躇なく小銃の引き鉄を引ける女が、今さらそんなことに怯えるものか？

或いは、外部から要因を見出そうとすること自体が誤りである。  
こちらには見えない場所にある。

“それ”は彼女の中にしか存在しないものなのではないか？

——お前は俺を誘導しようとしているんじゃないのか？  
そうだ。思い出せ。

彼女は最初から、一貫してこちらの行動を妨害していたのではないか？

金塊も、アイヌも、第七師団も、彼女にとってはその道程を構成する要素のひとつでしかなかった。

ロシアでの病院からの脱走——否、ウイルクの殺害——違う、もっと遡れる、

——百之助がお母さんを殺さなくて良かった。

「  
瞬間。

脳裏を駆け抜けた稲妻に、思わずこめかみを押さえる。

——やっぱり、おつ母の鍋に殺鼠剤を入れるべきだった。

爆ぜた雷鳴が、ひとつの答えを照らし出す。

——彼女はそれを「知っていた」。

あまりに荒唐無稽な仮説だ。

しかし、そう仮定すれば全ての辻褄が合ってしまうこともまた、事実だった。

彼女は鶴見中尉と繋がってなどいかなかった。そんな真似をする必要さえもなかった。

彼女の知識はそれ以上の外側にあつた。

——百之助はそんな人間じゃない。

——いつかわかる日が来る。

——兄様は決してそんな人じゃない。

——きつとわかる日が来ます。

あの発言の重なりが、抱擁が、偶然の産物などではなかったとすれば？

——花沢勇作はお前じゃない。

何か意味を持って放たれた発言だったのだとすれば。彼女はあの203高地の出来

事すら。否、それを考えていたらきりが無い。

最初の仮説に立ち返る。

誘導しようとしている。

どこに？



……彼女の望む未来に？

——そういうことになってるんだ。

そういうことになっている。

彼女の中には、金塊争奪戦の路線図が完成している。何十年も前から続いたこの線路の先に、何があるのかを知っている。

だから何度も繰り返ししてきた。例えば命が終わろうとも、望んだ終着点に辿り着くまでは「上がれない」。

——このままじゃ何も変わらない、

おそらく彼女はあの麦酒工場で、彼女しか知り得ない「何か」を防げなかった。同じ道を辿ってしまった。致命的な失敗だった。だからあそこまで取り乱した。

このままでは良くないことが起きる。

それを彼女は知っている。

可能性ではない。確定事項に近い。

金塊を鶴見中尉に奪われる。誰かが負傷する。

そうではない。彼女の真意は最初からそこにはない。かつての彼女が視た旅の終わり。

取り返しをつかないこと。

——死。

誰かが死ぬ。

アシ~~ク~~ハ。杉元佐一。白石由竹？

……否、

ふと。顔を上げる。

明瞭になつた視界を景色が流れていく。

ごうごうと、風が吹き荒んでいる。その不明瞭な響きは、体内を巡る血液のそれによく似ている。彼女が最も恐れる未来、

「……………俺か？」

思わず漏れたその眩きは、激しい風の音に紛れて、ひどく他人事じみて聞こえた。

## 50話 愛は暗闇の中にある

家の裏庭に、子猫が迷い込んできたことがある。

尾の先から鼻頭まで真つ黒の猫。ねずみに齧られてもしたのか、右耳の端が欠けていた。

俺は野良猫になんか興味がなかったの、その子猫が縁側でどれだけ鳴いていようが放置していたが。どういう訳だか、それは幼い尾形百之助の興味を惹いたらしかった。

人懐っこい猫だった。尾形が近寄って行って、無造作に頭を撫でて逃げるどころか嫌がりもしない。そのサービス精神を受けてか、尾形はわざわざ自分の食事を取って置いて、子猫に与えたりもしていた。

愛嬌はやはり得なのだなあ。

その程度の感想しか抱かなかった俺がその猫に関わり出したきっかけは、何とか、後味の悪さを避けたかったからである。

何せ、知識のない尾形少年は到底猫に与えちゃ駄目だろというようなものさえ平然と食わせようとする。猫も猫で単なる畜生なので、食えそうなら何でも口に入れようとする。ネギの味噌汁で作った猫まんまを与えようとしていた時は恐れ入った。昔の犬猫

は短命な訳だ。

現代人の知識を後ろ盾に得た子猫はすくすく成長していった。尾形も、その猫をそれなりに可愛がって、慈しんでいる——ように見えた。

別れは、本当に唐突だった。

ある日、日課の鴨撃ちから家に帰る途中で、数歩先に行く尾形の足が、おもむろに止まった。

「……………？」

俺が近づいていっても反応しない。彼はじつと地面を見つめている。その視線の先、

「あ」

一匹の猫が横たわっていた。

右耳が欠けた、真つ黒な猫。

柔らかそうな腹が裂けて、臓物が引き摺り出されていた。見開かれたままの鮮やかな蛍光イエローの瞳が虚空を見つめていた。

要するに、死んでいた。

「……………」

病気か、事故か。縄張りに入って、カラスの群れに突き回されでもしたのだろうか。あまり頭の良くなさそうな猫だったからな。

野良猫とはいえ、身近な生命が初めて失われて。『尾形百之助』は、何を思ったのだろうか。

やがて母を殺す少年の目に、無残に命を奪われた野良猫の姿はどう映ったのだろうか。  
「……百之助？」

まあ、まだトメは生きている訳だが。……俺がそんなことを考えている間にも、まだ清らかな尾形少年はおもむろにその場へしやがみ込み。

——大事な獲物であるはずの鴨を容易く脇へ投げ捨てて、両手で猫の死骸を抱き上げた。

「え、」

滴る赤黒い体液。愛着の無い俺には生理的嫌悪感しか湧き起こらなかったが、尾形は淡々と。

「葬式……しない」と

葬式、

「そ、……………」

それを聞かされた俺の頭にまず初めに浮かんだのは「禁じられた遊び」だったことは許されたい。まあ……尾形百之助はそんな段階を踏むまでもなく普通に母親を殺すのだらうけれど。

この類のエピソードが彼の人格形成に多大な影響を及ぼしているのだとしたら、それが原作で描写されていないのはおかしい。ただ、トメの死以前から葬式というものにはこだわりがあったのだなという発見はあった。

いや、「儀礼」に対するこだわりか。

曖昧を嫌う——或いは理解できない彼にとって、儀礼は明確な認識の指標として機能しているということか？

だから大事にする。それしか自分の感情に納得を与える術を知らないから。

自分で言っておきながらよくわからない。飽くまでこれは漠然とした仮定だ。漠然としすぎていて、忘れてしまいそう。そうでなくても俺は覚えていなければならぬことが多すぎる。

「……そうだね」

とりあえず、頷いておいた。

——それからの尾形の手際の良さは、特筆すべきものだった。

家から持ち出してきたのはシャベルとマッチと行李と一号壺、そして餌入れに使っていた皿、線香。まず猫の死骸を皿と共に行李に入れて火をつけ、焼け残った骨を拾って壺に入れる。シャベルで掘った穴に壺を埋め、拾ってきたらしい比較的四角い石を突き刺す。最後に線香を立て、手持ち無沙汰な俺に摘んでこさせた雑草（この時期に花なん

か無い)を供えて、手を合わせる。

それはまさに「葬式」だった。

幼い子どもの真似事などではない、甘えの入る余地のない、明確な儀礼だった。

こんな歳で、どこでそんな細かいやり方を学んできたんだとか、色々聞きたいことはあつたが。

「……………」

冷徹なほどに形式ばって儀式を完遂することこそが、尾形なりの悲しみの発露であり、死を悼んでいるという証なのかもしれない——と、ふと思つた。

その小さな背中を眺めながら。

「猫に九生有りつて言うだろ。だから、きつと大丈夫だ」

何となく、そう口に出していた。

言うだろ、とは言つたものの、「猫に九生有り」の由来は英語のことわざだ。A c a

t h a s n i n e l i v e s——この時代に日本人として生きる尾形は、基本的  
に知る由もない。

「蛇は一寸にして人を呑む」と言つても現実の蛇がそうある訳でないように、実態は単なる比喻表現に近い。要するに、しづとさを表したい時の洒落た言い回しということだ。

尾形は黙って俺を見ている。

その背後で沈みゆく太陽に視線を移す。もうすぐ日が暮れそうだった。帰らなければ。

泥にまみれた尾形の小さな手を、そつと取る。冷たい手。何度目か、同じことを思う。俺が握ることで、少しでも温まってくれれば良いのだけど。

「9個も命があれば……どれかひとつくらいは、満足の行く死に方ができるはずさ」

「っ、」

——目が覚める。

左半身の下に、列車の硬いシート感覚。断続的に揺れている。今、自分がどこで何をしていたのかを、一瞬遅れて思い出す。

「タマ」



声のしたほうに、反射的に顔を向ける。……隣に腰掛けた尾形百之助が、こちらを見下ろしていた。

「少しでも眠れたか」

何となく起こしかけた上体を、やんわり引つ張り上げられる。身体に力が入らない。彼の半身へ完全に体重をかける形で落ち着く。

ぼうつと、自身の膝を見つめる。

少しでも眠れた。睡眠が取れたのは事実だ。ただ、夢を見るのはレム睡眠の時が多く、深く眠れたとはかぎらない。……どうでもいい話だった。

昔の夢を見た。

懐かしい——とは感じなかった。俺はあの鴨鍋を食べても何も思わなかった。

懐かしむ過去を持ってない人間が成長することはない。感情を伴わない単なる脳内記録としての思い出たち。必要が無ければ取り出されることもなく、海馬で埃を被つていくだけ。

馬鹿馬鹿しい。

「……………」

まだ、暗号は解けていないらしい。

全身が重い。意識さえどこまでも沈みゆくようで、実際、その底には何も無いのだ。

伽藍堂だけが在る。空っぽに飲み込まれていく。

全てが欠落した人間。最初から。

もはや悲しみすら感じなかった。

俺の手に絡まる尾形の骨張った指が、揉むような動作を繰り返している。

それを無言で眺める。

何がしたいのだろう。やがて彼は、ぽつりと。ごく何気ないふうで、

「手が冷てえ」

冷たい。何が。

ふと、我に返る。

「……………手……………」

重なった手と、手。

温かい。

それを今、ようやく意識した。

ごつごつと筋張って硬い、鉄砲撃ちの手のひら。いつか帰り道に握った手であり、肌  
に、頬に触れた手だった。

「……………それ……………ずつと、お前に思っていたことだ、」

思わず、口に出していた。

「冷たい手だと……」

冷たい手。だから温めてやりたかった。温めてやらなければと思っていた。

ずっと昔から。

……ずっと昔？

「……………」

顔を上げる。これまでになく落ち着いた気持ちで、25歳の尾形百之助の顔を——弟の顔を、仰ぎ見る。目が合う。瞳の奥、凧いだ夜の海が、穏やかに俺を包み込んでいる。

ああ。蠕った呼吸を、飲み込む。

あれだけ長くそばにいたのに。

初めて見たような気さえするのは、どうしてなのだろう。

「百之助」

手のひらで、傷跡の目立つ頬に触れる。

困った目をした、手の冷たい子どもはもうそこにはいない。ずっと、隣に寄り添っていた。そのつもりだった、

「大きくなったな」

その眩きに。尾形が、残った隻眼を微かに細める。

気づけなかった。

気づこうとしなかった？

俺の背をとづくに追い越して。もう、その手を取って温めてくれるお前だったのだね。

そうか。なら——良かった。

本当に、良かった。

だって、

「もう……俺が居なくても大丈夫だな？」

——俺という異物が取り除かれて初めて “尾形百之助” は完成する。

その通りだ。

だから、お前はもう一人で行くんだ。アシシパたちと、鶴見中尉の結末を見守って、かつてのお前が歩めなかったその先を歩むんだ。今度こそ、普通の人間として。

ずっと、心配だった。

でも、お前は俺の力なんか借りずとも、いつの間にか “大丈夫” になっていたじゃないか。

もう、これで安心だ。

そうだろう？

「……………」

尾形は——何も言わなかった。

確かに重なっていたはずの視線が外れる。無表情のままに、俯いてしまう。その仕草に、言いようのない不安を覚える。

「百之助……」

ああ。

そうなのだと言ってくれ。

射し込む夕陽の残滓が、車内を赤く染め上げている。

「……解けたみたいだ、」

背後から、そんな眩き。

——あ。

途端、手の内側から温もりが逃げていく。さりげなく席を立った尾形が、アシ<sup>シ</sup>パ<sup>パ</sup>たちのほうへ淡々とした歩みで向かっていく。

それを、黙って見送る。

今はそれしかできなかつた。

「——大丈夫か？」

何の感慨もなく、函館五稜郭を示した暗号の解を眺めて。再び座席に腰を下ろしたところで、誰かが声を掛けてきた。アシ×バだった。

「函館駅の到着は、もう間近だった。」

「ああ……もう、大丈夫だ」

隣へ慎重に腰掛けてくるのを視界の端に捉えながら、思う。

もう、「大丈夫」になった。

舞台は整った。あとは、最後に彼がどの選択肢を選び取るかだけ。

気持ちはもはや、恐ろしいほど凧いでいた。脱力していると云ってもいい。現状から意識が逸れて。今まで見て見ぬふりをしていた自分自身に、自然と目がいった。

尾形タマではなく。

佐藤理玖という男について。

「アシ×バ」

呟きに、隣の彼女が顔を上げる。それを肌で感じる。俺の人生とは、一体何だったのか。

「まだ小さいお前にこんなことを言うのも何だが……人生っていうのはさあ、本当に、ほとんど嫌なことしかないんだ」

生きているのはつらかった。生き続ける意味を見出せなかった。死んでしまいたい

と思つていた。そして佐藤理玖は、尾形タマに成つた。

俺が過ごした26年と324か月。

生まれ変わつてもまた、嫌なことばかりだったような気もする。それでも。

「でも……そんな中で、お前たちと出会えてよかった……」

たくさん失敗した。けれども、確かに素晴らしい旅路だった。何もかも得難い煌めきだった。

「生きてるっていうのはつらいことだ。人生に楽しいことなんてほんのちよつぱりしかない。その『ほんの少し』がお前たちとの——尾形百之助との旅で、俺は良かった」

ああ。そうか。

言つて、ふと思う。

俺——ちやんと、何かを懐かしく思えるんじゃないか。単なる記憶の群れから、大事な思い出を選び取れていた。気づけないまま、こんなところまで来てしまったけれど。

「無駄なことともたくさんしたな。でも、俺はちよつと……ずつと、先を急ぎすぎたのかも知れない。どんなに馬鹿げて見えたつて、大事なことはたくさんあるんだ。あつたはずなんだ……」

もつと尾形百之助に優しくしてあげればよかった。俺にしかできないことだったのに。

本当にお前のためになることなんて、何ひとつしてあげられなかった、

「っ、タマ、」

アシ×パの、どこか空回ったような呼びかけで意識を引き戻される。顔を向けた先、彼女は強張った表情筋へ強引に笑みを塗り重ねたようなぎこちない笑顔で、俺を見ていた。

「何もかも終わったら、杉元と一緒に故郷に行つて、あいつが好きな干し柿を食べるんだ」

そういえば、彼らはそんな話を大雪山の鹿の腹でしていたのだけ。その約束は守られる。それがどうした、と思つたところで。

「タマも来るだろう?」

さりげなく、かつ拒否権を器用に覆い隠した誘い文句。……上手な断り方が、思い浮かばなかった。

「……わかつたよ、」

頷いた先、ようやくその笑みが微かにほどけたのがわかつた。

「約束だからな!」

「……約束……」

約束。それを聞いて、頭に浮かんだこと。握った拳の中、小指だけを立てた右手を、何



となく彼女に差し出してみる。

しかし、

「……………」

「……………ああ、」

怪訝そうな反応だけが返ってきた。単なる手遊びのようなものだ。アイヌ民族の彼女が知らなくてもおかしくはない、か。

「指切り。……………和人はこうやって約束するんだ」

ひとまず、自分の左手を稼働して、セルフで一度やってみせる。賢い彼女はそれですぐさま理解できたようで、慣れた動きで小指を差し出してきた。そこに、同じく小指を絡める。

「ゆびきりげんまん、嘘ついたら針千本飲ます。……………指切った」

メロデイには乗せず、お決まりの文句だけを読み上げて、指を離す。

「これで、約束」

約束が締結されたのにもかかわらず、アシ×パの表情は未だどことなく晴れない。俯いて、

「針千本は嫌だな……………あ、でもそんなに針があつたら、他所のコタンにいる女たちにも配ってやれる……………」

アイヌの女にとって、針はとても貴重で大事なものだ。何度も耳にした、アイヌに関する豆知識。それを、ぼんやり聞き流す。

「……………」

車窓の向こうの景色を、彼女を透かしてじつと見つめる。土地勘などない俺には、ここがどこなのかはわからない。俺の意識が既にここにはないことに気づいているのか、いないのか。

「……………約束だぞ……………」

絞り出すように呟いた彼女の瞳を、見られなかった。

何気なく目を向けた車窓の外は、既に暗闇に包まれている。

——俺は、これからどうするべきなのだろう。

今まで意図的に忌避してきたその問いを、改めて手の中で眺め回してみる。けれど、それが内包する煌めきは、想定していたよりずっと複雑で、難解なものだった。

ただの木の箱だと思っていたものが、寄木細工の秘密箱だった。そんな錯覚。自分自身では到底解けそうもないその箱を、俺はどうすれば良いのだろう。

それをずっと、考えている。

答えはまだ出ない。

「……………」

刺青人皮の暗号は解けた。

これから函館五稜郭に向かう。

恐らく、彼女が想定していた通りに。

——俺が俺の意志で行動することこそが、彼女を不幸にしていくんじゃないのか？

彼女は一貫して俺の行動を妨害していた。

それは、その結果が彼女の恐れる未来に繋がる可能性を高めるからに他ならない。

母、勇作、ウイルク。

——宇佐美時重、

今になって思う。

彼女は、あの麦酒工場で、俺が宇佐美を殺すことを防ごうとしていたのか？

それが失敗した。

だからあそこまで錯乱した。

正直な話、それが俺の生死にどう繋がるかなど見当もつかない。しかし、彼女がそう判断したからには、そうなるのだろう。彼女の脳内に広がる路線図。はつきり提示されたところで、複雑すぎて理解しきれぬ気がしなかった。

——彼女に聞けば良いじゃないか。

これから先、どうすべきかを？

……それこそ馬鹿げた解決策だ。今さらだ。余計に負担を掛けるだけなのではないか。

——彼女も、これまでの全てに決着がつくことを望んでいるのではないか。漠然と抱いていた感覚に、後付けの骨格が付け足されていく。

はつきり言って。

樺太でもう引き返そうと思えば、それが出来たはずだ。しかし、彼女はあの場面で土方歳三の元へ向かうことを提案した。途中放棄は彼女の選択肢にはない。そう見るしかない。

あなたがここで何か成し遂げたいことがあるというなら、最後まで見守るよ。

彼女は結末を求めている。

——その結果として、尾形百之助が死亡したとしたら？

……繰り返しの思考は、いつもここで蟠る。

今さら死ぬことに対する恐怖がある訳ではない。けれど、それで彼女がこれ以上苦しむならば。

随分と綱渡りな作戦のように思える。

彼女が求める結末と、尾形百之助の死は隣り合わせに存在している。

彼女が望むことをしてやりたい。願わくば、手に入れる結果が満ち足りたものであつてほしい。そのためなら何を失つても構わない。

そうだ、

——俺は死んでもいい、

飽くまでも仮定の話だ。

いざとなれば。

彼女は一人ではない。

——もう、俺が居なくても大丈夫だな？

「……………」

握る拳に力が籠る。

何があつても俺の死だけは避けようとしてきた人を、取り返しのつかない方法で傷つけてしまった。何度も。彼女には素晴らしい蘇りの力があつた訳ではない。死ねなかつただけなのだ。

これ以上、巻き込めない。

俺には彼女が必要だった。けれど、彼女は最初から一人で生きていけたのだ。

彼女は俺が生き延びることを望んでいる。

わかつている。

だとしても。

もしもの時は。

万が一は。

「……………不死身の杉元……………」

背後で座席に腰掛ける男に、呼び掛ける。

返事どころか微動だにした気配もなかったが、聞いているだろうという確信があった。

この男にこんな頼み事をするのは、本当に癪なんて言葉では言い表せない。けれど。

「……………俺に何かあった時は、あいつを……………タマを……………」

他ならぬ彼女のことだ。

この際、背に腹はかえられない。彼女が一人で苦しんだり、悲しんだりするようなことは確実に避けねばならない。

「……………」

杉元は黙っている。

無視されているとは思わなかった。その沈黙からは怒りも呆れも感じ取れない。しかし、安心材料としては足りない。

続けて口を開こうとした、その瞬間。

「タマさんはお前の選択を最後まで見届ける覚悟があるって言ってたぞ」

淡々と、低く抑えた呟き。穏やかに、咎める響きを孕んだ呼びかけだと思った。

否、今この男は何と言った？

「お前はあの人のことを……役目をそんなあっさり他に譲るのかよ」

非難されている。それだけは漠然と感じ取れた。選択を見届ける覚悟。役目、

「……………」

今度はこちらが黙る番だった。

何と言ったらいいのかわからない。杉元は彼女から何かを言われていた。いや、まさかあの網走監獄潜入前夜にしていた話か？ 内容までは詳しく聞き取れなかった。

杉元は、ひどく冷静だった。

対照的にこちらが纏まらない思考を掻き集めている間にも、

「……カント オ×ワ ヤク サ×ノ アランケ×？ シネ×？ カ イサ×」

耳慣れない響きだった。何、と聞き返そうとするより早く、杉元が平坦に種を明かす。

「俺がこの話をしたら、アシシパパさんが教えてくれたんだ。天から役目なしに降ろされたものはひとつもない……アイヌのことわざなんだって」

役目のないものは存在しない。

唾液を、飲み込む。

アイヌの諺なんて、とはもう思わなかった。

彼女の役目。何のためにここまでやって来たのか。或いは、尾形百之助の、？

「タマさんが言ったように、何があってもアシシパパさんを守って、あの子の選択を見届けるのが俺の役目だ。俺にしかできないことだ。ここまで来たからにはもう譲るつもりはねえよ」

彼女は、杉元佐一が全うすべき役目を看破していた。彼女自身が見出した己の役目。

尾形百之助の選択を、見守ること。

それぞれの使命。

ごうごうと。耳の奥からあの風の音がする。体内を巡る血潮の音。

「俺は俺の成すべきことをしたぞ」

杉元佐一が、ゆっくりと振り返る。やや持ち上げられた軍帽の鏢、その下からこちらを真つ直ぐ見つめてくる瞳。その眩い煌めき。

どこかで見た。



勇作、

「お前の役目は何なんだ？」

## 5 1 話 函館五稜郭籠城戦線

人生に、自分の欲求より大切なものがどうしても見出せなかつた。

誰かが自分を愛してくれた時、同じ熱を返してあげられないことが嫌だつた。

確かに自分を飾り立てて、守ってくれているはずの宝飾品なのに、その価値や意味さえわからず最後には壊すことしかできない。

せつかく与えてくれたものなのに。自分には生み出せないものなのに。

やはり欠けた人間なのだ。

「——イカの串焼き、」

俯いた視界へ飛び込んできた湯気と醤油の香りに、ふつと意識が引き戻される。

「食べる？」

串に刺さつたイカの姿焼きを差し出す白石由竹が、こちらに微笑みかけていた。

列車は既に降りて、ここは函館停車場。そういえばそんなイベントもあつた、と思つたところで。ぐきゆるるる。コロコロコロツ。

「……………」

「ヤダ、お腹で返事しないでえ〜?」

「……………」ここまで聞かれては、要らないと断つても何の説得力もない。それにまあ、空腹なのは間違いないか。イカ焼きを受け取る。

「……………腹減った」

「一昨日の夜からほとんど何も食べてなかったしな……………ヒンナだぜ」

尾形を含めた他のメンツは既に食べ始めているようだった。

とりあえず、焼きたての身にかじりつく。そんなに海産物が好きなタイプでもなかったのも、前世でもそんなに食べた覚えがない。マヨネーズが欲しくなる。

「……………食べるの……………イカとタコだったら、タコのほうが好きだな……………」

「アトウイナウか」

何気ない呟きに、アシ箱からの反応が返ってきた。イカにアイヌ語の呼び名があったように、イカ同様食べられるタコにも当然、名前があるらしい。

「……………」からそう遠くない噴火湾には、船をも沈めるような巨大なタコ……………アッコ箱カムイが棲んでいるという言い伝えがある」

「エツッわあい……………」

イカのウエペケ箱は特に無くても、タコはカムイになり得るのか。アイヌ文化の分水

嶺はよくわからない。

巨大マムシもといサ□ソモアイエ□?が実在する世界観だから、このアッコ□カムイが実際に潜んでいても別におかしくはないんだよな。行くようなことがなくて本当に良かった。

「たこ焼きが食べたい」

「え、タコ?」

「タコの焼いたのつてあんまり見たことないけどなあ」

そうか、今で言う“たこ焼き”が成立したのは昭和に入ってからか。しかも大阪。今生で俺が口にすることはないかも。そこで、アシ□パが例のシパシパ顔でこちらを見ていることに気づく。

「しかし……タマがそんなに好きならアッコ□カムイを捕まえに行くか?」

「え……いや……」

藪蛇。レシピもなくたこ焼きなんか作れる気がしないし、姿焼きには興味がない。大体、俺もアシ□パもろくに泳げないだろ。その気持ち自体は有り難いけどね。

とか言っている間に、食べ終わってしまった。串を手持ち無沙汰に弄んでいたところ

「ん」

横から伸びてきた手に、口の端を拭われた。思わず目を向けた先、尾形が無表情でこちらを見下ろしていた。察するに、イカ焼きのタレか何かが頬についていたらしい。

しかも、俺が周囲の誰よりも速攻で食べ終わってしまったせいか、まだ手付かずの自らの分までこちらに差し出してくる。

え、食えと？

「そ、そんなには食べない……」

やんわり拒否。

白米もないのに、こんな味の濃いおかずばかりばくばく食べられない。色んな意味でもう若くないんだこっちは。

イカ焼きを引っ込めた尾形が、俺から視線を外す。何も無い空間を見つめながら、

「……門倉たちは」

絞り出すように、呟く。

「五稜郭には向かわず、荷馬車の手配に行くらしい」

それが何なのだ、とは思わなかった。

——尾形は、ここで五稜郭における金塊搜索のメンバーからは離脱するつもりなのだ。

何故。……問うまでもない、

「あいつはどこまでも追いかけてくるだろう。どこかで始末をつけなきゃならん」  
ヴァシリ・パヴリチenko。

どきりとはしなかった。淡々と、凧いだ湖面に映る彼の横顔が微かにさざめいてい  
る。

彼は、ヴァシリとの決着をつけに行く。

原作通りに。

「……………」

風が吹き抜けて、尾形のきつちり整えた黒髪を乱していく。

「……………俺個人のこと、アシ~~ン~~パや金塊の搜索に何か影響が出るのは……………こちらとして  
も目覚めが良くない」

運命は俺に味方した。

世界が俺は正しいと言っている。

かつての彼はそう言った。今の彼は、そうすることを決めた自分をどう思っているの  
だろう。

ここまで来た以上、止める権利は俺には存在しない。無駄にはできない。何もかも。  
けれど。

「……………もし……………」

思わず。そう呟きながら、彼の空いた左手、その小指を握りしめていた。

「もし、」

尾形百之助にとつて。

金塊を巡る争いはある意味、対岸の火事ではなかつた。彼はただ、鶴見中尉を手に入れたかっただけだったのだから。彼は一人だった。最初から最期まで。

だから。

俺がもし、列車から降りることがあつても。今のお前には、この金塊争奪戦の結末を見届けてほしい。アシ~~ン~~パの、彼らの仲間として。

そこまで考えて、

「……………」

——駄目だ。

単なる「お願い」だったとしても、彼はそれを何としてでも叶えようとしてしまう。俺の望むようにしようとして動いてしまう。自分の願いに蓋をしてまでも。「普通」の彼には、その行為が難なくできてしまうのだ。

俺とは違う。

尾形タマはもはや、尾形百之助が選ぶ道に干渉するべきではない。もはや彼の選択肢には明確な正解も不正解も存在しない。これ以上は無駄な行為だ。

最初からいなかった。

それでいい。

「……何でもない、」

手を、離す。

背を向ける。

その背中にしばらく視線を感じたが、

「……………」

やがて、遠ざかっていく足音。

そうだ。それでいい。

——旅の終着点。

ただ。どうか、価値ある終わりを。



「——戦うしかない。ここに籠城して……奴らを迎え撃とう」

金塊の在処とされる函館五稜郭にて。

鶴見中尉もまた、アシ~~ン~~パから引き出した鍵を基に暗号を解いていた。それが判明した。

早くて半日後には第七師団がここに辿り着いてしまう。

その事実を受け止めた杉元佐一が、皆に向けて出した結論は——徹底抗戦。

一瞬、重苦しい沈黙が流れた。

「……第七師団相手に、俺たちで？」

何度も彼に戦力外通告を受けてきた白石由竹が、宙ぶらりんな声音で呟いてみせる。

「それに、土方歳三は既に手を打っている。……そうだよな？」

「え？」

どこまでも冷静な杉元にそう振られた土方が、同じく淡々と答えてみせる。

「ここまで余裕がないのは全くの予想外だったがな。——午後の汽車で向かっているはずだ。夏太郎に車で待機させている」

土方歳三が、第七師団との交戦を見越して函館に呼び寄せていた人物。

——ソフィア・ゴールデンハンド率いる120人のパルチザン。

戦い慣れた彼らの存在に加えて、自らにはもうひとつ強みがある、と土方は語る。

「この土方歳三が函館で戦うのは2回目だ。ここでの戦い方はよく知っている」

星の形をした五稜郭、その角の部分——稜堡——に立って、その解説を聞く。

どうしてこんな形をしているのか。答えは戦うためである。

構造上、稜堡のひとつを陣取れば、その左右の稜堡が攻め込まれる場所である橋と石垣を見渡すことができる。全ての稜堡に兵を配置することで、理論上は死角が存在しなくなる。

「……でも、このまんまじゃ駄目だろ？ さらに塹壕が必要だぜ」

「その通り……新しい時代の戦争を経験した人間はわかっているな」

したり顔で語り合うツートップ……と、

「？」

その背後で、アホ面で頭上にクエスチョンマークを浮かべる戦力外（白石）。安心しろ、俺もわからん。

「ソフィアたちが来るまであと6時間程度。戦闘の準備と、金塊の搜索を並行しておこなう」

それから、ゴールデントリオ＋俺土方で土方が指定した兵糧庫の内外を掘ること1時

間。

「何かあった！ ……石ころか……」

進捗ダメです。想定内だけど。

白石の声に俺の膝から頭を上げかけたアシ<sup>△</sup>パが、即座に再び体を横たえる。俺もそろそろ穴掘りに戻りたいんだけど。

「やっぱり建物の中じゃなくて、堀に隠したと思うんだがなあ」

さすがに疲れた様子の白石を見て、泥混じりの汗を拭った杉元が呟く。

「でもジジイが、〃〃〃掘れワンワン〃〃って」

当てつけじみたぼやきに、こちらに背を向けてひとり黙々と掘り進めていた土方が、手を止めた。振り返る。

「……何か確信が？ そうなんだろう？」

「……………」

「この期に及んでまだ俺たちに隠していることがあるのかよ！ 俺はあんたの兵隊になつたつもりはねえぞ！ 情報は全て共有しろ！」

打って変わって強い口調で詰られた土方は、一度ふうと息を吐き。シャベルを置いて、こちらに向き直った。

ベストを脱ぎ。ワイシャツのボタンが外されていく。そうして露わになる刺青を、4

人で囲む。

「私に彫られた『神』の文字の刺青……」

——左胸部。心臓の真上に、一際濃く、深く掘り刻まれた『神』の一字。

函館五稜郭を示す暗号の中で、この兵糧庫のあたりに重なっていたという。

「ここに必ず何かが埋まっている」

そう厳かに言い放った土方は、再びワイシャツとベストを羽織り、小屋を出て行った。その雰囲気気圧されて、仕方なく再び掘り始めたは良いもの。

「また石か……」

拳大の岩石を放り投げた白石が、土方が消えた戸口を見遣ってぼやく。

「『神』の刺青って本当に何か意味があんのかな？」

「……わかんねえけど、『シン』とか『ジン』とか……同じ読みの漢字が他の刺青人皮に無いのは気になる」

杉元の力ない返答。『ホ×ケウオ×コニ』をまだ意識しているのか。答えはもっと単純なもののような気がする、

「……カムイ」

思わずこぼれた俺の呟きに、3人がこちらを振り返った。

「カムイ……和人の言葉に訳すとしたら、『神』だろう」

俺が示したその解釈に、何か思うところでもあったのか。アシヅパが、ゆっくり口を開いた。

「ゴールデンカムイ」

——ゴールデンカムイ。

俺にとつては聞き慣れた固有名詞に一瞬、どきりとしたが。理由は単純で、彼女は教会で鶴見中尉が口にした比喩を覚えていたのだ。

全てのものにカムイは宿る。

ならば、この黄金も。

その時のことを思い出したのか、アシヅパが小さく肩を震わせたのが見えた。

「……鶴見中尉が……アイヌにとつて災厄をもたらすカムイだつて……」

呪われた黄金。

……くだらない。

自らの凶暴性を人喰いヒグマというウエンカムイの妄想に押しつけていた松田平太と何も変わらない。家族が死ねばいいと思ったのは自分で、殺したのも自分だ。自己憐憫で生み出される仮想敵ほど悍ましいものはない。

「そう思っていたいだけだ」

金塊を掘り出した彼らには、それを利用しようとした責任だけがある。黄金の悪神に

惑わされた被害者でも、あるいはそれゆえの加害者でもない。

「都合良く責任を転嫁している。何よりも醜悪で凶暴なのは黄金ではない」

そう。世界が残酷なのではない。

お前が残酷なだけだ。

「……………」

アシ×パは、しばらく黙って俺の横顔を見つめていたようだったが。沈黙を破ったのは、杉元だった。しかも、予想外の方角から。

「……………そういえば、尾形は？」

「アツ、えつ、そういえば！」

「……………」

今さら。ただけどうでもいい存在だと思われてるんだ。

「ヴァシリ・パヴリチェンコと決着をつけに行った」

ひとまず、信じる信じないは別として、事実を差し出しておく。その瞬間、全員が息を呑んだ気配がした。

手練れの狙撃手。その賞賛は、どちらにも当てはまり得るものだ。そして、この3人は誰よりもそれをよく知っている。

「巻き込めない、と」

あのまま放置していてもキリがなく、第七師団と同時に相手するのは不可能。彼はそう判断したのだろう。ここで仕留めるしかない、と。

「……大丈夫なのか」

アシ×パが、気遣わしげに呼びかけてくる。大丈夫。そう言い切れる保証は、今の俺には、

「大丈夫だ」

一瞬。幻聴かと思った。

振り返る。杉元佐一が、シャベルを動かしていた。

手は止めず、視線もその足元に向けたまま。淡白に、そう言い放っていた。

「必ず戻ってくるさ」

いっそ淡々と呟いてみせる。

元気になって戻ってこい。原作でも抱かれていた期待だった。けれど。息を吐き出す。

「……そう言ってくれる友達ができてよかった。あの子にも」

穏やかな空気が、流れかけて――

「いや友達じゃないけどねえ!？」

「さ……掘るかアシ×パ」

「ああ」

「聞いてる!?!」

そこからさらに掘り続け。

地平線の向こうがよいよい白み出した頃、

——ガコツ。

アシ~~シ~~パの握るシャベルの切っ先。岩石にぶつかるとはまた違う鈍い音が、兵糧庫に鳴り響いた。

「……石じゃない!」

もはやシャベルは使えない。血気に逸る白石と杉元が、犬のように手で土を穿り返し。

中から出てきたのは——ひと抱えもありそうな、巨大な木箱だった。

慌てて全員が集められ、いよいよ蓋が開けられたは良いものの、

「え? 何これツチ? 砂?」

「チエトイ……これは珪藻土を砕いたものだ」

「そんなバカな……何だこれ! 紙みたいなものが出てきたぞ! 和紙か!?!」

「……動物の胃袋だ、私たちが油とかを保存している」



粘土と胃袋。徹底的に防水処理が施された異様な木箱、その中身とは。

「……冊子？」

ただの冊子ではない——金塊で購入した、北海道の土地の権利書。ウイルクが、アイヌとして生きる娘に託したこれ以上ない宝。

それを知ったアシパが、泥に塗れた指先を冊子に伸ばす。震えるそれが、そつと表紙を撫でる。愛おしげに。

「……私も……これしか無いと思っていた……」

樹木を切り倒され、更地と化した森を見て、彼女は痛感していたのだろう。

土地が無くては森を守れない。

森が無くてはカムイを守れない。

カムイが無くてはアイヌ文化を守れない。

土地を、森を手に入れることが、血を流さずアイヌを守るためには必要不可欠だった。

「ようやく見えてきていた、アイヌのために私がやるべきこと……それは、既に昔のアイヌたちによって成し遂げられていた、」

災厄をもたらすといわれた黄金のカムイ。そのままでは血が流れ続ける。しかし。

「私たちが本当に必要とするカムイに置き換わっていたんだ!!」

あ、はい。

——ズドオン。

俺アシッ。パ土方を除いた8人が勢いよくずっこけることで、綺麗なオチがついた。平均よりも恵まれた体格の男女が一斉に崩折れたものだから、地鳴りが起きて小屋がちよつと揺れた。

「ガツカリしすぎて腰抜けた」

さもありません。

「鶴見中尉たちが来る予想時刻まであと2時間程度……今すぐ撤退だ！」

まあ、何はともあれ一件落着か、と思いきや。……未だ権利書を眺めていた土方の一言が、現場に新たな混乱を産むことになる。

「……半分しか使われていない」

権利書によれば、榎本武揚に引き渡された金塊は九千九百貫。しかし、土方歳三がのつぺら坊ことウイルクから伝えられていた量は、その2倍近く——二万貫だった。

その情報を聞いて、一番目を輝かせたのは言わずもがな。

「……まだ一万貫ちよつとの金塊が残ってるってこと？」

当初から誰よりも「金」そのものに強い執着を示していた男、白石由竹。

「金塊は!! まだ半分!! どこかにあるんだあ!!」

「落ち着けシライシ！」

先ほどの落ち込みようはどこへやら、意気揚々と駆け出したところに、

——ドオン。

「ギャーッ！」

「シライシートツ」

撃ち込まれる砲弾。

鶴見中尉にしては早すぎる、と狼狽えるこちらの遙か彼方で、軍用気球が嘲笑うように宙で揺れている。腐つても軍隊出の杉元、それで全ての事態が飲み込めたいらしい。

「……つてことは、今のは艦砲射撃つてことか?! あいつら駆逐艦で来たんだ!!」  
もす。そのための音之進。

永倉老人は時間稼ぎに敵地へ乗り込み、門倉キラウがマンズールとともに回転丸の主砲へ向かい、夏太郎が勇敢にもパルチザンに混じって籠城戦線の維持に挑む中。

主要人物が皆逃げ込んだままの兵糧庫では、微妙な混乱状態が保たれ続けていた。穴に腰掛けた牛山が口を開く。

「駆逐艦に乗り切れなかった鶴見中尉の部下たちは、汽車で移動してるんだよな?」  
いつここにやつて来てもおかしくはない。幸いにも、今は艦砲射撃も止んでいる。

「今のうちに、お嬢2人だけでも逃したらどうだ? 何なら権利書を持たせて」

紳士牛山の言葉に、アシバは唇を噛み、白石が代わりに応える。

「いいんじゃないの？ 土地の権利書なんて俺には何の役にも立たないし。みんなもそうだろう？」

最初から、刺青囚人である彼の目的は金塊にあった。ここまで来て諦められない。

……というか、さらっと流してしまっただが俺も含まれていたような気がするな。仕方ない。シャベルを手取る。

「……金塊の半分は土地の権利書だった。もう半分の金塊は……在るらしいけれど、俺は見えていない。そんなのじゃ、頑張ってるあの子への土産話として手落ちだな」

そこまで言って。背後で、土掘り係がもう1人増えたのを、肌で感じる。

「私も残る。……みんなの役に立ちたいし、私は見届けなきゃ」

お嬢。彼女の覚悟をやや憂いた様子の牛山の肩に、優しくも力強く置かれる手。杉元だった。

「いざという時は、俺がアシパさんを五稜郭から安全なところまで脱出させてくる」

「土方さあん！」

そこへ駆け込んでくる、

「永倉さんが、わざと捕まりました！」

息を切らした門倉。砲撃が今止んでいるのもしかしたら永倉のおかげかも。そう付け加えて、

「……とにかく！ 手筈通りに行きますよ？」

土方に呼びかけたその背後から吹き込む、一陣の風。それは片隅に避けられていた、ある刺青人皮の写しを激しく巻き上げて。——不自然な軌道を描いて、完成。＼＼としたと思われていた。暗号の中央に、軟着陸した。

「——」  
瞬間。土方の鋼の瞳が、微かに見開かれて。

その直後、

「よしッ、急いで行ってくれ！」

「……どうかご無事で!!」

力強く送り出された門倉が、蜻蛉返りでキラウウのものとへ戻っていく。それを見送った土方は、悠然とアシのバを振り返り。

「お前は残ったことで、父の想いを知ることが出来るだろう」

——強運の男が運んでくれた幸運の風が、我々を勝利へ導こうとしている。

そう告げた土方が次に掘れと命じたのは、小屋も何もない、ありふれた平らな地面だった。

「あまりに昔のことで、私もすっかり忘れていたが……門倉の刺青には、この場所を示す

重要な文字があつたのだ」

やがて掘り起こされたのは、巨大な石造りの丸い蓋。何かを塞いでいるように見える。

その、漢字とは。

「馬用の井戸だ」

——馬。

「当時の五稜郭で馬の世話をしていて、この井戸の存在を知っている人間は——もう、私くらいしか生き残っていない」

開放された空井戸の底に詰まっていたのは、ばんばんに膨らんだ皮袋が大量。沸き立つ刺青囚人たち。先んじて降りたアシバと杉元が、中身を確認しようと命綱に括りつけて地上に引き上げようとしたところで、

「きんかいッ」

文字通り目が眩んだ金の亡者が、縄もなしにその袋に飛びついて——墜落した。

あまりに危険な行為を叱られる白石。残念でもなく当然。しかし、その過程で爪が引つかかったかして、糸が緩んだよう。

最初は、ばらばらと。

やがて、滝のように彼らの頭上に降り注ぐ、

「……本物の砂金……初めて見た……」

「ああ……眩しいぜ」

光の届かない井戸の底においてなお、眩く輝き続ける黄金の雨。美しかった。

……だが、喜びも束の間。

「艦砲射撃がまた始まった、」

慌てて3人を引き上げ、せつかく見つけた黄金の井戸を元通りに埋め立て直す。……

主に、白石が必死にやっていた。

金塊は見つかった。

しかし、本番はこれからだ。

「さあ、これでいよいよ籠城戦しか無くなったぜ」

負ければ二度とこの金塊は拝めない。

函館五稜郭籠城戦——その火蓋が、ここに切つて落とされた。

「この権利書は何が何でも守らないと」

馬用の井戸だけあって、手近に建っていたのは馬小屋。ひとまずそこへ白石アシ□。パとともに避難する。一応は飛び道具持ちということで、俺の立ち位置は2人の護衛に近い。

権利書を丸め、いつも背負っている矢筒に収めるアシ□。パ。戸口に立つ白石はそんな彼女の横顔を睨むように見つめていたが、

「……戊辰戦争の生き残りと、日露戦争の生き残り……さあ、どっちが勝つかね」

「経験」か、「勢い」か。

妙なところで冷静な彼は、ここに来て勝ち馬を見極めようとしているようにも見え  
た。

「いや」

安全子を引き出して、倒す。ボルトを起こして引くと、弾倉が露出する。実包を押し込み、挿弾子は取り除く。この状態でボルトを戻し、薬室が空の状態で一度空撃ちする。尾形が教え、土方が与えてくれた三十年式。たくさんのものが俺を今、この場所に立たせている。

「俺たちが勝つ」

俺の豪語に、白石は何とも言えない呆れたような、感嘆したような笑みをその頬に浮



かべて。

「……タマちゃんが言うと、ほんとにそうなるって気がするから不思議だぜ」  
寝ているんだかいないんだか。とりあえず微笑み返しておいた。

——しかし、この場面においては、そう上手くはいかないのだ。

それから数十分経って、

「……どうだ？」

「……いや……」

何度目かの確認を終え、屋根から身軽に滑り降りてきた白石は、未だかつてなく渋い顔をしていた。一瞬口籠った後、

「東口も南口も陥落……侵入した兵士たちは北口を襲ってる、あそこがやられたら全勢力が俺たちに襲いかかる……!」

絶望的な現状を、機関銃のように吐き出してみせる。そうでもしないと耐えられない、という緊迫感が滲んでいた。

前門の虎、後門の狼。

四面楚歌、になつては取り返しがつかないのだ。そうして、明治の脱獄王が捻り出した次の策は。

「逃げようぜ——権利書を守るために!」

白石由竹の脱出作戦。

仕組みは単純明快で、俺が撃った兵士から軍服と馬を奪った白石が第七師団兵に成りすまし、橋を突破する。そこから対岸のこちらに縄を投げ、泳げないアシ×パと俺を引つ張り上げる。

俺たちは堀で、彼が縄を投げてくれるのを待つていればいい。

しかし、

「……白石が来ない……?」

この作戦は失敗する。

わかっていたことだ。

「……………」

アシ×パには、絶対に顔を出さなと言いつけてある。鶴見中尉が彼女を見つめる可能性は原作より低くなる。

……けれど、俺がいることで彼女の存在を悟られてもおかしくはない。それくらい頭の回る男ではある。

死神から逃げ切るのは容易ではない。

かつての尾形の言葉が頭をよぎる。

白石由竹は成し遂げられなかった。時間がない。

アシ~~□~~パに向き直って——その小柄な身体を、力一杯抱きしめた。

「……………」

すぐに離す。

大きな瞳を、真つ直ぐ見据える。

「行くぞ、アシ~~□~~パ」

その青が、一瞬揺らいで。

「……………うん！」

良い返事だ。小さな手を握って、勢いよく塹壕代わりの穴から飛び出す。これで鶴見中尉は確実にこちらへ気づいたはずだ。しかし、原作でも間に合わなかったのに、このロスタイムがあつてこちらに辿り着ける訳はない。

——……………都丹庵士、

振り払う、

「このまま南口に向かって白石と合流するッ」

「タマ！ 鶴見中尉が追いかけてきてる！」

「逃げ切れる、」

走って、走って——見えた、

「杉元佐一！」

馬小屋を燃やす。脱出の合図は、当然ながら他の人間——杉元にも伝わっていた。馬に跨り、こちらに駆けてくる軍帽の人影。

「タマさんツアシッ。バさん！」

とりあえず、アシッ。バを先んじて彼の馬上に引き上げさせる。

「タマは!?!」

当然というべきかアシッ。バが気にかけてくれるが、問題ない。

「タマちゃん！」

「……アツカムイが助けに来た、」

やって来た白石の馬に乗せてもらいつつ、彼の推理をもとに手薄な北口を目指す。

「大事なものは脱出した後だ……逃げ切るぜ！」

共に逃げようというアシシパの呼びかけを断り、ただ一人残ったパルチザンとして、果敢に立ち向かった彼女。金の手を持つ女義賊。

ソフィア・ゴールドデンハンドは死んだ。

誇り高き革命軍の親玉として——ただのソフィアとして、長谷川幸一と、オリガと、フィーナに詫びて、波乱に満ちたその命を終えた。

そして、俺たちはフチとの約束を果たすため現れた谷垣源次郎、無事逃げ出せた土方歳三、牛山辰馬と五稜郭の外で合流できたは良いものの。

今後どうすべきかについては、意見が割れていた。

迎え撃つべきだという土方。

逃げ切れというアシシパ。

そこで、牛山が示した第三の選択肢、

「おい……あれはどうだ？」

彼が指差す先。森から現れた、黒煙燻る巨大な鉄の塊。何、というまでもない。

汽車……列車だった。

——函館駅行きの列車。

心臓が、跳ねる。

「……………」

ああ。

とうとう、ここまで来た。

この先、何が待ち受けているのだろうか。否、何が待ち受けていたとして。

俺はその時——これまでの何もかもを、後悔しないでいられるのだろうか。

## 52話 地獄行き列車に乗れ

函館五稜郭を囲む、防風林の一角。

そのうちの一本に陣取って、双眼鏡を覗き込んでいる。

——土方歳三たちは、この籠城戦に持ち堪えられるだろうか。

どこまでが彼女の想定範囲なのだろう。こうなることさえわかっただけで、あの無謀な戦いに身を投じたのだろうか。寒くもないのに、微かに悪寒のようなものを覚える。

——政府が破棄したがっている土地の権利書……そんなものが本当に存在しているとして、持っているのはアシ×バだろう。

そうなれば、アシ×バのそばにしているのは白石由竹——或いは、彼女だ。

最も安全であるとも、最も危険であるとも言える立ち位置。しかし恐らく、そこに理屈は無いのだろう。彼女はアシ×バの心身を案じている。勇気づけるために居るのだ。

——彼女の思い通りに事は上手く運んでいるのだろうか。

わからない。目の前にある判断材料からその可否までを読み取ることはできない。

ここまで来た以上、それについて考えていても仕方がないのでは？

——こんな騒ぎの中でも、一発撃てば俺の居場所を特定してくるだろうか？  
導き出された答えは、「是」だった。

——きっと、あのヴァシリ・パヴリチエンコならば……

「……………」

五稜郭北口から、笹藪を踏みしだいて走り去る馬の群れ。その背に見慣れた顔を見つけて、一瞬胸を撫で下ろす。

彼女は成すべきことをした。

あとは、自分だ。

——この一発は、誰が為にある一発か？

風が吹いている。

アカマツの小枝が、針の葉が揺れて——その合間に、黒鳶色が流れていった。

腰掛けた枝。いつの間にか、すぐ隣に白い手首が並んでいた。「何か」が、こちらに背を向ける形で枝に腰掛けていた。

全く重みを、存在を感じさせないその佇まい。長襦袢の後ろ姿を飾るスペンサーM1  
860。



『まだ悩んでいるの』

呼びかけられる。穏やかな声だった。

今までになく落ち着いた気持ちで、その柔らかい響きに耳を傾ける。

『もう、後はあなたが選んでいいの。あなたが決めていいの。これはあなたの人生、あなたの物語』

甘く、優しい呼びかけ。くだらない。心の裡が静かに冷めていく。それを感じる。

都合の良い妄想だ。

既に自らで看破していたはずではないか。こんなものは、彼女の皮を被った醜い自己憐憫に過ぎない。

「……俺が勝手に言わせてるだけだ」

『そうね。これはあなたが感じてきた事実』

しかし、次いで投げかけられた言葉に、一瞬心臓が跳ねた。

『最初からわかっていたことでも……ずっとわからないふりをしてきたでしょう？』

自問自答。けれど、あの「悪霊」は最初から、無意識のうちに目を逸らしていた事実を、こちらに突きつけていたのだ。

自分だけでは見えないこともある。気づいていたはずなのに。

『それでたくさん迷って、苦しんできた。でも、誰のせいにもできなかった。あなたはど

「こまでも真面目で優しい、良い子だったから」

『悪霊』が、深く息を吐き出す。

『大切なあなたと一緒に旅ができて、とても楽しかった……』

大切。そんなことを思ってもらえる資格が今さらあるものか。何もかも手遅れじゃないか。これは冒涇だ。

「一人芝居だ、」

『そう感じられることが生きるための力のひとつになる。そうでしょ?』

……たとえ、錯覚だったのだとしても?

心からそう思える瞬間があったことが、今ここに俺を生かしている。

けれど、俺は。

「愛を返してやれなかった」

『……返してあげればいいじゃない』

やや間があつて、『悪霊』がそう答えた。

違う。

思い浮かんでいたのは、

「……手紙」

自ら手放してしまったもの。

今さら、永久に紙へとしたためられることのなかった文字列について想う。  
「書いて、返してやれば良かった」

——手紙、書くから。

——どんな人だったかちゃんと教えてね。

……どうしてそうしてやらなかったのだろう。

その理由は、今になっても思い出せそうになかった。最初からなかったのかもしれない。  
い。

どんなことをどう記すか、この瞬間だつてはつきり頭に浮かんでいるのに。

——眉目秀麗、文武両道の青年将校のくせに、俺を「兄様」と呼んで纏わりついてくる。  
る。

——お前のことも「姉様」と呼びたがっていた。そんな柄じゃないだろう？

——お前の作った鴨鍋を食べたいと……飽きたかもしれないが、一度くらいは我慢してやれ。  
やれ。

手紙を書いてさえいれば。

心配性の姉には、弟が案外楽しくやっていると伝えてやれたし。

寂しがり屋の弟には、きょうだいをひとり増やしてやることができた。

何もしてやれなかった。それでも、少しでも幸福を与えてやれるかもしれない機会

だったのに。自分自身の手で壊してしまった。

軍服の胸元に触れる。彼女がくれた手紙から、自分は確かに何かを貰っていたはずなのに。

勇作の涙が、彼女の苦悶の表情が頭をよぎる。鮮明に思い出せる。

「悪霊」は、すぐには何も言ってこなかった。微かな沈黙を、ざわめく木の葉が食い潰して。

『そんな後悔をするほど、遠くに来たの』

——吹き抜ける風が、草原を撫でていく。

顔を上げた先。

隣には、もう何の気配もなかった。ただ、空白が広がっているだけ。

「……………」

無言で、三十年式を構え直す。

遙か彼方、嘘くさい双眼鏡の輝きを睨むように見つめる。

——これは、勇作のことを乗り越えるために必要な通過儀礼だ。

終われば、彼のことをきちんと悼んでやれる。

全ての悲しみも喪失も、いつかは思い出になる。懐かしむことで生きていける。

——もう、俺がいなくても大丈夫だな。

……本当に？

ついに、到着してしまった。

全ての終着駅へと導く列車。

ただ、もうここまで来たからには逃げも隠れもできない。何はともあれ進むしかない。

結末へ。

「追手の裏をかいて、港へ向かおうぜ！」

ばらばらだった意見は、とりあえず牛山のその提案で纏まった。

馬をぎりぎりまで車両に横付けして、バルコニーに乗り上げる。そこまでは良かった。——が、いざ扉を開けて車内に入る、となったタイミングで。

杉元が、ふと思い出したように口を開く。

「……あれ？　そういえば、函館駅行きの汽車って、夜中と夕方に着く2本だけじゃなかった？」

ただ、それは牛山の手によって扉が開くのと、ほぼ同時だった。

開け放たれた先。

見渡す限り座席に詰め込まれた、嫌というほど覚えのある軍服、軍服、軍服――

「鶴見中尉の手下たち……追加の第二弾じゃねえかッ!!」

白石が叫ぶ。

「……………」

俺は、その事実から最初から気づいていた。

知っていて、言わなかった。

この列車で、牛山辰馬と土方歳三は死ぬ。俺は、それを避けなかった。そういう選択をした。彼らを見殺しにした。

尾形百之助。

彼は、確かに変わろうとしていた。……ただ、その変化は、予定調和の終焉を捻じ曲げるほどの力を持っているのだろうか？

見ないふりをしていて、最も恐れるべき解答が、今になって目の前に立ちはだかつて

くる。

尾形トメは死んだ。或いは花沢幸次郎も——勇作も。その過程が僅かに変わっただけだ。

何も変わらないのではないか。

結局は。

「シライシ！ タマさん！ 早く汽車からアシパさんと降りろ！」

現実に引き戻される。

——考えるな。

今ももう、前だけを見据えろ。

「谷垣ニッパ、やっぱり降りて！」

こちらに顔を向けた谷垣源次郎が、何事かを言いかけて。

——パァン。

響き渡った一発の銃声が、それを遮った。アットウの背中に咲き誇る深紅の花。

狙撃された。

その事実を誰よりも早く理解したのは、その被害者である谷垣だった。前を見据えたまま、車両の扉を勢いよく閉めて。

——次の瞬間には、恐らくその下手人に蹴り落とされて、小窓から消えていた。

「っ、」

敵は、既にすぐそこまで迫ってきている。その事実を次に飲み込んだのは、誰よりも扉から離れていた白石由竹で。飛びつく勢いで内鍵に手を伸ばし、その場にしゃがみ込む。

鍵のつまみが、白石の頭上でがちやがちやと耳障りな音を立てる。外側から強引に解錠を試みている「誰か」がいる。

来る。

「下がれアシ×パツ」

彼女を背に回らせた瞬間——目の前で、ギロチン窓のガラスが粉々に砕け散る。

瑠瑠の額当て。頭突きで窓を粉碎した鶴見篤四郎が、車内に身を乗り出してくるところだった。

ただ、それ自体はわかっていたことだった。俺の渾身の右ストレートが、その頬にめり込む。が、体勢を崩しつつも、そんなことで怯む鶴見ではない。

「うっ」

間髪入れずに放たれたピストルの弾が、俺の頬を掠めていく。それでとっさに身を引いたのが良くなかった。脇をすり抜けた鶴見の腕は、真っ直ぐアシ×パの矢筒へ伸びて。



鈍い音。杉元佐一が突き立てた銃剣の切っ先でもって、木製の戸板に縫い止められた。

すかさず放たれる第二射、三射。避けようがない状態の中、弾丸は狙い通り杉元の左肩、左胸に命中する。ただ、当然ながら杉元も今さらその程度でたじろぐ男ではない。

一種の膠着状態。

そんな中、杉元がこのまま蜂の巣にされるのを恐れたアシ×パが、矢筒を捨ててピストルに手を伸ばした。好機と見た鶴見が、肩紐ごと強引に左手を引き抜こうとした——その腕に、撃ち込む三十年式の銃弾。

ただ、ほんの時間稼ぎ程度にしかならなかったようだ。一瞬静止したのみで、すぐさま矢筒を手繰り寄せる血みどろの腕。そこに白石が飛びついて引き留める。

拘束を無理矢理突破された。ただ、それは杉元佐一の自由というメリットも産んだ。銃剣を引き抜いた杉元は、今度は額当て目掛けてそれを突き立てる。鶴見はそれをすんで避けたようだったが、じゅうぶんな隙となった。

「アシ×パさん行けッ」

杉元の叫びを号砲に、座席の下へと潜り込むアシ×パ。白石はその後を追ったが、俺はそうしなかった。三十年式を再装填する。

「銃の嬢ちゃん」

牛山辰馬が、気だか命だかを失った一兵卒を片手に俺を振り返る。手の中の三十年式。握り直す。

「銃っていうのは……お飾りの威嚇用じゃ意味がないんだ。これは土方歳三が俺に与えてくれたものだ。俺も彼に恩がある」

単なる気まぐれだったとしても、土方は俺に、本当に良くしてくれた。尾形にも。

「良いじゃねえか。……女は度胸だ」

ふすん、と豪快に鼻から息を吐き出す牛山。……こんな状況でも変わらない肝の据わりように、こちらが励まされてしまった。

「俺のことは気にするな」

「大丈夫なのか」

「ああ……」

和服の袷目。心臓を、強く握りしめる。

そう。俺は、

「不死身なんだ」

呟く。どこか、自分自身に言い聞かせるようにも聞こえた気がした。気のせいだった。

それから、どれだけ前に進んだのだろう。

「——アシ×パちゃん、前の車両へ！ 杉元から離れちゃ駄目だ！」

ざわめきの中で聞こえたそんな呼びかけが、妙に耳へ残った。

次の車両に入ったところで足を止め。思わず、後ろを見遣る。背後の車内では既に牛山が大暴れしている。振り返った先、何も無い。

こちらの車両に足を踏み入れようとしている白石が、アシ×パを手招いているだけ。敵の姿はない。ひとまず安全だ。

けれど、何かが引っかかった。

安全——に見える、

「白石由竹……」

そこで、ふと。

車体の上に目が行った。

本来ならば、ただ青空が広がっているだけの空間。けれど今、そこには軍服の足が、

「タマちゃ——」

そうだ。

マズい、

とつきに、

——脇腹に衝撃。

「……タマ」

頬が冷たい。気づけば、連結部分に横たわっていた。顔を、上げる。

俺が突き飛ばした白石由竹が、尻餅のまま、呆気にとられた表情で俺を見つめていた。腹から何かが流れ出している。

「……っ、……」

クソ……鶴見。

撃つてきやがった。

——尾形はどうした。

まだ、やって来ていないのか。本当ならば彼の妨害が入るタイミングのはずだ。

ぼんやり考えながら、駆け寄ってきた白石の体を押し返す。何にせよ、こんなところで留まっている場合じゃない。

「止まるな……行け、」

「馬鹿っ」

けれど、その手は彼に力強く握りしめられた。輝きを失わない瞳が見つめ返してくる。

「置いていけるかよ……!」

脇に手が入って、半ば強引に立たされた。出血が止まらない。脇腹だ。貫通した。致命傷になってもおかしくはない。

痛みとも熱さともつかない痺れが全身に広がって、身体力が入らない。

ふらついたところを横からアシ箱パに支えられて、はっと我に返る。——いや、

「……まだ……死ねない……」

尾形。

その後ろ姿が思い浮かぶ。

見届けなければ。

彼の選択を。

俺たちの、旅の終わりを。

## 53話 血迷い事

握るボーチャードピストルの銃口から、仄かに硝煙が立ち昇っている。

薄くたなびくそれは、汽車の煙突が吐き出す黒煙に吞まれてすぐに消えた。

足音が聞こえる。

真後ろで、止まる。

「鶴見中尉殿」

蒸気機関の吐息に容易く掻き消されてしまいそうな、低く抑えた声音。

車両の繋ぎ目から視線を上げ、慎重に振り返った先。鶴見篤四郎にとつては懐かしいとも呼べる顔が、小銃を片手に立っていた。

「尾形百之助上等兵……」

撫でつけられた黒髪と、外套の頭巾が煤混じりの風に靡いている。硝子玉を嵌め込んだようなその瞳は、いつの間にか片方が欠けていた。

狙撃手の命であるはずの右眼。しかし、男は——尾形は、ごく落ち着いた様子で残った隻眼から鶴見を射抜いている。

彼は、その呼びかけにすぐさま反応することはなかった。代わりに、硝子窓がところ

どころ欠落して、今なお呻き声の止まない車両を振り返り。

「……はあ、」

息を吐き出す。

呆れた、というふうだった。

「鶴見中尉殿も土方歳三も、お互いこんなに被害が出るとは思わなかったでしょうな。

圧勝する戦だと……」

淡々と、絞り出すように唇を動かす。凍りついたような無表情が、ゆつくりと向き直る。

「もう終わりでしょう」

男は冷静で、乾いていた。何の高揚も湿り気もない、事実を事実として語る無味感想の呟きが風に攫われていく。

その左足からは血が滴っている。けれど、それを気にしたふうもなく続ける。

「権利書が手に入ったところで、どう責任を取るおつもりですか」

鯉登平二海軍少将は雷とともに函館湾に沈み、ソフィア・ゴールデンハンド率いるパルチザンは長たる彼女を含めて玉砕した。

数え切れない程の人間が死んだ。呪われた金塊という悪神によって。

「あなたは余所見をし過ぎた。舵取りを失ったこんな鉄屑では、もはや何処にも行けや

しない。この列車は地獄にしか繋がっていない」

愉悅の滲む余地のない、突き放す口ぶりだった。地獄行きの特等席。そう言った男が居た。それを今更思い出していた。

「……………」

何を考えているのかわからない。

尾形百之助を知る人間は大抵、二言目か三言目には彼をそう評した。良い意味であれ、悪い意味であれ。

しかし、男が求めているものは初めから一貫していた。少なくとも、鶴見はそう感じていた。正確に言えば、その行動原理は、という話になるが。何処までも真つ直ぐ過ぎて、常人の目にはそう映らなかつただけだ。ヒトは銃口から放たれた弾薬の速度を視認できない。それだけの話だった。

「…………やはり、第七師団長の肩書きが欲しいのか?」

左手の止まらぬ出血が目に入る。強く握りしめる。

「邪魔ばかりして、引つ掻き回して、私が追い詰められるのを待っていた訳か?」

こちらを見つめる黒の瞳に、この手に掛けた菊田柰太郎を見る。同じ裏切りの色。「私がお前だけを見るように」

尾形は、一瞬口を噤み。



そこで——初めて、笑顔を見せた。皮肉と愉快さの滲んだ、彼らしい笑みだった。  
「……ははあ、」

右手が持ち上がり、崩れた前髪に伸びる。見慣れた悪癖だった。頭蓋を包み込むその掌が、毛先まできちんと撫でつけて——

「——中尉殿が本当にそう思っていたなら、父上は俺に殺させたでしような」  
だらりと、おもむろに操り糸が切れたかのように垂れ下がった。瞬時に笑みが掻き消える。

「しかし、あなたは途中から俺を利用することをやめた。それは他ならぬあなたが一番よくわかっていたはず。……何故だ？」

低く、地を這うかの如く潜められた声。恨み節というにはさらりとした手触りのそれを、落ち着いて味わう。

「……………」

鶴見の返答は、無言だった。尾形は、それに対して焦りも怒りも見せなかった。やがて細く息を吐いて、青天井を仰ぐ。

「……質問を、変えましようか」

ぐるりと回して、元の位置に帰ってくる。尾形百之助の、もはや澀さえも舞い上がらない淀みきった瞳が、鶴見を見つめている。

その頬が、微かに緩んで。

「勇作を殺したのはあなたでしよう？ 鶴見中尉殿」

ガアア。加速し続ける蒸気機関車、その車輪が軌条を削る金切り声が、やけに耳に障った。

虫の息の宇佐美時重が遺した置き土産。

——勇作殿を殺したのは僕じゃない。

——思い出すたび腹が立つから、お前には言っていないかったけど。

——僕は失敗した。本当は、鶴見中尉殿がその始末をつけてくれたんだ。

それを聞いた時の気持ちは、今はもう思い出せなかった。辿り着くべき場所が決まった。そう確信したことだけは覚えていた。

「……勇作殿を殺しては軍の士気に関わる。お前が私に初めて述べた提案だったな。表面上だけでも無下にするべきではない——したくない、と思ったのだよ。そしてそれは事実でもあった、」

先ほどもどとは打って変わって異様な熱を孕んだ呼びかけ。もはや、それに触れていたいとは思わなかった。

「はは、この期に及んでくだらん甘い嘘はやめてください。劇場はもう懲り懲りです。どいつもこいつも……」

「……………」

愛という鎖。その痛みと支配に自覚的でお、それから逃れられなかった、逃れようとしなかった哀れな幼子——だった男が、鶴見の目の前に立っている。

「……花沢少尉の弔い合戦のつもりか。お前は既に宇佐美上等兵を殺しているな？」  
はて。

そんな鶴見の問いを聞いて、今になって茫洋と思考を巡らせる。

弔い合戦——葬式をやり直したかったのだ。誰にも知られず非業の死を遂げた弟の為に。その優しさと悲しみを無駄にしない為に。

自らが喪主であり、たった一人の参列者である葬式を。

けれど、そこに「合戦」などという物々しい比喩表現が付くには違和感があった。ただ、したかったからそうした。

それだけだった。

「いえ。そんな高尚なものではないですよ、俺が思う限りですが……」

勇作。その笑顔も、涙も、声も、温度さえ未だ思い出せるのに。全てが失われていて、もはや手遅れだった。その事実の手触りを確かめる度に、心に去来するものとは。

「……ただ、ずっと考えていたんです。なぜ……あいつは……勇作は、死ななければならなかったのだろうか、……………」

そこで、ふと。

点と線とが、脳裏で繋がって。

ひとつの解答を照らし出す。

「……………あ、そうか」

——思ったよりも、軽い声が漏れた。

何だ。簡単な話じゃないか。

葬いとは——確かに死者ではなく、生者のために存在しているものなのだ。

額に手を当てる。項垂れる。

はあああ。

深く、長く、息を吐き出す。そうして、ゆっくりと顔を上げた。

鮮やかな色彩に満ちた光景が視野に飛び込んでくる。ああ、確かに、世界はこんな

も輝いているのだ。

自然と、笑みが溢れた。頬が熱い。

「見放された理由とは……………俺が、お飾りの師団長の座にしがみつくより——ただの兄として、勇作に愛される道を選ぶことができる人間だったからですか？」

祝福された人間。

ごく普通の、ありふれた人間。

両親に愛があるかは関係がない。子供は親を選べない。——だからこそ、誰しもが満ち足りた道を選べるはずなのだ。

そんな考えは馬鹿げているのだと。

お前は価値の無い存在などではない。

こんなにも愛し、愛されているのだから。

繰り返し告げられ、反芻したはずのそれだった。今、やっと手中に収めることができず、自らのものとした。それをはっきり感じた。

——欠落のない人間を、歪な愛で支配することはできない。

鶴見が必要だと思っていた。愛すべき理解者だと感じていた。しかし、他でもない彼こそが、203高地で尾形百之助には自身を求め理由が既にあることを悟っていたのだ。

だから手放した。駒として不適當な存在だった。それを理解してなお、あの時のような苦痛は覚えなかった。

温もりを分けてもらう必要はもうない。灯火は、既に己の中にある。

やはりここが辿り着くべき場所だったのだ。

全ての始まりにして、終わりでもある男。こちらを見つめる鶴見篤四郎の漆黒の瞳に、彼女の暗闇を見る。

「……タマ……そういうことだったのか？」

師団長でもなく、少尉でもなく、上等兵でも、帝国軍人でさえなくて良い。何も必要なかった。

だって、彼らが見ていたのは初めから。

歓喜とも、何ともつかない沸き起こる衝動が喉を震わせる。何もかもがわかった。ようやく。いや、今までずっと気づかないふりをしていただけなのかもしれない。

けれど、それをやつと、こうして真つ直ぐ受け止めることができたのだ。

「俺が本当に欲しかったものは既にここにあった、」

ただの尾形百之助として。

兄として、弟として。

初めから、何も無くとも手に入れていたはずのものだった。全てがそこにあった。

——失ってしまった。傷つけてきた。守り、慈しむことが出来たかもしれない。やほり。

——もつと早く気づいていれば。

脱力に近い落胆を覚えるより早く。

金属音。

息を、吸い込む響き。

「……やはり、お前は最初から何も欠けてなどいなかった——尾形百之助！」  
はっと、我に返る。

鶴見の、空洞じみた瞳の先——彼が構えたボーチャードピストル、その銃口が冷静に  
こちらの臍下丹田を捉えていた。

「っ、」

撃たれば死ぬ。殺すつもりか。

否、*“だった”*のかもしれない。初めから。妙に落ち着いてそんなことを考える。

——彼女が恐れた旅の終わり、

……変わらないのか？

安全装置は解除してある。だが間に合わない。視線を前に固定したまま、それでも小銃を構えようとして。

ふと、気づく。

鶴見の背後。

そこには、

「、」

阿修羅が立っていた。

そうとしか形容できなかつた。

結び直す暇が無かったのだらう。乱れた総髪が激しくたなびき、見慣れた和装も泥と血とに塗れて無残な有様だった。

仁王立ちに、三十年式を握りしめた立ち姿。

その表情に浮かぶ鮮烈な瞋恚、宝珠の如く美しく光り輝いたそれだけが、今の彼女の全てだった。

目を奪われていたのは、ほんの一瞬とすら呼べない刹那の間だったのだらう。

「——ッ、！」

次に瞼を開けた時——既に、鶴見の右腕はボーチャードごと三十年式の銃身で弾かれていた。数歩の距離を一気に踏み込んだ女が、長物の要領で握った小銃を叩きつけたのだ。

さしもの情報将校も、ここで全く無関係な人間の妨害が入ることまでは想定出来なかったか。たたらを踏んだその顔を、激しく睨みつける。三十年式を握る手に力が籠ったのが、端から見えていてもわかった。

「よくも勇作を……」

呪詛、としか呼びびようのないその声音に、背筋が粟立つ。聞いたことのない、見たことのない姿だった。彼女は、確かに怒っていた。

全身から立ち昇る激情が肌を炙る。



修羅の獣が、吼える、

「俺たちの弟をツ!!」

怒号とともに、再び構えられる小銃。今度は鈍器代わりではなく、明確に銃火器として。

発砲するために、銃口が向けられる。

焦りも、怒りもなかった。

新聞の写真を眺めるように、ただその光景を見つめて——そこで、彼女の背後で、ゆらりと何かが立ち上がった。

——どうして、今まで気づけなかったのだろう。

……否、そもそも誰が予想できた？

どうやって列車に？

登って来られるのか？

有り得ない。

その「有り得ない」が、今まさに、彼女目掛けてその巨大な手のひらを振り下ろすところだった。

アイヌが恐れ、敬うキムカムイことヒグマが、列車の上で人間を襲う。

目の前で繰り広げられる光景だというのに、全く非現実じみ過ぎていて——何もかも

が、夢であつていてほしかった。

——グチャツ。

あ、？

すぐ耳元で、肉が潰れる音が聞こえた。伸し掛かる重み。鉄錆と獣の臭い。反射的に目を遣る。

「  
爪が。」

鈍く、黒々と輝く獣の指先が、深々と俺の肩に食い込んでいた。——けれど、それも一瞬のことだ。

小枝がへし折れる響き。どこかの骨が折れたのだ、と気づいたのは、首筋から肩口に掛けて抉り込んだ鋭利な切っ先が、そこにあつた皮膚と筋肉と骨とを纏めて吹き飛ばし

てからだった。

俺の一部だったモノが、青空に舞い上がる。血肉の花びらが、黒煙を彩る。

その、下手人とは。

熊——いや、ヒグマ。

混乱はなく。

存外、落ち着いて状況を受け止める。ああ——そうか。この列車には、最終的にはヒグマが乗り込んでくるのだった。

痛みはなかった。

やられた。

ただ、そう思った。

仕留めなきや。次にそう思えたのは、この旅で培われたサバイブ根性の賜物か。とにかく、重心を崩して傾いていく視界の中、ほとんど気合いで小銃を構えて——

「ギャツ」

件のヒグマが、立ち上がった状態だったのは不幸中の幸いだった。強い奴を倒す時は頭を狙わない。ヒグマの頭蓋骨は分厚い。しかし、骨で首筋を守ることはできない。

俺が放った弾丸は、奴の喉元を撃ち抜いて。体勢を崩したヒグマは、ともかく車両からは転がり落ちた。これでいい。こうなってしまうえば、生死などもはや瑣末事だ。

——けれど、不安定な姿勢で小銃を撃ったその反動は、俺にとっても致命傷になった。背後に吹き飛ばされる。

とつさに伸ばした手が、足が、空を切る。

手放してしまった三十年式が一足先に視界から消える。

足場が無い。肌を撫でる風の流れが、やけに緩慢に感じる。

あ。

——落ちる。

しかし、その断定が実際に現実で花開くことはなかった。

左腕に強い衝撃。危険な浮遊感が消える。ブーツの爪先が宙で揺れている。それが見える。

すんでで繋ぎ留められた。

……誰に？

「ぐ、ツ——」

頭上から降ってきた呻き声。そこから読み取れた馴染みある響きに、はっと凍りつく。

顔を上げる。車体から身を乗り出した尾形百之助が、左腕だけで俺の身体を支えていた。

とつきに浮かんだのは、安堵ではなく——焦燥と恐怖だった。

「馬鹿ツ、何やってる……!」

いくら尾形がある程度は鍛えている軍人とはいえ、この中途半端な体勢で、手首一本で人間一人を引き上げられるほど彼の腕力は狂ってはいない。実際、今の尾形はわかりやすく苦痛を露わにした表情を浮かべている。

彼の体が、僅かに前へ傾いた。

引つ張り上げるどころか、現状の維持も難しい。わかっていたことだ。それなのに、何故？

車上に鶴見中尉の姿は見えない。

この間に逃げて、仕切り直すつもりか？

少なくとも、動けない尾形に追撃を仕掛けてくるつもりはないようだ。それは安心材料だが、根本的な解決にはなっていない。

撃ち損じた。仇を取り損ねた。そんなことは今やどうだって良かった、

「無理だ、離せ尾形!」

最期の力を振り絞って、叫ぶ。

駄目だ、

「このままだとお前も落ちる!」

——樺太でのことが頭をよぎる。

それまでの流れにどれだけ差異があろうとも、特定の条件さえ揃ってしまえば、そこには原作と同じ結果が発生し得る。

そんな確信があつた。

花沢勇作を殺さず、アシ×パに彼を重ねなかつた尾形だけけれど。結局はアシ×パに右目を毒矢で穿たれ、そこを杉元に救われた。

自ら左目に銃弾を撃ち込み、幻覚の勇作に抱かれながら列車を落ちていく彼の姿が思ひ浮かぶ。ぞつと血の気が引く感覚。

だから、このままでは、

「つ……いい、いいつ、どうせこの傷じゃ、どのみち助からない……!!」

思わず吐いた言葉に、尾形が微かに目を瞠つた。気がした。

この速度で列車から落ちれば、まず無事では済まないだろう。この腕では割れた窓から上手く車内に滑り込むことも不可能。

——そうでなくとも。

生命が傷口から絶え間なくこぼれていく感覚。手足が、魂が冷たくなつていく。そもそもが脇腹に銃弾を受けていた身だ。そこでさらに無茶をした。

ああ。

俺はここで死ぬ。

これもまた運命？

何度目だろう。

けれど、この物語にこれ以上の続きはない。函館駅のその先は存在しない。ほんの少しの後日談を最後に、この話は終わる。

ならば、俺の物語もここで、？

「ッ、……………」

ずっと、考えていたことだった。

この旅に終わりがあるとしたら、きっとこの暴走列車で迎える死なのだろう。

奇妙な黄泉帰りの繰り返しも、ここでおしまい。俺はそれでいい。それで構わない。

けれど、彼は駄目なのだ。

せつかく、せつかくここまでやって来たのに。欠けた人間などではない、普通の人間だと認められたのに。何もかも無駄ではなかったのに。

——こんな土壇場で、血反吐を吐く思いで手に入れた何もかもを放り投げるつもりか？

俺のためだけに。

尾形は動こうとしない。

焦りだけが募っていく。

「聞け、お前まで死ぬぞッ!!」

——尾形百之助がこの列車で死ぬ未来を変えたくてここまでやって来たのに!

「尾形っ!」

「それでもいいッ!」

彼らしからぬ大きな声に、一瞬どきりとして——次いで見せた表情に、呼吸が止まりそうになった。

今にも泣き出しそうな、それでも満ち足りた、柔らかくて痛々しい微笑。確かに覚えのある笑みだった。

怒号じみた叫びから一転、穏やかに彼が繰り返す。

「それでもいい、」

それでもいい?

どういうことだ。

「あ、……っ?」

——そこで、尾形の背後に何か、否、*誰か*が立っていることに気づく。

胸の辺りまで真っ直ぐ伸ばしたダークブラウンを靡かせる、長襦袢の女。スリングでその背に負われているのは、楚々とした雰囲気に対応しくない輸入品のライフル——ス



ペンサー銃。

その名がするりと出て来たのは、罷り間違つても俺がミリタリーマニアだったからな  
どではない。ただ、何よりもよく“知っていた”からだ。

その銃を——持ち主だった、人間を。

恐る恐る、視線を上げる。

息を呑む。

黒く塗り潰された女の瞳が、無感動に俺を見下ろしている。

『さあ。証明の時間だ』

## 5 4 話 検証結果：

『旅の終着点——』

結ばず流した長髪が、激しく風にはためいている。

けれど、女は乱れた髪など欠片も気にした様子もなく、真っ直ぐにこちらを見下ろしている。自らの興味を満たすように。

『地獄行き暴走列車にて。ヒグマに襲われ、列車の屋根から落ちかけたお前を助けようとして、ともに死ぬ』

淡々と、口にする。

こいつは何を言っている、

『これが尾形百之助の選択』

選択。

……一瞬、何を言われたのかわからなかった。

「これが……選択？」

俺が27年間追い求めてきたもの？

こんなものが？

俺たちの旅の結末だというのか。  
理解して、

「っ、」

その瞬間、ざあつと背筋が粟立った。

血液の足りない体がさらに冷えていく。全身を無数の虫が這い回っているような、爪先から少しずつ輪切りにされていくような、身の毛もよだつおぞましい錯覚。

明らかに様子がおかしいであろう俺に、尾形が怪訝な顔をする。

「タマ、っ……っ?」

『嬉しいか?』

畳に横たわる少女が蒼白の顔で微笑んだ。

——今までの何もかもを諦めて、俺とともにここで死んでもいいと思っている。

それが尾形の選択。

——違う。違う、ちがう、

「っ、だめ、駄目だ、こんなのは違う、間違っているッ!」

とつさに吠え散らかしていた。

畦道の上、頭蓋の欠けた少女が愉快そうに片眉を吊り上げる。

『何故?』

とにかく駄目なのだ、理由なんかわからない、でもこんな結末は許容できない！

『愛してなどいかなかったくせに。だったら何も問題ないだろう？』

血濡れた布団から顔を出す女が無表情のまま小首を傾げてみせる。……愛していなかった？

そうだ。

「……ずっと、愛するふりを、」

『違う』

女がびしやりと言い放った。インクをぶち撒けたような漆黒の双眸。

『誰からも理解されたことのない、罪悪感さえない人間が、例え真似事としても他人を愛せると思っていたのか？』

指の足りない手で以って自らの首に小刀を突きつける女が、こちらに冷たい眼差しをくれる。

『欠けた人間に愛なんてものが理解できるはずもない』

愛していなかった。愛するふりをしてきた。本当はそれすら、愚かな思い違いだった？

だって俺は、

「……欠けた、人間……」

何もかもが欠落した人間。

——だからこそ、ここまで来られた。

何度殺されても、どれだけ辛い思いをしても耐えられた。全てはこの結末のために。

無駄になっていいのか。今までの何もかもが。見届けるべきなんじゃないのか。

違う、

『お前は必ずここで死ぬ。それを知った尾形百之助は、自らの正しさを確信しながら、納得尽くでお前と添い遂げる。上々の結末じゃあないか。一体何が不満なんだ？』

散らばった羽毛と、ヤマギシの亡骸とに囲まれる女が目を細めた。

上々の結末。

——どうして？

それでは結局、この列車で死ぬという未来は変えられない。何が上々なものか。

今さら、俺をわざわざ車上に引き上げることには何の意味もない。この身体はもう手遅れだ。俺はここで死ぬ。

せつかく鶴見を退けたのに。

未来を、変えられたのに。

——……それでもいい、

確保された生命を擲ってまで、こんな人間と心中する道を自ら選ぶというのか。

一人生きながらえられるよりも、そちらのほうが望んだ結末だとでも？

……それは、何故？

——もういい、考えるな！

『覚悟はどうした。百之助の選択を最期まで見届ける覚悟があるんじゃないやなかったのか』  
『よ』

闇に溶ける網走監獄、その正門の上でマキリを握る女の横顔が、焼夷弾に照らされる。  
こちらを睨みつけるその瞳。

……覚悟？ 俺の、覚悟、

『悲劇的な結末を変えられるんじゃないかと思っただけだ』

『最初から“死”という結果そのものを避けたかった訳ではないのでは？』

『こうなってしまうって仕方がない』

『所詮は創作のキャラクターだろう』

『尾形百之助は俺を必要とした。満足だ』

『この選択こそが彼の望み』

『これでいい』

『否、駄目だ、それではいけない』

混線したラジオのように、脳裏を絶え間なく言葉が行き交っていく。

もうめちやくちやだった。

何もかもが。

そうだ。俺は、この旅で何を手に入れたかったのだろうか。

——俺が本当にしたかったこと、

……何だったのだろうか。

ふと、気づく。

いつの間にか、こちらを見下ろす女は「俺」の姿をしていた。

ヒグマに右肩を引き裂かれた無残な姿。乱れた長髪が風に靡いている。左手で着物を握り締めた女が、青ざめて震える唇を開く。

このままでいいのか？

……それでは駄目だ、

「だって、」

だって？

『だって、このままじゃ百之助が死んでしまうだろうが！』

吼える。

ああ。そうだ。このまま手を離さなければ、必ず彼は死ぬ。死んでしまう、

——それが許せないのは、何故？

女が血みどろの顔を擧めた。

苦しげに眉を寄せる。瞳が揺れる。虹彩の中で、満天の星空が瞬いている。その煌めきがおもむろに剥がれて、はらりと頬を伝った。

次から次へと零れ落ちる。

あ。

……そうか、

『……愛しているから』

泣きじやくりながら、絞り出すように呟く。

女が——“私”が、項垂れる。

気づいてしまったから。

欠けていないあなたを通して、世界を見てしまったから。

ずっと、見て見ぬふりをしてきたものたちが今、目の前にある。

『百之助が俺を愛してくれたから』

あなたが俺を愛したように、俺はあなたが愛している。全てあなたが教えてくれたことだった。

あなたは最初から何ひとつ欠けてなどいなかった。最初は偽りの愛、それ以下の紛い物からだったとしても、それを礎に弟を愛することが出来る人間だった。



そんなあなたを、ずっと見ていたよ。

『百之助の愛が俺を正しくした』

今ならわかる。

これが愛であり、祝福なのだ。

『検証は失敗だ』

『俺は欠陥ゆえの覚悟を失い、代わりにその穴を埋める愛を手に入れてしまった』

『あーあ、27年が台無しじゃねえかよ』

泡のように浮かんで消える走馬灯たち。

かつての俺であり、私。

俺の思い出。私たちの記憶。

最後に現れた幼い少女が、田園風景の中、朝焼けを見つめて目を細める。澄んだ空気

に白い吐息が柔らかく広がる。

『……でも、これで良かったんだよね』

——あ。ああ。

そう、言えるのか。

そう思える終わりだったのだね。

ならば、もう大丈夫。

良かった——お前が、最期に心からそう思える人生だった。それこそが証明だった。良かったなあ。

だから。

『だから、あなたは生きて』

尾形百之助。

汚くても、惨めでも、なんにも残らなくても、それでいい。少尉になんかならなくていい。お飾りの師団長はもつといらぬ。

生きていればそれでいい。

身勝手だ。我ながら思う。

でも、もう止められないんだ。

何もかもを捨てて俺と死んでもいいと思えるくらい、お前は俺を愛してくれた。

何もかもを捨てても生きてほしいと思えるくらい、俺はお前を愛している。

『それだけでいい。それだけで良かったんだ、きつと、ずっと前から……』

馬鹿げた検証だった。

どうしてだろう。

そんな簡単なことに気づくのに、ずいぶん時間が掛かってしまったな。

——ああ。視界が、ぼやける。

目を瞬いたら何か温かいものが頬を伝って落ちて、ほんの一瞬だけクリアになった。彼の隻眼を、落ち着いた気持ちで見つめ返す。

微笑みかける。上手く、笑えているだろうか。

「百之助」

ぼたりと頬に落ちてきたのは、彼の汗か、血か、それとも。

「お願い……離して」

ここまで来てそんな顔をさせて、本当にごめんね。

でも、これが最後だ。

「愛してるんだ」

「——ふん、ぬ、ッ」

その時。

おもむろに、勢いよく引つ張り上げられる感覚。

はっと我に返る。——血塗れの杉元佐一が、今まさに列車からずり落ちそうになって

いた身体を、背後から力強く引き上げるところだった。

「杉元っ……！！」

「お前のツ、ためじゃねえ……ぞッ」

ものの数秒で宙ぶらりんの姿勢から、平らな屋根の上に着地する。……でも、もう立ち上がれなかった。

顔を上げることすらできない。痛みはない。そもそも手足の感覚がない。不自然なうつ伏せの姿勢だったのを、彼にそつと抱き起こされる。視界が明るくなる。

錆びた鉄の味がする。ひゅうひゅうとうるさいのは、風か、俺の呼吸か。

「杉元……」

「タマさん、……」

杉元が俺を見ていた。

目が合つて。杉元は一瞬、何か言いたげな顔をしたけれど。ゆっくり俺から離れて、後ずさる。

ありがとう。弟を助けてくれて。

そう言つてやりたかつたのに、唇から溢れたのは血の塊だった。

それから百之助の腕に強く強く、骨が軋むくらい抱きしめられる。その痛みさえわからないことが、今は無性に悲しい。

——でも、ようやく、こうして愛する人の腕の中で終わりを迎えられるのだ。確かに——俺にしては満足のいく、上々の結末なのかもしれないな。

「百之、助」

鼻先がつきそうなくらいの距離から覗き込んでくる顔、その血濡れた頬を、撫でる。

百之助は泣きも、笑いも、怒りもしていなかった。ただ、見慣れた無表情でこちらを見つめていた。

「お前は、本当に……馬鹿な、ことを、……」

再び唇の端からゆるく吐きこぼした鮮血を、優しい指に拭われる。

「こんな時くらい、……姉さんの言うこと、っ、聞きなさい………まったく、しょうがない子。」

「……………ああ、……………」

喉が重い。触れ合う熱が遠くなる。

でも、恐ろしくはなかった。

音が、声が、ぼやけていく、

タアン、と。

どこかで鋭い破裂音——否、銃声が聞こえた気がした。

ふと、我に返る。

細い雲がたなびく、晩秋の明け方。吐く息が朝陽に白く煌めいている。

『……百之助?』

見渡す景色には、嫌というほど覚えがあった。いつの間にか、実家の畑で一人きり、立ち尽くしていた。

あの聞き慣れた発砲音、百之助が撃つたのだろうか。祖父の使い古したスペンサー銃。

音は聞こえるのに、姿は見えない。

『どこにいるの?』

一步、足を踏み出しかけて。

『あ、』

背後に佇む彼が、視界の端に見えた。

坊主頭に、スペンサー銃を担いだ百之助が、右手に鴨をぶら下げてこちらを見つめて

いた。

なあんだ。ずっと、側にいたんだね。

ほっと胸を撫で下ろした目の前に、無言で突き出される鴨。何気なく、いつも通りにそれを受け取ろうとして。

ふと、気づく。

そういえば。

いつから百之助は、獲物を母ではなく、俺へと真つ先に手渡すようになったのだろうか。

『、』

そうか。

俺が気づいていなかっただけで、お前はずっと、俺のことを。

温かい。昇り始めた陽の光が、冷えた身体に熱を分け与えていく。

百之助は、穏やかに微笑んでいる。

手を、伸ばす。

「ありがとう」

——目の前で。

男の手から、白い指が音もなく滑り落ちた。つい先ほどまで、その無骨な手を確かに握り返していた指だった。

やや不自然な形で、着物の胸元に墜落したその手が再び動くことは、ない。きつと、どれだけの時間が過ぎ去っても。わかっていたことだった。

「……………」

男が、消えゆく温もりを確かめるように、その顔に触れる。眦へ微かに残った涙を丁寧に払い、青褪めた唇を汚す血を拭う。

「…………尾形、」

杉元の、躊躇いがちな呼びかけ。

それを勢いよく遮る声があった。

「杉元、っ！」



「アシ□パさん、」

澆刺とした少女の声。——それが、途端に萎んで消え失せる。

尾形の膝に横たわる着物の女。

その姿ひとつで、上がってきたアシ□パは女に何があつたのかを悟ってしまったようだった。瞬時に、表情が強張る。

「……タマ……？」

ふらふらと、糸で引き寄せられるようにその傍らへ歩み寄り、膝を折る。

既に血で汚れた小さな手が、清めたばかりの頬に伸びたが、尾形は止めなかった。震える指が白い肌に触れ。びくりと跳ねる。

「冷たい」

呟いて。その表情が、くしゃつと紙屑を丸めたように歪む。冷たい肌。その一言が、今の女の全てを表していた。

「そんな……嘘だ……」

青ざめた驚愕の表情を、感情の雫が滝のように伝つていく。彼女が、溶けていく。

「つ、……約束……破ったら、針千本だつて……いいのか……？　なあ、タマ………タマ、」

返事は、ない。

声を掛ければ、すぐに目覚めて笑顔を向けてくれた彼女はもういない。女はただ、安らかな永久の眠りについている。

揺さぶる手が、激しく震えて。

慟哭が、木霊する。

「っ、おいおい、マジかよ……」

一歩遅れてやってきた白石が、女に縋りつくアシ×パと、それを無言で見守る尾形を見て、ぎよつと目を剥いた。

「見届けたのか……!? 選択を……」

そこで、無言のままアシ×パを見つめていた尾形が、ふと顔を上げた。

「選択?」

尾形の、いつそ間の抜けた反復に、重々しく顎を引いてみせる。

「尾形ちゃんが……この列車で、何をするのか……それを確かめるためにここまで来たんだって、……俺を庇って、撃たれてるっていうのに……」

崩折れるように、傍らに膝をついた白石が、震える指先で彼女の顔に触れる。穏やかに緩んだその頬をなぞって——見つめる表情が、苦しげに歪んだ。笑っているようにも見えた。

「満足そうな顔しやがって……くそお、」

そこでただ一人、少し離れた場所からそのやり取りを見守っていた杉元が、控えめに口を開いた。

「引き上げる前……何か言つてみたいだが……」

死の間際で錯乱していたとしか思えない、脈絡のない発言。

けれど、尾形としては今までの積み重ねゆえか、何らかの合点がいく内容だったよう  
で。その横顔は、憑き物が落ちたように穏やかだった。

「ずっと……ずっと昔から、俺を試していたような女だった。……でも、ここに来て、よ  
うやく納得行く結果が得られたらしい」

額を覆う前髪を軽く除けて、露わになったそこへ、恭しく唇を落とす。

「……これが、祝福」

——ずっと昔から、試していた。

——ようやく、納得の行く結果が得られた。

ともすれば、彼女の発言同様、真意のわからない発言ではあったが。尾形と出会う以  
前からタマを知っていた杉元にも、何となく合点の行く部分はあった。そんな気がして  
いた。

「初めて会った時から。……どこか急いで、一人ぼっちで走り続けているようなひと  
だった」

一人にならないで。

彼女を愛した人々の願いを振り切ってまで、辿り着かなければいけなかった結末。目指した答え。

でも今、やっと足を止めることができたのだ。大切な家族と、仲間に囲まれて。傍らに膝を折る。胸の上に置かれた華奢な手を、そつと撫ぜる。

「これで、ゆつくり眠れるね」

それを最後に、風だけが吹き荒ぶ沈黙の中。

口を開いたのは、尾形だった。

「……行くぞ」

低く、呻くような呟き。

それから自身の外套を脱ぎ、無残な有様の肩口と、涙の跡が残る顔とを覆い隠すように着せてやり。その身体を横抱きに抱えて、立ち上がる。

「権利書を取り戻すんだろ」

きつぱり紡がれたその言葉に、涙を拭う白石が問いかける。

「……いいの?」

「……もし自分が死んだら、俺が代わりに全てを最後まで見届けろ、と。停車場で別れた時、きつと、あいつはそう言おうとしていた」

尾形の断言に、柔らかい苦笑を浮かべた白石が鼻を擦る。

「……タマちゃんらしいぜ」

——しかし、穏やかな空気が流れかけたのも束の間。

「っ、」

車体そのものが、盛大に揺れた。局所的な地震でも起こったのかと聞きたくなるような、実に強烈な震動だった。

「今の何だ？」

「ひっくり返りそうな揺れだったぞ」

困惑した様子の子の3人だったが、ただ1人、尾形にはその心当たりがあった。途中からこの列車に乗り込んできた彼にだけは。

「ここで……悪い知らせがひとつある」

尾形の淡々とした呟きに、彼らが揃って振り返る。緊張した面持ちの尾形は、努めて冷静を装っていることが読み取れる抑えた声音で、

「……機関室に誰もいねえ。最初からいなかった。逃げたか、何かに襲われたか……」

過程はともかく、現状、列車を操作すべき人間が居るべき場所に居ない。

その事実が示すものとは。

「暴走してんのか？」

——このままじゃ、函館駅に突っ込むぞ。

杉元の焦りが滲んだ眩き。そこからいち早く動いたのは、アシ□パだった。

涙が引いた瞳。青の鮮やかさが失われ、どす黒く塗り潰されたその虹彩が、石炭庫の上からこちらを振り返る人影を捉える。

それを認めた彼女は——「彼」目掛けて、躊躇なく和弓の矢を番えた。

ただし、その指が弦から離れるよりも早く、漆黒の死神がピストルの引き鉄を引く。

「あぶねっ」

結局、その弾丸は彼女のすぐ足元にあつた屋根の覆いにニアミスし、彼女自身も気づいた杉元と白石によって引き戻されたが。

今さらそれで怯むアシ□パではなかった。杉元と鶴見が撃ち合っている間に、反対方向へと一目散に駆け出す。

「どこ行くの!?!」

「こつちから降りる」

このままでは膠着状態が続くだけと判断した杉元たちも、彼女の後を追って車内へ戻ることとなった。

ひとつ後ろにある車両の出入り口は、タマが放つた最後の弾丸により絶命したヒグマの死骸で塞がれている。

「ヒグマ……」

「誰かが倒したのか……?」

男2人の驚愕の眩き。先んじてタマを背負って屋根から降りた杉元から、その身体を受け取った尾形がぼつりと答える。

「……」いつが

比較的綺麗な座席へ、慎重に横たえられる肢体。停車場行きの列車でも、彼女はこうして眠っていた。けれど、その時とは何もかもが違う。外套から覗く安らかなその表情も——冷えて硬くなっていくだけの肉体も。

扉の前で佇むアシシパは、そんな尾形の動きを小さな背で感じ取っていたようだったが。

やがて、

「……みんなはここにいてくれ」

ゆつくりと、振り返る。

「アイヌの権利書は、私の問題だ」

「え、」

「私が矢筒を取り戻してくる」

言いながら、扉を開ける。——しかし、何かがおかしい。異変に最初に気づいたのは、

白石だった。

「連結が外されてるッ」

風にそよぐネジ連結器を指差して、叫ぶ。言うまでもなく、鶴見の犯行だった。みるみる離れていく列車。考える時間はもう、残されていない。

選択を迫られるアシ×パ、その手に握りしめられる戸板が、微かに軋んだ。そうして、項垂れる彼女が、臍腑から絞り出すように言葉を紡ぐ。

「みんなに頼みがある」

私の、最後のお願ひ。

「……あの井戸は、埋めたままにしてほしい……！」

杉元と白石が、揃って息を呑んだ。

こんな場所までもつれ込み、多くの犠牲を出しながらも戦い続けた理由。ひとつはアイヌの権利書であり——もうひとつは、未だ使われず残っていた一万貫の砂金であったはずだ。

それを諦めろ、とアシ×パは言ったのだ。

ただ、彼女として当然、生半可な理由でその“お願ひ”を差し出している訳ではない。

「あの大量の金塊を手に入れて、それで“めでたしめでたし”とは……絶対にならない」  
多くの人間が死んだ。



ここまでも、ここに来て。肉親、昔馴染み、同族、かつて敵だった男たち。

これは金塊の呪いなどではない。人間の欲望には果てなどない。殺しても、殺されてでも、大金が欲しい——それで叶わぬ夢の続きを見たいと願う心を、止める術はない。持っている限り、殺し合いが延々と続く。続いてしまう。

「タマも、」

アシ<sup>△</sup>パの澱んだ瞳が、座席に横たえられたその身体を虚ろに捉える。数時間まで優しく頬を撫で、抱きしめてくれた手足が、今はもうモノのように力なく垂れ下がっている。

「……タマ……」

——平和に生きられたはずの命だった。

こんなものが無ければ、もっと別の終わりを迎えられるかもしれない。彼女は優しく、ただ家族想いなだけの、どこにでもいる普通の人間だったのに。

瞳が揺れる。溢れて、流れる涙は透き通っていた。けれど、その虹彩から濁りが取れることはない。

「(ハハ)で……断ち切らないと……」

硬く握った拳で、拭い去る。叶わなかった願いを、誓いを振り切つて。顔を上げる。

一度、深く息を吸い込んで。

「鶴見中尉を——私の手で殺してでも」

漆黒の意志が宿った眼差しが、杉元佐一を貫いた。

とつさに、息を呑む。

いつか見た「彼女」の瞳に、よく似ていた。

常闇の黒であり、列車を動かす石炭の黒だった。その瞳がもたらす燃料が、魂に火を焚べるのだ。その熱が、自らが望む結末に向けて、手を、足を、心を動かし続ける。

そこにはもはや是非を問う余地などない。苛烈に熱を帯びていく自身の身体を鑑みている場合ではない。

激情であり——覚悟だった。

——俺には、尾形百之助の選択を最期まで見届ける覚悟がある。

こちらを真っ直ぐ見据える在りし日の姿が、揺らいで。どろりと、脂のように、血のように、黒くとろけていく。

それが再び形を成した時、そこに立っていたのは、1人の少女だった。

——私には、杉元佐一と一緒に地獄へ堕ちる覚悟がある。

「——」

静かに目を睜る。次に、その表情へ浮かんだのは——柔らかな微笑だった。妙な納得があった。

そうだ。自身は結局、心の底から相棒として彼女を扱ってはいなかったのだ。

——彼女が俺と一緒に、地獄へ堕ちてくれるつもりでいるとわかるまで……

苦い悦びに目を細める杉元の前で、アシシパはあたふたと自らの懐を漁り。一枚の貨幣を取り出してきた。鈍く、まだらに輝く金貨。

支笏湖に沈んでいたところを海賊房太郎の手によつて引き上げられ、アシシパに託されたもの。亡きウイルクの願いのかたち。それが、杉元に手渡される。

「杉元ツ、この金貨は、……たぶん10圓くらいの黄金だ、これじゃ治療費に全然足りないけど、」

でも、私がヒグマの胆嚢を取るから。

わかりやすく慌てたままそう続けた彼女は、今度は白石由竹に向き直り。

「白石はこれを……!」

カサ……と手のひらに乗せられる、すっかり乾涸びた正方形の何か。亡き牛山の——といえば聞こえはいいが、実際は彼女が勝手に見出しただけの単なるゴミもといはんぺんが、時を経て白石に託される。少なくとも大切にしてきたものなのは間違いな

い。  
そして、彼女は最後に尾形を見上げて。

「……百之助」

項垂れる。その手に握らせてやりたかつた熱はもはや、失われてしまった。何もできることはない。委ねられるものはない。何も。

「……守つてやれなくて……本当に、すまなかつた」

苦しみと、痛みを伴つて吐き出されたその懺悔を。尾形は、無表情で受け止めていた。「こんなこと、言う資格はないかもしれないけれど。あの井戸には戻らないで……忘れたい、」

皆、死んだ——死ぬ。

このままでは。

彼らには、彼には金塊が必要だつた。そのためここまで来た。わかっている。

けれど、

「いちばん大切なひとまで失いたくない」

それは紛れもなく本心であり、今の彼女の全てであつた。

——最初に応えたのは、それらの発言に欠片の驚きも見せていなかった尾形だつた。

「アシ<sup>□</sup>パの気持ちは……多少はわかるつもりだ」

呟いて、隣の男2人に視線を向ける。

「異論はねえよ」

その眼差しを受け止めた白石の口から、声にならない声が漏れる。玉の汗が滲む坊主

頭。

「……………」

彼とて、半端な覚悟でここまでやってきた訳ではない。何が何でも黄金は欲しい。……けれど、それだけでは済まないのもまた、事実だった。

唇をきつく噛み締め、額に手を当て、ぐねぐねと首を前後に動かす。言葉にならない感情の群れが、これまでの記憶が、彼の内側で渦巻いている。それがはつきりと見とれた。

やがて、天井を仰いだまま、

「……………はぁ……………」

深く、息を吐き出した。諦めと優しさの色をしていた。それが、答えだった。

その手が杉元の、彼女の相棒の肩に置かれる。

「言ってやれよ、杉元……」 “わかった” ってさ」

その瞬間。硬く強張っていた口元に、微かに笑みが灯った。

「……………わかったよ、アシ×パさん」

アシ×パの表情が、ほっと緩んだのも束の間。

「ただ……………行かせない」

「っ、!？」

右手が、彼女の首根っこを掴んでひよいと持ち上げる。軽い身体は簡単に制御を失う。

「おい杉元、おまえ結局私を……！ 放せッ」

恐れていた答えが現実になったこと、それを悟って遮二無二暴れるアシ×パだったが、杉元は構わず残された男2人を振り返る。

「白石、……クソ尾形。また会おうぜ」

「降ろせっバカ!!」

呆氣に取られるその前で、身悶えるアシ×パを捕らえたまま、ぐっと脚に力を込め。

「――」

一足で、離れていく車両に飛び移った。

パアン。鶴見が放った銃弾は、見当違いの方向に飛んでいく。

「ひとりで行かせるかよ――相棒だろ!!」

目を睨り――その表情に、哀しくも柔らかい笑みを浮かべるアシ×パ。

石炭庫の外壁にしがみついたそのふたつの後ろ姿が、みるみる離れていく。

後には、男2人だけが残された。

「——い、行っちゃまった……」

露台から身を乗り出した中途半端な姿勢のまま、白石が呆然と呟く。予想だになかったこの状況に、一手早く対応したのは尾形だった。

躊躇なく列車から飛び降りようとしたところを、

「無理だ尾形ッこの速さじゃー！」

白石の腕によつて後ろから羽交い締めになれ、すんでのところで押し留められる。

——この速度の列車から飛び降りれば、無傷では済まない。

——ならば、どうすればいい。

——このままにはおけない。

——動力源と切り離された以上、いつかは停車するだろうが、それがいつになるかはわからない。

——間に合わない、

「……………」

睨み合いに近い、無言の膠着状態が数秒続き。打破する策を見出したのは、やはり白石由竹だった。

「……………あつー！これー！」

柵にもたれかかる尾形が何気なく手を置いていた操舵輪に、飛びつく。

「尾形！ 手動の制動器だ！ こいつを回せば止まるっ」

——国産列車に空気ブレーキが導入されたのは大正時代に入ってからであり、明治時代末期の当時は制動車掌が緩急車にて手動で操作する、いわゆる手ブレーキでの運用も行われていた。

国鉄7100形蒸気機関車、その6両目であるこのしづか号は石炭を積む炭水車が接続されたテンダー機関車であり、その制動方法は前述の手ブレーキであった。

「……何でそんなこと知ってる」

「ふっ……俺は明治の脱獄王、逃げるのに役立ちそうな知識は何だって知ってるんだぜ。ピユウツ」

「……………」

「……………」

白石の格好つけた仕草を無言で流した尾形、さっそく操舵輪を回し始める。流された白石も、特にそれについて言及することはなく、同じくそこに手を伸ばした。

「……どちらにせよ、こいつをこれ以上走らせとく訳にはいかねえ……ここで止めないと」

それから、どれだけ経ったのか。

鈍い轟音がいつしか耳障りな金切り声に変わり、目に見えて速度が落ち始め。やがて



完全に、

「止まった……」

鎖を飛び越えて線路に降り立った尾形が、辺りを見回す。覚えのない景色だった。

「……どこまで前進した？」

「わ、わからん……」

港に近い。函館駅は海のすぐ側にある。列車が切り離されたのは、終着点からそう離れていない地点のようだった。

時間がない。

「ここまで離れたら走って追うのはさらに不可能だ、俺が乗り捨てた馬がその辺にいればそいつに乗って行くんだが……」

机上の空論。隣にやってきた白石と、無言で顔を見合わせる。

「……………」

無言が、流れる。

そうして、稀代の脱獄王が尾形に提示した、新たな解決策とは。

「と……とにかく、走りながら考えよ☆」

「……………チツ」

どちらにせよ、立ち止まって悠長に考えている時間など残されていない。

ひとまず、揃って線路伝いに駆け出した2人の背を追う——蹄の音。一直線にこちら目掛けて迫ってくるその響きに、流石に足を止めて振り返った彼らの瞳に映ったものは。

「——谷垣源次郎!!」

鶴見に不意打ちで狙撃され、早々に列車から蹴落とされたはずの谷垣源次郎が、馬に跨り駆け寄ってくるどころだった。

負傷したらしい脇腹を押さえながらも器用に手綱を操り、予想外の事態に立ち尽くす男2人の前で立ち止まる。しかし、彼が列車を降りざるを得なかった経緯を知る白石は苦い顔で、

「おっ前、戻ってきたのか?! ケツ撃ち抜かれてただろーが!」

「ケツ撃ち抜かれてた?」

その思い自体は有難いものの、これ以上危険な戦場に身を投じるべきではない。そんな氣遣いからの怒号だったが、谷垣は青ざめた顔で力なく首を横に振り。

「いや……大丈夫だ……フチに恩を、返さないと……」

こんなところで退場する訳にはいかない。中途半端なまま終われない。

同じく義理人情に厚い白石には、そんな彼の悲痛な氣持が痛いほど伝わってしまったのだらう。気圧されたように黙ってしまう。

「……………」

ただし、その熱意を肌で感じてなお、引き下がらない男もいた。

「谷垣二等卒……いや、マタギの谷垣」

尾形の呼びかけに、顔を上げた谷垣が微かに目を瞠った。杉元たちとも大泊港で別れて以来の彼は、尾形がどうしてか彼の姉を故意に撃った、という時点で認識が止まっていた。

そもそも、彼がこんな場所に、白石とともにいるということ自体が予想外だったとも言える。やや強張った表情で次の言葉を待つ谷垣に、気負いなく言葉が投げかけられる。

「そんなズタボロのケツじや乗馬は無理だ。傷が開いて3つに割れちまうぞ」

一歩前に踏み出した尾形が、自身の胸に手を当てる。隻眼が、鮮烈に谷垣を射抜く。彼自身の正確無比な狙撃の如く。

——だから。

「俺が行く」

その堂々とした申し出に、馬上の谷垣はすぐには首を縦に振らなかつた。まず、呆気に取られたような表情になり。

「……………」

続いて、困惑を含んだ沈黙とともに、その視線が隣の白石に流れる。しかし、今までの彼を知っている白石由竹は、神妙な顔で頷いて。

「大丈夫だ、今の尾形なら……」

この男が単なる胡散臭い昼行灯でないことについては、谷垣は既に感じ取っていたようだ。

「……ああ、」

それゆえに、信用に値すると判断されたか。顎を引いて、慎重に馬から降りる。

その手から手綱をしつかり受け取った尾形は、一度短く息を吐いて。

「……その代わり……ひとつ、頼みたいことがある。谷垣」

怪訝な顔の谷垣が、何か言うよりも早く。音もなく、後方の車両を指し示す指。

「あの車両に、タマがいる」

淡々とした呟きに、谷垣が無邪気に目を瞬く。そういえば、今は姿が見当たらないな。その程度の仕草だった。

アシ×パのことを大事に想っていた彼女だから、そちらについていった。そう思われているのかもしれない。

「……負傷したのか？」

ごく軽い調子で投げかけられる問いかけ。

尾形は、すぐには答えなかつた。

「……………」

重苦しい沈黙が流れる。

見ていられない。そう思ったのか、そこまで大人しくやり取りを見守っていた白石が、苦々しい表情で一步前に出た。

「谷垣、タマちゃんは……………」

「人目につかないうちに、」

その発言を遮るようにして、尾形が再び口を開く。そこまで言って、息を吸い。深く吐き出しながら、続ける。

「どこか、静かな場所に運んでやってくれ」

「っ、……………!!」

——それだけで、聡いマタギは彼女に何があつたのかを悟ってしまったらしかつた。

激しく見開かれた瞳。揺らぐその鏡面に、みるみる水分が満ちていく。ただ、それが溢れることは無かつた。一度強く唇を噛み締めた後、

「……………わかつ、た」

肩を震わせながらそう答えた心優しき男の肩に、優しく置かれる手。

「お前なら……………あいつも構わんだらう。信用していたはずだ」

常にそうであるように、平坦で抑揚の少ない囁きではあったが。どこか柔らかく聞こえるそれを、目元を拭った谷垣が受け止める。

「もう……良いのか？」

「ああ。じゆうぶん話せた」

奥底に確かな礎を感じる答えに、ようやくその表情が緩む。尾形も、ほんの僅か微笑み返した。念押しするように一度、肩に置かれた手に力がこもって。

「……頼んだぞ」

背を翻す。

その足で、勢いよく馬上に乗り上げた。いきなりのことに悶えて嘶く栗毛を巧みに抑え込んで、声を張り上げる。

「——乗れ！ 白石由竹！」

尻を叩くような鋭い呼びかけに、負けず劣らず機敏にその後ろへ飛び乗る白石。それを見た谷垣が躊躇いなくこちらに背を向け、車両に向かうのをしっかりと見届けて。

男2人を乗せた栗毛の馬は、再び砂利を蹴り上げ、函館駅目指して駆け出した。

「尾形ちゃんが前でいいのっ!？」

「お前の腕は信用できん」

「え？ ひど……」

冷静に衝撃を受けた様子の白石に、ため息混じりに解説を入れる。どうせ、銃を使えなくていいのかだとか、そういうことが言いたかったのだろう。

「それに……どちらにせよ馬に跨った状態での狙撃なんぞ不可能だ。転げ落ちる」

「まあ、そうだよね」

「試した経験がある」

「あるんだね」

そこからしばらく、無言が続いた。

尾形の腹に回った白石の手に、力が籠る。彼の背にぐつと額を押しつけた白石が、呻くように祈りを漏らした。

「……死ぬなよ杉元……アシ×パちゃん、」

ともすれば風に攫われてしまいそうな眩きだったが、尾形の耳には確かに届いていた。

それでいて何も答えなかった男を見て、白石はそこで自身の発言の残酷さに思い当たったらしかった。微かな唸り声が聞こえた。

「……悪い、今の尾形の前で言うようなことじゃなかったよな……」

「いや、」

しかし、尾形自身はそこに憤りだとか、負の感情を覚えていた訳ではなかった。

ただ、思い出していた。

「タママもそれを望んでいたはず」

それは、確かに彼女の願いのひとつだった。けれど、本質はそこにはない。彼女がその「願い」を見守る眼差し。宿っていた色。

「ただ……あいつは、奴らが死ぬ心配なんか最期までこれっぽっちもしていないかった。それは奴らを愛していなかったからじゃない」

断言に近い口ぶりだった。話の流れを飲み込めない白石が、怪訝そうに眉を下げる。

「……どういふこと？」

一瞬、背後を見遣った尾形は、即座に前へ向き直り。鎧を強く踏み込んだ。短く嘶いた馬が、さらに速度を上げる。

前を真っ直ぐ見つめたまま、尾形が落ち着いて言葉を紡ぐ。その揺らがぬ冷静さは、強固な確信に裏打ちされたものだった。

「俺の今までの経験から言わせれば……絶対大丈夫」だからだっただけのことだ」



——俺は不死身の杉元だ。

不滅の鬼神と讃えられた男は最後、愛した少女にそう囁いて、海中に沈んだ。

崩折れるアシシバの前で、半纏を脱ぎ捨てた白石が湯気くゆる海面に飛び込み。

時間にして、どれほどだろう。

実のところ、何分もなかったはずだ。けれど、見守る人間にしてみれば永遠にも近い数十秒の後——杉元佐一を担ぎ、軍帽を口に啜えた白石由竹が水面から顔を出してみせた。

杉元佐一、だけ。

ともに水中へなだれ込んだはずの鶴見篤四郎は、未だそこに沈んだまま。当然だ。

白石由竹にはその理由がない。

アシシバにも。

——ならば、自分には？

泡立つ水面を一人、見下ろす。拳をきつく握り締める。かつての思い出が、眼下の泡

のように浮かんでは、弾ける。

「……鶴見中尉殿……」

確かに、彼を求めていた。

彼とならば、どんな困難も乗り越えられるし、どんな夢でも叶えられる。

一度でも、ほんの一瞬でも、心からそう思えるくらいの愛をくれた男だった。

けれど、勇作もまた自らに愛を与えてくれた人間の一人だった。どうしても忘れられなかった。

弟を殺めた彼を、その事実を無かったことには出来なかった。そういう選択をした。

これが正しかったのだろうか。

彼女が望む結末だったのか。

わからない。

もっと良い選択肢があったのではないか。苦しみ続けてきた彼女に、希望ある未来を与えてやれたのではないか。

きつと一生悩み続ける。どれだけ考えても答えは出ないのだろう。

でも、それでいいのだという気もしていた。

——世界は、自分が思っていたよりずっと複雑で、難しいものなのだから。

鶴見はまだ上がってこない。

——踏み出しかけていた足を、引く。

背を向ける。かつて愛した人間と、存在し得たかもしれない選択に。

「  
」  
振り返って。

向けた視線の先——意識を取り戻したららしい杉元が、人工呼吸を施そうとしていたのか異様に顔を寄せる白石の頬に、痛烈な平手打ちをかましているところだった。

その光景にほっと、脱力する。

どこに左胸を刺し貫かれてなお、息のある人間がいるというのだろう。何とも恐ろしく、頼もしい男である。

——まさか、心臓を持っていかれても不死身とはな。

全く、何をどうしたら死ぬのやら。

きつと、彼女もそう思っていたことだろう。

白石を退けた杉元は、泣きじやくるアシ×パの頭を優しく撫でてやっている。つい、笑みが浮かんだ。

「早く医者に連れて行け、」

そちらに向けて走り出そうとした、まさにその時。……ふと、視界の端に映る異変に気づく。

「……………」

——線路の向こう。

随分と慌てた様子の谷垣源次郎が、息を切らしてこちらに駆け寄ってくるどころだつた。

## 55話 猫に九生。山猫に、

早春、東京にて。

そのとある街角で、ひとりの少女が路肩の商人と向き合っていた。

「干し柿？ あるよー！」

青果物の棒手売りが、紐から取り外した干し柿を彼女に手渡す。

慎重にそれを受け取った少女は、その暗褐色をただじつと見つめていた。喜ぶ様子も、口に含む様子もない。

甘味にはしやぐような年齢の子どもが、道端で干し柿を手に佇んでいる。確かに不可思議な光景ではあったが、彼女が道行く人々の視線を集めている所以は、それだけではなかった。

シナノキで編んだ袋を額に掛けた荷負い縄で背負い、独特な紋様で彩られた額当てと、上着とを羽織ったその立ち姿。ほとんどが和装、時折洋装が混じる程度の人混みの中で、アイヌの伝統衣装を着こなす少女の姿は目を引いた。

しかし、当の少女はそんな好奇の視線の雨には構わず、ぼつりと重苦しく。

「……タマは、甘い物が好きだって言ってたな」

その、微かな眩きに。

「うん」

——隣で、一足先に干し柿を頬張っていた女が、気負いなく頷いた。

肩の辺りで切り揃えられた艶やかな黒鳶色が、動きに合わせて揺れる。星空の瞳が少女を見下ろしている。咀嚼して、嚙下して。

「おいしーよ」

穏やかな返答に、少女は——アシ×パは、そこで初めて柔らかな笑みを見せた。

洋装に半纏を羽織った青坊主、軍帽を被った青年、アイヌの少女——そして黒眼帯の男と、明治には珍しい尼削ぎの女、と珍妙な取り合わせの5人が、小金井の街中を並んで歩く。

目的地は、この街にあるという花屋。

ここまでの地道な聞き込みが功を奏し、運良く存在を知ることが出来た店だった。情報が正しければ、“彼女”は新しい夫とともにその店を切り盛りしている。

「……いやあ、それにしても、杉元はともかく」

その道中、やや後ろを歩いていた白石由竹が弾んだ声を上げた。揃って振り返る。

視線が重なる。穏やかに目を細めた彼は、しみじみと感慨深げに、  
「タマちゃんまで無事だったとはねえ……」

——暴走列車が函館湾に沈んだ、あの後。

走ってきた谷垣源次郎は一言、「生きている」と叫び。引き上げられたばかりの杉元佐一とともに、尾形タマ——もといこの身体は、手近な病院に担ぎ込まれることとなった。目を覚ますまでに一週間かかったが、その後は驚異的な回復力で、杉元とともに退院するまでに至った。

意識を取り戻す、までは療養中の病床で聞いた話。今思い出しても現実味の薄い内容だ。

「な。杉元はともかく」

「ああ……杉元はともかく」

「うん、我ながらすごい生命力だなんて。杉元はともかく……」

「だよねえ、杉元はともかく！」

「あれ？ いや俺……」

「自他ともに認める不死身だろお前」

一度は完全に息の根が止まっていたようだった、といくら白石たちが騒いでも、担当

医師はあまり気にしていないようだった。

まあ、同時期に診ていた患者には、左胸を日本刀で貫かれてもぴんぴんしている杉元佐一がいたのだからさもありなん。慣れっこになってしまっていたのかもしれない。

歩きたびに、視界の端に揺れる毛先が映る。指先で摘んでみる。

「ねえ、髪……変じゃない?」

「似合ってるぞ」

「カワイイよ」

血が固まったり、ところどころ千切れて長さが変わったりしてしまっていた長い髪は、入院中にばっさり切ってしまった。

こんなに短くする人いないよ変だよとは言ったものの、また綺麗に伸ばすためだから、とか何とか宥めすかされて、こうなった。医師が理解のある人で、色々と理由を書き連ねて断髪届を出しておいてくれたらしい。

一番この話に乗り気だったのはアシシパだった。アイヌの成人した女性は髪を切るのが普通のようなのだ。

「……………」

息を吹き返した。

五体満足で病院を出られた。



——要素を摘んで抜き出せば、これ以上なく「めでたし、めでたし」だ。  
でも。

「……でも、」

ひとつ、気に掛かっていることがあった。

目を覚ました当初はあまり意識していなかったけれど、入院生活の暇潰しにこれまでの話なんかをしているうちに、引つかかった部分。

眩きに、皆の視線がこちらへ向く。

「何か、色々と忘れてる気がするんだよね」

一瞬の沈黙。

……から復帰して、まず初めに言葉を紡いだのは、やはりというべきか弟。百之助だった。

「……忘れてる？」

その隻眼を、落ち着いて見つめ返す。どう話を繋げたらいいものか迷っているうちに、眉を下げた白石が、

「ヤダ、記憶喪失？」

「いや、記憶はちゃんとある。あるんだけど、」

小樽でのこと、夕張でのこと、旭川でのこと。何もかも、きちんと覚えている。

白石やアシパ、杉元との会話に齟齬が発生したというようなこともない。けれど、やはり何かがおかしいのだ。これは疑念ではない。確信に近かった。

「何と言えばいいのか……本か何かを読んで得た知識をこつそり忘れてしまった、ような感覚？」

今までのことを思い出そうとすると、不自然な欠落があるのを感じる。覚えてはいるはずなのに、なぜか思い出せない。そもそも、どこで学んだ知識なのかもわからないけれど、確かに覚えていたはずのことなのだ。

その影響を強く感じるのは、前述の通り具体的な事象についてではなく、むしろ、「そのせいなのか。今までのことを思い返すと、あの時の自分、なんであんなことしたんだろう……みたいなの？」

——なんであんなことしたの？

今までのことを振り返る中、幾度となく向けられたその問いに、ひとつも答えられなかった。今さら秘匿したいことがあったからではない。

単純に、わからなかったからだ。

「何か意味はあったんだらうけど。当時の気持ちが全く思い出せないや」

これも昏睡状態のせいなのだらうか？

運が良かったのか、こんな危険な争奪戦に巻き込まれてなお、生死を彷徨った経験な

ど一度もない。大きな怪我をした覚えもないのだ。

「変な感じ。頭なんか打ってないのに、いきなり生まれ変わったみたいな」

まるで、他人の足跡を眺めているかのよう。

確かに自身で決めて行動したはずのことなのに、全く共感できない。無茶をしているから、というよりは、原理が見えてこない。

皆、一様に怪訝な顔で黙り込んでいる。

妙なことを言っている自覚はある。でも、どうしても一人で抱えきれなかったのだ。そこまで考えて、ふと。

「……………いや、そもそも……………」

全ての始まり。

小樽より、夕張より、もっと以前の選択肢。かつての私が自ら掴み取ったはずのもの。「私……………どうしてあの時、百之助を追いかけて、北海道まで行ったんだろう？」

花木生花店に辿り着いた。

杉元佐一は「行つてくる」とだけ言つて、一人でその花屋へ向かつていった。

少し疲れた、という彼女に付き添つて、路肩に腰掛けて人の流れを眺める。やはり怪我が明けたばかりで、何か月もこんな東京行脚について回るのは無茶だった。そう言つてもみたが、心配性、と笑い飛ばされてしまった。

彼女は黙つて景色を眺めている。

透き通つた無表情。いつも朗らかで、おつとりしていると医師に評された彼女はあまりしない表情で。俺には懐かしく感じる横顔でもあつた。

「……さつきの問い、」

「うん？」

呟きに、のんびりと応えてみせる。

あれから、傍から見れば不可解極まりない心情をひとしきり吐露した彼女は、何でもないと自ら会話を打ち切つてみせた。その表情に憂いは見えなかつたが、こちらはそれで片付けることはできなかつた。

「どうして北海道まで来たのか」

「ああ、」

輝きの散ったその虹彩を覗き込む。神津島の海底に眠る黒曜石の瞳。

「……心配だったから」

——お前のことが心配なんだ。

「愛していたから、だろ」

——愛しているから。

かつての彼女が与えてくれたものが、今ここに己を生かしている。

そう感じられることが生きるための力のひとつになる。そうでしょ、と脳裏で誰かが笑う。

——だから、あなたは生きて。

——愛してるんだ。

自身の手のひらを、じっと見つめる。強く、握り込む。彼女がいない世界に意味などないと思っていた。それでも、生きることを決めたのだ。

自分自身で。

「愛……か」

唐突に淡々と、抑揚の薄い呟きに、思わずそちらを見る。覚えのある響きだった。

穏やかに目を伏せた横顔。

晴天の穏和な温もりから、朔夜の静謐な冷たさを纏ったその表情に、息を呑む。

「そうか……そうだよな、最初からそれで良かったんだ、ずっと昔から……」

微かに震えた声で、そう呟いて。瞼を閉じる。それから、ゆっくりと顔を上げた。

硝子細工のような笑みの中、底の無い漆黒が、穏やかにこちらを見つめている。全てを飲み込む風いだ暗闇。恐怖は感じなかった。

伸びてきた手のひらが、柔らかく頬を包み込む。冷たい指だった。

顔が、近づくと、

「……ありがとう、尾形。何もかも」

額に触れて、すぐに離れていった。ほんの一瞬でも、柔い感触を覚えていた。

「お前と……今までの俺と、これからの私に。末永く、祝福のあらんことを」

優しい微笑が、祈りを告げて。

——はっと、我に返る。

気づくと、一人で路肩に腰掛けていた。隣には誰もいない。ただ、そそっかしい蔓日々草の花が一輪、植え込みの隅で木枯らしに揺れていた。

顔を上げた先、少し離れた場所に立っていた彼女が、こちらを振り返ったところだった。

「……百之助？」

不思議そうに呼びかけられる。いつの間に、とは思わなかった。無言で立ち上がった。

た。一歩一歩、踏み締めるようにしてそちらに向かう。今、己は自らの意思でここに立っている。

「杉元が戻ってきたみたいだよ」

手招かれるがまま隣に立つても、彼女は黙って佇んだままだった。

どこか思い詰めたような、微かに強張ったその横顔。アシ□パや、白石には見せることのない顔だった。どうしたと水を向けるより早く、

「……何だか不安なんだ」

いっそ幼気なその眩きは、混じり気のない彼女の本心だったのだろう。

「不安？」

「うん」

細い指先が、自身の胸元に添えられる。彼女はじつとどこかを見つめている。ここではないどこかを。

「これからどうしたらいいかわからない」

何気ないふうで紡がれたその眩きに、一瞬息を呑む。悟られはしなかつただろうか。

彼女はまだ前を見据えている。

「今までずっと、何もかもわかつていたような気もする」

そこで、おもむろに張り詰めていた空気が霧散して。無邪気に首を傾げてみせた。

「私、予知能力でもあったのかな？」

「そうかもしれない」

「ええ？」

素つ頓狂な声。つい浮かんだ笑いを堪えながら、手を伸ばす。彼女の空いた左手を取る。

温かい指に、指を重ねる。

「それくらいおかしなヤツだったよ」

微笑みかける。

彼女の中の路線図。その終着点は、正しくあの函館駅だった。彼女はそこに辿り着いた。

——それでも、しづか号のように海へと沈むことはなかった。

全てが終わった今、また新しい地図の上を歩き出した。まっさらな、人生という白紙の上を。路線図は、彼女自身の足が作るのだ。

「でも、愛してくれたから」

愛し、愛されて。

今ここで息をしている。



故郷に帰ろう。

干し柿を食べた杉元佐一は、アシ~~ク~~パにはつきりとそう告げた。

かつての好物を数年ぶりに口にしたら魂は、既に自身が在るべき場所を見つけていた。

その結末を見届けた白石由竹は、ひっそりと姿を消した。白石は確かに彼らのことを愛していたけれど、彼の居場所はここではなかった。

別れを惜しみつつも、後を追おうとする者はいなかった。これでいい。皆、口に出さずともそう思っていた。

4人で浅草の街中を歩く。

自然な無言の中、口を開いたのは尾形百之助だった。

「しかし……エビフライ、ねえ」

「あ？」

揶揄を含んだ眩きに、数歩先をいく杉元が目を尖らせて振り返る。

——帝国ホテルで食えるエビフライってのが美味いんだよな。

尾形は、先ほど彼がこぼした独り言を聞き咎めていたのだ。さっそく喧嘩腰の杉元に、ふんと鼻を鳴らして。

「いや？ お前みたいなのが、まさか帝国ホテルなんてハイカラな場所に行った経験があるとは思わなかったもんでな……」

「喧嘩なら買うぜ、コウモリ野郎」

「やめなさい」

大都会の真ん中で一触即発の雰囲気——だったところを、タマが呆れた顔で仲裁する。しかし揶揄う意図は無いにせよ、彼女も気にかかっていたのか、

「でも……杉元って本当は、良いところのお坊ちゃんだったの？」

穏やかに投げかけられた問い。杉元も目くじらを立てることはなかったが、

「……うーん……」

代わりに、唸って。

「いや、もう時効か……実はね、」

決心したように話し始めた。

「何年前か、あるひとの替え玉で、帝国ホテルまでお見合いに行ったんだ。むしろ、故郷の神奈川から流れ着いた当時の俺はほとんど一文無しだね。飯を食わせてもらった恩

人に雇われて、そういうことになったんだよ」

エビフライはそれで食べたんだ。

奇天烈とも呼べるそんな経歴に、女2人は興味深そうに目を瞬いていたが。……再び、それに水を差す男が1人。

「……ちよつと待て、杉元……」

しかし、今度は自信に溢れた揶揄いの態度ではなく。深刻そうに眉根を寄せた表情で、尾形が杉元に向けて手を翳す。

「何、」

「まさか、その替え玉っていうのは、花沢勇作殿のことじゃねえよな？」

その、確信めいているとも、否定を願っているとも読み取れる呟きに。杉元は軍帽の下の瞳をぎよつと睜り、

「エッなんで知つ、……………」

そこまで言つて、本能的に危機を察知したのか。とつさに口を塞いだものの、時既に遅し。

「……………」

「……………」

沈黙が、流れて。

「スギモトサイチイ〜〜〜？」

「いやだから時効だつて!! ねえ!？」

不自然な笑みを浮かべた尾形に迫られる杉元。流石に開き直るには分が悪いと感じたのか、情けなく声を上げながら仰け反つてみせる。

そのうち杉元を追い詰めるのに飽きたのか、今更と思つたか。尾形は案外あつさりと身を引いて、きつちり撫でつけた黒髪をがりがり掻き乱した。

「はあ……まさか、あの汚い台詞を叫びながら局部を振り回す変質者がてめえだつたとはな……二重にガツカリだぜ」

「え、もしかしてあの時乱入してきた兵士つてお前……」

「タマのふざけた予想が的中したのかと面食らつたもんだが、嫌な種明かしだつたな」  
「え? 私そんなこと言つたっけ?」

そもそも、ここで花沢勇作の名を聞いても何の感慨も、イメージも湧かなかつた。

当然だ。彼女にとっては何の面識もない、赤の他人なのだから。

「まあ、あれだね。合縁奇縁だね」

「いい感じに纏めようとしてる?」

ただ、尾形の異母弟の身代わりとして、まだ陸軍に入る以前の杉元佐一が抜擢され、計らずもそこで既に犬猿の彼らが顔を合わせていた——という事実そのものは、想像する

とそれなりに愉快だった。

そこで、大人しく聞いていたアシ×パがぼつりと。

「……ユウサクと杉元は似てるのか？」

その問いに、かの青年将校の眉目秀麗と称された顔立ちを思い出したのか。鼻を擦りながら得意げに、

「まあ……俺は菊田さんに品のある顔、」

「これっぽっちも似てねえ、こんな野人」

「あ？ 誰が野人だコラ」

食い気味に叩きつけられた尾形の罵りに、誇らしげな笑みを瞬時に打ち消してその胸ぐらを掴む。一触即発どころか開戦の号砲が鳴らされたような状況だったが、呆れを通り越して怒りを滲ませたタマの鶴の一声により、一時休戦となった。

顔も見たくない。

その慣用句通り、お互い背を向ける形でひとまず落ち着いた彼らだったが、やがて、それとなく軍帽を直しながら、杉元が尾形に言葉を投げかけた。

「勇作殿は……結局、どうなった」

感情を押し込めた、不自然に平坦な声。

尾形は、すぐには答えなかった。

ワンテンポ遅れて、

「……旅順で死んだ」

既にその事実を知っていた2人は、黙って悲しげに目を伏せたが、尾形は、無表情で前を見据えていた。

「俺は弟に何もしてやれなかった」

続いて、淡々と放たれた懺悔に。

「ああ」

その呪縛に縛られ続けてきた男が、同じ顔と瞳で、重々しく顎を引く。残されたもの。叶わなかった願い。

幾つもある。数えていたらきりが無い。

「俺なんかより、寅次のほうがよっぽど生き延びるべきだったって思ってた。そつちのほうは何もかも上手く行ったんじゃないか、って」

長い旅だった。たくさんの出会いと、別れがあった。命と、願いと、愛があった。

拳を握り締める。

顔を、上げる。

「……でも、進まなくちゃいけないんだよな」

——生きていかねば。

早春の東京を、春一番が吹き抜けていく。  
芽吹きは、もうすぐそこだった。

雨が、降っている。

街角にカラフルな傘の群れが咲く中、人の流れに逆らうようにして走る人影があった。

20代半ば程に見える、若い男だった。

土曜日の夕暮れ、ほとんどが私服の人混みの中で、傘も差さずに走るスーツ姿の男は、悪い意味で人目を引いた。その胸元で、ネームホルダーが虚しく揺れている。1月下旬の冷たい雨が、彼の鞆に、小脇に抱えた上着に、容赦なく打ち付けられる。

顔までぐつしより濡らした彼は、頻りに腕時計に目を落としている。その足は、真つ直ぐに眼前へ聳え立つ駅ビルへと向かっていた。

目と鼻の先までやって来た。

後は構内に入るだけ。

そこで。

足が、おもむろに止まった。

何の前触れもなく道の中央で静止した男に、周囲の人間は怪訝な、あるいは迷惑そうな表情でそれを避けていく。しかし、そんなことは男にはもはや瑣末事だった。

彼の瞳はもう、腕時計の針も、すぐそこにある建物も捉えてはいない。

その視線は、ファッションビルの上階——に備え付けられた街頭ビジョン。そこから



流れる映像に、釘付けられていた。

夕方の、ありふれたニュース番組。

そこで取り上げられていたのは——ロシアの著名な画家、その死後に自宅の屋根裏から発見され、オークションにかけられていた一枚の絵画。

その落札者がついに決まった、という速報であつた。

『第七システムズの花沢勇作社長が、1億5000万円で落札——』

液晶一面に、大きく映し出される油絵。

キャンバスの中央、瞼を閉じた二頭のオオヤマネコが寄り添っている。

やや小柄な一頭を、大柄なもう一頭が、守るように、慈しむように背後から覆いかぶさる構図だつた。

その、タイトルは。

——山猫たち。

1920作。

作者名は——ヴァシリ・パヴリチエンコ。

男は、しばらく呆気にとられた様子でそのニュースを見つめていたが。やがて、その表情が瓦解する。

落ち着いた無表情。

はあ。ひび割れた唇から、白い吐息が細くたなびいて、すぐに消えた。

「……ひとり増えたら値段が半分になった」

雨音に掻き消されそうな、平坦な囁き。

後ろに撫でつけられた髪が崩れて、ひっきりなしに雫を滴らせている。

「凡庸な結末だったからか」

所詮はそんなもの。

「悲劇にこそ人は心動かされ、金を払う」

刮り抜かれたような、洞穴にも似た瞳が見つめる液晶の画面。既にトピックは移り変わり、今はアイヌ料理を扱う飲食店チェーンが、東京に出店を開始した、という旨のニュースが流れている。

けれど、男はそこから動かなかった。

冬の雨が、置物のように佇む男を芯まで濡らし、凍り付かせていく。

「やはり俺では駄目だった」

落胆を伴って吐き出されたその、呟きに。

「そうでしょうか」

——雨音が、おもむろにくぐもって。その表情に、丸い影が落ちる。

差し出された傘が、雨を遮っていた。

男は、振り返らなかつた。

背後でその柄を握る人影。いつの間にか、そこに立っていた。彼はモッズコート  
のフードを目深に被つたまま、淡々と続ける。

「死に様についた金額」ときで、人間の……人生の価値は計れんということでは？」  
ぐつしより濡れたスーツの肩が、小さく跳ねた。

「構わんです。本来ならば、3億の価値がついた人生だつたとしても……残りの1  
億5千万円の分は、もう貰つておりましたから」

顔を上げる。フードの下から覗く漆黒の瞳が、真つ直ぐに男を見据えている。

「だから……良いのですよ」

男が、ゆつくりと振り返つた。

黒鷲色の髪から滴つた雫が、下げたままのネームホルダー、そこに収まつた『佐藤  
理玖』の4文字をビニール越しになぞつていく。

沈黙があつた。

それから、

「でも」

紡いだ声は、震えていた。

透き通つた無表情。血の気の失せた頬に、温かい雫が筋を作っていく。

「お前の知らないお前も、3億の価値がある死に様までを精一杯生き抜いたはずなんだ。どんなに悲劇的な結末でも、あの選択は、人生は、お前だけのものだった……」

ようやく、気づいたんだ。

モッズスコートの男は、その濡れた独白に無言で耳を傾けていたが。

やがて、一歩足を踏み出す。

自身が掲げた蝙蝠傘の下、雨から逃れた男が、濡れたフードをゆっくり取り去った。ツープロツクのオールバックにきちんと整えられた自身の黒髪を、一度撫でつけて。

傷のない頬を、柔らかく緩めてみせる。

さりげなく取り出されたハンドタオルが、その目元を丁寧になぞった。

1月22日、とある街角にて。

——雨脚は、いつの間にか弱まり出していた。

## 56話 よすが（あるいはエビフライ、）

北海道、小樽市周辺。

その片隅にひっそり存在するアイヌコタンに、今年も雪解けが訪れた。

短い緑と土の季節に湧き立つ住民は、ほとんどが伝統的な民族衣装に身を包む中。銃を背負った、目立つ和装の女がひとり。

「んー……良い天気」

身体全体で大きく伸びをして、息を吐く。後ろでひとつに結んだ三つ編みが、動きに合わせて尾のように揺れた。

「山菜採り日和だね」

呟いて、すぐに唇を尖らせた。毛先を結ぶ白いリボンを指先で弄りながら、  
「狩りだと乗り気なのに、これには付き合ってくれないんだものなあ」

名前を出さずとも、彼女——尾形タマの脳裏には、つれない弟の横顔がはつきり浮かんでいた。

あの函館駅行きの列車の件以来、1年ほどは周囲にも過保護と言われるくらいあちこ

ちついて回って来ていたのに。最近は、めつきり放任主義である。余計な心配を掛けない、という点では安心できるかもしれない。

そこで、

「……………」

チセが立ち並ぶ中、同じく見慣れない洋装に身を包んだ人影が佇んでいるのを見る。かなりの長身だった。烏打帽を目深に被ってはいるが、若い男のように見えた。

何か困り事だろうか。

特に気負いなく考える。日本語を母語とする和人と、スムーズに会話ができるほどの日本語話者であるアイヌは、それほど多くない。

「あの……………何か御用でしょうか？」

「……………あ、」

背後から呼びかけると、弾かれたように向き直った。鏝の下で強張った表情が、僅かに緩む。どうやら、男は封筒か何かを手にとっているようだった。

「申し訳ありません、手紙を……………いつもの配達員の方が足を挫かれたとかで、代わりに」

「ああ、そうでしたか……………」

文字の読み書きという文化の存在しないアイヌではあるが、このコタンでは文書の送受という仕組みそのものは存在している。和人の生活圏で労働した経験から、後天的に

識字能力を会得した者もない訳ではない。

麓の郵便局から若い配達員が届けてくれるのがいつものことだったが、その彼が何かで怪我をしてしまったため、代役でこの鳥打帽がやってきた、ということらしい。

「宜しければ、私がお預かりしますよ。これはどちら様に？」

「スギモトサイチという方宛のようです」

淡々と紡がれた顔馴染みの名前に、即座に送り主の名前と、その用件が思い浮かぶ。今回に始まったことではなかったからだ。

「……また谷垣源次郎かな……」

「え？」

「あ、いえ……幸い、顔見知りですので。きちんと渡しておきますね」

どうせまた、彼の妻であるインカ<sup>カ</sup>マツが出産したという報せなのだろうな。目出度いことには違いないが、これから会える予定もない夫婦の家庭事情など逐一知っても反応に困る——という内心を笑みで押し隠し、封筒を袂に仕舞い込む。

どういう経緯でお鉢が回ってきたのかは知らないが、それでこの鳥打帽の仕事は終わる。

——と、思いきや、

「……あの、つかぬことをお伺いしますが、」

「はい？」

「こちらに、オガタという男性が住んでいらつしやるとお聞きしたのですけれども……」  
オガタ——尾形百之助。

「——、」  
とつさに、その罅の下の瞳を窺うように見上げていた。

まさか、こんな場面で身内の名前を聞くことになるとは思わなかった。お世辞にも善行を積んできたとは言えない弟だ。杉元はともかく、外部の人間がここに尾形が住んでいることを知っているその経緯がわからない。

不安と疑念が奥底から微かに噴き上がってくるのを感じながら、

「……尾形百之助は、私の家族ですが」

「つ、……！」

低く、控えめに告げられたその答えに。

なぜか、男が小さく息を呑んだ気配がした。

「……では、あなたが……」

何か思うところがあつたらしいが、生憎こちらには何ひとつピンと来る部分はない。危害を加えてくるような気配はないが、どうだろうか。慎重に言葉を続ける。

「……えつと……うちの百之助に何か御用で？ 呼んでまいりましょうか、」



「ええ、お手数おかけします」

品良く頭を下げる男。染みついた育ちの良さが窺える所作に、なおさら何とも言えない気持ちになりつつ背を向けたところで。

「あ……お名前、お伺いしても？」

名前がわからなければ紹介のしようがない。そんな当たり前の気づきに基づいた呼びかけだったものの、

「ああ、……」挨拶が遅れましたが、私——花沢勇作、と申します」

深く被った鳥打帽の鍔を持ち上げて、男が微笑んだ。露わになったその顔は、稀に見る端麗さではあったが。

彼女の意識はそんな見かけのことではなく、聴覚にほとんどが傾いていた。

花沢勇作、

「……………え？」

——どんがらがっしやん。

背後で鈍い音がした。

反射的に振り返った先。おそらく一杯に抱えていたのであろう何かの道具を盛大に地面へぶち撒けた杉元佐一が、中途半端な姿勢でこちらを見つめていた。呆気に取られたその表情。

時が止まったのかと錯覚したくなるような静寂の、後。

「おつ、おが、オガターツ!! オガターツ!!」

弾かれたように飛び上がり。こちらに背を向けたかと思えば、どたどたと、足音荒く一目散に駆けていく。

叫んだ名前からして、一足先に尾形を呼びに行ってしまったらしい。先を越された、と場違いな感想を抱く横顔に投げかけられる、

「お初にお目にかかります。……姉様」

さりげなく両手を取られて、我に返った。革手袋越しにもわかる骨張った手のひら。

「あね、……」

いや、そうではない。

指先に力を含めると、左手にやんわりと握り返された。これは幻覚などではない、

「……生きてる……」

「はい、生きております」

にこやかに肯定されて、むしろこちらが面食らってしまった。

「あの……すみません、百之助から……その、つきり、あなたは既に亡くなられたものと……」

「ええ。……大きな声では言えませんが、今も対外的にはそういうことになっているは

「ずです」

「え……？」

声を潜めてそう囁いた男——花沢勇作に、聞き返すより早く。背後で、足音が止まった。

再び振り返った先、まるで盗人を強引に連行するかのような姿勢で、両脇をアシ×パと杉元に固められた尾形と目が合った。神経質に整えられた髪にも、着物にも微かに乱れが見える。たちの悪い冗談とあしらったところを無理矢理連れてこられて、その道中で暴れたのだろう。

「勇作、……………」

ぐったり脱力した尾形は、呻くようにそれだけ呟いたかと思えば。額に手のひらを押しつけ、

「……………アシ×パ、ストウで俺を殴れ。また妙な幻覚が見えてる」

「尾形合点承知之助！」

「それやめろって言っただろうが」

普段の傲慢不遜な態度はどこへやら、まだ混乱しているのか、妙にしおらしい様子の彼に歩み寄る人影。

「兄様」

同じように優しく手を取り、呼びかける。

「幻覚でも、他人の空似でもありません。ご無沙汰しております」

生気を抜かれた顔でぼうっとその微笑みを眺めていた尾形だったが、やがてぼつりと、

「……生きてる……」

「さすがご姉弟、同じ反応をなさる」

「それ関係ある？」

硬直状態から復帰して。

すぐさま、聞きたいことしかないと言を上げた尾形の提案を、勇作は二つ返事で飲み込んだ。

現在、尾形姉弟が借りているチセ。その囲炉裏を挟んで2人、向かい合う。

1904年の真夏に火蓋が切られた旅順攻囲戦から、既に5年以上の月日が経過して

いた。

「姉様」

初めて目にするであろう異文化に、気圧された様子も、興味が抑えきれない様子もなく。促されるがまま莫塵に膝を折った勇作は、まず初めにそう呟いた。

「夢見るような甘ったるい響きだ——と感じていたその呟きの色だけは、年月を経ても変わっていないような気もした。」

「初めてお会いしましたが……とても、その……お美しい方ですね、」

「はあ」

「目元のあたりがよく似ていらつしやる」

「血は繋がっておりますが」

——似ている。

“かつて”のほうが、もっと。思わず口に出しかけて、冒涇だと飲み込んだ。

“彼女”はこの結末を知っていたのだろうか。今となつては確かめる術もない。

代わりに、本題へと踏み込む。

「……生きて……いたのですね」

帽子を取った下、品良く整えられた短い黒髪に、言い知れぬ眩しさのようなものを覚える。

死んだはずの弟が生きていた。

何故だか、素直に受け入れられなかった。

そうするには少し、彼の死を悲しみ過ぎていたのかもしれない。5年の歳月は、あまりに長過ぎた。

「私は、鶴見中尉があなたの息の根を止めたと聞いていました」

「中尉殿が……？」

勇作は一瞬驚いていたようだったが、すぐに風いだ無表情に戻って。

「あの晩、私を襲撃してきたのは宇佐美上等兵だけでした。あれは鶴見中尉殿の差金だったのですね」

いつかの、肌を刺すような煌めく澁刺さは消え。年相応以上の静謐さを纏った花沢勇作が、平坦に言葉を紡いでいく。

冬の明け方に踏む地面のように、柔らかさを失い、固く凍りついたその表情。『彼女は』とは対極に位置すると思っていたはずの彼は、いつの間にかそれと近しい存在になっていた。少なくとも尾形の目にはそう見えた。

「それは、」

「私は宇佐美上等兵を辛くも退け、そのまま兵站から逃げ出したのです。脱兎の如く」

北海道まで渡ってこられたのは、逃げた先の旅順口区で偶然出会い、面倒を見てくだ

さつた方々の伝手でした。本当は色々調べたいこともあったのですが、今の私は居候かつ、不具の身でしたから。

言いながら、手袋に包まれた右手をなぞる。不自然に動きの少ないその指。傍目には欠けの無いように見えるが、実際のところは。

「ここに辿り着いたのは……本当に偶然でした。用があつて立ち寄つた郵便局で、かつて陸軍兵だったという、杉元佐一殿宛の手紙を届ける人間がいないと聞いて……何か、ほんの少しでも手がかりがあれば、と」

そこまで言つて、尾形の疑念が未だそこには無いことに気づいたのか。

「到底、生き遂せられはしないと申したのでしよう。必ず死ぬものだ……」

「……………」

当たり前とも言えるその推察を聞いてなお、尾形の胸には不可解さが残つた。『死神』がそんな雑に始末をつけるだろうか。それに鶴見は、宇佐美には自分が仕留めた、と告げていたはずだ。

そんな尾形の戸惑いは知る由もなく、或いは興味もないのか。短く息を吐いた勇作は、

「帝国軍人としての花沢勇作は、あの旅順攻囲戦で死にました」

そう口にした。

縁もゆかりもない人間の訃報を告げるような、いつそ他人事じみた口ぶりだった。

「今でも203高地の夢を見ます」

いつだって昨日のことに思い出せる。どきりとした。花沢勇作にとつて、1904年の203高地は未だ「昨日」だった。

「そこで私はあの時と同じ聯隊旗手で、銃弾飛び交う戦地を駆けております。しかし、夢の中でも私が山頂に国旗を打ち立てることは叶わないのです。この夢はいつも——背後から、私が銃で撃ち抜かれて終わります」

何度も何度も、嫌になるほど繰り返し見たのだろう。内容を述べる勇作の口調には、不気味なほど迷いがなく、気持ちが無かった。

一瞬、気圧されていた尾形だったが。——冴えた彼の頭脳は、こんな時でも見逃せない矛盾点を炙り出していた。

「……ちよつと待て、背後から?」

「はい」

「それはおかしい、正面ならともかく、敵兵が後方から狙撃してくるはずもない」

やや語気を強めて反駁する尾形。けれど、目を伏せた勇作は平静を崩さぬままに淡々と、

「では、兄様だったのでしよう」



もはや、落ち着いている——と評することすら不自然な、どこまでも自然な眩きだった。

息を呑む。汗がこめかみを伝った。

勇作は未だ、膝上で緩く結ばれた自身の両拳を見つめている。瞬きすら無く。

「……………何故、？」

「そう思っただけです」

ようやく絞り出した疑問にも、素っ気ない、とさえ呼べる口ぶりで簡単に応えてみせる。勇作がついと顎を上げた。何も無い空間を、晴天の瞳が見つめている。

「兄様は、父上に愛されたかったですね」

そして、そのためには私が邪魔だった。

恨み節も、憐れみさえ読み取れない、漂白された語り口。何もかもをとつくにしゃぶり尽くされた残り滓のような眩きだった。

「あなたの目から、私と父上の関係がどう見えていたかまではわかりませんが……私は、確かに父から愛されていました」

会話のたびに父の話を持ち出す異母兄は、彼の目にはどう映っていたのだろう。そんなことを今更考えた。詮無いことだった。

そこでふと、我に返る。

勇作の瞳がこちらを見つめていた。

「ただ、それは武人として——軍神の子として、ですが」

軍神の子。見出された子。

目の前に座る弟が、かつて愛した死神と一瞬重なり。すぐに消えた。

「武人の愛は、人の子のそれとは違います。愛する者から矢面に立たす。まず死なす。

そうでなければ、己を信じて命を擲つ部下たちに示しがつかないからです」

「しかし、そんなことは兄様も既にお分かりでしょう。私が死に……その後、兄様が代わ

りに聯隊旗手に選ばれたとしたら、父からの愛であると喜ばれたはずだ。……ですが、

私の考えていたこととは少し違います」

「……兄様はただ、人の子として愛されたかったのでは？　そして、その望みは既に姉様

によって達成されていた。兄様はただの尾形百之助として愛されていた。だから、あな

たは203高地で私を撃たなかった。そういうことなのではないでしょうか」

黙り込んだ尾形の前で、勇作は澱みなく言葉を繋げていく。頭の中に文章が出来上

がっているかのようにだった。

やがて。長い、語りが終わり。

尾形は、奇妙な気持ちで目の前の男を見つめていた。

「……………」

何も言う気にならなかった。その必要さえなかった。不思議と、満たされた気持ちでいた。

「何かに追い立てられるように生きてきた二十余年でありました。軍を飛び出してから、時間だけはありましたから。初めてたくさん考えました。父上のこと、母上のこと、同胞のこと。そしてあなたのこと……姉様のこと」

——かつての花沢ヒロは、帝国軍人として正しくないと知りながら、見合いの場を設けて子を戦場から遠ざけようとした。

「母もまた、私を愛していました。聯隊旗手の花沢少尉ではなく、ただの勇作として」  
名譽の死が何だと言うのだ。生き恥が何だと言うのだ。死んでしまつたら、なんにも残らないじゃないか、

「名譽も武勲も必要ない、それでも生きていてほしい……そう願うのが人の子の愛です」  
だって、何よりも大切で、欲しかったものは。

——生きておればよいのです。  
——だから、あなたは生きて。

「——」  
かつて投げかけたはずの言葉であり、受け取ったはずの言葉だった。  
微かに目を瞠る尾形の前で、力なく項垂れた勇作は絞り出すように、

「……死ぬべきだと考えていました。宇佐美上等兵に襲われた時も、受け入れるつもりだった。その方が、父上が望む「名誉」に少しでも近づけると思っただからです。事実、父上はそれで自ら命を絶たれたのでしょうか？」

「いえ、」

「……或いは奪われた。私と同じく」

「……………」

塞ぎ込んでいるように見えて、勇作はどこまでも冷静だった。兄の心を想って涙した青き若人はもういない。

敬愛した父が死んだ。殺された。泣いた夜もあつたのかもしれない。けれど、それは彼の中では既に過ぎ去つたことで。取り返しのつかないことだった。

「しかし、いざその時になつて——浮かんではあなたの顔だった。最後まで振り払えなかつた。正しくないことは理解していました。でも、それでも……どうしようもなく、嬉しかったのです」

——気づいた時には、宇佐美上等兵を押し退けて、夜闇に駆け出しておりました。呟いて。再び顔を上げた勇作の瞳には、覚えのある輝きが宿っていた。

指の欠けた右手が心臓の辺りに添えられる。それでも彼は堂々と、胸を張つて。

「兄様の愛が、私を軍神の子ではなく、人として生かした」

はつきりと、そう告げた。

それから、ほうと息を吐き出す。胸のつかえが取れた。そんな安堵の滲む吐息だった。

一転、穏やかな表情になった勇作が目を細める。

「私はもう、軍人ではありませんから」

穏やかな温もりの感じられる微笑み。全てを知り、悲しみ、嘆いて、それでも前を向いて生きていく人間の目だった。

「生きちよりやよか。……そういうことなのです」

二の句が継げない尾形の前で、立ち上がる。今日はようやく、ゆつくり眠れそうです。そう独り言ちてから、肩越しにこちらを振り返る。

「また来ます。鴨鍋の季節とは言わず、近いうちに」

——その時はきちんとお手紙差し上げますね、兄様。

ようやく“昨日”を遠ざけた晴れやかな笑みを浮かべ、異母弟はそう言って微笑んだ。

「あ！ 出てきた！」

——あれから、どれだけ経つたのだろう。

つい先ほどまで駄弁っていたはずの杉元が唐突に上げた声に、タマは視線だけをそちらに向けた。確かに、烏打帽を被り直した花沢勇作が、チセから顔を出したところだった。

腐つても軍人というべきか、お喋りに興じていても、それくらいの注意を払うことは朝飯前らしい。そのおかげで、知らぬ間に話を終えた彼が立ち去っているという事態は免れた。

けれど。

「話さなくていいのお？」

「うん……」

ぼんやりと頷く。

——ここまでの雑談の中で、杉元は「網走で花沢勇作の安否を尋ねられたことがある」

とこぼした。言うまでもなく、何も思い出せなかった。その時の感情さえ。

それ以前にも。尾形からついてこないのかと暗に誘われたけれど、やんわり断つておいた。

知りたいことなど何もなかった。

知りたいと思えるほど、花沢勇作のことを知らなかった。

「……勇作殿、俺があの時いきなりビンタして乳首つねってきた野郎だつてことに気づいてないといいけどな……」

「え？ ビンタ？」

杉元の不穏な呟きに気を取られかけたのも束の間、

「あれ、こつちに来る……」

視線に気づいたのか。方向転換して、笑顔でこちらに歩み寄ってきた。

目の前で立ち止まる。逆光を背負ったその晴れやかな微笑を、朦朧と仰ぎ見る。

「……………」

どこかで見たことがあるような、ないような。そう感じることさえ、疑心暗鬼が生み出した錯覚なのかもしれない。

先に声を上げたのは、勇作のほうだった。

「姉様。ひとまず、本日はこれで……」

「……あの、」

それを遮って、口を開く。

「あの、私。一度、生死の境を彷徨つてから、何か色々、大切なことを忘れてしまったように……」

胸の前で組んだ拳に目を落とし。顔を上げる。

「あなたのことも、もしかしたら、……」

最後まで、言葉に出せなかった。

——視界が、一瞬でぼやけた。

「あ、……？」

何か温かいものが頬を伝う。一度それに気づいてしまうと、もう止まらなかつた。絶え間なく溢れる感情で五感の全てがぼやける中、彼の氣遣うような声が聞こえる。

ああ。そうだ。

花沢少尉——勇作、

「姉様、」

「……あなたが生きていて、良かった。本当に、良かった……」

何も知らないはずの彼に、どうしてそこまで思ったのか。そんなことはもうどうでも良かった。胸に灯った温かい輝きだけが、今の全てだった。



小さく息を呑んだ気配がして。

「……ありがとうございます。勇作も、こうして生きて姉様にお会いできたこと……とても嬉しく思っておりますよ」

手拭いが、優しく目元にあてがわれた。柔らかい布に雫を拭われる。

——泣いている。

今まで全く記憶に無かったことだけれど、不思議とすんなり受け止められた。

むしろ、そうすることができて良かった。何となくそう思えた。それだけだった。

「また、近いうちに。必ず」

こちらが落ち着くまで穏やかに寄り添っていた勇作は、やがてそう告げて、静かに去っていった。後には彼の手拭いと、2人が残された。

そこまで下手に手出しをせず、黙って静かに見守っていた杉元だったが。晴れやかに軍帽の鍔を上げて一言、

「やっぱエビフライだよな！」

「何それ」

——人生の価値とは、誰からどう産まれたかではない。どう生きるかだ。

かつての青年将校を、アイヌの愛娘を見てきた男の、心からの眩きだった。

眺から最後の残滓を拭った女は、不思議そうに小首を傾げただけだった。

そこに、

「タマー！」

心身共に、あどけない少女から凛とした女性に成長しつつあるアシパが、便箋を掲げてこちらに駆けてきた。

既にタマとほとんど上背の変わらない彼女がそれを差し出しながら言うには、

「勇作が持ってきた谷垣からの手紙だが……それ以外に、インカマツからお前宛のものが入っていた」

「インカマツから?」

「ああ。私はまだ中身を見ていない。お前が自分で確認するといい」

折り畳まれた便箋の裏から、几帳面に書き込まれた細かい文字列が透けていた。絵手紙ではなく、きちんと文章が記されているらしい。

「インカマツ、日本語が書けたの?」

「さあ……あのチロンヌ?のことだから、それくらいの芸当はできても不思議ではないけど」

相変わらず彼女に対する印象が悪いらしいアシパが、あからさまにむくれた顔でそんなことを吐き捨てた。それとほぼ同時に、

「勇作殿は帰つ、……何だ、こんな道端に勢揃いで」

整えられた黒髪をがりがりと掻き乱す尾形が現れる。何も無い場所で顔を突き合わせる3人を見て、怪訝な顔をしてみせた。

「インカマツからタマさん宛に手紙が来てたんだつてよ」

「手紙？」

それを聞いて、なおさら不可思議そうに眉根を寄せてみせた。手元を覗き込んでくる。

「心当たりがあるのか」

「私は特に……」

「とりあえず読んでみたらあ？」

頷いて。

促されるまま、便箋の頭に視線を滑らせる。

手紙は、マタギの男らしい豪快かつ本人の性格が窺える丁寧な字体で、時候の挨拶を略した簡素な呼びかけから始まっていた。

【インカマツからの手紙（代筆：谷垣）】

お久しぶりです、尾形カツケマツ。

お元気でしたか。谷垣ニ□パから、列車でキムンカムイに襲われたあなたが一命を取り留めたと聞いた時はとてもほっとしましたが、その後お変わりないでしょうか。

今回の手紙、いきなりのことできぞ驚かれました。

本当は色々とお話ししたいこともあるのですけれど、おそらくカツケマツ（そして隣で一緒に読んでいるはずの尾形ニ□パ）がもつとも気になっているであろう、私がこの手紙を記してもらうに至った理由から記していきます。

私があるに伝えたいこと。それは、苦小牧で初めてあなたと出会い、そしてあなたを占った時、見えたもののことについてです。

覚えておいででしょうか。私はあなたが探している人について占い、その結果、それが「歳下の、血の繋がらない家族である男性」であることまではわかりました。

けれど、実はあの時、あなたに伝えていなかったことがあります。

本当は、その男性の顔そのものは、あの時の私にははつきりと見えていなかったのです。

ただ、そのすぐ後に尾形ニ□パがあなたの前に現れたようなので、私の占いは彼のこ

とを指していたのだと思いました。そう思うことにしていました。

しかし、その後どうしてもあのことが忘れられず。つい最近、再び占つてみたところ、今度は顔がきちんと見えました。

でも。

そこで見えた男性の顔は、私の知る尾形二匁パのそれとはかけ離れた物だったので。

髭も傷もない、とても綺麗な目をした男性の顔でした。

尾形カツケマツ。もしかして、当時のあなたには、尾形二匁パと同じくらい無事が気になる男性が居たのではないですか？

当時は顔が見えなかったこと、そして尾形二匁パと同じ血の繋がらない家族、という点が気になります。私にはそうとしか考えられません。

あなたは尾形二匁パには再会できましたが、こちらの彼とはどうなったのでしょうか。あの時の占いでは無事で、いつか会いに来ると出ていたはずですが、あなたは彼には出会えませんでしたか？

ごめんなさい、今さら私からこんなお手紙を差し上げること自体が迷惑で、要らぬお節介だということは理解しているつもりです。でも、占い師の性でしょうか、どうしても気になって仕方がないので。

お返事、  
お待ちしております。